

令和3・4年度
文化庁「生活文化調査研究事業」
(煎茶道・香道・和装・礼法・盆栽・錦鯉)
報告書

令和5（2023）年2月

株式会社 文化科学研究所

目 次

1 章 本調査研究事業について	1
1. 調査事業の目的	1
2. 調査事業の概要	1
(1) 文献調査	1
(2) 国民意識調査	1
2 章 調査結果	2
1 節 各分野の歴史と現状	2
1-1 煎茶道の歴史と現状	2
1-2 香道の歴史と現状	15
1-3 和装の歴史と現状	30
1-4 礼法の歴史と現状	48
1-5 盆栽の歴史と現状	60
1-6 錦鯉の歴史と現状	83
2 節 国民意識調査	97
2-1 調査の趣旨目的と調査手法及び調査設計について	97
2-2 調査結果	99
2-2-1 回答者の属性及び共通設問の結果	99
2-2-2 フィルタリング・パートの結果	106
2-2-3 分野設問の結果及び分析	108
(1) 煎茶道	108
(2) 香道	161
(3) 和装	214
(4) 礼法	267
(5) 盆栽	318
(6) 錦鯉	370
3 章 まとめに代えて	422
参考資料 各分野の用具・原材料等について	423
参考資料 文化創造アナリスト及び有識者会議検討経過等	432
参考資料 国民意識調査調査票	442

1 章 本調査研究事業について

1. 調査事業の目的

平成 29 年度から、生活文化及び国民娯楽（以下「生活文化等」という）に関する調査事業を実施し、各分野の実態把握等を行ってきた。これに基づき、令和 3 年度は煎茶道、香道、和装、礼法、盆栽、錦鯉の各分野について文献調査による横断的な把握を行った。

本事業では、令和 3 年度に調査を実施した 6 分野について、インターネットを活用したウェブアンケート調査による国民の意識調査を実施することで、国民の生活文化に対する興味や関心などの実情について把握し、今後の生活文化等に関する政策立案の基礎資料の作成を行った。また、令和 3 年度に実施した文献調査について、歴史的変遷等に関する内容の補強を目的として追加の調査を実施した。

2. 調査事業の概要

令和 3 年度及び令和 4 年度の調査の実施概要は下記のとおりである。

（1）文献調査

令和 3 年度調査において、煎茶道、香道、和装、礼法、盆栽、錦鯉について、各分野の歴史的変遷や無形の文化的所産等の把握を目的とした文献調査を実施した。令和 4 年度は、昨年度の調査結果の補強を行うための追加の文献調査を実施した。

（2）国民意識調査

生活文化に係る各分野に関する国民の興味や関心などの実情の把握を目的とした、ウェブアンケート調査を実施した。

調査に当たっては、2 万サンプルを対象とし、令和 2 年の国勢調査に基づく都道府県性年齢人口の割合にあわせて割付して、アンケート調査会社が保有するウェブ・パネルから回収した。

なお、上記の調査内容の検討、調査の実施及び調査結果の分析やまとめを行うにあたっては、有識者会議を開催し、設問など調査内容等について助言や進捗確認を行うと共に、会議での検討を踏まえた上で調査結果を報告書として取りまとめた。

2 章 調査結果

1 節 各分野の歴史と現状

1－1 煎茶道の歴史と現状

1－1－1 煎茶道の概要

煎茶道について

煎茶道とは

煎茶道では、煎茶会において、煎茶や玉露等の茶葉を急須によって淹れた「煎茶」を喫し、書画の掛物や文房具、花、盛物などの鑑賞を行いながら、主客の交流を図ることを目的としている。この煎茶会自体の方式をはじめ、「煎茶」を淹れる方法や、煎茶道具を扱うための手前（点前）¹や所作や作法、煎茶席の飾り方、煎茶を喫することへの考え方は流派によってそれぞれの特徴や違いがある。

煎茶会の概要、しつらい

・煎茶会の概要

煎茶道において、煎茶を喫するための場は「煎茶席」と呼ばれ、広間や書斎をはじめ、屋外などに設けられる場合がある。煎茶では、一定の形式を伴う専用の茶室はなく、一般の建物の広間を席として使用される場合、床・脇床や書院、棚等の空間を利用して飾り付けが行われる。一般的な煎茶会のおよその構成は以下のとおりとなる。

- ・前席（待合席） ※展観席・文房席・揮毫席などが設けられる場合がある
- ・本席 ※茶の種類などによる複数の席が設けられる場合がある

一般的な煎茶会の場合、煎茶席に入る前に、客が身支度などを整え席が開くまで待つための「待合」としての「前席」と、煎茶を喫するための「本席」によって構成されている場合が多い。

前席には、書画などの掛物や花が飾られている場合があり、その煎茶席がどのような趣向で開かれているのかをうかがうことができる。また、大規模な煎茶会になると書画や盛物、文房を展覧する「展観席」や、文房四宝（筆、墨、硯、紙）などを展覧する「文房席」、書や詩をしたためて楽しむ「揮毫席」が設けられる場合もある。これらの席は、前席から発展して設けられようになったもので、文房四宝をはじめ中国の古銅器や明清書画、花を生けた花瓶や盆栽、奇石（怪石とも）、楽器（七

1 「点前」の「点」について、高橋忠彦「中国における喫茶法の発展」（熊倉功夫監修『中国茶文化大全 解題』農文協、平成 13 年、p. 66）に「『点茶法』という喫茶法は、[中略]粉末の茶に直に湯をかけて飲むものであり、『点』とは湯を茶碗の一つ一つに注ぐ意である」とあることから、茶を淹れる行為そのものについては「点前」とする。したがって、炭の場合、「炭手前」となる。

絃琴や笛)、香炉などが席を彩った。

・煎茶席のしつらい

煎茶を喫する本席のしつらいは、床は一間床のような大床の場合が多く、花を飾る際には、床の間だけでなく卓^{じよく}等を用い、部屋のあちらこちらに飾られる場合もある。掛物としては、中国の詩人や日本の近世文人の詩文など文学的な内容を持つものや、文人画などの絵画が飾られることが多い。加えて、煎茶席特有の盛物や、文人趣味を反映した文房四宝を飾り付ける文房飾りがしつらえられ、煎茶会を開く席主の趣向が表現される。こうした煎茶席の流行をより高めたものに、煎茶と同時期に流行した文房清玩趣味が挙げられる。文房四宝や奇石、盆栽、花、銅器などを愛玩する、超俗的な生活スタイルが文人たちに愛好されており、煎茶席に文房具が主要な役割を担う起因はここにある。

この本席のしつらいの趣向と共に、手前に用いる棚や盆、茶碗などの道具類（参考資料を参照）の飾り付けも、席主の好みや趣向の現れであり、席主と客が煎茶席を楽しむためのしつらいとして重要なものとなる。なお、煎茶会の規模によっては、茶の種類（煎茶、玉露など）や、座礼や立礼^{りゅうれい}の違いによって複数の煎茶席が設けられている場合がある。

煎茶席を開く席主は、席を開く季節や招く客などを勘案して煎茶席の趣向を考え、趣向に適した掛物や花、盛物を席に飾り、茶碗等の道具類を選び、淹れる茶種や用いる道具等に適した手前をもって茶を淹れる。

・煎茶席での流れ

本席においては、席主（場合によっては手前者）によって煎茶や玉露等の茶が淹れられ、客に供される。煎茶や玉露等を淹れるために必要とされる手順や道具の扱い方、所作や作法等の一連の様式は、「手前（流派によっては点前）」と称されている。

席主が煎茶を淹れる場合を例として、席主が行う手前の大まかな流れを示すと²、

- ・涼炉^{りょうろ}（焜炉^{こんろ}）の炭を整え、ポーフラにて湯を沸かす。
- ・茶碗を水と茶巾で清めた後、ポーフラの湯を急須に注ぎ、次に急須の湯を茶碗に注ぎ、急須と茶碗を温めておく。
- ・茶碗を温めている間に、急須に茶葉を適量入れ、湯を注ぐ。
- ・茶が出るのを待つ間に、茶托を布巾にて清める。
- ・適宜、急須の茶を各々の茶碗に注ぎ分け、茶托に茶碗を載せて客へ一煎目を差し上げる。

席主が手前をして煎茶を淹れる際には、手前を行いながら、席の趣向や道具、菓子等について客と会話を交わしていくこともある。席主は、一煎目を客に出し終わると、二煎目を淹れるための手順を進めていく。

2 主婦の友社編『煎茶便利帳』（主婦の友社、平成12年）p.46-49を参考とした。

対して、客の方は、席主と会話しながら一煎目を飲み終わると、席主に茶托と共に茶碗を返し、供されたお菓子をいただく。席主は、返された茶碗に二煎目を淹れ、客へ供する。二煎目を淹れた急須を籠等で客にお渡しして、客自らが茶碗に注ぐ場合もあり、この場合、客は茶碗・茶托を自席に置いたままにする。

客が二煎目を飲み終え茶碗・茶托を返すと、席主は、茶碗・茶托、手前で用いた道具類を拭き清めて席が始まる前の状態に復し、あいさつをして席を退出する。

以上の流れが、席主自らが煎茶を淹れる場合のおおよその流れである。なお、本席が複数設けられている場合は、席主と客は席を移して改めて茶を楽しむことになる。この際、淹れる茶の種類や席主が用いる道具等によって、手前や細かな手順、手続きが異なる。

煎茶道における手前、稽古について

・煎茶道における手前

煎茶道における手前は、文人の間でたしなまれるようになった煎茶が広まっていく過程において、田中鶴翁^{かくおう}や小川可進^{かしん}のような後世においては煎茶の宗匠と呼ばれる人々が登場し、次第に煎茶席の様式や煎茶を美味しく淹れるための手順や、道具の扱い方、作法・所作が形成された。

今日、煎茶道を担う各流派においては、煎茶を美味しく淹れ、席主と客が交流を深めることを目的として、様々な手前や所作・作法が存在している³。これらの手前は、用いる茶の種類（煎茶、玉露、焙じ茶等）や、用いる道具の種類（棚や盆等）によって用いられる道具や茶を淹れる手順が異なっている場合が多い。

例えば、煎茶を淹れるための手前の場合、ポーフラで沸かしたお湯がそのまま用いられる。一方、玉露を淹れる手前では、「湯冷まし」や急須を使って、湯の温度を適温に下げる。用いる茶の種類によって、必要となる道具や茶を淹れる手順などが異なっている。また、道具類を置くために棚を用いる場合や、器局^{ききよく}や茶櫃^{ちやびつ}を用いる場合では、道具の配置や飾り方が異なることに加えて、作法の手順なども異なり、手前ごとに細かな手順や所作の違いが見られる。

・煎茶道の稽古

煎茶道の各流派においては、煎茶を学びたい人のために稽古場あるいは教室を開き、煎茶の淹れ方を学ぶ場を設けている。これら稽古場等では、一般的に煎茶会で客として招かれた際の一般的な作法を身に付けることをはじめとして、煎茶席で煎茶を淹れるための各種の手前、席のしつらい方やその知識・考え方等について特に教授が行われる。

流派によっては手前等の習熟の度合い等に応じて免状を発行している場合もあり、手前を習熟した者の中では、煎茶道を教授する者として稽古場や教室、カルチャーセンターでの講座を開く者もいる。こういった稽古場や教室等が、煎茶を愛好する者が煎茶道を学ぶ場と機会になっている。

3 主婦の友社編『現代煎茶道事典』（主婦の友社、昭和 56 年）では、煎茶道の流派のうち、21 流派の手前（点前）が写真入りで解説されている。

担い手について

煎茶道を担う者については、前述のとおり、煎茶の淹れ方や様々な方式を継承している煎茶道流派、そして流派横断的な全国団体がある。そして、これら流派に所属する者や個人として煎茶をたしなむ者などの煎茶道を愛好する者が煎茶道を担う者として考えられる。

・煎茶道流派

煎茶道では、いわゆる家元（又は宗家）と呼ばれる者が中心となって組織されている流派が存在し、流派ごとに煎茶の流儀を継承し、また、煎茶道の普及や振興に係る様々な取組を行っている。平成 12 年（2000）刊行の『煎茶便利帳』⁴掲載の「全国の煎茶道流派案内」では、41 流派が紹介されている。また、平成 25 年時点では 150 を超える流派が活動しているとも言われている⁵。

・流派横断的な全国団体

煎茶道流派の横断的な団体として、一般社団法人全日本煎茶道連盟がある。

当該団体は、昭和 29 年（1954）、黄檗山^{おうぼくさん}で立宗三〇〇年大法要が営まれるにあたり協賛煎茶席が開かれたのを機に、昭和 31 年 1 月に結成された。昭和 41 年 5 月、文部省（現：文部科学省）から社団法人として認可され、煎茶道の普及と発展のため、全国煎茶道大会の開催や、月刊誌『煎茶道』をはじめとする煎茶関連図書の刊行、展覧会・研修会の開催等を行っている。

・煎茶道の愛好者

煎茶道の愛好者としては、煎茶道の流派に会員として所属し、流儀の指導を受けている者が想定される。この中でも、免状等の教授資格を有し煎茶道の手前（点前）や作法を教授する者と、教授者から手前（点前）や作法の指導を受けている学習者に大別される。また、流派の流儀をある程度の段階まで修めた後、流派から離れて一個人として煎茶をたしなんでいる者も一定数、存在すると考えられる。

政府の統計調査では煎茶道の愛好者数は対象外であり、民間調査会社による調査も確認することができず、正確な人数を把握することは困難であるので、参考として、一般社団法人全日本煎茶道連盟が主催する「全国煎茶道大会」及び「東京大煎茶会」の参加人数を記載することとする。

○全国煎茶道大会

令和 4 年（2022） 参加流派：18 流派 参加人数：約 2,000 名

○東京大煎茶会

令和 4 年（2022） 参加流派：11 流派 参加人数：約 1,000 名

4 主婦の友社編『煎茶便利帳』（主婦の友社、平成 12 年）p.184-191「全国の煎茶道流派案内」ではアンケートに回答があった流派が掲載されている。

5 大槻幹郎「売茶翁以前、売茶翁以後」（『目の眼』平成 25 年 10 月号 p.31）参照

〈主要参考文献〉

- ・全日本煎茶道連盟編『煎茶道のすすめ』全日本煎茶道連盟、昭和 50 年
- ・主婦の友社編『現代煎茶道事典』主婦の友社、昭和 56 年
- ・主婦の友社編『煎茶の用語集』主婦の友社、昭和 63 年
- ・煎茶文化研究会編『煎茶の世界』主婦の友社、昭和 63 年
- ・全日本煎茶道連盟監修『煎茶 道具としつらいの知識』婦人画報社、平成 4 年
- ・主婦の友社編『煎茶便利帳』主婦の友社、平成 12 年
- ・井口海仙ほか編『新版 茶道大辞典』淡交社、平成 22 年
- ・大槻幹郎「売茶翁以前、売茶翁以後～煎茶はいかにして日本で大ブームとなったか」（『目の眼』445 号、株式会社目の眼、平成 25 年）
- ・漆原拓也「文人煎茶の盛衰」法政大学博士論文、平成 27 年
- ・「中国文房具と煎茶一清風にふかれて」展示解説冊子 泉屋博古館、平成 31 年
- ・船富富美子「湯川玄洋の七石亭煎茶会」（『茶の湯文化』第 35 号 茶の湯文化学会、令和 3 年）

1-1-2 煎茶道の歴史

喫茶法の変遷

茶の伝来

喫茶の伝来は8世紀から9世紀にかけて、最澄や空海、永忠といった遣唐僧たちによるものとされる。文献に喫茶について初めて登場するのは、弘仁6年(815)の4月22日に近江国滋賀^{からさき}韓崎(現・滋賀県大津市唐崎)へ行幸した嵯峨天皇に、梵釈寺の大僧都・永忠が「手自ら茶を煎じ奉御す」と記された『日本後紀』においてである。

当時の茶は団茶(餅茶)と呼ばれるもので、茶葉をすり潰し粉末にしたものを、団子や餅のように堅く固めたものであった。その飲み方は、団茶を火にあぶって柔らかくし、冷ましてから細かく粉にし、釜の湯の中に塩を入れ、沸き加減をみて粉末を入れ、茶碗に汲みだす飲み物であった。

抹茶：薬用から茶の湯へ

建仁寺を開創した栄西は建久2年(1191)、中国への2度目の渡航を経て抹茶を飲むという宋代の新しい喫茶法を持ち帰った。建保2年(1214)、栄西が茶の功德を説いた『喫茶養生記』を酒毒に苦しむ鎌倉幕府3代将軍の源実朝に献上したことにより、喫茶が再び注目を集める端緒となった。『喫茶養生記』は日本で書かれた茶に関する最初の本で、茶の実用的側面、価値について説き、医薬、養生の仙薬として茶を推奨するとともに、抹茶を紹介した。この抹茶の喫茶法が、後の茶の湯へとつながっていくと考えられている。

煎茶の淹れ方「淹茶法」

「淹茶法」は明時代の中国で飲まれていたお茶の淹れ方で、急須等に茶葉を入れて湯を注ぎ、味の浸出したものを飲む方法である。当時の中国では、摘んだ茶の葉を鉄の釜で炒って作る「釜炒り煎茶」が飲まれていた。中国から渡来して宇治黄檗山萬福寺の開祖となった隠元隆琦^{いんげんりゅうき}及び黄檗僧がもたらした煎茶は文人達の趣味と結びつき、後世の煎茶道が生まれる背景となった。

寛政6年(1794)、上田秋成は『清風瑣言』の「煎法」で、「蒸焙^{むしほうじ}の茶は、煮るに宜しく、炒茶は、淹煎^{だしちや}に宜し」として、「釜炒り茶」を「淹茶法」で飲むことを勧めている。「淹茶」は、湯沸かしで湯を用意しておき、茶瓶を盆の上において、茶葉を先に茶瓶に入れ、茶瓶の外から湯をそそぎ、温気を内に通した後、瓶の中に湯を入れる。享和2年(1802)、柳下亭嵐翠^{りゅうかていらんすい}は『煎茶早指南』で、秋成の説としてこの淹茶法を紹介している。天保6年(1835)、山本徳潤の『煎茶小述』では、今日と同じく、温め乾かした小瓶に茶葉を入れ、湯を注いでしばらく置くという法になっており、徐々に淹茶法が定着していく様子が見えてくる。

この頃に関されたのが淹茶法で淹れる玉露である。玉露が引札(茶の価格表)に現れて流通するようになるのは、幕末から明治の初めにかけてとされる。玉露以前は、濃茶園煎茶、薄茶園煎茶と

呼ばれる碾茶の余材の葉や茎を材とした煎茶（雁がね）が、高級煎茶とみなされていた。

文人と煎茶

売茶翁の登場

煎茶道として体制が確立していくのは、江戸時代半ば、京都に売茶翁と呼ばれる人物が登場した後のことである。売茶翁は享保 19 年（1734）、京都の東山の麓、二ノ橋のほとりに通仙亭という茶店を構え、煎茶による売茶活動を始めた⁶。

売茶翁の唐代詩人の超俗的な生き方を背景に持つ活動は、詩人、歌人、学者などの文筆活動や、画家、彫刻家、陶芸家等の芸術活動に携わる文人に影響を及ぼし、煎茶を味わいながら清談を楽しむという、文人たちの交友が次第に活発となる。売茶翁は大典顕常、亀田窮楽、彭城百川、池大雅、伊藤若冲などの文人たちと交流した。これらの多くの文人が中国における唐・宋・元・明・清の文人の境涯に憧れ、文人趣味や煎茶趣味を通して交友を深め、見識を広め、教養を高めたことにより、文人による煎茶が高揚した。

また、売茶翁が活動を始めた頃、元文 3 年（1738）、山城国宇治田原の茶匠、永谷宗七郎（宗円）によって、今日の緑茶の原型である青製煎茶が完成したと言われている。それまでの煎じ茶は、茶の古葉や茎、茶ではない喬木の葉を釜で炒るか蒸して、揉んで天火で乾かしたものであったが、宗円の製茶法は新芽を入念に選び、蒸し、焙炉で揉みながら乾燥させるものであった。水色は薄緑色で芳香良く、甘・苦・渋と味も整った画期的な煎茶で、当初、江戸で売り出したところ好評を博したという。青製煎茶を完成後数年して、宗円の元を訪れた売茶翁は、青製煎茶を賞味したと伝えられる⁷。

文人茶としての煎茶

宝暦 6 年（1756）、大枝流芳によって煎茶書『青湾茶話』が著され、同 8 年序の『茶経』（復刻）、同 14 年には『煎茶訣』（葉雋著、大典顕常補）などの刊行が続く。寛政 6 年（1794）、上田秋成が煎法、水質、茶葉、煎茶の精神を説いた『清風瑣言』を著してベストセラーになり、また、享和 2 年（1802）、『煎茶早指南』が、柳下亭嵐翠により名古屋にて発刊された。その後化政年間から明治時代に至る間、煎茶趣味全盛の時期を迎えた。

煎茶と縁のある著名な文人として岡田米山人、浦上玉堂、雲華大含、田能村竹田、小林竹洞、頼山陽、篠崎小竹、浦上春琴、岡田半江、山本梅逸、渡辺崋山などが挙げられる。また、若い頃に売茶翁と交流があり、遺品を所持していた木村兼葭堂は、大坂堀江（現・大阪市）で酒造業を営む傍ら、文人

6 「売茶翁年譜」（ノーマン・ワデル著、樋口章信訳『売茶翁の生涯』思文閣出版、平成 28 年 p. 235）に、「享保 19 年（1734）60 歳」「鴨川辺、二ノ橋に茶店『通仙亭』を営む」とある。正確には、鴨川より東、「東山の泉涌寺と東福寺の後方の山麓から西に向かって流れ出して鴨川に合流する、三つの溪流に架かる三つの石橋の中の一つである」（同書 p. 35）。

7 「売茶翁高遊書」（島津良子責任編集『京都府宇治茶に関する古文書調査①『永谷家三之丞家文書』分析調査報告書』京都府農林水産部農産課、令和 2 年「永谷三之丞家文書「古今嘉木歴覧」解説文・校注・参考文献」フィルムカット No.6532-6534）

の風雅を好んで文化サロンを形成し、文人の良きパトロンとして、化政期に活躍する木米^{もくべい}、田能村竹田にもその知識、内外の文物の恩恵を与え、煎茶黄金時代への橋渡しをした。

田能村竹田は、詩や書画を学び文人画の最高峰を極め、書画に加え、著作に3冊の煎茶書『泡茶新書三種』^{ほうちや}⁸や花論書『瓶花論』^{へいか}も残している。その交友は多彩で、先述の一級の文化人らと文人趣味を具現化させ煎茶趣味を鼓吹した。特に、文化8年（1811）に互いに30代半ばで出会った頼山陽との交流は風流才子の交わりといえ、著書『日本外史』で有名な頼山陽も、田能村竹田同様にこよなく煎茶趣味を愛した。

煎茶道の広まり

煎茶の宗匠の誕生

煎茶は僧侶や儒者などの文人のみならず広く庶民へ普及し、市井の趣味人が指南書を発行したり、茶会を開催したりするなど、煎茶の世界に耽溺するようになる。天保6年（1835）9月には大坂において田中鶴翁の主催する聞中^{もんちゆう}禅師七回忌追善茶会、京都で同年12月、山本梅逸^{ばいいつ}の参加するところの円山正阿弥^{まるやましょうあみ}茶会が開催された記録が残っている。

天明2年（1782）に生まれた田中鶴翁は、大坂で造り酒屋としての家業の傍ら趣味の世界に生きた人物として知られる。経済的にゆとりのある旦那として交友を広め、聞中禅師に師事するなど黄檗山萬福寺との縁も深く、また、売茶翁を深く尊敬し、煎茶界の興隆に尽くした。公家や武家への出入りも許され献茶、茶事などを行い、天保9年（1838）9月、公卿の一条忠香^{いちじょうただか}より「煎茶家元」の染筆を下賜されたと言われている。風流人として花月菴鶴翁^{かげつあん}と号し諸芸をたしなみ、花月菴流の流祖として煎茶の門人の養成に努めた。花月菴流からは、習軒流^{しゅうけんりゅう}や松風清社^{しょうふうせいしゃ}などが生まれ、他の流派の手前にも大きな影響を与えた。

一方、京都室町では天明6年（1786）に小川弘宣（可進）が誕生、医業を営みながら煎茶の世界に傾倒し、茶と水、湯などの関連を探究し、やがて医業を捨て剃髪して号を後楽と称し、煎茶の道に進んだと伝えられている。もろもろの茶道具を考案し、煎茶道を学ぶための創意工夫を行った。文人らとの交流、公家の近衛家、鷹司家^{たかつかさ}、一条家とのつながりなどから、次第に宗匠としての地位を確立していったとされ、小川可進を流祖とする小川流が煎茶道流派として活動している。

幕末・明治・大正時代を経て敗戦まで

幕末の文久2年（1862）4月23日、南画家の田能村直入^{ちよくにゅう}の提唱によって、大坂淀川畔で「青湾之碑」の建立を記念した大煎茶会「青湾茶会」が開催された。本席7席・副席4席が設けられ、参加者1,200名、見学者は数え切れないほどの盛況であった。同年7月16日の売茶翁の百回忌には後青湾茶会が開催され、翌年にはこれらの茶会をまとめた、『青湾茶会図録』3部冊（天・地・人）が刊行されている。

8 『石山斎茶具図譜』、『竹田莊茶説』、『竹田莊泡茶訣』の3冊から成る。

明治7年(1874)11月の大阪青湾での山中^{しゅんこう}簪堂追薦の大煎茶会、さらに翌8年11月、京都円山での鳩居堂酔香追薦煎茶会が開催されるなど煎茶の隆盛が続いた⁹。

大正時代に入り、松井楓川の追善煎茶会や角山簪翁追善煎茶会をはじめとして、全国各地で大小の煎茶会が催されたが、一方で、日清、日露の両戦争を経て軍国化が進み国民生活を圧迫、煎茶道の衰退を招くことになる。大正時代末期には、京大阪近郷の煎茶道の宗匠や数寄者たちが集まり、高遊会を結成し浄財を募って、昭和3年(1928)秋に、黄檗山萬福寺の境内に売茶翁顕彰のための売茶堂、併設の煎茶席有声軒を完成させた。有声軒では煎茶会が継続的に開かれていたほか、各地においては同好の志が集い雅友の会を発足させて記念の会などが開催されたが、その後、戦時下を迎えることとなった。

戦後の復興、流派煎茶の興隆

第二次世界大戦後には、華族制度廃止、財閥解体が行われ、数寄者による煎茶が衰退する一方、煎茶道は高度経済成長期に拡大していった。

昭和26年(1951)、京都煎茶家元会が発足した。同29年には黄檗山萬福寺の大法会に協賛し各流派による煎茶会が行われ、この煎茶会をきっかけとして、隠元・高遊外壳茶翁ゆかりの黄檗山に参集した各家元の発案で、昭和31年には全日本煎茶道連盟が結成され、昭和41年には文部省(現:文部科学省)の認可する社団法人となった。

また、同連盟には参加せずに活動を行う流派・団体もあり、全国各地で煎茶の普及に努める活動が続けている。

〈主要参考文献〉

- ・田中青坡『煎茶花月菴』主婦の友社、昭和48年
- ・主婦の友社編『続 煎茶全書』主婦の友社、昭和51年
- ・主婦の友社編『現代煎茶道事典』主婦の友社、昭和56年
- ・全日本煎茶道連盟監修『煎茶 道具としつらいの知識』婦人画報社、平成4年
- ・宮崎修多「茗讌図録の時代」(『季刊 文学』第7巻第3号 岩波書店、平成8年)
- ・煎茶文化研究会編『煎茶の世界』雄山閣、平成9年
- ・小川後楽『煎茶への招待』NHK ライブラリー、平成10年
- ・小川後楽『煎茶を学ぶ』角川書店、平成10年
- ・ノーマン・ワデル著、樋口章信訳『売茶翁の生涯』思文閣出版、平成28年
- ・中野俊昭「煎茶文化のふるさと八橋 八橋(方巖)売茶翁」(『教育と文化』116(公財)愛知教育文化振興会、平成30年)

⁹ 宮崎修多「茗讌図録の時代」(『季刊 文学』第7巻第3号 岩波書店、平成8年、p.33~45)に掲載されている「茗讌図録年表(未定稿)」によれば、明治時代に刊行された茗讌図録は59件(大正時代は12件)、刊行地は、東京・京都・大阪・名古屋・高松・近江・福岡・富山・長浜・高崎・長崎・静岡・和歌山・岡山ほか。図録刊行の機会は、追薦や長寿の祝賀・記念が多い。

1-1-3 煎茶道の国内外における文化的、社会的位置付けや評価

現代社会における煎茶道

煎茶道の国内状況

令和元年（2019）に実施した煎茶道に係る団体へのアンケート調査によれば、各団体の抱える問題として「会員の高齢化」（78.1%）、「会員数の減少」（75.0%）を挙げる団体が多く、指導者の高齢化や継承者育成も課題として挙げられている。これらの課題の解決として、流派等団体は、SNS 等を活用した情報発信のほか、幅広い世代に煎茶道を広め、体験する機会を提供するような取組を実施している¹⁰。

一方で、近年、博物館や美術館等において煎茶関連の展覧会・展示が多く行われるようになっていく。平成8年（1996）には板橋区立郷土資料館で「長崎唐人貿易と煎茶道」、同9年には大阪市立美術館「煎茶・美とそのかたち」が開催されている。入間市博物館 ALIT では、同7年に煎茶をテーマにした展示を行って以降、収集コレクションから煎茶関連の道具や書画を展示する「館蔵 煎茶道具展」がたびたび開催されているほか、静嘉堂文庫美術館でも平成10年、平成12年、平成28年に煎茶具等を取り上げた展覧会が開催されている。

令和元年（2019）、京都・泉屋博古館「中国文房具と煎茶—清風にふかれて」では、所蔵の書画、文房具、喫茶道具が席ごとにしつらえられ、実際に茶席で道具を鑑賞しているような趣の展覧会も開催された。

煎茶道流派の活動

日本国内では、家元が中心となって組織された流派団体が、流派に伝承されている流儀を次世代に継承することを主目的とし、広く煎茶道文化の振興に努める活動を行っている¹¹。

煎茶 道各流派では正月には初煎会を開始しているほか、季節ごとに早春、春季、夏季、七夕、納涼、残暑、秋季、月見、師走などをテーマとした茶会を行っている。また、流派本部や支部の周辺などにある地域の神社や寺院内の茶室で、地域のイベントとタイアップして茶会を開くケースも見られる。

このほか茶の湯文化学会、文人画研究会などの学術研究団体と協働した活動を行っているケースや、高齢者施設、生涯学習施設などで幅広く煎茶の普及活動を行っている流派、大学での部活動や同好会活動を通じ普及啓発を行う流派もある。

10 『令和元年度生活文化調査研究事業報告書』文化庁地域文化創生本部事務局、令和2年

11 『令和元年度生活文化調査研究事業報告書』文化庁地域文化創生本部事務局、令和2年

全日本煎茶道連盟の活動

煎茶道流派が会員となって組織されている一般社団法人全日本煎茶道連盟は、昭和 31 年（1956）5 月に第 1 回全国煎茶道大会開催以降、毎年 5 月に本部のある萬福寺で全国大会を開催するほか、昭和 61 年からは文化庁主催の国民文化祭において煎茶会を開催している¹²。

近年では、夏期大学など教授者養成のための研修会や煎茶文化フォーラムで講演会やパネルディスカッションを毎年実施するなど、煎茶道の普及や振興に係る取組を煎茶道流派の協力により行っている。また、同団体は昭和 61 年の日本煎茶工芸協会の発足に関わり、公募展として日本煎茶工芸展を開催するなど、煎茶道具の向上と普及のため、道具製作者である工芸家の支援も行っている。

煎茶道関係者の評価

煎茶道に関する評価については、その普及・振興において功績があったとする人物が勲章・褒章や表彰を受けていることから見て取ることができる。

表 1 煎茶道関係者の表彰一覧

受章・表彰年	氏名	主要経歴	叙勲・褒章・表彰
平成 4 年（1992）	土居一雄（土居雪映）	（社）全日本煎茶道連盟常任理事	勲五等瑞宝章
平成 6 年（1994）	海野彰堂（海野 明）	（社）全日本煎茶道連盟常任理事	勲五等瑞宝章
平成 7 年（1995）	仙田正夫（仙田竹窓）	（社）全日本煎茶道連盟常任理事	勲五等瑞宝章
平成 13 年（2001）	諸泉陽子（諸泉祐陽）	（社）全日本煎茶道連盟常任理事	勲五等宝冠章
平成 15 年（2003）	高島徳二（高島尚堂）	（社）全日本煎茶道連盟副理事長	勲五等瑞宝章
平成 19 年（2007）	加藤 正（加藤景正）	（社）全日本煎茶道連盟副理事長	旭日双光章
平成 22 年（2010）	花田博明（小笠原秀道）	煎茶道小笠原流瑞峰庵理事長	旭日双光章
平成 23 年（2011）	藤本昭二郎（二條雅荘）	（社）全日本煎茶道連盟理事長	旭日双光章
平成 27 年（2015）	中村一登（中村松継）	（一社）全日本煎茶道連盟理事長	旭日双光章
令和 3 年（2021）	海野俊彦（海野俊堂）	（一社）全日本煎茶道連盟理事長	文化庁長官表彰

海外からの評価と国際発信

海外から見た煎茶道の評価

外国人が煎茶道をどのように捉えていたのかについては、まず、外国語の文献から推察することが可能である。

文政 6 年（1823）に来日したシーボルトは、オランダに日本茶を輸入することを目的とし、製茶法について高野長英に報告書を作成させ、製茶図巻を購入したり、日本茶を収集したりしていた。この日本茶は、蒸し製、釜炒りあわせて 25 種もあり、現在、1830 年以前の貴重な葉茶資料として、オ

12 令和 2 年、同 3 年は新型コロナウイルス感染症拡大状況下で中止されている。

ランダのライデン民族学博物館に所蔵されている¹³。

また、明治6年（1873）に英語教師として訪日したバジル・ホール・チェンバレンの“*Things Japanese*”（邦題『日本事物誌』1890年刊）の「茶（Tea）」の項目では、日本での緑茶や番茶、麦茶の飲まれ方等について広く紹介されている。その中に日本茶の淹れ方として、茶葉の質が良い物であればあるほど湯の温度が大事になり熱いお湯を用いないこと、必要に応じて、湯冷ましを用いて茶を入れることもあると記載されている¹⁴。1930年頃、魯迅は上海の内山書店に日参し、店内の「雁ヶ音茶館」で玉露の茎茶、すなわち雁ヶ音を飲んで、友人たちと交流していたことが伝えられている¹⁵。

現代における煎茶道の海外での受け止め方については、台湾の国立故宫博物院の例が挙げられる。同院の南部院区・亜細藝術文化博物館には、中国・日本・台湾の茶文化に関係した品が収められている。日本は茶道と煎茶の2部門あり、海外で煎茶道を紹介する貴重な展示が行われる。収蔵品には、煎茶具はもちろん、茗謙図録や煎茶書もみられ、関心の高さをうかがわせる¹⁶。

煎茶道の国際発信について

煎茶道に係る国際発信の取組については、流派横断的な団体が主体となっていて行われている場合と、流派独自に取組が実施されている場合がある。

一般社団法人全日本煎茶道連盟は、昭和45年（1970）の大阪万博において煎茶席を設け、国内外からの来場者に対して煎茶の普及活動を行ったことをはじめ、昭和48年から5年間、ハワイへ代表団の派遣を実施している。平成2年（1990）には連盟設立35周年を記念した豪華客船「ふじ丸」での台湾訪問、平成18年の連盟結成50周年記念事業では韓国・ソウルで日韓煎茶道交流会を開催し交流会や研修会を行っているほか、平成21年に中国杭州で日中茶文化交流会を実施し、中国国際茶文化研究会と交流を図っている。平成24年には台湾で日台親善交流茶会を開催¹⁷、さらに平成26年にはベトナムで「日本・ベトナム茶文化交流茶会」を開催¹⁸している。なお、平成29年度事業報告書によれば、全国煎茶道大会における海外団体への参加誘致等の活動も行っている。

一方、各流派による国際的な発信の事例としては、中国、韓国、北米、南米、ヨーロッパの各地域において、国際交流を目的とした煎茶会の開催が行われてきた。また、一部流派では、海外支部を拠点に活動や発信を行っている。

13 熊倉功夫「シーボルトと茶」（ヨーゼフ・クライナー編『黄昏のトクガワ・ジャパニ—シーボルト父子の見た日本—』日本放送出版協会、平成10年）

14 バジル・ホール・チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌2』平凡社、昭和44年 p.240-241

15 本庄豊『魯迅の愛した内山書店 上海雁ヶ音茶館をめぐる国際連帯の物語』かもがわ出版、平成26年

16 「単元Ⅱ 茶道—日本文化 二、煎茶茗謙」（国立故宫博物院図録『芳茗遠播—亜細茶文化』国立故宫博物院南部院区・亜細藝術文化博物館、平成27年）p.248-255、279-283

17 『煎茶道』第659号 全日本煎茶道連盟、平成24年 p.38-42

18 『煎茶道』第690号 全日本煎茶道連盟、平成27年 p.38-48

〈主要参考文献〉

- ・全日本煎茶道連盟編『煎茶道のすすめ』全日本煎茶道連盟、昭和 50 年
- ・板橋区立郷土資料館図録『長崎唐人貿易と煎茶道』図録、平成 8 年
- ・大阪市立美術館『煎茶・美とそのかたち』図録、平成 9 年
- ・静嘉堂文庫美術館『静嘉堂蔵煎茶具名品展』図録、平成 10 年
- ・主婦の友社編『煎茶便利帳』主婦の友社、平成 12 年
- ・愛知県陶磁資料館『煎茶とやきもの 江戸・明治の中国趣味』図録、平成 12 年
- ・入間市博物館『「煎茶」伝来 売茶翁と文人茶の時代』図録、平成 13 年
- ・本庄豊『魯迅の愛した内山書店 上海雁ヶ音茶館をめぐる国際連帯の物語』かもがわ出版、平成 26 年
- ・国立故宮博物院『芳茗遠播—亜州茶文化』図録、国立故宮博物院南部院區・亜州藝術文化博物館、平成 27 年
- ・漆原拓也「文人煎茶の盛衰」法政大学博士論文、平成 27 年
- ・『令和元年度生活文化調査研究事業報告書』文化庁地域文化創生本部事務局、令和 2 年
- ・一般社団法人全日本煎茶道連盟公式サイト（URL:<http://www.senchado.com/index.html>）
- ・入間市博物館 ALIT サイト「日本への伝来」
（URL:<https://www.alit.city.iruma.saitama.jp/070/030/010/20200101163000.html>）
- ・泉屋博古館『泉屋博古館名品選 9 9』図録、令和 4 年

1-2 香道の歴史と現状

1-2-1 香道の概要

香道について

香道とは

香道は、古典的な 薫^{たきもの} や、沈香^{じんこう}・白檀^{びやくだん}などの香木¹を一定の作法に従って炷^たき、その香りを鑑賞する日本の伝統的な生活文化である。

仏前への供香が宮廷を中心とする上流貴族の生活にも浸透していき、平安時代には中国の調合香を和風化した薫が流行した。中世に入ると、香木そのものを焚くことが武家の間でも盛んになった。そして、室町時代中期以降、宮中及び公家文化と武家文化、町衆（庶民）文化の交流・融合の中で、香を觀賞する様式が次第に形成され、中国の禅林文化に加え、和歌や連歌など文芸の主題や形式（寄合の様式）にも影響を受けて発展した。

今日の香道は、数種類の香木を組み合わせて構成し、その香りの違いを聞き分ける「組香^{くみこう}」が中心となっている。組香では、香木を炷いて香りの相違を聞き分け、当たりはずれを競う一種の遊戯的な側面を伴いつつ、結果を競うことが目的ではなく、参加者が共に香りを賞翫^{しょうがん}し、香りによって表現された主題の鑑賞を深めることを主眼とする。

供香、空薫、聞香

香の用法は「供香^{そなえこう}」、「空薫^{そらだき}（「空薫物^{そらだきもの}」「空香^{くうこう}）」、「聞香^{もんこう}」（「玩香^{ぶんこう}」「翫香^{がんこう}）」に大別される。

香は日本に仏教とともに中国から伝来したと言われる。「供香」とは、仏前等に香を炷いて供えることを指す。現在でも、香道流派の家元等によって、仏前や神前において香を炷き、その香りが献じられる行事（献香）が行われている。

「空薫」（「空薫物」「空香」）は、香木や数種の香料の粉末に蜂蜜や甘葛^{あまづら}などを煉り合わせて丸薬状にした煉香^{ねりこう}である薫物^{たきもの}（空薫物）を炷くことで、空間や衣類などに香りを移すことを指す。

「聞香」（「玩香」「翫香」）とは、香を炷きその香りを賞翫することを指す。香道では、香りを「嗅ぐ」とはいわず「聞く」という。数種類の香を一定の文学的主题を表現するように組み、香席に招かれた連衆^{れんじゅう}²（参加者）がその組み方や香を鑑賞するとともに、聞き当てた数を競い合う「組香」や、一炷（一種）の香を聞き、その特質、持味を聞き定める「一炷聞^{いつちゅうぎき}」³がある。純粋に香木の香味を賞翫する一炷聞に対し、組香は香と文学との融合であり、香の雅趣を楽しむと同時に遊戯性、競技性が加わる。これに礼儀作法や道具の取り扱い方などが備わることで、香道への発展を見ることとな

1 香道で用いられるのはほとんどが「沈香」である。これは、東南アジアやインドなどの熱帯林に生育するジンチョウゲ科の常緑喬木に、一定の自然条件のもとで樹脂が沈着したものであり、水に入れると沈む性質をもつことからその名が付けられた。※詳細は、p. 30 参考資料「香木について」参照

2 本来は連歌の用語で「レンジュ」と発音したことから「レンジュー」となった。

3 「炷」の本来の発音は「シュ」であるが、江戸時代には既に「チュウ」と併存しており、大枝流芳の刊本のルビによる発音でも「十炷（しゅ）香」「一炷（ちゅう）開」の両方が現れている。

る。

香道において、香りを聞き分ける基準とされるのが「六国五味」である。全ての香木は現在、伽羅、羅国、真南蛮、真那賀、佐曾羅、寸門多羅の6種に分類され、香りの特色は5つの味覚である甘、酸、辛、苦、鹹（しおはゆい/塩辛い）で表現される。この分類法は江戸時代の17世紀初め頃までには定まったとされる。

香席・香会の概要

・香席、香会の概要

香席は一般的に座敷で行われる。香席で使う座敷は八畳ないし十畳、十二畳、床の間と床脇に袋棚（天袋）、違棚（地袋）があるのが正式とされている。

香席での床、棚飾りは、いずれも床に向かって下座寄りが香元の座となるように飾る。

掛物は神仏、聖賢の像は避け、花鳥山水あるいは香に縁のある語の詩歌などを掛ける。花は香気あるもの、とげのあるもの、はかないものを避ける。夜の席には花を置かず、代わりに盆石を用いることもある。

違棚には道具を飾る。違棚のない場合は志野棚又は便宜の棚（四季棚など）を用い、勝手のよいように道具を配置する。

香席では、香を炷きだす「香元（香本）」によって一定の手前に従って香が炷かれ、席に参加する連衆がその香を鑑賞する。香席に参加する場合の心得や作法があり、各流とも「香席法度」や「香道箇条目録」に示されている。流派に共通する心得は以下の事項である。

- ・香水など強い匂いのあるものは身につけず、皮革製品、衣服の防虫剤など匂いの付いた衣服や持ち物にも留意する。
- ・亭主による饗応は、山椒や柚子といった香気の強い飲食物を避ける。

また、香を聞く際の作法としては、以下のような事項がある。

- ・聞くときは、正座して背筋を伸ばし、香炉を右手で取り上げて左掌に載せる。時計の針と反対方向に香炉を回し、香炉上部を右掌で軽く覆い、傾けず水平のまま顔に近づけ、親指と人差し指との空間から息を吸い込んで香りを聞く。なお、香炉の正面が分かるよう、灰には「聞き筋」（形態は流派によって異なる）が付けられている。香炉の正面から聞くか、正面を向こうに回して聞くかは流派により違いがある。
- ・聞き様は三息（もしくは五息）が決まりで、長聞きしたり、逆に粗末に聞いたりしてはいけないとされる。香りは炷き出しから終わりまで同じではなく、衰える（すがれる）ため、三息を守るのが心遣いである。聞き終わったら迅速に次客に回す。

・香席の流れ—組香の例—

香席において広く行われている「組香」の場合、香を炷く「香元」、香席の記録を行う「執筆」、客である「連衆」が参加する。

組香は、香元が炷いた「^{こころみこう・ためしこう}試香」を聞き、連衆はその特徴を覚えておき、そして、試みに出た香と、^{きやくこう}客香という試みのない香が、「本香」として香元によって順不同に炷き出されるのを順次聞き当てていく方法で香の鑑賞が行われる。なお試香がなく、炷き出された香の何番目と何番目が同じであるか、香の同異を当てる形式もある。

香元が香席において香を炷く際、必要とされる手順や道具の扱い方、所作や作法等について流派ごとに一定の様式があり、それらは「手前」と総称されている。また、香席の記録を行う執筆も、記録の取り方などについて一定の作法や所作が定まっている。

香席において組香を行う場合の香元が行う手前は、おおよそ以下のような流れになる⁴。

- ・香元は、聞香炉の灰におこした炭団^{たどん}を埋め、灰押や羽箒を使って灰を整え、中心に熱気を伝える火窓を作る。灰の頂点に銀葉^{ぎんよう}（隔火のための小板）を置き、その上に約3mm角の香木の小片を載せる。
- ・熱気が伝えられた香木が芳香を放ち出したことを確認すると、連衆へと上座から順に聞香炉を回していく。連衆に回した聞香炉が手元に戻ると、聞香炉の銀葉を新しくし、次の香木を炷き連衆へと回していく。なお、試香がある場合は、まず試香の分の香木を順に炷いていき、次に本香の分を炷いていく。
- ・連衆が全ての香りを聞き終え、香元の手元に聞香炉が戻ると、香元は聞香炉の銀葉と香木を外す。
- ・香元は、炭団を納める火取香炉を前に出し、聞香炉（通常は2つ）から炭団を取り出して火取香炉へと移し、整えていた灰を掻き揚げる。その後、香道具一式を^{みだればこ}乱箱に入れる。

以上が、香元が香を炷き終えるまでのおおよその流れである。一方、連衆の動きとしては、

- ・試香がある場合、連衆はその香りを聞き、その特徴等を覚えておく。
- ・回ってきた本香の聞香炉の香を聞き、銘々自分の判断を手元の回答用紙に記す（もしくは^{こうふだ}香札を投票する）。
- ・連衆の回答は、「執筆」が取りまとめて記録紙（香記、香記録。標準として料紙は両懷紙を用いる）に転記し正解を発表、その記録紙（香記）が当日の最高得点者に贈呈される。

以上のような形で、香席において香りの鑑賞が行われる。なお、香席で扱われる組香の種類や道具類の違い等によって、香を炷くための手前は異なっている。

4 香席における香元の手前の流れについては、香道文化研究会編『図解 香道の作法と組香』第五版（雄山閣、令和2年）、三條西堯水監修『よくわかる香道 歴史から作法まで香りの世界を深める』（メイツ出版、令和4年）を参照した。

香道における手前、稽古について

・香道における手前

今日、香道を担う各流派においては、火道具や聞香炉をはじめとした香道具を使い、香を焼き、香席等において香木等の香りを鑑賞するために必要となる道具の扱い方や作法・所作があり、これらは「手前」と総称されている。

香道の流派における手前は、香を炷くために必要となる作法や所作、道具類の扱い方などが体系化されており、正式・略式の別があり用いる香道具が異なるほか、手順や作法も異なる。

また、聞香炉の灰の整える一連の作法や所作は「灰手前」と呼ばれている。灰につける筋（「箸目」）の付け方や数には真・行・草の別があり、香を炷く場面に応じてその様式も定まっている。以上のような手前は、流派によってその形式自体が異なっている。

なお、同一の手前であっても、香席でどのような種類の組香をするか、盤物と呼ばれる道具を用いるか、試香をするかどうか等でも手順の細かな異同があり、香席でどのような形で香を鑑賞するかによって、香元は手順等を適宜整えて手前を行っている。

・香道の稽古について

香道の各流派においては、香道を学びたい人のために稽古場あるいは教室を開き、香道を学ぶ場を設けている。また、香木や香道具などを取り扱う香舗においても、体験教室が開かれているほか、カルチャーセンター等でも講座が開かれている。

上記のような場所では、香席に客として招かれた際の作法を身に付けることをはじめとして、香を焼き香席を開くために必要とされる道具の扱い方や作法等の手前に加えて、組香の種類や席のしづらい方等の決まりや作法、古典文学に関する教養などもあわせて教授が行われる。

流派によっては手前等の習熟の度合い等に応じて免状を発行しており、手前を習熟した者の中には稽古場や教室、カルチャーセンターで講座を開き、香道の普及啓発を行う者もいる。こういった稽古場や教室等が、香道を学ぶ場と機会になっている。

担い手について

香道を担う者については、香道の流儀を継承している香道流派、また流派に関連する会、そして流派横断的な全国団体がある。そして、これら流派等に所属する者や個人として香道をたしなむ者などの香道を愛好する者が香道を担う者として考えられる。

・香道流派

香道では、家元と呼ばれる者が中心となって組織されている流派が存在し、流派ごとに香道の流儀を継承・保存し、香道の普及や振興に係る様々な取組を行っている。

家元を中心として組織された御家流、志野流（志野流香道松隠会）、安藤家御家流があり、流派に関連する団体として、御家流香道桂雪会、御家流香道公香会、御家流堯仙会、御家流霞月派などがある。そのほかに香道直心流、香道翠風流、香道泉山御流などの団体がある。教室を開くほか、カルチ

ャーセンターなどで講座を開催している。

・横断的な団体

香道の流派横断的な団体としては、公益財団法人お香の会がある。当該団体は、香りの文化保持・育成のために香道を普及させる目的で結成された組織で、東京の薬師寺別院、奈良本院で香道の教室を持つほか、毎年「国民文化祭」に参加するなど、講習会や体験教室を通じて全国的な普及活動を行っている。

・香舗

香木や香道具を扱う香舗、香木商があり、流派と協力、又は流派を支援し、教室の開講、情報発信などの普及啓発活動に努めており、これも担い手として考えられる。

・香道を愛好する者

流派や香舗が開催する体験講座をきっかけに香道を知り、流派の門人や会員となる者や、特定の団体に属さずに香道を愛好する者、また、高校・大学の香道研究会（香道部）など、課外活動として香道に親しむ学生等も担い手、愛好者と考えられる。

以上のような愛好する者が想定されるが、政府の統計調査や調査会社が行う調査などでは、香道を愛好する者の人数などの把握は行われていないので、正確な人数を把握することは困難な状況にある。

〈主要参考文献〉

- ・神保博行『香道の歴史事典』柏書房、平成 15 年
- ・松榮堂監修 『コロナ・ブックス 日本の香り』平凡社、平成 17 年
- ・松原睦『香の文化史－日本における沈香需要の歴史－』雄山閣、平成 24 年
- ・香道文化研究会編『香と香道』第五版 雄山閣、平成 27 年
- ・香道文化研究会編『図解 香道の作法と組香』第五版 雄山閣、令和 2 年（初版は蜂谷宗由監修・長ゆき編で、昭和 53 年に雄山閣より刊行）
- ・本間洋子『香道の文化史』吉川弘文館、令和 2 年
- ・三條西堯水監修『よくわかる香道 歴史から作法まで香りの世界を深める』メイツ出版、令和 4 年

1-2-2 香道の歴史

香道前史

仏教と供香

香木について記された最初の史料は『日本書紀』である。推古3年（595）卯月、淡路島に大きな流木が漂着し、島の人は沈香と知らず^{かまど}竈に薪としてくべたところ、芳香が遠くまで漂ったため、朝廷に献上されたことが記録されている。また、『日本書紀』には、蘇我大臣が香炉を手に香を焼き、雨乞いを行ったことや、内裏での仏像開眼供養の折には、天智天皇が袈裟や象牙のほかに「沈水香（沈香）」、「梅檀香（白檀）」等を法興寺（飛鳥寺、元興寺の前身）に奉納したことが記録されており、香木が仏への供香のために用いられていたことが考えられる。

薫物と空薫—奈良時代後期から平安時代

香木が供香に用いられる一方、香木等の香料を粉末にして袋に収めた^{えいこう}裏衣香や、香木や各種香料の粉末を、甘葛などの粘性物で練り合わせて丸薬状にした薫物が貴族社会において用いられていた。

裏衣香は、衣服等に香りを移すため等に用いられた匂袋の一種で、正倉院の宝物には神護景雲2年（768）の記銘のある裏衣香が納められている。一方、薫物は、天平時代には製法や材料とともに日本に伝えられていたと考えられており、この薫物を香炉で炷いて空間に香りを漂わせたり、衣服や髪に香りを移したりする空薫も、奈良時代後半には行われていたと考えられている。

平安時代の貴族社会においては薫物の流行が見られ、11世紀初めに成立した『源氏物語』では、様々な場面に薫物が登場しているほか、藤原道長が記した^{みどうかんぱくき}『御堂関白記』では、薫物や薫物を納める箱などの道具が慶事の贈答に用いられたことが見える。加えて、薫物の調合が宮中や各貴族の家でもそれぞれに工夫されていたことが、12世紀頃の編纂と伝わり、薫物を中心に^{くんじゅうるいしやう}薫集類抄からうかがい知ることができる。

また、貴族だけではなく、いろいろな階層の薫物の処方を記した^{てんぽうりん}転法輪三条家の伝書『香之書』があることから、平安時代末期になると、経済力と教養を備えた上級武士もあり、薫物をたしなむようになっていた。

沈香受容の拡大—鎌倉時代から南北朝時代

建武2年（1335）の「二条河原落書」（『建武年間記』）には、「此比都ニハヤル物（中略）茶香十炷ノ寄合モ 鎌倉釣ニ有鹿ト 都ハイトノ倍増ス（後略）」と見え、この史料から、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて京都において茶の寄合とともに香の寄合が流行していたらしいことが分かる⁵。

中国との貿易によってもたらされる様々な「唐物」のうち^{じゃこう}沈香や^{ちやうじ}麝香などの香薬類は貴族の間で珍重されており、^{ふじわらのあきひら}藤原明衡の随筆^{しんさるがくき}『新猿蓑記』では唐物の第一として沈香が挙げられている。

5 森田都紀編『伝統文化 史料編』京都芸術大学東北芸術工科大学出版局藝術学舎、令和3年 p.110-113

貴族の唐物趣味は武家にも影響を与え、香木をはじめとした香薬の使用は次第に武士階級にも広まっていった。貴族、そして武家の中に薫物や等の香木や香薬が珍重される中、禅宗においては沈香単体を炷くことも行われていた⁶。このような沈香の用い方の変化には、中国との直接交易や倭寇、また琉球の中継貿易により、沈香の輸入量が増加したことも背景の一つとして考えられる。

延文から応安年間（1356～1375）に成立したとされる『異制庭訓往来』^{いせいいていきんおうらい}には、「伽藍木」「妬伽羅」や「白檀」と言った香木、「龍涎」「薰陸」といった香料の名称が見えるほか、「宇治」「鳥羽」「山陰」のような名香が記されている。康暦2年（1380）、時宗の僧、素眼^{そがん}が著した往来物『新札往来』^{しんさつおうらい}や、一条兼良著とされる『尺素往来』^{せきそおうらい}にも「宇治」や「山陰」の名が見られるほか、「蘭奢待（蘭麝待）」^{らんじやたい}、「東大寺」の名が見え、香木それぞれに独自の「銘」が付けられており、沈香単体の香りを味わい、特徴や差異を聞き分けていたことがうかがえる。

また、『太平記』中の婆娑羅大名^{ばさら}、佐々木道誉^{どうよ}は、貞治5年（1366）、室町御所での花見の宴の際、一斤という大量の名香を一度に炷きあげた。道誉は大量の香木を所持していた人物とされ、後世まで道誉所持の伝承を持つ名香が伝えられている。

香道の黎明

中世史料に見る香の催し—室町時代

宮中及び周辺の公家社会では、15世紀前半より、現在の組香の原型となる「十炷（種）香」⁷の香会が行われた記録が見え始める。伏見宮貞成親王の『看聞日記』^{さだみき}に記載された10件の香会は全て十炷香で、懸物（賞品）^{かけもの}を参加者が持参し、最高得点者が優先的に籤^{くじ}を引き懸物を得、また敗者が酒を提供して勝者をもてなす例もあった。香会には親王の親族や近臣、近隣の寺庵衆以外に、地下衆も参加していたという。公卿・中山定親の日記『薩戒記』^{さつかいき}にも、称光天皇期（在位1412～1428年）に内裏で十種香が開催されたことが記されている。香会の内容を伝える史料は、応仁の乱以前よりも乱後に集中しているが、それによれば、宮中での香会は主に陰暦の冬と春、和歌や連歌の会、曲舞や謡の鑑賞^{ようきゆう}、楊弓などの遊びに続いて夜に行われ、その後は酒宴となるが多かった。

三条西実隆の日記『実隆公記』^{さんじょうにしきねたか}には、自身が参加した22件の宮中での香会が記録されている。1例を除き十炷香で、香を聞き当てた高得点者が賞品を得る、競技性、遊戯性の高い香会の様子が記されている。一方、この『実隆公記』には、実隆が自邸で行った15件の香会が記録されているが、それは香木単体を炷く「一炷聞」や薫物の鑑賞、薫物による「十炷薫」などで、いずれも少人数で香りを鑑賞し、酒食や和歌・連句等を楽しむ、競技性のない香会であった。また15件のうち9件には、

6 松原睦氏は、その始まりを宋代の禅林に求め、日本における禅宗の広まりとともに、中国の禅院における儀礼としての茶や沈香の用い方が禅僧によって伝えられ、沈香一木を炷く新たな香の世界が禅宗寺院やその信奉者たる武士の間に開かれていったと推察している。（松原睦『香の文化史—日本における沈香需要の歴史—』雄山閣、平成24年 p.54-55）

7 今日の香道では十炷香を「じっちゅうこう」と読むが、炷の読みは本来「しゅ」であり、「ちゅう」と読まれるのは室町時代末期以降だという。当時の記録に表記が混在する十炷香、十種香の読みはいずれも「じっしゅう」又は「じゅっしゅう」で、同一のものを指すと考えられる。なお、「二条河原落書」にも「茶香十炷」とあるが、現在の十炷香と同一のものではない可能性が指摘されている。

『新撰菟玖波集』^{しんせんつくばしゅう} 編纂を通じて親交を深めた連歌師・宗祇^{そうぎ}が出席者、主催者として関わり、薫物などを届けることもあったという。

上記のような十炷香や一炷聞の香会のほか、当時の記録に見えるのが「名香合」^{めいこうあわせ}である⁸。平安時代以来の「物合」の法式に倣い、左右に分かれて二種の香を聞き比べてその優劣を決め、その判定の基準には香銘も重視され、文学的素養をもとに判者の言葉が添えられた。この名香合の代表例として伝えられるのが、文亀元年（1501）に志野宗信邸^{しのそうしん}で行われた名香合である。この名香合には武家、公家出身の連歌師、僧侶など 10 名の連衆^{しゅつこう}が出香し十番勝負が行われ、佐々木道誉や正倉院から足利義政に伝わったとされる来歴の名香も出香された⁹。

のちにこの名香合の記録に三条西実隆が跋文を寄せ、「香木そのものの香りを競うことは古代にはなく、あまり遠くない昔から風流人が香合をするようになったのも興あることである」と述べている¹⁰。その記録は写本として、また香道伝書の中にも残されている。後世、三条西実隆は「御家流」、志野宗信は「志野流」の流祖として、御家流は公家へ、志野流は武家へ伝わったとされる¹¹。

宮中での香会—組香の発展

16 世紀前半においても、宮中での香会は十炷香が主流であったが、この頃から公家の自邸や宮邸、親王の御所や宮中での香会で、「源氏香」「系図香」といった新たな組香を行った記録が見え始める。

系図香とは、組香の回答に、縦線と横線を組み合わせた図（香図）を用いるもので、その形状が家系図に似ることから系図香と称された。4 種の香木を使い、香木を入れた香包^{こうづつみ}を 1 種につき 4 包用意し、計 16 包を打ち混ぜてから無作為に選んだ 4 包の香を順に焼き出せば、4 つの香りが全て同じ場合・全て異なる場合を含め、同一の香りが炷かれた順番と回数の組合せは 15 通りとなる。回答にあたり、4 包を示す 4 本の縦線を書き、同じ香りと判じた線同士を横線で結べば、15 通りの図で答えられる。5 種の香を用いると 52 通りの図となる。これらが「香図」と呼ばれる¹²。

8 上記の『名香合』以外の例としては、『五月雨日記』と称される伝書には、文明 11 年（1479）に足利義政が造営した東山殿の泉殿（東山泉殿）で催されたとされる香合の記録が残される。この記録は年紀、あるいは行われた場所の少なくともいずれかが事実とは異なると考えざるを得ないことは、東山殿の建設時期からも疑いが持たれているが、この記録も『名香合』と並び、香道史上において手本とすべき理想的な香合の記録として位置づけられている。（宮崎涼子「明治期の慈照寺弄清亭建設—伝説の香室・東山泉殿の再現」（井上治・森田都紀編『伝統文化 研究編』京都芸術大学東北芸術工科大学出版局藝術学舎、令和 4 年、p. 51-65））

9 矢野環氏の研究によって、複数の志野姓の人物が京都の酒屋土倉である「土蔵志乃」であったことが文献資料の精査によって指摘されている。さらに、当時の裁判資料に志野宗温と思われる人物が出ることも確認された。（「香道の古伝書—『習見聴諺集』所収伝書など』『儀礼文化』23 号 儀礼文化学会、平成 8 年）。加えて、本間洋子氏は、「名香合」に参加している志野宗信が、足利義政所有の「中河」や天皇家に縁のある「紅塵」を出香している点からも、同人が摂関家や大臣家と交渉を持つ有力な酒屋土倉「土蔵志乃」であった可能性を補強している。（本間洋子『香道の文化史』吉川弘文館、令和 2 年 p. 98-123）これは後掲注 11 の菊池氏の論説により確立された、志野家名香合の信頼性の上に成り立つ議論である。

10 菊池佳奈子『香道古伝書『名香合』攷』私家版、平成 15 年 p. 28-33

11 本間洋子氏は、この宗信邸での名香合の記録と跋文が江戸時代の香道伝書に転載される際、実隆が香合の指導者的立場のように紹介されたことが、実隆と宗信の二人を香道の流祖とする通説の発端ではないかと推察している。（本間洋子『香道の文化史』吉川弘文館、令和 2 年 p. 98-123）

12 実隆が「ある種の香札」を記載したという記録もある（『実隆公記』文明十八年三月四日条。「十炷香簡十具書之」）。（櫻井秀「香道の成立とその発達について」『風俗史の研究』宝文館、昭和 4 年 p. 192-221）。

転法輪三条公頼^{きんより}の日記『公頼公記』には、伏見宮貞敦親王^{さだあつ}と足利義晴^{じょうろう}の上臈^{じょうろう}となった公頼の姉妹が里帰りした大永7年(1527)正月、「十種ノ系図香」が催されたことや、翌年に貞敦親王御所で「五種の系図香」が行われたことが記されている。このことから当時は、現在「系図香」と認識されているものだけではでない、多種類の「系図香」が存在していたと考えられる。

永正13年(1516)、太政大臣近衛尚通^{このえひさみち}の『後法成寺関白記』には、右京大夫細川高国^{ほそかわたかくに}の依頼を受け、香図に『源氏物語』から名を付けたという記録がある¹³。「源氏香」は現在まで伝えられた組香の中で最も名の知られたもので、その香図は工芸品や着物に多用される意匠となり、香道に親しくない人でも目にする機会が多いものである。「源氏香」の名称は尚通の父、近衛政家^{まさいえ}の日記中に既に登場(1501～1502)しているが¹⁴、その実態は不明であり、また尚通がこの時、『源氏物語』からどのような銘を図に付けたかも記録はない。従って、今日の源氏香と全く同じものが当時行われ始めたと断言することはできないが、この時代、既に組香の回答としての香図が存在し、その図に『源氏物語』などの古典に因んだ名を付けることが行われていたといえる¹⁵。

香道の形成

香木の分類判定基準の形成—安土桃山時代

香道において香木を分類判定する基準「六国五味」(木所ともいう)^{きどころ}が定まるのは17世紀半ばとされるが、建部隆勝^{たけべたかつ}が天正元年(1573)に著した香書『隆勝香之記』の記述により、こうした分類は16世紀初めには生じていたことが分かっている。建部隆勝は、香を志野宗信^{そうおん}の子、宗温に学んだと伝わる。建部はこの書で、作法、手順や道具の扱い、香の故実などに続いて70種の名香を5つの「木所」(伽羅、新伽羅、羅国、真南蛮、真那賀)に分類している。

また、香道における「六十一種名香」は、足利義政の命により、三条西実隆と志野宗信が関わり、選定されたと通説に伝わるもので、法隆寺「太子」、東大寺「蘭奢待」に始まり、桃山時代以前に日本にもたらされた名香を厳選したものである。この六十一種の名が一同に記されたのは、志野宗信が記録したものを紹介するという形式の、宗温による名香録が現在も基準とされているが、『隆勝香之記』はそれに次ぐものであり、玄宗が含まれるなどの差異がある¹⁶。

堺の町衆で、千利休に学んだ茶人として知られる山上宗二^{やまのうえそうじ}(1544～1590)の『山上宗二記』には、建部隆勝、千利休、津田宗及^{つだそうぎゅう}と自分で名香の極めをしたと書かれている。津田宗及らの茶会記には、茶席でしばしば香を炷いた記録も見え、当時、茶人達が香をよくたしなんだことを示している。

なお、香の種類が増えると香図の数は単純な計算では求められないが、江戸時代の和算家は公式を見出していた。(矢野環「源氏香 有限集合の分割(1～2)」『数学セミナー』日本評論社、平成7年11月p.58-61、12月p.56-60)

13 櫻井秀「香道の成立とその発達について」(『風俗史の研究』宝文館、昭和4年 p.192-221)

14 石橋健太郎「『後法興院記』にみる香」(『広島県立美術館研究紀要』6号 広島県立美術館、平成14年p.15-25)

15 本間洋子『香道の文化史』吉川弘文館、令和2年 p.20-29、59-78

16 矢野環氏により、『習見聴診集』の名香録や香道書の精査が行われ、十種名香は古くより安定していたが、そのほかは微妙に異なるものが存在することが示された。(武井 和人、矢野 環「『習見聴診集』攷一その書誌と伝来」(『埼玉大学紀要 教養学部』38巻第1号 埼玉大学教育学部、平成14年 p.19-44)

天正2年(1574)、織田信長が東大寺に名香「蘭奢待」の拝見を申し入れ、^{せつこう}截香が行われた¹⁷。拝見には山上宗二ら堺の商人も同行し、また数日後に相国寺で開かれた茶会に招かれた利休と宗及は、二人が名物香炉を所持しているからとして、信長から蘭奢待一包をそれぞれ与えられた。

香道の発展

民衆への広がり—香道の展開

前出の『山上宗二記』には、香道の流儀に関する記述が見られる。同書では、「公家にては三条殿、武家にては篠殿、此両家香炉并名香の事御家也」とあり名香を持つ家(「三条殿」「篠殿」)が挙げられているほか、「灰之押様之事」として、聞香炉の灰の押さえ方の違いが「三条殿流」「篠殿ノ流」で異なっていたことも記述されている¹⁸。同書が成立した16世紀末には、聞香炉の灰の押さえ方に流儀のようなものが生じていたことが確認できる。

そして、江戸時代になると、志野流、御家流、米川流といった香道流派がそれぞれの展開を見せていく。大名家を中心に香道を伝えた米川流は、江戸時代の一時期、香道の一大勢力でもあったとされ、幕末には膨大な伝書を残している。流祖とされる米川常白は、小紅屋三右衛門という禁裏御用達の紅染商人であり、後水尾天皇の中宮、東福門院(徳川二代将軍秀忠の娘)の香道指南をつとめたという。常白は建部隆勝、坂内宗拾の流れを汲む香人で、六国五味の完成者にも擬せられている。常白の筆になるものとされる『六国列香之弁』においては、「伽羅、真南賀、羅国、真南蛮、寸門多羅、佐曾羅この六品を六国の列といふ」とし、さらに「五味之弁」として香気を五味に分類識別することを述べている。

三条西実隆を祖とする御家流は、家元制度をとらず、完全相伝¹⁹で伝承されたという。現在伝承される系図では、実隆以来、堂上の公卿の間で相伝されてきたが、江戸時代前期に猿島帶刀家胤に至り、初めて地下や武家・庶民に伝えられたとされている。なお江戸時代、芸道は公家による官許が定められ(蹴鞠は飛鳥井家・難波家、琵琶は西園寺家等)、それぞれ世襲であったが、歌道と香道はどの家でもつとめなくてはならず、決まった御家はなかったという。

志野宗信から宗温、省巴と三代続いた志野家は、建部隆勝の推輓により、同門の蜂谷宗悟が志野流四代を継いだ。享保年間(1716~1736)頃、八代宗栄にはじまる志野流の家元制は、九代宗先の時に完成されたという。宗先の晩年から『諸国香道門人帳』が書き留められ、享保時代から弘化時代までの諸国の門人が記録された。門人帳には職業も地域も幅広い層の弟子が名を連ね、宮中、公家、大名だけでなく、家元制度によって香道が伝承されることにより、香道をたしなむ者が一般にまで広がったことを示す。なお西山松之助の『家元の研究』によれば、志野流の門人帳には男性の記載が圧倒

17 蘭奢待については、織田信長のほかに、足利義政、明治天皇などが截香したとされる(正倉院 HP : <https://shosoin.kunaicho.go.jp/treasures?id=0000012162&index=0> を参照。最終確認日: 令和5年1月31日)

18 森田都紀編『伝統文化 史料編』京都芸術大学 東北芸術工科大学出版局芸術学舎、令和3年 p.114-123

19 芸芸及び技芸を次の代に相伝する権利そのものを伝授することを指す。(西山松之助『家元の研究』(西山松之助著作集 第一巻)吉川弘文館 昭和57年)

的に多く、女性は一割強にとどまるという²⁰。

香道書・香道伝書の展開

香道に関する刊本は 17 世紀後半に登場しており、寛文 9 年（1669）に刊行された『香道秘伝書』は広く伝播し、二度の重版のみならず、大枝流芳により校正された『改正香道秘伝 附録奥乃志保里』も作られ刊行された。

一方、香道に関する伝書については、18 世紀前半、享保から元文年間にかけて、著名な香人が現れ多くの書籍を残した。香道の全般の心得や作法を記した香道伝書の多くがこの頃に成立し、18 世紀中頃には香道伝書の集大成が試みられた。

享保 17 年（1732）頃に成立した『香道蘭之園』^{こうどうらんのおの}（菊岡沾涼^{きくおかせんりょう}は元文 4 年（1739）に書写）は、香道全書ともいふべき香道伝書の集大成である。十巻からなり、一卷が総論、二巻から十巻には古来伝承された 200 余の組香を収録、付録として他書に見かける組香 26 を載せる。また、『香道蘭之園』の 15 年後に書かれたとされる『香道賤家梅』^{こうどうしずがやのうめ}は、『蘭之園』の改訂増補版である²¹。さらにその 10 年後の『香道籬の菊』はその後の『香道調度図』『源氏千種香』とともに、豪華な彩色が目を引き、18 世紀半ばに香道が完成の域に達していることを物語る²²。

なお、香道伝書はわずかの例外を除いて全て筆写である。香道の皆伝に際して師の蔵書の披見と書写が許されるのが例であった。そうした中、天台宗の僧侶であった忍鑑^{にんが}の著作『十種香暗部山』が享保 14 年（1729）に刊行されている。同書は差構絶版申し付けとなり発行部数が少なかったためか書写本が多く残っている刊本として著名である。また、前述の大枝流芳も多くの香道書を刊行している。

香道書の刊行は享保から元文年間を頂点とし、その後は減少していく。19 世紀に入り幕末を迎えると、香銘の集録や組香集の編集、あるいは相伝式法の整備などが見られるにとどまった。

教養書に見える香道に関する記述

江戸時代初期から中期にかけて組香の遊戯的要素が高まり、盤物^{ばんもの}、又は盤立物^{ばんたてもの}という、聞き当てた香の結果を盤上の小道具（人形など）を使って表すものが盛んに行われた。最も大規模な盤物として、東京国立博物館所蔵「花笠香」がある²³。

江戸時代初期にはまた、木版技術の進歩と読書人口の増加を背景として、寺子屋の教科書や教養書等が刊行されるようになる。このうち、女性向けの教養書には、香炉の扱いや香の作法の簡単な

20 西山松之助『家元の研究』（西山松之助著作集 第一巻）吉川弘文館 昭和 57 年 p. 434-440

21 神保博行『香道の歴史事典』柏書房、平成 15 年 p. 337

22 矢野 環、岩坪 健、福田 智子『竹幽文庫の香道伝書 香道調度図・香道籬の菊』淡交社、令和 2 年

23 矢野環「東京国立博物館保管吉田露香氏寄贈香道具「花笠香」盤立物—実は中御門院御製「四季合香」—」、(『MUSEUM』520 東京国立博物館、平成 6 年 p. 20-34) なお、盤物については、福田智子・南里一郎・矢野環編著、森あかね・高橋美都・岩坪健著『香道籬の菊 盤物の雅び』風間書房、令和 5 年 4 月刊行予定において詳しく解説される。

紹介が見られるようになる。

例えば、貞享4年(1687)、江戸で出版された『女用訓蒙図彙^{じょようきんもうずい}』には、「香をきくこと」として、香の作法心得が書かれている。元禄5年(1692)の『女重宝記^{おんなちようほうき}』巻一では、「女中たしなみてよき芸」として、習字、和歌、連歌、俳諧、琴、茶の湯、立花などとともに香を聞くことが挙げられている。また、同書巻四では「香をきく事、付たり十種香」「掛香の名方」「伽羅の名、ならびに薫物の方」の項を挙げ、香の聞き方等を詳しく説明しているほか、巻五では「源氏香之図」を掲載している。このことから、香を聞くことが、武家や裕福な町方の女性がたしなむ芸の一つとして広まりを見せていたことがうかがい知れる。

浮世絵などの絵には、遊里の女性や町方の女性が香を聞く姿が描かれており、一例としては、享保8年(1723)に刊行された西川祐信の『百人女郎品定^{ひやくにんじょうしなだめ}』に、富裕な女性たちが集い、十種香の香会をしている様子が描かれている。

明治時代以降の動き

明治維新後、それまで香道の中心的担い手であった公家や武家は大きくその立場が変化し、欧化の波により伝統的な文化は顧みられなくなったと言われる。しかしこうした状況下でも、香道の伝統を守り、新たな継承の在り方も模索されていた。

志野流は、幕末の動乱期に京都から名古屋に移り、その後も蜂谷家によって現在まで伝承されている。

維新後の東京で、御家流の宗匠として後進を育成したのは、茶人でもある式守蝸牛庵^{しきもりかぎゅう}、都筑宗穆^{つづきそうぼく}・幸哉父子、山本霞月^{かげつ}で、現在の御家流は全てそれらの門流である。御家流は、完全相伝制で家元を置くことがなかったが、昭和22年(1947)、一色梨郷と山本霞月等が中心となり、三條西家の三條西公正^{きんおさ}を宗家に推載し、現在に至っている。

〈主要参考文献〉

- ・神保博行『香道の歴史事典』柏書房、平成15年
- ・松原睦『香の文化史－日本における沈香需要の歴史－』雄山閣、平成24年
- ・香道文化研究会編『香と香道』第五版 雄山閣、平成27年
- ・香道文化研究会編『図解 香道の作法と組香』第五版 雄山閣、令和2年（初版は蜂谷宗由監修・長ゆき編で、昭和53年に雄山閣より刊行）
- ・本間洋子『香道の文化史』吉川弘文館、令和2年

1－2－3 香道の国内外における文化的、社会的位置付けや評価

現代社会における香道

香道の国内状況

流派においては、流派で継承されてきた香道の伝承を主目的とした活動を行うほか、近年では広く香道を普及・振興する活動を行っている。また、流派横断的な活動を行っている香道の全国的な団体では、香道体験等の実施を通じて、香道文化の普及を目指している。

香道分野の流派及び団体に対して実施した調査²⁴では、現在の課題として香木の不足や指導者が少ないといったことが挙げられ、また、「会員の高齢化」(28.6%)、「情報発信不足」(28.6%)についても挙げられた。流派によっては免状を取得しても茶道のように教室を開くことができないため、新しい会員がなかなか定着しないという意見も見受けられた。

香道関係者の評価

香道に関する評価については、その普及・振興において功績があったとする人物が勲章・褒章や表彰を受けていることから見て取ることができる。

まず、昭和 56 年(1981)、御家流宗家で日本香道協会会長(当時)の三條西公正(号：三條西堯山)が勲三等瑞宝章を受けている。次に、「我が国の文化芸術の振興に多大な貢献をしている」などとして、志野流二十世家元の蜂谷宗玄が平成 17 年度(2005)に、公益財団法人お香の会常務理事・松栄堂代表取締役社長の畑正高が令和 4 年度に文化庁長官表彰を受けている。

海外からの評価と国際発信

海外から捉えた香道

外国人が香道をどのように捉えていたか、外国語の文献から推察することが可能である。

永禄 7 年(1564)に来日した宣教師ルイス・フロイスが記した“*Historia de Japam*”(邦題『日本史』)には、豊臣秀吉が沈香を好み、自らを誇示するものとして用いたとの記載がある²⁵。また、同じく宣教師で言語学者でもあるジョアン・ロドリゲスは著書“*Histoire Ecclésiastique des Isles et Royaumes du Japon*”(邦題『日本教会史』)の中で、「日本人はまた、香料や芳香を有する物、特に伽羅と沈香の等級と純度を識別するのに、とろ火を使い巧みな技術で、同じ種類の中の様々な相違と等級を判定する技能をわがものとしている」と述べている²⁶。

江戸時代には、蒔絵漆器の香道具が量産されるようになり、海外にも輸出されるようになった。既に、16 世紀後半には訪日した宣教師や商人達によって発注・製作された平蒔絵と螺鈿を組み合わせ

24 『令和元年度生活文化調査研究事業報告書』文化庁地域文化創生本部事務局、令和 2 年 p. 25

25 ルイス・フロイス『日本史』豊臣秀吉篇一 中央公論社 昭和 56 年 p. 254

26 ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』上 大航海時代叢書第 9 岩波書店、昭和 42 年 p. 619

せた漆器（南蛮漆器）がヨーロッパにもたらされた。17世紀以降になると黒漆地に高蒔絵を施した漆器、いわゆる「紅毛漆器」が海外へ輸出されるようになった。例えば、マリー・アントワネットの漆器のコレクションにある重香合や香簞笥、デンマーク王室には香炉が伝来しているように、ヨーロッパの王侯貴族たちの中で広まった東洋趣味の高まりもあり、本来の目的とは異なる形で、香道具が収集されていたことが分かる²⁷。

近代になると、多くの外国人が訪日するに従い、日本に関する書籍が外国人に広く読まれるようになる。その一つが、明治6年（1873）に英語教師として訪日したバジル・ホール・チェンバレンの“*Things Japanese*”（邦題『日本事物誌』）であり、この中で「聞香」（ききこう Insense Parties）の項目が立てられている。冒頭、『聞香』（香をかぐこと）という複雑な儀式があり、これは西暦一五〇〇年以来愛好され、今も風雅な人びとの間に愛好者がいる」と述べた上で、源氏香について紹介をしている。チェンバレンは、香道は日本人の中でも趣味を大事にする人にとって、茶道に次ぐものとして尊重されているとともに、学問的でありなおかつ貴族的な遊戯であると捉えていることを示す一方で、香道はじめ茶道や華道に日本人が傾ける知性に驚きを覚えている²⁸。

香道の国際発信について

香道の国際発信については、国主導の国際発信が行われていることをはじめ、香道流派や香舗等の団体により独自に取り組まれている場合や、横断的団体による発信が行われる場合がある。

国主導の国際発信が行われている例としては、大使館や在外公館で実施される日本文化紹介の一環として香道が紹介されている例があり、在リトアニア日本国大使館が日本とリトアニアの外交25周年記念事業として平成28年（2016）に公益財団法人お香の会を招いて香道の実演及び体験が実施されている²⁹。令和元年にはボストン総領事館において京都ボストン姉妹都市60周年記念イベントの中で聞香席の実施や香道具の紹介が行われている³⁰。

文化庁においては日本文化への理解の深化や、外国の文化人とのネットワークの形成・強化につながる活動を趣旨として文化人や芸術家などを海外に派遣する文化庁文化交流使事業を行っており、平成21年度に志野流香道若宗匠の蜂谷宗苾（そうひつ）を文化交流使として指名し、フランス、中国、イタリア、ドイツ、アメリカ、ルクセンブルク、フィンランドで香道を広める活動を実施している。

香道流派が行う国際発信の例としては、志野流の場合、ボストン・パリ・北京・上海に教場を有しており、それらを拠点としながら香道の発信を独自に行っている³¹。また志野流、御家流、安藤家御家流などの流派では、海外での日本文化の紹介イベント等に講師を派遣して、聞香席の実施や解説

27 永島朋子「海を渡った香道具」（荒川浩和監修『香道具 典雅と精緻』淡交社、平成17年 p.206 - 213）

28 バジル・ホール・チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌1』平凡社、昭和44年 p.305-306

29 在リトアニア日本国大使館HP（URL:https://www.lt.emb-japan.go.jp/itpr_ja/eventreport20160829.html）
最終確認日：令和5年1月31日

30 『京都・ボストン姉妹都市提携60周年記念アルバム』
（URL:<https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/cmsfiles/contents/0000265/265403/kanreki.pdf>）最終確認日：令和5年1月31日

31 「志野流公開教場一覧」（HP:<http://www.shinoryushoinkai.net/school/>）には、ボストンに「ボストンスタディグループ」があり、不定期的に活動が行われていることが確認できる。最終確認日：令和5年1月31日

などを行っている例が確認できる。このほか、香舗による主催で、香道流派などに協力を仰ぎ国際発信を行っている例も見受けられる³²。

横断的団体の取組としては、公益財団法人お香の会が、国際交流事業として、海外での香席体験を毎年実施している。

こうした実演や実践の場の提供のほかにも、知識としての香道文化発信の事例も見られる。*Morita Kiyoko*, “*The Book of Incense: Enjoying the Traditional Art of Japanese Scents*” (邦題:『お香の本—日本の伝統的な香りの芸術を楽しむ—』講談社 USA、2015 年) は、北海道出身でアメリカ在住の森田喜代子氏による、香道を含む日本の香り文化を紹介した本である。初版は 1992 年、講談社インターナショナルから刊行され、1999 年ペーパーバック版・2006 年大型ペーパーバック版、2015 年に KODANSHA USA, INC 版が刊行されており、ロングセラーとなっている。

David Pybus “*Kodo: The Way of Incense*” (Periplus Editions, 2001 / Diane Pub Co, 2004) は、香水の歴史に詳しい著者が、香道の歴史と発展、その影響を調べ、香道について一般に紹介する内容となっている。

また、海外向け日本文化紹介番組では、香道及び日本の香文化の特集が放送されている。

32 日本香堂 HP (「日本香堂と香文化」)

(URL:<https://www.nipponkodo.co.jp/iyashi/culture/culture.php>) 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

1-3 和装の歴史と現状

1-3-1 和装の概要

和装について

和装とは

和装とは、和服を着用すること、また、和服で装った姿を指す。明治時代に欧米型の衣服を着用する「洋服」「洋装」が導入されたことにより、従来の日本の着物が「和服」「和装」と呼ばれるようになり、それに伴い、それまで「着る物」という広い意味で使われていた「着物」という呼称が、長着を中心とした和服を指すものとして定着していった。

長着は直線裁ちの寛衣型一部式の前開きの衣服で、帯や下着、小物等を用いて着付ける。礼装の場合、男性はこれに羽織・袴を着用する。女性も羽織を着用することもあり、式典等においては袴が着用されることもある。履き物としては草履、下駄等がある。

帯は着物の左右の前の重なりを押さえて身幅や身丈を調節する実用性と、結び方やデザイン等に創意を凝らす装飾性を併せ持つもので、形状は男女で異なる。

明治時代以降に洋装化が進んだが、昭和時代半ば（1950年代頃）までは、冠婚葬祭は和装で行われることが一般的だった。また、男性では普段着として、女性も既婚者を中心に日常的に着物を着用する人が多かった¹。その後は多くの人々にとって、和装は冠婚葬祭等をはじめとする特別な機会に着るものとなっている。

現代における和装の種類

・ 着装機会ごとの和装の種類

和装は、着物を着装する者がどのような場面や機会に着ていくかによって、着装する着物や帯の種類が異なる。なお、地域によっては着ていく着物の種類等に細かな差異があるため、下記は着物に関する着方をまとめた一般書等を参照し、一般的な例を示している²。

礼装（第一礼装）

公的な式典や、結婚式に主催者として参列する場合において着装される着物は、「礼装（又は第一礼装）」と呼ばれている。女性は黒留袖、色留袖、振袖等を着用し、留袖の場合は上着として羽織を着用することもある。男性の場合は黒紋付きの長着と羽織袴を着装する。着物は織りの着物より染めの着物の方が格が高く、礼装で着用されるのはいずれも染めの着物である。

紋は数が多いほど格が高く、女性の場合は五つ紋の黒留袖が、男性の場合は五つ紋の長着と羽織

1 金融財政事情研究会発行『第14次 業種別審査事典』きんざい、令和2年

2 全日本きもの振興会監修『着物の教科書』（新星出版社、平成30年）及び、牛腸ヒロミ・布施谷節子・佐々井啓・増子富美・平田耕造・石原久代・藤田雅夫・長山芳子（編）『被服学事典』（朝倉書店、平成28年）を参照した。

袴が最も高い格の礼装となる。

帯は一般に染めより織りの方が格が高く、礼装では丸帯や袋帯を着用する。

準礼装

結婚式に招待客として参列する場合や、パーティー等に参加する場合に着装される、礼装に準じた着物は「準礼装」と呼ばれている。女性の場合は訪問着、色無地、^{つけさ}付下げ等を着用する。紋は一つから三つ付けられるが、近年は紋を付けない場合もある。男性の場合は色紋付（黒以外の紋付きの長着に羽織袴）や、一つ紋又は三つ紋の紋付きを着用する。

上記以外、普段において着物を着装する場合は、小紋、紬、お召^{めし}、また木綿や麻等の着物が着用される。帯は染めの帯や名古屋帯、半幅帯等を合わせる。

・その他の和装

祭り^{はっぴ}で着る法被や、旅館等で着る浴衣^{ゆかた}やどてら等、限定的な機会や場面において着用されている和装もある。

・特定の職業における和装

能や狂言、歌舞伎といった伝統芸能に携わる者や、いわゆる宗教者である神主や僧侶等をはじめとして、各分野において身に付けられる特定の着物（装束）もあり、これらは各分野においては欠くことのできない和装の一つである。

なお、本調査では、一般の人が普段の時や、冠婚葬祭等の特別な機会に着物を着装することに焦点を当てることとし、上記に挙げた限定的な機会に行われる和装及び特定の職業において着装される装束や、それらに係る着装の技法等については取り上げない。

担い手について

和装の担い手について

和装の担い手については、普段の日や特別な日等に着物を着装するような者や、自分や他者に着付けることのできる者を、広く和装を担う者として捉えることができる。

また、着物や帯、小物類等の和装に関連するモノの製造に係る者をはじめとして、呉服店や卸売業者、リサイクル着物店等の着物の流通に係る者、着物の着付けや、着付けの技術の指導を行うことを専門とする者、着物のレンタル業を営む者や、着物のクリーニングやメンテナンス等を専門とする業者等、和装産業に係る者として和装を担う者がいる。

着付けの技術に係る担い手について

着物は、着物を着装する人が技術や知識を学んでいくことで自ら着装が可能である。その一方で、他者に着物を着付ける技術を有する者がいる。

他者に着物を着付ける技術を有する者としては、着付けに関する専門的技術を有する「着付け技能士」資格を所有する者や、「着付け技能士」以外の認定資格を有する者、資格は所有していないがいわゆる「着付け師」としての業務に従事している者、業務は行っていないが他者へ着付ける技術を持っている者に分類できる。

なお、^{えもんかた}衣紋方と呼ばれ、束帯等の装束の着装を専門とする者（高倉家と山科家）もいるが、本調査の対象とする和装ではないためここでは取り上げていない。

・着付け技能士

着付け技能士は、平成 21 年（2009）に技能検定試験の対象職種となったもので、着付けに関する知識と技能を問う試験（学科・実技）に合格した者は、等級により「1 級着付け技能士」又は「2 級着付け技能士」を名乗ることができる。近年の着付け職種技能検定の合格者数は以下のとおりである。

表 1 着付け職種技能の検定合格者について

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
1 級合格者	555 人	491 人	465 人
2 級合格者	218 人	269 人	303 人

出典：一般社団法人全日本着付け技能センターHP（URL: <http://www.kitsuke.or.jp/profile.html>）に掲載されている、平成 29 年度から令和元年度の検定事業に関する報告書を参照し受託事業者が作成した。令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症拡大により中止、令和 3 年度は学科試験のみの開催となった

・着付け師

上記の技能士資格を有していない場合においても、相応の知識と技能があれば、他者に着付ける業務に従事できる。知識と技能を身に付ける場としては、大学や専門学校、着付け教室、カルチャーセンター等があり、業務の場としては着付け教室、呉服店、美容院等が挙げられる。着付け教室での指導員は、助手等から始め、指導技術やノウハウを身に付けてから講師となる場合が一般的である。こういった者の中には、和装団体が独自に設けている資格制度に依拠する着付けに関する資格を有している者もいる³。

以上のような着付け技能士や着付け師が業務に従事する場の一つとして着付け教室が挙げられる。着付け教室では、着物の着方や着せ方だけでなく、着物の歴史や種類、立ち居振る舞い等も教えるところが多い。個人で行う教室や地域のサークルとして行われる教室から、複数のカリキュラムを持つ大手の教室まで様々なタイプがあり、大手教室では着付けのプロフェッショナルを養成するコースを有するところもある。

3 厚生労働省 職業情報提供サイト「きもの着付指導員」
(URL: <https://shigoto.mhlw.go.jp/User/Occupation/Detail/423>) 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

和装に係る団体について

上記で挙げた着付け技能士や着付け師、また着物等の製造に係る者をはじめとした和装に専門的に係る者については、団体を形成して様々な活動を行っている。

令和元年度に和装に係る団体へ行ったアンケート調査では、和装文化の普及啓発を目的とした団体、着物の着付けや和裁等を専門とする者や、それらの専門的な人材を育成する学校等によって構成されている団体等が活動を行っていることが分かっている⁴。

和装文化の普及啓発を目的とした団体には、全国規模で活動を展開しているところもある。全国規模で活動を行っている団体には、団体会員として着物や絹糸、染色、織物の製造業や販売業、着付け等の指導者育成を行う団体等、和装産業に係る団体が所属しており、和装等の文化に関する調査研究や、イベント等を通じた普及啓発活動を行っている。

着物の着付けや和裁等を専門とする者や、それらの専門的な人材を育成する学校等によって構成されている団体等、特定の業種による団体については、先の全国規模の団体に所属し和装の普及活動に参画しているほか、それぞれの団体の活動として、専門的な人材の育成等を目的とした啓発活動を行っており、国家検定の認定機関としての機能を有している団体もある。

これら和装に係る団体では、その多くが学校での和装教育の実施、一般向けの着物の着付け講座の開催、着付け指導者育成のための認定制度や技術指導の実施等、和装分野の振興に向けた活動に取り組んでいる。また、広報活動としては、広報誌の発行、SNSでの情報発信、ホームページ開設等が行われている。

和装に係るワザについて

着物の着付けに係る一般的な技術及び知識

・着付けの仕方について

着物を自ら着装する、又は他者へと着装する場合、着物や帯等の特徴を踏まえた着装の技術や、着物を着装する場合の状況や季節に応じた取り合わせに係る知識が必要となる。

着物のサイズ区分は洋服ほど明確ではないが、着る人の体格に適した着用を用意し、着装する体格に合わせて、前合わせの幅やおはしよりの長さを調整して着付ける。体格に応じて適切に調整することで、着崩れしにくくなる。

着物を着付ける際に用いる下着には、肌襦袢^{じゅばん}、裾除け^{すそよ}、長襦袢等があり、いずれも着物と同様に、着る人の体格に合わせたものを用意し、襟の合わせ具合や巻き付ける幅を調整し、紐で固定して着付ける。長襦袢も体格や着物に合ったサイズのもを着用することで着崩れしにくく着付けることができる。

平面で構成される着物を立体的な人体に美しく着付けるには、体型の凹凸を少なくする必要がある。特に礼装において女性が着物を着装する場合は、一般的に、腰や臀部上部のくぼみ等にタオル

4 『令和元年度生活文化調査研究事業報告書』文化庁地域文化創生本部事務局、令和2年

や補正パッド等を当てて体型を補正することが多い。この際、補正の必要な箇所や分量は着る人の体型に合わせて調整する必要がある。胸のふくらみを目立たなくさせる和装ブラジャーを着用することもある。また男性の場合も、タオル等を用いて補正をして着崩れを抑えるように調整を行うことがある。

・着物の取り合わせ

上記のように着物を着付ける際に、着崩れしにくく、見た目良く綺麗に着付ける必要がある場合は、着物を着装する人の体格に応じた着物や肌襦袢、長襦袢等を用意する必要がある他、着付ける際には、体格等に応じて着崩れしにくく、なおかつ動きやすく着付けるための工夫やコツ等の着付けの仕方がある。

この着付けの仕方に加えて、冠婚葬祭等に出席する際などに着物を着装して行く場合には、先述した格と関係して、着用の際に仕来り^{しきた}や規範が重視されていることから、場面や状況に応じた着物の取り合わせに係る知識も必要となっている。長着、帯、小物等それぞれ、着用する場面にふさわしい格に応じた、材質や色彩、模様、帯の結び方等を選択して着装する必要があるほか、着物や帯の生地や産地、模様、紋等、和装全体に関する知識が必要となる。

加えて、着物の着こなしには季節感も重視される。季節ごとに適した生地や仕立ての着物を着ることが基本となる。原則として、10月頃～5月頃は裏地のついた^{あわせ} 袴、6月、9月は裏地のない^{ひとえ} 単衣、7、8月の盛夏には透け感のある薄物を着用する。近年は以前より気温が高い期間が長いこと、状況に合わせて融通させることもある。

また、明確な季節感のある柄を着用する際には、柄が季節に合っているかどうかにも考慮の対象となる。和装においては季節の先取りが基本となり、着物の柄となっている植物や風物等に関する知識も必要とされる。着物と同じように帯揚げ、帯締め、半衿、あるいは草履、袋物等の小物についても、色や素材、季節感等を考慮して取り合わせる必要がある。

現代では、和装を日常では行わなくなっているため、着物を着装するための基本的な知識や技術を持たない人も多くなっている。このため、特に冠婚葬祭等、改まった場に着物を着装していく必要がある場合、美容院や着付け業者等、専門的な技術を有している者に依頼して着装することが多くなっている。

着付け技能士に求められる技術と知識

上記に示したのは、一般的な着物の着付けに係る技術や知識であり、普段から着物を着る者が上記の全てを網羅的に把握しているわけではない。一方で、他者に着物等を着装する専門的な技能を有する技能士や着付け師の場合、上記に示した着物の着付けに関する技術や知識を的確に身に付けていることが資格取得の要件となっている。

着付け技能士の資格取得に際しては、学科試験及び実技試験が設けられている。まず、学科試験の内容は、着物の知識及び名称、男女の着物の違い、着物のたたみ方、繊維の知識、織物や染物の知識、着用時季や着物の格、帯の種類、小物の用途、着物・帯・小物の合わせ方や着付けの心得、美容

師法等関係法規に関してなどである。

次に実技試験の内容は、2級については浴衣、街着、付下げ、訪問着、付下げ訪問着について定められた時間内で着付けができることが、1級についてはそれらに加えて色留袖、黒留袖、中振袖、羽織袴について定められた時間内で着付けができることが求められる⁵。

以上のように、着付け技能士の検定に求められる、着物の着装についての技能や知識は、一般的な着物の着付けに係る技術や知識を全般的にかつ的確に習得していることが求められ、特に着付けに関しては、普段着る着物から礼装まで幅広く着付けることが求められている。

和装に係るその他の技術

上記の着付けに係る技術以外としては、和装を仕立てる技術やメンテナンスに係る技術がある。

和装を仕立てる技術については、和服裁縫（和裁）と呼ばれ、着物が日常着として着装されていた頃には家庭の中でも和裁が行われていた。現在でも、着物を日常的に着用する者の場合は和裁の技術を有している場合があるほか、専門的な技能として和裁を行う者の中では、和裁技能士等の資格を有している者がいる。

また、着物や帯のメンテナンス技術については、^{しつかい}悉皆事業者や関係する技術者（和裁士や染色技能士等）が、専門的な技術を有している。

〈主要参考文献〉

- ・牛腸ヒロミ・布施谷節子・佐々井啓・増子富美・平田耕造・石原久代・藤田雅夫・長山芳子（編）『被服学事典』朝倉書店、平成 28 年
- ・全日本きもの振興会監修『着物の教科書』新星出版社、平成 30 年
- ・『令和元年度生活文化調査研究事業報告書』文化庁地域文化創生本部事務局、令和 2 年
- ・金融財政事情研究会発行『第 14 次 業種別審査事典』きんざい、令和 2 年

5 一般社団法人全日本着付け技能センターHP（URL: <https://www.kitsuke.or.jp/index.html>）に掲載されている、1級及び2級の試験科目及びその範囲並びにその細目を参照した。
（URL: <https://www.kitsuke.or.jp/img/shikenshousai.pdf>） 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

1-3-2 和装の歴史

和装前史～和装としての成立

呉服や唐服等の着用

古墳から発掘される人物埴輪等の史資料から、5世紀以降（古墳時代後期）の人々が、貫頭衣風の衣服や、中国北方の胡人の衣服に似た形態の「胡服」といわれる上下二部式の衣服等を着用していたことがうかがえる。飛鳥時代の衣服も胡服系の衣服が中心だったが、天武11年（682）に天武天皇が衣服・髪型の唐風化に着手し、その後も公式な場においては襦衣、長紐、括緒袴の着用を定めるなど徐々に唐風化が進み、奈良時代には唐風の衣服が浸透した。養老2年（718）の養老令においては唐の制度に倣う形で衣服令が定められ、礼服・朝服・制服という形で身分や場に応じた服装が規定された。ただし、唐風の服装を基本としながらも、礼服の袴の上には褶ひらみを付けるなど、日本独自の衣類も取り入れられていた。

唐風から国風の服装への変化と場面に応じた着装

平安時代初期は唐風の影響が大きかったが、寛平6年（894）に遣唐使が廃止されると公的には大陸との交通が途絶え、文化の国風化が進んだ。衣服も唐風の影響を受けながら国風化が進み、平安時代中期以降の貴族社会において、男性の正装としては束帯が、女性の正装としては唐衣裳装束が着用されるようになった。束帯⁶は奈良時代の朝服を変化させた、身幅も袖口もゆったりした衣服である。一方の唐衣裳装束は、平安時代前期から新たに上流女性の間で着られるようになった桂うちき・うちぎをベースにしたものである。桂とは垂領（襟の前で左右を斜めに打ち合わせる形式）の広袖仕立ての衣服で、現代の着物より大きくゆったりしていた。上流女性は家の中では単袴、袴を履き、単桂に綿入りの桂を重ね着し、正装する際には、桂姿の上に唐衣を羽織り、裳を引き掛けた唐衣裳装束となった。桂を数枚重ね着するときには、その配色が工夫された。なお、これらの装束は現在でも宮中祭祀において着用されている。

平安時代以降から室町時代の服飾の変化

貴族階級における服飾と着方

平安時代には祭礼や年中行事等の宮中儀礼が確立し、それに伴って貴族の服飾の定型化が進み、束帯を着る場面や身分が分けられ、文官と武官でも異なる束帯を着用するようになった。束帯は礼服として、また昼の参内時の衣服として着用され、宿直の際には衣冠⁷（宿直装束）が着用された。衣冠は行幸のお供や葬儀の参列にも着用され、さらに平安時代後期には昼の参内にも着用されるよ

6 束帯は、袍、襖子、半臂、汗衫、柏、表袴、中袴、袴から構成される服装である。

7 衣冠は束帯から半臂や下襲を除いた活動的な衣服である。

うになった。また、束帯の略式の装束に布袴^{ほうこ}⁸があり、私的な行事や上級貴族の参内の際に着用された。日常着としては、上流貴族では直衣^{のうし}⁹や狩衣^{かりぎぬ}¹⁰が着用された。下級貴族や武士は指貫^{さしぬき}の代わりに狩袴を着用した。

女性の正装及び出仕服としては、この時代も引き続き唐衣裳装束が着用され、桂を重ねて着る重桂によって華やかさが演出されていた。五枚重ねが基本であるが、多い時では15～25枚も重ねられ、配色に趣向が凝らされた。日常着は単と長袴の上に桂を数枚重ねた桂姿で、場面に応じて、この上に小桂^{ほそなが}や細長が重ねられた。

平安時代後期には男女貴族とも装束の一番下に、防寒用として袖口の狭い小袖^{こそで}を着るようになる。なお、庶民は平安時代を通して小袖を着用していたと考えられている。

武家の服飾とその変化

武家でも平氏は公家の服装に基づいた服装をしていたが、鎌倉幕府の開幕以降は武家独自の装いが定められていった。礼装としては直垂^{ひたたれ}が着用され、上級武士が将軍に随行する際などには直垂帯剣姿となった。上級武士が改まった席で着用するものとしては狩衣・布衣^{ほ い}もあり、これらは袴の色や裏地との組み合わせ等が自由に工夫できた。なお、下位の武士は文様のある狩衣や上質の絹の裏地のついた狩衣を着用することを、最初の武家法である「御成敗式目」の追加法の中で禁じられていたことから、この時代、高位でない者の中でも豪華な狩衣を着ていた者がいたことがうかがえる。軍装は身分により、甲冑^{かつちゅう}、腹巻、鎧直垂等に分かれた。

上流武家の女性は、鎌倉時代前半には袴に桂を重ねた公家風の装いをしていていたが、鎌倉時代後期には小袖が表衣化するという変化が生じた。小袖を桂の下に着るのではなく、小袖に袴を履いたり小袖袴の上に小袖を打ち掛けたりなどの着方がされるようになった。さらには袴が省かれ、小袖を何枚か重ね、一番上に豪華な小袖を打ち掛けた打掛姿や、打ち掛けた小袖の肩を外して腰巻き風にする腰巻姿が定着し、室町時代には武家女性の礼装となっていた。

庶民は男女共に小袖を中心に着用していた。『一遍上人絵伝』には、小袖に小袴、着丈や袖丈の短い小袖の着流し、直垂に小袴等の庶民の姿が描かれている。室町時代に至ると、直垂の地質や文様が豪華になり、武家の最高の礼装となった。直垂の袖をつけない形式の肩衣^{かたぎぬ}も登場した。戦国時代に小袖に肩衣と袴を着る肩衣袴が広がり、小袖の存在感はこの頃から更に増していった。軍装は鎧直垂に代わり、華やかな陣羽織が登場した。中国や西欧諸国からもたらされた染織技術や服飾品の影響を受け、着物や陣羽織に斬新な意匠が登場したのもこの頃である。

8 布袴は束帯装束の表袴を指貫に代えた衣服である。

9 直衣は烏帽子、直衣、粕（桂）、単、指貫、下袴で構成される服装である。

10 狩衣は烏帽子、狩衣、衣、指貫から構成される服装である。

江戸時代の和装

表着としての小袖の発展とその着方

江戸時代初期には武士、町人の服装は小袖が中心となり、身分、男女の区別なく着用されるようになった。身分の違いは衣服の形態ではなく、材質や意匠で区別されるようになった。

江戸時代初期までの小袖は、身幅が広く袖幅が狭く、また袖口も小さい形態という特徴が見られ、男性も女性も「おはしより」をせずに「^{ついたけ}対丈」に着付け、細い帯で締めて着用した。その後、小袖の形状は次第に身幅が狭く、袖幅は広がっていき、元禄年間（1688～1704）には女物については身丈も長くなって現代の着物に近い形となった。屋内では裾を引いて、外出時にはたくし上げたり、^{つま}褌をとったりして着用したが、たくし上げたりする際に片手が塞がって不便であることから、「抱帯」「しごき帯」と呼ばれた細い紐状の帯で前身ごろが端折られるようになり、この着装法が現代のおはしよりの元となった。なお、着物をたくし上げて着る着装法は平安時代の旅装である「壺装束」にも見られるが、おはしよりとの連続性はない。幕末には室内でも前身ごろを端折って着付けることが一般化するが、着装法はまだ固定化せず、腰帯の結び紐を前に出すなど様々に着装されていた。

また、小袖の袖が身ごろに縫い付けられた部分の少ない「振袖」は、室町時代以前において子供用の小袖に行われていた仕立て方であったが、江戸時代になると、元服前の男性や未婚の娘にも「振袖」をした小袖が着られるようになった。若い娘が身に付ける「振袖」の丈は時代とともに長くなり、18世紀半ば1mを超える大振袖も登場した。この大振袖は上流武家や富裕な町人の娘が着用したほか、中流層の町人の娘の晴れ着としても用いられた。

武家の服装

江戸時代には幕府により武家の服飾規定が整えられ、着る場面や身分により異なる衣服が用いられるようになっていった。男性の礼装としては^{かみしも}袴が用いられ、袴の内に着る小袖についても、場面や身分により着用できる色や素材が決められた。武家女性の服装も季節、身分、年齢、紋様等、また、礼装、略装、平服等でそれぞれ細かく規定された。

外着として羽織が普及し、小袖に羽織袴を着用する形式が武士の日常着かつ庶民の礼装となった。羽織にも格、用途別に様々な種類があり、また、丈の長さの流行もあった。私的な略装として小袖に羽織を羽織るだけの着流しも行われた。

町人の服装

町人の衣服の素材は^{けんちゅう・きぬつむぎ}絹紬、木綿、麻布に制限されていたが、町人が豊かになるとともに^{しゃし}奢侈となり、独自の服飾文化が発展した。町人の間に金紗、刺繍、総鹿子、友禅染等の豪華な服が流行すると、それを抑えるための奢侈禁止令が度々発令されたが、豪華さを追う風潮は元禄頃まで続いた。江戸時代後期に入ると質実な風潮となる。

多くの庶民にとって新しい着物の購入は贅沢なことで、木綿や麻で自ら仕立てたり、古着を買っ

たりして着物を調達していた。古くなった布は裂いて再び布に織り上げる「裂織^{さきおり}」という手法で再利用されることもあった。

帯の変化と付け方

江戸時代初期までの帯幅は1.5寸～2寸（約6～8cm）と狭かったが、17世紀半ばから女性の帯幅は広くなり、丈も長大化していき、17世紀末には長さは1丈2尺（約4.5m）、幅は9寸（約34cm）にも達した。

また、江戸時代初期までは帯結びの位置は前や後ろ、脇等、様々な位置であったが、歌舞伎俳優考案のものをはじめ装飾性の高い結び方が流行するとともに、後ろ結びが広まっていった。例えば、歌舞伎役者で女形の初代上村吉弥^{かみむらきちや}が考案した「吉弥結び」や、同じく女形の水木辰之介の「水木結び」などがあり、現在も行われている「お太鼓結び」のような結び方も登場している¹¹。一方、男性の帯幅は、江戸時代を通じて特に大きく変化していない。

明治・大正・昭和時代の服飾の変化

洋装の導入に伴う和装の変化

明治時代以降、近代化政策として洋装化が進められると、まず公的な立場の男性の服飾に、次いで女学校の制服にも洋装が取り入れられていった。男性では和装に西洋式の帽子を被る、着物の下にワイシャツを着てステッキを持つなど、女性では毛織物で仕立てたコートを着物の上に着る、女学生が新しく考案された、動きやすいスカート状の行灯袴^{あんどんばかま}といわれる女袴に編み上げ靴を合わせる、また、ショールや洋傘といった洋装の小物や洋服を取り入れた和洋混合様式が流行した。

また、西洋の技術の導入が進み、明治7年（1874）にはジャカード（ジャガード）機が導入されたことを機に、全国の紋織物の産地で機械化、量産化が進展していった。加えて、化学染料を用いた型友禅（写し友禅）の手法が開発されたことで、模様入りの絹の着物の量産化と、ある程度の低価格化も実現した。

羅紗^{らしや}、モスリン（メリンス）、セル（サージ）等の毛織物の国産化が本格化するに従い、モスリン、セルは着物にも用いられるようになった。モスリンにも型友禅の手法で模様を付けたことで、庶民も華やかな模様の着物を着られるようになった。

このように染織技術等の進展が進む一方で、明治時代後期にはアール・ヌーヴォー様式に影響を受けたデザインの着物が登場したほか、呉服店から発展してできた百貨店が、着物の新しい流行の発信地となっていった。

なお、明治時代中期以降に、着物の裾を持ち上げ、帯にたくしこむ「おはしより」をして着付けることが一般化していった。明治28年（1895）の『衣服と流行』には、おはしよりをするときに「腰

11 青木和子「「お太鼓結び」の歴史的変容についての実践的研究」（『山野研究紀要』Vol.28・29、山野美容芸術短期大学、令和4年 p.1-13）

帯」と「下締」を用いることが記されている。腰帯は現在の腰紐、下締は伊達締めと同様の役割を持つ用具である。当時のおはしよりは帯の下に大きな袋が飛び出たような様子をしており、改良すべきものと捉えられ、雑誌で改良案が募集された。この雑誌の記事には「ハシヨリ」と記載されており、当時はまだ「おはしより」という名称は一般化していなかったことも見てとれる¹²。なお、礼装は、現在の和装の結婚衣装も同様であるが、着物の裾を引き摺った状態で着装されていた。

第一次世界大戦後には短いスカートに断髪という摩登ガールのファッションが登場したが、これは一部の都会の女性が身に付けるに留まり、一般女性の衣服は着物が中心だった。この時代の変化として、着物の帯はそれまでより高い位置で結ばれるようになったほか、胴に巻く部分を半幅に仕立てた名古屋帯が考案され、結びやすさ、軽さにより広く普及した。また、片面を黒^{くろじゆす}縺子や黒ビロード、もう片面を模様染にした昼夜帯も流行した。

平織の絹織物で、主として普段着として着用されていた銘仙は、それまで縞や^{かすり}縹模様が中心だったが、染色技術の発展により複雑な模様の表現が可能になった。アール・デコ調のデザイン等も導入されファッション性が高まったことで、大正時代から昭和時代にかけて銘仙人気が高まり、外出着として着用されるようになった。モスリンやウールの着物も量産化により低価格化が実現した。

普段着と富裕層向けの着物の中間の位置に当たるこれらのカジュアルな着物は、この時代の中間層の成熟に伴って登場したものである。こういった一般市民の外出着の需要の増加により、和装市場は拡大していった。

昭和時代の和装

男性の服装に関しては、正装としては洋装が定着していたが、日常着としては第二次世界大戦前までは着物も一般的に着用されていた。女性は一部を除き、一般的には外出着も日常着も和装が中心であり、仕事で洋服を着る女性も自宅では着物を着用することが多かった。なお、昭和時代初期にはおはしよりを調整して着付けることで、腰回りの太さや背の低さなど、体型を補正する意識が生まれていた。

戦時中には男女とも標準服が定められた。昭和 15 年（1940）に定められた男性の標準服は上衣とズボン等からなる軍服のような洋装であった。一方、昭和 17 年に定められた女性用の標準服はスカート式、和服式、もんぺ式の 3 種あり、和服式は従来とは異なる二部式の着物であった。パンツ型のもんぺ式が広く普及したことが、戦後、洋装化が急速に進んでいく下地になったという見方もある。

戦後は洋装の定着が本格化していくが、一気に移行したわけではない。戦時中に不足していた衣料への需要を満たすため、大衆品を中心に、戦後も着物市場は成長した。日本化繊協会の調査によれば、昭和 32 年（1957）時点で、40 歳以上の女性の約半数は家庭でも外出時でも和装を着用し、40 歳未満でも約 4 分の 1 が外出時には和装を着用していた。このように日常的に着物が着用されていた昭和 30 年代半ばには、手入れが簡単な化繊やウールの着物が流行、合成繊維メーカーも積極的に参入するなど、着物市場は日常着を中心に拡大した。

12 『流行』第 11 号 流行社、明治 33 年

昭和 40 年代になると、製造卸売り業者の台頭による大量供給体制の確立によって、安価な既製品の洋服が供給されるようになった。これにより洋装化が進み、日常着としての着物の需要は急激に減少していった。一方、人々の生活が豊かになったこともあり、成人式、正月、結婚式等で晴れ着として着用される絹織物の需要は大きく伸びた。また、日常的に着物を身に付けなくなった反面、高価な着物を晴れ着として身に付け所有することにも価値が置かれた。昭和 41 年（1966）から 53 年（1978）にかけての西陣織物産業において、正絹を原料とする製品比率が帯地で 69.6%から 99.0%に、着物で 44.9%から 79.5%に高まっていたことから、限定的な高級品市場が形成されていたことが分かる¹³。

着物の非日常着化が進むに伴って、着物は一人で着ることができないものへとになっていき、着物の着付け方やマナーを教授する職や、着付け方を学ぶための学校、いわゆる「着付け教室」という新しい業種が登場した。また、資格制度等の整備が進むにつれて、着付けに関する技術や知識等、着付けに関する様々な規範が言語化されていった。加えて、和服の着こなしをしやすくするための補助具が開発され普及し始めたのもこの時期である。

普段着として着物を扱ってきた頃には各家庭において行われていた、着物の直し方や仕立て直し等の知識や技能も、次第に一般家庭から失われていった。

〈主要参考文献〉

- ・大橋又太郎編『衣服と流行』博文館、明治 28 年
- ・小池三枝、野口ひろみ、吉村佳子『概説日本服飾史』光生館、平成 12 年
- ・橋本澄子編『図説 着物の歴史』河出書房新社、平成 17 年
- ・増田美子編『日本服飾史』東京堂出版、平成 25 年
- ・福田博美「『おはしより』形成の過程」（『文化学園大学・文化学園短期大学部紀要』49 文化学園大学、平成 30 年 p. 9-16）
- ・島田昌和編『きものとデザイン』ミネルヴァ書房、令和 2 年

13 吉田満梨「戦後～現代のものづくりと市場創造に流通事業者が果たした役割」（島田昌和編『きものとデザイン』ミネルヴァ書房、令和 2 年）。吉田は、吉田敬一「西陣先染織物業の産地構造分析」（『和装織物業の研究』ミネルヴァ書房、昭和 57 年）の分析を参照し、当時の西陣織物産業の状況について触れている。

1-3-3 和装の国内外における文化的、社会的位置付けや評価

現代社会における和装

洋装の一般化と着物離れ

昭和40年代以降、安価な既製品の洋服が大量供給され、女性の社会進出が進んだこともあり女性の洋装が一般化した。成人式、正月、結婚式等で晴れ着として和装をする習慣は広がったが、日常着としての着物離れが進んだ。晴れ着を所有するブームは平成時代の初頭まで続いたが、バブル経済崩壊以降、年間支出も急激に下落した。

昭和50年（1975）から令和2年（2020）までの、1世帯当たりの「和服」の年間支出の推移は以下のグラフのとおりである。

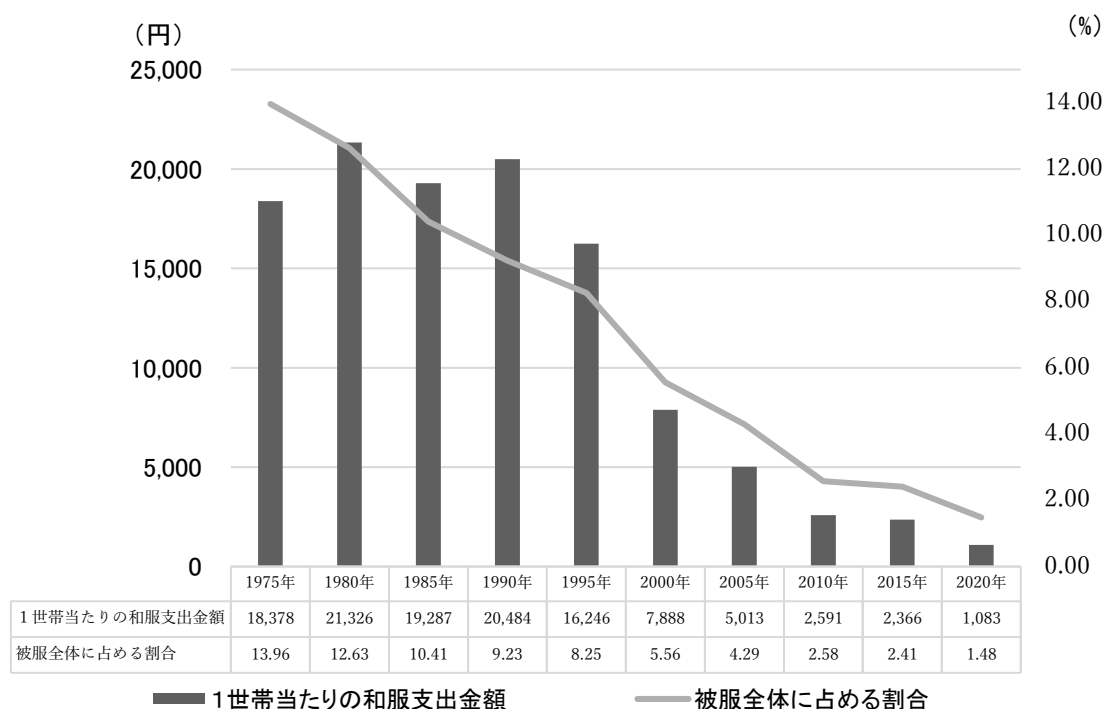


図1 1世帯当たりの「和服」支出金額と被服支出金額全体に占める割合の推移

出典：昭和50年（1975）から令和2年（2020）の「家計調査」（総務省統計局）
（URL：<https://www.stat.go.jp/data/kakei/index.html>）を参照し受託事業者が作成した

和装業界の新しい動き

昭和時代末期から着物産業界に新しい動きが出てくる。1980年代には「ニューきもの」といわれる低価格でファッション性の高い合成繊維の仕立て上がり着物が登場しブームになった。

平成時代に入ると、チェーン展開による低価格化を図っていた小売店が、伝統的なデザインとは異なるカラフルな浴衣を発売し、浴衣ブームの火付け役となった。これは一過性のブームに終わら

ず、現在では、浴衣は花火大会やお祭りで着用される定番のファッションとなっている。

また、平成 10 年代には複数の小売店がリサイクル品やポリエステル着物を扱う新業態の店を商業施設に出店し、ファッションの選択肢の一つとしての和装を提案した。

その後も、和装と洋装の融合ファッションや海外デザイナーとのコラボレーション、機能性の高い着物など、新しい提案が行われている。明治時代から昭和時代初期頃までの着物を扱うアンティーク着物店が増加したのもこの頃で、洋服感覚での自由な和装の着こなしが見られ始めた。この流れを受け、現代では長着をブラウスやニット、スカートと組み合わせたり、ブーツやパンプスを合わせたりする和洋混合の着用方法が若い世代に広がっており、現代の和装の一つの特徴となっている。

和装を着る機会の変化

平成 27 年（2015）の経済産業省の調査によると、着物を年に数回以上着る人の割合は 20 代女性が最多（15.8%）で、年代が若いほど今後の着用意向も高くなっている¹⁴。晴れ着としてではなく、日常的なファッションとしての着物に関心が寄せられ、和洋折衷など、差別化されたファッションとしての着用例も増えている。

レンタル着物の盛況

和服に対する年間支金額は減少傾向にあるが、その一方で、「家計調査」における被服賃借料は、近年増加傾向にあり¹⁵、成人式や七五三、結婚式などの冠婚葬祭の折に着物を借りて着付けてもらう貸衣装やレンタル着物の需要は拡大しているものと考えられる。平成 27 年（2015）の経済産業省の調査によれば、観光地・旅行先で着用する人は 20 代女性の 6.7%に上っておりレンタル着物の需要があることが分かる¹⁶。また、近年は、安価なクリーニング事業者の登場によりレンタル料金の低価格化が実現するという、新しい和装のエコシステムが生まれつつある。

過去 30 年間、縮小を続けてきた着物市場であるが、現在、ほぼ下げ止まったという指摘もある。インバウンド需要の高まりの中で新規開業した高級ホテルでは内装等に和装の素材を用いることも増え、和装業者の売上は平成 20 年代には堅調だった。また、最近では人気ロックミュージシャンが自身の名を冠した着物ブランドを手がけるなど、新しい話題も出てきている。

14 和装振興研究会『和装振興研究会報告書』経済産業省製造産業局繊維課、平成 27 年
(URL:https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/seizou/wasou_shinkou/pdf/report01_01_00.pdf) 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

15 総務省統計局「和服に関する支出―家計調査結果（二人以上の世帯）より―」
(URL: https://www.stat.go.jp/data/kakei/tsushin/pdf/2020_02.pdf) 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

16 和装振興研究会『和装振興研究会報告書』経済産業省製造産業局繊維課、平成 27 年
(URL:https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/seizou/wasou_shinkou/pdf/report01_01_00.pdf) 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

和装関係者への評価

和装に関する評価については、和装の普及・振興において功績があったとする人物が表彰を受けていることから見て取ることができる。

文化庁が実施する文化庁長官表彰では、小泉清子氏（鈴乃屋創業者、着物研究家）が平成 5 年度（1993）に、市田ひろみ氏（和装評論家、エッセイスト、日本和装師会会長）が和装技法の研究や指導者養成等に努めたとして平成 28 年度に、和装に係る後進の育成や団体の要職にあつて和装の普及・振興に努めた安田多賀子氏（和装文化研究家、装賀きもの学院院長）が平成 30 年度に、和装団体の長として和装の普及・振興に努めた近藤典博氏（元 NPO 法人和装教育国民推進会議議長）が令和 2 年度に、それぞれ文化庁長官表彰を受けている。

表 2 和装関係者の表彰一覧

表彰年度	氏名	主要経歴
平成 5 年 (1993)	小泉清子	鈴乃屋創業者、着物研究家
平成 28 年 (2016)	市田ひろみ	和装評論家、エッセイスト、日本和装師会会長
平成 30 年 (2018)	安田多賀子	和装文化研究家、装賀きもの学院院長
令和 2 年 (2020)	近藤典博	元 NPO 法人和装教育国民推進会議議長

海外からの評価と国際発信

外国人の和装への関心や評価

外国人から見た和装への評価については、来日した外国人によって著された書籍や、ヨーロッパでのジャポニスムにおける着物の取り扱いなどからうかがい知ることができる。

元禄 3 年 (1690) に来日したエンゲルベルト・ケンペルはその著書、“*Geschichte und Beschreibung von Japan*”（邦題：『江戸参府旅行日記』）において、江戸参府の際、献上品の返礼として将軍から絹の着物 30 枚、その他に約 90 枚の着物が贈られたことを記録している¹⁷。このうち、将軍下賜の着物 30 枚はオランダ本国に送られた。当時流行していた異国趣味とあいまって「ヤボンセ・ロッケン（日本の室内着）」として好まれ、上流階級のステイタス・シンボルとなった¹⁸。

明治 6 年 (1873) に来日したバジル・ホール・チェンバレンは、その著書“*THINGS JAPANESE*”（邦題：『日本事物誌』）で「衣裳 (Dress)」という項目を設け、男性・女性・子供が身に付ける着物やその着装方法、状況に応じた着こなしや決まりごとなどを詳細に記す中で、男女問わずその着こなしは「優雅」「衛生的」であること、女性の和装姿の素晴らしさを語っている¹⁹。

19 世紀後期になると、西洋各地で開催された万国博覧会等を通じて異国趣味が起り、着物が広く認知されるようになった。日本の着物地がドレスとして仕立てられたり、クロード・モネの《ラ・

17 呉秀三訳註『ケンペル江戸参府紀行』下巻 異國叢書第 9 巻、駿南社、昭和 4 年

18 深井晃子『ジャポニスム イン ファッション』平凡社、平成 6 年

19 バジル・ホール・チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌 2』平凡社、昭和 44 年

ジャポネーズ》のように絵画作品に着物が描かれたりもした。

20 世紀初頭にはフランス、イギリスを中心にモードにおけるジャポニズムが流行し、日本の文様はパリのオートクチュールやアール・デコのドレス、リバティ社のテキスタイル等に用いられた。抜き衣紋や打ち合わせ等の着物のディテールを模したファッションや、直線的な裁断の「キモノ・コート」、平面構成のドレス等も登場した。日本の呉服商により西洋向きにアレンジした室内着が輸出され、服の上から羽織る室内着として用いられもした。

20 世紀初頭になるとイギリス、フランス、アメリカに多量に着物が輸出され、日英博覧会が開催された明治 43 年（1910）の輸出量はイギリス向けに限っても 45 万枚近くに達していた。この頃のイギリスでは百貨店でも広く着物が販売されており、当時のイギリスのジャポニズム小説の中では、本物の着物を所有できると富裕階級であることが結びつけられて語られている。一方で、着物に描かれた文様や、着物の形状が参考とされた服のデザインが見られるようになるなど、デザイン等の面で影響があったことがうかがい知れる。

ジャポニズムの流行が終息して以降の海外における着物に対する評価についての文献は未確認であるが、例えば、日本航空は昭和 29 年（1954）の東京-サンフランシスコ線の就航時から平成 2 年（1990）まで、女性客室乗務員が和服でドリンク等を提供する「着物サービス」を実施しており、ここからは、着物に関するアメリカ人の持つイメージを踏まえたイメージ戦略が行われていた様子が見えてくる²⁰。このほか、近年ではフランスの俳優が自身の名を冠した着物ブランドを発表したり、海外ミュージシャンが着物に想を得た衣装を着用したりするなどの例が、現在に至るまで断続的に見られている。

近年は海外において、着物を紹介する大規模な展覧会が開催されている。平成 29 年（2017）にはフランスの国立ギメ東洋美術館で 3 か月にわたって「Kimono, Au bonheur des dames」展が開催され、江戸時代の着物の変遷とその着物に影響を受けたヨーロッパのモードについてなどが紹介された。これは松坂屋が収集した着物の中から 120 点を選び、海外で初公開したものである。

また、令和 2 年（2020）にはイギリスのヴィクトリア&アルバート博物館でヨーロッパ最大級の着物展「Kimono:Kyoto to Catwalk」が約 2 か月間開催され、江戸時代から現代までの日本の着物や、着物から影響を受けたデザイナーの作品まで、約 300 点が展示された。同展は着物に関する緻密な研究に基づいて、歴史と現代に関する主要テーマを取り上げて構成されたものである。同展は令和 3 年、スウェーデンのヨーテボリの国立世界文化博物館にも巡回した²¹。

なお、「Kimono, Au bonheur des dames」展及び「Kimono:Kyoto to Catwalk」展は国際交流基金が助成している。

20 中野嘉子「空飛ぶマダム・バタフライ～JAL 創業時のおもてなしと日本へのまなざし」
（東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センターウェブサイト論集 アジア学の最前線、平成 27 年
URL: <https://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/asj/html/066.html>） 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

21 大久保尚子「展覧会評 Kimono:Kyoto to Catwalk 展」(『服飾美学』第 67 号、服飾美学会、令和 3 年 p. 29-32)

和装の国際発信について

和装に関する国際発信については、国が行う日本文化発信の事業に関連して行われる取組や、和装に係る団体が主体となって行っている取組がある。

国が行う事業の中で、日本文化発信を目的の一環として、着物に係る取組が行われている。近年の例では、令和元年（2019）に開催された第7回アフリカ開発会議（TICAD7）の総理大臣主催晩餐会ではアフリカをイメージした着物を着装しての歓待等が行われたほか、着物ショーや着付け体験等も行われている。また、外務省が行う「在外公館事業」や「ジャパンハウス」等の発信事業においても、日本文化発信の一環として着物の展示や着付け体験等が実施されている。このほか、「日本の美」を国内外へ発信する『日本博』事業において、令和2年に東京国立博物館で特別展「きもの KIMONO」が開催されている。

次に、和装団体や自治体等が実施する取組がある。例としては、西陣織工業組合が持つ西陣織会館では昭和31年（1956）以来「きものショー」を1日7回、無料で開催している。この取組は、京都を訪れる観光客等へ、広く西陣織の着物が持つ魅力を発信することを目的として行われてきたが、インバウンド需要の高まった平成20年代には外国人観光客の観覧が大幅に増加した影響もあり、うち8割が中国、台湾からの観光客となっており、結果として着物の国際発信につながっている²²。

平成20年代には京都府、京都市、京都商工会議所が海外展開の支援事業を推進し、京都の和装関連メーカーで構成される団体が国内外への和装美のプロモーションに注力した。同団体は、ミラノにおいて着物や帯を発表したほか、「ニューヨーク・ファッションウィーク」に初めて本格的な出展を行っている²³。

平成24年（2012）から毎年開催されている国内最大規模の着物に関するファッション&カルチャーイベント「きものサローネ in 日本橋」では、和装関連ショップの出店や「東京きものコレクション」としてファッションショーも開催されているほか、着物の着付け体験等の取組も行われている²⁴。平成28年には日本文化を世界に発信するプロジェクト「東京江戸ウィーク」がスタートし、江戸の街並みが再現された会場で、和装ウェディングや和装のファッションショー等が開催されたほか、レンタルの浴衣を着装するような取組も行われている²⁵。

このほか、大阪市にある大阪くらしの今昔館では、館内に1830年代の大阪の町並みが再現されており、当時の暮らしを体験する取組として着物の着付け体験が行われており、大阪を訪れる外国人観光客が数多く着物体験に訪れている。

上記のように和装団体や自治体が行う取組において、国内外向けの着物関連のイベントが行われており、着物自体を見せるショーを中心としつつ、近年においては着物や浴衣の着付け体験等の取組が行われていることがうかがえる。

22 「『呉服の日』きもの振興を考える『東京五輪を前に、世界が和装美に注目海外でのきものショーや、和服の無形文化遺産を目指す動き』」（『そめとおり』745号、染織新報社、平成28年）

23 「『呉服の日』きもの振興を考える『インバウンド消費を取り込め』」（『そめとおり』739号、染織新報社、平成27年）

24 きものサローネ HP（URL:<https://kimono-salone.com>） 最終確認日：令和5年1月31日

25 「『呉服の日』きもの振興を考える『東京五輪を前に、世界が和装美に注目海外でのきものショーや、和服の無形文化遺産を目指す動き』」（『そめとおり』745号、染織新報社、平成28年）

〈主要参考文献〉

- ・深井晃子「モードのジャポニスム」(東京クリエイションフェスティバル実行委員会、京都服飾文化研究財団『モードのジャポニスム展(東京展)図録』平成6年)
- ・『『呉服の日』きもの振興を考える『インバウンド消費を取り込め』(『そめとおりの』739号、染織新報社、平成27年)
- ・サワシュ晃子「20世紀初頭の英国の大衆小説におけるキモノとキモノ姿の女性表象の変化ーキモノブームという視点からー」(『ジャポニスム研究』35号、ジャポニスム学会、平成27年)
- ・和装振興研究会『和装振興研究会報告書』経済産業省、平成27年
- ・「着物産業における革新と多様性のマネジメントー十日町市株式会社きものブレインの事例研究ー」(『事業創造大学院大学紀要』第8巻1号、事業創造大学院大学、平成29年)
- ・金融財政事情研究会発行『第14次 業種別審査事典』きんざい、令和2年
- ・島田昌和編『きものとデザイン』ミネルヴァ書房、令和2年

1-4 礼法の歴史と現状

1-4-1 礼法の概要

礼法について

今日言われている「礼法」とは、「礼儀作法」を意味した言葉として扱われている。「礼儀」は「相手を敬い、思いやる心」であり、その礼儀を身体動作によって表現するために必要となる一定の規範としての「型」と「作法」が伴ったものが「礼法」と考えられている。

心と形が伴った礼儀作法は、社会生活の秩序を維持し、人間関係を豊かにする上でも大事な行動様式や習慣として、小学校や中学校の道徳の授業において、挨拶の仕方や言葉遣い、礼儀がどのような意義を持つのか等の教育が行われている。

今日における礼儀作法に密接に関わりがあると考えられているのが、伝統的な儀式礼法としての「礼法」である。一般的には、武家が継承してきた礼法、いわゆる「武家礼法」のこととされ、武家の礼法は、儀礼や芸道、武道にも用いられる場合が多い。また、食事の作法、子供の成長にあわせた通過儀礼、しつけやたしなみ、接遇をはじめとしたビジネスマナー等、現在の日本人の営みの広範囲に影響を与えてきたと考えられている。

担い手について

現在、礼法を担う団体として、武家故実に基づいた礼法を継承している小笠原流がある。これら流派において、門人としてあるいは受講生として、礼法を学ぶ人たちもおり、これらの人々も現代において礼法を継承し担っているといえる。

また、上記の流派において伝統的な礼法を身に付けた者が、伝統的な礼法の普及・啓蒙を目的として団体を立ち上げ、個人や企業に対して礼法だけではなく現代のマナー等の教授や研修を実施している例も見受けられる。

礼法に係る流派

現在、武家故実に基づく礼法を継承する小笠原流の各流において、礼法の伝承や普及啓発等の活動が行われている。

小笠原流の流派の1つは、弓術・弓馬術・礼法を伝承しており、教場を設けて門人の育成を図り、神社への技芸の奉納を行うほか、礼法に関する啓発書の刊行や講座を開き、伝統的な技術の継承や啓蒙活動を行っている¹。

また、武家故実の礼法のみを継承している流派では、礼法に係る作法等を段階的に学び、教授者としての資格が得られる免許・資格制度を設けて礼法指導者の育成を図っている²。

1 『令和元年度生活文化調査研究事業報告書』文化庁地域文化創生本部事務局、令和2年

2 『令和元年度生活文化調査研究事業報告書』文化庁地域文化創生本部事務局、令和2年

その他の団体

武家故実における礼法では、起居進退や辞儀^{ききょしんたい}の仕方、所作だけではなく、熨斗^{のし}や水引、折形の扱い^{おりがた}方も礼法の一要素として位置付けられてきた³。そのうち、折形を伝えるために活動を行っている団体や、伝統的な水引の扱い方等を伝承している流派がある。また、武道における礼儀に特化した団体等も見受けられる。

礼法を構成する要素について

現在、小笠原家の各流派は、礼法に関する普及や啓蒙活動を継続的に行っており、啓蒙書が刊行されているほか、門人の育成を目的として教場や稽古場を開設したり、礼法の普及や啓蒙を目的としてカルチャーセンターで講座を開設したりしている。これらの啓蒙書や稽古場や講座での教授内容からは、礼法がどのような要素で構成されているかをうかがい知ることができる。

まず、啓蒙書を確認すると、礼法を生かし実践する上で、普段の姿勢や歩き方等の身体をどのように適切に扱うかが礼法の基本であるとしている。その上で、時・場所・自身が置かれている状況等に応じて、合理的、道徳的でありかつ美しい振る舞いを基本としていることが説かれている⁴。

次に、礼法の教授を行っている教室に関するウェブページや、カルチャーセンターの講座紹介ページには、主な教授内容として、以下のような項目が挙げられている⁵。

- ・姿勢や起居進退（立ち方・座り方・歩き方）、などの基本動作
- ・お辞儀、前通りの礼や行き逢いの礼
- ・お茶やお菓子、座布団等の進撤
- ・扇子や団扇、本等の進撤
- ・障子や襖、戸や扉の開閉
- ・訪問する側・迎える側としての心得
- ・部屋のしつらいやもてなしの心得
- ・熨斗袋や風呂敷の扱い方
- ・折形、水引、紐結びを含めた贈答の心得
- ・箸や碗、杯の扱い、食事の作法
- ・年中行事、慶事や弔事の心得
- ・書札礼^{しよきつれい}（書状や手紙の書き方）、料紙や硯箱の扱い
- ・言葉遣い 他

3 折形は、贈答品等を紙で包むため折り方やその包み方のことで、小笠原家をはじめ、伊勢家等の武家礼法の各家において継承されてきた。

4 小笠原清信『小笠原流』（学生社、昭和42年）、小笠原敬承斎『小笠原流礼法 美しいマナー心得』（PHP研究所、平成15年）及び小笠原清忠『日本人の9割が知らない日本の作法』（青春出版社、平成28年）を参照した。

5 小笠原流礼法 HP（URL:<https://ogasawararyu-reihou.com/lessons.html>）及び、NHK カルチャー（URL:https://www.nhk-cul.co.jp/programs/program_430765.html）を参照した。最終確認日：令和5年1月31日

また、各流から刊行されている礼法に関する啓蒙書に記載されている内容においても、起居進退、身体の回し方、辞儀（お辞儀）、食事に関する作法といった日常で必要となるような所作や動作が、礼法の基本として挙げられている。加えて、これら所作や動作を規範として、慶事や弔事、催事等それぞれの状況に応じた最適な礼を示すための知識や方法等が示されている。

この点について、辞儀の仕方を例として挙げると、頭の下げる角度や呼吸の深さにより礼の度合いや敬い方が異なるものとされている。これは、辞儀をする際の基本的な姿勢・動作・所作や作法があり、その上で自分と相手の関係において自らの立場がどのようなものであるか、自分がどのような状況に置かれているのかを適切に判断した上で、最適と思われる辞儀を行うことが相手への礼を示すことであるとの考えが説明されている。

以上のように、武家故実における礼法においては、適切な姿勢や歩き方等の基本的な身体の扱い方が礼を示すための根本としてあり、その根本を踏まえた上で、礼を示すために適切とされる立ち居振る舞い等の基礎となる身体動作や所作があることが分かる。

基本となる身体の扱い方―姿勢や歩き方、座り方―を身に付け、時や場所、自らが置かれている立場や状況を判断し、規範となる所作や作法をもって最適な礼の表現を行うことが、礼法の基本的な要素であることがうかがえる。

〈主要参考文献〉

- ・小笠原清信『小笠原流』学生社、昭和42年
- ・熊倉功夫『文化としてのマナー』岩波書店、平成11年
- ・綿拔豊昭『礼法を伝えた男たち』新典社、平成21年
- ・陶智子『日本人の作法』平凡社新書、平成22年
- ・小笠原清基『小笠原流 美しい大人のふるまい』日本実業出版社、平成27年
- ・小笠原敬承斎『小笠原流礼法入門 日本人のこころとかたち』淡交社、平成29年

1-4-2 礼法の歴史

有職故実と武家故実

有職故実の形成について

平安時代初期、朝廷の儀礼を記載した「内裏式」が法制として定められたのをはじめ、その後、『貞観儀式』や『延喜儀式』等の官選儀式書の編纂が進んでいくとともに、儀式次第や儀式を行うにあたり必要とされる作法等が形作られていった。これらは、後世の宮中において規範とされた。また、平安時代中期には、私選の儀式書が編まれるなど、家ごとの作法も確立していった。

朝儀や祭事、四季の行事等のあり方、行事によって必要とされる作法をはじめとした規範となる先例は「故実」と呼ばれる。そうした故実をもとに当時の公家たちが体系化して継承したものを「公家故実」と呼ぶ⁶。著名な「公家故実」の流派としては、主に藤原実資のさねすけ小野宮流と藤原師輔のもろすけ九条家流が挙げられる。実資は『小野宮年中行事』、師輔は『九条年中行事』といった儀式書を子孫のためにまとめており、この中には宮中におけるくじ公事や儀式に関する一連の行事次第と併せて、辞儀（しやぎ揖や謝座等）を行う場面等、行事に臨む際に必要な作法についても記載されている。

武家故実の形成と展開

貴族社会において形成・発展した「公家故実」がある一方、軍事貴族である源頼朝が鎌倉幕府を開き、武家政権が求心力を有した鎌倉時代の社会では、武家の故実も次第に形成された。

そもそも、有力御家人の多くは秀郷流藤原氏など京都の貴族の末裔であり、弓馬の術についても家ごとに故実があった。そのため、頼朝は配下の御家人たちに、騎射の作法などで統一した様式の実践が企図されるなど、故実の整理がはかられていった。

四代藤原頼経以降、鎌倉幕府の将軍位は摂家や親王の出身者で占められ、それに随行して京都から関東に下向する公家たちも多く現れた。その結果、関東の武家社会は、多くの公家故実・文化を摂取していった。

やがて、南北朝時代に京都で室町幕府が成立すると、公家と武家との直接的交渉の機会も増えた。また、3代将軍足利義満は内乱で弱体化した朝廷の復興に尽力し、自らも朝廷儀礼に参画するなど、公武にまたがって主導的役割を果たした。

そうした動向もあって、武家の行事や法令・制度・風俗・習慣・役職・儀式・装束等の知識が体系化され、「武家故実」⁷として形成されていった。特に、足利将軍に近侍して武家故実の形成に深く関わった伊勢家や京都小笠原家、数代の将軍に仕え武家故実を蓄積した大館尚氏おおだてひさうじなどが、武家故実の指導等を担う中心的な存在となり、多数の武家故実書を後代に伝えた⁸。室町時代に定められた武家

6 故実に関する知識体系やその知識を有する者を「有職」という。

7 武家故実には、礼儀作法や、弓術・馬術・軍陣など武家社会に関わる故実全般が含まれる。

8 武家故実書の例としては、伊勢家の伊勢貞頼が殿中での作法や心得などをまとめた『宗五大草紙』や、京都小笠原家の小笠原持長が弓の法式や故実をまとめた『射禮私記』や『流鏑馬次第』、大館尚氏が書札礼につい

儀礼の多くが江戸時代の武家社会でも規範になっていく。

江戸時代の礼法の庶民への広まり

武家への小笠原家礼法の広まり

戦国時代を経て、社会が安定に向かった江戸時代には、儀式等に関する故実やそれに伴う様々な作法等が重んじられるようになる。3代将軍徳川家光の頃になると、高家（伝統的な礼法の実技を中心とするもの。勅使のもてなしや日光代参等）と武家故実家（弓馬や軍陣における実践的な故実と幕府や主君の前における儀礼や作法等の故実を体系化し通じる者）の体制がとられ、前者には公家・武家の儀礼に詳しい吉良家・一色家等が、後者には信濃小笠原家（以下、単に小笠原家と称す）の子孫の二流（縫殿助家と平兵衛家）と伊勢家が旗本として就いた。

江戸時代は将軍家を頂点とする封建社会であり、諸藩は将軍家にあわせて、藩校等で口伝や礼法書の筆写等により武士階級に小笠原家の礼法を学ばせた。武士にとって、武芸同様、礼法は大切なたしなみとなり、近世初期に整備された小笠原家の礼法が全国的に広がることになった。

一般庶民への礼法の広まりと諸礼家の活動

社会の安定に伴って、商人をはじめ江戸時代の一般庶民も私塾や寺小屋、個人指導等で礼法を学ぶようになり、庶民の間で「小笠原流」の礼法が広く流布した。

江戸時代の一般庶民に広く礼法を広めた諸礼家の一人に、水嶋ト也⁹がいる。水嶋は、小笠原総領家が藩主であった豊前小倉藩の藩士・斎藤三郎右衛門久也から小笠原家の礼法を学んでいた。同人は、5代将軍徳川綱吉の子、徳松の髪置きの儀で名を挙げたとされ、江戸に礼儀作法の道場を開き、多くの門弟を抱えた。中でも、「女礼」（武家の女性向け礼儀作法）に着目し、男性向けの礼儀作法書を参考にしながら女性の礼儀作法を説いたことでも知られる。同人の門弟は「小笠原流」と称し、水嶋から教授された小笠原家の礼法を民間に教えており¹⁰、民間で行われてきた婚姻儀礼の形式等に小笠原流の影響が見られるものがある¹¹。

このような民間への礼法普及の一つの要因として、礼法という形のないものを一般の人々に伝授することによって収入が得られるようになったことが挙げられる。江戸時代には、藩校等で礼法を学んだ藩士が脱藩して諸礼家として礼法を生業にするケースが多く見られた。

加えて、印刷技術が発達した江戸時代には『和礼儀統要約集』など礼儀作法に関連する書物も多数刊行された。挿絵が豊富な本等も刊行され、代表的なものに文化6年（1809）の浮世絵師の

て記した『大館常興書札抄』等がある。このほか、信濃小笠原家では小笠原長秀が各種武家故実をまとめた『三義一統大双紙』や、今川家の今川了俊により弓や兵法、奉仕の心得などをまとめたものを抜書した『了俊大草紙』のように、各武家によってまとめられた故実書がある。

9 水嶋姓の表記は資料によって、「水島」「水寫」と表記するものもあるが、本稿では「水嶋」と表記する。

10 陶智子『近世小笠原流礼法家の研究』（新典社、平成15年）では、水嶋及び水嶋の門流を含めた、近世の諸礼家の系統と伝書について詳述されている。

11 村尾美江『小笠原流礼法と民俗—婚姻儀礼と熨斗—』（雄山閣、令和元年）p. 15—145

ほつきようぎよくざん 法橋玉山筆・石玉峯（いしだぎよくほう 石田玉峰）画による『〈児童躰方面図手引〉小笠原諸礼大全』があり、これは明治時代に入っても刊行されていた。ほかにも礼儀作法については、当時の教養書である「往来物」で取り上げられており、江戸を訪れた人の土産用として辻売り用に刷られたと考えられる『小笠原男女諸礼しつけかた』等も刊行されている。

西洋化の中での明治時代から昭和時代前半までの礼法教育

西洋文化の導入と礼儀作法の変化

明治維新後、衣食住の洋風化が進み、礼儀作法もそれに適応したものが求められた。それまでの日本の礼法は、座っていることを前提とした身体動作や作法や所作中心であったが、テーブルでのマナーや、「立礼（^{りつれい}立って行う礼、作法）」等の礼儀作法が加わっていく。これは西洋との交流等、日本の近代化に応じた変化であった。

その背景として、明治時代初期には、『童蒙（^{どうもう}どうもう）をしえ草』（福沢諭吉著）や、『英米礼記』（^{えいべいらいき}えいべいらいき 矢野龍溪（文雄）抄訳）、『泰西礼法』（^{たいせいれいほう}たいせいれいほう 高橋達郎訳・川本清一検閲）、『英国交際儀式』（渡辺豊訳述）等、学校教育での子供用や大人用などの多数の西洋の礼儀作法書等が翻訳・刊行されており、西洋のマナーへの関心の高まりがうかがえる。一方で、急速な西洋の礼儀作法の導入への反発から、礼儀作法に関する建白書も多数提出されていたことが指摘されている¹²。

学校教育における礼儀作法教育の展開

このような状況の中、礼法家である小笠原清務（^{おがさわらきよかみ}おがさわらきよかみ）は、女性への礼法教育の必要性を訴え、明治13年（1880）に東京府に「学校において女礼教脩之儀上稟」を提出した。その結果、神田小川小学校において女礼式の授業が行われるようになり、同人がその教授を担当した¹³。

次いで明治14年（1881）5月には「小学校教則綱領」が定められ、「修身」の一部として「作法」が取り入れられ教授されることになった。

「小学校教則綱領」が定められた同年同月には、小笠原清務・^{みずのただお}みずのただお 水野忠雄を編集兼出版人とした『小学女礼式 第一』が刊行された。同書「序」には、小笠原清務が女礼式に関する教授を東京府の学校教員に行った際の経験等を踏まえて書き記したとある。

同書の内容は、女礼式にて教授する項目、「起居進退」、「^{ぶつびんせんてつ}ぶつびんせんてつ 物品薦撤」（物品を客に進めたり、退いたりする際の作法）、「^{ばいじしゅうせん}ばいじしゅうせん 陪侍周旋」（主人のそばで御用する際の礼法）、「^{じゅじゅほうてい}じゅじゅほうてい 授受捧呈」（物品を授受したり、捧げたりするときの作法）、「^{しんせんていぎ}しんせんていぎ 進饌程儀」（食事を出したり、進めたりするときの作法）、「^{いんしよくていぎ}いんしよくていぎ 飲食程儀」

12 熊倉功夫『文化としてのマナー』（岩波書店、平成11年）。同書では、西洋文化の導入が礼儀作法に及ぼした影響について指摘しており、建白書の例として、明治13年（1880）に青森県の渡辺村男より提出された建白書の文言を引いて当時の状況について説明している。

13 江口敦子・住田昌二「礼法教育の研究（第1報）小学校における礼法の成立過程」（『日本家庭科教育学会誌』26巻2号、日本家庭科教育学会、昭和58年 p.13-17）

(食事をする際の作法) について、具体的な身体動作と所作を詳述している¹⁴。

また、明治 16 年 (1883) に、小笠原清務・水野忠雄により『新撰立礼式』^{しんせんりつれいしき}が編まれた。同書は、「坐礼」の記載はなく、欧米式の立って行う動作・立ち居振る舞いに関したものである。同年には、文部省（現：文部科学省）が『小学作法書』を刊行し、以後、礼法に関する教科書が数多く刊行された。なお、この時期の教育の場における礼法関係の呼称は、「作法」以外に「礼式」「礼法」「容儀」とも表記されることがあった。

女子高等教育機関と礼法

当時、小学校以外でも礼法教育が行われており、女子教育の一環で学生に礼儀作法を学ぶ機会を設けている学校があった。例えば、明治 8 年 (1875) に跡見花隈^{あとみかけい}が創立した跡見学校（現：学校法人跡見学園）では「点茶」の教授を通じて礼儀作法を学ぶ機会が設けられていたとされているほか¹⁵、明治 15 年 (1882) に創設された東京女子師範学校附属高等女学校では、「女礼」の科目が設けられていた例などがある。

しかし、これらの中等教育を受けた後に女性が高等教育を受けることができる機関は、教師になるための女子高等師範学校の門戸が開かれているのみという状況にあった。このため、明治時代末期から大正時代にかけて高等教育を受けたい女子生徒に対して、社会参加や自立、職業進出を支援するための私学塾や、私立女子専門学校が設立されるようになっていった。特に大正時代から昭和時代にかけて中等教育を修了した者が学ぶ専門学校も数多く設立された¹⁶。

以上のような経緯で設立されていった女子高等教育機関のうち、授業科目に礼法を取り入れた学校が見られる。明治 32 年 (1899) に下田歌子が創立した実践女学校（現：学校法人実践女子学園）では、学科課程の「家政」において「礼式」が教授されている¹⁷。大妻コタカが立ち上げた裁縫・手芸の塾である大妻技芸伝習所（大正 10 年 (1921) に大妻高等女学校。現：学校法人大妻学院）では、必須科目として「修身」があり、礼法教育者であった甫守謹吾^{ほもりきんご}がこの科目の顧問を務めていた¹⁸。大妻自身も『日常常識礼儀作法』や『礼儀作法』等、礼儀作法を扱った書籍も執筆している。

このように、明治・大正時代の教育者が高等教育機関において実学としての礼法教育に積極的に取り組み、社会に送り出していたことがうかがえる。

14 小笠原清務・水野忠雄著『小学女礼式』同源社、明治 14 年

15 従来、跡見学校において「点茶」が礼儀作法を学ぶ目的で設けられていたとされていたが、小林善帆「明治初中期的女子教育といけ花、茶の湯、礼儀作法 遊芸との関わりを通して」（『日本研究』64 巻、国際日本文化研究センター、令和 4 年 3 月 p. 51-89）では、「点茶」が学科目として設けられていなかった点や、後に小笠原流の作法が科目として設けられていた点などを指摘しており、「点茶」の教授目的が一義的に礼儀作法を学ぶためだけに行われていたと考えにくい点を示唆している。

16 高橋真央「女性の高等教育機関としての女子大学の変遷～過去から現在、そして未来へ～」(『甲南女子大学研究紀要 I』第 55 号、甲南女子大学、平成 30 年 p. 29-42)

17 「女子教育の胎動と学園の幕開け（新潟青陵大学 HP）」(URL: <http://www.n-seiryu.ac.jp/about/history/prologue/>) 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

18 『大妻学校の過去と現在：設立十周年記念』大妻学校同窓会、大正 15 年

国民礼法の構想

昭和時代の前半、国民礼法の構想が立ち上がる。昭和 10 年（1935）、作法教育の強化を目的に中等教育会・全国高等女学校長協会合同で、中等学校の作法科教員教育協議会が開催され、昭和 13 年には文部省の「作法教授要項調査委員会」（委員長：徳川義親^{よしちか}）が設置された。その結果、昭和 16 年 4 月に文部省が『礼法要項』¹⁹を発表、これに伴い、『国民学校児童用礼法要項』『〈文部省制定〉昭和の国民礼法』『昭和国民礼法要項』『礼法要項〈要義〉』等の解説本も刊行された。しかし、『礼法要項』に基づいた教育は太平洋戦争の激化で頓挫した。

〈主要参考文献〉

- ・『礼法要項』（『文部時報』第 720 号、文部省、昭和 16 年）
- ・二木謙一『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館、昭和 60 年
- ・伊勢貞丈・島田勇雄校注『貞丈雑記 1～4』平凡社、昭和 60 年
- ・熊倉功夫『文化としてのマナー』岩波書店、平成 11 年
- ・二木謙一『中世武家の作法』吉川弘文館、平成 11 年
- ・陶智子、綿拔豊昭編著『近代日本礼儀作法書誌事典』柏書房、平成 18 年
- ・綿拔豊昭『礼法を伝えた男たち』新典社、平成 21 年
- ・陶智子『日本人の作法』平凡社新書、平成 22 年
- ・筑波大学付属図書館特別展「明治時代に礼法はいかにして伝えられたか―出版メディアを中心に―」筑波大学付属図書館、平成 24 年

19 『礼法要項』は、礼法趣旨、前篇、後篇で構成されており、前篇は姿勢、拝礼、敬語・挨拶、言葉遣い、服装など全 9 章、後篇は「皇室、国家に関する礼法」「家庭生活に関する礼法」「社会生活に関する礼法」の 3 部・全 26 章から成る。

1-4-3 礼法の国内外における文化的、社会的位置付けや評価

現代社会における礼法

礼法の啓蒙書等に見る礼法の価値や評価について

現在、礼法や礼儀作法に係る啓蒙的な書籍が数多く刊行されている。

礼法や礼儀作法の書籍は、第2次世界大戦以前においても数多く刊行されており、とりわけ家庭・一般向けの書籍が数多く刊行されていた。この傾向は戦後も続き、家庭でのしつけやたしなみ、また、冠婚葬祭等での礼儀作法の解説に力点が置かれた書籍の発刊が続いた。

1960年代後半以降は、ビジネスマナーとも関連させた書籍が出版されるなど、その主旨や目的、読者層の傾向にも変化が見られるようになった。また、同時に、武家礼法の歴史や礼法の仕方等を啓蒙する書籍も出されている。

近年では、小笠原家の各家や関係者によって礼法及び礼儀作法の啓蒙的な書籍が刊行されている。これらの傾向としては、ビジネスマン向けや女性向け、子供向け等、どのような対象に対して礼法を啓蒙するかにより、その内容を変えながら刊行されていることがうかがえる。

以上のように、礼法の啓蒙書は、今日まで様々な読者層に向けた書籍の刊行が継続的に行われてきた。戦後以降、家庭向けにしつけや礼儀作法を啓蒙するための教養書だけではなく、武家礼法の歴史や意義を啓蒙する書籍、ビジネスマンや女性向けの実用書等、特定の読者層に向けた啓蒙書が刊行されている。

現在でも、礼法の啓蒙書が数多く出版されている状況から推察されるように、礼法や礼儀作法は私たちの日常生活の様々な場面に応じて必要とされており、多くの人々は、場面に応じた礼をどのように示したら良いのか、また、場面や状況をどのように判断すればよいのか等を、啓蒙書を参考として必要に応じて礼儀作法を学んでいるものと考えられる。

学校教育における礼法、その教授の目的

戦前は、公的な学校教育機関及び私立の学校において礼法の教授が行われていたが、現在の学校教育では、一般的な礼儀作法に関する指導は、主に道徳の授業内で行われている。その一方、今日においても一部の学校では、学校教育の中で伝統的な礼法を授業に取り入れているところもある。また、キャリア教育の一環として礼儀作法を学ぶ機会を設ける大学もある。

また、伝統文化を尊重する教育のモデル事業や実践研究として、礼法を取り入れた事業を行っている事例が、国立教育政策研究所による「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業」、「伝統文化教育実践研究」等において確認することができる²⁰。

以上のように、戦後以降も礼法は私立学校の授業等で実施されていることが見え、学生が社会

20 「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業の研究主題-平成 18・19 年度-」 国立教育政策研究所教育課程研究センター (URL:https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidou/list/dentou_118-21.pdf) 最終確認日：令和5年1月31日

に出た際に必要とされるような能力を身に付けてもらうことを目的として行われている傾向が見られる。

啓蒙書や企業研修に見える礼法の捉え方について

学校や大学等において礼法が教えられている例があるほか、企業の新入社員教育等でもマナー教育との関わりで礼法の教授が行われている場合がある。これは礼法が、接遇等の技術取得だけでなく、組織人としてのあり方や身の処し方、日常の振る舞い、周囲の人々に対する配慮の仕方等に関して、規範となるとものと捉えられているものと考えられる。近年では、企業経営における「礼節」の重要性に特化し、個人や組織における礼儀正さの効用を分析したマネジメント書も出ている²¹。

以上のように、現在の社会において、私立学校の授業や企業の研修等で伝統的な礼法の教授が行われていることがうかがえる。伝統的な礼法を授業や研修に行うことについては、社会における基本的な慣習である礼儀作法を礼法の知識・実践を通じて学び、社会人としての基本的な振る舞いを身に付けることが主な目的となっている。

礼法関係者の活動について

流派の活動

礼法を継承している流派の中で、資格制度を有している団体では、指導者の育成や免許状の発行のほか、一般向け礼法教室の開催、学校の礼法授業への講師派遣、子供や大人、外国人を対象にした礼法講座、ホームページやブログ、SNSを活用した情報発信、また、和装業界やブライダル産業との連携も行っている。

弓術や弓馬術等の技芸と共に礼法を受け継いでいる流派では、礼法に特化した免許状制度はなく、門人に弓術・弓馬術・礼法の流儀について指導を行っており、流鏑馬^{やぶさめ}や笠懸^{かさがけ}、歩射^{ぶしや}を神社において執行している。また、礼法に関しては、教場での指導のほか、小学校や中学校、高等学校、大学での授業やカルチャーセンター等において講義も行っている。

その他の団体

礼法流派が関係する形で設立されたマナーやプロトコルを扱う団体や、小笠原家の礼法講師の有資格者が立ち上げた団体等も活動しており、独自の検定事業の運営、教養講座や講習会等の開催を実施している。

21 クリスティーン・ポラス『Think CIVILITY「礼儀正しさ」こそ最強の生存戦略である』（東洋経済新聞社、令和元年）

海外からの評価と国際発信

外国人から見た礼法に関する評価

日本を訪れ、日本人と接した外国人達が残した記述から、外国人が見た日本の礼儀や作法に関する評価が垣間見える。

元禄4年(1691)に来日した、エンゲルベルト・ケンペルはその著書、“*Geschichte und Beschreibung von Japan*”（邦題：『江戸参府旅行日記』）において、長崎の出島から江戸へと移動する最中に滞在した旅館の主が礼儀正しく親切であったことを一例として引き合いに出している。加えて、日本人の礼儀や立ち居振る舞いの仕方は、貴族や農民まで分け隔てることなく誰もが非常に典雅であることを称賛している²²。

明治6年(1873)に来日したバジル・ホール・チェンバレンの著書、“*THINGS JAPANESE*”（邦題：『日本事物誌』）では、「礼儀 (Politeness)」という項目を設け、「日本人の礼儀正しさは何人も議論する余地のない事実である」と前置きをした上で、日本人と西洋人の礼儀との比較・考察を試み、日本と西洋における礼儀に対する考え方の違いから来る、仕草や作法等の違いについて述べている²³。

明治10年(1877)に来日したアメリカの動物学者エドワード・シルヴェスター・モースの著書、“*JAPAN DAY BY DAY*”（邦題：『日本その日その日』）では、日本人の「挙動の礼儀正しさ」や、階級を問わずに行儀がよく親切であること、また、座礼の仕方等についても記述している²⁴。

明治11年(1878)に来日したイザベラ・バードの著書、“*Unbeaten Tracks in Japan*”（邦題：『日本奥地紀行』）には、車夫が挨拶をする際に、笠を外して礼儀正しく挨拶する様子や、子供たちが幼いころから礼法の手ほどきを受けており、分別がついていること等が記載されている²⁵。

上記以外にも、来日した外国人が見た当時の日本人の礼儀や礼節の正しさに関する記述は数多くあり、特にお辞儀をする様子が取り上げられることが多い。何回もお辞儀をしたりする様が、滑稽に見えたりすることもあったようだが、大体において武士や農民など階層にかかわらず礼儀や礼節を重視していることに好感を抱いている記載が多い。

礼法の国際発信について

外国への発信については、流派が刊行する礼法に関する書籍が外国語に翻訳され、海外で流通している²⁶。また、礼法を含めて日本の伝統的な文化に対して海外から関心が寄せられるようになっており、海外からの質問への対応のため、外国語に対応ができる人材の不足が課題として挙げられている。

22 エンゲルベルト・ケンペル著、斎藤信訳『ケンペル 江戸参府旅行日記』平凡社、昭和54年

23 バジル・ホール・チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌2』平凡社、昭和44年

24 エドワード・シルヴェスター・モース著、石川欣一訳『日本その日その日』講談社、平成25年

25 イザベラ・バード著、高梨健吉訳『日本奥地紀行』平凡社、平成12年

26 外国語に翻訳されている書籍の例としては、礼法に関する解説書として、小笠原敬承斎の“日本人不説但外人一定要懂的禮儀”（大是文化有限公司、令和4年）や小笠原清基の“Dignity in Silence: Secrets to Mastering the Undefeatable Presence of a Samurai”（一般財団法人礼法弓術弓馬術小笠原流、令和4年）を確認することが出来る。

大使館等で行われる伝統文化の発信に係るイベントにおいて、弓術と礼法の披露及びワークショップが開催されている例²⁷や、フランスの民間団体の協力で折形のワークショップが開催されている例も確認されている²⁸。

〈主要参考文献〉

- ・江口敦子、住田昌二、俵原敬子「礼法教育の研究（第3報）：婦人向け教養書における礼法項の推移」（『日本家庭教育学会誌』28巻1号、日本教科教育学会、昭和60年 p. 1-6）
- ・山崎貴子「近代日本における「たしなみ」への関心の高まりとその変容－礼儀作法書刊行動向の分析から－」（『教育・社会・文化研究紀要』（12）、京都大学大学院教育学研究科教育社会学講座、平成21年 p. 21-40）

27 在フィンランド日本国大使館 HP（URL：https://www.fi.emb-japan.go.jp/itpr_ja/c_000196.html）最終確認日：令和5年1月31日

28 笹川日仏財団 HP（<https://ffjs.org/projets/article>）最終確認日：令和5年1月31日

1-5 盆栽の歴史と現状

1-5-1 盆栽の概要

盆栽について

盆栽とは

盆栽は盆器等¹に樹木を植え付け、その樹木を育てながら姿形に手を加えていき、年数をかけて仕立てることで、鉢の中に自然の要素を抽出して再構成したり、一つの自然の景色を縮小・再現したりして生み出していくものを指す^{2,3}。

仕立てた樹木の姿や、鉢の中に生まれた趣ある景色を鑑賞することだけでなく、樹木を培養し、育てていく過程自体、いわゆる“盆栽いじり”を楽しむことが盆栽という文化の核の一つにあり、盆栽の鑑賞を楽しむ層と実践している人の層がほぼ重なる点にも特徴がある。また、盆栽は生きている植物であり、姿形は日々変化し完成するということがない点、人が植物と対話をしていく中で作られていく点にも特徴がある。

なお、本調査では日本で発展してきた盆栽を調査対象とし、中国や韓国などで行われている「盆景」⁴等は取り扱わないこととする。

盆栽の種類

・樹種による分類

盆栽に用いられる代表的な植物はゴヨウマツに代表されるマツ類、また、ヒノキ科針葉樹のシンパク（ビャクシン）で、これらを特に「松柏盆栽」と呼んでいる。根や幹が様々な造形美を見せること、マツ類もシンパクも常緑樹であり四季を通じて変わらぬ風情を楽しめることが特徴である。松柏は生命力が強いことから、何世代にもわたって伝えられる名品も数多く存在する。

松柏盆栽に対し、季節等による変化がある樹種を用いた盆栽を総称して「雑木盆栽」と呼んでいる。代表的な樹種としては、紅葉するモミジ、カエデ（葉物盆栽）や、花を咲かせるフジ、サツキ（花物盆栽）、果実のなるカリン、ザクロ、カキ等（実物盆栽）がある。花物盆栽のうち、特にサツキ盆栽の愛好者は多く、一つの大きな潮流となっている。また、床の間飾りをする場合などに下草とし

1 「盆器」とは、盆栽業界で樹木等を植える植木鉢などの器のことを指す。

2 依田徹『盆栽の誕生』大修館書店、平成26年

3 農林水産省が平成27年（2015）に盆栽関係者に対して行ったアンケートの際には、盆栽は「自然美を鑑賞する目的で、剪定や針金掛け等の技巧を凝らし、わい化させた1m50cm以下の木本性植物（苗を除く）を当該植物と一体的に鑑賞することを目的として制作された鉢で管理しているもの」と定義している。（農林水産省「盆栽の出荷（輸出）数量・出荷（輸出）額の推計について（平成27年）」
（URL: <https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/index-3.pdf> 最終確認日：令和5年1月31日）

4 中国で親しまれている「盆景」について、李樹華は盆景の名称に関する研究の中で、中国の盆景を「鉢の中の景色（盆中景）を意味し、植物、石、水、土などを材料とし、独自の園芸技術により限られた鉢の中に自然の美しさを濃縮し、その景色を表現することをその目的としている。」と説明している。（李樹華「中国盆景名称考」（『ランドスケープ研究：日本造園学会誌』58巻5号、社団法人日本造園学会、平成7年 p.61-64））

て飾られるものを、草物盆栽（山野草）と呼ぶ。樹木に比較し管理がしやすい草物は、盆栽の入門編のような位置付けで愛好されることがある。

・大きさによる分類

盆栽の大きさにより小品盆栽、中品盆栽、大品盆栽に分けられる。本報告書において単に盆栽という場合は、20cm 以上の中品以上の盆栽を主たる対象とする。

盆栽の樹形

盆栽の樹形は自然の風景を原型としながら、固有の美意識の下で造形的に高められてきたものである。樹形は幹の向きや数の違いにより様々に呼称される。一本の幹が上に向かって垂直に伸びる形を「直幹」^{ちよつかん}、S字状に曲がるなど幹に変化があるものを「模様木」^{もようぎ}、幹が一方方向に傾いているものを「斜幹」^{しゃかん}と呼び、真っ直ぐ伸びる幹から複数の枝が放射状に広がって出ている樹形を「筭立ち」^{ほうきだち}と呼ぶ。斜幹のうち、幹から出る枝を一方方向に向け、植物が強い風になびいている姿を表現したものを「吹き流し」^{ふなが}と呼ぶ。幹が根元より下方に垂れ下がっている「懸崖」^{けんがい}は、切り立った崖に生えた樹木の姿を表現した樹形である。また、細い幹で上方にだけ枝を残した樹形は、江戸時代の文人趣味を残したものとして「文人木」^{ぶんじんぎ}と呼ばれる。

幹の数による呼称としては、幹が1本の「単幹」、一株の根元から2本の幹が出ている「双幹」、幹が3本の「三幹」、5本の「五幹」、7本の「七幹」があり、それ以上の幹を持つものは「株立ち」と呼ぶ。一鉢に複数の植物を植えて森林の趣等を表すものは「寄せ植え」、複数の幹が一つの根元から出ている場合は「根連なり」と呼ぶ。

根の形態にもその姿形から分類があり、モミジ類の根が盤状に癒着した「盤根」、複数の根が土から露出して幹のようにになっている「根上がり」等がある。

このほか、石の窪みにケト土等を入れて植物を培養する、あるいは鉢の中に石を造形的に組み込んだものを「石付き」と呼んでいる。

担い手について

盆栽文化の担い手としては、苗木の生産者、盆栽業を営み植物を盆栽として仕立てる盆栽園、盆栽を愛好する者がいる。盆栽を愛好する者には、趣味として盆栽を愛好する者から、プロに準ずるような活動をする者まで、幅広い層が含まれる。今回はそれらの者や、それらに係る団体等を主たる調査対象とする。

盆栽園

盆栽園は現在、全国に約 470 軒あると推計され⁵、特に大宮盆栽村によって盆栽業が盛んになった埼玉県、江戸時代から園芸業が盛んだった歴史を持つ東京都及び松の生産地である香川県に数多く存在する傾向にある。なお、盆栽園の現状としては、盆栽園の園主の高齢化、後継者不在、園経営のスタッフ不足、地価高騰等による相続問題により盆栽園は減少していることが指摘されている。

盆栽を愛好する者

盆栽の愛好者は主に、自ら盆栽を育て剪定や管理を行い、鑑賞を行っている者が想定される。また、自ら盆栽を有してはいないが、盆栽展等を観覧することを楽しむ者もいることが推察される。

自ら盆栽を所有している者の中でも、盆栽展への出品を行っている場合と、盆栽展には出品せず個人で楽しむ場合に分けられる。盆栽展への出品は、盆栽園を窓口として出品される仕組みであり、展覧会ごとに設定された規定サイズに応じた調整等を含め、盆栽園の職人による仕上げを経て出品が行われていることが多い。特に、大品盆栽については、剪定や管理など専門的な技術を有する場合があります、盆栽を所有する者と盆栽の仕立てを行う者が異なっている点に特徴が見られる。

なお、盆栽を愛好する者についての正確な人数及び経年変化については、社会生活基本調査等の統計調査が行われていないため不明であるが、高齢化が進み、若年層の参入は得られていない傾向にあると指摘されている⁶。

盆栽の仕立てと鑑賞

盆栽の仕立て方

盆栽を愛好する者や盆栽園の職人は、樹木を盆栽として好ましいと考える樹形として仕立てていくために、日頃から植物の剪定や仕立て、管理を行う。仕立てる作業としては、枝の剪定・根の整理、針金かけ、鉢合わせ、水やり等があり、盆栽を理想とする樹形に仕立て、長く育てていくためには、それぞれ植物の性質を十分に踏まえて作業を行う必要がある。

・ 植え付け、植え替え、鉢合わせ

盆栽苗から鉢に植え付ける際には、鉢は苗の樹齢や樹形に合わせて選択する。また、植え付けた後も、根を更新して通気性や排水性を改善するために、定期的に用土を交換する植え替えが行われる。

5 農林水産省「盆栽の出荷（輸出）数量・出荷（輸出）額の推計について（平成 27 年）」

（URL: <https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/index-3.pdf> 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日）に、アンケート対象として「関係者の協力を得て把握した全国の盆栽園（473 園）」と記載がある。

6 金融財政事情研究会発行『第 14 次 業種別審査事典』きんざい、令和 2 年 p. 1511-1519

数年間育てて樹形ができてきたら、強い根を伸びやすくするため、長過ぎる根や細い根などを整理した上で、一〜二回り小さな鉢に植え替えを行う。樹木の種類や樹形に合わせた鉢映りの良い盆器を選ぶことを「鉢合わせ」と言い、古木感や大木感を演出する。鉢合わせの際には、鉢と樹形のバランスや空間の余白を考慮に入れて植え替えが行われるほか、「懸崖」のような幹や枝が垂れ下がったような盆栽にする場合は、樹木を鉢に対して斜めに植え付ける工夫が行われる例もある。

・ 剪定

剪定は樹形を整え、また、日照や通風を改善し病虫害の発生を防ぐ等の目的のために行われる。

まず、剪定を行う時期としては、樹木の生長期と休眠期が適しており、それぞれの時期に行われる剪定は目的や効果が異なっている。春や夏の生長期に行う場合の剪定は、芽や葉を減らすことで、樹勢を抑えて樹形を保つとともに、風通しや日当たりを良くすることで、樹木の健康を維持する目的がある。一方、休眠期に行う剪定は、形作りたい盆栽の樹形に対して、不要となってしまうような枝を整理し、形を整える目的で行われる。この他の時期にも、樹形を維持することを目的として定期的な剪定が行われる。

剪定の仕方はその目的によって異なり、樹木等のどの部分をどの程度切るのかを変えることで、樹木の樹勢を抑えたり、小枝を伸ばして樹形を整えたり、風通しや日当たりを良くするために行われる。また、「忌み枝」と呼ばれるような、樹形のバランスを崩してしまうような枝がある場合も、剪定によって取り除くことがある。

剪定の種類としては、樹形を整えるために長く伸びた枝を切る「切り戻し」や、樹木のサイズを維持するために生長期に全体を一回り小さくする「追い込み」、新芽を摘み取り脇芽の萌芽を促すことで、樹形を保ったり小枝を増やす効果がある「芽摘み」、芽摘みの後に成長してきた葉を、葉柄を残して切り取ることで小枝を伸ばしたり、樹勢を平均化したりする「葉刈り」、樹形を整えるために不要となる枝を元から切り取る「間引き」、樹形を見ながら葉の量を調整して風通しや日当たりを良くしたり、樹木全体の葉の大きさを整える「葉すかし」等が挙げられる。

また、樹木の枝や葉の剪定のみならず、根の通気性を良くしたりするために、根の剪定も行われる。

・ 針金かけ

「針金かけ」と呼ばれる作業は、剪定と同じく樹形づくりを主な目的としたものである。針金をかけて枝を矯正することで、樹形として枝がほしい位置に枝を移動させたり、枝に流れや表情を加えたりすることができる。

幹へ針金かけを行う場合、株元から45°の角度で等間隔に巻き上げる。また、かけた針金がずれないように針金の先端を土の奥に差し込んだり、場合によっては鉢底に針金を固定したりする方法もある。

枝への針金かけの例としては、2本の枝にV字にかけ、等間隔に針金を分枝部分から先端まで巻き上げるなど、部分に応じた巻き方がある。なお、枝の向きを左方向へ矯正したい場合は左巻き、右

方向の場合は右巻きで針金かけをしていく。

針金をかけたままにすると樹木に傷がつくため3～6か月で針金を外し、成形が十分ではない場合には、数か月間あけてから再び針金をかけて、樹形に沿った枝の向きへと整えていく。なお、針金かけの際に用いる針金は、樹種や幹、枝の太さ等に適した太さや素材のものが用いられる。

・水やり

小さい鉢は土が乾きやすく、植物が水切れを起こしやすい。一方、水をやりすぎると根腐れが起きるため、それぞれの鉢に最適な水やりをすることが重要とされている。

土が乾いたら鉢底から流れ出るまでたっぷりと、鉢の中に均等に行き渡るように、じょうろで根元に水を回しかけるのが基本とされている。ただ、樹木によって水を好むもの、好まないものなどの特徴があるため、樹木の特性を考慮しながら水やりをする必要がある。

そのほか、それぞれの樹種に適した温度や日照条件になるよう置き場を工夫する、施肥を行う、などの日々の管理が重要とされている。

盆栽は、枝の剪定・根の整理、針金かけ、鉢合わせ、水やり等の作業を経て、望ましい樹形へと仕立て上げられる。そのために、様々な知識や経験、技術を用いて造形を行っているが、展覧会において展示する際には、人工的な部分はできるだけ見せず、素材である植物の姿を生かしながら、自然の美しさや厳しさを美的に表現することが重視される。

盆栽の鑑賞

・鑑賞のポイント

盆栽は植物の美しさ、自然美や、植物と鉢のバランス等を鑑賞する。鑑賞する際には盆栽全体の姿だけではなく、枝ぶりや幹肌、根張り等、植物の各部分にも着目し、盆器の中に凝縮して表された大自然の景色を楽しむ。小さい中に大きな世界を見るという要素は盆栽の価値観として重要視されている。加えて、鑑賞時には造形だけでなく風格や古色も重視される。なお、美術館や展覧会で展示される盆栽を鑑賞する場合は、原則的に正面から行う。

植物の各部分の鑑賞のポイントとしては、立ち上がりの美しさ（根元から最初の枝までが力強く、自然な動きが感じられるか）、枝ぶり（大きな枝がバランスよく交互に配されているか、不必要な枝がないか、枝先は細かく分かれているか）、幹肌（樹種によって異なるが、若さより時代が乗っていることが重視され、特に松は幹肌が荒れて何層にも重なっているものがよしとされる）、根張り（根が表土の上に力強く現れているか、八方に根が張っているか）等がある。

そのほか、切り傷の有無や葉性（葉の細かさ等）、木が健康であるか、鉢と木が合っているか（鉢映り）、飾り台とのバランスはどうかといった点も、盆栽を鑑賞するポイントとなる。

一方、全体の姿形を損なうとして嫌われる「忌み枝」と呼ばれるものがあり、幹を貫くように左右に伸びる「かんぬき 門枝」や、下に落ちるように伸びる「落ち枝」、盆栽の正面から前に飛び出す「前枝」、

上下の枝が交差している「交差枝」、幹を横切って伸びる「幹切り枝」等がある。

・盆栽の展示方法及び展示・鑑賞の場

盆栽を展示し鑑賞する際は、卓^{しょうく}という木製の花台・飾り台の上に置く。卓は基本的に唐木^{さしもの}の指物で、高さにより平卓、中卓、高卓と呼び分けられる。また、飾り棚も用いられる。卓や飾り棚は、盆栽の形や大きさに合わせて選ばれる。

展示・鑑賞の場としては、国風盆栽展や日本盆栽大観展など恒例的に実施される盆栽の展覧会や、盆栽を専門に展示する美術館がある。それらにおいては上記のような方法で展示されている。

また、盆栽と共に飾られるものとして「水石^{すいせき}」がある。水石は、山や山辺を連想させるような形をした自然石を台座に乗せて鑑賞されるもので、「盆石」と呼ばれていたが明治時代から次第に現在の名称が広まったとされている。

〈主要参考文献〉

- ・ 日本盆栽協会編『盆栽大事典 第3巻』同朋舎出版、昭和58年
- ・ 丸島秀夫・南伸坊『盆栽 癒しの小宇宙』新潮社、平成15年
- ・ 山田香織『山田香織のはじめての盆栽樹形』NHK出版、平成24年
- ・ 依田徹『盆栽の誕生』大修館書店、平成26年
- ・ 山田香織『よくわかる盆栽』ナツメ社、平成28年
- ・ 広瀬幸男『いちばんていねいな はじめての盆栽の育て方』日本文芸社、平成29年
- ・ 小林國雄監修『小林國雄のイチから教える盆栽』西東社、令和元年

1-5-2 日本における盆栽の歴史

盆栽前史

史料に見える鉢植え

日本における園芸文化の始まりについては、文献史料の少なさからあまり具体的には分かっていない。早いものとしては、貞観11年(869)成立の『続日本後紀』に、承和6年(839)に河内国の農民が仁明天皇に橘の木を土器に植えて献上したという記述が見える。ここから、鉢に木を植える行為自体は、遅くとも9世紀前半には行われていたことが確認される。しかし、平安時代や鎌倉時代の日記類や文学作品には鉢植えに関する記述が少なく、鉢植えがどのように愛好されていたのかわからない。

鎌倉時代末期になると、兼好法師の『徒然草』に、後醍醐天皇の側近である日野資朝が「異様に曲折ある」鉢植えを集めていたというエピソードが登場する。また、室町時代初期に制作された絵巻物「慕婦絵詞」(西本願寺蔵)には、素焼きの瓦器と見られる鉢に植えられた、曲がった幹の松や双幹の梅が描かれている。このような樹木の曲折が自然のものか人の手に扱われるものかは不明であるが、その姿を鑑賞の対象として捉えるような美意識が萌芽していたことが推測される。

「鉢木」や「盆山」の流行

鎌倉時代から室町時代にかけて、「鉢木」や「盆山」と呼ばれる、盆栽の前身となる様式が確立している。イエズス会の宣教師によって『日葡辞書』ではこの両者を明確に分けて立項しており、「鉢木」は「ある容器に植えた小さな木で、冬季には枯れないように家の中に入れておくもの」、「盆山」は「日本人が、緑色の苔をつけた、何か小さな木を植え付けたりして、水面に浮かぶ小さな岩の格好につくる、ある種の石や自然木の材」と定義している⁷。

延慶2年(1309)成立の絵巻物「春日権現験記絵」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)では、縁側から眺められる高さの台の上に木製の器を乗せ、そこに白い砂利を敷いて盆山を飾っている様子が描かれている。鎌倉時代後期にはこの形式の盆山が一般化しており、樹種はゴヨウマツ、シンパク、ツツジ等が使われていたことがうかがえる。また、室町時代中期になると、相国寺の僧で足利義政の側近だった季瓊真蘂は、公用日記『蔭涼軒日録』に足利義政の命令で五山の禅宗寺院から盆山が集められたことを記している。ここから「盆山」が、五山の禅僧等を担い手とする教養人のたしなみ、さらには足利将軍家が愛好する威信財⁸となっていたことが確認される。

盆山が最も盛んだった頃の姿形を捉えたものとして、江戸時代初期の作とみられる六曲一双屏風「盆栽図屏風」(出光美術館蔵)がある。この屏風には、23個の盆山・鉢木が描かれているが、一つを除き、全て盆山である。描かれている樹種はマツが多く、ほかにスギ、ツバキ、ウメ、モミジ、さらにソテツやショウブも見られ、ほとんどが単体の鉢植えではなく寄せ植えである。また、これら

7 土井忠生他編訳『邦訳 日葡辞書』岩波書店、昭和55年

8 権威等を象徴する財物を意味する。

の器としては、中国から輸入された青磁や染付、金属製の七宝、蒔絵の施された漆器等が用いられていた。

江戸時代の園芸趣味の流行

園芸趣味の広まり

江戸時代には園芸趣味が広がり、ツバキやツツジ、アサガオやキクが代表的な品種として好まれ、品種改良や突然変異によって作り出された変種が珍重された。このような花きだけでなく、マツやウメの鉢木も広く愛好され、大名や徳川家の歴代将軍も好んだという記録が残る。江戸幕府の正史『徳川実紀』には諸国からマツやツツジが献上されたことが記録され、「盆山松」や「盆栽松」という表記が見られる。

鉢と苗があれば始められる園芸趣味は、上層の武士階級だけではなく、町人や商人にも愛好された。このうち、特にマツやウメ等の愛好が、明治時代以降の「盆栽」へとつながっていく。

鉢木の造形

江戸時代には新しい動きとして、鉢木の造形として、鉢木の幹や枝をくねった蛸の足のような形に曲げて作る「蛸作り（まげもの曲物作り）」が流行を見せる。「猿猴作り」えんこう「武者作り」といった具象的な名前が付けられており、これらは枝を曲げる技巧そのもの、人工的に作った造形自体を鑑賞の主体としていた。その作り方は『草木錦葉集』そうもくきんようしゅう等の園芸書に記録されるほか、当時の浮世絵に絵画資料として残されている。

また、旗本夫人の日記である『井関隆子日記』（昭和女子大学蔵）には、枝を見せずに山形に仕立てる「下総作り」しもうさが記録される。これは徳川家斉の愛好によって一時的に流行したもので、将軍家の愛好が庶民層にも伝わるという、大都市化した江戸の園芸文化の状況を伝えている。

中国趣味と文人木

「蛸作り」や「下総作り」のような人工的な造形が鉢木において流行した一方で、江戸時代後期には関西の文化人の間で、異なる流行が登場した。それは文人画（南宗画）や煎茶を愛好する中国趣味に連なるもので、中国の書画や工芸品を飾り付けて煎茶を楽しむ煎茶会の場に、中国趣味の鉢植えを配するというものである。その鑑賞の主体となったのは、中国から輸入された陶磁器製の鉢類であったと考えられる。これらは19世紀頃の煎茶会を記した「茗讌図録」めいぜんずろくにおいて「盆栽」と表記されており、これらの影響の下に「ぼんさい」と音読みする呼び方も定着したとみられる。また、このような中国趣味の「盆栽」では、文人画をまねて下枝の少ないひょろりと立ち上げる仕立てが試みられ、現在その系統を「文人木」と呼んでいる。

近代盆栽の誕生と展開

造形の変化

明治時代に入ると、江戸で流行していた人工的に作り込む「蛸作り」は廃れ、中国趣味の影響を受けた「盆栽」が主流となっていく。東京の植木屋は「蛸作り」に手を加え、自然体に見えるような造形に鉢木等を改作していった。彼らは鉢よりも樹木を主役とし、幹の姿と枝ぶりで大樹の風格を出す工夫を行った。自然の造形が評価されるようになり、姿の良い樹木を「山採り」^{やまど}して育てるようになったのもこの頃である。山採りの主役は生命力の強いマツ類であり、これ以降、常緑樹が盆栽の主役となっていた。

盆栽園

江戸には多くの植木屋があり、武家屋敷の庭園の手入れの傍ら、園芸植物の栽培・販売、蛸作りの仕立て等に従事した。明治時代初頭の東京にいる植木屋の番付には 120 人もの植木屋が掲載されており、花園樹斎、庭師、鉢物師、地木師等と分類されていた⁹。

このうち大手の植木屋の中から、広大な敷地に多様な植物や盆栽を並べた盆栽園が登場してくる。木戸孝允の庇護を受けた鈴木孫八の「香樹園」^{こうじゅ}、その弟子である木部米吉の「苔香園」^{たいこう}等は、政財界とのつながりを持ち、ウィーン万国博覧会の日本庭園、靖国神社等の造園等の公共事業も請け負っていた。

盆栽愛好の展開

近代盆栽と天皇家

近代における盆栽の流行の重要な要素に、皇室の盆栽愛好がある。皇居（明治宮殿）には諸国から献上された盆栽や珍しい植物が集まり、明治天皇から政財界の要人に盆栽が下賜されることもあった。明治天皇が三条実美や岩倉具視の病床の見舞いに盆栽を送ったことが記録されており、後者を絵画化した北蓮蔵「岩倉邸行幸」^{きたれんざう}（聖徳記念絵画館蔵）では、宮家から下賜されたとされる 2 点の盆栽が縁側に描かれている。

明治時代には、大隈重信や西園寺公望といった政治家、岩崎弥之助といった財界人の間で、盆栽が愛好されるようになっていった。枢密顧問官であった伊東巳代治もその一人で、皇居の盆栽として著名なゴヨウマツ「三代将軍」は、伊東の遺言で皇室に献上されたものである。彼らは盆栽展に家蔵の名品を出品し、木部半次郎『盆栽逸品集』（大正 5 年（1916））等の写真図録がその姿を全国の愛好家に視覚的に示す役割を果たした。このようなメディアの発達を介して、やがてゴヨウマツ「日

9 野間晴雄「17～19 世紀江戸・東京近郊の花き園芸の発達と空間的拡散—グローバル／ローカルな視点からの菊の歴史地理—」（『東アジア文化交渉研究』第 3 号 関西大学文化交渉学教育研究拠点、平成 22 年 p. 395-431）

暮し」(大宮盆栽美術館蔵)に代表される名品が選定されていく。

盆栽雑誌の登場

明治時代に入ると、盆栽の愛好者達の手により発刊された培養に関する書籍¹⁰や、専門誌が登場する。このようなメディアの登場は、盆栽の大衆化を進めるきっかけとなったほか、全国の愛好者をつなげる役割も果たした。

明治 39 年(1906)、盆栽をより多くの人に普及するため、香樹園の村田利右衛門と薫風園の蔵石光蔵を发起人とした「盆栽同好会」が結成され、同会により日本で初めての盆栽専門雑誌『盆栽雅報』が創刊された。この専門雑誌は、盆栽の普及だけではなく盆栽の芸術性に関する研究も行われていた点に特徴が見られる。

次いで、明治 41 年(1908)には清大園の清水利太郎を中心とした東京の盆栽園によって、盆栽をはじめとした園芸の普及と研究を目的とした「東洋園芸会」が結成され、その機関誌として『東洋園芸界』が創刊された。この雑誌では、盆栽をはじめとした園芸の普及及び研究が目的とされているが、日本大博覧会が計画されていた当時の時代背景が反映され、海外への園芸普及や盆栽や園芸を海外から見た場合の視点も含まれている点に特徴がある。

さらに大正 9 年(1920)には、清大園の清水利平を中心に「大日本盆栽奨励会」が発足し、翌 10 年には機関誌『盆栽』が発刊されている。創刊号では、盆栽の培養論をはじめ盆栽の芸術性に関する論考が掲載されるなど、盆栽の芸術的な側面を考究するような姿勢が顕在化していたことがうかがえる。

大正時代の盆栽村の誕生

明治時代に発展した東京の盆栽園ではあったが、その多くが大正 12 年(1923)の関東大震災で被災した。この復興にあたって、清大園の清水利太郎^{まんせい}は蔓青園等いくつかの盆栽園と共に東京を離れ、大宮市(現・さいたま市)の原野を切り開いて盆栽村を開村した。大宮に移る盆栽園は徐々に増え、昭和 11 年(1936)には 35 軒にもなった。現在も同地には 6 つの盆栽園が残る。

盆栽村に移った盆栽園の一つである蔓青園の加藤留吉は、エゾマツの培養技術を確立し、国後島^{くなしり}や択捉島^{えとろふ}から山採りしたエゾマツを盆栽に仕立ててエゾマツ盆栽の大ブームをもたらした。戦後、加藤は GHQ の将校に盆栽の育て方を教えにも行っている。また、九霞園^{きゅうか}は吉田茂や池田勇人等の歴代首相が訪れたことでも知られるなど、各盆栽園にはそれぞれの特徴があった。

10 盆栽の名を冠した書籍として明治時代の早い時期に出たものとして、明治 16 年(1883)三戸與彰編『盆栽手引種』が確認でき、主に鉢植えの培養が主たる内容になっているほか、盆栽振り仮名は「はちうゑ」「ぼんさい」と読み方が併存していることがうかがえる。また、明治 29 年の井口松之助著『盆栽培養全書 草木図解』においては「盆栽雅賞の事」「盆栽俗愛の事」の項目があり、「盆栽雅賞の事」では「何れも雅味風致を賞し文房の具と共に陳列するものを挙ぐ」、「盆栽俗愛の事」では「盆中に植えるもの鄙近の如何を問はず只艶麗なるを樂の盆栽なる故此の部中を見ること宛も縁日の植木屋の如し」として、盆栽の鑑賞や楽しみ方の違いで盆栽を分けて紹介している。

国風盆栽展の始まり

陳列会、座敷飾り

江戸時代後期の煎茶会においては、煎茶道具の飾り付けと共に、盆栽が室内に飾られるようになっていた。明治時代には煎茶会の中で盆栽席が成立し、さらにそこから盆栽の陳列会が独立していった。

当初の陳列会では、畳に屏風を立て、その前に卓や地板を据えて盆栽を飾る形式であった。大正時代になると、会場となる料亭等の床の間を利用し、飾り付けが工夫されていく。昭和時代初期には茶道や華道の飾り方や用語を取り入れ、格式や季節に合わせた取り合わせ等の決まりごととも複雑にし、伝統文化の体裁を整えようとする動きも出てきた。この時代には盆栽の鉢を作る名工も登場し、また、盆栽を飾る卓も専門的に制作されるようになり、樹木と鉢・卓の調和が追求されていく。

料亭等を会場に盆栽や水石の陳列・品評会を楽しんだのは、政財界を中心とした盆栽の愛好者たちであった。中でも「小天地会」では、盆栽と蒐集した古美術品との取り合わせ、床飾り等の工夫が重ねられていた。

国風盆栽展の開催

政財界人を中心として、陳列会という形を設けて盆栽の飾り方や、伝統文化や芸術面での意義付け等が模索されていく中、昭和9年（1934）に美術館を会場とする盆栽の展覧会「国風盆栽展」が誕生した。

この国風盆栽展を企画したのは、「大日本盆栽奨励会」の機関誌『盆栽』の主筆、小林憲雄^{としお}であった。また、国風盆栽展を主催した国風盆栽会の初代会長は、貴族院議長で小品盆栽の愛好者でもあった松平頼寿^{よりなが}が務め、副会長は貴族院副議長であった酒井忠正が務めた。

国風盆栽展の初期には懸崖が非常に多く出品され、直幹の盆栽は少なかった。これは、山採りの木を盆栽として見応えのあるものに作り上げることが目指されたためとされる。また、石付き盆栽も徐々に増加したほか、戦前から戦後にかけては根連なりが人気を集めるなど、時代ごとに作風や樹形の流行があったことがうかがえる。

このように、政財界人を主たる会員として運営が行われていた国風盆栽展であったが、昭和18年（1943）から雑誌『盆栽』において会員を募集するようになり、少しずつその性格が変化していき、戦後には公募展としての役割を果たすようになる。

昭和時代に入る頃に盆栽は、皇族・華族や政財界の人々はもちろんのこと、各実業界・会社経営・商業・製造業に携わる者たちの趣味として広まっていった¹¹。加えて、この時代には盆栽専用の鉢が開発されるなど、盆栽を仕立てる道具の開発も進んだ。

11 早川陽「昭和初期の盆栽趣味の諸相―『趣味大観』（1935）にみられる自然栽培趣味の記述から―」（『学苑・人間社会学部紀要』No. 964、昭和女子大学近代文化研究所、令和3年 p. 38-62）

戦後の国内国外での盆栽の広まり

戦後間もない昭和 20 年代には愛好者数が減り、盆栽人気の盛り上がらない時期が続いたが、昭和 30 年代には第 1 回日本盆栽名品展（日本橋・三越百貨店）や皇太子御成婚記念・奉祝日本盆栽名品展の開催、日本水石協会や日本盆栽協会の設立等、盆栽に関する新しい動きが数多く起こり、盆栽展への出品者数も増加した。さらに昭和 40 年代には日本盆栽協同組合が誕生した。

こうした中で、昭和 45 年（1970）には日本万国博覧会の特設会場で「盆栽水石展」が開催され、全国から集めた名作盆栽を半年間にわたって展示した。この展示は国内の盆栽団体の総力を上げて実現させたもので、入場者は 230 万人に上った。同年には愛好者向けの雑誌『盆栽世界』が、昭和 52 年には『近代盆栽』が創刊され、盆栽に関する情報が愛好者に共有されるようになった。また、雑誌で通信販売を手掛けたことにより、それまで不明確だった盆栽の価格設定が明確になり、盆栽は一般の人々にも手の出しやすい趣味となった。このような動きを受けて盆栽人気は高まり、昭和 40 年代には国風盆栽展で入場制限が行われることもあるほどの盛況を見せるようになった。

なお、松平頼寿や酒井忠正をはじめ愛好者が多く、国風盆栽展の第 1 回から出品されていた小品盆栽であるが、昭和 30 年代に盆栽の小型化の動きが高まり、小品盆栽の出展が大幅に増加した。昭和 40 年（1965）前後にはエゾマツの寄せ植えが大流行し、壮大な景色から軽い景色まで幅広く表現できる寄せ植えというスタイルが盆栽界に定着した。昭和 50 年代になると、それまでより文人木や花物の出品は少なくなった。このように、時代背景や技術・用具等の発展等によって、盆栽の造形には時代ごとの流行が見られる。

国内において盆栽を愛好する者の層が広まりつつある中で、海外においても盆栽が広まっていった。既に明治時代のウィーン万国博覧会で盆栽が出品されたのをはじめ、その他万博への出品や欧州等への盆栽の輸出等も行われていた。

昭和 32 年（1957）には吉村西二¹²がアメリカに数十点の盆栽を輸出し、うち 8 点を購入したブルックリン植物園が第 40 回国際花卉展覧会に出品したことが現地の新聞で報道され、更なる輸出につながっていった¹³。その後、昭和 39 年の東京オリンピック開催の折に、日比谷公園で開催された「オリンピック記念盆栽水石展」¹⁴や、日本万国博覧会を契機に海外へと広まっていった。また、平成元年（1989）には世界盆栽大会が日本で開催され、以降 4 年に一度各国で開催されるようになるなど、海外での盆栽への関心が高まっている。

〈主要参考文献〉

- ・ 社団法人日本盆栽協会編『昭和の盆栽譜 ー国風盆栽展五十年の歩みー』日本盆栽協会、昭和 58 年
- ・ 依田徹『盆栽の誕生』大修館書店、平成 26 年

12 吉村西二（1921～1997）は東京の盆栽園に生まれ、後に米国立樹木園の園長となるジョン・クリーチらとの出会いを通じてニューヨークに渡り、アメリカ全土に盆栽を広める活動を行った。

13 日本盆栽協会編『昭和の盆栽譜：国風盆栽展五十年の歩み』日本盆栽協会、昭和 58 年 p. 249

14 昭和 39 年（1964）の東京オリンピックの際には、日比谷公園で「オリンピック記念盆栽水石展」（東京都主催、日本盆栽協会協賛）が開催され、300 余点もの盆栽・水石が展示された。（日本盆栽協会『盆栽大事典 第 1 巻』同朋舎出版、昭和 58 年）

- ・「さいたま市大宮盆栽美術館だより」令和2年8月号（『盆栽春秋』第570号、日本盆栽協会、令和3年）
- ・「さいたま市大宮盆栽美術館だより」令和2年10月号（『盆栽春秋』第572号、日本盆栽協会、令和3年）
- ・「さいたま市大宮盆栽美術館だより」令和3年3月号（『盆栽春秋』第577号、日本盆栽協会、令和3年）
- ・早川陽「昭和初期の盆栽趣味の諸相―『趣味大観』（1935）にみられる自然栽培趣味の記述から―」（『学苑・人間社会学部紀要』No.964、昭和女子大学近代文化研究所、令和3年 p.38-62）

1-5-3 盆栽の国内外における文化的、社会的位置付けや評価

現代社会における盆栽

愛好者と盆栽園

生活文化である盆栽を担い支える人々を考えた場合、盆栽園や盆栽業者の存在と共に、庭に盆栽を並べ、盆栽いじりを楽しむ愛好者が盆栽を支えている。

盆栽を育てる実践者と盆栽を鑑賞する層がほぼ不可分であることが盆栽の大きな特徴といえるが、盆栽の愛好者でも、日常的な手入れは自身で行い定期的なメンテナンスを盆栽園等に依頼する場合や、樹齢 100 年以上の盆栽で手入れが難しい場合、家に盆栽を置く場所がない等の理由により、盆栽園や盆栽業者に所有している盆栽を預けて育成や管理をしてもらう例がある。

また、海外の愛好者が日本の盆栽を購入し、盆栽業者に預けて育ててもらおうというケースもある。近年の傾向としては、盆栽愛好者の高齢化（病気・死亡も含む）により手入れができなくなるケースや、手入れができなくなった盆栽を盆栽美術館等の公共施設に寄贈するケースも増えている。

盆栽愛好の新しい潮流

伝統的な盆栽の愛好者は主として男性の年配者であったが、近年は「小品盆栽」について外国人や若い世代の愛好者が増えている。「小品盆栽」は、現代では庭や床の間等のある家が減り、盆栽を飾るスペースが取れない、あるいは洋風の住宅が増えて純和風の盆栽が似合わないといった住宅事情や生活様式の変化に伴う形で広がっている¹⁵。

SNS で自らの活動を発信する人も多く、写真投稿サイト Instagram の投稿数は令和 3 年 12 月 20 日現在、「#盆栽」が約 64 万件、「#ミニ盆栽」が約 9 万件、「#bonsai」が 304 万件（海外からの投稿も含む）であり、投稿されている画像には「小品盆栽」「ミニ盆栽」も多く含まれる。また、最近では、いずれ盆栽を楽しみたいが現時点では時間や場所等のゆとりがなく実現できないとして、実践はせず、盆栽展等で鑑賞だけを楽しむ層も出てきている。

国内外の盆栽業の概況

盆栽に係る全国団体の活動

盆栽を支える愛好者や、盆栽園をはじめとした盆栽に係る業者等が集まり結成された全国団体が、盆栽に関する普及や振興に係る活動を行っている。令和元年（2019）に文化庁が実施した盆栽団体へのアンケート調査¹⁶では、会員の状況として、男女構成比は男性 98%、女性 2%で、年齢構成比は

15 雑誌『盆栽世界』では、令和 4 年（2022）1～3 月号の 3 か月連続で、特集及び特別企画において小品盆栽を扱っている。前年までは特集及び特別企画で小品盆栽を扱うのは年に 1～2 回であった。

16 『令和元年度生活文化調査研究事業報告書』（文化庁地域文化創生本部事務局、令和 2 年）。なおアンケート調

70代以上が32.3%、60代が25.4%、50代が19.8%と、60代以上が約60%を占めていることが分かる。また、盆栽業者や愛好者が会員となっている一般社団法人日本盆栽協会でも、会員数の減少、高齢化が進んでいる現状がうかがえる。

これらの団体の活動としては、盆栽展や展示会の開催のほか、団体の認定講師による講座開催やインストラクターの養成、盆栽の剪定や培養等の講習会や技術指導、各種イベントへのデモンストラターの派遣、小学校や海外への講師派遣等がある。広報活動は広報誌の発行、ホームページ開設が基本であり、SNSを活用している団体もある。現状における課題としては、会員の高齢化と会員数の減少、財政状況の悪化、情報発信不足等が挙げられる¹⁷。

盆栽展について

盆栽展は愛好者が盆栽を持ち寄って陳列する展示会で、大小様々な規模の盆栽展が全国及び近年では海外においても開催されている。盆栽展では、陳列された盆栽の美しさや状態等が審査され、優れた作品には賞が贈られたり、専門家による相談会や、盆栽苗や鉢等の用具の即売会が行われたりするなど、盆栽に関する情報交換の場・愛好者同士の交流の場としても機能している。

盆栽展のうち最も長い歴史があるのは、一般社団法人日本盆栽協会が主催する国風盆栽展である。第1回展は昭和9年（1934）に東京府美術館（現・東京都美術館）で開催され、令和5年（2023）2月には第97回展が開催されている。国風盆栽展は歴史があるだけでなく、数ある盆栽展の中で最も格式が高く、宮内庁所有の盆栽の特別展示や、皇族のご鑑賞等もある。

この国風盆栽展と、日本盆栽大観展、銘風盆栽展を日本三大盆栽展と呼ぶ。日本盆栽大観展は、日本盆栽大観展組織委員会、日本盆栽協同組合等が主催して毎年11月に京都で行われる。令和4年（2022）11月には第42回が開催された。銘風盆栽展は中部盆栽協会の主催により名古屋で開催され、令和5年1月には第92回展が開催された。そのほか、盆栽作家、盆栽業者の作家性を競う盆栽展として日本盆栽作風展、日本最大の小品盆栽の展覧会として雅風展がある。これら以外にも愛好者が小規模で行う展示会が多数行われている。

盆栽業者・盆栽園の現況

盆栽業者の加盟する日本盆栽協同組合には本部及び15支部があり、組合員数は約230業者を数える。組合に加盟していないところを含めると、全国に約470の盆栽園があると推計される¹⁸。

盆栽園が集積しているのは関東地域で、特に埼玉県、東京都に数多く存在する。盆栽苗の出荷数・出荷額においては、香川県が埼玉県を上回る。特に高松市の鬼無地区・国分寺地区を中心に、同県の

査は、一般社団法人日本盆栽協会、日本盆栽協同組合、公益社団法人全日本小品盆栽協会、日本小品盆栽組合、一般社団法人日本皐月協会の5団体へ送付及び回収を行っている。

17『令和元年度生活文化調査研究事業報告書』文化庁地域文化創生本部事務局、令和2年

18 農林水産省「盆栽の出荷（輸出）数量・出荷（輸出）額の推計について（平成27年）」

（URL: <https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/index-3.pdf> 最終確認日：令和5年1月31日）に、アンケート対象として「関係者の協力を得て把握した全国の盆栽園（473園）」と記載がある。

松盆栽の生産量は国内市場の 80%を占める¹⁹。なお、大宮盆栽村（現・埼玉県さいたま市北区盆栽町）は現在、高級住宅地となっており、地価の上昇により相続税等の負担が高まったこと、また、後継者が育ちにくい環境となったことから、今後の発展、存続が懸念されている²⁰。

海外での盆栽人気の高まりに伴い盆栽の海外輸出は増加傾向にあるが、輸出には検疫や栽培地検査申請等の手続が必要であり、盆栽園が個々で実施するのは負担が大きい。そこで高松市では平成 25 年（2013）、ジェトロ高松の先導により高松盆栽輸出振興会を設立し、盆栽園が共同で海外への輸出を行う体制を確立した。その結果、平成 21 年度までは EU に盆栽を輸出するための栽培地検査申請生産者が 10 名であったが、平成 25 年度末には 19 名と大幅に増加している²¹。

盆栽の輸出状況

・盆栽の出荷数と輸出量

農林水産省が平成 27 年（2015）に行った国内及び国外への盆栽の出荷数量と出荷額の推計によれば、盆栽苗生産者から盆栽生産者に販売される苗木は約 2 万 5,000 本（約 3,000 万円）、盆栽生産者から盆栽作家等に販売される鉢は 4 万 4,000 鉢（約 3 億円）と推計されている。盆栽生産者から国内向けに出荷されるのは 11 万 1,000 鉢（約 8 億円）、輸出は 4 万 4,000 鉢（約 4 億円）と推計されている²²。

盆栽の輸出は昭和 40 年代から始まり、平成時代初期にピークとなったが、平成 20 年代には輸出手続の煩雑化や為替の円高傾向等により、出荷量が伸び悩んだ。政府は平成 28 年（2016）に「農林水産業の輸出力強化戦略」を策定し、中国、ベトナム、香港、EU を主要ターゲットに盆栽の輸出促進に注力した。その結果、平成 29 年より植木・盆栽等の輸出量は増加傾向に転じた。主な輸出先は、中国、台湾、オランダ、イタリア等となっている。

19 日本貿易振興機構香川貿易情報センター『世界に羽ばたく香川の盆栽』香川県農業生産流通課、平成 28 年
(URL: https://www.jetro.go.jp/ext_images/jetro/japan/kagawa/bonsai/jp_pamphlet201711.pdf) 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

20 『平成 23 年度 JAPAN ブランド育成支援事業（戦略策定支援事業）報告書 プロジェクト名：「大宮の盆栽」JAPAN ブランド化プロジェクト』さいたま観光国際協会、平成 24 年

21 東讃農業改良普及センター「海外へ BONSAI の販路拡大！」（『平成 25 年度 普及活動の主要成果(事例)』香川県農政水産部農業経営課、平成 26 年）

22 農林水産省「盆栽の出荷（輸出）数量・出荷（輸出）額の推計について（平成 27 年）」
(URL: <https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/index-3.pdf>) 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

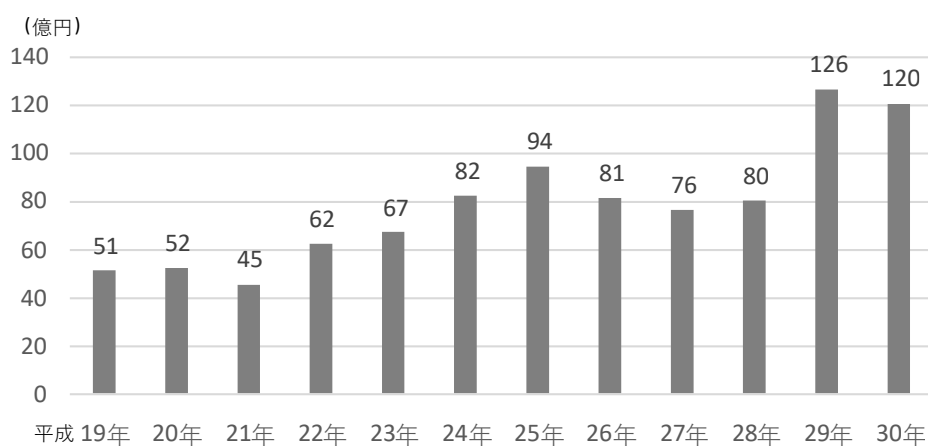


図 1 植木・盆栽・鉢ものの輸出額

出典：平成 19 年から平成 30 年の「貿易統計」（財務省）（URL：<https://www.customs.go.jp/toukei/info/>）を参照し受託事業者が作成した

なお、平成 30 年度から令和 2 年度の、盆栽の国別の輸出量上位国の輸出量及び輸出金額は以下のとおりである。

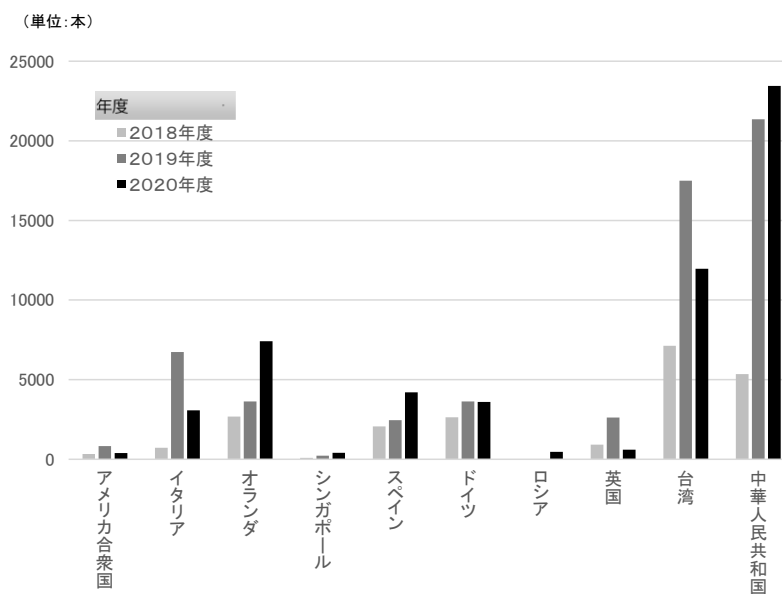


図 2 盆栽の輸出量 上位 10 か国

出典：平成 30 年から令和 2 年の「貿易統計」（財務省）（URL：<https://www.customs.go.jp/toukei/info/>）を参照し受託事業者が作成した

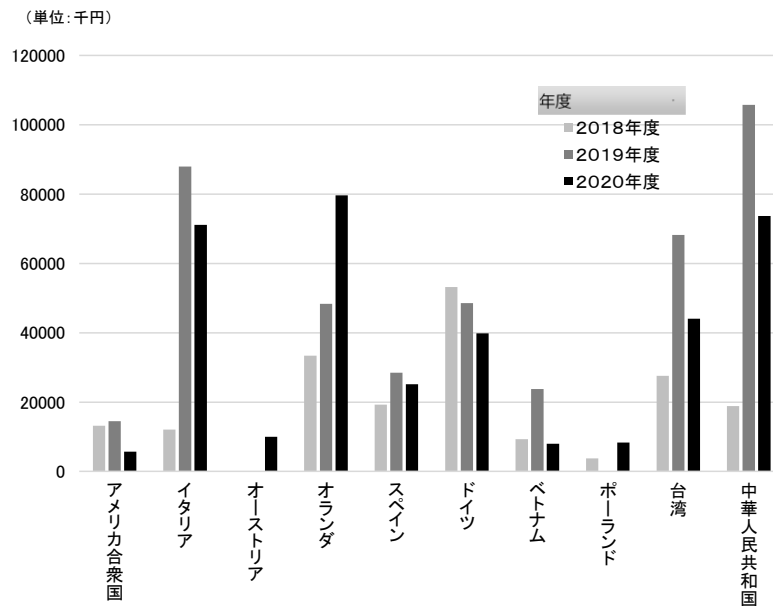


図3 盆栽の輸出金額 上位10か国

出典：平成30年から令和2年の「貿易統計」（財務省）（URL：<https://www.customs.go.jp/toukei/info/>）を参照し受託事業者が作成した

盆栽関係者への評価

国の顕彰制度として、叙勲や褒章等の栄典制度が存在する。また、文化庁が実施する文化庁長官表彰といった顕彰制度もある。このような顕彰制度において盆栽に係る者の文化普及や振興、文化交流等の活動等が功績として評価され、表彰されている。

近年の例を見ると、平成5年（1993）に加藤三郎（社団法人日本盆栽協会理事長）が勲四等瑞宝章を受章、平成25年秋の叙勲で竹山浩（一般社団法人日本盆栽協会理事長）が旭日双光章を、平成30年秋の叙勲では、福田次郎（元一般社団法人日本盆栽協会理事長）が、文化普及功勞により旭日双光章を受章している。

また、外国人叙勲においても盆栽に係る者が叙勲を受けている。平成29年（2017）春の外国人叙勲においては、ケストゥティス・プタカウスカスガリトアニアにおける盆栽を通じた日本文化の紹介・普及に貢献した功績を認められ、旭日単光章を受章している。令和2年（2020）春の外国人叙勲では、エドガルド・オノラト・ホルヘ・ホブ（ドミニカ盆栽協会会長）が、盆栽普及を通じたドミニカ共和国における日本文化の紹介及び日本・ドミニカ共和国間の友好親善に大きく貢献した功績により、旭日双光章を受章している。

文化庁が実施する文化庁長官表彰では、平成18年度（2006）に木村正彦（盆栽作家・社団法人日本盆栽協会理事）、平成29年度に福田次郎（元一般社団法人日本盆栽協会理事長）、平成30年度に小西幸彦（元第11回アジア太平洋盆栽水石大会実行委員長・小西松楽園園主）、令和2年度（2020）に小林國雄（盆栽作家・春花園 BONSAI 美術館館長）、令和4年度に鈴木亨（盆栽作家・大樹園主・宮内庁盆栽庭園管理（代表）・（一社）日本盆栽協会常任理事）が表彰されている。

このように、盆栽の振興や普及啓発、盆栽普及を通じた文化交流に貢献した者が評価されているなど、現代社会において、盆栽は日本の文化芸術分野の一つとして位置付けられているといえる。

表 1 盆栽関係者の表彰一覧

受章年度	氏名	主要経歴	叙勲・褒章・表彰
平成 5 年 (1993)	加藤三郎	社団法人日本盆栽協会理事長	勲四等瑞宝章
平成 18 年 (2006)	木村正彦	盆栽作家・社団法人日本盆栽協会理事	文化庁長官表彰
平成 25 年 (2013)	竹山浩	一般社団法人日本盆栽協会理事長	旭日双光章
平成 29 年 (2017)	ケストゥティス・プタカウスカス	リトアニア盆栽協会会長	旭日単光章 (外国人叙勲)
平成 29 年 (2017)	福田次郎	元 一般社団法人日本盆栽協会理事長	文化庁長官表彰
平成 30 年 (2018)	福田次郎	元 一般社団法人日本盆栽協会理事長	旭日双光章
平成 30 年 (2018)	小西幸彦	元 アジア太平洋盆栽水石大会実行委員長 (第 11 回)・小西松楽園園主	文化庁長官表彰
令和 2 年 (2020)	エドガルド・オノラト・ホルヘ・ホブ	ドミニカ盆栽協会会長	旭日双光章 (外国人叙勲)
令和 2 年 (2020)	小林國雄	盆栽作家・春花園 BONSAI 美術館館長	文化庁長官表彰
令和 4 年 (2022)	鈴木 亨	盆栽作家 大樹園主 宮内庁盆栽庭園管理 (代表) (一社) 日本盆栽協会常任理事	文化庁長官表彰

海外からの評価と国際発信

海外における盆栽への評価

現在、盆栽は国内だけではなく海外にも広がり、その名称も日本語のまま「BONSAI」で通用している。

海外において盆栽を愛好する者は、欧米をはじめ、中国、韓国、台湾等のアジア圏においても増えている傾向が見られ、各国では、盆栽展や盆栽教室が開催され、それぞれの国の自然を表現する独自の盆栽も見られるようになっている。

・外国人が見た鉢木

今日のように盆栽が外国人の中で愛好されるようになる状況以前、盆栽はどのような評価をされ

ていたのか。まず、幕末や明治時代に日本を訪れた外国人の著作物の記述からは、当時の鉢木等を見た外国人の感想や評価についてうかがい知ることができる。

万延元年（1860）に日本の園芸植物の採取を目的として来日したロバート・フォーチュンは、巣鴨にある植木屋を訪れ、そこに置かれた鉢木や樹木を植えた鉢の意匠、飾り砂等や、鉢木を仕立てる技術について記述を残している²³。次に、慶応元年（1865）に来日したハインリッヒ・シュリーマンが記した“CHINA AND JAPAN IN THE DAY”（邦題：『シュリーマン旅行記 清国・日本』）では、苗木園にある様々な植木鉢の鉢木について述べており、庭師によって矮小化された樹木や、動物の形に整えられた樹木の姿に驚嘆を覚えていることが記載されている²⁴。

明治6年（1873）に来日したバジル・ホール・チェンバレンは、日本の海軍の兵寮で英語を教えていたほか、東京帝国大学（現：東京大学）の教授として日本語学や言語学を担当する教授を務めた人物で、和歌や謡曲の翻訳を行うほか、様々な日本文化への関心も高く、その内容が“THINGS JAPANESE”（邦題：『日本事物誌』）としてまとめられている。当該書籍の「庭園（Gardens）」という項目において盆栽についての記述が見受けられ、日本の庭園及び庭園術を美術と評するほか、盆栽を園芸の傑作品であるとし、60年の樹齢を超えたマツやモミジが、30cmほどに矮小化されつつもその姿が完全なものであると評している²⁵。

次に、明治10年（1877）に来日したアメリカの動物学者エドワード・シルヴェスター・モースが、第1回内国勸業博覧会の農業館の様子について“JAPAN DAY BY DAY”（邦題：『日本その日その日』）に記述しており、「蛸作り」された松を見て「怪奇極まる」と評している。また、庭園に招かれた際に見かけた一見枯れ木のような姿を持つ矮小化された鉢植えの梅の木が、美しい花を咲かす様を見て、その奇観を作り出す庭師の技巧に驚嘆したことを記している²⁶。そのほか、“JAPANESE HOMES AND THEIR SURROUNDINGS”（邦題：『日本人の住まい』）では、日本庭園に置かれた梅の盆栽のねじれ曲がった枝等を見て「怪奇な展示のために選ばれたみたいだと思ふ人がいても不思議ではないだろう」と述べている。しかし、その一方でモースは、植物の生命力を引き出す技術に対して「園芸の魔術」と讃嘆している²⁷。

以上のような記述では、現在の盆栽の仕立てが形成される以前の鉢木等に対する外国人の評価がうかがい知ることができる。マツ等の植物を「蛸作り」のような形に仕上げたものや、矮小化した松や紅葉を見る機会を得た外国人達は、植物を矮小化する技術やその姿形に驚き、感動をしていたことが分かる。

このように、幕末から明治時代にかけて来日した外国人による鉢木への評価がある一方、明治時代以降において海外の博覧会において、出品された鉢木や盆栽に関する評価も見受けられる。

明治6年（1873）、明治政府が初めて参加したウィーン万国博覧会において、西洋における日本趣味の流行に合わせた展示が行われた中で、盆栽も出品されている。続いて明治9年のフィラデルフ

23 ロバート・フォーチュン著、三宅薫訳『幕末日本滞在記』講談社、平成9年

24 ハインリッヒ・シュリーマン著、石井和子訳『シュリーマン旅行記 清国・日本』講談社、平成10年

25 バジル・ホール・チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌1』平凡社、昭和44年

なお原文では、「dwarfing」と記載されており、矮小化した樹木のことについて述べられており、当時の鉢木もしくは盆栽に対しての記載だと推察される。

26 エドワード・シルヴェスター・モース著、石川欣一訳『日本その日その日』講談社、平成25年

27 エドワード・シルヴェスター・モース著、斎藤正二訳、藤本周一訳『日本人の住まい』八坂書房、令和3年

ィア万博、明治 11 年、明治 22 年、明治 33 年のパリ万博でも盆栽が展示された。

このうち、明治 11 年（1878）のパリ万博で展示された盆栽や盆景について、イギリスで刊行されていた園芸雑誌 “*The Gardeners’ chronicle.*” では、その仕立ての姿を酷評し、奇妙なものとして捉えられていたことがうかがえる一方、ジャポニズムの影響もあって、出品された盆栽は現地で買い上げられ、管理や育成が必要となったため職人が呼び寄せられるなど関心が持たれていたこともうかがえる²⁸。

この間にも、アメリカやヨーロッパ向けに盆栽が輸出される等の取組がされていた。明治 30 年（1897）頃には日本古美術の海外への販売で知られる山中商會が、ボストン支店に園芸部門を開設しており、そこでは盆栽類が販売されていた²⁹。このボストンやニュージャージーにおいては盆栽がオークションに出品され、盆栽の紹介等も行われてきた。昭和 12 年（1937）に開催されたパリ万国博覧会では、審査会において最高賞となる大賞を盆栽が獲得するなど³⁰、欧州における盆栽への理解が少しずつ進展していったことが分かる。

世界盆栽大会

4 年に 1 回開催される世界盆栽大会は、世界中の盆栽愛好者が一堂に会する大イベントである。第 1 回世界盆栽大会は平成元年（1989）に大宮市（現・さいたま市）で日本盆栽協会の主催により開催され、同年、世界盆栽友好連盟（WBFF）も発足した。その後、アメリカ、韓国、ドイツ等、世界各国で開催された。平成 29 年の第 8 回大会は 28 年ぶりの日本開催であり、40 の国と地域から約 4 万 5,000 人が参加した³¹。大会では盆栽の名品の陳列や、国内外の著名盆栽作家によるデモンストレーション、子供盆栽の展示、盆栽苗や用具の販売等が行われたほか、輸出向け売店コーナーには農林水産省による植物検疫カウンターが設置された³²。

盆栽の国際発信について

・盆栽団体や自治体による国際発信の例

一般社団法人日本盆栽協会のように海外支部を持つ団体は、支部を拠点に研究発表会や特別教室

28 菅靖子「両大戦間期イギリスの空間のジャポニズムにみる生け花・盆栽の影響」(『デザイン学研究』第 4 号、日本デザイン学会、平成 22 年)

29 朽木ゆり子『東洋の至宝を世界に売った美術商 ハウス・オブ・ヤマナカ』新潮社、平成 23 年

30 『一九三七年「近代生活ニ於ケル美術ト工芸」巴里万国博覧会協会事務報告』巴里万国博覧会協会、昭和 14 年

31 記者発表資料「『第 8 回世界盆栽大会 in さいたま』実施状況を報告します」(URL: https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11561745/www.city.saitama.jp/006/014/008/003/006/006/p000000a_d/fil/290915sekaibonsaitaikai.pdf) によれば、メイン会場（さいたまスーパーアリーナ、大宮ソニックシティ、パレスホテル大宮）への来場者が 4 万 5,000 人、登録者（一定の登録料を払い、期間中に実施される全てのプログラムに参加する盆栽の愛好者）として国内 438 人、海外 777 人が参加している。

32 さいたま市経済局商工観光部観光国際課「第 8 回世界盆栽大会 in さいたま大会概要について」(URL: https://www.city.saitama.jp/006/007/002/015/009/p0419691_d/fil/0129-1shiryou.pdf) 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

を開催している。そのほか、盆栽業の盛んな自治体が盆栽の PR 動画を作成して動画投稿サイトで公開したり³³、盆栽関連企業が多言語で盆栽の情報を発信するポータルサイトを開設したりするなど、多様な媒体を用いて国際発信が行われている³⁴。著名な盆栽園の園主が海外の盆栽イベントに招かれ、デモンストレーターや講師を務める例や盆栽の剪定等の指導を行う例もある³⁵。

また、さいたま市大宮盆栽美術館では国内外における盆栽文化の普及を目的とした盆栽専門の学習プログラム「さいたま国際盆栽アカデミー」を開講しているが、新型コロナウイルス感染拡大前には英語の通訳補助をつけた外国人向けコースも開講していた。

・国が支援する国際発信の例

国が支援する国際発信の例としては、文化庁が芸術家、文化人等、文化に携わる方々を一定期間「文化交流使」として指名し、海外へ派遣する「文化庁文化交流使」において、平成 19 年（2007）、25 年、令和元年（2019）に盆栽作家や盆栽師をアメリカやカナダ、ヨーロッパの各国に派遣している³⁶。また、観光庁が平成 24 年度ビジット・ジャパン事業の一環として、欧州の盆栽愛好家協会や盆栽ショップを通じて盆栽関連の日本の観光地・観光資源を紹介し、欧州盆栽ファンの訪日意欲の喚起を図るプロモーション事業が行われた。

外務省は令和元年（2019）の日本ブランド発信事業において、日本で盆栽園を営むアメリカ人盆栽師をアメリカに派遣し盆栽の魅力を発信した。また、国際交流基金でも盆栽作家らを世界各国に派遣し、盆栽の紹介やワークショップ等を行っている。また、令和 2・3 年 9 月には在カナダ日本大使館がオタワ盆栽協会とオンラインで盆栽展を開催した例もある。

〈主要参考文献〉

- ・ 日本盆栽協会編『昭和の盆栽譜 一国風盆栽展五十年の歩み』日本盆栽協会、昭和 58 年
- ・ 日本盆栽協会『盆栽大事典 第 3 巻』同朋舎出版、昭和 58 年
- ・ 丸島秀夫・南伸坊『盆栽 癒しの小宇宙』新潮社、平成 15 年
- ・ 依田徹『盆栽の誕生』大修館書店、平成 26 年
- ・ 農林水産省 農産局（旧生産局）「盆栽の出荷（輸出）数量・出荷（輸出）額の推計について」、平成 27 年
- ・ ジェトロ香川 パンフレット『世界に羽ばたく香川の盆栽』、平成 28 年

33 令和元年（2019）、高松市は特産の松盆栽を海外に PR するため、動画「盆栽 de ボンジュール」を制作し、動画投稿サイト YouTube で公開。令和 3 年（2021）12 月 21 日現在、再生回数は 10,535 回に上る。

34 日本盆栽の情報ポータルサイト『JAPAN BONSAI』 株式会社東京盆栽倶楽部が日本盆栽協同組合の協力のもとで運営しているサイトで、日・英・中・台の 4 か国語で盆栽の情報や、盆栽関連の商品・サービスを発信している。

35 秋山実氏（秋山盆栽園）が平成 28 年（2016）の U.S. National Bonsai Exhibition でデモンストレーションを実施、令和元年（2019）のイタリアの Crespi Cup 2019 では鈴木伸二氏（大観盆栽美術館）がデモンストレーションを実施したなどの例がある。

36 平成 19 年（2007）に中村享氏をカナダに、平成 25 年には平尾成志氏をリトアニア、イタリア、フランスをはじめ 9 か国に、令和元年（2019）には森隆宏氏をカナダ、アメリカ、オーストラリア、シンガポールに派遣した。

(URL:https://www.jetro.go.jp/ext_images/jetro/japan/kagawa/bonsai/jp_pamphlet201711.pdf) 最終確認日 :
令和5年1月31日

- ・農林水産省「花きの現状について（平成31年4月）」
- ・金融財政事情研究会発行『第14次 業種別審査事典』きんざい、令和2年
- ・財務省貿易統計

1-6 錦鯉の歴史と現状

1-6-1 錦鯉の概要

錦鯉について

錦鯉とは

日本庭園等の池で群泳する錦鯉は、それぞれが千差万別な模様を持ち、「泳ぐ宝石」「泳ぐ芸術品」「生きた錦絵」とも称されている。これら錦鯉は、日本の養魚環境や生産・飼育技術、用具（器具類）の開発等を通じて改良された観賞用¹コイであり、広く観賞²の対象として親しまれている。

これら錦鯉は、生物学的には日本の河川や湖沼に棲むマゴイと同種であり、近年の DNA 研究によって、日本に生息する大多数のコイが大陸のコイと遺伝的に関連することが指摘されている³。日本では、コイを食材として利用し、食用コイの飼育が行われてきた。それら飼育されたコイの中に、稀に色鮮やかなコイが生まれることがあり、突然変異によって生まれたその個体を交配・選別し観賞用コイとして賞翫するようになっていった。

錦鯉の生産・飼育技術

・錦鯉の品種と系統

錦鯉の生産・飼育は江戸時代の中越地域に始まるといわれ、以来、より美しい個体をつくるための技術が積み重ねられ、多くの品種が生み出されてきた。

代表的な品種⁴として「紅白」（白い地肌に赤い模様を持つもの）、「大正三色」（白い地肌に赤と黒の模様を持つもの）、「昭和三色」（黒い地肌に赤と白の模様を持つもの）があり、「錦鯉の御三家」と言われている。現在、これら御三家を含めて、色彩や模様、斑紋等の特徴が異なる約 100 種類を超える品種が存在し、系統⁵等により体系化されている。こうした品種改良やその安定的存続において、

1 令和4年2月24日に制定され錦鯉の日本農林規格（JAS）では、「錦鯉」という用語を「観賞用として外観上の特性を有した鯉（*Cyprinus carpio*）の総称」、また「外観上の特性」という用語については「体形、地肌の色、斑紋、サイズ（全長・体高・体重等）、光り方等、外観上の特徴的な性質」と定義している。※「日本農林規格 錦鯉一用語」（URL：https://www.maff.go.jp/j/jas/jas_kikaku/attach/pdf/kikaku_itiran2-416.pdf）を参照した。

2 錦鯉の観賞は美術品に近く、「鑑賞」と表記する場合もあるが、本報告書では「観賞」の表記を用いる。

3 菅豊「新しい科学的知見が動物文化に与える影響—錦鯉を題材に—」（『家畜資源研究会報』19、家畜資源研究会、令和2年 p.8-20）

4 錦鯉の「品種」について、菅豊「錦鯉と鯉師の歴史と文化」（『生き物文化誌バイオストーリー』第3号 生き物文化誌学会、平成17年 p.38-47）では、「他の家畜動物のように、表現形質が固定されて均質性と永続性を持った個体群ではない」と解説されている。

5 系統とは、菅豊「錦鯉と鯉師の歴史と文化」（『生き物文化誌バイオストーリー』第3号 生き物文化誌学会、平成17年 p.38-47）によると「錦鯉の良好な形質が次世代にある程度安定して伝わるライン」であり、優れた錦鯉を生み出した錦鯉生産者（養鯉業者）の屋号が冠されて語られることも多い。例えば、明治22年

（1889）に蘭木（現・新潟県小千谷市）の広井國蔵が作出し現在の紅白の起源となった「五助更紗」（五助は國蔵の広井家の屋号）と種々の系統の紅白の掛け合わせから、大正時代には「治右衛門系」等、昭和時代には「友右衛門紅白」「弥五左衛門紅白」「田村屋紅白」「万蔵紅白」「仙助紅白」など多くの紅白の系統が生まれている。

錦鯉生産者（養鯉業者）が継承する生産・飼育技術や知見、経験が不可欠なものとなっている。

・錦鯉の生産及び飼育技術

錦鯉の生産プロセスは「親魚の選定」→「交配・産卵」→「選別」であり、親魚を掛け合わせる「交配」では、昔は自然交配だったが、現在はふ化率の高さや親魚を特定し系統保存しやすいという理由から人工交配が一般的になっている。産卵では、1尾の雌から10万～40万粒の卵が産卵され、4～7日で孵化して稚魚となる。

それら大量の稚魚の中から、色彩や斑紋等が良い固体だけを選んでいく作業が「選別」である。選別作業は通常4～5回程度行われ（ふ化後1週間程度で1回、7～9月の間に2回、越冬施設に入れる前に1回等）、生産者によっても異なるが、当初の稚魚全体の1～2％程度にまで選別を行う⁶。さらに翌年春、その時点で販売する個体と成長させる個体に選別する。後者は「立て鯉」と呼ばれ、夏の間、養鯉池^{ようりいけ}で成長させ、同年秋以降、「二歳」の錦鯉として愛好者や流通業者に売却される。ただし、将来の優良錦鯉と見込まれる立て鯉は成魚になるまで飼育が続けられる。その成長過程でも選別され、最終的に成魚となって品評会に出品されるのは、ごくわずかである。

このように、錦鯉は何度もの「選別」を経て作りあげられる観賞魚であるため、その生産過程では、選別する技術が何より重要になってくる。育種や交配の技術は科学の進歩によって変化し、近代化されているが、稚魚から成魚になるまで、将来の色調など品質がどのように変化するか等を予測して、その都度手作業で選別する。その際の選択眼・鑑識眼は経験や直感に負うところが大きい。

加えて、日本では個々の錦鯉の美しさの評価等も体系化されており⁷、生産者及び愛好者は、それを共有することで、より美しい錦鯉を作りあげ、観賞する文化を育んできた。錦鯉の愛好者が世界的に広がっている現在、日本の審美的な評価基準はほぼグローバル・スタンダードになっている。

錦鯉の観賞と品評会

・観賞の仕方と観点

品種や系統によって多様な姿を持つ錦鯉は、その姿を上から見て観賞する方法（上見^{うわみ}）が基本となっており、錦鯉の体形、色彩、斑紋などが錦鯉を観賞して楽しむためのポイントとなっている。

まず、体形としては、背筋の具合や、体の大きさ、尾鰭や胸鰭等の鰭、頭部の形等が、観賞する時の観点として挙げられる。例えば、背筋であればまっすぐ反りが少ない方が美しいとされているほか、体高・体長・体幅等の均衡がとれているかどうか、尾鰭や胸鰭が美しく欠損が無いかどうか、頭部の形が整っているかどうか、観賞を楽しむ際のポイントになっている。

錦鯉の色彩は、品種や系統によっても赤や白、黒など多様であるが、基本的に色ははっきりと鮮明に出ているものが美しいとされている。例えば、白であれば純白に近いものが美しいとされ、その他の色でも、色がぼやけていない、シミなどが無い方が良いとされている。

斑紋も色彩と同様に品種や系統によって異なるが、頭から背中にかけて表出する斑紋がどう出て

6 青柳聡「山古志における養鯉業の実態と今後の課題」（『福祉社会開発研究』No. 1、東洋大学福祉社会開発センター、平成20年 p. 111-115）

7 錦鯉の評価では、上から見た（上見^{うわみ}）体形・色彩・模様の3点が重視される。

いるかを観賞する。体の左右で偏りがないほうが良いとされる他、体のどこに斑紋が表出しているか、色彩と斑紋と合わせた全体のバランスも、観賞する際のポイントとなっている。

また、錦鯉の観賞は上から見ることを基本としているが、昨今では錦鯉を水槽で飼育することも行われている関係で、横から観賞が行われることもある⁸。

・錦鯉品評会

錦鯉を飼育し観賞して楽しむほかに、飼育している錦鯉を「品評会」に出品して評価を競う楽しみ方もある。

錦鯉の品評会では、愛好者等が飼育する錦鯉が出品され、錦鯉の観賞知識や鑑識眼に長けた審査員によって品評が行われる。出品される鯉は、品評会ごとに規定された、品種や体長による出品区分によって分けられる。品評を行う時は、専用のプールに放たれた錦鯉を審査員が審査し、その評価を決めていく。

次に品評会の規模感としては、生産者・流通業者団体である一般社団法人全日本錦鯉振興会が主催する「全日本総合錦鯉品評会」や、錦鯉愛好者の全国団体である一般社団法人全日本愛鱗会が主催する「(一社)全日本愛鱗会国際錦鯉品評会」のような全国規模で開催される品評会をはじめとして、各団体の支部単位で行われるものや、地方等で小規模に行われるものなど様々である。また、若鯉や幼魚等の錦鯉の体長に限定して品評会が開催されている場合もある。

こういった品評会は、会を主催する団体や錦鯉に関連する業者や愛好者によって運営が行われており、審査は、団体に所属する会員等が審査員を務め錦鯉の品評を行っている⁹。

担い手について

錦鯉流通の全体構造

基本的に錦鯉は商品として流通し、錦鯉を観賞・飼育する文化を担っているのは、錦鯉の生産者、購入する愛好者、そして両者を取り持つ流通業者である。

第二次世界大戦後しばらくは、生産地での“庭先販売”等を通じて、その個体を見そめた人への直接販売が中心だった。現在は、通常、流通業者を経て愛好者の手に渡る。ただ、愛好者が生産地に赴き、自分の目で確かめて直接購入するという商習慣も根強く残っている。

生産者、流通業者、愛好者の三者の接点には、品評会がある。新潟県の山間部で開催されていた錦鯉を含めた農業産品品評会等を前身に、昭和40年代に錦鯉単体の品評会というシステムが確立された。参加者がその年の自慢の錦鯉を持ち寄り、サイズや品種ごとに賞を授与するイベントで、オークション等もあわせて行われる。毎年、顧客対象のミニ品評会から市町村単位、県単位、九州や関東といった地区単位、全国レベルまで、様々な規模の品評会が開催されており、全国レベルの品評会

8 アクアライフ編集部編『増補改訂版 錦鯉の飼い方 池でも水槽でも楽しめる』（株式会社エムピージェー、令和2年）p. 88-103

9 (一社)全日本愛鱗会の場合、「公認審査員規則」が定められており、審査員として適格であるかどうかの基準が設けられている。

には業界団体主催の「全日本総合錦鯉品評会」、愛好者団体主催の「(一社) 全日本愛鱗会国際錦鯉品評会」等がある。

品評会は、生産者側にとっては入賞して名誉を獲得する場であるとともに、商談の場でもある。錦鯉の取引における販売価格は、生産者と取引相手との交渉で決められる。錦鯉は、アート作品同様、大きさや体形、色彩や斑紋の美しさといった美的希少価値によって値段が付けられ、大規模品評会で高い評価を得た上位クラスの錦鯉は高値で売買されることも多い¹⁰。

加えて、一般的な供給側と観賞側の関係は供給側が生産の知識を持ち、観賞側は観賞の知識を持つというものであるが、錦鯉の場合は、生産者も錦鯉を楽しむ愛好者であり、愛好者の中には生産者の指導を受けながら自家産の錦鯉づくりを楽しむ人等がいる。それぞれが立場を超えて錦鯉の美しさやその観賞に商品という以上の価値を見いだしている人々であり、密接な関係性が見られる。単に生産者と愛好者という二項対立では語れない側面があり、品評会の開催等でも生産者・流通業者団体と愛好者団体の双方が協賛等の形で協力し合うことが多い。

錦鯉の生産者・流通業者団体について

錦鯉の国内最大の生産者・流通業者団体には、昭和 45 年（1970）に結成された一般社団法人全日本錦鯉振興会がある。令和 4 年（2022）2 月現在、493 名の会員を擁し、機関誌『月刊錦鯉』を発行するとともに、毎年、全国レベルの「全日本総合錦鯉品評会」「錦鯉全国若鯉品評会」「国際錦鯉幼魚品評会」をはじめ地区・支部単位でも品評会を行い、優れた錦鯉を出品した生産者を表彰している。海外 25 か国にも 194 名の会員がいて、アジアや欧米各国の品評会に審査員を派遣する等協力している。

また、錦鯉の「飼育士」制度を設けているほか、農林水産省のイベントや観賞魚協会のイベント等への講師の派遣や錦鯉の出品、小学校等へ講師派遣等を行って錦鯉への理解促進、錦鯉産業の振興を図っている。

錦鯉の愛好者団体について

錦鯉愛好者の全国的な組織には一般社団法人全日本愛鱗会がある。海外でも“ZNA（Zen Nippon Airinkai）”の名で知られる世界最大の錦鯉愛好者組織で、令和 4 年（2022）2 月現在、国内会員数 556 名、海外会員数 720 名を擁し、毎年、全国レベルの「(一社) 全日本愛鱗会国際錦鯉品評会」を開催し、地区・支部単位で品評会も行っている。海外には 15 か国 31 支部があり、毎年「ZNA アジアカップ錦鯉品評会」¹¹等を主催している。また、品評会での審査員資格の制度を設けているほか、飼育・観賞の指導を通じて錦鯉を観賞する文化の向上に取り組んでいる。

10 日本政策投資銀行新潟支店「新潟県内錦鯉産業の『強み』～更なる発展に向けて～」(『DBJ 新潟支店レポート』、平成 30 年)

11 平成 20 年（2008）から、シンガポールを含む中国、インドネシア、マレーシア、台湾、香港、タイの 7 か国が毎年持ち回りで開催している。

海外の愛好者・愛好者団体について

昭和時代前半から錦鯉の海外輸出が手がけられ、海外にも錦鯉愛好者は多く存在し、それぞれの地域で愛好者や生産者・流通業者の組織も生まれている。

例えば、南米には「ブラジル錦鯉愛好会（ABN）」があり、日本の（一社）全日本愛鱗会のブラジル支部にも認定されている。同会は当地の日系人が自らの出自に連なる日本文化に愛着を持ち、錦鯉という故郷の新たな文化を受け入れたことから生まれた錦鯉愛好者団体であるが、英国には非日系人によって結成された「ブリティッシュ・コイ・キーパーズ・ソサエティ（BKKS）」がある。現在、同会は英国内に 15 支部を構え、会員数約 700 名を擁する英国最大の錦鯉愛好者団体であり、主催する全国品評会には約 2,000 人が訪れる。なお、英国内には、BKKS のほか、中小規模の 15 の錦鯉愛好者団体（愛鯉クラブ）があり、うち 7 団体が品評会を開催している。

また、オランダ錦鯉協会（NVN）は、平成 5 年（1993）から毎年夏に全ヨーロッパ的な品評会「オランダ・コイ・ショー」を開催していることで知られ、同イベントにはヨーロッパ各地から 2 万人を超える人が訪れている。

〈主要参考文献〉

- ・黒木健夫『新版 錦鯉入門』新日本教育図書株式会社、昭和 61 年
- ・菅豊「錦鯉と鯉師の歴史と文化」『生き物文化誌バイオストーリー』第 3 号 生き物文化誌学会、平成 17 年 p.38-47)
- ・星野 〆 他監修『錦鯉問答』新日本教育図書、平成 19 年
- ・菅豊「グローバル時代を生きる錦鯉ー日本文化の拡散と脱国際化、現地化ー」（松井健、野林厚志、名和克郎編『国立民族学博物館論集 1 生業と生産の社会的布置ーグローバリゼーションの民族誌のためにー』岩田書院、平成 24 年 p.269-298)
- ・『鱗光』編集部編『錦鯉 A～Z 錦鯉の教科書』新日教育図書株式会社
- ・アクアライフ編集部編『増補改訂版 錦鯉の飼い方 池でも水槽でも楽しめる』株式会社エムピージェー、令和 2 年
- ・50 周年記念誌編集委員会企画・構成『全日本錦鯉振興会 50 年記念誌』全日本錦鯉振興会、令和 2 年
- ・『令和元年度生活文化庁調査研究事業 報告書』文化庁地域文化創生本部事務局、令和 2 年

1-6-2 錦鯉の歴史

錦鯉の誕生

資料的には定かになっていないが、地域の伝承によれば、錦鯉の歴史は今から 200 年ほど前の文化・文政期（1804～1830）、現在の新潟県小千谷市から長岡市山古志にまたがる山間部、二十村郷と呼ばれた地域で始まったとされている¹²。

二十村郷では急峻な傾斜地を開墾し、幾重にも棚田を設け、その一部や溜池を使って、副収入源また冬場のタンパク源として食用コイを飼育していた。それら食用コイの中に、まれに突然変異で赤やまだらな色付きのコイが出現し、郷の人々は、農業の傍ら、体色変化したコイの中でもことさら美しい色と模様を持つコイを選び、人為的に交配させて愛玩した。徐々にその楽しみが中越地方一帯に広がり、質の良い個体が売買されるようになったと言われる。

明治時代に入ると、二十村郷の錦鯉の生産・飼育はより盛んになった。明治 7 年（1874）に「東京に『飼鯉』大小 16 尾を送り、33 円の収益をあげた」¹³という資料が発見されており、当時の 33 円は米 4.5 石（約 680 kg）に相当し、食用コイではなく、観賞用コイとして高額で取引されていたことがうかがえる。

ただ、当時は、黒地の食用コイから少し変異して紅一色や黒い斑点が混じった「緋鯉」や、「浅黄」（薄い藍色がかかった色合いで整然とした網目の美しい模様を持つ）など数種類の観賞用コイしか存在しなかった。それら模様のある観賞用コイは「錦鯉」とは呼ばれず、「模様鯉」「変わり鯉」「色鯉」「花鯉」等の名称で呼ばれていた。現在のような多様な模様を持つ華麗な錦鯉が生まれるのは、明治 22 年（1889）に新潟県小千谷市蘭木の広井國蔵が新品種「紅白」を作り出して以降のことである。

以後、多品種化が進行していったが、その背景には、明治時代のヨーロッパの育種技術の導入等もあった。また、明治 37 年（1904）には、品種改良研究のためにドイツ鯉が日本に寄贈された。ドイツ鯉は、鱗が整然と並ぶ和鯉に対して、鱗が一片あるいは乱雑に並び、また鱗がないものもある。そうしたドイツ鯉とそれまで作りだしていた錦鯉との交配で、品種改良の幅が広がった。

東京大正博覧会を契機とした国内への錦鯉の認知拡大

明治時代以降、都市部の富裕層等が錦鯉を購入することはあったものの、基本的に錦鯉を観賞する文化は錦鯉の産地とその周辺が中心で、品種開発等についても広く知られることはなかった。錦鯉が全国的に知られる大きな転機となったのは、明治から大正への改元記念として東京・上野公園で開催された大正 3 年（1914）の「東京大正博覧会」である。

12 新潟県水産試験場編（越田秀包著）『農家の副業的養魚法（上）』（新潟県農会、昭和 6 年）には「又文化、文政の頃には眞鯉の外緋鯉、白鯉を飼育し、緋鯉と白鯉の交配によつて白色素地の腹部に緋の斑紋あるもの、又白鯉の鰓蓋にのみ緋の斑紋あるもの（俗に頬赤又はスツトンといふ）を出し。又天保年間には漸次改良して頭巾被り（前頭半分紅色のもの）面被り（頭の全部紅色のもの）口紅（口吻紅色のもの）を出し、尚研究して更紗（白鯉背部に紅色の色彩斑點あるもの）を出すに至つたと傳へてゐる。」と錦鯉産地の伝承が記されている。

13 山古志村史編集委員会編『山古志村史 通史編』山古志村、昭和 58 年

旧二十村郷のうち東山村・竹沢村の人々は東山村竹沢村鯉魚出品組合を結成し、同博覧会に錦鯉 23 尾を出品、水産館展示場に 18 尾が展示された¹⁴。同博覧会には 4 か月間で延べ 750 万人が来場し、多くの人が錦鯉の美しさを知ることになった。同博覧会を行啓した皇太子・裕仁親王（後の昭和天皇）も非常に気に入られたと伝えられており、会期中に 8 尾が東宮御所に献納された。

ただ、この時点でも“越後の「変^{かわりごい}鯉^{いろこい}」（＝色鯉）”と呼ばれていた。「錦鯉」という呼称が登場するのは、その 3 年後である。大正 6 年（1917）に山古志村竹沢の星野栄三郎が「紅白」と並ぶ品種「大正三色」を作り出したとき、コイの品種改良を指導していた阿部圭新潟県水産主任官が新品種の色・模様が鮮やかな三色鯉を「錦のような鯉」と表現したことから錦鯉という呼称が生まれたと言われ、昭和時代初期、新潟県出身で東京日本橋・高島屋百貨店で観賞魚店を営んでいた井上菊雄が本格的に錦鯉を商品名として販売し、その呼称が日本全国に拡大していった。

東京大正博覧会後も、京都で開催された大正 13 年（1924）の「東宮殿下御成婚奉祝万国博覧会参加 50 年記念博覧会」や大正 14 年（1925）の「全国副業展覧会」等に錦鯉が出品された。また、大正 15 年（1926）には虫亀（現・新潟県長岡市）から摂政殿下（皇太子裕仁親王）に錦鯉 5 尾を献上している。博覧会という近代的メディアでの露出や、当時の有力者・貴人に錦鯉の観賞を浸透させることによって、錦鯉は国内の人々により注目されるようになる。昭和 8 年（1933）の新宿伊勢丹屋上で行われた錦鯉展では、相馬子爵等の華族や久邇^{くにおみやけ}宮家など皇族が飼育する錦鯉も出品されたという。

その結果、錦鯉の流通は全国的に拡大した。昭和時代初頭の新潟県農会の記録には「京都を主とし、大阪、岐阜、金沢、富山、山形、長野地方に販出され…東京には当歳魚より一尺二、三寸くらい迄のものの多数出荷され…亦愛知、秋田、福島^{ふくしま}の諸県にも販出される」との記述が見られる。

また、前出の井上菊雄が昭和 11 年（1936）から当時の満州など海外への錦鯉の売り込みを始めている。同じ頃、新潟県の錦鯉生産者たちも、米国サンフランシスコで開催された昭和 15 年（1940）の「金門万国博覧会」に 300 尾を出品する等、錦鯉の海外普及に着手した。

1960 年から 70 年代にかけての一大錦鯉ブーム

第二次世界大戦中に錦鯉生産が停止したことから錦鯉生産は衰退の危機に陥ったが、第二次世界大戦後、錦鯉の生産・飼育は復活した。昭和 22 年（1947）には錦鯉の海外輸出を目的とする新潟県色鯉養殖組合も結成されている。

そして、高度経済成長時代の 1960 年代から 70 年代にかけて一大錦鯉ブームが到来する。マイホームブーム等を背景に、錦鯉の飼育・観賞を趣味とする愛好者が爆発的に増加した。そうした需要拡大に伴い、錦鯉の産地も新潟県内から県外へと広がっていった。

錦鯉ブームの中、愛好者や生産者の全国組織化も進んだ。地方の愛好者組織であった大分愛鱗会が昭和 40 年（1965）に西日本愛鱗会へ拡大、昭和 43 年（1968）には全日本愛鱗会へと発展した。生産者も昭和 43 年に東京で「第 1 回全日本総合錦鯉品評会」を開催し、2 年後の昭和 45 年（1970）に生産者・流通業者の組織である全日本錦鯉振興会を設立している。

14 高梨直治「東京大正博覧会に『変^{かわり}鯉^{ごい}』（錦鯉）展示」（月刊『錦鯉』第 35 巻第 3 号（通巻 406 号）、錦彩出版、令和 3 年 p. 70-73）

加えて、錦鯉は海外交流において一定の役割も担うようになっていく。例えば昭和 40 年（1965）、広島市が姉妹都市であるハワイ・ホノルルに錦鯉を寄贈しているほか、昭和 47 年（1972）にはソ連・ボルゴグラード市と姉妹友好を提携した際にも錦鯉を贈呈する等、日本の伝統工芸品や美術品と同じような感覚で錦鯉が活用されるようになった。さらに昭和 45 年（1970）の「日本万国博覧会（大阪万博）」では、政府出展施設として日本庭園が併設され、その池に新潟県と関西地方、中国地方の錦鯉生産者の錦鯉が放たれた。このように、錦鯉は日本文化を象徴するものの一つとして扱われるようになっていった。

世界に発信される錦鯉

昭和 48 年（1973）のオイルショックによって国内の錦鯉ブームが終息へと向かう中、錦鯉ブームによって生産技術が向上し、良質な錦鯉の生産が拡大されるようになったことから海外輸出が拡大した。

その要因には、昭和 30 年代、空輸の進展とともに、ビニール袋と注入酸素による錦鯉の輸送法が確立されたことが挙げられる。それまでも船舶を用いた輸出は試みられていたものの、錦鯉は長時間の輸送に耐えることができないため、さほど実績が挙げられなかった。しかし、ビニール袋に適量の錦鯉と水、酸素を注入し、段ボールや発泡スチロール箱に梱包して空輸することで、遠方への簡便な輸送が可能になった。その結果、ハワイや米国本土、英国をはじめとする欧州各国や台湾、香港、シンガポール、インドネシア等、アジア各国に販路を広げた。

輸出拡大には、国内の錦鯉関係者・団体が積極的に海外での普及を図ったことも大きく影響している。昭和 48 年（1973）、全日本愛鱗会が初の海外支部を米国・カリフォルニアに設立し、以後、海外支部は増え、現在、海外に 34 支部があり、17 か国に友好団体を持ち、会誌『日鱗』の英語版等を発行している。

また、生産者側の動きとしては、昭和 46 年（1971）に広島県の生産者・玉木武彦が英語圏の錦鯉愛好者に向けて飼育や観賞の仕方等を記した『NISHIKIGOI : FANCY KOI』を出版したほか、全日本錦鯉振興会も海外の「コイ・ショー（海外版品評会）」等への出展や審査員派遣等を通して、錦鯉を観賞・飼育する文化の普及・振興を図ってきた。その結果、錦鯉の輸出も拡大基調で現在に至っている。

〈主要参考文献〉

- ・菅豊「錦鯉と鯉師の歴史と文化」『生き物文化誌バイオストーリー』第 3 号 生き物文化誌学会、平成 17 年 p. 38-47)
- ・星野 〆 他監修『錦鯉問答』新日本教育図書、平成 19 年
- ・前川建夫『日本文化の華 錦鯉』新日本教育図書、平成 21 年
- ・菅豊「グローバル時代を生きる錦鯉ー日本文化の拡散と脱国際化、現地化ー」（松井健、野林厚志、名和克郎編

『国立民族学博物館論集 1 生業と生産の社会的布置ーグローバリゼーションの民族誌のためにー』岩田書院、平成 24 年 p. 269-298)

・ 50 周年記念誌編纂委員会企画・構成『全日本錦鯉振興会 50 年記念誌』全日本錦鯉振興会、令和 2 年

1-6-3 錦鯉の国内外における文化的、社会的位置付けや評価

現代社会における錦鯉

錦鯉の文化的価値

錦鯉は、品種改良の技術の進歩とともに、錦鯉に関する知識・経験が培われ、個体の評価の体系など審美眼・観賞眼も作られ継承されてきた。特に錦鯉生産の聖地と言われる小千谷市東山地区、長岡市山古志地区をはじめとする産地では、その文化的継承が地域活力の源泉となり、人々の地域アイデンティティを創出する誇りを醸成している。

錦鯉は日本の山間部の厳しい暮らしの中で、色鮮やかなコイの飼育・交配を重ねて、より美しい錦鯉を人為的に作りあげ、観賞して楽しむということに始まった、地域の生活に根ざす形で発展・展開を遂げた文化であり、今日においては広く生活の中でたしなまれる文化となっている。

そもそも錦鯉は人為的に作りあげるコイであり、庭園の池等で飼育して、観賞されることが前提とされており、魚類学的には一般のコイと同様であるが、人間の介在がなければ存在し得ない文化的存在である。そうした日本人が作りあげた観賞魚文化は、今や、海外でも「Koi」という言葉が通用するほどグローバルな文化になっている。

錦鯉をめぐる社会的動き

錦鯉生産の中心地である新潟県旧山古志村（現・長岡市）や小千谷市は平成 16 年（2004）10 月の新潟県中越地震で壊滅的な被害を受けた。錦鯉の被害は 100 万尾以上、被害総額は 40 億円以上にも上ったが、全国の生産者や流通業者、愛好者たちが生き残った錦鯉を復興の日まで預かる等の支援や、被災後に廃業した事業者の飼育池等の集約化等の取組により、同地域は復活を遂げた。

平成 26 年（2014）10 月、長岡・小千谷両市は新潟県中越地震からの復興の象徴として錦鯉を「市の魚」に制定、平成 29 年（2017）には新潟県の「鑑賞魚」に指定され、同年、錦鯉の生産を含む地域における農業システムが日本農業遺産に認定されている。

このほかの動きとして、錦鯉を「国魚」に位置付けていこうとする動きも見られる。昭和 44 年（1969）には、新潟県錦鯉協議会の主催で開催された全国レベルの品評会「第 1 回全日本総合錦鯉品評会」大会記念誌のタイトルが『国魚』と題され、錦鯉への尊称として用いている。全日本錦鯉総合品評会では現在でも、褒章名として「国魚」を用いており、団体により啓発活動も行われている。また、平成 31 年（2019）2 月に日本を代表する魚に錦鯉を位置付け、輸出戦略の強化を図る目的から、自民党の有志議員で「錦鯉文化産業振興議員連盟」が設立されるなど、錦鯉を国魚に推す動きが継続的に展開されている。

近年、国はクールジャパン戦略の一つに錦鯉を位置付けている。令和 2 年（2020）3 月に開催された「知的財産戦略本部 構想委員会 Create Japan ワーキンググループ（第 2 回）」では、個別分野として「食」「日本産酒類」「コンテンツ」「文化」「国立公園」「CJ 官民連携 PF」「老舗」とともに「錦

鯉」がテーマの一つとして取り上げられ、その活用や省庁間の連携強化等が議論された¹⁵。

なお、錦鯉関係者として、小西丈治（全日本錦鯉振興会前理事長）が錦鯉の振興・振興を図り文化芸術の振興に寄与した功績を以て平成 30 年度文化庁長官表彰を受賞している。

国内錦鯉産業の概況

錦鯉の国内生産額についての公的統計はなく詳細は不明であるが、「貿易統計」によれば、令和元年（2019）の輸出金額は約 39 億円であり、輸出が全体の約 8 割を占めると言われていることから¹⁶、国内分を含む錦鯉市場の全体規模は約 50 億円規模と考えられる。

一方、国内における錦鯉需要は、近年、減少傾向にあるとされる。その背景の一つは住宅環境の変化である。錦鯉は水槽でも飼育できるとはいえ、池で飼育するのが基本であり、庭付きの一戸建住宅から集合住宅へシフトする人々の増加に伴って国内需要が減少している。加えて、錦鯉愛好者の高齢化により、国内の愛好者数自体が減少している。

こうした国内錦鯉需要の減少も影響し、錦鯉生産者も減少している。もともと錦鯉生産者の多くが個人経営であり、後継者問題等も加わり、平成 20 年（2008）と平成 30 年の比較では経営体数は約 25%減、従業員数は約 23%減となっている。

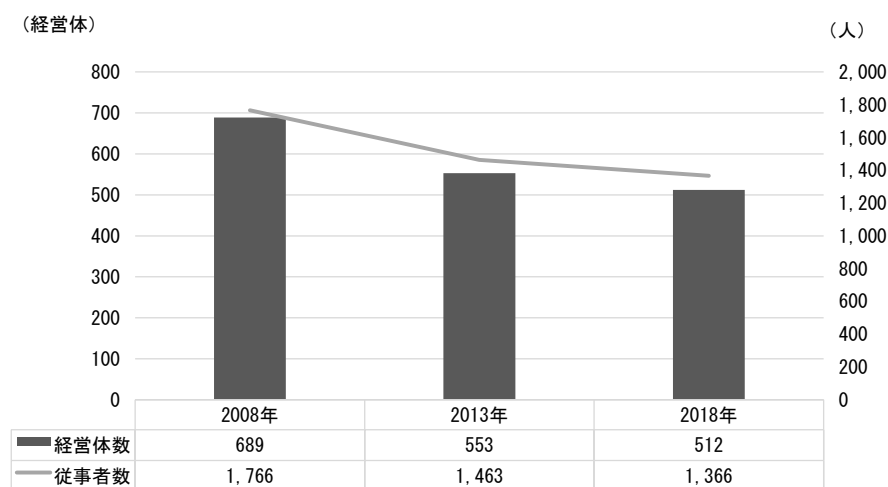


図1 錦鯉養殖業の経営体数・従業者数の推移

出典：平成 20 年から平成 30 年の「漁業センサス」（農林水産省）

（URL：<https://www.maff.go.jp/j/tokei/census/fc/index.html>）を参照し受託事業者が作成

15 内閣府知的財産戦略推進事務局「第2回 Create Japan WG 事務局説明資料」
（URL：https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/tyousakai/kousou/create_japan_wg/dai2/siryou1.pdf）
最終確認日：令和5年1月31日

16 日本政策投資銀行新潟支店「新潟県内錦鯉産業の『強み』～更なる発展に向けて～」(『DBJ 新潟支店レポート』平成30年)

一方、輸出量が増える中、国内錦鯉産業において外国人の存在感が高まっている。輸出国数も平成 17 年（2005）以降、増え続けており、およそ 30 年前と比べて、その数は 2 倍以上に拡大し、対象エリアも欧米、アジアだけでなく、東欧やアフリカにまで広がっている¹⁷。

こうした日本の錦鯉のグローバル化は、国内錦鯉産業にとって欠かせない一方、稚魚が安価で大量に輸出されるという問題や、KHV¹⁸のような生産地の日本になかったコイの病気が日本にも入ってくるなど錦鯉の生産・飼育におけるリスクの拡大といった問題も生じさせている。

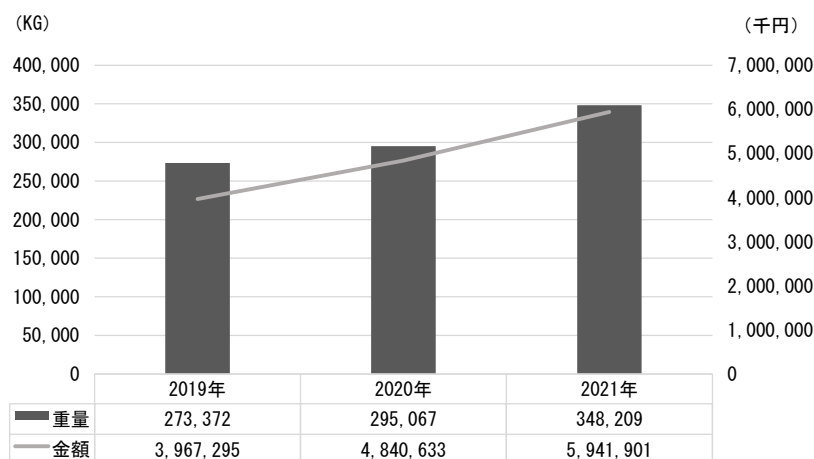


図 2 錦鯉の輸出金額・輸出量

出典：令和元年から令和 3 年の「貿易統計」（財務省）（URL: <https://www.customs.go.jp/toukei/info/>）を参照し受託事業者が作成

錦鯉の輸出金額上位国（2021年）		錦鯉の輸出重量上位国（2021年）	
国名	金額（千円）	国名	重量（KG）
中華人民共和国	754,273	オランダ	48,095
アメリカ合衆国	651,495	インドネシア	45,698
インドネシア	582,188	アメリカ合衆国	35,639
ドイツ	570,650	英国	34,998
マレーシア	506,161	ドイツ	34,041
ベトナム	500,250	タイ	33,860
オランダ	470,924	中華人民共和国	31,646
英国	446,122	ベトナム	23,295
タイ	386,505	マレーシア	16,263
香港	260,161	香港	5,922

図 3 錦鯉の輸出金額・輸出量上位国

出典：令和 3 年の「貿易統計」（財務省）（URL: <https://www.customs.go.jp/toukei/info/>）を参照し受託事業者が作成

17 日本政策投資銀行新潟支店「新潟県内錦鯉産業の『強み』～更なる発展に向けて～」(『DBJ 新潟支店レポート』平成 30 年)

18 KHV はかつての日本では見られなかったコイの病気であるが、錦鯉産業のグローバル化とともに平成 15 年（2003）日本にも入り、国内生産者が廃業に追い込まれるケースも出ている。現在、養殖業者には KHV が発生した場合に都道府県知事への届出が義務付けられ、日本から一度海外に出した錦鯉は日本に戻せないことになっている。

海外からの評価と国際発信

海外から見た錦鯉の評価

錦鯉は海外でも観賞魚として人気があり、ロックバンド Queen の故フレディ・マーキュリーや、レディー・ガガ、ブラッド・ピット等も錦鯉愛好者として知られ、それぞれの地域で愛好者団体が組織されている。

英語で一般的なコイは“Carp”で、錦鯉は“Asian Carp”“Colored Carp”と呼ばれてきたが、近年は認知度と人気の高さから“Koi”で通じることが多くなっている。個々の錦鯉の評価においても「tuya（艶）」など日本の錦鯉用語は海外の錦鯉関係者間で通じ、海外の錦鯉の観賞や錦鯉コンテストの審査においても日本が育んできた錦鯉評価の体系がほぼ共有されている。

また、海外では「世界最大のガーデンフィッシュ」とも呼ばれ、特に欧米において錦鯉はガーデニング文化と密接に関わっている。水槽で飼われる熱帯魚や金魚をはじめ様々な観賞魚文化が欧米に移入されているが、ガーデニング文化に忍び込んだのは、チョウザメとこの錦鯉のみであると言われる。

国民性や文化土壌から愛好者が好む錦鯉の品種にも地域性が見られる。日本では「紅白」、「大正三色」、「昭和三色」の人気の高いが、欧米では色彩が鮮やかな鯉が好まれてきた。また、近年は無地で金色が含まれている「光り無地」、色や形に特徴がある「変わり鯉」、薄暗い色をしたタイプが好まれるともいわれている。一方、中国では赤色が縁起の良い色で、「丹頂」や金色が含まれている錦鯉の人気の高い¹⁹。

錦鯉の観賞・飼育がグローバル化する中、飼育書等も多数発行されている。錦鯉の海外進出当初は日本の飼育書・飼育指南書の翻訳が多かったが、いまではそれぞれの地において独自の飼育書・指南書が編纂され、錦鯉はいまや各国の文化として根付き、現地化する傾向が見られる。

海外の錦鯉流通業者が国内の産地を訪問して購入することも珍しくない。例えば、旧山古志村等にも英語で書かれた錦鯉関連の看板が林立し、新型コロナ前は海外の流通業者や愛好者、また錦鯉ハンティング・ツアー（海外の錦鯉流通業者が顧客を集めて新潟県や、岡山県、広島県、福岡県等の錦鯉主要産地を訪れるツアー）等を受け入れることも多かった。

また、国内産地で錦鯉を購入した外国人愛好者の中には、オーナー制度²⁰を活用して品評会に出品する人が増えている。これは KHV の影響もあるが、日本の錦鯉の飼育技術への信頼の高さを示している。

19 アジアとヨーロッパの錦鯉の受容の仕方の違いについて、菅豊「グローバル時代を生きる錦鯉ー日本文化の拡散と脱国際化、現地化ー」（松井健、野林厚志、名和克郎編『国立民族学博物館論集 1 生業と生産の社会的布置ーグローバリゼーションの民族誌のためにー』 岩田書院、平成 24 年 p.269-298）では、ヨーロッパの場合は 19 世紀のジャポニスム（日本趣味）の延長として錦鯉が伝統日本文化を喚起させるシンボリックなアイテムとして受容され、アジアの場合は“花鳥魚虫文化”と呼ばれる観賞動植物文化が育まれており、特に中国等では文化的素地の上で錦鯉という観賞魚そのものが受容されていると分析している。

20 立て鯉購入後も、そのまま生産者に飼育を委託し、育ててもらう制度。コンテストの入賞を狙って国内外の愛好者が利用することが多い。

国際発信の現状

錦鯉の生産者・流通業者の団体である一般社団法人全日本錦鯉振興会では、平成 16 年（2004）の国際錦鯉サミットの開催や、国内外のジャパンフェスティバル等での展示、駐日大使館への寄贈等を継続的に行い、ベトナム語版等のムックを通じて錦鯉に関する情報を提供している。近年は、HP の開設や SNS 等インターネットで情報を発信して、直接、国内外へ販売する生産者も増えている。

錦鯉愛好者の団体である一般社団法人全日本愛鱗会は、海外支部を通じた普及活動や、アジア地区において「ZNA アジアカップ錦鯉品評会」を主催する。

加えて、両団体は、海外の錦鯉の品評会「コイ・ショー」等への審査員派遣等によって、現地の錦鯉愛好団体や流通業者と連携して各地域での錦鯉の浸透を図っている。国レベルのショーには、錦鯉流通業者だけでなく、錦鯉の餌や機材を生産する関連業者等もブースを出店し、日本の錦鯉関連産業のアピールの場になることも多い。

近年の国・自治体による錦鯉の発信例としては、令和 3 年（2021）7 月 22 日～8 月 7 日に東京オリンピック・パラリンピックにあわせて展開された「日本博」事業の一つ「東北ハウス」（東北 6 県と新潟県の官民による実行委員会が主催）で、水槽展示やリモートによる講演によって錦鯉の魅力が発信された。さらに国はクールジャパン戦略の一環として錦鯉の海外プロモーション展開を視野に入れている。

〈主要参考文献〉

- ・菅豊「錦鯉と鯉師の歴史と文化」（『生き物文化誌ビオストーリー』第 3 号 生き物文化誌学会、平成 17 年 p. 38-47）
- ・青柳聡「山古志における養鯉業の実態と今後の課題」（『福祉社会開発研究』No. 1、東洋大学福祉社会開発センター、平成 20 年 p. 111-115）
- ・菅豊「グローバル時代を生きる錦鯉－日本文化の拡散と脱国際化、現地化－」（松井健、野林厚志、名和克郎編『国立民族学博物館論集 1 生業と生産の社会的布置－グローバリゼーションの民族誌のために－』 岩田書院、平成 24 年 p. 269-298）
- ・50 周年記念誌編集委員会企画・構成『全日本錦鯉振興会 50 年記念誌』全日本錦鯉振興会、令和 2 年
- ・金融財政事情研究会『第 14 次 業種別審査辞典』きんざい、令和 2 年

2 節 国民意識調査

2－1 調査の趣旨目的と調査手法及び調査設計について

令和3年度に調査を実施した6分野について、インターネットを活用したウェブアンケート調査による国民の意識調査を実施することで、国民の生活文化に対する興味や関心などの実情について把握し、今後の生活文化等に関する政策立案の基礎資料の作成を行うことを目的として調査を実施した。

当該6分野は、活動者数等の情報について統計調査等が行われていないため、分野ごとにどの程度経験や体験をしたことがある者がいるのか、また、全く経験をしたことがない者がどの程度いるのかを把握できていない。加えて、経験・体験の有無によって、分野を始めたきっかけや活動の内容、興味関心の有無なども異なることが想定される。

以上のような状況を踏まえ、ウェブアンケート調査では、下記に示すとおり、各分野の経験の有無を問う設問を設け、回答者の経験・体験の深度を図ると共に、経験・体験の程度ごとに設問群を設け、活動内容や興味関心について把握を行った。

■調査設計

調査方法	インターネット調査（調査業者：株式会社クロス・マーケティング）						
調査地域	全国						
調査対象者	18 歳以上の男女						
サンプル数	2 万サンプル						
		18～ 20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代 以上
	男性	1, 398	1, 359	1, 759	1, 580	1, 459	2, 090
	女性	1, 342	1, 303	1, 713	1, 588	1, 533	2, 723
	それ以外／ 答えたくない	41	29	24	10	10	39
※国勢調査（令和 2 年）に基づき、性・年齢・都道府県別の比率に 2 万サンプルを割付けている。							
調査期間	令和 4 年 10 月 14 日（金）～10 月 20 日（木）						
設問項目	【属性】 F 1：性別 F 2：年齢 F 3：居住地 F 4：職業 F 5：同居している人の状況 F 6：昨年度の世帯全体の年収 F 7：最終学歴 F 8：子供の頃の習い事						
	【フィルタリング・パート】 F Q：6 分野のそれぞれの経験の有無						

	【分野設問】 フィルタリング・パートの回答に基づき、回答する設問が分かれる。詳細は各分野の設問項目を参照
	【共通設問】 Q 1：趣味・余暇活動の参加状況 Q 2：1 ヶ月に使える趣味・余暇費用 Q 3：1 ヶ月に使える趣味・余暇時間 Q 4：趣味・余暇活動を行う時間帯 Q 5：消費行動に対する価値観 Q 6：接触メディア

なお、インターネットによるウェブアンケート調査については、株式会社クロス・マーケティングが保有するアンケート・パネル（令和4年1月時点で、アンケート回答履歴のあるアクティブ・パネル数が日本国内で295万人）を活用し、かつ、サンプル回収に当たっては、予め令和2年の国勢調査に基づく割付を、都道府県×性年齢別で実施して、アンケート結果の信頼性を担保した（令和2年時点での都道府県別・性年齢別人口の割合に基づいて回収を実施した）。

また、分析に当たっては、各設問の全体集計に加え、属性別の各層ごとの比較、及び、設問間のクロス集計を実施した。

■調査結果を見る上での注意事項

- ・集計は小数点第2位を四捨五入している。したがって、回答比率の合計は必ずしも100%にならない場合がある。
- ・集計表では、各回答の回答比率を示しているほか、属性（性別、年齢など）や設問間でのクロス集計を行った数値を示している。各回答の全体平均を比較して、±5pt もしくは±10pt の開きがある場合は色付けをしており、凡例を付してある。なお、5pt 丁度、10pt 丁度の場合、色付けを行っていない。
- ・集計によっては、母数が少なく、結果の信頼性が担保できないものがあるため、母数が少ない集計結果については、留意のため、グレーで表示している。
- ・調査設問項目【属性】のF3居住地は、総務省「地域別表章に関するガイドライン」の「類型Ⅰ」に沿って、下記のとおり都道府県を分類している。

北海道：北海道

東北：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県

関東：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県・長野県

北陸：新潟県・富山県・石川県・福井県

東海（中部）：岐阜県・静岡県・愛知県・三重県

近畿：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県

中国：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県

四国：徳島県・香川県・愛媛県・高知県

九州：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県

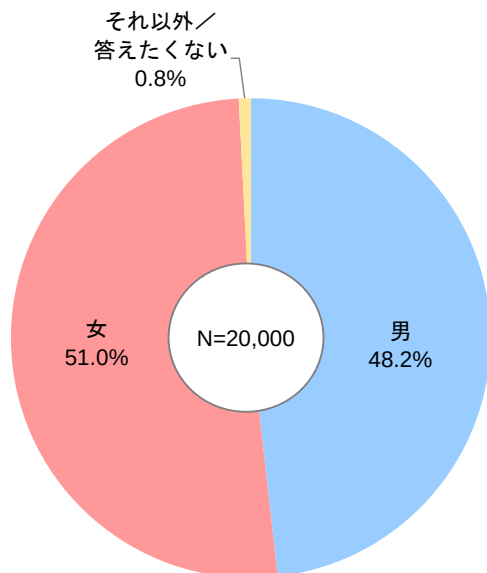
沖縄：沖縄県

2-2 調査結果

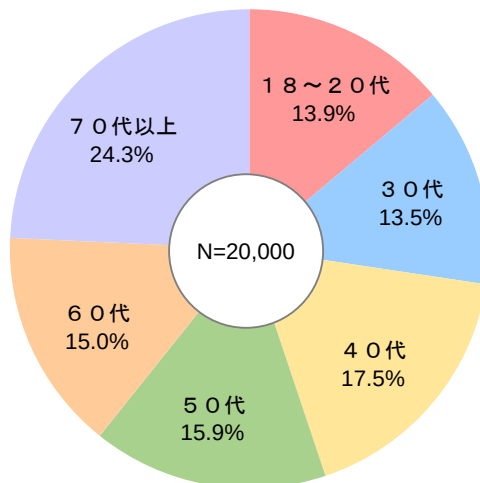
2-2-1 回答者の属性及び共通設問の結果

(1) 属性

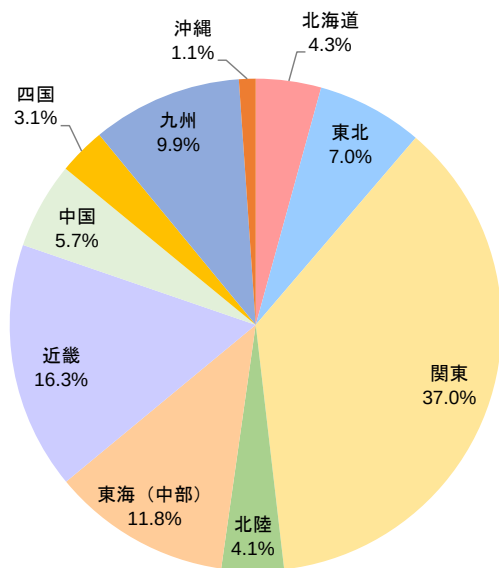
①性別



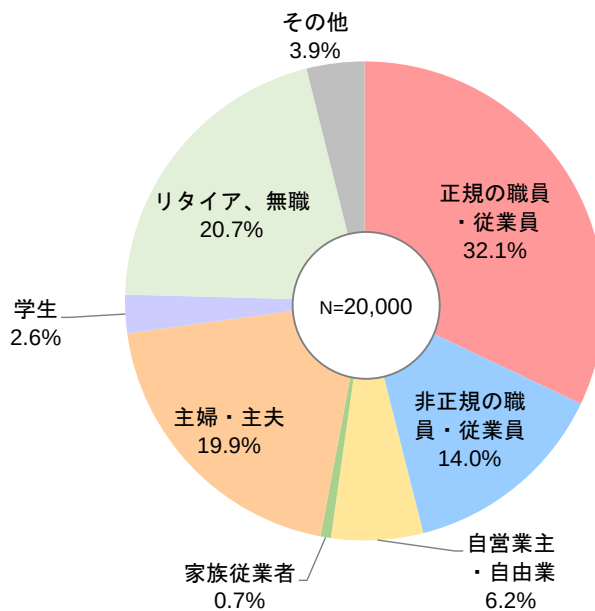
②年齢



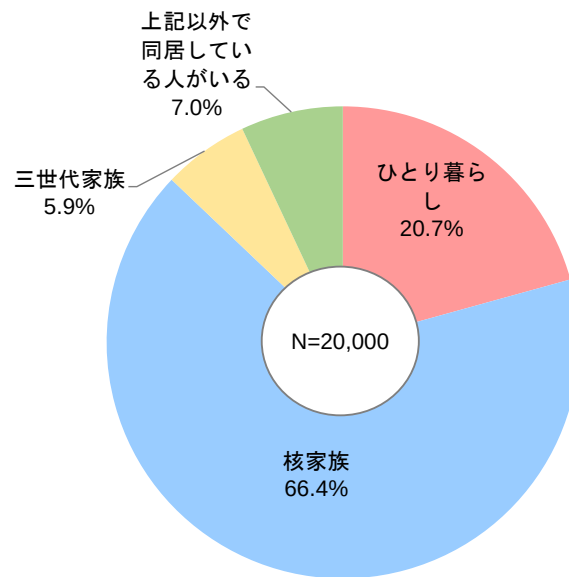
③居住地



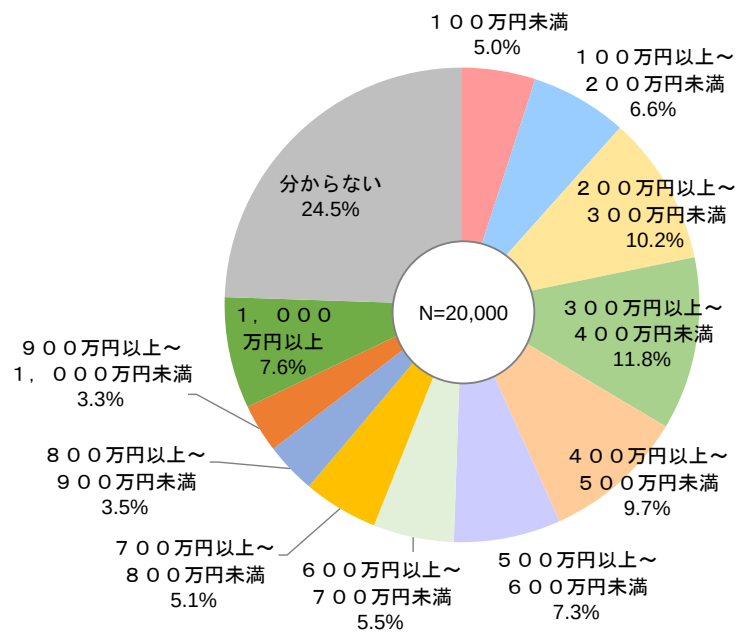
④職業



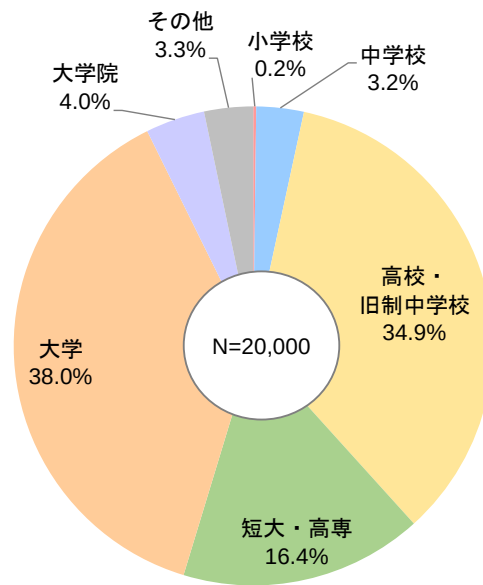
⑤同居している人の状況



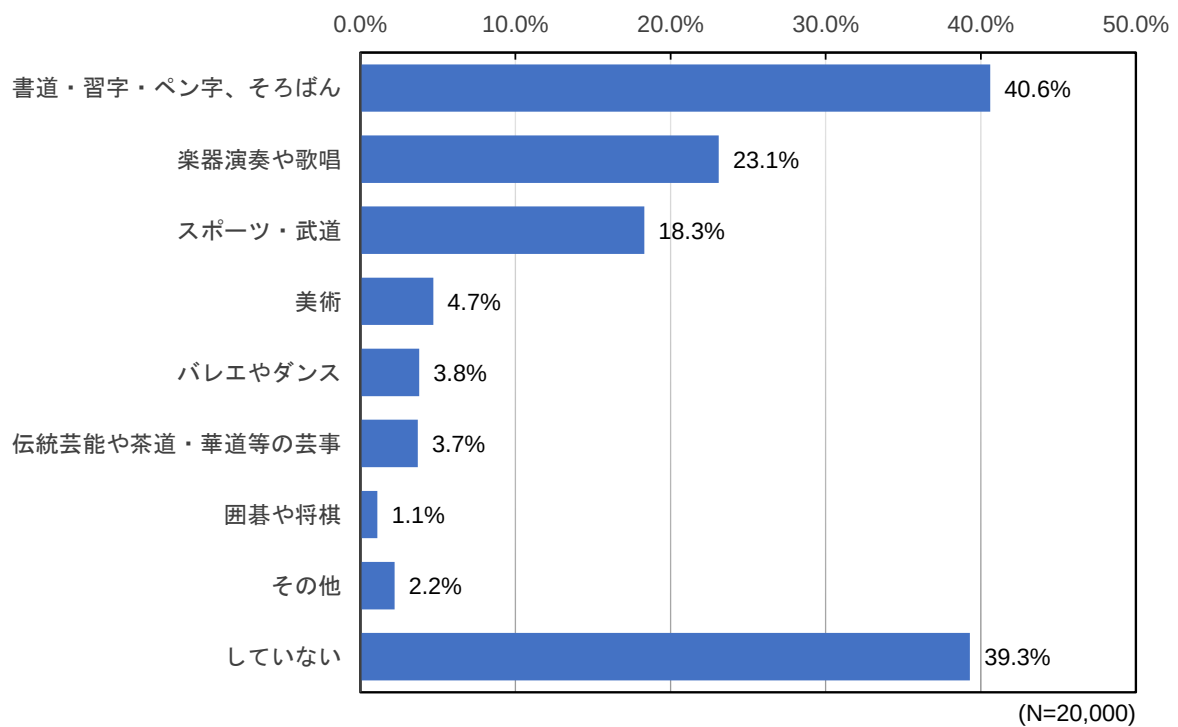
⑥昨年度の世帯全体の年収



⑦最終学歴



⑧子供の頃の習い事（複数回答）



（その他の内容）英会話教室、学習塾、ボーイスカウト

(2) 共通設問

共通1 あなたは下記のスポーツや趣味、娯楽等の活動をされていますか。(複数回答)

【スポーツ（観戦除く）】

(件・%)												
全体	ウォーキング	ジョギング・マラソン	トレーニング	体操（器具を使わないもの）	ゴルフ（コース）	ゴルフ（練習場）	釣り	水泳（プールでの）	サイクリング・サイススポーツ	テニス	球技・キャッチボール・野球	スキー
	32.1	7.8	7.0	6.3	5.1	4.0	3.6	3.4	2.9	2.8	2.3	2.3
	卓球	エアロビクス、ジャズダンス	ボウリング	サッカー	バトミントン	スノーボード	バレーボール	柔道・剣道・空手などの武道	バスケットボール	フットサル	スキューバダイビング・グランド	パークゴルフ・フナなどのグラ
	2.1	2.0	1.8	1.8	1.6	1.2	1.1	1.1	1.0	0.9	0.8	0.7
	ソフトボール	サーフィン・ウインドサーフィン	乗馬	アイススケート	ゲートボール	ヨット・モーターボート	カヌー・ラフティン	パラグライダー・ハンググライダー				
20,000	0.7	0.5	0.4	0.4	0.2	0.2	0.2	0.1				

【趣味・創作】

(件・%)													
全体	音楽鑑賞（配信、CD、レコード、FMなど）	読書（仕事、勉強などを除く娯楽として）	映画（テレビは除く）	動画鑑賞（レンタル、配信を含む）	園芸、庭いじり	音楽会、コンサートなど	スポーツ観戦（テレビは除く）	美術鑑賞（テレビは除く）	ファッション（楽しみとしての）	編物、織物、手芸	観劇（テレビは除く）	洋楽の演奏	
	17.3	16.1	14.5	13.6	12.8	10.8	7.4	6.7	5.9	5.9	4.9	4.7	
	日曜大工	料理（日常的なものを除く）	写真の制作	学習・調べもの	絵を描く、彫刻をする	洋裁、和裁	文芸の創作（小説、詩、和歌、俳句など）	動画の制作・編集	演芸鑑賞（テレビは除く）	お花	模型づくり	書道	
	4.6	4.3	3.9	3.7	3.0	2.9	2.3	2.1	2.0	1.8	1.8	1.7	
	お茶	趣味工芸（組ひも、ペーパークラフト、革細工など）	邦楽、民謡	コーラス	陶芸	洋舞、社交ダンス	おどり（日舞など）						
20,000	1.6	1.5	1.5	1.1	1.0	0.8	0.4						

【娯楽】

(件・%)												
全体	テレビゲーム（家庭での）	カラオケ	温浴施設（健康ランド、クアハウス、スパ銭湯等）	宝くじ	外食（日常的なものは除く）	ソーシャルゲームなどのオンラインゲーム	中央競馬	バーベキュー	麻雀	パチンコ	将棋	サウナ
	7.9	6.9	6.8	5.8	5.5	5.3	4.7	3.8	3.7	3.7	2.8	2.7
	ゲームセンター、ゲームコーナー	カラオケ、花札など	地方競馬	サッカーくじ（t o）	バー、飲み屋	囲碁	ボートレース（競艇）	競輪	ビリヤード	オートレース	クラブ、キャバレー	ディスコ
20,000	2.5	2.3	1.9	1.8	1.7	1.2	1.2	1.0	0.9	0.5	0.5	0.3

【観光・行楽】

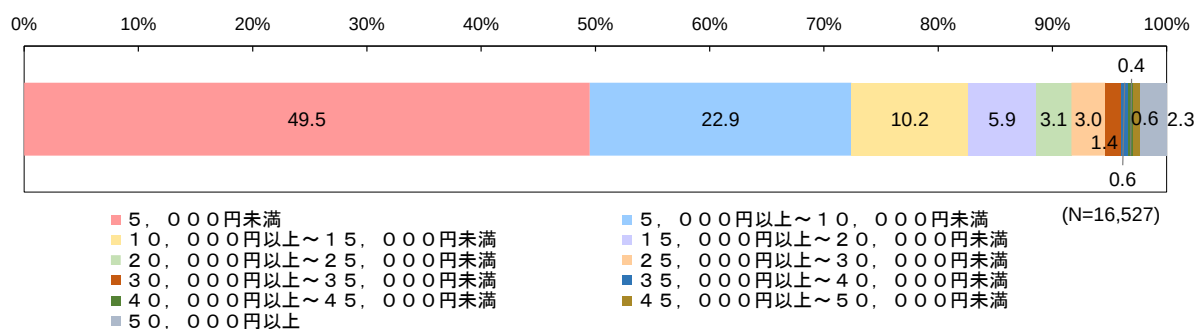
(件・%)												
全体	国内観光旅行（避暑、避寒、温泉など）	ドライブ	動物園、博物館、水族館	海外旅行	ピクニック・ハイキング・野外散歩	遊園地	帰省旅行	催し物、博覧会	登山	海水浴	オートキャンプ	フィールドアスレチック
20,000	30.7	17.9	12.4	9.2	6.9	6.4	6.4	5.4	4.0	2.1	2.0	0.6

【その他・特に何もしていない】

(件・%)											
全体	複合ショッピングモール、アウトレツセ	ウインドウショッピング	ペット（遊ぶ、世話をする）	S N S、ツイッターなどのデジタルコミュニケーション	ヨガ、ピラティス	ボランティア活動	農園（市民農園など）	エステティック、ホームエステ	クルージング（客船による）	自由記述	特に何もしていない
20,000	15.7	11.2	8.7	6.2	3.3	2.9	2.1	1.6	1.1	0.8	17.4

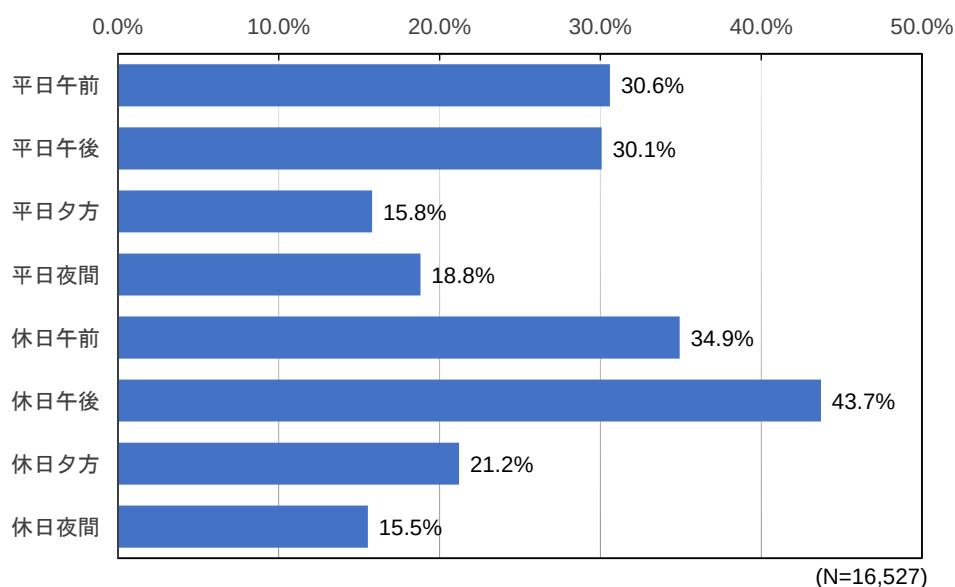
<共通1で「特に何もしていない」以外を回答した方>

共通2 あなたは、スポーツや趣味、娯楽等の活動に、平均月どの程度の費用を払っていますか。



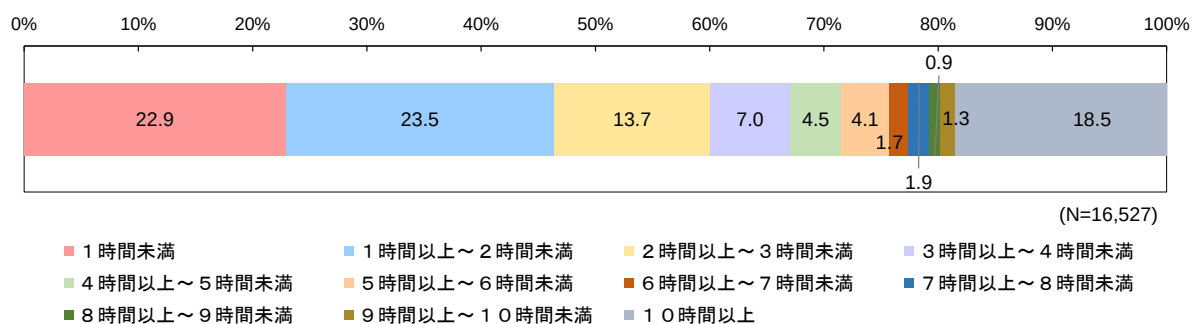
<共通1で「特に何もしていない」以外を回答した方>

共通3 あなたが、スポーツや趣味、娯楽等の活動をよくする時間帯を教えてください。(複数回答)

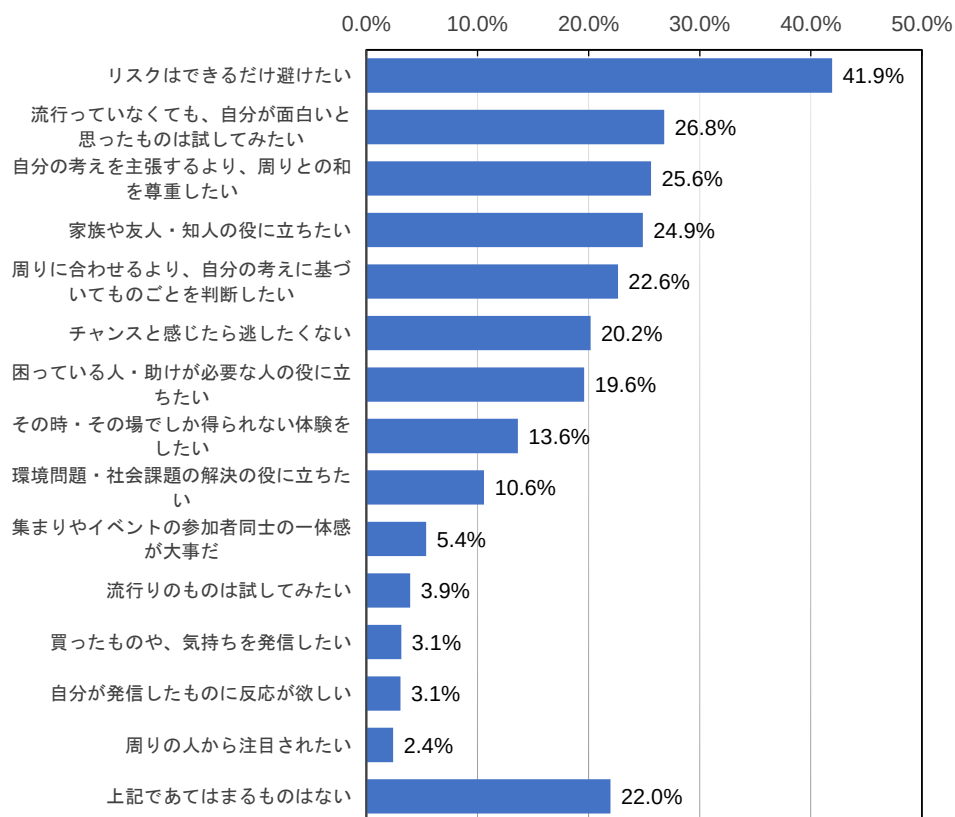


<共通1で「特に何もしていない」以外を回答した方>

共通4 あなたは、スポーツや趣味、娯楽等の活動に、平均月どの程度の時間をかけていますか。

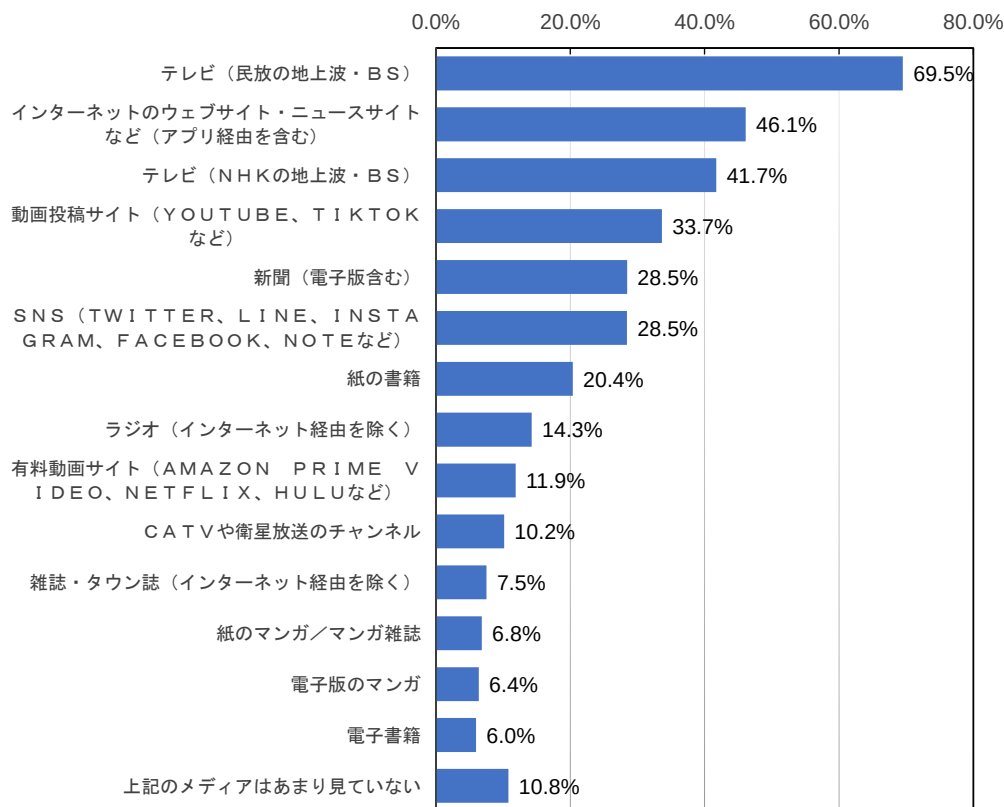


共通5 下記の中で、あなたのお考え、意識に近いものを教えてください。(複数回答)



(N=20,000)

共通6 下記の中で、あなたが普段よくご覧になっているメディアを教えてください。(複数回答)



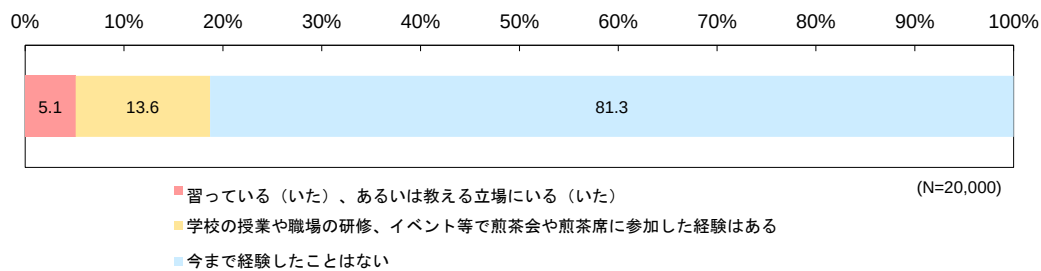
(N=20,000)

2-2-2 フィルタリング・パートの結果

FQ1 煎茶道について

この調査の「煎茶道」とは、主人が客人を招き、一定の作法で淹れた煎茶や玉露等を振る舞い、書や絵画等の鑑賞を行いながら交流を図る、日本の伝統的な生活文化のことをいいます。

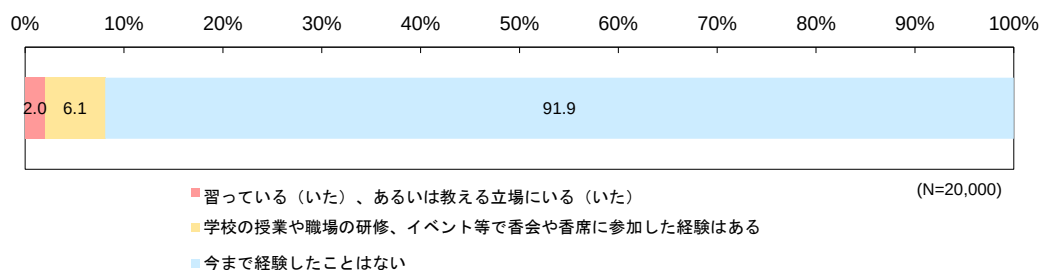
あなたは、これまでに、「煎茶道」を経験したことはありますか。



FQ2 香道について

この調査の「香道」とは、沈香、白檀などの香木や、古典的な薫（たきもの）を、一定の作法に従って焚（炷）（た）き、その香りを鑑賞する（＝「聞く」）、日本の伝統的な生活文化のことをいいます。

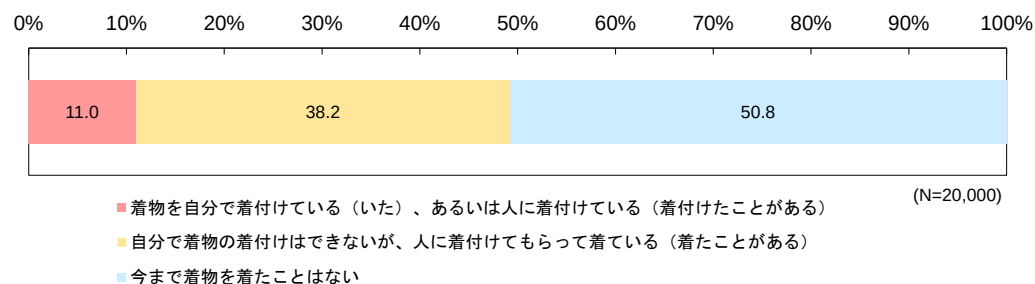
あなたは、これまでに「香道」を経験したことはありますか。



FQ3 和装について

この調査の「和装」とは、着物（和服、浴衣も含む）の着付けのことをいいます。なお、作務衣・甚平のような着脱が簡易なものや、柔道着・剣道着等の特定競技用のものは含まないこととします。

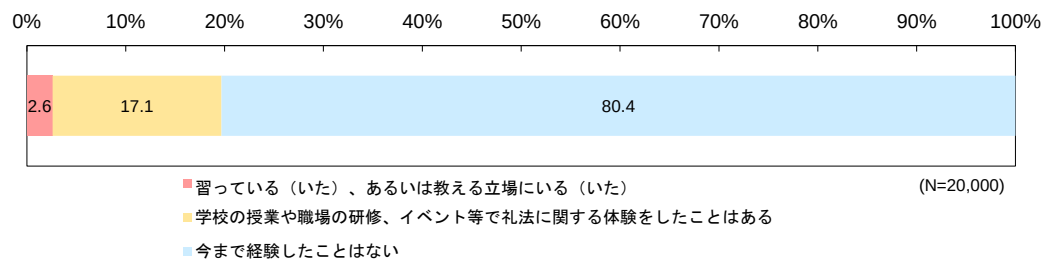
あなたは、日常生活や行事等（例えば結婚式、入学式、卒業式、成人式等）の折に、着物を着付けることはありますか。



F Q 4 礼法について

この調査の「礼法」とは、作法や所作、しつらい等の一定の礼式に則ることによって相手への敬意を表す、日本の伝統的な礼儀作法のことをいいます。

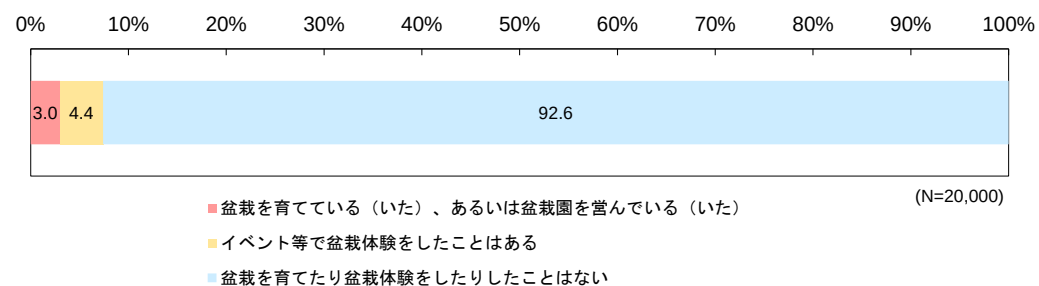
あなたは、これまでに「礼法」を経験したことはありますか。



F Q 5 盆栽について

この調査の「盆栽」とは、植木鉢等の盆器（ぼんき）等に樹木を植え付け、姿形に手を加えながら年数をかけて育てていくものをいいます。なお、小品盆栽やツツジ盆栽も含まれます。

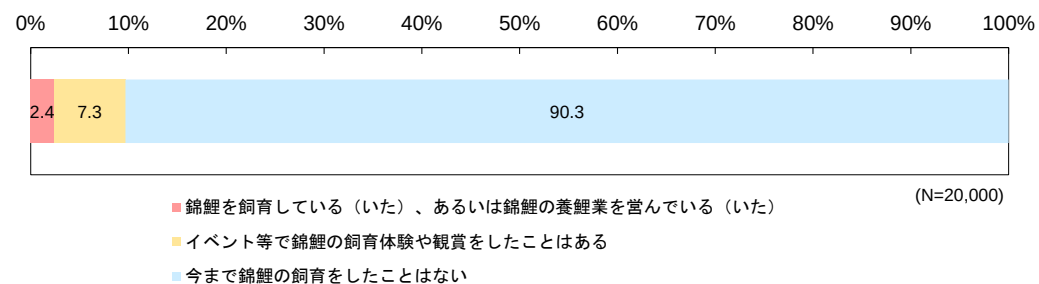
あなたは、これまでに盆栽を育てたことはありますか。



F Q 6 錦鯉について

この調査の「錦鯉」とは、色や模様のある観賞用のコイのことをいいます。

あなたは、これまでに錦鯉を飼育したことはありますか。次の選択肢の中から、あてはまる一番近いものをお選びください。（1つ）なお、飼育には、預かり飼育を含みます。



2-2-3 分野設問の結果及び分析

(1) 煎茶道

本調査では、煎茶道への興味関心や経験の有無等の把握を目的として2万人にウェブアンケート調査を実施した。

アンケートでは、煎茶道を稽古場等で習ったような経験者、イベント等で体験した体験者、全く経験がない未経験者がいることが想定されることから、煎茶道の経験・体験の有無について回答する設問を設けた。その上で、下記の表のように経験の深度に応じた専用の設問群を設けることで、各回答者の煎茶道への興味関心の有無などの把握を行った。

■分野設問の項目

「1. 習っている (いた)、あるいは教える立場にいる (いた)」と回答した者への設問	A Q 1 : 煎茶道を習い始めたきっかけ A Q 2 : 煎茶道を始めた当初の習い方 A Q 2 補問 : 当初の習い方を選んだ理由 A Q 3 : 現在の継続状況 A Q 3 補問 1 : 煎茶道を続けている理由 A Q 3 補問 2 : 煎茶道から離れたきっかけや理由 A Q 4 : 煎茶道を続けている (続けていた) 年数 A Q 5 : 煎茶道に関する活動内容 A Q 6 : 煎茶道に関する活動頻度 A Q 7 : 煎茶道に関する月額費用 A Q 8 : 煎茶道に関する興味関心や魅力
「2. 学校の授業や職場の研修、イベント等で煎茶会や煎茶席に参加した経験はある」と回答した者への設問	A Q 9 : 煎茶道を体験したきっかけ A Q 10 : 煎茶道を体験した場 A Q 11 : 煎茶道を習いやすい状況 A Q 12 : 煎茶道に支払える月額費用 A Q 13 : 煎茶道を習っていない理由 A Q 14 : 煎茶道に対する印象やイメージ A Q 15 : 煎茶道に関する興味関心や魅力
「3. 今まで経験したことはない」と回答した者への設問	A Q 16 : 参加してみたい煎茶道の体験内容 A Q 17 : 参加しやすい煎茶道の体験条件 A Q 18 : 煎茶道を体験したことがない理由 A Q 19 : 煎茶道に対する印象やイメージ A Q 20 : 煎茶道に関する興味関心や魅力

①単純集計の結果について

■全調査対象者への設問

煎茶道を経験した者、あるいは全く触れたことがない者がどの程度いるのかは、統計調査等では明らかとなっていない。加えて、煎茶道の「経験」にも深度があり、いわゆる稽古場や教室等で習った経験がある者や、稽古場や教室等で教える立場にいる者、あるいは、イベント等で煎茶会等に参加し体験をしたことがある者等がいて想定される。経験の有無を大別するならば、教室等で習ったあるいは教える立場にいる者、イベント等で体験をした者、そして経験をしたことがない者に分けることができると考えられる。

本設問では、上記の想定に基づき、煎茶道の経験の有無とあわせて、経験の深度を図る選択肢を設けて、実態の把握を行った。

煎茶道の経験・体験の有無

煎茶道を「習っている（いた）、あるいは教える立場にいる（いた）」（以下、「経験あり」）比率は5.1%（1,019人）、「学校の授業や職場の研修、イベント等で煎茶会や煎茶席に参加した経験はある」（以下、「参加体験あり」）13.6%（2,715人）、「今まで経験したことはない」（以下「未経験」）81.3%（16,266人）となった。

男女別では、女性の「経験あり」が7.7%、「参加体験あり」が17.2%と男性よりも高い。

年齢別では、「経験あり」、「参加体験あり」と回答した者ともに70代以上が最も高い。また、全体の傾向を見ると、「経験あり」の60代以上、「参加体験あり」の18～20代と70代以上が全体平均より高く、40～50代は全体平均より低い回答比率である。

			(%)		
n =			習っている(いた)、あるいは教える立場にいる(いた)	学校の授業や職場の研修、イベント等で煎茶会や煎茶席に参加した経験はある	今まで経験したことはない
全 体			20,000	5.1 13.6	81.3
性別	男	9,645	2.4 9.9	87.7	
	女	10,202	7.7 17.2	75.2	
	それ以外／答えたくない	153	2.0 9.2	88.9	
年齢	18～20代	2,781	5.1 15.4	79.5	
	30代	2,691	3.7 13.6	82.7	
	40代	3,496	2.7 11.2	86.1	
	50代	3,178	3.2 11.2	85.6	
	60代	3,002	5.5 12.8	81.7	
	70代以上	4,852	8.6 16.3	75.1	

集計表 F Q 1 : 煎茶道の経験・体験の有無

■煎茶道を「習っている（いた）、あるいは教える立場にいる（いた）」と回答した者への設問（AQ1～AQ8）

本設問群では、煎茶道を経験したと回答した者が、どのようなきっかけや機会に煎茶道を習い、興味関心を持っているのか等、経験者の実態を把握するためのアンケートを実施した。

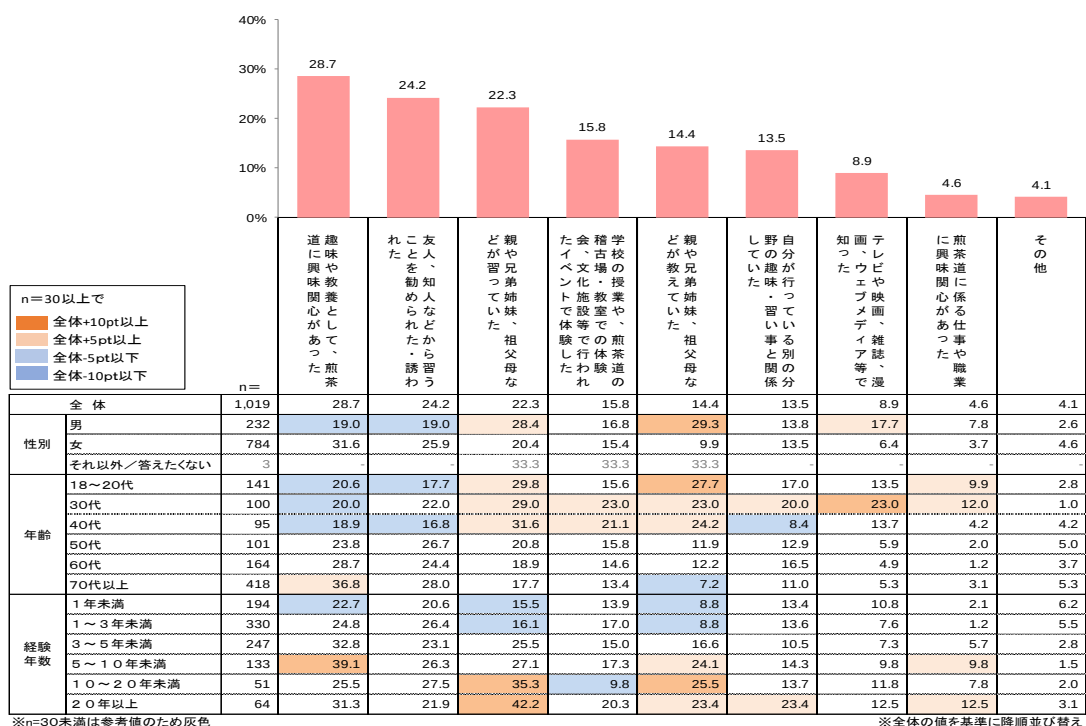
煎茶道を習い始めたきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは「趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった」の28.7%で、次いで「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」24.2%、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」22.3%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（29.3%）、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（28.4%）、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」（17.7%）の回答比率は全体平均より高く、「趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった」、「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」（ともに19.0%）の回答比率が全体平均より低い。

次に、年齢別で見ると、10～40代で「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」と「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」が全体平均よりも回答比率が高い傾向が見られる。

経験年数別では、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」と「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」、「煎茶道に係る仕事や職業に興味関心があった」については、経験年数が長いほど回答比率が高くなっている。



集計表 AQ1：煎茶道を習い始めたきっかけ

（その他の内容）職場に教室があった、親に勧められた、部活動

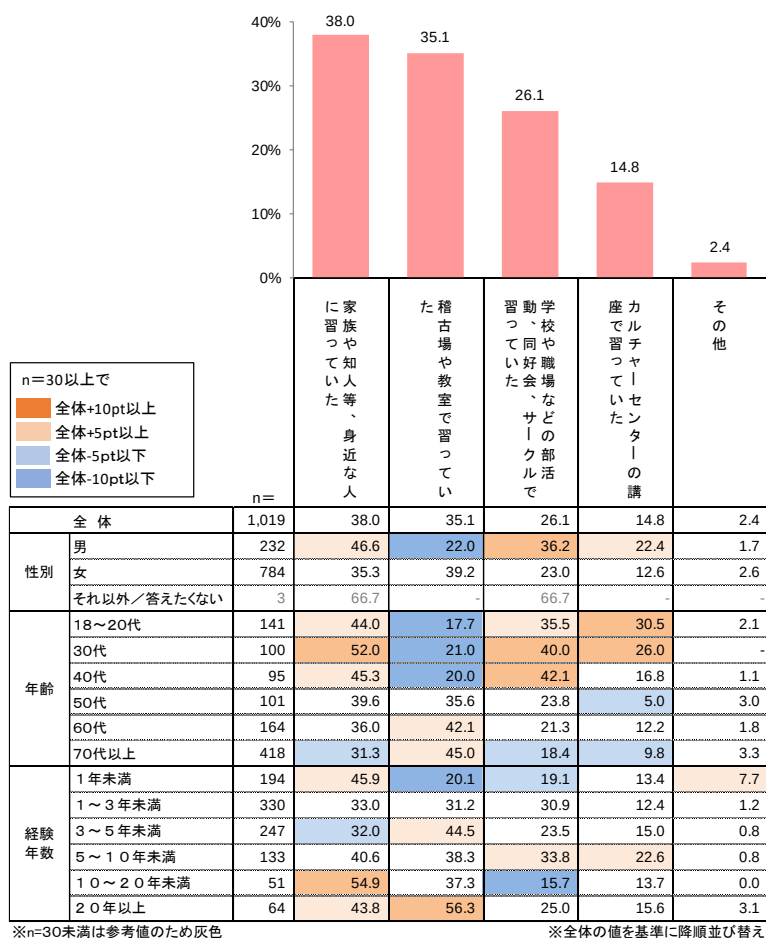
煎茶道を始めた当初の習い方

全体平均で最も回答比率が高いのは「家族や知人等、身近な人に習っていた」の38.0%で、次いで「稽古場や教室で習っていた」35.1%、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた」26.1%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた」(36.2%)、「カルチャーセンターの講座で習っていた」(22.4%)が全体平均より回答比率が高く、「稽古場や教室で習っていた」(22.0%)が全体平均より回答比率が低い。

次に年齢別では、「稽古場や教室で習っていた」の回答比率は、10～40代までの者で全体平均の数値よりも低く、60代以上の高年齢の者では全体平均より高い回答比率が出ている。

経験年数別で見た場合、「家族や知人等、身近な人に習っていた」では、1年未満(45.9%)と10～20年未満(54.9%)の回答比率が高く、3～5年未満(32.0%)の回答比率が低い。また、「稽古場や教室で習っていた」と比べると、20年以上(56.3%)の回答比率が高く、「1年未満」(20.1%)の回答比率は低いことが分かる。



集計表 AQ2：煎茶道を始めた当初の習い方

(その他の内容) 個人の先生、家に先生が来て習っていた

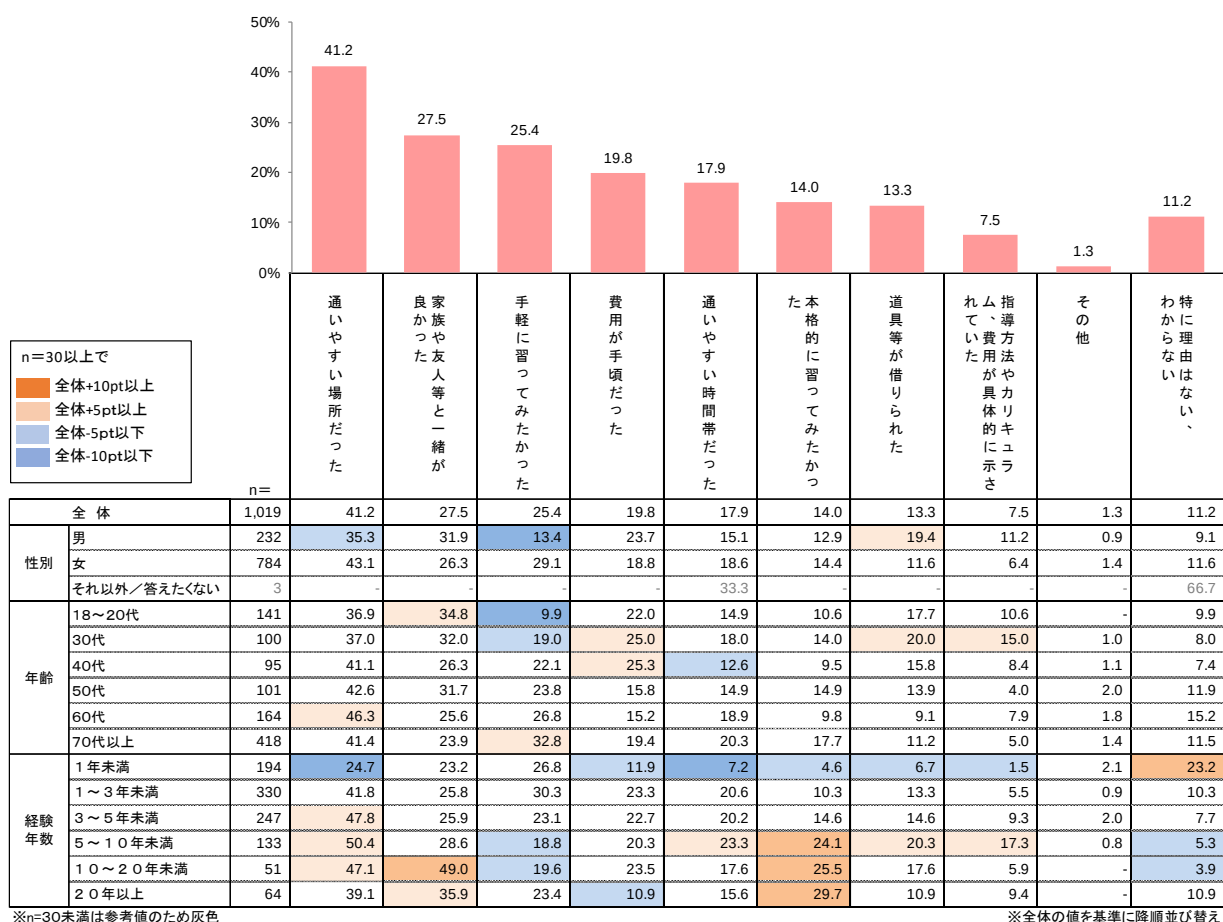
当初の習い方を選んだ理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「通いやすい場所だった」の41.2%で、次いで「家族や友人等と一緒に良かった」27.5%、「手軽に習ってみたかった」25.4%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、男女別では男性で「道具等が借りられた」(19.4%)の回答比率が高く、「手軽に習ってみたかった」(13.4%)の回答比率は低い。

年齢別では「指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていた」では30代の回答比率が高く、「手軽に習ってみたかった」では、70代以上の回答比率が高い一方、10～30代の者ほど回答比率が低い傾向にある。

経験年数別では、経験年数が長いほど「家族や友人等と一緒に良かった」、「本格的に習ってみたかった」の回答比率が高くなる傾向が見られるほか、1年未満と20年以上の経験年数の者を除き、「通いやすい場所だった」との回答比率は高い。



集計表 AQ2補問：当初の習い方を選んだ理由

(その他の内容) 親の勧め、会社に入社すると入る、免許がもらえた

現在の継続状況

「続けている」23.3%（237人）、「続けていない」76.7%（782人）と、続けていないとの回答比率が高い。

男女別で見た場合、男性で「続けている」が55.6%と高い一方、女性では13.8%と低く、年齢別では若年者ほど「続けている」への回答比率が高い。

経験年数別では、5年以上の人で「続けている」比率が全体平均の回答比率（23.3%）を上回っており、年数が多いほど「続けている」という回答比率が高くなる傾向が見られる。

また、世帯年収別で見た場合、800万円以上～900万円未満の家庭で「続けている」という回答比率が極めて高くなっている。

			(%)	
			続けている	続けていない
n=				
全 体		1,019	23.3	76.7
性別	男	232	55.6	44.4
	女	784	13.8	86.2
	それ以外／答えたくない	3		100.0
年 齢	18～20代	141	61.7	38.3
	30代	100	55.0	45.0
	40代	95	35.8	64.2
	50代	101	19.8	80.2
	60代	164	9.1	90.9
	70代以上	418	6.2	93.8
経験年数	1年未満	194	10.3	89.7
	1～3年未満	330	15.8	84.2
	3～5年未満	247	22.7	77.3
	5～10年未満	133	31.6	68.4
	10～20年未満	51	45.1	54.9
	20年以上	64	68.8	31.3
昨年度の世帯年収	100万円未満	48	41.7	58.3
	100万円以上～200万円未満	86	16.3	83.7
	200万円以上～300万円未満	100	22.0	78.0
	300万円以上～400万円未満	126	25.4	74.6
	400万円以上～500万円未満	100	27.0	73.0
	500万円以上～600万円未満	76	19.7	80.3
	600万円以上～700万円未満	54	29.6	70.4
	700万円以上～800万円未満	43	20.9	79.1
	800万円以上～900万円未満	48	54.2	45.8
	900万円以上～1,000万円未満	34	29.4	70.6
	1,000万円以上	107	30.8	69.2
	分からない	197	6.6	93.4

※n=30未満は参考値のため灰色

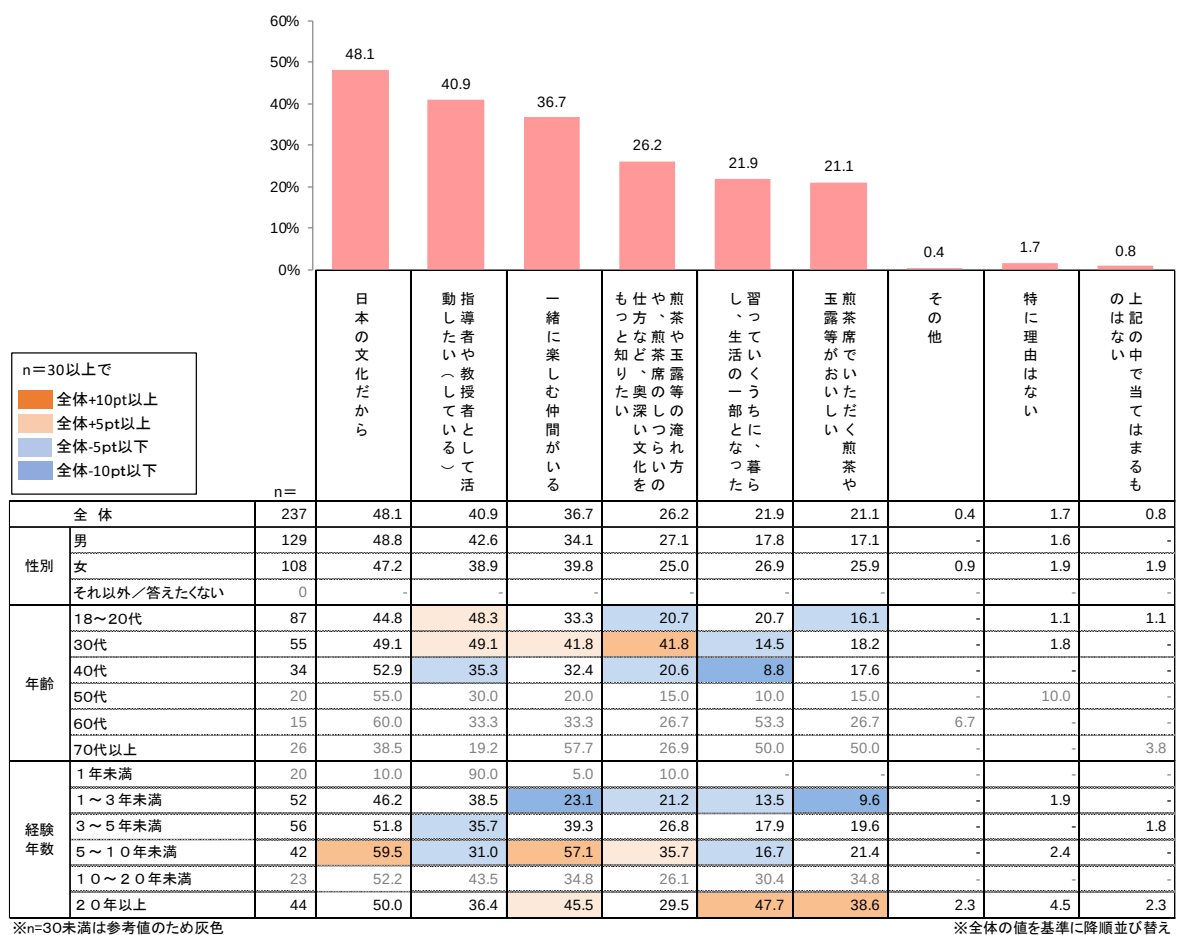
集計表 AQ3：現在の継続状況

煎茶道を続けている理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「日本の文化だから」の48.1%で、次に「指導者や教授者として活動したい(している)」40.9%、「一緒に楽しむ仲間がいる」36.7%と続く。

全体平均の回答比率と年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、年齢別で見た場合、「煎茶や玉露等の淹れ方や、煎茶席のしつらいの仕方など、奥深い文化をもっと知りたい」の回答比率が、「30代」(41.8%)で特に高く、「18～20代」(20.7%)、「40代」(20.6%)が低い。また、「30代」では、「指導者や教授者として活動したい(している)」(49.1%)、「一緒に楽しむ仲間がいる」(41.8%)の回答比率も全体平均より高い。

経験年数別で見た場合、経験年数が20年以上の者で、「習っていくうちに、暮らし、生活の一部となった」(47.7%)、「煎茶席でいただく煎茶や玉露等がおいしい」(38.6%)、5～10年未満の者では、「日本の文化だから」(59.5%)、「一緒に楽しむ仲間がいる」(57.1%)の回答比率が高い。



集計表 AQ3補問1：煎茶道を続けている理由

(その他の内容) 海外で便利

煎茶道を続けている（続けていた）年数

全体平均で最も回答比率が高いのは「1～3年未満」の32.4%で、次いで「3～5年未満」24.2%、「1年未満」19.0%と続く。全体で3年以上続けている（いた）人の比率は48.6%となっている。

男女別では、3年以上継続している回答者は男性で52.6%（232人中122人）、女性で47.4%（784人中372人）となっており、男性の方が長期に続けている（いた）人の割合が多いことが分かる。

			1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上	(%)
n=									
全 体		1,019	19.0	32.4	24.2	13.1	5.0	6.3	48.6
性別	男	232	23.3	24.1	26.7	13.4	5.2	7.3	52.6
	女	784	17.7	34.8	23.6	12.9	5.0	6.0	47.4
	それ以外／答えたくない	3	33.3	33.3	33.3				33.3
年齢	18～20代	141	19.9	34.8	27.0	11.3	3.5	3.5	45.4
	30代	100	14.0	31.0	22.0	19.0	6.0	8.0	55.0
	40代	95	22.1	25.3	18.9	14.7	7.4	11.6	52.6
	50代	101	21.8	31.7	21.8	11.9	5.9	6.9	46.5
	60代	164	20.7	29.3	24.4	12.8	7.3	5.5	50.0
	70代以上	418	17.9	34.9	25.6	12.2	3.6	5.7	47.1

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 AQ4：煎茶道を続けている（続けていた）年数

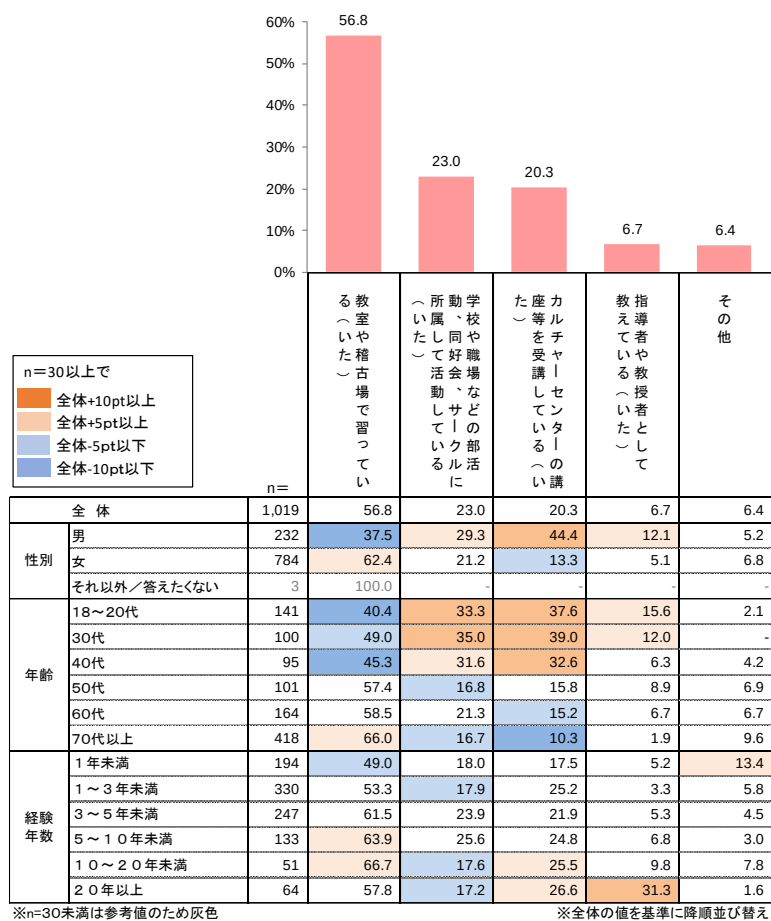
煎茶道に関する活動内容

全体平均で最も回答比率が高いのは「教室や稽古場で習っている（いた）」の56.8%で、次いで「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」23.0%、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」20.3%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」(44.4%)、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」(29.3%)、「指導者や教授者として教えている（いた）」(12.1%)の回答比率が高い。女性の場合は、「教室や稽古場で習っている（いた）」(62.4%)の回答比率が高い。

次に年齢別では、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」で10～40代の者の回答比率が高く、「教室や稽古場で習っている（いた）」は年齢が高くなるにつれ回答比率が高くなっている。

経験年数別では、1年未満の者で、「教室や稽古場で習っている（いた）」(49.0%)、1～3年未満の者で、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」(17.9%)の回答比率が低い。



集計表 AQ5：煎茶道に関する活動内容

（その他の内容）個人宅で習った、習っていない、自宅で親が教えていた

煎茶道に関する活動頻度

全体平均で最も回答比率が高いのは「週1回程度」の44.5%で、次いで「月数回程度」14.9%、「年1回程度」11.4%と続く。週1回以上活動している（いた）比率は61.3%（1,019人中625人）である。

年齢別では、18～20代で「ほぼ毎日」（19.1%）、「週に2～3回」（24.8%）と、回答比率が高い。その一方で、年齢が上がっていくと「週1回程度」の回答比率が上がっていく傾向が見える。

経験年数別で見ると、経験年数が1～10年未満の者で「週1回程度」の回答比率が高い。

また、1年未満で、週1回以上活動している（いた）と回答した比率が38.7%（194人中75人）と低い。

											(%)		
			ほぼ毎日		週に2～3回	週1回程度	月数回程度	月1回程度	年数回程度	年1回程度	週1回以上		
n=													
全 体			1,019	6.5	10.4	44.5			14.9	8.9	3.4	11.4	61.3
性別	男	232	14.7		18.1	29.7			15.5	8.6	4.3	9.1	62.5
	女	784	4.1	8.0	48.9			14.7	9.1	3.2	12.1	61.0	
	それ以外／答えたくない	3	33.3		33.3			33.3				66.7	
年齢	18～20代	141	19.1		24.8	25.5			13.5	7.1	2.8	7.1	69.5
	30代	100	14.0		24.0	29.0			12.0	9.0	4.0	8.0	67.0
	40代	95	9.5	10.5	34.7			17.9	9.5	3.2	14.7	54.7	
	50代	101	2.0	7.9	39.6			15.8	9.9	5.0	19.8	49.5	
	60代	164	2.4	6.1	59.1			9.1	10.4	3.7	9.1	67.7	
	70代以上	418	2.4	4.5	52.2			17.5	8.6	3.1	11.7	59.1	
経験年数	1年未満	194	10.3	1.5	26.8			12.9	14.4	5.2	28.9	38.7	
	1～3年未満	330	4.2	13.6	50.3			13.0	7.0	2.4	9.4	68.2	
	3～5年未満	247	2.8	12.6	52.2			17.0	6.9	1.6	6.9	67.6	
	5～10年未満	133	3.0	8.3	56.4			17.3	9.0	2.3	3.8	67.7	
	10～20年未満	51	9.8	21.6	33.3			9.8	9.8	11.8	3.9	64.7	
	20年以上	64	25.0		7.8	21.9	21.9		9.4	6.3	7.8	54.7	

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 AQ6：煎茶道に関する活動頻度

煎茶道に関する月額費用

全体平均で最も回答比率が高いのは月額「5,000 円未満」の 53.0%で、次いで「5,000 円以上～10,000 円未満」22.8%、「10,000 円以上～15,000 円未満」9.2%と続く。なお、月額1万円以上支出している（いた）と回答した比率は24.2%（1,019 人中 247 人）である。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較した場合、まず男女別では、男性で月額1万円以上支出している（いた）割合は51.3%（232 人中 119 人）、女性は16.3%（784 人中 128 人）と男女差が見られる。年齢別で見ると、年齢が低いほど、月額1万円以上支出している（いた）割合が高いことが分かる。

経験年数別では、年数が多いほど月額1万円以上支出している（いた）と回答している割合が高く、1年未満では10.3%（194 人中 20 人）だが、20年以上では53.1%（64 人中 34 人）となっている。

			(%)												
			5 0 0 0 円 未 満	1 5 0 0 0 0 円 以 上 未 満	1 1 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 以 上	2 1 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 以 上	2 2 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 以 上	3 2 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 以 上	3 3 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 以 上	4 3 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 以 上	4 4 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 以 上	5 4 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 以 上	5 0 0 0 円 以 上	合 1 計 0 0 0 0 円 以 上	
n=															
全 体			1,019	53.0	22.8	9.2	4.2	4.0	2.2	0.7	0.6	0.6	0.5	2.3	24.2
性 別	男	232	28.9	19.8	16.4	9.9	9.5	5.6	1.7	1.7	1.3	1.3	3.9	51.3	
	女	784	60.1	23.6	7.1	2.6	2.4	1.1	0.4	0.3	0.4	0.3	1.8	16.3	
それ以外／答えたくない		3	66.7	33.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
年 齢	18～20代	141	29.1	14.9	20.6	11.3	10.6	4.3	1.4	1.4	0.7	2.8	2.8	56.0	
	30代	100	25.0	20.0	17.0	10.0	8.0	5.0	3.0	2.0	4.0	-	6.0	55.0	
	40代	95	40.0	23.2	9.5	6.3	8.4	4.2	1.1	1.1	1.1	-	5.3	36.8	
	50代	101	46.5	30.7	9.9	4.0	2.0	1.0	-	1.0	-	1.0	4.0	22.8	
	60代	164	54.9	31.7	8.5	0.6	1.2	0.6	0.6	-	-	-	1.8	13.4	
	70代以上	418	71.5	20.6	3.6	1.4	1.4	1.2	-	-	-	-	0.2	7.9	
経 験 年 数	1年未満	194	75.8	13.9	3.1	2.1	1.0	0.5	-	-	-	-	3.6	10.3	
	1～3年未満	330	65.8	21.5	7.0	1.5	1.8	1.2	0.3	0.6	-	0.3	-	12.7	
	3～5年未満	247	44.1	26.3	12.1	6.5	4.9	2.4	1.2	0.8	0.8	0.4	0.4	29.6	
	5～10年未満	133	30.1	30.1	14.3	6.8	9.8	2.3	1.5	1.5	1.5	1.5	0.8	39.8	
	10～20年未満	51	23.5	27.5	15.7	7.8	7.8	3.9	2.0	-	3.9	2.0	5.9	49.0	
	20年以上	64	23.4	23.4	12.5	7.8	6.3	9.4	-	-	-	-	17.2	53.1	

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 AQ7：煎茶道に関する月額費用

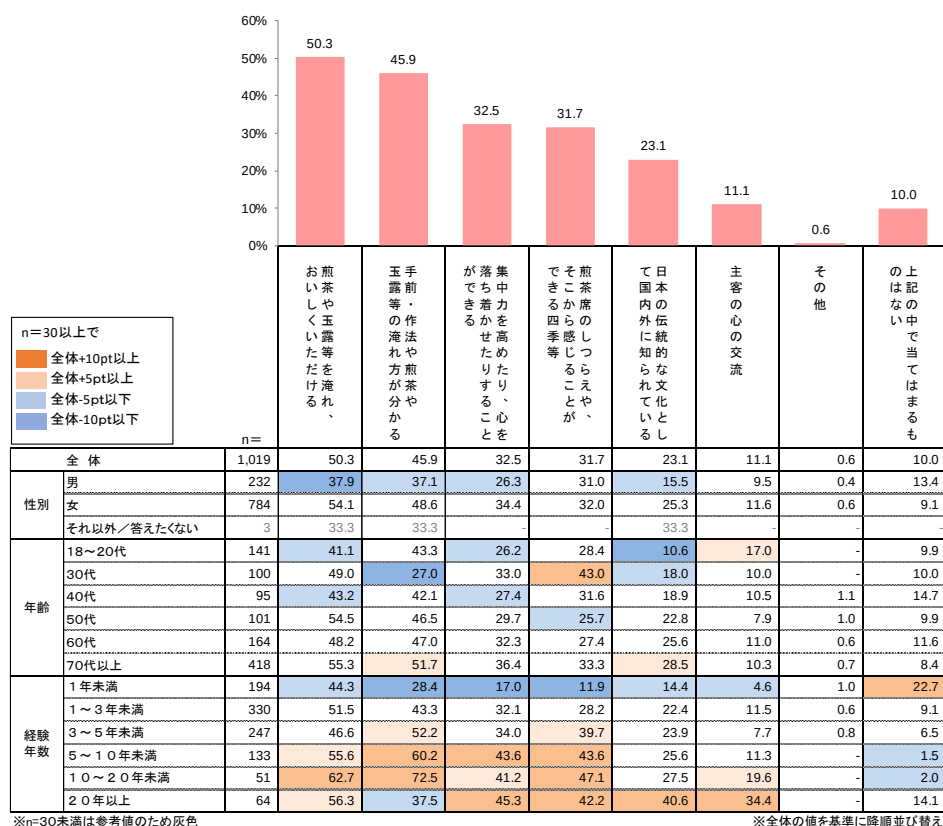
煎茶道に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける」の 50.3%で、次いで「手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる」45.9%、「集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる」32.5%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、男女別で見ると、男性では、女性に比べ、全ての項目で回答比率が低く、特に「煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける」では全体平均 50.3%に対して、男性 37.9%、女性 54.1%と大きな差がある。

次に年齢別で見ると、18～20代で「主客の心の交流」(17.0%)の回答比率が高い一方、「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」(10.6%)が特に低い回答比率となっている。30代では、「煎茶席のしつらえや、そこから感じることができる四季等」(43.0%)の回答比率は高く、「手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる」(27.0%)の回答比率が低い。なお、年代が上がると「煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける」、「手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる」の回答比率が高くなる傾向が見える。

経験年数別では、1年未満で「上記の中で当てはまるものはない」(22.7%)の回答比率が高い。一方、「煎茶席のしつらえや、そこから感じることができる四季等」、「集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる」、「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」の3項目は、経験年数が増えるほど回答比率が上昇している。



集計表 AQ8：煎茶道に関する興味関心や魅力

(その他の内容) 精神統一、色々な場面での所作に自信が持てる

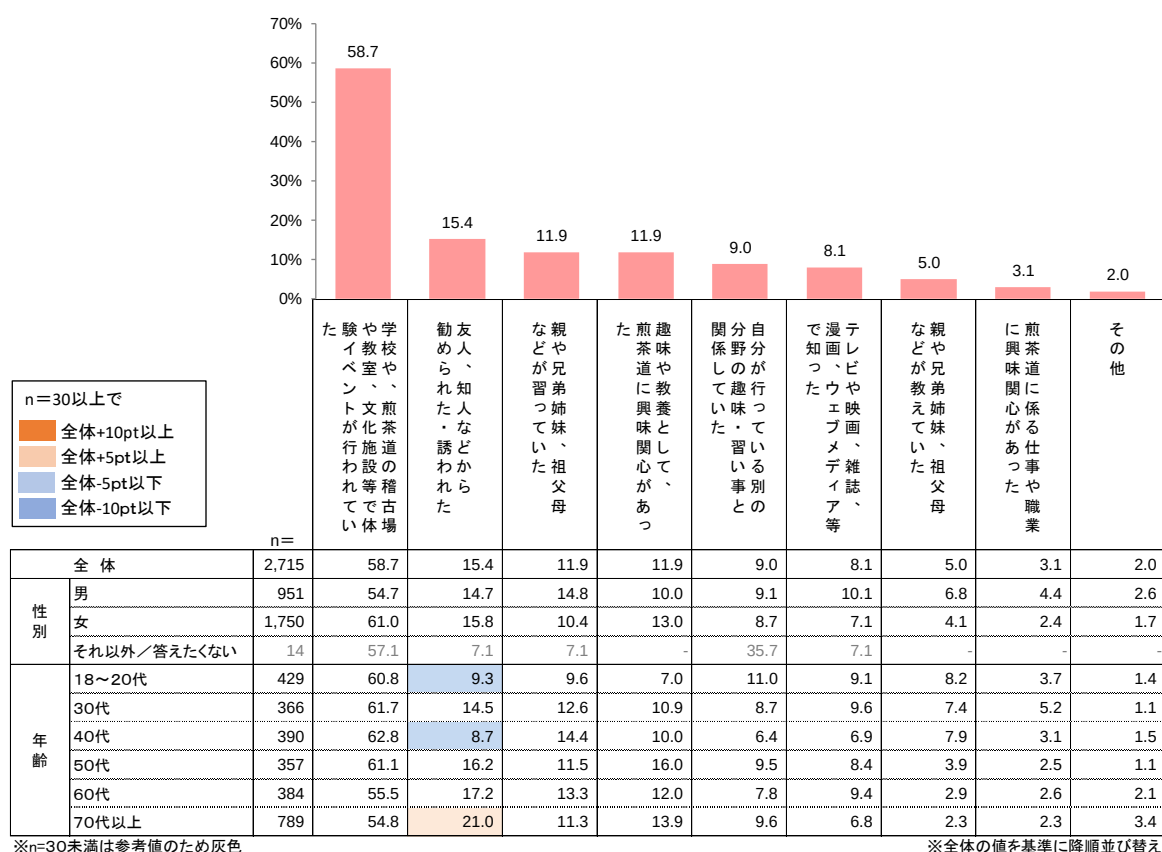
■煎茶道について「学校の授業や職場の研修、イベント等で煎茶会や煎茶席に参加した経験はある」と回答した者への設問（AQ9～AQ15）

本設問では、煎茶道をイベント等で体験したと回答した者が、どのようなきっかけや機会 で煎茶道を体験したのか、また、どの程度煎茶道に興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

煎茶道を体験したきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは「学校や、煎茶道の稽古場や教室、文化施設等で体験イベントが行われていた」の58.7%で、次いで「友人、知人などから勧められた・誘われた」15.4%、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」「趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった」（ともに11.9%）と続く。

年齢別の回答比率と全体平均を比較すると、70代以上の者で「友人、知人などから勧められた・誘われた」（21.0%）の回答比率がやや高い一方、18～20代と40代の回答比率は全体平均を下回っている。また、60代以上では、「学校や、煎茶道の稽古場や教室、文化施設等で体験イベントが行われていた」の回答比率がやや低いことが分かる。



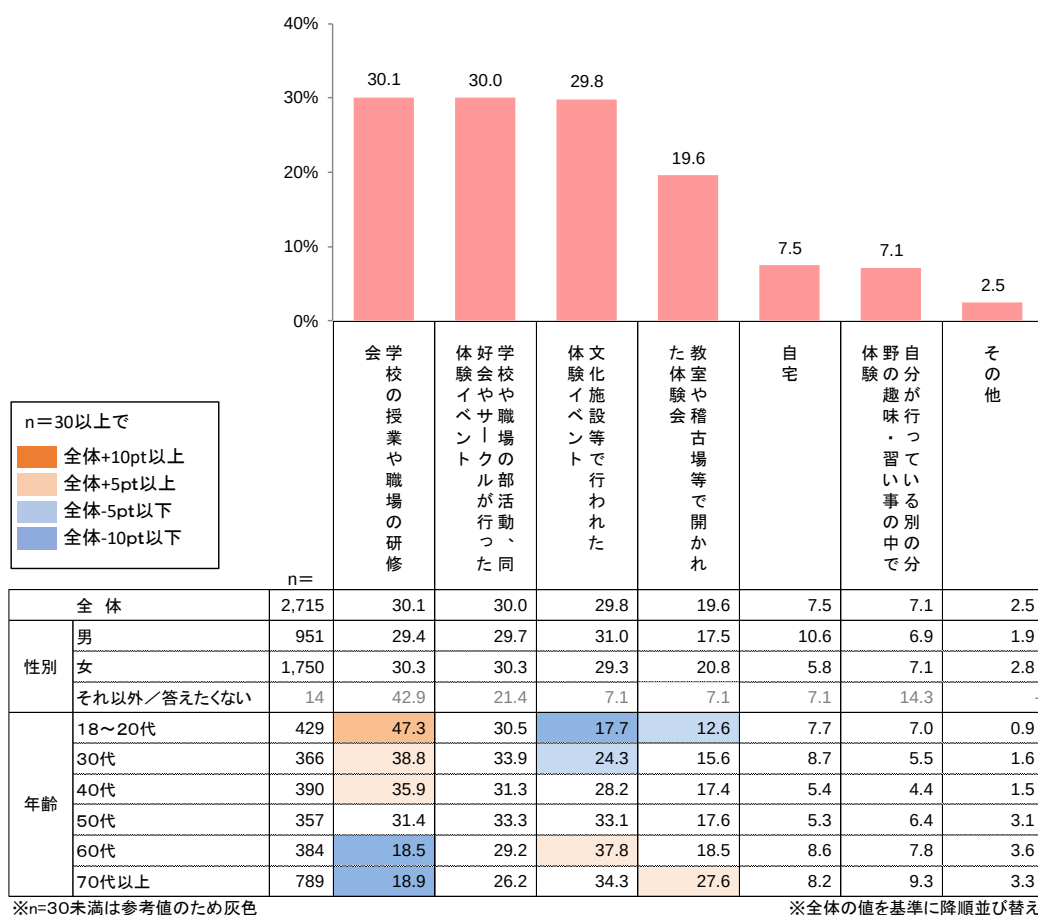
集計表 AQ9：煎茶道を体験したきっかけ

（その他の内容）職場で体験、保育園・幼稚園で習った、娘が習っていた

煎茶道を体験した場

全体平均で最も回答比率が高いのは「学校の授業や職場の研修会」の30.1%で、次いで「学校や職場の部活動、同好会やサークルが行った体験イベント」30.0%、「文化施設等で行われた体験イベント」29.8%がほぼ同率で並ぶ。

年齢別の回答比率と全体平均を比較すると、18～20代の者が「学校の授業や職場の研修会」での体験を最も多く回答しており、次に30代、40代と続いている。また、60代以上は、「学校の授業や職場の研修会」の回答比率が全体平均を大きく下回っている一方、「文化施設等で行われた体験イベント」、「教室や稽古場等で開かれた体験会」の回答比率が高くなっている。



集計表 A Q10：煎茶道を体験した場

(その他の内容) 友人宅、親戚の家、茶室、お寺

煎茶道を習いやすい状況

全体平均で最も回答比率が高いのは「通いやすい場所で習えたら」の42.8%で、次いで「費用が手頃だったら」41.4%、少し離れて「必要な道具等が借りられたら」28.4%と並ぶ。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、男女別では、男性で「通いやすい場所で習えたら」(36.2%)、「費用が手頃だったら」(36.0%)の2項目の回答比率が低い。

次に、年齢別で見ると、70代以上で「わからない」(26.0%)の回答比率が高いほか、30～50代では、「習う時間帯を調整してもらいやすかったら」の回答比率が高くなっている。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 AQ11：煎茶道を習いやすい状況

(その他の内容) 気軽に楽しめる雰囲気がある、正座をしなくてもよい、観光地やイベント等

煎茶道に支払える月額費用

全体平均で最も回答比率が高いのは「5,000 円未満」の 69.6%で、次いで「5,000 円以上～10,000 円未満」20.4%、「10,000 円以上～15,000 円未満」4.3%となった。月額 1 万円以上支払ってもいいと回答した比率は 10.0%（2,715 人中 272 人）である。

次に男女別を見ると、男性で月額 1 万円以上支払ってもいいという回答比率が 17.7%（951 人中 168 人）あったのに対し、女性は 5.8%（1,750 人中 102 人）にとどまり、男女で差が見られる。

また、年齢別では、年齢が低いほど月額 1 万円以上支払ってもいいという回答が増える傾向がある。

													(%)	
		n=	5 0 0 0 円 未 満	1 5 0 , 0 0 0 0 0 0 円 以 上 未 満	1 1 5 0 0 0 0 0 0 0 円 以 上 未 満	2 1 0 5 0 0 0 0 0 0 円 以 上 未 満	2 2 5 0 0 0 0 0 0 0 円 以 上 未 満	3 2 0 5 0 0 0 0 0 0 円 以 上 未 満	3 3 5 0 0 0 0 0 0 0 円 以 上 未 満	4 3 0 5 0 0 0 0 0 0 円 以 上 未 満	4 4 5 0 0 0 0 0 0 0 円 以 上 未 満	5 4 0 5 0 0 0 0 0 0 円 以 上 未 満	5 0 0 0 円 以 上	合 1 計 0 0 0 0 円 以 上
全 体		2,715	69.6	20.4	4.3	2.2	1.2	0.8	0.5	0.1	0.1	-	0.6	10.0
性 別	男	951	59.7	22.6	7.9	4.2	1.9	1.4	0.7	0.3	0.2	-	1.1	17.7
	女	1,750	74.9	19.3	2.5	1.2	0.8	0.5	0.3	0.1	0.1	0.1	0.4	5.8
それ以外／答えたくない		14	71.4	14.3	-	-	-	7.1	7.1	-	-	-	-	14.3
年 齢	18～20代	429	58.5	23.1	7.0	4.2	2.3	1.2	1.4	0.2	0.5	0.2	1.4	18.4
	30代	366	63.9	18.0	7.4	3.0	2.5	2.7	0.8	0.3	-	-	1.4	18.0
	40代	390	65.9	20.3	5.4	3.8	1.5	1.3	0.5	0.5	-	-	0.8	13.8
	50代	357	72.8	19.3	4.2	1.1	1.1	0.6	0.6	-	-	-	0.3	7.8
	60代	384	75.0	20.6	2.9	0.8	0.5	0.3	-	-	-	-	-	4.4
70代以上		789	75.9	20.5	1.8	1.3	0.1	-	-	-	0.1	-	0.3	3.5

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 A Q12：煎茶道に支払える月額費用

煎茶道を習っていない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「興味がなかった」の35.4%で、次いで「通しやすい場所に稽古場や教室がなかった」29.4%、「他の趣味や娯楽の方に興味が向いている」24.6%となった。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較すると、18～40代で「習うための授業料等の費用が確保できなかった」という回答比率がやや高い。その一方で、60代以上では、「他の趣味や娯楽の方に興味が向いている」と回答する傾向が高まっている。



集計表 A Q13：煎茶道を習っていない理由

(その他の内容) 正座がづらい、きっかけがなかった、習う必要性を感じなかった

煎茶道に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは「日本の伝統文化への理解を深められる」の51.3%で、次いで「煎茶やお菓子を楽しめる」43.2%、「作法、しきたりなどが複雑」39.3%となった。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、男女別では、男性で「煎茶やお菓子を楽しめる」(37.4%)、「月謝や道具等にお金がかかる」(24.6%)の2項目で回答比率が低い。

次に年齢別では、18～20代で「煎茶やお菓子を楽しめる」(54.5%)の回答比率が高い一方、「日本の伝統文化への理解を深められる」、「月謝や道具等にお金がかかる」、「暮らし、生活を豊かにしてくれる」の3項目への回答比率が低い傾向にある。また、60代以上の者では、「煎茶やお菓子を楽しめる」の回答比率が全体平均よりも低い結果となっている。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

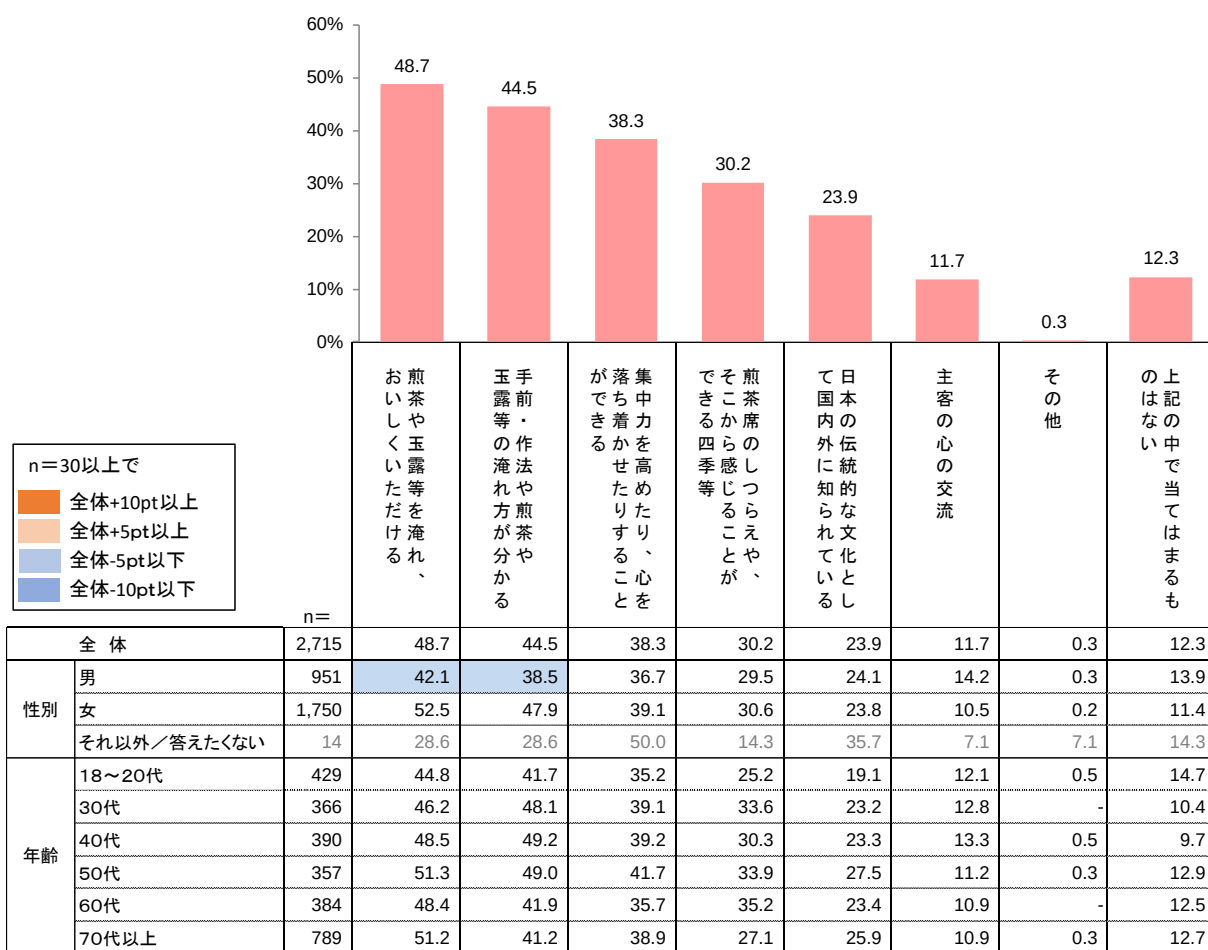
集計表 AQ14：煎茶道に対する印象やイメージ

(その他の内容) 正座をするのがつらい、精神的にゆとりができそう

煎茶道に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける」の48.7%で、次いで「手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる」44.5%、「集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる」38.3%と続く。

全体平均の回答比率と男女別の回答比率とを比較すると、男性で「煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける」(42.1%)、「手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる」(38.5%)の回答比率が低い傾向が見られる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 A Q15：煎茶道に関する興味関心や魅力

(その他の内容) 教養が身につく、ゆったりした時間を楽しめる、着物が着られる

■煎茶道を「今まで経験したことはない」と回答した者への設問（A Q16～A Q20）

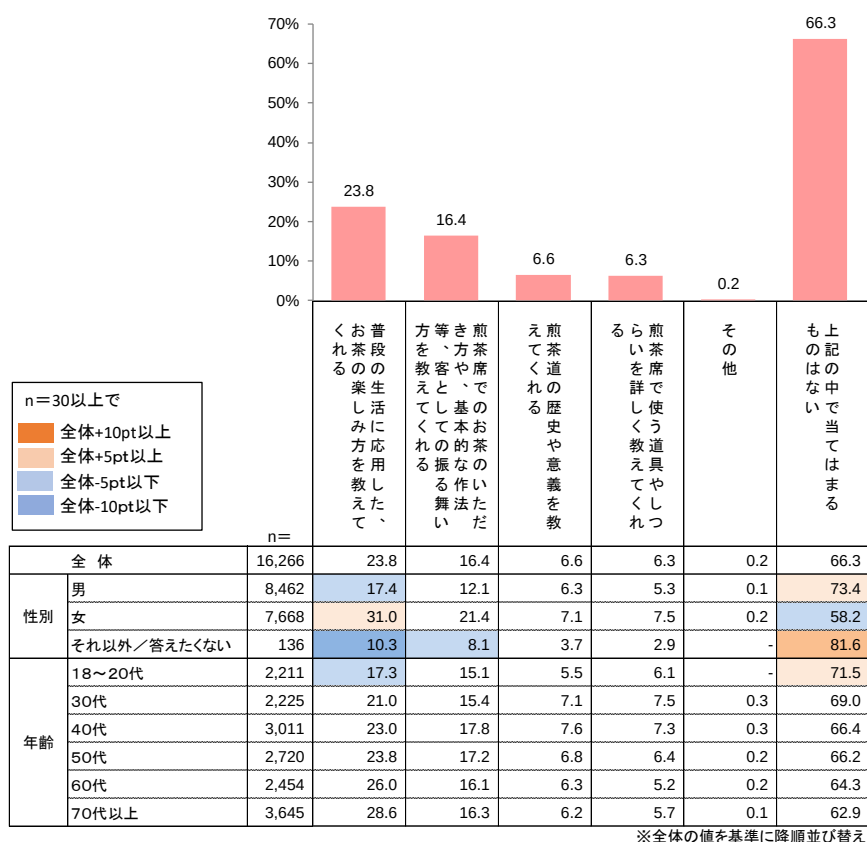
本設問では、煎茶道を経験したことがないと回答した者が、もし煎茶道を体験するならば、どのような内容や機会なら参加したいか、また、煎茶道に対してどの程度、興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

参加してみたい煎茶道の体験内容

全体平均で最も回答比率が高いのは「上記の中で当てはまるものはない」の66.3%で、次いで「普段の生活に応用した、お茶の楽しみ方を教えてくれる」23.8%、「煎茶席でのお茶のいただき方や、基本的な作法等、客としての振る舞い方を教えてくれる」16.4%となった。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、「普段の生活に応用した、お茶の楽しみ方を教えてくれる」の回答比率が、男性で17.4%、女性で31.0%となっており、回答比率に大きな差が見られる。

次に年齢別で見ると、18～20代の者では「上記の中で当てはまるものはない」の回答比率が全体平均よりも高く、「普段の生活に応用した、お茶の楽しみ方を教えてくれる」の回答比率が低いことが分かる。



集計表 A Q16：参加してみたい煎茶道の体験内容

（その他の内容）正座しなくてもよいなら、完全無料、普段非公開の美術品が見られる

参加しやすい煎茶道の体験条件

全体平均で最も回答比率が高いのは「わからない」の51.4%で、次いで「行きやすい場所で体験できたら」28.3%、「手ごろな参加費で参加できたら」27.6%となる。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「わからない」(59.1%)という回答比率が高く、一方で「行きやすい場所で体験できたら」(21.6%)、「手ごろな参加費で参加できたら」(20.8%)と回答比率が低い。また、女性の場合、「行きやすい場所で体験できたら」(36.1%)、「手ごろな参加費で参加できたら」(35.5%)と、男性とは対照的に体験機会の条件に関する回答への回答比率が高い傾向が見られる。

次に年齢別では18～20代で「わからない」(58.2%)の回答比率が高く、「行きやすい場所で体験できたら」(21.5%)の回答比率は低いことが分かる。



※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 AQ17：参加しやすい煎茶道の体験条件

(その他の内容) 正座しなくてもよいなら、無料であれば、普段着で気軽に体験できれば

煎茶道を体験したことがない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「そもそも知らなかった」の29.0%で、次いで「自分の趣味と合わない」27.1%、「興味がない」23.8%となった。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では男性で「自分の趣味と合わない」(32.1%)の回答比率が高い一方で、女性では同じ項目の回答比率が低い傾向が見られる。

次に年齢別では、18～20代で「自分の趣味と合わない」(36.9%)の回答比率がやや高い。70代以上では「そもそも知らなかった」(22.6%)の回答比率が低いことから、高齢者の煎茶道に対する認知度がうかがえる。また、「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」の回答比率を見ると、18～20代で10.3%、70代以上で22.0%と全体平均と比較しても大きな開きがあることが確認できる。



集計表 A Q18：煎茶道を体験したことがない理由

(その他の内容) 茶道を習っていたから、正座ができないから、お茶が飲めない

煎茶道に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは「特に印象はない、わからない」の43.1%で、次いで「作法、しきたりなどが複雑」24.7%、「日本の伝統文化への理解を深められる」23.0%となった。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「特に印象はない、わからない」(51.3%)と回答比率が高く、「煎茶やお菓子を楽しめる」(14.2%)は低い。一方、女性の場合、「煎茶やお菓子を楽しめる」(26.1%)、「月謝や道具等にお金がかかる」(23.3%)の回答比率が高く、逆に「特に印象はない、わからない」(33.5%)は低い傾向が見られ、性別で傾向が異なっている。

次に年齢別では、18～20代で「煎茶やお菓子を楽しめる」(25.7%)、「特に印象はない、わからない」(49.4%)の回答比率が高く、「月謝や道具等にお金がかかる」(10.5%)の回答比率が低い傾向が見られる。



集計表 AQ19：煎茶道に対する印象やイメージ

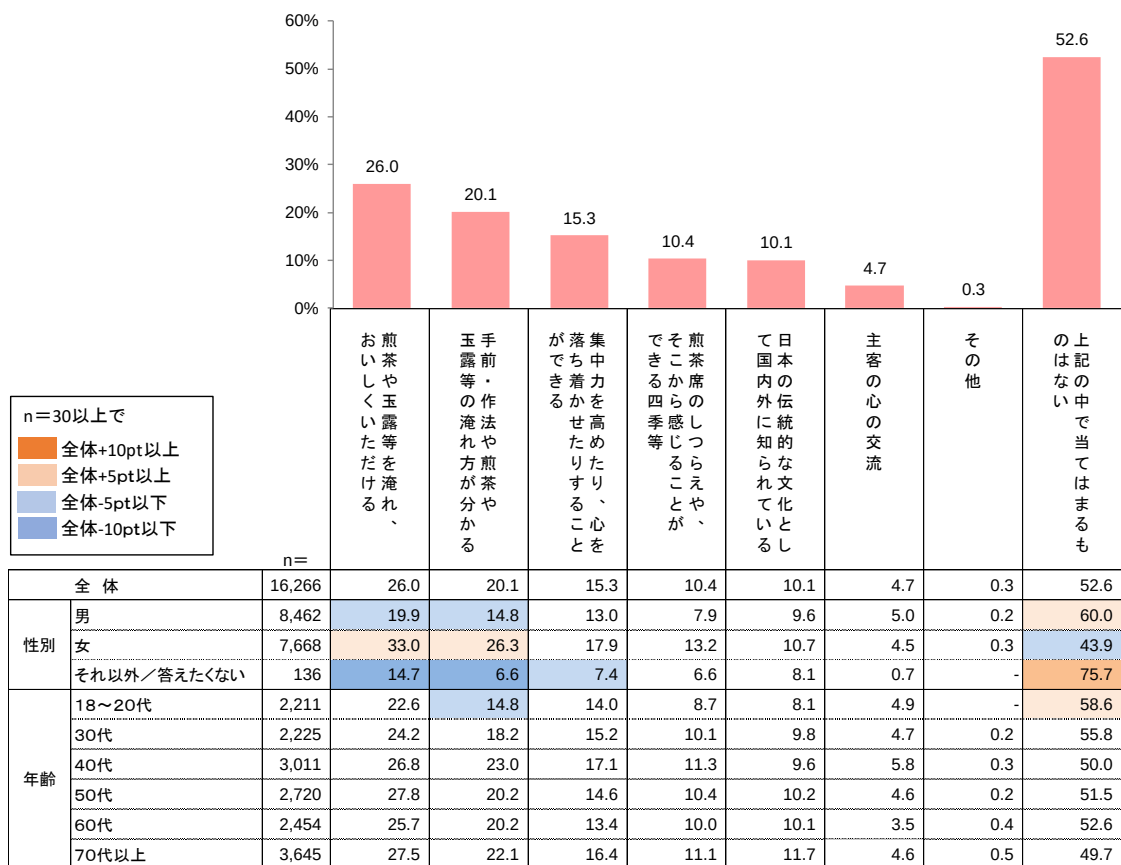
(その他の内容) 堅苦しい、敷居が高い、正座を続けるのが大変、服装に気を遣う

煎茶道に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「上記の中で当てはまるものはない」の52.6%で、次いで「煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける」の26.0%、「手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる」20.1%、「集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる」15.3%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別で見ると、男性では、「煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける」(19.9%)、「手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる」(14.8%)の回答比率が低く、「上記の中で当てはまるものはない」(60.0%)の回答比率が高い傾向が見られる。

次に年齢別で見ると、18～20代では、「手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる」(14.8%)の回答比率が低く、「上記の中に当てはまるものはない」(58.6%)の回答比率が高い傾向が見られ、総じて、煎茶道の魅力が伝わっていない可能性がある。



※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 A Q20：煎茶道に関する興味関心や魅力

(その他の内容) 美味しいお菓子が食べられる、鑑賞する書や絵画等の情報、美しい所作が身につく

②調査結果に基づく分析と考察

本節では、煎茶道の振興施策の検討を主眼として、前掲の集計結果に加えてクロス集計等も行い、これらの結果について分析を行う。

煎茶道に関して「経験あり」、「参加体験あり」、「未経験」、それぞれの回答者にどのような特徴が見られるのかを分析するため、「居住地」、「職業」、「同居家族」、「世帯年収」、「子供の頃の習い事」等の設問や設問間とのクロス集計を行った。結果は以下のとおりである。

回答者の特性や傾向について

■居住地、職業、同居家族、世帯年収とのクロス集計結果

煎茶道の経験・体験の有無と居住地とのクロス集計の結果、北海道、東北、沖縄では、「未経験」の比率がやや高い傾向が見られる。

次に職業とのクロス集計の結果からは、「主婦・主夫」では「未経験」の回答比率がやや低い。その一方で、「学生」では「主婦・主夫」とは対照的に「参加体験あり」が全体平均よりやや高いことが分かる。なお、世帯年収とのクロス集計の結果としては、「1,000万円以上」で「経験あり」の回答比率がやや高いことが分かる。

以上のとおり、居住地、職業、同居家族、世帯年収のクロス集計からは、顕著な傾向や特徴等は見られなかった。

居住地×煎茶道の経験の有無

		n=	FQ フィルタリング・パート (%)		
			「経験あり」層	「参加体験あり」層	「未経験」層
		n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下			
全 体		20,000	5.1	13.6	81.3
居住地	北海道	852	3.6	9.9	86.5
	東北	1,385	4.0	12.4	83.6
	関東	7,422	5.3	13.7	81.0
	北陸	816	5.1	12.6	82.2
	東海（中部）	2,349	5.6	13.9	80.5
	近畿	3,247	5.5	13.7	80.8
	中国	1,140	5.3	14.0	80.7
	四国	584	4.3	16.3	79.5
	九州	1,987	4.8	14.6	80.6
	沖縄	218	1.4	11.5	87.2

職業・同居家族・昨年度の世帯年収×煎茶道の経験の有無

		FQ フィルタリング・パート				(%)
			「経験あり」層	「参加体験あり」層	「未経験」層	
n=30以上で						
全体+10pt以上						
全体+5pt以上						
全体-5pt以下						
全体-10pt以下						
		n=				
職業	正規の職員・従業員	6,411	4.5	12.6	82.9	
	非正規の職員・従業員	2,803	3.7	14.3	81.9	
	自営業主・自由業	1,239	3.3	14.8	81.9	
	家族従業者	135	6.7	15.6	77.8	
	主婦・主夫	3,987	9.7	17.9	72.4	
	学生	512	3.1	19.9	77.0	
	リタイア、無職	4,141	3.5	10.2	86.2	
	その他	772	3.8	7.6	88.6	
同居家族	ひとり暮らし	4,145	5.8	12.0	82.2	
	核家族	13,277	5.0	14.2	80.8	
	三世代家族	1,179	5.7	16.2	78.1	
	上記以外で同居している人がいる	1,399	3.3	10.5	86.2	
昨年度の世帯年収	100万円未満	991	4.8	10.2	85.0	
	100万円以上～200万円未満	1,325	6.5	12.3	81.2	
	200万円以上～300万円未満	2,030	4.9	13.7	81.4	
	300万円以上～400万円未満	2,367	5.3	14.2	80.5	
	400万円以上～500万円未満	1,937	5.2	13.8	81.0	
	500万円以上～600万円未満	1,457	5.2	13.4	81.4	
	600万円以上～700万円未満	1,096	4.9	15.4	79.7	
	700万円以上～800万円未満	1,024	4.2	13.5	82.3	
	800万円以上～900万円未満	702	6.8	17.7	75.5	
	900万円以上～1,000万円未満	653	5.2	15.5	79.3	
	1,000万円以上	1,525	7.0	17.4	75.5	
	分からない	4,893	4.0	11.8	84.2	

■子供の頃の習い事とのクロス集計結果

次に、煎茶道の経験・体験の有無についての回答と、「子供の頃の習い事」に関する設問への回答とのクロス集計の結果を示す。

クロス集計を行った結果、「経験あり」と回答した者で、「伝統芸能や茶道・華道等の芸事」、「囲碁や将棋」、「バレエやダンス」、「美術」の順に高い回答比率を示しているほか、「参加体験あり」と回答した者でも近似する傾向が見られ、多くの習い事の項目での回答比率が高い。

子供の頃の習い事×煎茶道の経験の有無

		FQ フィルタリング・パート		
		「経験あり」層	「参加体験あり」層	「未経験」層
n=30以上で				
全体+10pt以上				
全体+5pt以上				
全体-5pt以下				
全体-10pt以下				
全 体	n=			
楽器演奏(ピアノやバイオリンなど)や歌唱(コーラスや声楽など)	20,000	5.1	13.6	81.3
バレエやダンス(バレエ、モダンダンスやコンテンポラリーダンスなど)	4,615	9.5	20.8	69.6
美術(絵画や版画、彫刻、工芸など)	755	21.2	25.2	53.6
伝統芸能や茶道・華道等の芸事	939	16.4	25.6	58.0
囲碁や将棋	743	28.8	24.5	46.7
書道・習字・ペン字、そろばん	221	25.3	29.4	45.2
スポーツ・武道	8,121	7.1	17.9	74.9
その他	3,661	5.4	18.9	75.7
していない	449	4.5	24.5	71.0
	7,852	1.9	6.4	91.7

■スポーツや趣味、娯楽等の活動とのクロス集計結果

次に、スポーツや趣味、娯楽等（以下、趣味・娯楽等）の活動の内容や、これらの活動に費やす時間やお金に関する回答結果とのクロス集計結果と、そこから見ることで特徴や傾向を示す。

趣味・娯楽等として行っている活動内容のクロス集計結果からは、これらの活動を「特に何もしていない」と回答した者が、全体平均の回答比率 17.4%に対し、経験ありの回答者で 7.6%、参加体験ありの回答者で 5.7%と全体平均よりも低く、経験あり・参加体験ありの回答者ともに、趣味・娯楽等と積極的な関わりを持っていることがうかがえる。

趣味・娯楽等の活動内容の傾向として、経験ありと回答した者は、「お茶」(10.2%)、「お花」(8.9%)、「書道」(7.9%)、「邦楽、民謡」(3.4%)、「おどり（日舞など）」(2.4%)と全体平均を上回る回答比率となっている。

また、参加体験ありと回答した者は、「特に何もしていない」が 5.7%と全体平均を下回っているのを除き、全ての種目で、全体平均以上か平均並の回答比率となっており、分野に関わらず趣味・娯楽の活動を幅広く行っていることが推察できる。日本の伝統的な文化に関しても全体平均の回答比率を上回っているものの、煎茶道を経験している者と比較した場合はいずれも回答比率が下回っている。このことから、経験した者の日本の伝統的な文化に係る習い事の経験率が高いことが分かる。

次に、1ヶ月に使える趣味・娯楽等にかかる費用や活動する時間帯、活動に費やす時間とのクロス集計結果を示す。

まず、趣味・娯楽等にかかる費用については、経験ありと回答した者については、5,000円未満の回答比率が低く、それ以外の項目の回答比率は全体平均をほぼ上回っていることが分かる。また、平均月2万円以上支出している割合は18.7%（942人中176人）と、「参加体験あり」と回答した者の13.4%（2,561人中344人）、「未経験」と回答した者の10.5%（13,024人中1,367人）に比べ、上回っている。

趣味・娯楽等の活動を行う時間帯を見ると、経験ありと回答した者は、「平日午前」(41.9%)、「平日午後」(38.9%)と、平日日中の活動率が高いことが分かる。

趣味・娯楽等に費やす月平均の時間を見ると、「1時間未満」という回答比率が全体平均で22.9%であるのに対し、「経験あり」と回答した者では18.3%にとどまっている。また、「2時間以上～3時間未満」と「3時間以上～4時間未満」の2項目で全体平均をやや上回る回答比率であることが分かる。

煎茶道の経験の有無×趣味・娯楽等の活動状況

		共通設問1 趣味・娯楽活動の参加状況													(%)
		信 動 画 鑑 賞 (レ ン タ ル 、 配 信)	邦 楽 、 民 謡	な ン ぽ 、 コ ー ド 、 テ ー プ 、 C D 、 F M 、	音 楽 鑑 賞 (配 信 、 C D 、 F M 、	書 道	お 茶	お 花	お どり (日 舞 な ど)	除 読 書 (仕 事 、 勉 強 な ど を 娯 楽 と し て の)	の テ レ ビ ゲ ー ム (家 庭 で)	オ ン ラ イ ン ゲ ー ム な ど の	中 央 競 馬	ル タ 複 合 シ ョ ッ プ ト レ ー ン グ セ ン タ ー	特 に 何 も し て い な い
n=30以上で		全体+10pt以上													
		全体+5pt以上													
		全体-5pt以下													
		全体-10pt以下													
全 体	20,000	13.6	1.5	17.3	1.7	1.6	1.8	0.4	16.1	7.9	5.3	4.7	15.7	17.4	
「経験あり」層	1,019	10.3	3.4	14.2	7.9	10.2	8.9	2.4	15.6	6.2	5.1	4.3	15.3	7.6	
「参加体験あり」層	2,715	17.5	2.3	21.8	3.8	3.4	4.0	0.6	23.5	10.5	7.3	5.3	24.4	5.7	
「未経験」層	16,266	13.1	1.2	16.7	1.0	0.8	1.0	0.2	14.9	7.6	4.9	4.6	14.3	19.9	

※共通設問1は、分析で取り上げた選択肢のみ抜粋して掲載している。(以下同様)

煎茶道の経験の有無×趣味・娯楽等に1ヶ月に使える費用

共通設問2 1ヶ月に使える趣味・余暇費用														(%)
		5 0 0 0 0 円未 満	1 5 0 , 0 0 0 0 円未 満	1 1 5 0 0 0 0 円未 満	2 1 0 5 0 0 0 円未 満	2 2 5 0 0 0 0 円未 満	3 2 0 5 0 0 0 円未 満	3 3 5 0 0 0 0 円未 満	4 3 0 5 0 0 0 円未 満	4 4 5 0 0 0 0 円未 満	5 4 0 5 0 0 0 円未 満	5 0 0 0 円 以上	合 2 計 0 0 0 0 円 以上	
n=30以上で														
全体+10pt以上														
全体+5pt以上														
全体-5pt以下														
全体-10pt以下														
n=														
全 体	16,527	49.5	22.9	10.2	5.9	3.1	3.0	1.4	0.6	0.4	0.6	2.3	11.4	
「経験あり」層	942	35.4	23.1	14.1	8.7	5.7	4.5	2.2	1.3	1.0	0.6	3.4	18.7	
「参加体験あり」層	2,561	41.7	26.0	12.3	6.6	4.0	3.2	2.0	0.9	0.6	0.6	2.2	13.4	
「未経験」層	13,024	52.1	22.3	9.6	5.6	2.7	2.8	1.2	0.5	0.3	0.6	2.3	10.5	

煎茶道の経験の有無×趣味・娯楽等を行う時間帯

共通設問3 1ヶ月に使える趣味・余暇時間帯										(%)	
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下		平日 午前	平日 午後	平日 夕方	平日 夜間	休日 午前	休日 午後	休日 夕方	休日 夜間		
n=											
全 体	16,527	30.6	30.1	15.8	18.8	34.9	43.7	21.2	15.5		
「経験あり」層	942	41.9	38.9	17.3	13.6	25.6	27.5	11.9	6.2		
「参加体験あり」層	2,561	32.3	31.7	17.4	19.7	36.4	41.2	21.0	14.1		
「未経験」層	13,024	29.5	29.1	15.4	19.0	35.3	45.4	21.9	16.5		

煎茶道の経験の有無×趣味・娯楽等に費やす時間

		共通設問4 趣味・余暇活動を行う時間											(%)
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下		1時間未満	1時間未満	2時間未満	2時間未満	3時間未満	3時間未満	4時間未満	4時間未満	5時間未満	5時間未満	6時間未満	6時間以上
n=													
全体	16,527	22.9	23.5	13.7	7.0	4.5	4.1	1.7	1.9	0.9	1.3	18.5	
「経験あり」層	942	18.3	22.8	16.9	9.3	5.3	4.4	2.7	2.5	1.1	1.6	15.2	
「参加体験あり」層	2,561	18.1	23.9	14.4	8.4	4.5	5.1	2.6	2.3	0.8	1.6	18.3	
「未経験」層	13,024	24.2	23.4	13.3	6.5	4.5	3.9	1.5	1.8	0.9	1.3	18.8	

消費行動に関する意識や価値観に関するクロス集計結果

消費行動に関する意識や価値観の項目と煎茶道の経験・体験の有無とのクロス集計結果を示す。

「経験あり」と回答した者では、「リスクはできるだけ避けたい」と「上記であてはまるものはない」を除いた全ての意見で回答比率が全体平均を上回っており、「自分の考えを主張するより、周りとの和を尊重したい」(35.3%)と「集まりやイベントの参加者同士の一体感が大事だ」(11.8%)の回答比率では、「参加体験あり」と回答した者を押さえ、最も高くなっている。これに対し「参加体験あり」と回答した者では、「上記であてはまるものはない」を除いた全項目で平均を上回るだけでなく、「自分の考えを主張するより、周りとの和を尊重したい」「集まりやイベントの参加者同士の一体感が大事だ」の2項目を除く項目で回答比率が高い。また、「流行っていないくても、自分が面白いと思ったものは試してみたい」(36.8%)、「家族や友人・知人の役に立ちたい」(34.7%)、「困っている人・助けが必要な人の役に立ちたい」(29.9%)、「その時・その場でしか得られない体験をしたい」(23.3%)の4項目では全体平均の回答比率を10%内外上回っている。

一方、「未経験」と回答した者では、「上記であてはまるものはない」(25.2%)以外の全項目で回答比率が平均を下回っている。

煎茶道の経験の有無×消費行動に対する価値観

		共通設問5 消費行動に対する価値観															(%)
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下		自分、周りの考えを主張するより、周りとの和を尊重したい	自分の考えを主張するより、周りとの和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	周りの考えを主張するより、自分との和を尊重したい	
n=																	
全体	20,000	25.6	22.6	20.2	41.9	24.9	10.6	19.6	2.4	5.4	13.6	3.9	26.8	3.1	3.1	22.0	
「経験あり」層	1,019	35.3	27.1	26.2	39.5	31.4	17.2	26.7	3.8	11.8	16.7	5.7	27.8	5.3	3.2	8.8	
「参加体験あり」層	2,715	31.6	30.9	27.4	47.6	34.7	18.2	29.9	3.5	9.4	23.3	6.7	36.8	5.5	4.9	7.3	
「未経験」層	16,266	24.0	21.0	18.6	41.1	22.8	8.9	17.4	2.2	4.3	11.8	3.4	25.1	2.6	2.8	25.2	

■ 普段接するメディアとのクロス集計結果

「経験あり」と回答した者では、「テレビ（NHK）」、「CATVや衛星放送」、「ラジオ」、「新聞」、「雑誌・タウン誌」、「紙の書籍」で回答比率が全体平均を5%以上上回る。一方、「テレビ（民放）」、「インターネットのウェブサイト・ニュースサイトなど」、「動画投稿サイト」、「SNS」、「紙のマンガ／マンガ雑誌」、「電子版のマンガ」、「有料動画サイト」では回答比率が全体平均を下回っており、民放のテレビを除く旧来のメディアや紙のメディアへの接触が高い傾向が見られる。

一方、「参加体験あり」と回答した者では、全てのメディアにおいて全体平均より回答比率が高い。

「未経験」と回答した者は、逆に、全てのメディアにおいて回答比率が低く、「上記のメディアはあまり見ていない」（12.5%）のみ全体の回答比率を上回るという結果になった。

煎茶道の経験の有無×接触メディア

共通設問6 接触メディア																	(%)
n=30以上で		Bテレビ (民放の地上波・BS)	波・BSテレビ (NHKの地上波・BS)	CATVや衛星放送のチャンネル	ラジオ(インターネット経由を除く)	新聞(電子版含む)	雑誌・タウン誌(インターネット経由を除く)	む(アプリ経由を含む)	動画投稿サイト(YouTubeなど)	SNS(Twitter、Facebook、Instagram、TikTokなど)	紙の書籍	電子書籍	紙のマンガ／マンガ雑誌	電子版のマンガ	有料動画サイト(Amazon Prime Videoなど)	上記のメディアはあまり見ていない	
n=		全体	経験あり層	参加体験あり層	未経験層	全体	経験あり層	参加体験あり層	未経験層	全体	経験あり層	参加体験あり層	未経験層	全体	経験あり層	参加体験あり層	未経験層
全体+10pt以上		20,000	69.5	41.7	10.2	14.3	28.5	7.5	46.1	33.7	28.5	20.4	6.0	6.8	6.4	11.9	10.8
全体+5pt以上		1,019	69.2	51.3	16.2	20.9	38.4	14.6	42.6	24.9	23.1	26.2	6.1	5.6	4.0	10.5	4.9
全体-5pt以下		2,715	72.9	52.0	14.8	18.6	36.6	14.2	52.2	39.5	35.9	29.4	8.6	8.8	8.6	16.1	2.8
全体-10pt以下		16,266	69.0	39.4	9.0	13.1	26.5	6.0	45.3	33.2	27.6	18.5	5.5	6.6	6.1	11.3	12.5

以上のクロス集計結果と、「①単純集計の結果について」で示した回答者の年齢・性別とのクロス集計の結果も踏まえ、煎茶道の「経験あり」「参加体験あり」「未経験」、それぞれの回答者の特徴や傾向は以下のとおりになる。

1) 煎茶道を経験したと回答した者の傾向

男女別で見た場合、女性の方が男性よりも経験者の総数が多いのが特徴の一つといえる。年齢別で見た場合、70代以上が最も多く、次いで60代、18～20代と続く。

次に、経験者は、子供の頃の習い事として伝統的な文化に係る分野を習っていたと回答している者が多く、また、趣味・娯楽等の活動に積極性があり尚かつ伝統的な文化に係る趣味への嗜好性の高さがうかがえる。消費行動への意識については、周りとの協調や一体感を大切に、身近な人や社会の役に立ちたいという価値観を持っている者が全体平均と比べると多い傾向が見え、普段のメディア接触については、テレビやラジオ、新聞等のメディア媒体への接触率が高い傾向にあるといえる。

2) 煎茶道を参加体験したと回答した者の傾向

男女別で見た場合、女性の方が男性よりも参加体験者の総数が多いのが特徴の一つといえる。また、年齢別で見た場合、70代以上が最も多く、次いで18～20代、30代と続く。

次に、子供の頃の習い事の経験があるとの回答比率が高い傾向にあり、趣味・娯楽等の活動に対して積極的な傾向にあることがうかがえる。消費行動への意識については、自分の考えに

基づいた判断を重視し、リスクは避けつつも、面白いものを試したいという嗜好性が特徴として表れている。また、普段のメディア接触については、電子書籍や有料動画等のメディア媒体との接触率が高い傾向にある。

3) 煎茶道を未経験と回答した者の傾向

男女別、年齢別等では顕著な特徴は見られなかった。

子供の頃の習い事の経験については、経験がないとの回答比率が高い傾向にあり、趣味・娯楽等の活動に対して、特に何もしていないという回答比率が全体平均を上回っており、積極的に趣味・娯楽等を行うことがない回答者が多い傾向にある。消費行動への意識については、当てはまるものはないという回答比率が全体平均を上回っており、特徴的な傾向は見られない。また、メディア接触については、民放のテレビやウェブサイトとの接触率が高い傾向にあるといえる。

なお、回答者の居住地や職業、同居家族の構成、世帯年収に関する設問とのクロス集計を行ったが、特徴的な傾向は見られなかった。

未経験者の傾向と特徴

次に、上記の属性分析を踏まえ、「経験あり」「参加体験あり」「未経験」、それぞれの回答者ごとに設けた設問の回答結果についてクロス集計を行い、回答者の特徴について更なる分析を行う。

まず、未経験と回答している者の設問の分析を行う。上述の回答者属性に関する分析では、未経験と回答した者については際立った特徴や傾向は見いだせなかった。加えて、今後の振興施策を考える上で、未経験と回答した者が、なぜ煎茶道を経験してこなかったのか、また、煎茶道を経験することに対してどのような意識を持っているのか、どのような体験方法や周知の実施をすれば参加体験等に繋げていく可能性を見いだすことができるのか、その検討のために分析を行う必要がある。

■未経験者の体験機会への参加意向

未経験と回答した者のうち、煎茶道を体験してみたいという意向を持つ回答者、体験意向がない回答者にはどのような特徴があるのか。趣味・娯楽等の活動内容、消費意識、メディア接触の設問とAQ16「参加してみたい煎茶道の体験内容」の回答結果のクロス集計を行い、回答者の特徴について分析を行う。

AQ16では、体験内容として設定した選択肢には当てはまるものはないと66.3%が回答しており、残りの33.7%は、体験内容によっては煎茶道の体験に参加してみたいという意向を持っていると推察される。

まず、煎茶道の体験に参加してみたい意向を示した回答者について、クロス集計結果からその特徴を確認する。趣味・娯楽等の活動全般に積極性があり、消費行動への明確な意見や嗜好性を持ち、メディア接触も多い傾向が見られる。また、趣味・娯楽の項目への回答比率を見ると、日本の伝統的な文化（「邦楽、民謡」「お茶」「お花」「書道」「おどり（日舞など）」）への参加率は、全体平均に比べてやや高い数値を示しているが、煎茶道の経験があると回答した者と比べると大きな差とはいえない。

次に、煎茶道の参加体験の意向がない者について、その特徴を確認する。AQ16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者の27.2%は、趣味・娯楽等の活動について「特に何もしていない」と回答しており、AQ16でいずれかの体験内容の選択肢を回答した人と顕著な差が見られる。また、消費行動に関する設問でも、メディア接触についても、当てはまらない、特にしていないという選択肢を選ぶ割合が高い。このように、煎茶道の参加体験の意向がない者の特徴として、趣味・娯楽活動やメディアへの接触に必ずしも積極的とはいえず、消費についての意識・意見をあまり明確に持っていない傾向がうかがえる。

■参加したい体験機会別に見た参加条件

次に、煎茶道は未経験と回答した者が体験したい内容、また、体験条件にはどのような特徴があるのかについて、AQ16「参加してみたい煎茶道の体験内容」の各種の参加体験とAQ17「参加しやすい煎茶道の体験条件」の回答結果をクロス集計し、未経験者の考える体験しやすい内容と条件の傾向について分析を行う。

まず、AQ16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者の75.2%が、AQ17で「わからない」と回答している。一方、実際に希望する体験機会がある者では、「わからない」という回答は極めて少ない。

具体的な体験内容を選択した者の参加条件への回答比率は、全体平均より非常に高い。体験条件の選択肢の回答比率を見ると、「行きやすい場所で体験できたら」、「手ごろな参加費で参加できたら」の2項目は回答比率が60%台後半から70%台と高く、特に重視されている傾向が分かる。

そのほか、「煎茶席で使う道具やしつらいを詳しく教えてくれる」という体験内容を希望する者は、必要な費用や道具、体験する時間帯等の調整、初心者だけの参加機会、体験する内容や雰囲気の前確認、指導者の教え方の分かりやすさと言った選択肢の回答比率が他の回答比率に比べて高い傾向にあり、体験する際の内容や条件について気にかけている傾向が見られる。

以上のように、煎茶道を未経験であると回答した者は、AQ16で具体的な体験内容を答えた者の多くは、AQ17の体験を行う際の条件についても具体的な条件を選択していることから、体験内容及び条件が明確な方が未経験者への参加体験を促しやすいものと推察できる。

参加してみたい煎茶道の体験内容×参加しやすい煎茶道の体験条件

		AQ17 参加しやすい煎茶道体験の条件										(%)
		と家族一緒に体験でき、身近な人	きたりやすい場所での体験	きたりやすい参加費での参加	が体験に必要な費用や道具	し体験する時間帯をば調整	よ初心者だけが参加できる	事前確認内容や雰囲気	や指導者の教え方が分かり	その他	わからない	
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全 体	16,266	18.6	28.3	27.6	9.3	5.0	19.5	11.4	9.4	0.8	51.4	
煎茶席でのお茶のいただき方や、基本的な作法等、客としての振る舞い方を教えてくれる	2,671	47.2	73.7	73.0	28.9	15.1	47.4	29.8	25.5	0.9	1.8	
煎茶道の歴史や意義を教えてくれる	1,076	44.2	78.1	77.0	35.4	22.5	48.9	36.9	32.4	1.1	1.9	
煎茶席で使う道具やしつらいを詳しく教えてくれる	1,030	42.9	76.8	77.7	39.1	24.7	53.2	38.9	35.6	1.5	1.7	
普段の生活に応用した、お茶の楽しみ方を教えてくれる	3,868	40.0	64.1	63.1	22.3	12.4	45.3	29.5	23.6	0.7	5.2	
その他	30	26.7	56.7	43.3	26.7	26.7	30.0	10.0	10.0	56.7	13.3	
上記の中で当てはまるものはない	10,785	8.0	10.8	10.5	3.2	1.6	8.1	4.2	3.6	0.8	75.2	

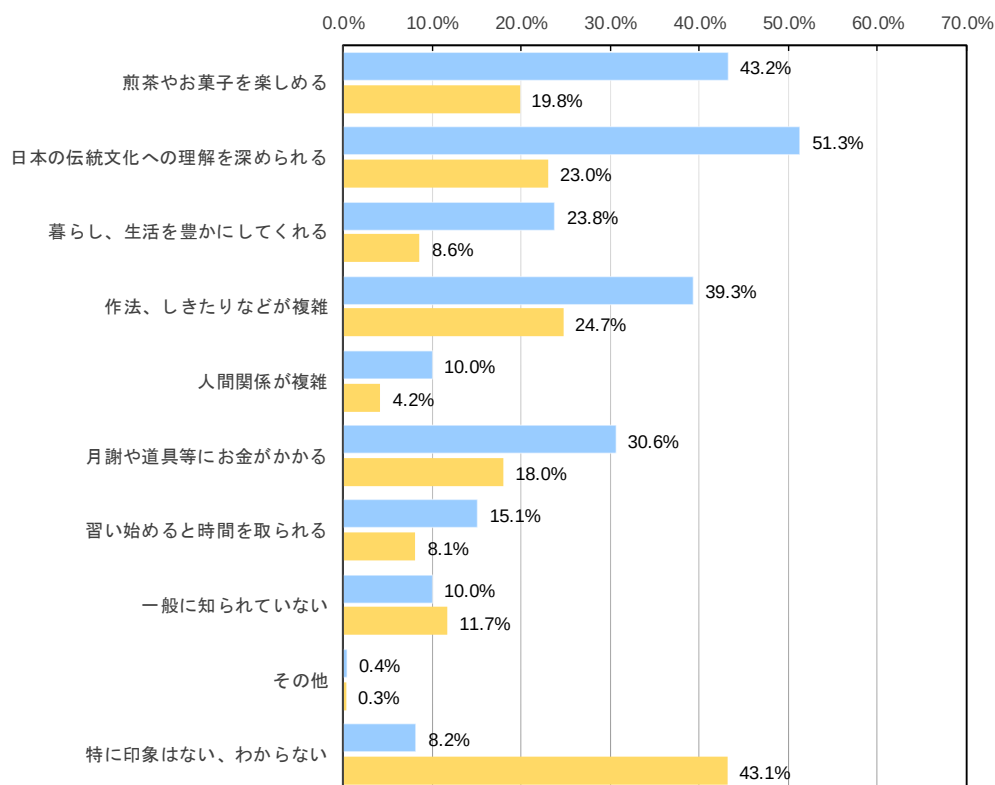
■「未経験」層と「参加体験あり」層の煎茶道へのイメージの違い

煎茶道を未経験と回答した者が持つ煎茶道のイメージについてA Q 19 の結果では、「特に印象はない、わからない」(43.1%)、「作法、しきたりなどが複雑」(24.7%)、「日本の伝統文化への理解を深められる」(23.0%) と、そもそもイメージや印象を持っていない者が最も多く、また、複雑なもの、伝統的な文化であると印象を持たれている。これは、回答者が煎茶道の未経験者であることから、具体的な内容や体験を経た上での印象を持っていないためと考えられる。

下のグラフは、煎茶道の参加体験をしたことがある者のイメージ(A Q 14)と未経験者のイメージ(A Q 19)の回答結果を比較したものである。未経験者で最も回答比率が高かった「特に印象はない、わからない」の回答比率は参加体験を行うことで大幅に減っている一方、「日本の伝統文化への理解を深められる」、「作法、しきたりなどが複雑」の回答比率が未経験と比べて、参加体験した者の方が回答比率は高くなっており、他の選択肢についてもほぼ同様のことが指摘できる。

煎茶道の参加体験をすることで、煎茶道が持つ魅力はもちろんのこと、作法等の複雑さや時間や費用がかかることも明確なイメージを描けるようになってきていることが分かる。

未経験者と参加体験者の煎茶道に対する印象やイメージの違い



■学校の授業や職場の研修、イベント等で煎茶会や煎茶席に参加した経験はある (N=2,715)

■今まで経験したことはない (N=16,266)

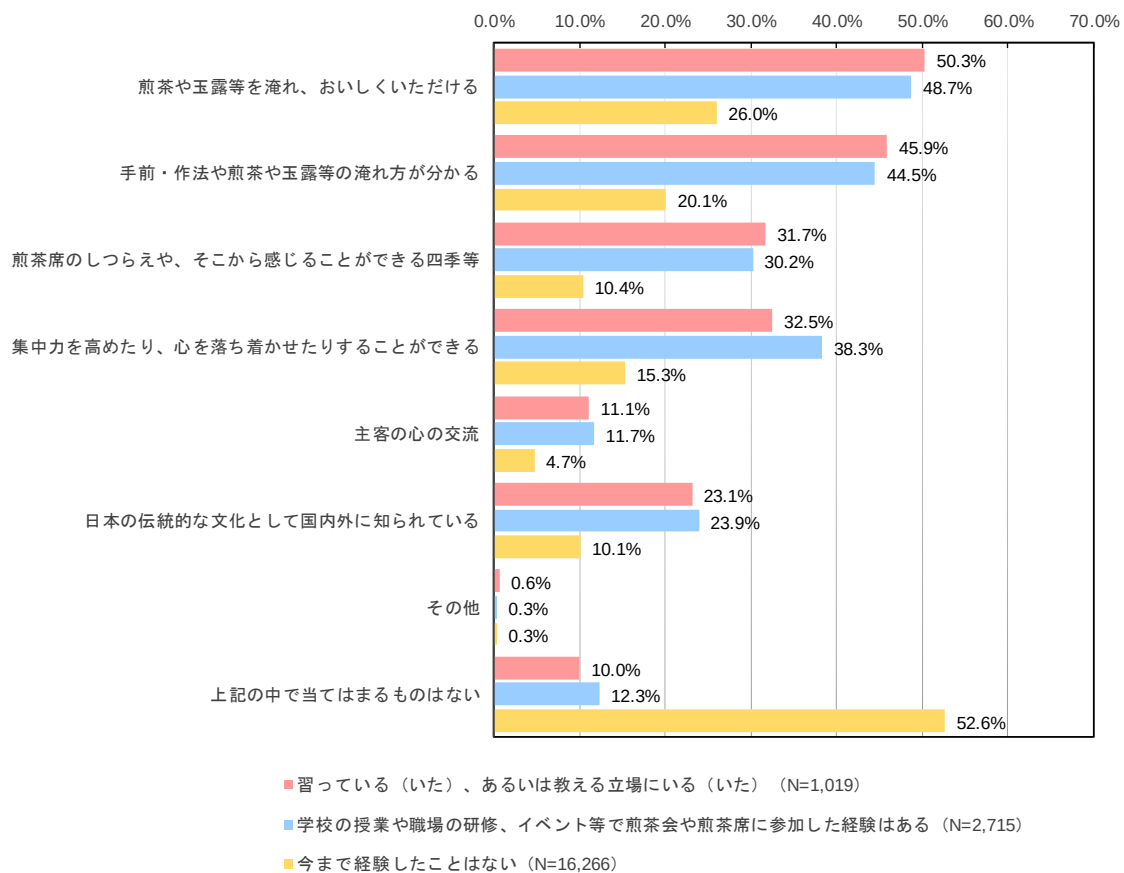
■「未経験」層と「参加体験あり」層、「経験あり」層の煎茶道の魅力についての評価の違い

未経験者が煎茶道に対する印象やイメージを具体的に描けないように、煎茶道の魅力に対する設問（AQ8、AQ15、AQ20）にも同様の傾向が見られる。

下のグラフを見ても分かるように、煎茶道未経験者の回答者の半数が、「上記の中で当てはまるものはない」（52.6%）と回答し、経験者と参加体験者の場合の回答比率と比較しても大きな差があることから、イメージや印象と同じく実際に体験することの重要性がうかがえる。

また、経験者、参加体験者、未経験者ともに、「煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける」、「手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる」、「集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる」の順で回答比率が高いことが分かる。

各回答者における煎茶道に対する興味関心や魅力の違い



上記のクロス集計の結果から、煎茶道を未体験と回答した者の特徴や傾向をまとめると、以下のとおりである。

1) 煎茶道に興味関心がある者の属性に関する傾向と特徴

煎茶道を未経験であると回答した者のうち、参加体験の意向を示さない者が66.3%いる一方、33.7%が体験内容に関する選択肢をいずれか選択しており、未経験者の中でも機会があれば参加したという意向を持つ者がいる。

これら参加意向を示す者は、趣味・娯楽等の活動全般に対して積極性を持ち、消費行動への

明確な意見があり、メディア接触も多い傾向にある。ただし、煎茶道の経験者と比べた場合、茶道や華道、邦楽などの日本の伝統的な文化への参加率はあまり高くないことから、趣味・娯楽の活動として伝統的な文化への接触はやや低い傾向にある。

2) 未経験者が考える参加しやすい体験の条件と内容についての傾向と特徴

AQ16、AQ17 のクロス集計の結果から、未経験者のうち、参加体験をしたいとの意向を示した者の 60～70%が、行きやすい場所と手頃な参加費用の 2 点を参加体験の条件としてとりわけ重視している傾向が見えてくる。また、AQ16 と AQ18 とのクロス集計の結果からは、体験できなかった事情・理由として「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」「そもそも知らなかった」と回答し、参加体験の意向を持つ者の多くが、煎茶道を知る機会や、体験する機会を得ることができなかったことが分かる。

3) 煎茶道の印象や魅力に関する傾向と特徴

未経験者の場合、煎茶道に対する印象や魅力について、未経験であるが故に、具体的なイメージや魅力は分からないという当然の結果が導かれた。その点を踏まえて、経験者や参加体験者との印象や魅力への回答の差を見ると、参加体験や経験を重ねることで、具体的な印象やイメージ、魅力を描くことができるようになること、また、経験を重ねた者ほど、手前や煎茶の美味しさなどの具体的な行為等と魅力が結びつけられるようになっている。

■煎茶道を習いやすい状況

煎茶道を習いやすい状況（AQ11）に関する設問の結果では、通いやすい場所（42.8%）、費用の手頃さ（41.4%）の2つが主な条件となっている。一方、煎茶道に支払える月額費用（AQ12）を見ると、「5,000 円未満」（69.6%）、「5,000 円以上～10,000 円未満」（20.4%）と続き、回答者の 90.0% が 1 万円未満の費用であれば習いやすいと回答している。

AQ11 と AQ12 のクロス集計の結果を見ると、「5,000 円未満」を選択した者の中で、習いやすい条件として「その他」「わからない」以外を選択している者は、全体平均に近い回答比率が出ており、5,000 円未満の費用であれば払いやすいと考えていることが分かる。また、5,000 円未満の費用を選択した者の中でも、「習う時間帯を調整してもらいやすかったら」「指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていたら」「指導で教本やテキストを使っていたら」を選択した者は、全体平均の 69.6% より回答比率が下回っている上、5,000 円以上の選択肢の全体平均をやや上回っており、習うに際して具体的な疑問点を持っている者ほど、高い費用の選択肢を回答している傾向が見える。

煎茶道を習っていない理由（AQ13）に関する設問の結果では、「興味がなかった」（35.4%）が最も多く、次いで「通いやすい場所に稽古場や教室がなかった」（29.4%）、「他の趣味や娯楽の方に関心が向いている」（24.6%）と続く。AQ11 の習う条件とのクロス集計を行い、参加体験者が習いやすい条件について分析を行う。

参加しやすい状況について「わからない」（19.6%）と回答した者のうち、習わなかった理由について「自分の趣味と合わない」（38.3%）、「興味がなかった」（33.0%）の回答比率が高く、体験をしても興味関心が湧かなかったことが分かる。

一方、参加しやすい状況として、「通いやすい場所で習えたら」（42.8%）と回答した者が習っていない理由として「通いやすい場所に稽古場や教室がなかった」（62.2%）が最も多く、「稽古場や教室等の雰囲気が分からなかった」（62.0%）、「カリキュラムの内容や必要となる費用等の十分な情報が明示されていなかった」（58.2%）と続き、身近な場所で習いたいと思う一方で、習う場所の雰囲気や内容に関心が向いている。「費用が手頃だったら」（41.4%）と回答した者の場合では、「習うための授業料等の費用が確保できなかった」（61.8%）、「習う内容についていけるかどうか不安がある」（60.2%）と続き、費用と内容について関心が高いことが分かる。

クロス集計の結果を見る限り、回答者にとって煎茶道を習いやすい状況とは、煎茶道を習わなかった事情や理由と密接な関係があり、習える場所、雰囲気、内容や費用などが参加体験をした者にとっての習う際のハードルになりやすくなっている傾向にあるといえる。

煎茶道を習いやすい状況×煎茶道に支払える月額費用

(%)

		AQ12煎茶道に支払える月額費用										
		5 0 0 0 円 未 満	15 0 0 0 円 以 上 未 満	11 5 0 0 円 以 上 未 満	21 0 0 0 円 以 上 未 満	22 5 0 0 円 以 上 未 満	32 0 0 0 円 以 上 未 満	33 5 0 0 円 以 上 未 満	43 0 0 0 円 以 上 未 満	44 5 0 0 円 以 上 未 満	54 0 0 0 円 以 上 未 満	5 0 0 円 以 上
n=												
全 体	2,715	69.6	20.4	4.3	2.2	1.2	0.8	0.5	0.1	0.1	0.0	0.6
家族や知人等、身近な人から習えたら	678	67.4	23.9	4.9	1.9	0.9	0.6	0.1	-	0.1	-	0.1
通いやすい場所で習えたら	1,161	69.6	22.4	4.7	1.6	1.1	0.3	0.3	-	-	-	0.1
費用が手頃だったら	1,124	73.1	19.4	3.7	2.0	0.8	0.4	0.3	0.1	-	-	0.2
必要な道具等が借りられたら	771	68.0	21.3	4.7	3.1	1.3	1.2	0.4	0.1	-	-	-
習う時間帯を調整してもらいやすかったら	434	64.5	21.9	5.1	3.5	2.3	1.2	0.9	0.2	-	-	0.5
指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていたら	450	63.6	25.1	4.4	3.3	0.9	1.1	0.9	-	-	-	0.7
指導で教本やテキストを使っていたら	125	54.4	24.8	5.6	2.4	2.4	3.2	1.6	1.6	0.8	0.8	2.4
その他	33	87.9	12.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
わからない	533	85.0	10.9	1.1	0.9	0.2	0.2	0.2	-	0.2	-	1.3

煎茶道を習っていない理由×煎茶道を習いやすい状況

(%)

		AQ11煎茶道を習いやすい状況									
		か ら 家 族 や 知 人 等 、 身 近 な 人	ら 通 い や す い 場 所 で 習 え た	費 用 が 手 頃 だ っ た ら	た ら 必 要 な 道 具 等 が 借 り ら れ	ら 習 い や す い 時 間 帯 を 調 整 し て も	れ ム 指 導 方 法 や 費 用 が 具 体 的 に ユ ラ カ に し ら れ	指 導 方 法 や 費 用 が 具 体 的 に ユ ラ カ に し ら れ	指 導 方 法 や 費 用 が 具 体 的 に ユ ラ カ に し ら れ	指 導 方 法 や 費 用 が 具 体 的 に ユ ラ カ に し ら れ	わ か ら な い
n=											
全 体	2,715	25.0	42.8	41.4	28.4	16.0	16.6	4.6	1.2	19.6	
興味なかった	961	22.0	32.6	35.3	22.6	12.7	11.8	2.9	1.7	33.0	
通いやすい場所に稽古場や教室がなかった	798	29.6	62.2	55.1	39.2	23.6	22.7	6.8	0.8	6.5	
習うための授業料等の費用が確保できなかった	361	28.8	51.2	61.8	40.7	26.6	24.9	5.5	1.1	7.2	
習うための十分な時間が取れなかった	571	28.0	56.7	54.6	41.9	29.4	23.6	7.0	1.9	6.5	
カリキュラムの内容や必要となる費用等の十分な情報が明示されていなかった	201	30.8	58.2	58.7	47.3	37.8	39.3	10.4	1.5	2.5	
稽古場や教室等の雰囲気に分からなかった	213	29.6	62.0	58.7	46.9	32.9	34.3	10.3	0.9	5.6	
習う内容についていけるかどうか不安がある	226	35.4	58.0	60.2	46.0	29.2	35.8	11.9	0.9	7.5	
他の趣味や娯楽の方に興味が向いている	668	28.9	53.0	50.3	35.8	21.0	22.9	6.7	1.2	14.7	
自分の趣味と合わない	300	21.0	26.7	30.0	17.0	8.3	13.3	4.7	4.0	38.3	
その他	50	26.0	26.0	28.0	20.0	12.0	18.0	6.0	6.0	40.0	

上記のクロス集計の結果から、煎茶道の参加体験ありと回答した者の特徴や傾向をまとめると、以下のとおりである。

1) 参加体験者の体験機会ときっかけの傾向と特徴

AQ9とAQ10のクロス集計結果の分析から、学校や職場、文化施設で開かれていたイベントをきっかけに、その場で行われた体験イベントで体験をした回答者が比率として高い傾向にあり、他方、親族が煎茶道を習ったり教えていたりした場合は自宅が体験機会の場に、興味関心があった者は、文化施設等の体験イベントに参加して体験する等、きっかけの違いが、体験の機会に関係していることが分かる。

2) 参加体験者が考える習いやすい状況や内容についての傾向と特徴

参加体験者が煎茶道を習いやすい状況や内容について、月に支払える費用と習いやすい状況とのクロス集計結果からは、月額費用として 5,000 円以上を支払うと回答した者ほど、習いやすい具体的な状況について回答している傾向にあり、煎茶道を習っても良いと考える者と捉えることができる。

習っていない理由と習いやすい状況とのクロス集計結果からは、参加体験をしても煎茶道に興味を持てなかった者が一定数いる一方で、興味関心があっても通える場所がない等の事情があることが分かる。加えて、習うための時間の確保や、習う場所の雰囲気分からない等も回答として多く、参加体験者にとって、習う内容や機会に関する詳しい情報があつた方が、習い始めやすいと考えていることが、回答結果の分析からうかがえる。

経験ありと回答した者の傾向と特徴

経験ありと回答した者の回答傾向について分析を行う。経験者がどのような経緯や場所で煎茶道を習い始め、どの程度の者が継続してきたのかを分析することで、参加体験者と未経験者との違いを明らかにする。

■始めたきっかけと継続性及び継続理由

煎茶道を習い始めたきっかけ（AQ1）の結果では、「趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった」（28.7%）が最も高く、次いで「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」（24.2%）、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（22.3%）、「学校の授業や、煎茶道の稽古場・教室での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した」（15.8%）と続いている。また、興味関心があると回答した者は、親族が習っていた、友人・知人から誘われた、イベント等で体験したとの選択肢もあわせて選択している場合もある。以上の点から、経験ありと回答した者の身近には、煎茶道に関わる者がいたり、煎茶道に関する情報やイベントがあったりしたことで、煎茶道を習い始めるきっかけが生み出される背景があったことが推察される。

次に、習い始めたきっかけ（AQ1）と現在の継続状況（AQ3）についてクロス集計を行い、始めたきっかけと継続率の関係を分析する。継続率の全体平均（23.3%）に対し、「煎茶道に係る仕事や職業に興味関心があった」（59.6%）、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（52.4%）、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」（44.0%）、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（42.3%）との回答者の継続率は平均を上回っており、反対に、非継続率の全体平均（76.7%）を比べると、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」（81.9%）が全体平均を上回っているほか、「趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった」（79.8%）、「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」（78.9%）も全体平均をやや上回っている。親族などが煎茶道に関わっていることをきっかけとして習い始めた回答者の方が、継続率が高い傾向にあり、反対に、自分の趣味との関わりや教養として関心を持った者、あるいは友人・知人から誘われた者については、何らかの理由で継続できていない傾向にあることが分かる。

煎茶道を習い始めたきっかけ×現在の継続状況

		(%)	
		AQ3 現在の継続状況	
		続けている	続けない
n=30以上で			
全体+10pt以上			
全体+5pt以上			
全体-5pt以下			
全体-10pt以下			
n=			
全 体	1,019	23.3	76.7
親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた	227	42.3	57.7
親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた	147	52.4	47.6
友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた	247	21.1	78.9
学校の授業や、煎茶道の稽古場・教室での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した	161	29.8	70.2
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	91	44.0	56.0
趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった	292	20.2	79.8
煎茶道に係る仕事や職業に興味関心があった	47	59.6	40.4
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	138	18.1	81.9
その他	42	4.8	95.2

継続理由に関する設問（AQ3補問1）では、「日本の文化だから」（48.1％）の回答比率が最も高く、次いで「指導者や教授者として活動したい（している）」（40.9％）、「一緒に楽しむ仲間がいる」（36.7％）と続いている。始めたきっかけ（AQ1）とのクロス集計を行い、継続する理由ときっかけの関係性について分析を行うと、まず継続理由として最も回答比率が高かった「日本の文化だから」（全体平均 48.1％）と回答した者の中でも「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（68.8％）、「趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった」（62.7％）の選択肢を、煎茶道を習い始めたきっかけであると回答している者の比率が高い。また、「指導者や教授者として活動したい（している）」（全体平均 40.9％）と回答した者の場合は、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（64.6％）と回答している比率が高い一方、「趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった」（28.8％）の回答比率が全体平均を大きく下回っている。

煎茶道を習い始めたきっかけ×煎茶道を続けている理由

		(%)									
		AQ3補問1 煎茶道を続けている理由									
		動 指 導 者 又 は 教 授 者 として 活 動 したい（している）	日 本 の 文 化 だ から	一 緒 に 楽 し む 仲 間 が い る	も し 仕 事 や 学 校 等 で 知 り た 奥 深 い 文 化 的 な 活 動 だ から	煎 茶 や 玉 露 等 が お い し く 淹 れ ら れ た 味 が い い	玉 露 茶 等 が お い し く 淹 れ ら れ た 味 が い い	し っ し ゅ と 生 活 し て い く 一 つ の 部 分 だ と 思 っ た	そ の 他	特 に 理 由 は な い	上 記 の 中 で 当 て は ま る も の は な い
n=30以上で											
全体+10pt以上											
全体+5pt以上											
全体-5pt以下											
全体-10pt以下											
n=											
全 体	237	40.9	48.1	36.7	26.2	21.1	21.9	0.4	1.7	0.8	
親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた	96	64.6	49.0	43.8	26.0	24.0	21.9	-	-	-	
親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた	77	39.0	68.8	44.2	42.9	27.3	28.6	1.3	-	-	
友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた	52	50.0	57.7	55.8	36.5	28.8	26.9	-	5.8	-	
学校の授業や、煎茶道の稽古場・教室での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した	48	41.7	60.4	62.5	56.3	43.8	37.5	-	-	-	
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	40	47.5	50.0	65.0	50.0	32.5	30.0	-	-	2.5	
趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった	59	28.8	62.7	52.5	45.8	42.4	42.4	1.7	-	-	
煎茶道に係る仕事や職業に興味関心があった	28	60.7	46.4	60.7	57.1	60.7	42.9	-	-	-	
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	25	56.0	60.0	36.0	52.0	48.0	48.0	4.0	-	4.0	
その他	2	-	-	50.0	-	50.0	-	-	50.0	-	

※n=30未満は参考値のため灰色

煎茶道から離れたきっかけや理由（AQ3補問2）を見ると、「時間がなくなった」（33.9％）と「近くに習う場所がなくなった」（31.8％）が大きな理由となっている。始めたきっかけ（AQ1）と離れたきっかけをクロス集計しその関係を分析すると、回答比率が最も高い「時間がなくなった」（33.9％）と回答した者のうち、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（44.3％）、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（40.0％）と続いている。次点の「近くに習う場所がなくなった」（31.8％）の回答者の場合、「学校の授業や、煎茶道の稽古場・教室での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した」（41.6％）、「趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった」（37.8％）、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」（37.3％）と続いており、興味関心を持って習い始めたとしても、一度習える場所が失われてしまうと継続できなくなってしまう傾向が見えてくる。また、「当初目標としていたことが達成できた」（全体平均 10.2％）と回答した者のうち、「趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった」（15.9％）をきっかけとした回答者の比率が高く、目的を持って習い始めそして辞めたという回答者もいることが分かる。

以上のような結果から、親族が煎茶道を習っていたり、教えていたりしたことを契機として習い始めた者については、継続性が高く、特に親族が教えている場合、自身が教授者として活動している（いた）傾向が見られる。

一方、煎茶道に対して趣味や教養の観点から興味関心を持ったり、友人・知人から誘われたりした場合の継続性は決して高い傾向とはいえない。これは、習う場所が失われてしまう場合があったり、目標を達成できたから辞めたりした、という事情もあることが結果からうかがえる。

煎茶道を習い始めたきっかけ×煎茶道から離れたきっかけや理由

		AQ3補問2 煎茶道から離れたきっかけ										(%)
		時間がなくなった	近くに習う場所がなくなった	が当初目標としていたこと	興味を失った	経済的に続けるのが難しい	健康面、体調面での継続が難しい	一緒に活動する家族や友人等が辞めてしまった	習っている内容について	指導者や教授者を引退した	その他	
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全 体		782	33.9	31.8	10.2	19.1	6.3	4.3	9.1	3.7	10.2	6.8
親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた		131	44.3	35.9	12.2	17.6	6.9	2.3	11.5	1.5	9.9	3.1
親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた		70	40.0	25.7	8.6	24.3	4.3	5.7	18.6	2.9	11.4	2.9
友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた		195	39.5	33.3	12.8	19.5	9.7	6.7	12.3	6.7	11.8	8.2
学校の授業や、煎茶道の稽古場・教室での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した		113	36.3	41.6	9.7	20.4	6.2	3.5	11.5	3.5	6.2	4.4
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った		51	37.3	37.3	11.8	21.6	2.0	5.9	3.9	7.8	3.9	-
趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった		233	36.5	37.8	15.9	17.6	6.0	7.3	6.4	2.6	9.4	5.6
煎茶道に係る仕事や職業に興味関心があった		19	26.3	15.8	31.6	10.5	10.5	5.3	5.3	10.5	15.8	5.3
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた		113	28.3	25.7	4.4	10.6	8.8	6.2	8.0	3.5	23.0	5.3
その他		40	27.5	27.5	2.5	15.0	-	-	5.0	2.5	-	37.5

※n=30未満は参考値のため灰色

■活動内容

煎茶道に関する活動内容（AQ5）では、「教室や稽古場で習っている（いた）」（56.8％）の回答比率が最も高く、次いで「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」（23.0％）、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」（20.3％）と続く。

まず、活動内容（AQ5）と現在の継続状況（AQ3）についてクロス集計を行い、活動内容と継続率の関係を分析する。このうち継続していると回答した者（23.3%）の中で、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」（54.1%）の回答比率が最も高く、次いで「指導者や教授者として教えている（いた）」（44.1%）と続く。

煎茶道に関する活動内容×現在の継続状況

		AQ3 現在の継続状況	
		続けている	続けない
n=30以上で			
全体+10pt以上			
全体+5pt以上			
全体-5pt以下			
全体-10pt以下			
n=			
全 体	1,019	23.3	76.7
教室や稽古場で習っている(いた)	579	19.2	80.8
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	207	54.1	45.9
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	234	34.2	65.8
指導者や教授者として教えている(いた)	68	44.1	55.9
その他	65	3.1	96.9

次に、活動内容（AQ5）と経験年数（AQ4）についてクロス集計を行い、その特徴や傾向について分析する。全体平均と回答比率に大きな差があるのは、経験年数「20年以上」（6.3%）と回答した者のうち、「指導者や教授者として教えている（いた）」（29.4%）の回答比率は全体平均を大きく上回っていることが確認できる。このほか、「教室や稽古場で習っている（いた）」と回答している者の継続率を見ると、3年以上になると全体平均と比べて回答比率が上がっていることが分かる。

煎茶道に関する活動内容×煎茶道を続けている年数

		AQ4 煎茶道を続けている年数						
		1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上	3年以上合計
n=30以上で								
全体+10pt以上								
全体+5pt以上								
全体-5pt以下								
全体-10pt以下								
n=								
全 体	1,019	19.0	32.4	24.2	13.1	5.0	6.3	48.6
教室や稽古場で習っている(いた)	579	16.4	30.4	26.3	14.7	5.9	6.4	53.2
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	207	16.9	28.5	28.5	16.4	4.3	5.3	54.6
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	234	14.5	35.5	23.1	14.1	5.6	7.3	50.0
指導者や教授者として教えている(いた)	68	14.7	16.2	19.1	13.2	7.4	29.4	69.1
その他	65	40.0	29.2	16.9	6.2	6.2	1.5	30.8

活動内容（AQ5）と活動頻度（AQ6）についてクロス集計を行い、その特徴や傾向を分析する。AQ6で最も回答が多かった「週に1回程度」（44.5%）と回答した者のうち、「教室や稽古場で習っている（いた）」（51.8%）が全体平均を大きく上回っており、教室や稽古場で習っている者の場合、週1回程度通っていることが分かる。このほか、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」の項目でも、「週1回程度」の回答比率が他の活動頻度と比べても高く、煎茶道を習う者の場合週1回程度の

活動頻度が最も多いことが分かる。また、「指導者や教授者として教えている（いた）」と回答した者でも「週 1 回程度」（20.6%）の回答比率が他の活用頻度の回答比率と比べても高いことから、指導者や教授者も週 1 回程度の頻度で教室を開いている者が多いものと推察される。

煎茶道に関する活動内容×煎茶道に関する活動頻度

		AQ6 煎茶道に関する活動頻度 (%)						
		ほぼ毎日	週に2〜3回	週1回程度	月数回程度	月1回程度	年数回程度	年1回程度
n=30以上で								
全体+10pt以上								
全体+5pt以上								
全体-5pt以下								
全体-10pt以下								
n=								
全 体	1,019	6.5	10.4	44.5	14.9	8.9	3.4	11.4
教室や稽古場で習っている(いた)	579	7.6	6.2	51.8	13.8	8.5	2.8	9.3
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	207	7.7	22.2	38.2	16.9	7.2	3.9	3.9
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	234	9.0	18.8	38.0	15.4	9.4	2.6	6.8
指導者や教授者として教えている(いた)	68	13.2	14.7	20.6	14.7	14.7	5.9	16.2
その他	65	4.6	3.1	23.1	9.2	6.2	6.2	47.7

活動内容（AQ5）と毎月使う費用（AQ7）についてクロス集計を行い、その特徴や傾向を分析する。月額費用の中で最も回答比率が高い「5,000 円未満」（53.0%）と回答した者の回答比率は、各活動内容においても最も回答比率が高いことが分かる。また、「教室や稽古場で習っている（いた）」（54.6%）、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」（49.6%）の2項目は、他の月額費用の回答比率よりも高い。

次に月額費用で回答比率の高かった「5,000 円以上～10,000 円未満」（22.8%）の項目では、「教室や稽古場で習っている（いた）」（25.6%）、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」（25.1%）の2項目が全体平均を少し上回っている。また、「10,000 円以上～15,000 円未満」（9.2%）の項目では、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」（16.9%）、「指導者や教授者として教えている（いた）」（16.2%）と全体平均を上回る回答比率になっていることから、カルチャーセンターで受講する者、指導者・教授者として活動している者で月額費用の傾向にばらつきが見られる。

煎茶道に関する活動内容×煎茶道に関する月額費用

		AQ7 煎茶道に関する月額費用 (%)											
		5,000円未満	5,000円以上～10,000円未満	10,000円以上～15,000円未満	15,000円以上～20,000円未満	20,000円以上～25,000円未満	25,000円以上～30,000円未満	30,000円以上～35,000円未満	35,000円以上～40,000円未満	40,000円以上～45,000円未満	45,000円以上～50,000円未満	50,000円以上	合計
n=30以上で													
全体+10pt以上													
全体+5pt以上													
全体-5pt以下													
全体-10pt以下													
n=													
全 体	1,019	53.0	22.8	9.2	4.2	4.0	2.2	0.7	0.6	0.6	0.5	2.3	24.2
教室や稽古場で習っている(いた)	579	54.6	25.6	8.8	2.9	3.3	1.2	0.3	0.3	0.3	0.7	1.9	19.9
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	207	29.5	25.1	16.9	8.7	6.8	5.8	1.4	1.0	1.4	1.0	2.4	45.4
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	234	49.6	16.7	6.4	4.7	9.8	4.3	1.3	1.3	1.7	0.9	3.4	33.8
指導者や教授者として教えている(いた)	68	22.1	11.8	16.2	10.3	10.3	5.9	1.5	1.5	1.5	1.5	17.6	66.2
その他	65	89.2	6.2	1.5	-	3.1	-	-	-	-	-	-	4.6

■経験年数

煎茶道を続けている（続けていた）年数（AQ4）の結果では、「1～3年未満」（32.4%）の回答比率が最も高く、次いで「3～5年未満」（24.2%）、「1年未満」（19.0%）と続いている。

経験年数（AQ4）と習い始めたきっかけ（AQ1）のクロス集計を行い、傾向と特徴について分析する。全体平均と回答比率の差が大きいところに着目すると、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（22.3%）と回答した者の中では、「20年以上」（42.2%）、「10～20年未満」（35.3%）の回答比率が高いほか、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（14.4%）と回答した者の中で、「10～20年未満」（25.5%）の回答比率が高く、「5～10年未満」（24.1%）、「20年以上」（23.4%）も全体平均を上回っている。このほか、「趣味や教養として、煎茶道に興味関心があつた」（28.7%）を回答した者のうち、「5～10年未満」（39.1%）が全体平均を大きく上回っている。

煎茶道を続けている年数×煎茶道を習い始めたきっかけ

		AQ1 煎茶道を習い始めたきっかけ (%)									
		ど親が習っていた	ど親が兄弟姉妹、祖父母などから習った	友人や知人などから誘われた	会館、文芸教室、学校での体験など	学校、授業、習い事、塾、部活動、サークル、ボランティア、習い事、塾、部活動、サークル、ボランティア	知画、テレビ、映画、雑誌、漫画、ゲーム、インターネット、SNS、YouTube、Udacity、Coursera、edX、FutureLearn、Udacity、Coursera、edX、FutureLearn	道に味や興味関心があつた	に煎茶道に係る仕事や職業	し野の趣味や習い事と別関係	その他
n=30以上で		全体+10pt以上	全体+5pt以上	全体-5pt以下	全体-10pt以下						
全体	n=	1,019	22.3	14.4	24.2	15.8	8.9	28.7	4.6	13.5	4.1
1年未満	194	15.5	8.8	20.6	13.9	10.8	22.7	2.1	13.4	6.2	
1～3年未満	330	16.1	8.8	26.4	17.0	7.6	24.8	1.2	13.6	5.5	
3～5年未満	247	25.5	16.6	23.1	15.0	7.3	32.8	5.7	10.5	2.8	
5～10年未満	133	27.1	24.1	26.3	17.3	9.8	39.1	9.8	14.3	1.5	
10～20年未満	51	35.3	25.5	27.5	9.8	11.8	25.5	7.8	13.7	2.0	
20年以上	64	42.2	23.4	21.9	20.3	12.5	31.3	12.5	23.4	3.1	

次に経験年数（AQ4）と習い始めた当初の習い方を選んだ理由（AQ2補問）のクロス集計を行い特徴及び傾向について分析する。

全体平均よりも回答比率が高い箇所として、「本格的に習ってみたかった」（14.0%）で5年以上の経験年数の回答比率が全体平均と比べて高いことが分かる。そこで経験年数が長いと回答した者で、回答比率が高いところに着目すると、「家族や友人等と一緒に良かった」（27.5%）で、「10～20年未満」（49.0%）の回答比率が全体平均を大きく上回っているほか、「20年以上」（35.9%）の回答比率も全体平均を上回っている。また、「通いやすい場所だった」（41.2%）と回答した者のうち、「5～10年未満」（50.4%）、「10～20年未満」（47.1%）の回答比率が全体平均を上回っていることから、経験年数が長い者が当初の習い方を選んだ理由の傾向として、本格的に習うことに加えて、家族や友人と一緒に通いやすい場所で習い始めていた傾向が見える。

一方、経験年数が短い者に注目すると、「特に理由はない、わからない」（11.2%）と回答した者の中で、「1年未満」（23.2%）の回答比率が全体平均を大きく上回っているほか、「手軽に習ってみたかった」（25.4%）を選んだ回答者の中では、「1～3年未満」（30.3%）、「1年未満」（26.8%）と、全体平均を少し上回っている。また、「通いやすい場所だった」（41.2%）では、「1～3年未満」（41.8%）は全体平均を少し上回る回答比率であるが、「1年未満」は（24.7%）と全体平均を大きく下回って

いる。このことから、1年未満、1年以上3年未満と回答した者は、習い始めは手軽に習いたい、また、家族や友人と一緒に習えればと考えていた傾向がうかがえる。

煎茶道を続けている年数×当初の習い方を選んだ理由

		AQ2補問 その方法を選んだ理由										(%)
		か家族や友人等と一緒に良かった	通いややすい場所だった	費用が手頃だった	道具等が借りられた	通いやしやすい時間帯だった	レム、指導方法がわかりやすい	指、導方法がわかりやすい	た本格的に習ってみたい	手軽に習ってみたい	その他	特に理由はない、わからない
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
全 体	n=	1,019	27.5	41.2	19.8	13.3	17.9	7.5	14.0	25.4	1.3	11.2
1年未満	194	23.2	24.7	11.9	6.7	7.2	1.5	4.6	26.8	2.1	23.2	
1～3年未満	330	25.8	41.8	23.3	13.3	20.6	5.5	10.3	30.3	0.9	10.3	
3～5年未満	247	25.9	47.8	22.7	14.6	20.2	9.3	14.6	23.1	2.0	7.7	
5～10年未満	133	28.6	50.4	20.3	20.3	23.3	17.3	24.1	18.8	0.8	5.3	
10～20年未満	51	49.0	47.1	23.5	17.6	17.6	5.9	25.5	19.6	-	3.9	
20年以上	64	35.9	39.1	10.9	10.9	15.6	9.4	29.7	23.4	-	10.9	

経験年数（AQ4）と煎茶道に関する興味関心や魅力（AQ8）のクロス集計を行い、特徴や傾向について分析する。

興味関心や魅力として最も回答比率が高かった「煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける」（50.3%）については、全体平均と比べる低い回答比率があるものの、どの経験年数の中でも比較的高い回答比率であることが分かる。

次に全体平均と回答比率の差がある箇所に注目すると、経験年数が「1年未満」と回答している者で、「上記の中で当てはまるものはない」（22.7%）の回答比率が全体平均を大きく上回っているほか、「その他」を除く魅力・興味関心の回答比率が全体平均を全て下回っていることが確認できる。

その一方、経験年数が5年以上と回答している者に注目すると、「20年以上」と回答した者で魅力や興味関心について「手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる」を除き、全ての項目が全体平均を上回っている。また、「10～20年未満」、「5～10年未満」と回答している者については、「上記の中で当てはまるものはない」を除き、全ての項目で全体平均を上回っていることが確認できる。

以上のとおり、経験年数が短い者の場合、魅力や興味関心の選択肢で当てはまるものがないとの回答比率が高い上、経験年数に依拠することなく感じる事ができる「煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける」に回答が集中している。一方で経験年数が長くなると、煎茶や玉露の美味しさはもちろんのこと、煎茶席のしつらいや、主客の心の交わり等の魅力や興味関心へ回答比率が高くなっていることから、経験年数の長さによって魅力や興味関心を捉える幅が異なるものと推察される。

授者として活動している者は月額 10,000 円以上を払っている者が多くいることが回答比率の傾向から見え、活動内容によって月額費用の傾向が異なることが分かる。

3) 経験年数と習い始めたきっかけや魅力から見える傾向と特徴

経験年数と習い始めたきっかけとの関係を見た場合、親族等が煎茶道を習っていたあるいは教えていたと回答した者では 10 年以上の経験年数を回答する者が多い傾向にある。

次に当初の習い方を選んだ理由と経験年数と関係については、経験年数が 10 年以上の者で、本格的に習いたい、家族や友人と一緒に習いたい、の 2 項目について回答比率が高い傾向にある。一方、経験年数が 1 年未満の者は、手軽に習いたい、通いやすい場所を重視している傾向にあるが、習う方法を選んだ理由は特にないという回答比率も高い傾向が見られる。

経験年数と興味関心や魅力との関係を見た場合、煎茶や玉露等の美味しさについては、どの経験年数の中でも比較的高い回答比率であり、経験を問わずに魅力として感じられていることが分かる。一方、経験年数が長くなると、しつらいや心の交わり等の項目の回答比率が高くなる傾向にあり、経験を重ねていくことで魅力や興味関心の捉え方が変化していることが推察される。

③分析結果のまとめ

煎茶道の経験・体験の有無や、経験者や参加体験者、未経験者の煎茶道に関する活動状況や興味関心の度合いを把握することを目的としてウェブアンケートを利用した調査を実施した。

調査結果からは、煎茶道の未経験者が圧倒的に多いことが分かった。未経験者が多いことについては、設問群の回答結果からも見えるように、煎茶道に興味関心が持てなかった者がいる一方で、そもそも煎茶道を知らなかった者が多くいること、また、煎茶道を知っていたとしても、体験できる場がなかった、あるいは場を知らなかった事情があり、参加体験には至らなかったことが明らかになった。

反対に、経験者や参加体験者の場合は、煎茶道について知る機会や体験をする場に接する機会があったことから、煎茶道を体験することができたことが分かる。経験者の場合は、煎茶道に対して興味関心があった、友人・知人に誘われた、親族が煎茶道を習ったりしていたことが煎茶道を習い始めるきっかけとなっている。一方、参加体験者の場合は、学校や稽古場、文化施設等での体験イベントをきっかけとして体験をしており、経験者・参加体験者・未経験者のそれぞれに、煎茶道を知る機会、接することができる機会や環境に大きな開きがあることが、調査結果の分析から見えてくる。

経験者の活動状況等については、約8割は継続していない状況で、継続している者については若い世代の方が継続しているほか、経験年数が長いほど継続している。一方で、継続していない者が続けられなかった事情からは、習う場所がなくなった、時間がなくなった等の事情があることが傾向として見え、回答者の環境が整えば再開する可能性があることも推察される。

参加体験者の活動状況等については、参加体験をしたきっかけと体験した機会のクロス集計から、学校や職場等で体験機会を得たとの回答比率が高い傾向にあり、煎茶道の指導者・教授者がこれらの場において、体験機会の醸成などを図っている事例もあることから、煎茶道を参加体験する大きなきっかけとして作用していることが分かる。また、参加体験者がこれまで煎茶道を習うに至らなかった理由や事情からは、参加体験をしても興味関心を持てなかった者もいる一方で、通いやすい場所や時間帯、習う内容の明示等がされていれば習いたいと考えている者がいることから、習う内容等の情報を明示するなどの工夫をすることで、習いに通いたい人に機会を提供できる可能性があることが分かる。

上記の結果から、煎茶道の経験者や参加体験者を増やしていく場合、学校や職場等での体験機会のみならず、煎茶道を体験できるイベントなどを広く行うと共に、これらの体験機会自体を広く周知していくことで、経験者や体験者を増やす可能性が広がるものと考えられる。また、習うことができる場所の周知をはじめ、習う内容や時間帯など、習いたいと考えている者に適切に情報を伝えていくことも有効な取組として考えられる。

（２）香道

本調査では、香道への興味関心や経験の有無等の把握を目的として２万人にウェブアンケート調査を実施した。

アンケートでは、香道を稽古場等で習ったような経験者、イベント等で体験した体験者、全く経験がない未経験者がいることが想定されることから、香道の経験・体験の有無について回答する設問を設けた。その上で、下記の表のように経験の深度に応じた専用の設問群を設けることで、各回答者の香道への興味関心の有無などの把握を行った。

■分野設問の項目

「１．習っている（いた）、あるいは教える立場にいる（いた）」と回答した者への設問	B Q １：香道を習い始めたきっかけ B Q ２：香道を始めた当初の習い方 B Q ２補問：当初の習い方を選んだ理由 B Q ３：現在の継続状況 B Q ３補問１：香道を続けている理由 B Q ３補問２：香道から離れたきっかけや理由 B Q ４：香道を続けている（続けていた）年数 B Q ５：香道に関する活動内容 B Q ６：香道に関する活動頻度 B Q ７：香道に関する月額費用 B Q ８：香道に関する興味関心や魅力
「２．学校の授業や職場の研修、イベント等で香会や香席に参加した経験はある」と回答した者への設問	B Q ９：香道を体験したきっかけ B Q 10：香道を体験した場 B Q 11：香道を習いやすい状況 B Q 12：香道に支払える月額費用 B Q 13：香道を習っていない理由 B Q 14：香道に対する印象やイメージ B Q 15：香道に関する興味関心や魅力
「３．今まで経験したことはない」と回答した者への設問	B Q 16：参加してみたい香道の体験内容 B Q 17：参加しやすい香道の体験条件 B Q 18：香道を体験したことがない理由 B Q 19：香道に対する印象やイメージ B Q 20：香道に関する興味関心や魅力

①単純集計の結果について

■全調査対象者への設問

香道を経験した者、あるいは全く触れたことがない者がどの程度いるのかは、統計調査等では明らかとなっていない。加えて、香道の「経験」にも深度があり、いわゆる稽古場や教室等で習った経験がある者や、稽古場や教室等で教える立場にいる者、あるいは、イベント等で香道の体験をしたことがある者等がいると想定される。経験の有無を大別するならば、教室等で習ったあるいは教える立場にいる者、イベント等で体験をした者、そして経験をしたことがない者に分けることができると考えられる。

本設問では、上記の想定に基づき、香道の経験の有無とあわせて、経験の深度を図る選択肢を設けて、実態の把握を行った。

香道の経験の有無

経験率を見ると、「習っている（いた）、あるいは教える立場にいる（いた）」（以下、「経験あり」）回答比率は2.0%（391人）、「学校の授業や職場の研修、イベント等で香会や香席に参加した経験はある」（以下、「参加体験あり」）6.1%（1,227人）、「今まで経験したことはない」（以下「未経験」）91.9%（18,382人）となった。

「経験あり」「参加体験あり」の回答比率とも、男女で大きな差はない。

年齢別では、「経験あり」「参加体験あり」と回答した者共に18～20代が最も多く、年齢が高くなるに連れて減少し、60代から逆に増加するという傾向となっており、現役世代の「経験あり」「参加体験あり」の回答比率が低い結果となった。

			(%)		
			習っている(いた)、あるいは教える立場にいる(いた)	学校の授業や職場の研修、イベント等で香会や香席に参加した経験はある	今まで経験したことはない
n=					
全 体		20,000	2.0	6.1	91.9
性別	男	9,645	1.8	5.5	92.7
	女	10,202	2.1	6.8	91.1
	それ以外／答えたくない	153	0.7	4.6	94.8
年齢	18～20代	2,781	3.2	8.5	88.3
	30代	2,691	2.7	7.2	90.1
	40代	3,496	1.6	5.1	93.3
	50代	3,178	1.0	4.7	94.3
	60代	3,002	1.6	5.1	93.3
	70代以上	4,852	1.9	6.5	91.6

集計表 F Q 2 : 香道の経験の有無

■香道を「習っている（いた）、あるいは教える立場にいる（いた）」と回答した者への設問（BQ1～BQ8）

本設問群では、香道を経験したと回答した者が、どのようなきっかけや機会香道を習うようになったのか、興味関心を持っているのか等、経験の実態を把握するためのアンケートを実施した。

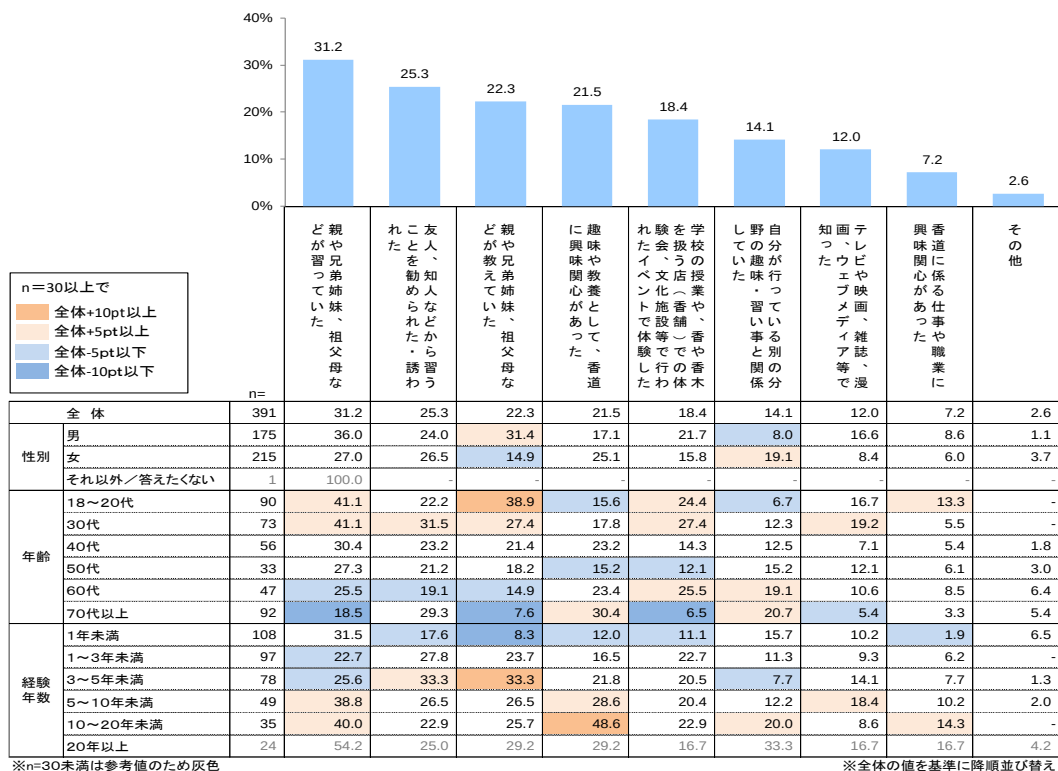
香道を習い始めたきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」の31.2%で、次いで「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」25.3%、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」22.3%、「趣味や教養として、香道に興味関心があった」21.5%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」(31.4%)の回答が全体平均より高く、女性は「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」(19.1%)の回答比率が高い。

次に、年齢別で見ると、10～30代で「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」、「学校の授業や、香や香木を扱う店（香舗）での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した」の回答比率が全体平均よりも高い。

経験年数別で見ると、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」、「趣味や教養として、香道に興味関心があった」については、経験年数が長いほど回答比率が高くなっている。



集計表 BQ1：香道を習い始めたきっかけ

(その他の内容) 茶道の一環として習った

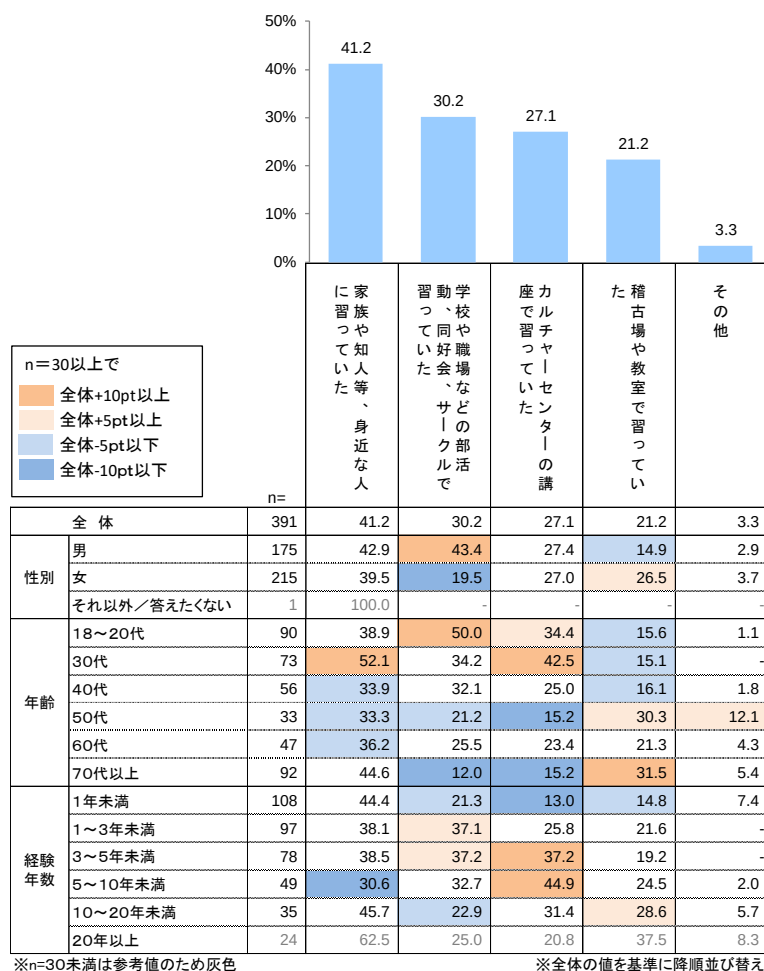
香道を始めた当初の習い方

全体平均で最も回答比率が高いのは「家族や知人等、身近な人に習っていた」の41.2%で、次いで「学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた」30.2%、「カルチャーセンターの講座で習っていた」27.1%、「稽古場や教室で習っていた」21.2%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた」(43.4%)が全体平均より高く、女性では(19.5%)と低い。逆に「稽古場や教室で習っていた」では、男性(14.9%)が低く、女性(26.5%)が高い。

次に年齢別では、10～30代で「カルチャーセンターの講座で習っていた」の回答比率が高く、10～40代で「稽古場や教室で習っていた」の回答比率が低い傾向が見られる。

また、経験年数別で見た場合、3～10年未満の者は、「カルチャーセンターの講座で習っていた」傾向が高く、10年以上の者は「稽古場や教室で習っていた」傾向が高い。



集計表 B Q 2 : 香道を始めた当初の習い方

(その他の内容) 販売の仕事をしていた、お茶会の中でやっていた

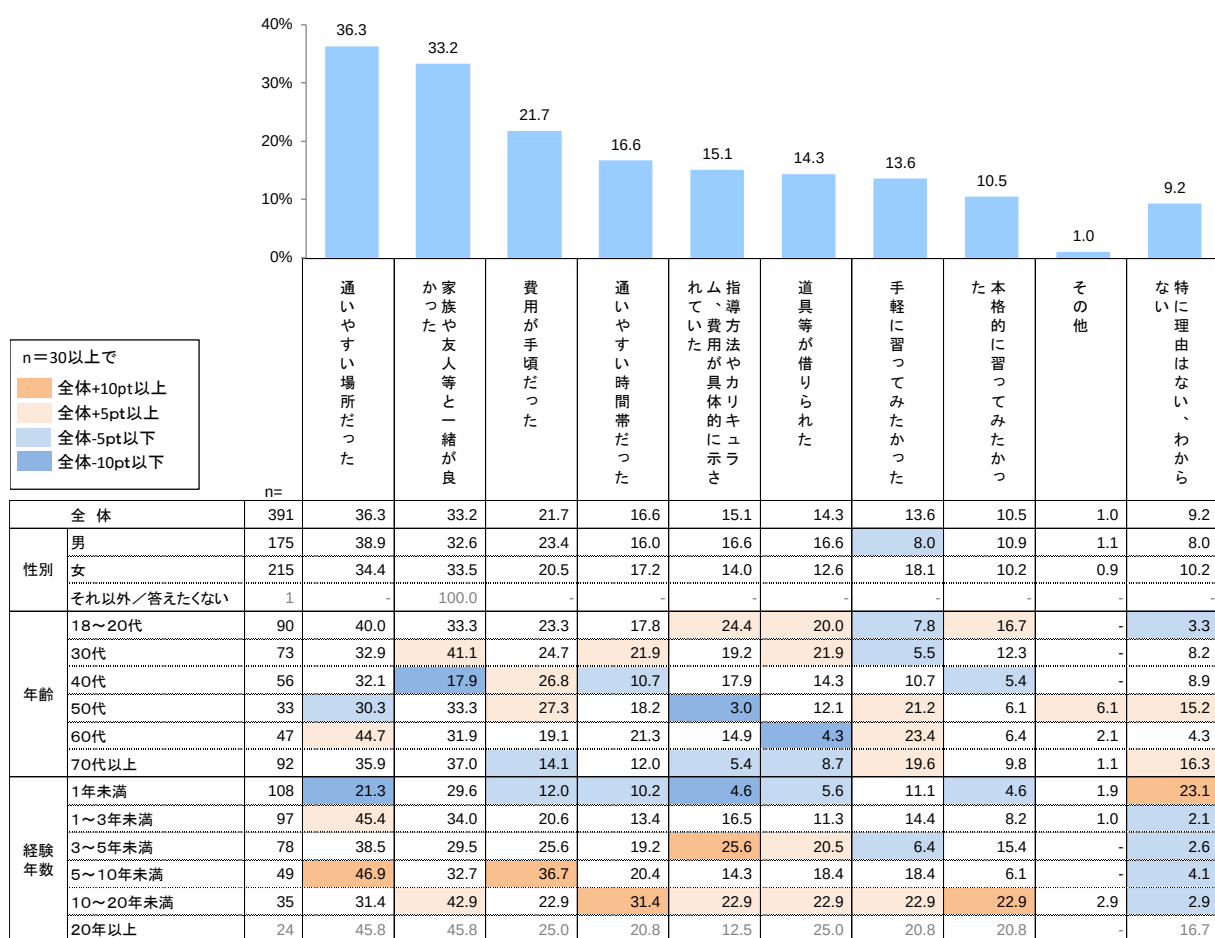
当初の習い方を選んだ理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「通いやすい場所だった」の36.3%で、次いで「家族や友人等と一緒に良かった」33.2%、「費用が手頃だった」21.7%、「通いやすい時間帯だった」16.6%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「手軽に習ってみたかった」(8.0%)の回答比率が低い。

次に、年齢別で見ると、10～30代で「道具等が借りられた」の回答比率が高い傾向がある。また、「手軽に習ってみたかった」については、10～30代の回答比率が全体平均より低く、50代以上で高い。

経験年数別では、経験年数10年以上で「家族や友人等と一緒に良かった」、「道具等が借りられた」、「手軽に習ってみたかった」、「本格的に習ってみたかった」など多くの選択肢の回答比率が全体平均より高い一方、1年未満では「特に理由はない、わからない」を除く全てにおいて全体平均より低い。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 B Q 2 補問：当初の習い方を選んだ理由

(その他の内容) 販売の仕事をしていた、茶道の中で

現在の継続状況

継続状況については、「続けている」46.0%（180人）、「続けていない」54.0%（211人）と、続けていないとの回答比率が高い。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「続けていない」が34.9%と低く、女性で69.8%と高い。

次に、年齢別で見ると、年代が上がっていくに従って、継続率が下がっていく傾向が見られる。

経験年数別は3年以上で「続けている」という回答が半数を上回り、10年以上では7割以上が継続していることが分かる。

			(%)	
			続けている	続けていない
n=				
全 体		391	46.0	54.0
性別	男	175	65.1	34.9
	女	215	30.2	69.8
	それ以外／答えたくない	1	100.0	
年齢	18～20代	90	77.8	22.2
	30代	73	69.9	30.1
	40代	56	55.4	44.6
	50代	33	36.4	63.6
	60代	47	12.8	87.2
	70代以上	92	10.9	89.1
経験年数	1年未満	108	20.4	79.6
	1～3年未満	97	43.3	56.7
	3～5年未満	78	57.7	42.3
	5～10年未満	49	51.0	49.0
	10～20年未満	35	82.9	17.1
	20年以上	24	70.8	29.2

※n=30未満は参考値のため灰色

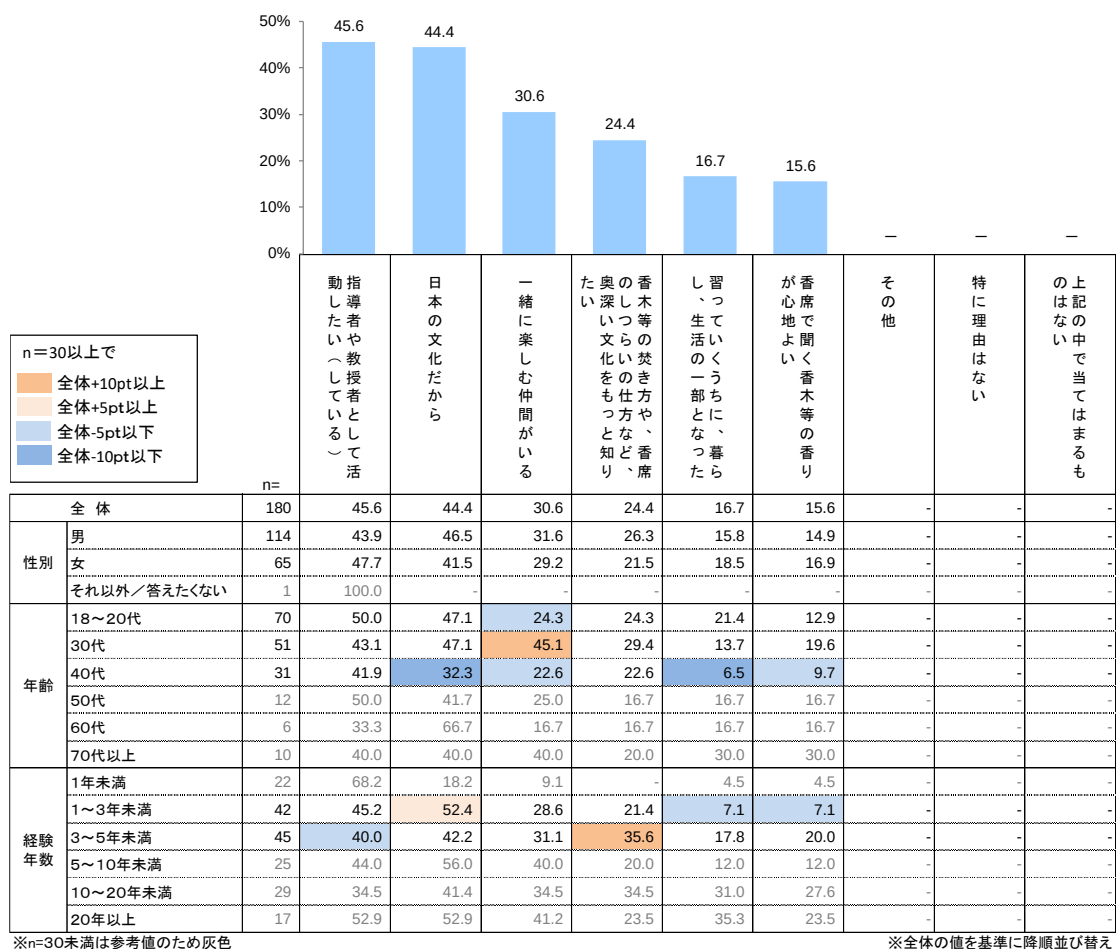
集計表 B Q 3 : 現在の継続状況

香道を続けている理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「指導者や教授者として活動したい(している)」の45.6%で、次いで「日本の文化だから」44.4%、「一緒に楽しむ仲間がいる」30.6%、「香木等の焚き方や、香席のしつらいの仕方など、奥深い文化をもっと知りたい」24.4%と続く。

全体平均の回答比率と年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、年齢別では、30代で「一緒に楽しむ仲間がいる」(45.1%)の回答比率が全体平均より高い一方、40代では「日本の文化だから」(32.3%)をはじめ、複数の項目で回答比率が全体平均より低い。

また、経験年数別では、1～3年未満の者は、「日本の文化だから」(52.4%)の回答比率が高い一方、「習っていくうちに、暮らし、生活の一部となった」、「香席で聞く香木等の香りが心地よい」(共に7.1%)と低い。また、3～5年未満の者は、「香木等の焚き方や、香席のしつらいの仕方など、奥深い文化をもっと知りたい」(35.6%)の回答比率が高い一方、「指導者や教授者として活動したい(している)」(40.0%)の回答比率が低く、経験年数によって、継続理由が異なる傾向がうかがえる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 BQ3補問1：香道を続けている理由

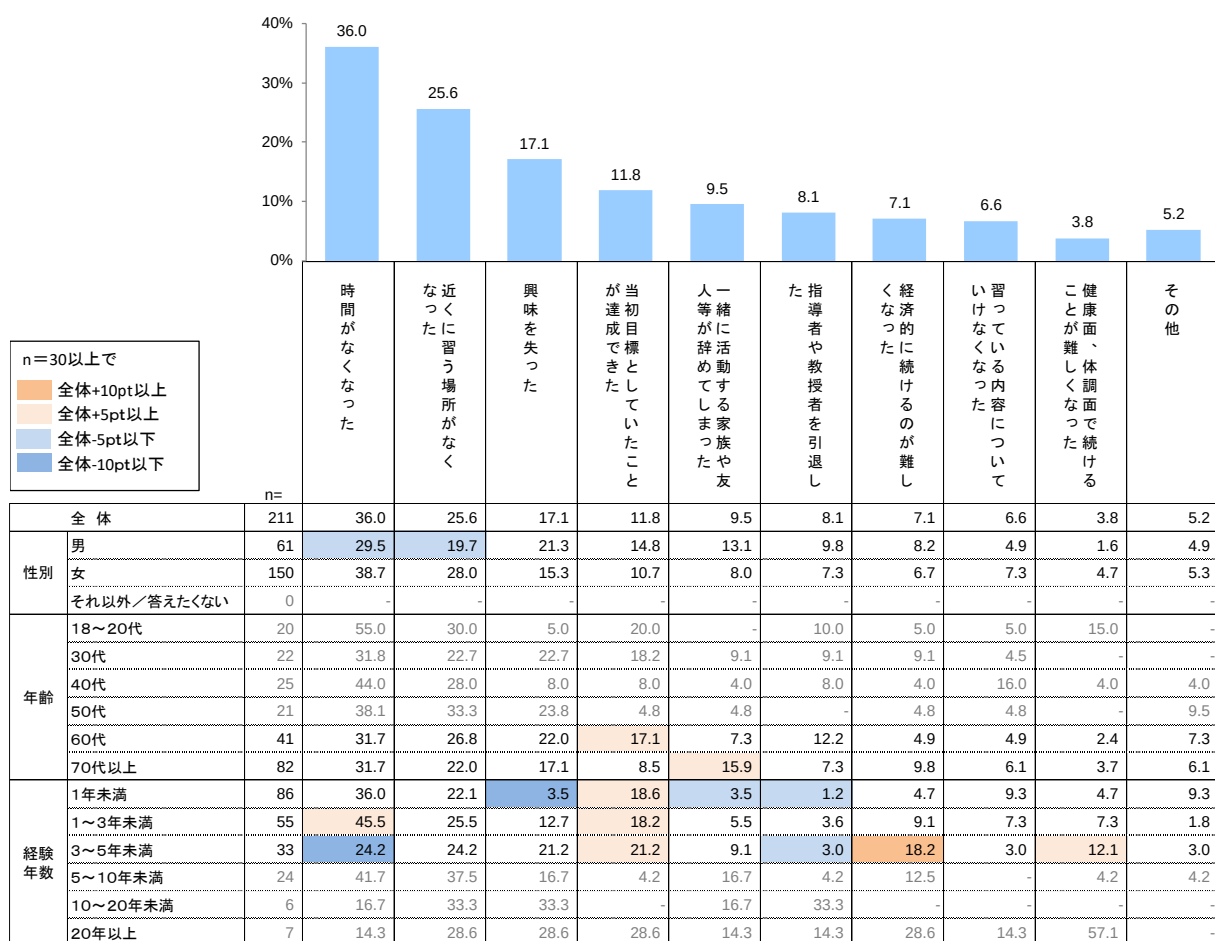
香道から離れたきっかけや理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「時間がなくなった」の36.0%で、次いで「近くに習う場所がなくなった」25.6%、「興味を失った」17.1%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、男女別では、男性で「時間がなくなった」(29.5%)、「近くに習う場所がなくなった」(19.7%)の回答比率が低い。

年齢別で見ると、60代で「当初目標としていたことが達成できた」(17.1%)、70代以上で「一緒に活動する家族や友人等が辞めてしまった」(15.9%)の回答比率が高い。

また、経験年数別では、5年未満の者は「当初目標としていたことが達成できた」の回答比率が高い傾向にある。また、3～5年未満の者の場合は、「経済的に続けるのが難しくなった」(18.2%)の回答比率も高いが、「時間がなくなった」(24.2%)の回答比率は低い。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 BQ3補問2：香道から離れたきっかけや理由

(その他の内容) 転居が多かった、退部した、お茶をやめた

香道を続けている（続けていた）年数

全体平均で最も回答比率が高いのは「1年未満」の27.6%で、次いで「1～3年未満」24.8%、「3～5年未満」19.9%となっている。全体平均で3年以上続けている（いた）人の回答比率は47.6%となっている。

男女別では、3年以上継続している者は、男性で50.9%（175人中89人）、女性で44.7%（215人中96人）となっており、男性の方が長く続けている（いた）人の割合が高いことが分かる。

			n=							(%)
				1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上	3年 以上
全 体			391	27.6	24.8	19.9	12.5	9.0	6.1	47.6
性別	男	175	25.1	24.0	20.0	13.1	13.1	4.6		50.9
	女	215	29.8	25.6	20.0	12.1	5.1	7.4		44.7
	それ以外／答えたくない	1	100.0							100.0
年 齢	18～20代	90	22.2	24.4	28.9	13.3	6.7	4.4		53.3
	30代	73	26.0	30.1	20.5	9.6	8.2	5.5		43.8
	40代	56	23.2	12.5	25.0	16.1	17.9	5.4		64.3
	50代	33	33.3	15.2	15.2	21.2	15.2			51.5
	60代	47	29.8	38.3	6.4	8.5	6.4	10.6		31.9
	70代以上	92	33.7	25.0	16.3	10.9	5.4	8.7		41.3

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 BQ4：香道を続けている（続けていた）年数

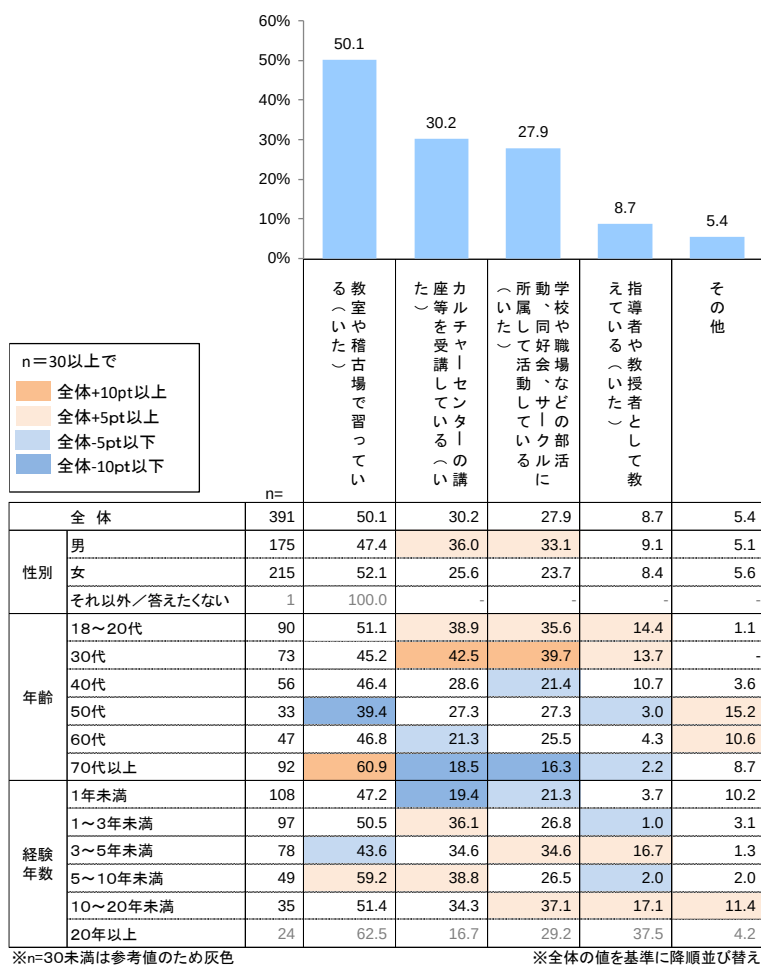
香道に関する活動内容

全体平均で最も回答比率が高いのは「教室や稽古場で習っている（いた）」の50.1%で、次いで「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」30.2%、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」27.9%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」(36.0%)、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」(33.1%)の回答比率が高い。

次に年齢別では、10～30代で「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」の回答比率が高い一方で、60代以上では低くなっている。また、10～30代では「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」や「指導者や教授者として教えている（いた）」の回答比率が高い。

経験年数別では、3～5年未満及び10年～20年以上で「指導者や教授者として教えている（いた）」という回答比率が高くなっている。



集計表 BQ5：香道に関する活動内容

（その他の内容）日常的に楽しんでいる、販売の仕事をしている、独学

香道に関する活動頻度

全体平均で最も回答比率が高いのは「週1回程度」の23.3%で、次いで「月数回程度」17.4%、「月1回程度」14.1%と続く。週1回以上活動している（いた）回答比率は50.9%（391人中199人）である。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、男女別では、男性で週1回以上活動している（いた）回答比率が58.9%（175人中103人）、女性で44.2%（215人中95人）となっている。

年齢別で見ると、10～30代で、週1回以上活動している（いた）回答比率が全体平均を上回っている。

また、経験年数別では、経験年数が1～10年未満の者で「週1回程度」の回答比率が高い。

										(%)
			ほぼ毎日	週に2～3回	週1回程度	月数回程度	月1回程度	年数回程度	年1回程度	週1回以上
n=										
全 体		391	13.8	13.8	23.3	17.4	14.1	6.4	11.3	50.9
性別	男	175	18.3	17.7	22.9	14.9	11.4	5.7	9.1	58.9
	女	215	9.8	10.7	23.7	19.5	16.3	7.0	13.0	44.2
	それ以外／答えたくない	1	100.0							100.0
年齢	18～20代	90	27.8	24.4	25.6	11.1	6.7	3.3	11.1	77.8
	30代	73	15.1	19.2	21.9	15.1	13.7	6.8	8.2	56.2
	40代	56	17.9	12.5	16.1	23.2	14.3	5.4	10.7	46.4
	50代	33	6.1	15.2	9.1	15.2	18.2	12.1	24.2	30.3
	60代	47	4.3	4.3	38.3	17.0	12.8	6.4	17.0	46.8
	70代以上	92	4.3	4.3	23.9	22.8	20.7	9.8	14.1	32.6
経験年数	1年未満	108	13.9	5.6	11.1	13.0	18.5	7.4	30.6	30.6
	1～3年未満	97	7.2	22.7	32.0	16.5	10.3	8.2	3.1	61.9
	3～5年未満	78	9.0	20.5	32.1	16.7	11.5	6.4	3.8	61.5
	5～10年未満	49	10.2	6.1	34.7	26.5	18.4	2.0	2.0	51.0
	10～20年未満	35	20.0	20.0	11.4	25.7	11.4	8.6	2.9	51.4
	20年以上	24	54.2				8.3	12.5	12.5	62.5

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 B Q 6 : 香道に関する活動頻度

香道に関する月額費用

全体平均で最も回答比率が高いのは月額「5,000 円未満」の 42.5%で、次いで「5,000 円以上～10,000 円未満」18.4%、「10,000 円以上～15,000 円未満」14.3%と続く。なお、月額1万円以上支出している（いた）と回答した比率は39.1%（391人中153人）である。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、月額1万円以上支出の割合は、男性50.3%（175人中88人）、女性30.2%（215人中65人）と男女差が見られる。

次に、年齢別で見ると、年齢が低いほど、月額1万円以上支出している（いた）割合が高いことが分かる。

経験年数別では、経験年数1年未満の者は月額「5,000 円未満」（77.8%）の回答比率が高い一方、経験年数が1年以上の者は月額5,000 円以上支出している（いた）割合が高い。

			(%)												
		n=	5 . 0 0 0 0 円 未 満	1 5 0 . 0 0 0 0 円 以 上 満	1 1 5 0 . 0 0 0 0 円 未 以 上	2 1 0 5 . 0 0 0 0 円 未 以 上	2 2 5 0 . 0 0 0 0 円 未 以 上	3 2 0 5 . 0 0 0 0 円 未 以 上	3 3 5 0 . 0 0 0 0 円 未 以 上	4 3 0 5 . 0 0 0 0 円 未 以 上	4 4 5 0 . 0 0 0 0 円 未 以 上	5 4 0 5 . 0 0 0 0 円 未 以 上	5 0 . 0 0 0 0 円 以 上	合 1 計 0 . 0 0 0 0 円 以 上	
全 体		391	42.5	18.4	14.3	7.2	5.4	3.8	2.3	1.0	1.0	0.8	3.3	39.1	
性 別	男	175	34.3	15.4	18.3	10.3	6.3	3.4	4.0	0.6	1.7	1.1	4.6	50.3	
	女	215	48.8	20.9	11.2	4.7	4.7	4.2	0.9	1.4	0.5	0.5	2.3	30.2	
それ以外／答えたくない		1	100.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
年 齢	18～20代	90	24.4	17.8	15.6	14.4	13.3	3.3	4.4	-	2.2	2.2	2.2	57.8	
	30代	73	32.9	13.7	17.8	13.7	5.5	4.1	4.1	4.1	-	-	4.1	53.4	
	40代	56	35.7	19.6	10.7	5.4	3.6	10.7	3.6	1.8	1.8	-	7.1	44.6	
	50代	33	51.5	18.2	21.2	-	-	-	-	-	3.0	3.0	3.0	30.3	
	60代	47	44.7	31.9	17.0	2.1	-	-	-	-	-	-	4.3	23.4	
	70代以上	92	67.4	15.2	8.7	1.1	3.3	3.3	-	-	-	-	1.1	17.4	
経 験 年 数	1年未満	108	77.8	13.9	4.6	1.9	0.9	-	-	-	0.9	-	-	8.3	
	1～3年未満	97	37.1	25.8	19.6	7.2	3.1	3.1	3.1	1.0	-	-	-	37.1	
	3～5年未満	78	24.4	23.1	16.7	11.5	11.5	3.8	5.1	2.6	1.3	-	-	52.6	
	5～10年未満	49	26.5	16.3	16.3	10.2	6.1	12.2	4.1	-	4.1	-	-	57.1	
	10～20年未満	35	22.9	11.4	22.9	5.7	11.4	5.7	-	2.9	-	2.9	14.3	65.7	
	20年以上	24	25.0	8.3	12.5	12.5	4.2	4.2	-	-	-	-	33.3	66.7	

※n=30未満は参考値のため灰色

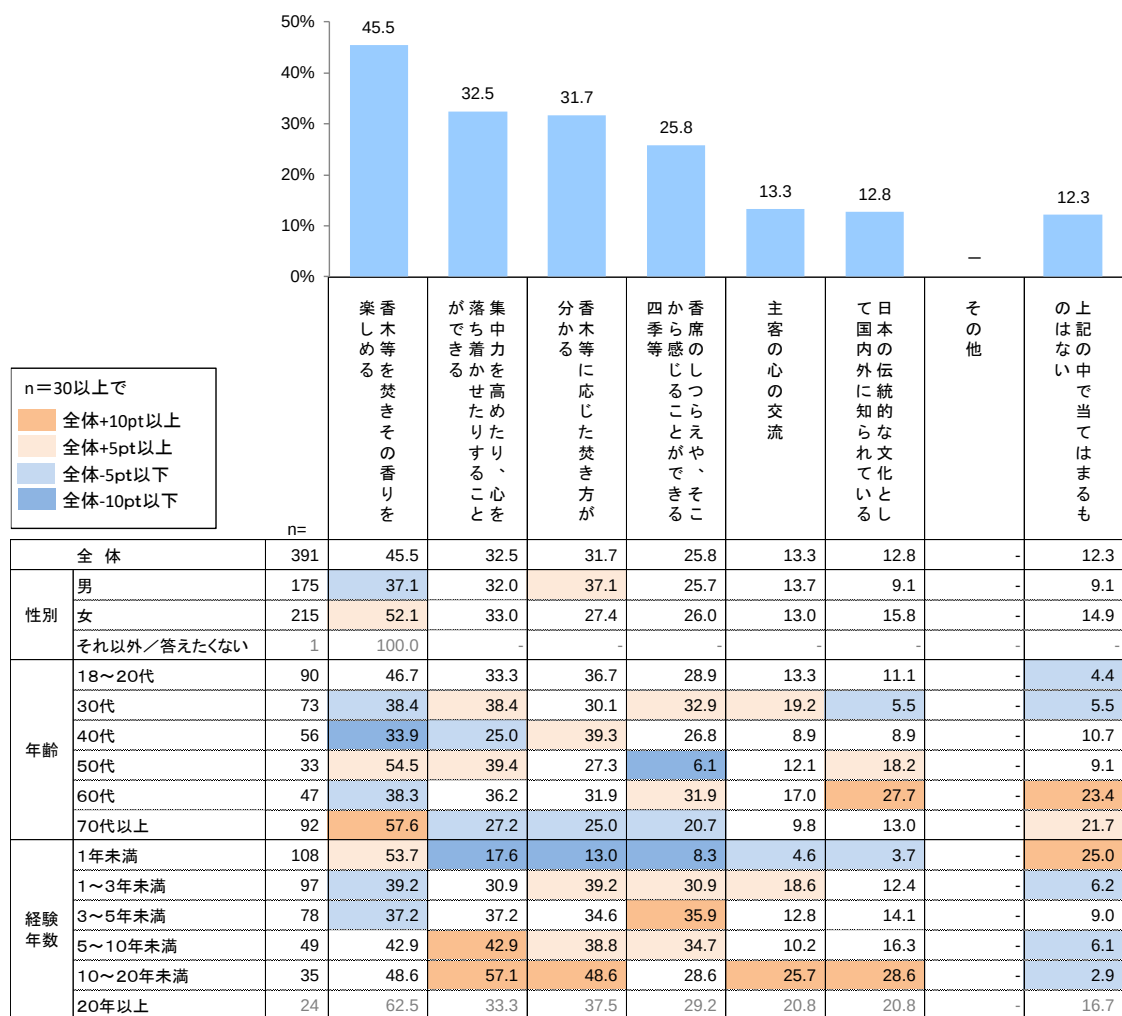
集計表 BQ7：香道に関する月額費用

香道に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「香木等を焚きその香りを楽しめる」の45.5%で、次いで「集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる」32.5%、「香木等に応じた焚き方が分かる」31.7%、「香席のしつらえや、そこから感じることができる四季等」25.8%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、「香木等を焚きその香りを楽しめる」の全体平均45.5%に対し、男性の回答比率が37.1%と低い一方で、女性は52.1%と高い。また、「香木等に応じた焚き方が分かる」では男性(37.1%)の回答比率が高い。

経験年数別では、経験年数10年以上で「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」の回答比率が高い。また、経験年数10～20年未満の者は、「集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる」(57.1%)をはじめ、複数の項目で回答比率が全体平均より高く、経験年数が長いほど、関心や魅力も広がる傾向がうかがえる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 B Q 8 : 香道に関する興味関心や魅力

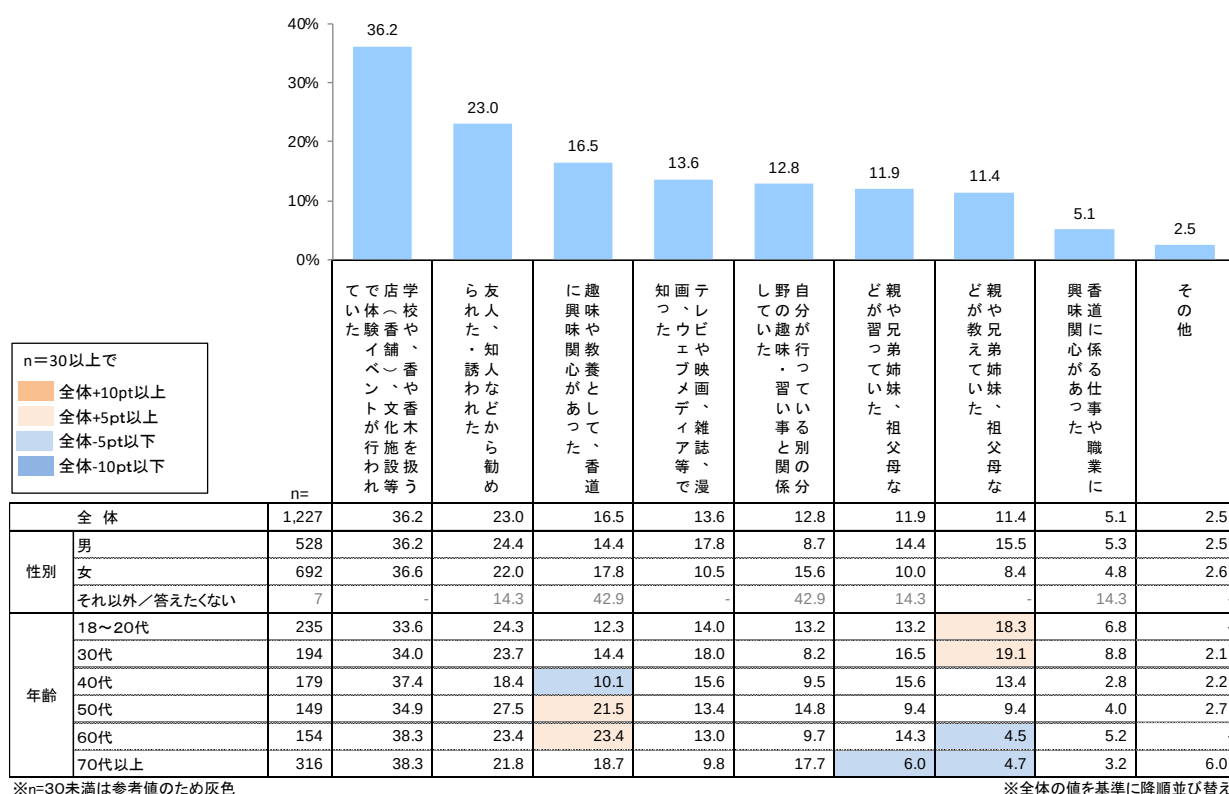
■香道を「学校の授業や職場の研修、イベント等で香会や香席に参加した経験はある」と回答した者への設問（BQ9～BQ15）

本設問では、香道をイベント等で体験したと回答した者が、どのようなきっかけや機会に香道を体験したのか、また、どの程度香道に興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

香道を体験したきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは「学校や、香や香木を扱う店（香舗）、文化施設等で体験イベントが行われていた」の36.2%で、次いで「友人、知人などから勧められた・誘われた」23.0%、「趣味や教養として、香道に興味関心があった」16.5%、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」13.6%、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」12.8%と続く。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較すると、10～30代で「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」の回答比率が高く、対照的に60代以上では回答比率が低い傾向にある。



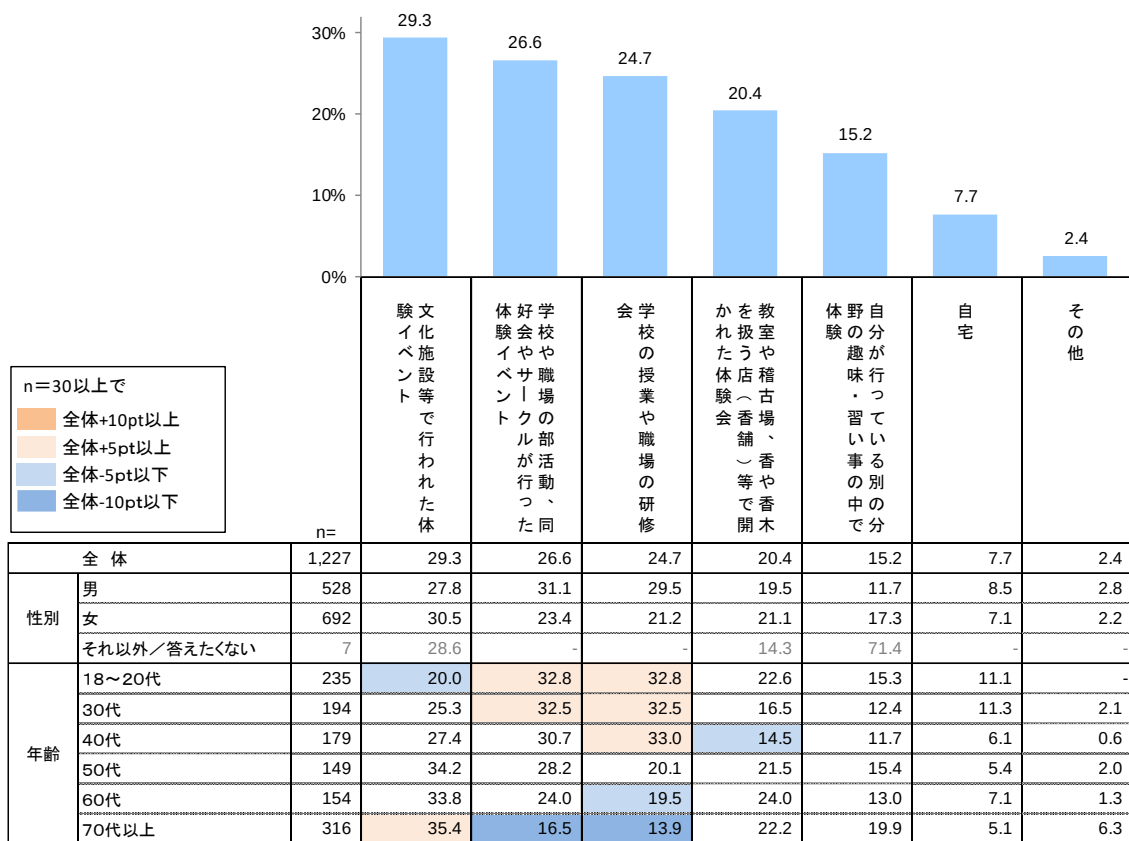
集計表 BQ9：香道を体験したきっかけ

（その他の内容）大学の授業、職場での研修の一環

香道を体験した場

全体平均で最も回答比率が高いのは「文化施設等で行われた体験イベント」の29.3%で、次いで「学校や職場の部活動、同好会やサークルが行った体験イベント」26.6%、「学校の授業や職場の研修会」24.7%、「教室や稽古場、香や香木を扱う店（香舗）等で開かれた体験会」20.4%となる。

全体平均と年齢別の回答比率とを比較すると、若年者ほど「学校の授業や職場の研修会」、「学校や職場の部活動、同好会やサークルが行った体験イベント」の回答比率が高い。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

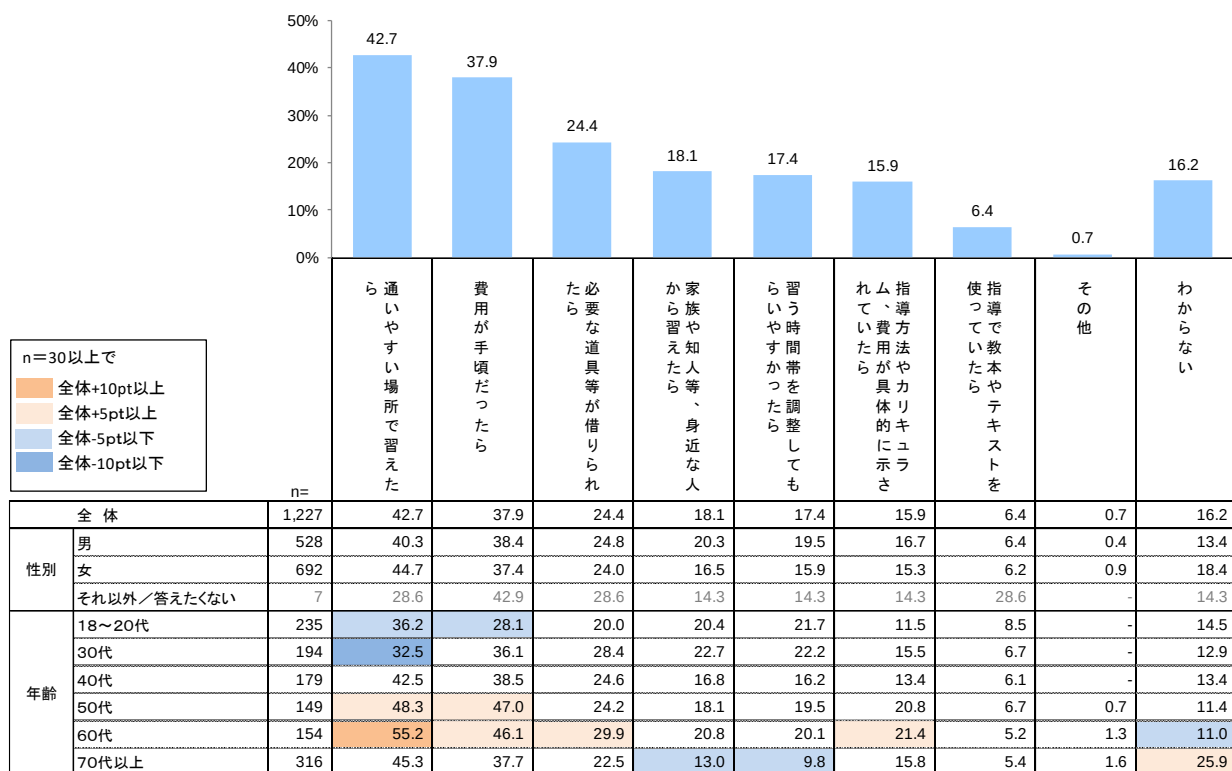
集計表 B Q10：香道を体験した場

（その他の内容）友人の家、仕事

香道を習いやすい状況

全体平均で最も回答比率が高いのは「通いやすい場所で習えたら」の42.7%で、次いで「費用が手頃だったら」37.9%、「必要な道具等が借りられたら」24.4%、少し離れて「家族や知人等、身近な人から習えたら」18.1%、「習う時間帯を調整してもらいやすかったら」17.4%と並ぶ。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較した場合、10～30代で「通いやすい場所で習えたら」の回答比率がやや低い一方、50～60代でやや高い。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 BQ11：香道を習いやすい状況

(その他の内容) 茶会、香炉や炭が有るから自宅で楽しんでいる

香道に支払える月額費用

全体平均で最も回答比率が高いのは「5,000 円未満」の 55.1%で、次いで「5,000 円以上～10,000 円未満」23.1%、「10,000 円以上～15,000 円未満」8.5%となった。月額 1 万円以上支払ってもよいとした回答比率は 21.8%（1,227 人中 268 人）である。

次に男女別を見ると、男性で月額 1 万円以上支払ってもよいという回答比率が 31.4%（528 人中 166 人）あったのに対し、女性は 14.5%（692 人中 100 人）にとどまる。

また、年齢別では、年齢が若いほど月額 1 万円以上支払ってもよいという回答が増える傾向がある。

			(%)											
			5 0 0 0 0 円 未 満	1 5 0 0 0 円 未 満	1 1 5 0 0 円 未 満	2 1 0 5 0 円 未 満	2 2 5 0 0 円 未 満	3 2 0 5 0 円 未 満	3 3 5 0 0 円 未 満	4 3 0 5 0 円 未 満	4 4 5 0 0 円 未 満	5 4 0 5 0 円 未 満	5 0 0 円 以 上	合 計 0 0 0 円 以 上
			n=											
性 別	全 体	1,227	55.1	23.1	8.5	5.3	2.9	1.6	1.1	0.7	0.3	0.2	1.1	21.8
	男	528	44.7	23.9	12.5	7.6	4.2	2.5	1.1	1.1	0.4	0.2	1.9	31.4
	女	692	63.2	22.4	5.5	3.6	1.9	0.9	1.2	0.4	0.3	0.1	0.6	14.5
	それ以外／答えたくない	7	42.9	28.6	-	-	-	14.3	-	-	-	14.3	-	28.6
年 齢	18～20代	235	37.0	26.8	11.5	9.4	4.3	3.4	2.1	1.3	0.4	1.3	2.6	36.2
	30代	194	49.5	19.6	12.4	6.7	4.1	2.6	2.6	1.5	-	-	1.0	30.9
	40代	179	49.7	23.5	10.1	7.8	4.5	1.1	1.1	1.1	-	-	1.1	26.8
	50代	149	53.7	24.8	8.7	5.4	2.7	0.7	0.7	-	1.3	-	2.0	21.5
	60代	154	61.0	27.9	7.8	1.3	0.6	0.6	-	0.6	-	-	-	11.0
	70代以上	316	72.8	19.0	3.2	1.9	1.3	0.9	0.3	-	0.3	-	0.3	8.2

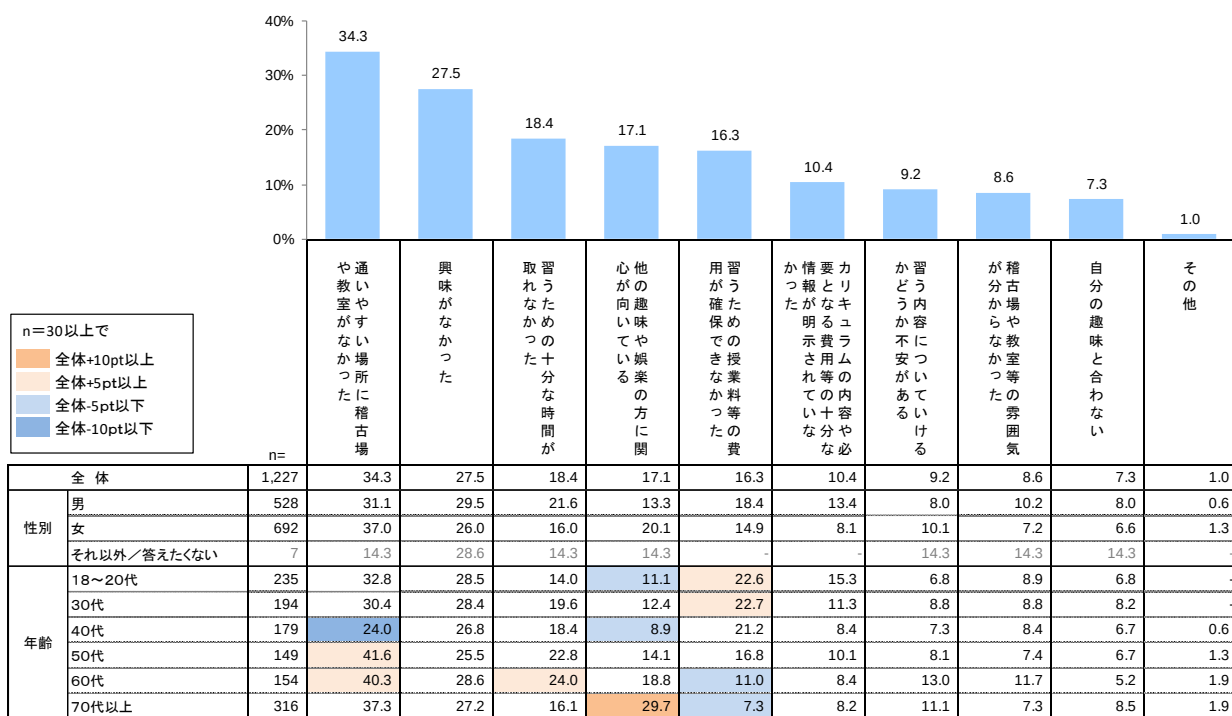
※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 B Q12：香道に支払える月額費用

香道を習っていない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「通いやすい場所に稽古場や教室がなかった」の34.3%で、次いで「興味がなかった」27.5%、「習うための十分な時間が取れなかった」18.4%、「他の趣味や娯楽の方に興味が向いている」17.1%となった。

年齢別では、若年者で「習うための授業料等の費用が確保できなかった」の回答比率が高い一方、50～60代では「通いやすい場所に稽古場や教室がなかった」の回答比率が高く、年代によって習っていない理由に異なる傾向が見られる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 B Q13：香道を習っていない理由

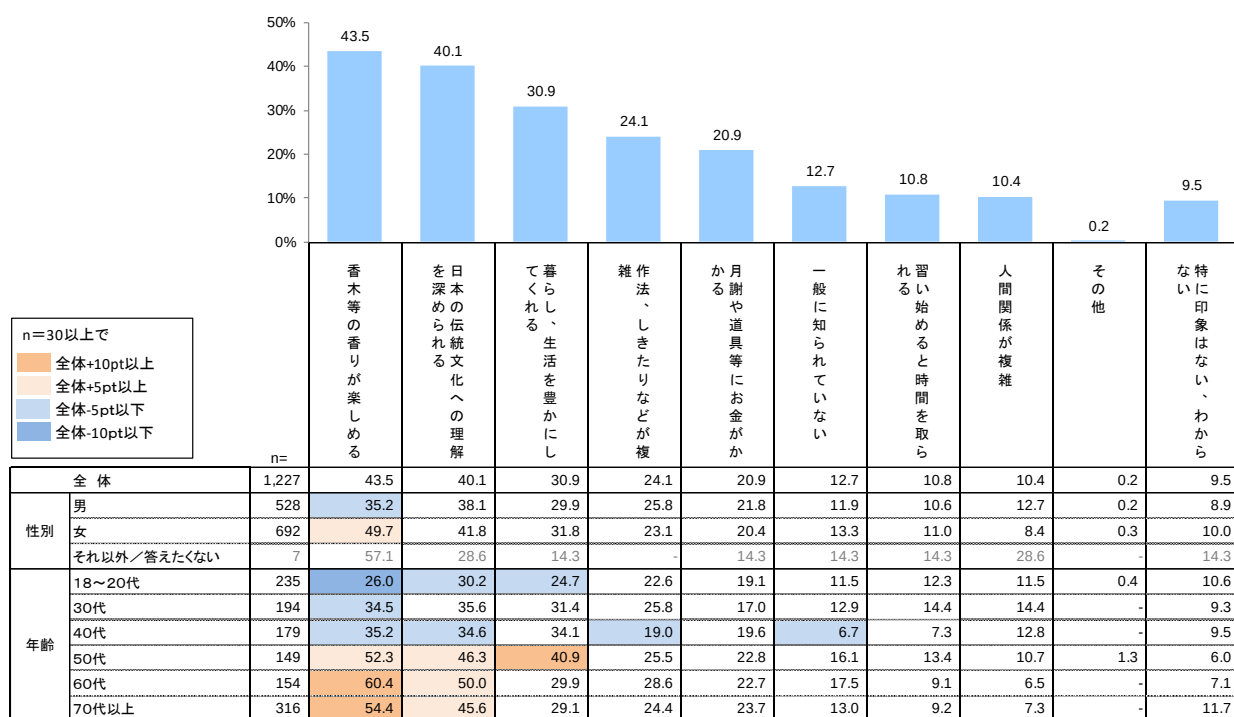
(その他の内容) 香料アレルギー、喘息だから、お金がかかる

香道に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは「香木等の香りが楽しめる」の43.5%で、次いで「日本の伝統文化への理解を深められる」40.1%、「暮らし、生活を豊かにしてくれる」30.9%、「作法、しきたりなどが複雑」24.1%、「月謝や道具等にお金がかかる」20.9%となっている。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、「香木等の香りが楽しめる」が男性で35.2%と低い一方、女性で49.7%と高い。

また、年齢別では、50代以上で「香木等の香りが楽しめる」、「日本の伝統文化への理解を深められる」の回答比率が全体平均よりも高い結果となっており、年代が高いほど肯定的なイメージを持っている傾向がある。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 BQ14：香道に対する印象やイメージ

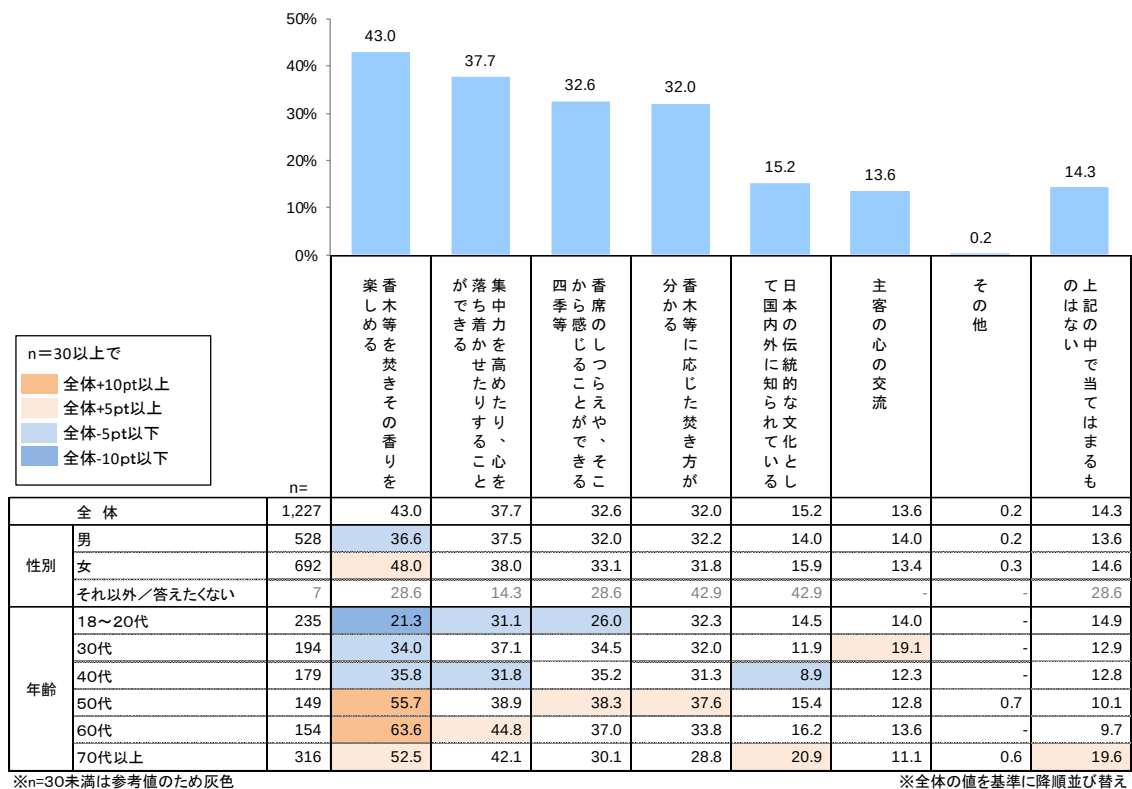
(その他の内容) 心が落ち着きそう、指導者がいない、教室がない

香道に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「香木等を焚きその香りを楽しめる」の43.0%で、次いで「集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる」37.7%、「香席のしつらえや、そこから感じることができる四季等」32.6%、「香木等に応じた焚き方が分かる」32.0%、「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」15.2%と続く。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、「香木等を焚きその香りが楽しめる」の回答比率が男性で36.6%、女性で48.0%となっており、回答比率に大きな差が見られる。

また、年齢別では、50代以上で「香木等を焚きその香りが楽しめる」の回答比率が全体平均よりも高い一方、10～40代は低い結果となっている。



集計表 B Q 15 : 香道に関する興味関心や魅力

(その他の内容) 生活が豊かになる、フレグランスとは違う日本中国独特の香り

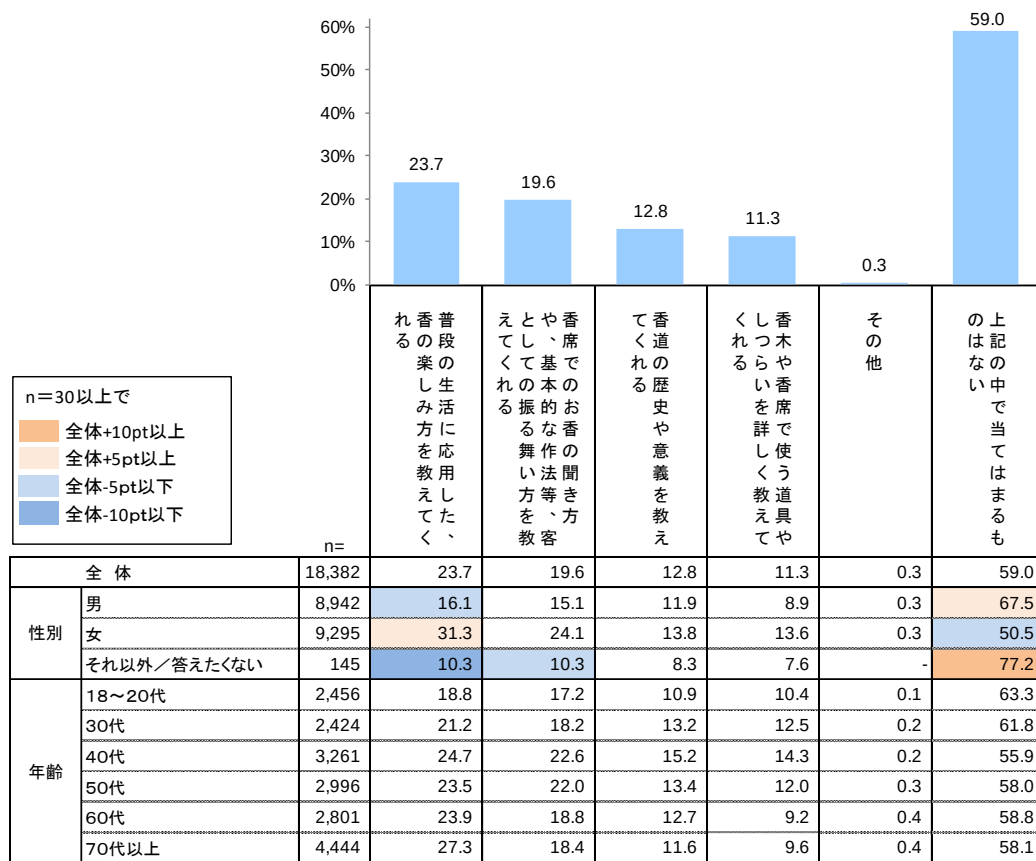
■香道を「今まで経験したことはない」と回答した者への設問（B Q16～B Q20）

本設問では、香道を経験したことがないと回答した者が、香道を体験するなら、どのような内容や機会なら参加したいか、また、香道に対してどの程度、興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

参加してみたい香道の体験内容

全体平均で最も回答比率が高いのは「上記の中で当てはまるものはない」の59.0%で、次いで「普段の生活に応用した、香の楽しみ方を教えてくれる」23.7%、「香席でのお香の聞き方や、基本的な作法等、客としての振る舞い方を教えてくれる」19.6%、「香道の歴史や意義を教えてくれる」12.8%、「香木や香席で使う道具やしつらいを詳しく教えてくれる」11.3%となった。

男女別では、「上記の中で当てはまるものはない」の回答比率が男性で67.5%と高く、女性で50.5%と低い一方、「普段の生活に応用した、香の楽しみ方を教えてくれる」の回答比率は、男性が16.1%と低く、女性が31.3%と高い。



※全体の値を基準に降順並び替え

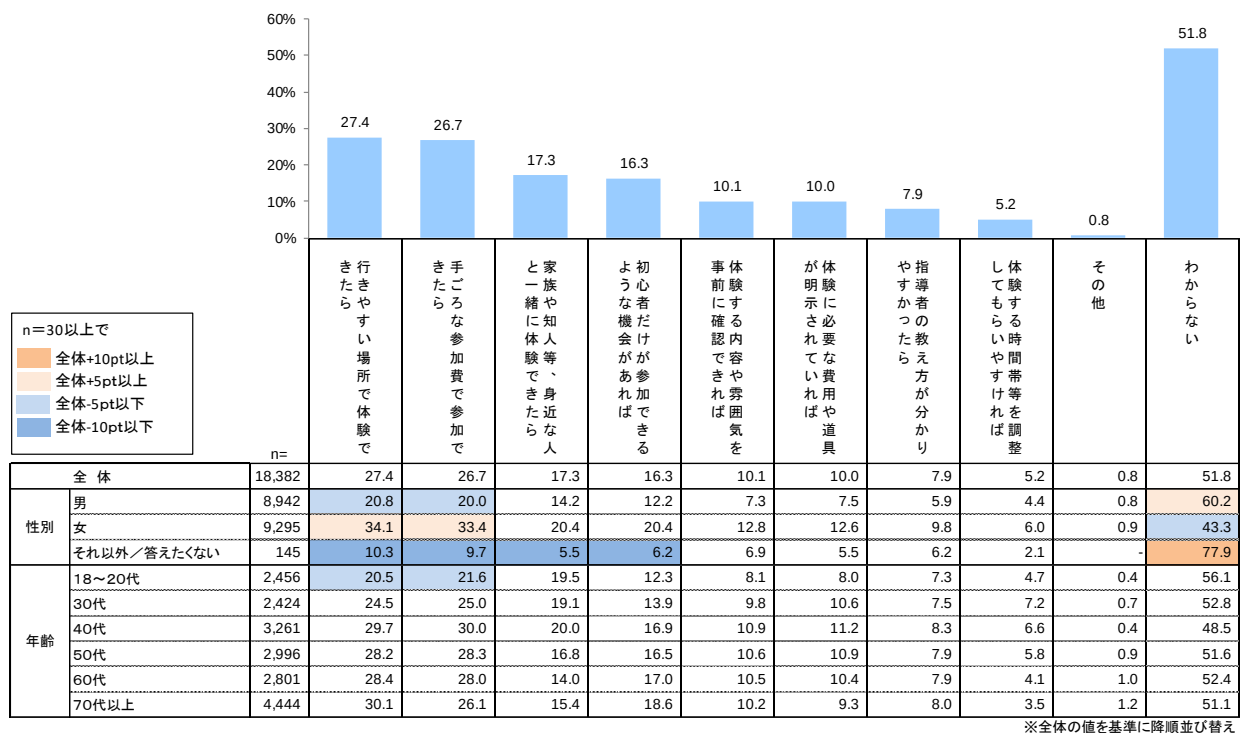
集計表 B Q16：参加してみたい香道の体験内容

（その他の内容）正座をしなくていいなら、今の時代にあった香の楽しみ方で教えてくれる

参加しやすい香道の体験条件

全体平均で最も回答比率が高いのは「わからない」の 51.8%で、次いで「行きやすい場所で体験できたら」27.4%、「手ごろな参加費で参加できたら」26.7%、「家族や知人等、身近な人と一緒に体験できたら」17.3%、「初心者だけが参加できるような機会があれば」16.3%となる。

男女別で見ると、「行きやすい場所で体験できたら」の回答比率が女性で 34.1%と高く、男性で 20.8%と低い。また「手ごろな参加費で参加できたら」での回答比率も、女性で 33.4%、男性で 20.0%と女性の方が高い。



集計表 B Q17：参加しやすい香道の体験条件

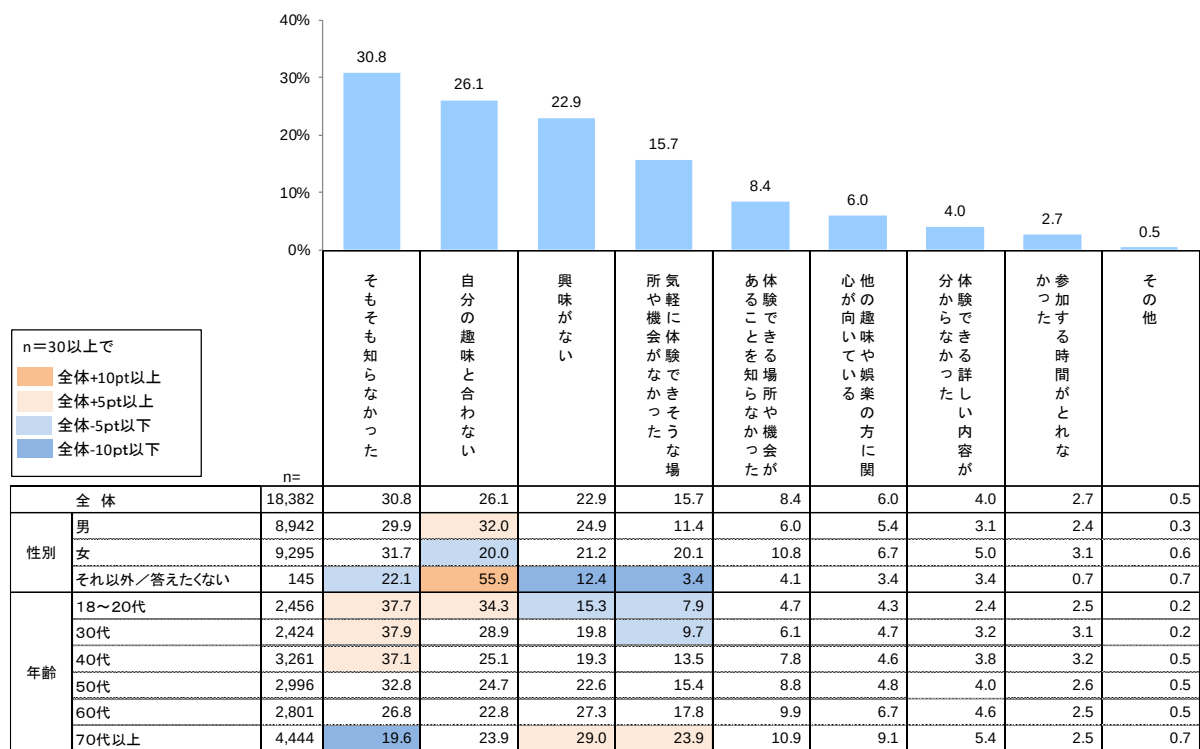
(その他の内容) 参加費が無料、格式ばらないで気軽に参加できたら、正座をしなくてよいなら

香道を体験したことがない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「そもそも知らなかった」の30.8%で、次いで「自分の趣味と合わない」26.1%、「興味がない」22.9%、「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」15.7%となった。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較した場合、男女別では、「自分の趣味と合わない」の回答比率が男性で32.0%と高く、女性で20.0%と低い。

また、年齢別では、10～40代で「そもそも知らなかった」という回答比率が高い。



※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 BQ18：香道を体験したことがない理由

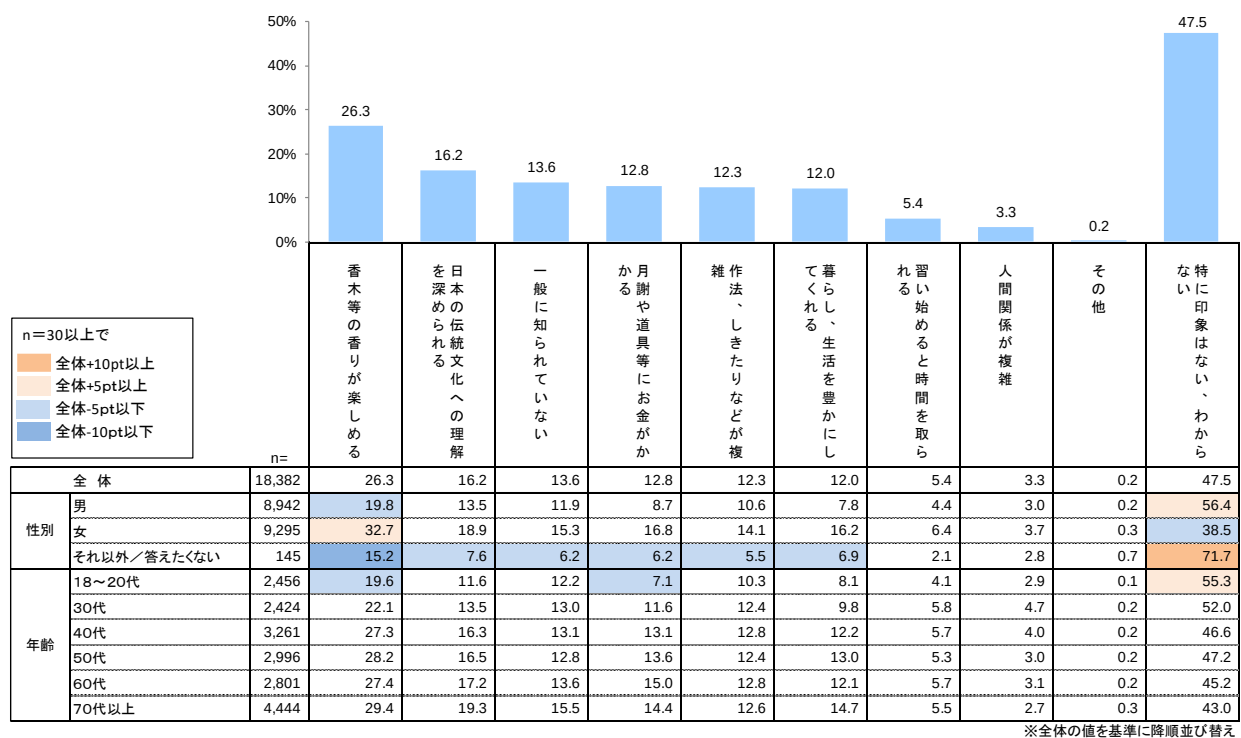
(その他の内容) 香りが苦手、香りアレルギー、正座ができない

香道に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは「特に印象はない、わからない」の47.5%で、次いで「香木等の香りが楽しめる」26.3%、「日本の伝統文化への理解を深められる」16.2%、「一般に知られていない」13.6%、「月謝や道具等にお金がかかる」12.8%、「作法、しきたりなどが複雑」12.3%となっている。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、「特に印象はない、わからない」の回答比率が男性で56.4%と高く、女性で38.5%と低い。一方で、「香木等の香りが楽しめる」の回答比率は男性が19.8%と低く、女性で32.7%と高い。

また、年齢別では、18～20代で「特に印象はない、わからない」(55.3%)の回答比率が高い一方、「香木等の香りが楽しめる」(19.6%)、「月謝や道具等にお金がかかる」(7.1%)の回答比率は低い。



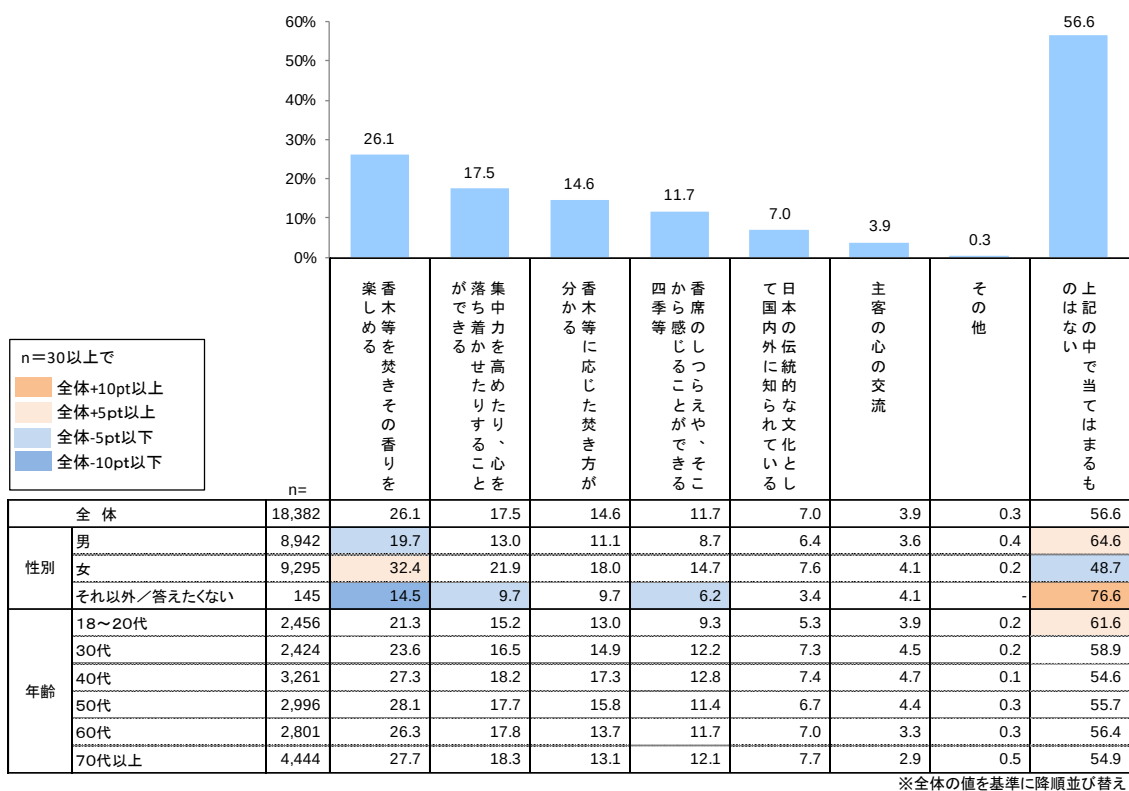
集計表 BQ19：香道に対する印象やイメージ

(その他の内容) 敷居が高い、香りを愛でる喜び愉しみ、お金持ちがするイメージ

香道に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「上記の中で当てはまるものはない」の56.6%で、次いで「香木等を焚きその香りを楽しめる」の26.1%、「集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる」17.5%、「香木等に応じた焚き方が分かる」14.6%、「香席のしつらえや、そこから感じることができる四季等」11.7%と続く。

男女別で見ると、男性では「香木等を焚きその香りを楽しめる」(19.7%)の回答比率が低く、「上記の中で当てはまるものはない」(64.6%)の回答比率が高いことから、男性よりも女性の方が香道に対して興味関心や魅力を感じている傾向がうかがえる。



集計表 B Q20：香道に関する興味関心や魅力

(その他の内容) 香の調合体験ができる、日常生活で使える

②調査結果に基づく分析と考察

本節では、香道の振興施策の検討を主眼として、前掲の集計結果に加えてクロス集計等も行い、これらの結果について分析を行う。

香道に関して「経験あり」、「参加体験あり」、「未経験」それぞれの回答者にどのような特徴が見られるのかを分析するため、「居住地」、「職業」、「同居家族」、「世帯年収」、「子供の頃の習い事」等の設問や設問間とのクロス集計を行った。結果は以下のとおりである。

回答者の特性や傾向について

■居住地、職業、同居家族、世帯年収とのクロス集計結果

属性については、性年齢以外に、居住地域、職業、同居家族、世帯年収についての設問をもうけている。職業では、家族従業者に「参加体験あり」と回答した者がやや多い。世帯年収については、「1,000万円以上」で「経験あり」の回答比率がやや高いが、それでも3.5%にとどまっており、居住地域、世帯年収とのクロス集計の結果からは、際立った傾向は見られない。

居住地・職業・同居家族×香道の経験の有無

			FQ フィルタリング・パート			(%)
		n=	「経験あり」層	「参加体験あり」層	「未経験」層	
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下						
全 体		20,000	2.0	6.1	91.9	
居住地	北海道	852	2.0	4.7	93.3	
	東北	1,385	2.1	5.9	92.0	
	関東	7,422	2.1	6.6	91.3	
	北陸	816	2.1	4.8	93.1	
	東海(中部)	2,349	2.0	6.0	92.0	
	近畿	3,247	2.0	6.7	91.3	
	中国	1,140	2.3	5.5	92.2	
	四国	584	0.9	5.7	93.5	
	九州	1,987	1.4	5.6	93.0	
	沖縄	218	0.5	2.8	96.8	
職業	正規の職員・従業員	6,411	2.9	7.5	89.6	
	非正規の職員・従業員	2,803	1.6	6.1	92.3	
	自営業主・自由業	1,239	1.5	6.0	92.5	
	家族従業者	135	0.7	11.1	88.1	
	主婦・主夫	3,987	2.2	6.5	91.3	
	学生	512	2.1	8.0	89.8	
	リタイア、無職	4,141	0.9	3.9	95.2	
	その他	772	0.6	3.4	96.0	
同居家族	ひとり暮らし	4,145	2.5	6.4	91.1	
	核家族	13,277	1.8	6.1	92.2	
	三世大家族	1,179	3.3	7.5	89.1	
	上記以外で同居している人がいる	1,399	1.2	4.5	94.3	

■スポーツや趣味、娯楽等の活動とのクロス集計結果

次に、スポーツや趣味、娯楽等（以下、趣味・娯楽等）の活動の内容や、これらの活動に費やす時間やお金に関する回答結果とのクロス集計結果と、そこから見る特徴や傾向を示す。

香道について「経験あり」と回答した者が行っている趣味・娯楽等の活動を見ると、趣味・娯楽等の活動を「特に何もしていない」人が、「未経験」では18.5%いる一方、「経験あり」(3.1%)「参加体験あり」(5.1%)と、経験あり・参加体験ありの回答者共に、趣味・娯楽等と積極的な関わりを持っていることがうかがえる。

趣味・娯楽等の活動について項目別に見ると、全体平均を下回っている項目は、「動画鑑賞」、「(メディアでの)音楽鑑賞」、「読書」、「国内観光旅行」、「複合ショッピングセンター、アウトレットモール」に限られており、他の趣味・娯楽等の活動では全て参加率が全体平均を上回る。また、日本の伝統的な文化に関しては、「経験あり」と回答した者は、「お茶」(15.3%)、「お花」(11.8%)、「書道」(11.5%)、「邦楽、民謡」(5.4%)、「おどり（日舞など）」(3.8%)と全体平均を上回る参加率であり、「参加体験あり」と回答した者と比較しても回答比率が高い。一方、「参加体験あり」と回答した者では、「特に何もしていない」が5.1%と全体平均を下回っているのを除き、全ての種目で、平均以上か平均並の回答比率となっており、分野に関わらず趣味・娯楽等活動を幅広く行っていることが推察できる。

次に、1ヶ月に使える趣味・娯楽等にかかる費用や活動する時間帯、活動に費やす時間とのクロス集計結果を示す。

まず、趣味・娯楽等にかかる費用については、「経験あり」と回答した者で平均月2万円以上支出している割合が26.6%と、「参加体験あり」(18.9%)、「未経験」(10.5%)を上回っている。

趣味・娯楽等の活動を行う時間帯を見ると、「平日夕方」(24.0%)の回答比率が高い。対照的に休日の活動率は全体平均を下回っている。

趣味・娯楽等に費やす月平均の時間を見ると、「1時間未満」の回答比率が、全体平均22.9%に対し、「経験あり」(16.1%)、「参加体験あり」(16.8%)と下回っている一方、「2時間以上～3時間未満」の回答比率が全体平均13.7%に対し、「経験あり」(20.1%)で上回っている。

また、「経験あり」層の場合、「1時間未満」と「10時間以上」を除く全て項目で全体平均を上回っていることから、経験がある方が余暇時間に費やす時間が長く、活動そのものを積極的に行う傾向が見られる。

香道の経験の有無×趣味・娯楽等の活動状況

(%)

		共通設問1 趣味・余暇活動の参加状況										
		信 画 鑑 賞 (レ ン タ ル 、 配 信)	邦 楽 、 民 謡	音 楽 鑑 賞 (配 信 、 C D 、 F M 、 テ レ ビ 、 C M 、 等)	書 道	お 茶	お 花	お ど り (日 舞 な ど)	読 書 (仕 事 、 勉 強 な ど を 除 く 娯 楽 と し て の 娯 楽)	寒 国 内 観 光 旅 行 (避 暑 、 避 寒 、 温 泉 な ど)	レ ジャー 、 ア ウ ト レ ッ ク セ ン ター 、 ア ウ ト レ ッ ク セ ン ター 、 ア ウ ト レ ッ ク セ ン ター	特 に 何 も し て い な い
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
全 体	20,000	13.6	1.5	17.3	1.7	1.6	1.8	0.4	16.1	30.7	15.7	17.4
「経験あり」層	391	13.0	5.4	12.5	11.5	15.3	11.8	3.8	12.0	27.9	13.8	3.1
「参加体験あり」層	1,227	15.2	3.7	17.4	5.6	7.5	5.7	1.1	17.5	36.3	21.5	5.1
「未経験」層	18,382	13.5	1.3	17.3	1.2	0.9	1.3	0.2	16.1	30.4	15.4	18.5

※共通設問1は、分析で取り上げた選択肢のみ抜粋して掲載している。(以下同様)

香道の経験の有無×趣味・娯楽等に1ヶ月に使える費用

共通設問2 1ヶ月に使える趣味・余暇費用

		5 0 0 0 円 未 満	1 5 0 0 0 円 未 満	1 1 5 0 0 0 円 未 満	2 1 0 5 0 0 円 未 満	2 2 5 0 0 0 円 未 満	3 2 0 5 0 0 円 未 満	3 3 5 0 0 0 円 未 満	4 3 0 5 0 0 円 未 満	4 4 5 0 0 0 円 未 満	5 4 0 5 0 0 円 未 満	5 0 円 以 上	合 計 2 0 0 円 以 上
n=30以上で													
全体+10pt以上													
全体+5pt以上													
全体-5pt以下													
全体-10pt以下													
全 体	16,527	49.5	22.9	10.2	5.9	3.1	3.0	1.4	0.6	0.4	0.6	2.3	11.4
「経験あり」層	379	26.1	18.2	17.4	11.6	6.6	6.9	2.9	2.6	1.1	1.1	5.5	26.6
「参加体験あり」層	1,164	30.4	26.1	14.2	10.4	5.8	4.2	3.6	0.9	0.7	0.7	3.0	18.9
「未経験」層	14,984	51.6	22.8	9.7	5.5	2.8	2.8	1.1	0.6	0.4	0.6	2.2	10.5

香道の経験の有無×趣味・娯楽等を行う時間帯

(%)

		共通設問3 1ヶ月に使える趣味・余暇時間帯							
		平 日 午 前	平 日 午 後	平 日 夕 方	平 日 夜 間	休 日 午 前	休 日 午 後	休 日 夕 方	休 日 夜 間
n=30以上で									
全体+10pt以上									
全体+5pt以上									
全体-5pt以下									
全体-10pt以下									
全 体	16,527	30.6	30.1	15.8	18.8	34.9	43.7	21.2	15.5
「経験あり」層	379	34.3	31.1	24.0	19.0	29.0	30.6	15.8	7.7
「参加体験あり」層	1,164	29.3	28.6	20.3	16.5	34.6	35.3	21.0	11.7
「未経験」層	14,984	30.6	30.2	15.3	19.0	35.1	44.7	21.4	16.0

香道の経験の有無×趣味・娯楽等に費やす時間

		共通設問4 趣味・余暇活動を行う時間											(%)
n=30以上で		1時間未満	2時間未満	3時間未満	4時間未満	5時間未満	6時間未満	7時間未満	8時間未満	9時間未満	10時間未満	10時間以上	
全体+10pt以上													
全体+5pt以上													
全体-5pt以下													
全体-10pt以下													
n=													
全体	16,527	22.9	23.5	13.7	7.0	4.5	4.1	1.7	1.9	0.9	1.3	18.5	
「経験あり」層	379	16.1	22.7	20.1	9.8	6.9	4.7	3.2	3.4	2.1	1.3	9.8	
「参加体験あり」層	1,164	16.8	25.4	18.2	9.3	5.1	5.3	3.0	1.9	0.7	1.5	12.9	
「未経験」層	14,984	23.6	23.3	13.1	6.7	4.4	4.0	1.6	1.8	0.9	1.3	19.1	

消費行動に関する意識や価値観に関するクロス集計結果

消費行動についての様々な意見への同意率を見てみると、「経験あり」と回答した者は、「リスクはできるだけ避けたい」、「家族や友人・知人の役に立ちたい」、「流行っていなくても、自分が面白いと思ったものは試してみたい」、「困っている人・助けが必要な人の役に立ちたい」、「その時・その場でしか得られない体験をしたい」、「上記であてはまるものはない」を除いた意見で回答比率が平均を上回っている。また、「自分の考えを主張するより、周りとの和を尊重したい」(38.4%)は、全体平均を大幅に上回る回答比率となっていると共に「参加体験あり」と回答した者の回答比率も大きく上回っている。

一方、「参加体験あり」と回答した者は、「リスクはできるだけ避けたい」と「上記であてはまるものはない」を除いた全ての意見で回答比率が平均を上回ると共に、「周りに合わせるより、自分の考えに基づいてものごとを判断したい」(32.4%)や「家族や友人・知人の役に立ちたい」(31.0%)、「困っている人・助けが必要な人の役に立ちたい」(27.9%)、「その時・その場でしか得られない体験をしたい」(21.6%)で全体平均を上回る回答比率となっている。

「未経験」と回答した者は、「上記であてはまるものはない」(23.4%)以外の全項目で回答比率が最も低い。

香道の経験の有無×消費行動に対する価値観

		共通設問5 消費行動に対する価値観															(%)
n=30以上で		たいてい、周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	周りに合わせるより、自分の考えを主張する	
全体+10pt以上																	
全体+5pt以上																	
全体-5pt以下																	
全体-10pt以下																	
n=																	
全体	20,000	25.6	22.6	20.2	41.9	24.9	10.6	19.6	2.4	5.4	13.6	3.9	26.8	3.1	3.1	22.0	
「経験あり」層	391	38.4	25.6	30.4	27.1	22.3	17.4	18.2	5.4	11.0	12.3	6.9	16.4	8.2	3.8	4.9	
「参加体験あり」層	1,227	29.4	32.4	29.1	38.5	31.0	17.8	27.9	4.6	11.0	21.6	7.9	28.8	6.8	5.5	6.2	
「未経験」層	18,382	25.1	21.9	19.4	42.5	24.5	10.0	19.1	2.2	4.9	13.1	3.6	26.9	2.8	2.9	23.4	

普段接するメディアとのクロス集計結果

回答者が普段接するメディアと香道の経験・体験の有無とのクロス集計結果を示す。

「経験あり」と回答した者の場合、「CATVや衛星放送のチャンネル」、「ラジオ」、「雑誌・タウン誌」

で回答比率が全体平均を5%以上上回っている一方、「テレビ（民放）」と「インターネットのウェブサイト・ニュースサイトなど」、「動画投稿サイト」、「SNS」への接触は全体平均を下回っており、CATVや衛星放送、雑誌などに普段から接触している傾向が見られる。一方、「参加体験あり」と回答した者は、「テレビ（民放）」、「インターネットのウェブサイト・ニュースサイトなど」で全体平均を下回っており、「動画投稿サイト」で全体平均並みとなっていることを除くと平均よりメディア接触が多い。

なお、「未経験」と回答した者の場合は、逆に、多くのメディアにおいて回答比率が低く、「テレビ（民放）」（70.1%）、「インターネットのウェブサイト・ニュースサイトなど」（46.5%）、「動画投稿サイト」（33.9%）、「上記のメディアはあまり見ていない」（11.4%）のみで全体平均の回答比率を上回る結果になった。

香道の経験の有無×接触メディア

		共通設問6 接触メディア																(%)
		Bテレビ（民放の地上波）	波・B（NHKの地上）	CATVや衛星放送のチャンネル	ラジオ（インターネットを除く）	新聞（電子版含む）	雑誌・タレント雑誌（インターネットを除く）	漫画・アニメ雑誌（インターネットを除く）	動画投稿サイト（YouTubeなど）	動画投稿サイト（YouTubeなど）	o g r L S（Twitter、Facebook、Instagramなど）	紙の書籍	電子書籍	紙のマンガ／マンガ雑誌	電子版のマンガ	x、H u o、N r i t（Amazon、Kindleなど）	有料動画サイト（Netflix、Amazon Prime Videoなど）	上記のメディアはあまり見ていない
n=		全体	69.5	41.7	10.2	14.3	28.5	7.5	46.1	33.7	28.5	20.4	6.0	6.8	6.4	11.9	10.8	
「経験あり」層		391	60.1	45.5	20.7	22.3	33.2	16.9	32.5	22.5	22.5	23.5	10.0	8.7	7.4	13.0	3.1	
「参加体験あり」層		1,227	63.8	48.2	17.3	19.9	36.2	16.0	44.7	33.7	30.0	25.8	10.0	9.5	7.7	13.7	3.9	
「未経験」層		18,382	70.1	41.2	9.5	13.7	27.8	6.8	46.5	33.9	28.5	19.9	5.6	6.6	6.3	11.7	11.4	

以上のクロス集計結果と、「①単純集計の結果について」で示した回答者の年齢・性別とのクロス集計の結果も踏まえ、香道の「経験あり」「参加体験あり」「未経験」、それぞれの回答者の特徴や傾向は以下のとおりになる。

1）香道を経験したと回答した者の傾向

男女別で見た場合、女性の方が男性よりも経験者の総数がやや多く、年齢別で見た場合、18～20代が最も多く、次いで30代、70代以上と続いている。

次に経験者は、子供の頃の習い事として伝統的な文化に係る分野を習っていたと回答している者が多く、また、趣味・娯楽等の活動に積極性があり尚かつ伝統的な文化に係る趣味への嗜好性の高さがうかがえる。消費行動への意識については、チャンスと感じたら逃したくないという意識が強くあり、周りとの協調や一体感を大事にする価値観を持っている者が全体平均と比べると多い傾向が見える。普段のメディア接触についてはCATVやラジオ、雑誌のメディア媒体への接触率が高い傾向にあるといえる。

2）香道を参加体験したと回答した者の傾向

男女別で見た場合、女性の方が男性よりも参加体験者の総数が多いのが特徴の一つといえる。また、年齢別で見た場合、70代以上が最も多く、次いで18～20代、30代と続く。

次に、子供の頃の習い事の経験があるとの回答比率が高い傾向にあり、趣味・娯楽等の活動

に対して積極的な傾向にあるが、伝統的な文化への関わりは香道の経験者と比べると薄い傾向がうかがえる。

消費行動への意識については、チャンスと感じたら逃したくないという嗜好性は香道の経験者と同じ傾向にある一方で、自分の考えに基づき物事を判断したいと考え、家族や知人、困っている人の役に立ちたいという傾向が参加体験者にはうかがえる。また、普段のメディア接触については、NHK の地上波放送や BS 放送、新聞や雑誌、紙の書籍等、普段から幅広くメディアに接触している傾向にある。

3) 香道を未経験と回答した者の傾向

男女別、年齢別等では顕著な特徴は見られなかった。

子供の頃の習い事の経験については、全体平均の回答比率よりも低い傾向にあり、経験者や参加体験者と比べると低調といえる。また、趣味・娯楽等の活動に対して、特に何もしていないという回答比率が全体平均をやや上回っており、趣味・娯楽等の活動に対して積極的な傾向があるとは言い難い。

消費行動への意識については、当てはまるものはないという回答比率が全体平均をやや上回っているが、特徴的な傾向は見られない。また、メディア接触については、いずれのメディアとも接触率があまり高い傾向にあるとはいえない。

未経験者の傾向と特徴

次に、上記の属性分析を踏まえ、「経験あり」「参加体験あり」「未経験」、それぞれの回答者ごとに設けた設問の回答結果についてクロス集計を行い、回答者の特徴について更なる分析を行う。

はじめに、「未経験」と回答している者について分析を行う。上述の回答者属性に関する分析結果からは、「未経験」と回答した者については際立った特徴や傾向は見いだせなかった。加えて、今後の振興施策を考える上で、「未経験」と回答した者が、香道をなぜ経験してこなかったのか、また、香道を経験することに対してどのような意識を持っているのか、どのような体験方法や周知の実施をすれば参加体験等に繋げていく可能性を見いだすことができるのか、その検討のために分析を行う必要がある。

■未経験層の体験機会への参加意向

未経験と回答した者のうち、香道を体験してみたいという意向を持つ回答者、体験意向がない回答者にはどのような特徴があるのか。趣味・娯楽等の活動内容、消費意識、メディア接触の設問とBQ16「参加してみたい香道の体験内容」とのクロス集計を行い、回答者の特徴について分析を行う。BQ16では、体験内容として設定した選択肢には当てはまるものはないと59.0%が回答しており、残りの41.0%は、体験内容によっては香道の体験に参加してみたいという意向を持っていると推察される。

まず、香道の体験に参加してみたいとの意向を示した回答者について、クロス集計結果からその特徴を確認する。趣味・娯楽等の活動とのクロス集計結果からは、「上記の中で当てはまるものはない」を除き、ほとんどの項目で全体平均と同じ程度の回答比率を示していることから、これらの活動に対して決して消極的ではないと推察される。

消費行動に対する価値観とのクロス集計結果を見ると、ほとんどの項目で、全体平均を上回る回答比率を示しており、明確な意見や嗜好性があることがうかがえる。この傾向は「参加体験あり」と回答した者の消費行動に対する価値観と近似している部分があり、家族や知人、困っている人の役に立ちたい、面白いものと思ったものは試してみたい、といった項目が合致している。

普段からのメディア接触とのクロス集計結果を見ると、消費行動に対する価値観と同じく、「参加体験あり」と回答した者と近似した傾向、つまり、普段から幅広くメディアに接触している傾向が見て取れる。

次に、香道の参加体験の意向がない者について、その特徴を確認する。BQ16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者は、趣味・娯楽等の活動について「特に何もしていない」(27.4%)と回答しており、消費行動に関する設問でも、メディア接触についても、当てはまらない、特にしていないという選択肢を選ぶ割合が高い。このように、香道の参加体験の意向がない者の特徴として、趣味・娯楽活動やメディアへの接触に必ずしも積極的とはいえず、消費についての意識・意見をあまり明確に持っていない傾向が確認できる。

■参加したい体験機会別に見た参加条件

B Q 16「参加してみたい香道の体験内容」の各種の参加体験とB Q 17の「参加しやすい香道の体験条件」の関係を見ると、B Q 16「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者では「わからない」が83.5%とほとんどを占める一方、実際に希望する体験機会がある者では、「わからない」という回答は極めて少ない。

希望する体験機会がある者での各参加条件への回答比率は、全体的に平均より非常に高くなっている。特に「行きやすい場所で体験できたら」、「手ごろな参加費で参加できたら」の2つについては、どの体験を希望した者でも、回答比率が60%台から70%台となっており、最重要の条件となっていることが分かる。また、「香木や香席で使う道具やしつらいを詳しく教えてくれる」体験機会を希望する者では、「わからない」を除く各条件における回答比率が、他の参加体験を希望する者に比べて高くなっており、実際に香道を行う際に必要な具体的知識・技を求める者であるほど、細かな参加条件まで気にする傾向があることが分かる。

参加してみたい香道の体験内容×参加しやすい香道の体験条件

		BQ17 参加しやすい香道体験の条件										(%)
		と家族や知人等、身近な人	行きやすい場所で体験できたら	手ごろな参加費で参加できたら	体験に必要な費用や道具が明瞭に示されれば	体験する時間帯や準備を整えられれば	初心者だけが参加できるような機会があれば	事前確認内容や雰囲気を作れるようであれば	指導者の教え方が分かりやすい	その他	わからない	
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全 体	18,382	17.3	27.4	26.7	10.0	5.2	16.3	10.1	7.9	0.8	51.8	
香席でのお香の聞き方や、基本的な作法等、客としての振る舞い方を教えてくれる	3,604	45.1	67.0	65.8	30.2	15.3	38.8	26.5	21.0	0.7	4.1	
香道の歴史や意義を教えてくれる	2,359	39.4	68.0	64.6	33.1	19.7	38.6	27.9	23.4	0.7	4.2	
香木や香席で使う道具やしつらいを詳しく教えてくれる	2,072	38.9	72.4	70.9	42.3	24.6	45.9	34.3	28.3	0.8	3.0	
普段の生活に応用した、香の楽しみ方を教えてくれる	4,364	36.5	61.4	61.3	25.8	14.4	41.9	28.3	21.9	0.7	5.8	
その他	50	14.0	26.0	28.0	18.0	16.0	24.0	16.0	8.0	54.0	22.0	
上記の中で当てはまるものはない	10,842	4.7	6.8	6.5	1.8	0.9	4.1	2.5	2.2	0.8	83.5	

■これまで香道を経験してこなかった理由と参加したい体験機会

B Q 18「香道を体験したことがない理由」を見ると、30.8%が香道をこれまで体験してこなかった理由として「そもそも知らなかった」と回答しており、回答比率が最も高い。また、「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」という回答比率も15.7%ある。一方、「興味がない」は22.9%、「自分の趣味と合わない」は26.1%である。

これを、B Q 16の香道の体験機会への参加意向との関係で見ると、B Q 16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者では、「興味がない」(29.3%)と「自分の趣味と合わない」(40.2%)が、「そもそも知らなかった」(26.6%)を上回っている。逆に、何らかの体験を希望した者では、「そもそも知らなかった」が全体平均より高く、一方で「興味がない」が10%台、「自分の趣味と合わない」が一桁台と対照的な結果になっている。

参加してみたい香道の体験内容×香道を体験したことがない理由

		BQ18 香道を体験したことがない理由								
		そもそも知らなかった	興味がない	所気や軽に体験できなかったような場	か参加する時間がとれない	あ体験できる場所や機会が	分体験できなかった詳しい内容が	心他の趣味や娯楽の方に	自分の趣味と合わない	その他
n=30以上で										
全体+10pt以上										
全体+5pt以上										
全体-5pt以下										
全体-10pt以下										
全体	n=									
香席でのお香の聞き方や、基本的な作法等、客としての振る舞い方を教えてくれる	18,382	30.8	22.9	15.7	2.7	8.4	4.0	6.0	26.1	0.5
香道の歴史や意義を教えてくれる	3,604	37.7	12.2	39.4	6.2	21.8	9.5	9.5	4.1	0.4
香木や香席で使う道具やしつらいを詳しく教えてくれる	2,359	34.0	12.1	40.7	8.9	23.8	11.4	10.8	4.7	0.3
普段の生活に応用した、香の楽しみ方を教えてくれる	2,072	32.4	10.3	42.9	9.9	27.6	14.1	11.3	4.3	0.6
その他	4,364	36.1	12.6	34.6	5.3	20.8	10.2	11.6	6.0	0.5
上記の中で当てはまるものはない	50	16.0	30.0	30.0	4.0	14.0	4.0	10.0	22.0	14.0
合計	10,842	26.6	29.3	3.9	0.7	1.7	1.2	3.6	40.2	0.5

■「未経験」層と「参加体験あり」層の香道へのイメージの違い

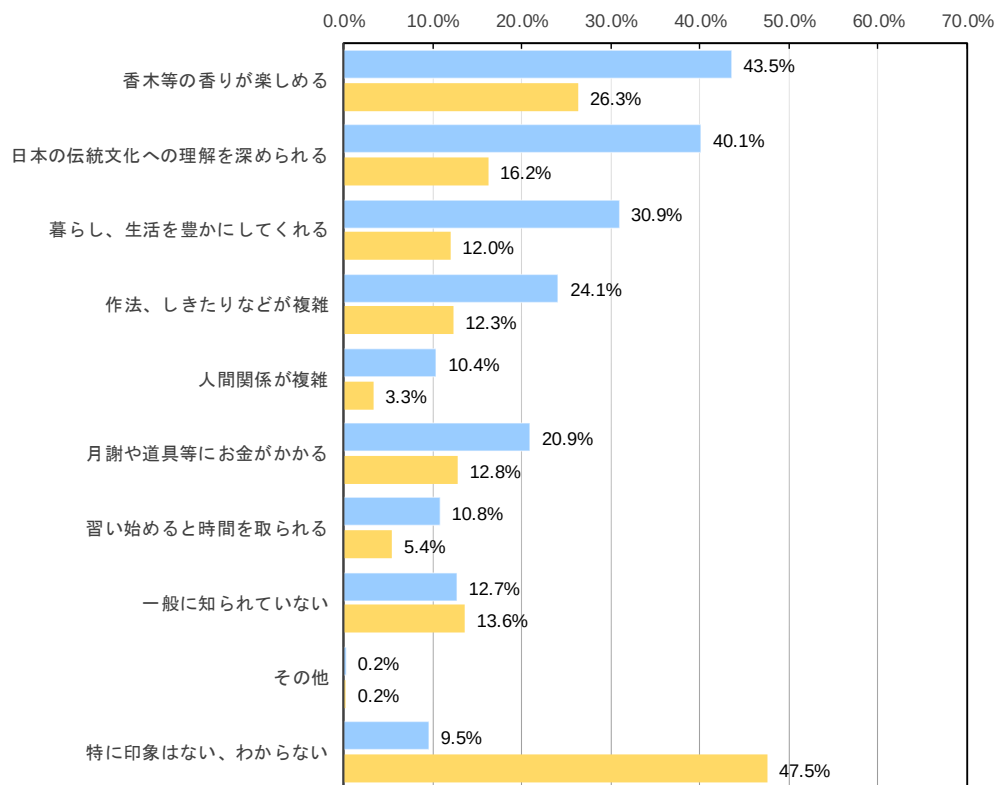
香道を未経験と回答した者が持つ香道へのイメージについて、B Q 19 の結果では、「特に印象はない、わからない」(47.5%)、「香木等の香りが楽しめる」(26.3%)、「日本の伝統文化への理解を深められる」(16.2%)、「一般に知られていない」(13.6%)、「月謝や道具等にお金がかかる」(12.8%)、「作法、しきたりなどが複雑」(12.3%)となっており、そもそも具体的なイメージを持っていない者が多い。この要因は、回答者が香道の未経験者であることから、具体的な内容や体験を経た上での印象を持っていないためと考えられる。また、香りを楽しめる、日本の伝統文化への理解を深めることができるとの、プラスイメージが先行している傾向が見られ、香りを楽しむ伝統的な文化であることを一定数が認識しているものと推察される。

下のグラフは、香道の参加体験をしたことがある者のイメージ（B Q 14）と未経験者のイメージ（B Q 19）の回答結果を比較したものである。

未経験者で最も回答比率が高かった「特に印象はない、わからない」の回答比率は、参加体験を行うことで大幅に減っている。また、参加体験をした者の方が「香木等の香りが楽しめる」、「日本の伝統文化への理解を深められる」の回答比率が高くなっているが、マイナスイメージの選択肢についても回答比率が高くなっていることが確認できる。

香道の参加体験をすることで、香道が持つ魅力はもちろんのこと、作法等の複雑さや時間や費用が掛かることも明確なイメージを描けるようになっていくことが分かる。

未経験者と参加体験者の香道に対する印象やイメージの違い



■ 学校の授業や職場の研修、イベント等で香会や香席に参加した経験はある (N=1,227)

■ 今まで経験したことはない (N=18,382)

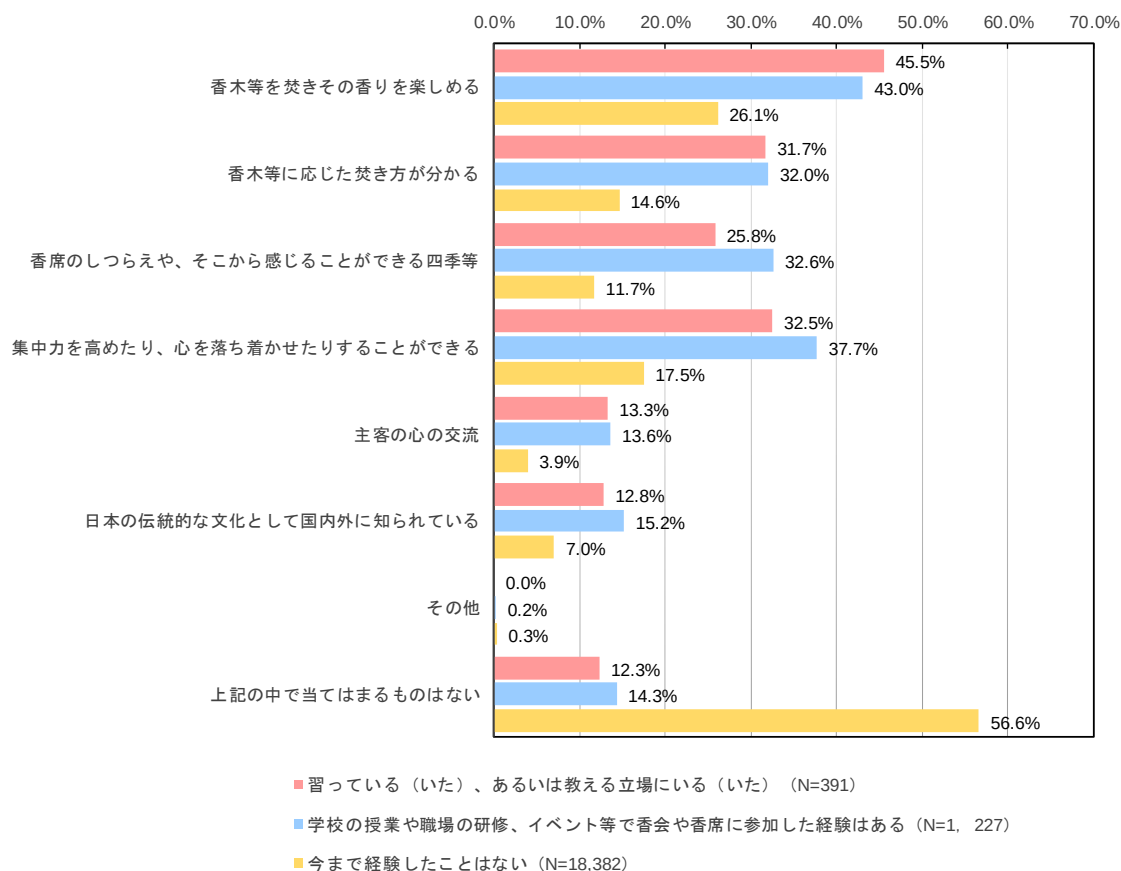
■ 「未経験」層と「参加体験あり」層、「経験あり」層の香道の魅力についての評価の違い

未経験者が香道に対する印象やイメージを具体的に描けないように、香道の魅力に対する設問 (B Q 8、B Q 15、B Q 20) にも同様の傾向が見られる。

下のグラフを見ても分かるように、香道未経験者の回答者の半数が、「上記の中で当てはまるものはない」(56.6%)と回答し、経験者と参加体験者の場合の回答比率と比較しても大きな差がある。

このことは他の魅力についてもいえ、参加体験者と未経験者を比較すると「香木等に応じた焚き方が分かる」、「香席のしつらえや、そこから感じることができる四季等」の回答比率に大きな差が見られることから、イメージや印象と同じく実際に体験をすることの重要性がうかがえる。

各回答者における香道に対する興味関心や魅力の違い



上記のクロス集計の結果から、香道を未経験と回答した者の特徴や傾向をまとめると、以下のとおりである。

1）香道に興味関心がある者の属性に関する傾向と特徴

香道を未経験であると回答した者のうち、参加体験の意向を示さない者が 59.0%いる一方、41.0%が体験内容に関する選択肢をいずれか選択しており、未経験者の中でも機会があれば参加したいという意向を持つ者がいる。

これら参加意向を示す者は、他の香道を未経験と回答した者と比べた場合、趣味・娯楽等の活動に対して消極的ではない者であり、消費行動への明確な意見を有し、普段から幅広いメディアに触れている傾向にある。ただし、香道の経験者と比べた場合、茶道や華道、邦楽などの日本の伝統的な文化への参加率はあまり高くないことから、趣味・娯楽の活動として伝統的な文化への接触はやや低い傾向にある。

2）未経験者が考える参加しやすい体験の条件と内容についての傾向と特徴

B Q16、B Q17 のクロス集計の結果から、未経験者のうち、参加体験をしたいとの意向を示した者の 50～60%が、行きやすい場所と手頃な参加費用の 2 点を参加体験の条件としてとりわけ重視している傾向が見えてくる。

また、B Q 16 と B Q 18 とのクロス集計の結果からは、体験できなかった事情・理由として「そもそも知らなかった」、「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」と回答し、参加体験の意向を持つ者の多くが、香道を知る機会や、体験する機会を得ることができなかったことが分かる。

3) 香道の印象や魅力に関する傾向と特徴

未経験者の場合、香道に対する印象や魅力について、未経験であるが故に、具体的なイメージや魅力は分からないという当然の結果が導かれた。その点を踏まえて、経験者や参加体験者との印象や魅力への回答の差を見ると、参加体験や経験を重ねることで、具体的な印象やイメージ、魅力を描くことができるようになること、また、経験を重ねた者ほど、香りを楽しむことや、心を落ち着かせる、香木の焚き方が分かるといった、香道の持つ意義などの具体的な行為や意味等と魅力が結びつけられるようになっている。

		BQ9香道を体験したきっかけ									
		親が習っていた	親や兄弟姉妹、祖父祖母などが教えていた	友人、知人などから勧められた・誘われた	学校や、香や香木を扱う店（香舗）や文芸施設等で行われた	テレビや映画、雑誌等で知った	趣味や教養として、香道に興味関心があった	香道に係る仕事や職業に興味関心があった	野の趣味・習い事との関係	自分が行っている別の関係	その他
n=30以上で											
全体+10pt以上											
全体+5pt以上											
全体-5pt以下											
全体-10pt以下											
n=											
全 体	1,227	11.9	11.4	23.0	36.2	13.6	16.5	5.1	12.8	2.5	
教室や稽古場、香や香木を扱う店（香舗）等で開かれた体験会	250	26.8	14.4	23.6	42.0	14.0	23.6	6.0	9.6	1.2	
学校の授業や職場の研修会	303	15.5	23.4	25.7	47.2	12.9	12.2	5.9	6.6	1.0	
学校や職場の部活動、同好会やサークルが行った体験イベント	326	9.8	16.0	32.5	52.8	18.4	18.4	6.4	4.6	0.6	
文化施設等で行われた体験イベント	360	11.1	10.6	29.7	44.7	19.7	19.7	7.2	6.9	0.6	
自宅	94	31.9	23.4	21.3	18.1	19.1	33.0	13.8	18.1	2.1	
自分が行っている別の分野の趣味・習い事の中で体験	187	5.9	8.0	16.0	15.0	8.0	19.3	6.4	52.4	3.2	
その他	30	6.7	3.3	10.0	10.0	20.0	6.7	-	6.7	53.3	

■香道を習いやすい状況

香道を習いやすい状況（B Q11）に関する設問の結果では、通いやすい場所（42.7%）、費用の手頃さ（37.9%）の2つが重視されている条件となっている。一方、香道に支払える月額費用（B Q12）を見ると、「5,000 円未満」（55.1%）、「5,000 円以上～10,000 円未満」（23.1%）と続き、回答者の78.2%が1万円未満の費用であれば習いやすいと回答している。

B Q11 と B Q12 のクロス集計の結果を見ると、「5,000 円未満」を選択した者の中では、習いやすい状況として「わからない」を選択している者が全体平均55.1%を大きく上回っているほか、時間帯の調整や教本等の有無、カリキュラムの提示と言った回答項目は平均を下回っている。

一方、「5,000 円以上～10,000 円未満」（23.1%）と回答した者の場合、通いやすい場所（28.6%）が平均を上回っているほか、費用や時間帯、カリキュラムの提示の項目で平均を少し上回っていることが分かる。

香道を習いやすい状況×香道に支払える月額費用

		BQ12香道に支払える月額費用 (%)										
		5 0 0 0 0 円 未 満	1 5 0 . 0 . 0 0 0 0 0 0 円 未 満	1 1 5 0 0 . 0 0 0 0 0 0 円 未 満	2 1 0 5 0 . 0 0 0 0 0 0 円 未 満	2 2 5 0 0 . 0 0 0 0 0 0 円 未 満	3 2 0 5 0 . 0 0 0 0 0 0 円 未 満	3 3 5 0 0 . 0 0 0 0 0 0 円 未 満	4 3 0 5 0 . 0 0 0 0 0 0 円 未 満	4 4 5 0 0 . 0 0 0 0 0 0 円 未 満	5 4 0 5 0 . 0 0 0 0 0 0 円 未 満	5 0 0 0 0 円 以 上
n=												
全 体	1,227	55.1	23.1	8.5	5.3	2.9	1.6	1.1	0.7	0.3	0.2	1.1
家族や知人等、身近な人から習えたら	222	59.9	22.1	6.8	5.0	2.7	2.7	-	-	-	-	0.9
通いやすい場所で習えたら	524	51.7	28.6	8.8	5.3	2.5	1.9	0.6	-	-	-	0.6
費用が手頃だったら	465	55.1	24.9	9.2	4.7	2.2	1.9	0.9	0.4	0.4	-	0.2
必要な道具等が借りられたら	299	52.5	22.7	8.7	6.4	4.0	2.7	1.7	0.7	-	-	0.7
習う時間帯を調整してもらいやすかったら	214	38.8	27.1	9.8	8.9	6.1	4.7	2.3	1.4	0.5	-	0.5
指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていたら	195	48.7	25.6	9.2	6.2	3.6	4.6	0.5	-	1.0	0.5	-
指導で教本やテキストを使っていたら	79	41.8	17.7	13.9	2.5	5.1	5.1	2.5	5.1	1.3	2.5	2.5
その他	8	75.0	25.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
わからない	199	80.4	14.1	0.5	-	0.5	0.5	1.0	0.5	-	-	2.5

※n=30未満は参考値のため灰色

次に、香道をこれまで習っていない理由（B Q13）に関する設問の結果では、「通いやすい場所に稽古場や教室がなかった」（34.3%）が最も多く、次いで「興味がなかった」（27.5%）、「習うための十分な時間が取れなかった」（18.4%）、「他の趣味や娯楽の方に心が向いている」（17.1%）と続く。では、習いたいと考えている者は、どのような状況であれば習いやすいと考えている傾向が見られるのか。B Q11 の習いやすい状況とのクロス集計を行い、参加体験者が習いやすい状況について分析を行う。

習いやすい状況について「わからない」（16.2%）と回答した者のうち、習わなかった理由で回答比率が高いものが、「興味がなかった」（34.3%）、「自分の趣味と合わない」（32.6%）の回答比率が高く、香道の体験をしても興味関心を持てなかったことが分かる。

一方、参加しやすい状況として、「通いやすい場所で習えたら」（42.7%）と回答した者が習ってい

ない理由として「通いやすい場所に稽古場や教室がなかった」(66.7%)が最も多く、次いで「稽古場や教室の雰囲気に分からなかった」(64.8%)、「習うための十分な時間が取れなかった」(58.4%)と続き、身近な場所で習いたいと思う一方で、教室が近くになかったり、雰囲気が分からなかったり、時間の確保が難しかったり等の事情が見える。「費用が手頃だったら」(37.9%)と回答した者の場合は、「稽古場や教室等の雰囲気が分からなかった」(60.0%)の回答比率が高く、次いで「カリキュラムの内容や必要となる費用等の十分な情報が明示されていなかった」(58.3%)、「習うための十分な時間が取れなかった」(57.5%)と続いている。

クロス集計の結果を見る限り、回答者にとって香道を習いやすい状況とは、香道を習わなかった事情や理由と密接な関係があり、通える場所や時間、習う内容や教室等の雰囲気がいった部分が、習い始める時に参加体験者にとってのハードルになりやすくなっている傾向が見える。

香道を習っていない理由×香道を習いやすい状況

		BQ11香道を習いやすい状況 (%)									
		家族や知人等、身近な人から習えた	通いやすい場所で習えた	費用が手頃だったら	必要な道具等が借りられ	習う時間や場所を調整しても	指導方法や具体的指示を	指導で教材やテキストを	その他	わからない	
n=30以上で											
全体+10pt以上											
全体+5pt以上											
全体-5pt以下											
全体-10pt以下											
n=											
全 体		1,227	18.1	42.7	37.9	24.4	17.4	15.9	6.4	0.7	16.2
興味がなかった		338	20.7	29.6	26.9	14.8	8.0	12.1	4.4	1.2	34.3
通いやすい場所に稽古場や教室がなかった		421	18.3	66.7	52.5	32.3	23.8	18.3	7.6	0.5	5.0
習うための授業料等の費用が確保できなかった		200	18.0	46.5	55.5	39.0	30.0	19.0	7.5	0.5	4.0
習うための十分な時間が取れなかった		226	23.0	58.4	57.5	40.3	36.7	25.2	8.8	0.4	2.7
カリキュラムの内容や必要となる費用等の十分な情報が明示されていなかった		127	18.9	50.4	58.3	40.9	39.4	36.2	15.7	-	2.4
稽古場や教室等の雰囲気が分からなかった		105	16.2	64.8	60.0	47.6	38.1	34.3	11.4	-	6.7
習う内容についていけるかどうか不安がある		113	23.0	57.5	46.0	38.9	33.6	28.3	15.0	-	8.0
他の趣味や娯楽の方に関心が向いている		210	23.3	48.6	45.7	30.0	19.5	24.3	10.5	0.5	16.2
自分の趣味と合わない		89	25.8	16.9	21.3	14.6	11.2	18.0	11.2	2.2	32.6
その他		12	16.7	58.3	58.3	33.3	25.0	16.7	8.3	16.7	16.7

※n=30未満は参考値のため灰色

上記のクロス集計の結果から、香道の参加体験ありと回答した者の特徴や傾向をまとめると、以下のとおりである。

1) 参加体験者の体験機会ときっかけの傾向と特徴

BQ9とBQ10のクロス集計結果の分析から、学校や職場、文化施設で開かれていたイベントをきっかけとして香道を体験した者が多い傾向にある。他方、親族が香道を習ったり、教えていたりした場合や、興味関心があって香道をした場合、自宅や稽古場・教室が体験機会の場になっており、体験のきっかけの違いによって、体験する機会や場が異なる傾向にあることが分かる。また、学校や職場等での体験イベントが香道を知り・体験する場としての位置は大きいことから、香道に関する担い手の活動の場ともなっていると推察される。

2) 参加体験者が考える習いやすい状況や内容についての傾向と特徴

参加体験者が香道を習いやすい状況や内容について、月に支払える費用と習いやすい状況とのクロス集計結果からは、月額費用として 5,000 円以上を支払うと回答した者ほど、習いやすい具体的な状況について回答している傾向にあり、香道を習っても良いと考える者と捉えることができる。

習っていない理由と習いやすい状況とのクロス集計結果からは、参加体験をしても香道に興味を持てなかった者が一定数いる一方で、興味関心があっても通える場所がない等の事情があることが分かる。加えて、習うための時間の確保や、習う場所の雰囲気が分からない等も回答として多く、参加体験者にとって、習う内容や機会に関する詳しい情報があつた方が、習い始めやすいと考えていることが、回答結果の分析からうかがえる。

経験ありと回答した者の傾向と特徴

経験ありと回答した者の回答傾向について分析を行う。経験者がどのような経緯や場所で香道を習い始め、どの程度の者が継続してきたのかを分析することで、参加体験者と未経験者との違いを明らかにする。

■始めたきっかけと継続性及び継続理由

香道を習い始めたきっかけ（BQ1）の結果では、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（31.2%）が最も高く、次いで「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」（25.3%）、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（22.3%）、「趣味や教養として、香道に興味関心があった」（21.5%）と続いている。香道の経験ありと回答した者の身近には、香道に関わる者がいたり、香道に関する情報やイベントがあったりしたことで、香道を習い始めるきっかけが生み出される背景があったことが推察される。

次に、習い始めたきっかけ（BQ1）と現在の継続状況（BQ3）についてクロス集計を行い、始めたきっかけと継続率の関係を分析する。継続率の全体平均（46.0%）に対し、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（73.6%）、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（67.2%）の回答者の継続率は、全体平均を上回っている。反対に、非継続率の全体平均（54.0%）を比べると、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」（78.2%）が平均を大きく上回っていることから、親族などが香道に関わっていることをきっかけとして習い始めた回答者の方が、継続率が高い傾向にある。反対に、自分の趣味との関わりの中で香道を習い始めた者は、何らかの理由で継続できていない傾向にあることが分かる。

香道を習い始めたきっかけ×現在の継続状況

		(%)	
		BQ3 活動の継続	
		続けている	続けない
n=30以上で			
全体+10pt以上			
全体+5pt以上			
全体-5pt以下			
全体-10pt以下			
	n=		
全 体	391	46.0	54.0
親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた	122	67.2	32.8
親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた	87	73.6	26.4
友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた	99	49.5	50.5
学校の授業や、香や香木を扱う店（香舗）での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した	72	55.6	44.4
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	47	55.3	44.7
趣味や教養として、香道に興味関心があった	84	42.9	57.1
香道に係る仕事や職業に興味関心があった	28	64.3	35.7
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	55	21.8	78.2
その他	10	10.0	90.0

※n=30未満は参考値のため灰色

また、「日本の文化だから」と回答した者の場合は、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」(73.4%)の回答比率が全体平均を大きく上回っているほか、「友人・知人などからの習うことを勧められた・誘われた」(61.2%)、「学校の授業や、香や香木を扱う店(香店舗)での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した」(60.0%)、「趣味や教養として、香道に興味関心があつた」(58.3%)も上回っている。

一方、「当初目標としていたことが達成できた」（11.8％）と回答した者のうち、「学校の授業や、香や香木を扱う店（香舗）での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した」（25.0％）をきっかけとした回答比率が高い。

親族が香道と関わりを持っていたことをきっかけに習い始めた者の場合、習う場所等の確保はしやすい一方で、時間がなくなったりするほか、一緒に活動する者が辞めてしまったことも、香道から離れてしまう要因となっている。一緒に活動する者が辞めてしまったことで、継続できなくなったという理由は、友人・知人からの勧めで香道を習い始めた者も同じ傾向が見られるほか、習う場所がなくなってしまうことも継続できなくなった理由として回答比率が高いことが分かる。

香道を習い始めたきっかけ×香道から離れたきっかけや理由

		BQ3補問2 香道から離れたきっかけ										(%)
		時間がなくなった	近くに習う場所がなくなった	当初目標としていたことが達成できなかった	興味を失った	経済的に続けるのが難しい	健康面、体調面で続けるのが難しい	一緒に活動する家族や友人等が辞めてしまった	習っている内容について	指導者や教授者を引退した	その他	
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
全 体	n=	211	36.0	25.6	11.8	17.1	7.1	3.8	9.5	6.6	8.1	5.2
親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた	40	55.0	17.5	7.5	15.0	7.5	2.5	15.0	5.0	-	-	-
親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた	23	39.1	34.8	30.4	13.0	13.0	13.0	8.7	-	13.0	-	-
友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた	50	46.0	38.0	14.0	20.0	6.0	8.0	16.0	2.0	10.0	-	-
学校の授業や、香や香木を扱う店（香舗）での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した	32	25.0	37.5	25.0	18.8	12.5	-	9.4	3.1	9.4	6.3	6.3
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	21	23.8	28.6	14.3	28.6	4.8	-	4.8	4.8	-	14.3	14.3
趣味や教養として、香道に興味関心があった	48	31.3	29.2	16.7	14.6	6.3	4.2	14.6	10.4	4.2	4.2	4.2
香道に係る仕事や職業に興味関心があった	10	20.0	-	30.0	10.0	-	20.0	10.0	10.0	20.0	-	-
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	43	37.2	25.6	9.3	14.0	2.3	-	14.0	9.3	11.6	7.0	7.0
その他	9	22.2	11.1	-	-	11.1	-	-	11.1	11.1	44.4	44.4

※n=30未満は参考値のため灰色

以上のようなクロス集計の結果からは、親族などが香道に関わっていることをきっかけとして香道を習い始めた者については、継続性が高い傾向にあり、とりわけ親族が習っていたことをきっかけに香道を習い始めた者の場合、自身が教授者として活動しているか、今後教授者として活動しようと考えている傾向が見られる。

一方、イベントでの体験やメディアを通じて、香道を習い始めた者については、継続性は決して低くはないが、継続できなかった者については、習う場所がなくなってしまうたり、時間がなくなったりと、継続できる環境が失われてしまったことが確認できる。

■活動内容

香道に関する活動内容（BQ5）の結果では、「教室や稽古場で習っている（いた）」（50.1％）が半分を占め、次いで「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」（30.2％）、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」（27.9％）と続く。

まず、活動内容（BQ5）と現在の継続状況（BQ3）についてクロス集計を行い、活動内容と継

続率の関係を分析する。このうち継続していると回答した者（46.0%）の中で、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」（67.8%）が最も回答比率が高く、次いで「指導者や教授者として教えている（いた）」（58.8%）、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」（56.0%）と続く。

香道に関する活動内容×現在の継続状況

		(%)	
		BQ3 現在の継続状況	
		続けている	続けない
n=30以上で			
全体+10pt以上			
全体+5pt以上			
全体-5pt以下			
全体-10pt以下			
n=			
全 体	391	46.0	54.0
教室や稽古場で習っている(いた)	196	48.0	52.0
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	118	67.8	32.2
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	109	56.0	44.0
指導者や教授者として教えている(いた)	34	58.8	41.2
その他	21	14.3	85.7

※n=30未満は参考値のため灰色

次に、活動内容（BQ5）と経験年数（BQ4）についてクロス集計を行い、関係性を分析する。教室や稽古場、あるいはカルチャーセンターでの受講している者の場合、1年未満との回答比率は平均以下であるが、その他の回答比率は平均を少し上回る回答比率となっており、教室や稽古場では20年以上習い続けている者も確認できる。

また、経験年数が「20年以上」（6.1%）と回答した者のうち、「指導者や教授者として教えている（いた）」（26.5%）と全体平均を大きく上回っているほか、「3～5年未満」（19.9%）でも「指導者や教授者として教えている（いた）」（38.2%）が大きく上回る回答比率となっている。

香道に関する活動内容×香道を続けている年数

		(%)						
		BQ4 香道を続けている年数						
		1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上	3年以上合計
n=30以上で								
全体+10pt以上								
全体+5pt以上								
全体-5pt以下								
全体-10pt以下								
n=								
全 体	391	27.6	24.8	19.9	12.5	9.0	6.1	47.6
教室や稽古場で習っている(いた)	196	26.0	25.0	17.3	14.8	9.2	7.7	49.0
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	118	17.8	29.7	22.9	16.1	10.2	3.4	52.5
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	109	21.1	23.9	24.8	11.9	11.9	6.4	55.0
指導者や教授者として教えている(いた)	34	11.8	2.9	38.2	2.9	17.6	26.5	85.3
その他	21	52.4	14.3	4.8	4.8	19.0	4.8	33.3

※n=30未満は参考値のため灰色

活動内容（BQ5）と活動頻度（BQ6）についてクロス集計を行い、関係性を分析する。「ほぼ毎日」（13.8%）と回答した者のうち、「指導者や教授者として教えている（いた）」（26.5%）が全体平均を大きく上回っているほか、「教室や稽古場で習っている（いた）」（19.9%）と高い。一方、「週に2～3回」（13.8%）と回答した者では、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」（23.7%）、「指導者や教授者として教えている（いた）」（20.6%）の項目への回答比率が高い。また、「週1回程度」（23.3%）と回答した者では、同好会やサークルでの活動（30.3%）、カルチャーセンターでの受講（28.8%）の回答比率が高いほか、指導者や教授者としての活動（8.8%）は著しく低い。

このように、指導者や教授者として活動している者の場合、ほぼ毎日か週に2～3日程度の活動頻度であり、教室や稽古場で習っている者もほぼ毎日の回答比率が高い傾向にあることから、稽古場や教室での活動状況の傾向がうかがえる。

香道に関する活動内容×香道に関する活動頻度

		BQ6 香道に関する活動頻度 (%)						
		ほぼ毎日	週に2～3回	週1回程度	月数回程度	月1回程度	年数回程度	年1回程度
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下								
活動内容	n=							
全 体	391	13.8	13.8	23.3	17.4	14.1	6.4	11.3
教室や稽古場で習っている(いた)	196	19.9	13.3	21.4	18.4	15.3	4.6	7.1
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	118	11.9	23.7	28.8	16.1	9.3	6.8	3.4
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	109	13.8	11.9	30.3	11.9	15.6	7.3	9.2
指導者や教授者として教えている(いた)	34	26.5	20.6	8.8	20.6	8.8	2.9	11.8
その他	21	9.5	4.8	9.5	-	-	14.3	61.9

※n=30未満は参考値のため灰色

活動内容（BQ5）と毎月使う費用（BQ7）についてクロス集計を行い、関係性を分析する。

「5,000 円未満」（42.5%）と回答した者のうち、「教室や稽古場で習っている（いた）」と回答した者以外の項目は、全体平均を下回っている。

次に 5,000 円以上の月額費用を払っている場合を見ると、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」は、「5,000 円未満」「40,000 円以上～45,000 円未満」以外の費用で全体平均を上回っている。一方、「教室や稽古場で習っている（いた）」と回答している者の費用は「5,000 円未満」（43.9%）、「5,000 円以上～10,000 円未満」（20.9%）、そのほかは 35,000 円以上 50,000 円未満の各項目で平均を少し上回っていることが確認できる。

香道に関する活動内容×香道に関する月額費用

n=30以上で

全体+10pt以上

全体+5pt以上

全体-5pt以下

全体-10pt以下

5

1 5

1 1

2 1

2 2

3 2

3 3

4 3

4 4

5 4

5

合 1

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

計 0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

円

円

円

円

円

円

円

円

円

円

円

円

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

以上

満

上

上

上

上

上

上

上

上

上

上

以上

n=

全 体	391	42.5	18.4	14.3	7.2	5.4	3.8	2.3	1.0	1.0	0.8	3.3	39.1
教室や稽古場で習っている(いた)	196	43.9	20.9	11.7	6.6	4.6	2.0	2.6	1.5	1.5	1.5	3.1	35.2
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	118	26.3	18.6	19.5	11.0	6.8	7.6	3.4	1.7	-	0.8	4.2	55.1
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	109	33.9	11.9	16.5	10.1	9.2	5.5	3.7	1.8	1.8	-	5.5	54.1
指導者や教授者として教えている(いた)	34	17.6	17.6	14.7	8.8	14.7	-	5.9	-	-	-	20.6	64.7
その他	21	81.0	9.5	4.8	-	-	-	-	-	-	-	4.8	9.5

※n=30未満は参考値のため灰色

※n=30未満は参考値のため灰色

■経験年数

香道を続けている年数（BQ4）の結果では、「1年未満」（27.6 %）の回答比率が最も高く、次いで「1～3年未満」（24.8%）、「3～5年未満」（19.9%）と続いている。

経験年数（BQ4）と習い始めたきっかけ（BQ1）のクロス集計を行い関係性について分析する。「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（22.3%）を回答した者のうち、「3～5年未満」（33.3%）が平均を大きく上回っているほか、「趣味や教養として、香道に興味関心があった」（21.5%）において「10～20年未満」（48.6%）も大きく全体平均を上回っている。

きっかけとして、親族が香道を習っていたり教えていたり、趣味や教養として興味関心があったと回答した者ほど、経験年数が長い傾向が見られる。

香道を続けている年数×香道を習い始めたきっかけ

		BQ1 香道を習い始めたきっかけ										(%)
		ど親 が 習 兄 弟 姉 妹 た、 祖 父 母 な	ど親 が 教 兄 弟 姉 妹 た、 祖 父 母 な	れこ と 友 人 を、 知 め 人 ら な れ ど た か ら 誘 習 わ う	れ験 を 会 イ、 の ベ 文 店 ン 化 へ 業 ト 施 香 や で 設 舗 、 体 等 ～ 香 験 で や し 行 の 香 た わ 体 木	知画 っ た ウ ビ エ や ブ 映 メ 画 デ 、 イ 雑 ア 誌 等 、 で 漫	に趣 興 味 や 関 心 が あ し つ て 、 香 道	興香 味 道 に 心 係 る あ 仕 つ 事 た や 職 業 に	し野 の 分 い 趣 が た 味 行 っ 習 て い い 事 と 別 関 の 係 分	そ の 他		
n=												
全体		391	31.2	22.3	25.3	18.4	12.0	21.5	7.2	14.1	2.6	
1年未満		108	31.5	8.3	17.6	11.1	10.2	12.0	1.9	15.7	6.5	
1～3年未満		97	22.7	23.7	27.8	22.7	9.3	16.5	6.2	11.3	-	
3～5年未満		78	25.6	33.3	33.3	20.5	14.1	21.8	7.7	7.7	1.3	
5～10年未満		49	38.8	26.5	26.5	20.4	18.4	28.6	10.2	12.2	2.0	
10～20年未満		35	40.0	25.7	22.9	22.9	8.6	48.6	14.3	20.0	-	
20年以上		24	54.2	29.2	25.0	16.7	16.7	29.2	16.7	33.3	4.2	

n=30以上で

全体+10pt以上

全体+5pt以上

全体-5pt以下

全体-10pt以下

※n=30未満は参考値のため灰色

次に経験年数（BQ4）と習い始めた当初の習い方を選んだ理由（BQ2補問）のクロス集計を行い関係性について分析する。「特に理由はない、わからない」（9.2％）では、「1年未満」（23.1％）が大きく全体平均を上回り、その他の項目は全て全体平均を下回っていることから、選んだ理由が特でない傾向が見える。そのほか、「10～20年未満」では、「通いやすい場所だった」以外の項目で全体平均を上回っている。

香道を続けている年数×当初の習い方を選んだ理由

		BQ2補問 その方法を選んだ理由										(%)
		家族や友人等と一緒に良かった	通いやすい場所だった	費用が手頃だった	道具等が借りられた	通いやすい時間帯だった	費用が指導致方法や器具に示されてい、た	本格的に習ってみたいだった	手軽に習ってみたかった	その他	特に理由はない、わからない	
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全 体	391	33.2	36.3	21.7	14.3	16.6	15.1	10.5	13.6	1.0	9.2	
1年未満	108	29.6	21.3	12.0	5.6	10.2	4.6	4.6	11.1	1.9	23.1	
1～3年未満	97	34.0	45.4	20.6	11.3	13.4	16.5	8.2	14.4	1.0	2.1	
3～5年未満	78	29.5	38.5	25.6	20.5	19.2	25.6	15.4	6.4	-	2.6	
5～10年未満	49	32.7	46.9	36.7	18.4	20.4	14.3	6.1	18.4	-	4.1	
10～20年未満	35	42.9	31.4	22.9	22.9	31.4	22.9	22.9	22.9	2.9	2.9	
20年以上	24	45.8	45.8	25.0	25.0	20.8	12.5	20.8	20.8	-	16.7	

※n=30未満は参考値のため灰色

経験年数（BQ4）と香道に関する興味関心や魅力（BQ8）のクロス集計を行い関係性について分析する。興味関心や魅力として最も回答比率が高かった「香木等を焚きその香りを楽しむ」（45.5％）を回答した者の中では、「1年未満」（53.7％）の経験年数の者が最も回答比率が高い。そのほか、「香席のしつらえや、そこから感じる事ができる四季等」（25.8％）では、「3～5年未満」（35.9％）、「香木等に応じた焚き方が分かる」（31.7％）では、「10年～20年未満」（48.6％）と平均を上回っている。

なお、回答比率があまり高くなかった「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」（12.8％）は、経験年数が長くなるにつれて回答比率が上がっている。経験年数に関わりなく、香木の香りを楽しむことが香道の魅力として捉えられている一方、経験年数が1年未満の者については、まだ魅力をとらえていないことが「上記の中で当てはまるものはない」（25.0％）の回答比率が全体平均より高いことからもうかがえる。

(%)

※n=30未満は参考値のため灰色

1) 習い始めたきっかけと継続率に見える傾向と特徴

一方、習い始めたきっかけと辞めてしまった理由との関係を見ると、親族が香道を習っていた者の場合は時間が確保できずに辞めている傾向が強く、友人・知人から勧められた者やイベント体験を通じて習い始めた者の場合は、習う場所がなくなってしまったために辞めざるを得なかった傾向にある。また、親族や友人・知人との関係性の中で習い始めた者の中では、一緒に習う人が辞めてしまった場合、自分も辞めてしまう場合があることが集計結果からうかがえる。

カルチャーセンターで香道を受講している者や、指導者・教授者として活動している者の経
験年数が高い傾向にあり、カルチャーセンターで受講している者は1年以上から10年未満、指
導者・教授者は3～5年未満や、10年以上の回答比率が高い傾向にある。また、教室や稽古場
で習っている者の継続率を見ると、経験年数5年以上で全体平均を少し上回っている。

211

率が高い傾向にあり、各活動内容による頻度の違いが見られる。また、月額費用についてはカルチャーセンターで受講している者の場合は10,000～15,000円未満、指導者・教授者として活動している者は20,000～25,000円未満の回答比率が高い傾向にある。

3) 経験年数と習い始めたきっかけや魅力から見える傾向と特徴

経験年数と習い始めたきっかけとの関係を見ると、親族等が香道を習っていたあるいは教えていた場合や、趣味や教養として興味があり香道を習い始めた者で経験年数が長い傾向が見られる。当初の習い方を選んだ理由については、経験年数10～20年未満の者で、通いやすい場所以外の項目で全体平均を上回っているほか、経験年数が1年未満の場合は、特に理由がないとの回答比率が高く、対照的な傾向が見られる。

経験年数と興味関心や魅力との関係を見た場合、香木を焚き香りを楽しむことについては、経験年数に関わりなく、魅力や興味関心として捉えられている。その一方で、主客の交流や伝統文化として国内外へ知られていること、香席のしつらいなどの項目は経験年数が長くなるほどに回答比率が高くなる傾向が見られ、逆に1年未満の場合は、当てはまるものがないとの回答比率が高く、経験を重ねていくことで、魅力や興味関心の捉え方が変化しているものと推察される。

③分析結果のまとめ

香道の経験・体験の有無や、経験者や参加体験者、未経験者の香道への活動状況や興味関心の度合いを把握することを目的としてウェブアンケートを利用した調査を実施した。

調査結果からは、香道の未経験者が圧倒的に多いことが分かった。未経験者が多いことについては、設問群の回答結果からも見えるように、興味関心が持てなかった、関心が向かない者がいる一方で、そもそも香道を知らなかった者が多くいることに注目する必要がある。また、香道を知っているが、気軽に体験できる場がなかった、あるいは体験できる場自体を知らなかったことで、参加体験には至らなかった者もいることが明らかになった。

一方で、経験者や参加体験者の場合は、香道について知る機会や体験をする場に接する機会があったことから、香道を体験することができたことが分かる。経験者の場合、親族が香道を習ったり教えたりしていた、あるいは、友人・知人から勧められたことが習い始めるきっかけとして大きな要因になっている。また、参加体験者の場合は、学校や香舗、文化施設等での体験イベントをきっかけとして体験をしたとの回答比率が高く、経験者・参加体験者・未経験者のそれぞれに、香道を知る機会、接することができる機会や環境に大きな開きがあることが、調査結果の分析から見えてくる。

経験者の活動状況等については、約5割は継続していない状況で、継続している者については若い世代ほどに継続率が高く、経験年数が長いほどに継続している傾向にある。一方で、継続していない者が続けられなかった事情からは、時間がなくなった、習う場所がなくなった等の事情があることが傾向として見え、回答者の環境が整えば再開する可能性があることも推察される。

参加体験者の活動状況等については、参加体験をしたきっかけと体験した機会のクロス集計から、学校や香舗等で体験機会を得たという回答比率が高い傾向にあり、香道の指導者や教授者がこれらの場において、体験機会の醸成などを図っている事例もあることから、香道を参加体験する大きなきっかけとして作用していることが分かる。また、参加体験者がこれまで香道を習うに至らなかった理由や事情からは、参加体験をしても興味関心を持てなかった者もいる一方で、通いやすい場所や時間帯、教室や稽古場の雰囲気が分かるようであれば習いたいと考えている者がいることから、教室や稽古場を開いている指導者や教授者が、稽古の日時や調整が可能かどうかを告知したり、教室等を見学できる機会を設けたりするなど、無理のない範囲で工夫を行うことで、習いに行きたい人に広く機会を提供できる可能性があることが分かる。

上記の結果から、香道の経験者や参加体験者を増やしていくことを想定した場合、学校や香舗等での体験機会はもちろんのこと、香道を体験できるイベントなどを広く行うと共に、これらの体験機会自体を、新聞や雑誌あるいはインターネット等のメディアも扱いながら、広く周知する工夫を行うことで、香道そのものの一般への認知を高めつつ、経験者や参加体験者を増やす可能性を上げることができるものと考えられる。また、習うことができる場所の周知をはじめ、習う内容や時間帯など、習いたいと考えている者に適切に情報を伝えていくことも有効な取組として考えられる。

(3) 和装

本調査では、和装への興味関心や経験の有無等の把握を目的として2万人にウェブアンケート調査を実施した。

アンケートでは、和装を自分で着付けたことがある経験者、人に着付けてもらったことがある体験者、着物を着たことがない未経験者がいることが想定されることから、和装の経験・体験の有無について回答する設問を設けた。その上で、下記の表のように経験の深度に応じた専用の設問群を設けることで、各回答者の和装への興味関心の有無などの把握を行った。

■分野設問の項目

「1. 着物を自分で着付けている（いた）、あるいは人に着付けている（着付けたことがある）」と回答した者への設問	C Q 1：和装を習おうと思ったきっかけ C Q 2：和装を始めた当初の習い方 C Q 2 補問：当初の習い方を選んだ理由 C Q 3：現在の継続状況 C Q 3 補問 1：和装を続けている理由 C Q 3 補問 2：和装から離れたきっかけや理由 C Q 4：和装を続けている（続けていた）年数 C Q 5：自分又は他者へ着付けをする機会 C Q 5 補問：他者に着付けをしてもらう機会 C Q 6：和装をする頻度 C Q 7：和装に関する月額費用 C Q 8：和装に関する興味関心や魅力
「2. 自分で着物の着付けはできないが、人に着付けてもらって着ている（着たことがある）」と回答した者への設問	C Q 9：和装を体験したきっかけ C Q 10：和装を体験した場 C Q 11：和装を習いやすい状況 C Q 12：和装に支払える月額費用 C Q 13：和装を習っていない理由 C Q 14：和装に対する印象やイメージ C Q 15：和装に関する興味関心や魅力
「3. 今まで着物を着たことはない」と回答した者への設問	C Q 16：参加してみたい和装の体験内容 C Q 17：参加しやすい和装の体験条件 C Q 18：和装を体験したことがない理由 C Q 19：和装に対する印象やイメージ C Q 20：和装に関する興味関心や魅力

①単純集計の結果について

■全調査対象者への設問

着物を着たことがある者、全く着物を着たことがない者がどの程度いるのかを把握すると共に、自ら着付けることができるのか、あるいは人に着付けてもらって経験しているのか、どのような機会に着物を着ているのか、また、どのような点に着物の魅力や興味関心があるか等、これらの和装に関する現状の把握を行うため、本設問では、和装の経験の有無とあわせて、経験の深度を図る選択肢を設けて、実態の把握を行った。

和装の経験の有無

和装を「着物を自分で着付けている（いた）、あるいは人に着付けている（着付けたことがある）」（以下、「経験あり」）比率は11.0%（2,198人）、「自分で着物の着付けはできないが、人に着付けてもらって着ている（着たことがある）」（以下、「参加体験あり」）38.2%（7,642人）、「今まで着物を着たことはない」（以下「未経験」）は50.8%（10,160人）となった。

男女別では、女性の「経験あり」が17.3%、「参加体験あり」が55.5%と回答比率が高い一方、男性は「未経験」（75.4%）が高く、男女差が大きい。

また、年齢別では、年齢が高くなるにつれて「経験あり」、「参加体験あり」の回答比率が高くなる傾向がうかがえる。

			(%)		
			着物を自分で着付けている（いた）、あるいは人に着付けている（着付けたことがある）	自分で着物の着付けはできないが、人に着付けてもらって着ている（着たことがある）	今まで着物を着たことはない
n=					
性別	全 体	20,000	11.0	38.2	50.8
	男	9,645	4.4	20.2	75.4
	女	10,202	17.3	55.5	27.1
	それ以外／答えたくない	153	5.2	17.6	77.1
年齢	18～20代	2,781	6.4	31.4	62.1
	30代	2,691	5.4	33.3	61.4
	40代	3,496	5.6	32.8	61.7
	50代	3,178	7.1	37.8	55.1
	60代	3,002	11.6	45.1	43.3
	70代以上	4,852	22.8	44.8	32.4

集計表 F Q 3 : 和装の経験の有無

■「着物を自分で着付けている（いた）、あるいは人に着付けている（着付けたことがある）」と回答した者への設問（CQ1～CQ8）

本設問群では、着物を自ら着付けることができると回答した者が、どのようなきっかけや機会を着付けを習うようになったのか、どのような点に興味関心や魅力を感じているのか等の実態を把握するためのアンケートを実施した。

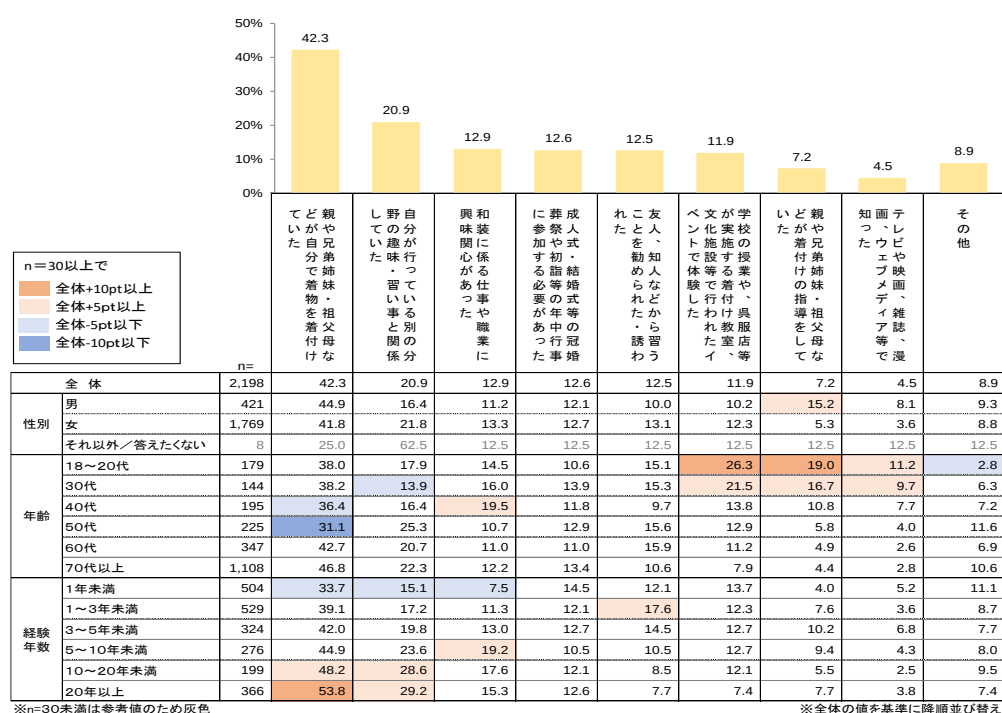
和装を習おうと思ったきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは「親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた」の42.3%で、次いで「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」20.9%、「和装に係る仕事や職業に興味関心があった」12.9%、「成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があった」12.6%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「親や兄弟姉妹・祖父母などが着付けの指導をしていた」（15.2%）が高い。

次に年齢別では、10～30代で「親や兄弟姉妹・祖父母などが着付けの指導をしていた」、「学校の授業や、呉服店等が実施する着付け教室、文化施設等で行われたイベントで体験した」、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」の回答比率が高い傾向が見られる。

経験年数別で見ると、「親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた」、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」については、経験年数が長いほど回答比率が高くなっている。



集計表 CQ1：和装を習おうと思ったきっかけ

（その他の内容）自分で着物を着たかった、仕事で着ていたから、和服（着物）が好き

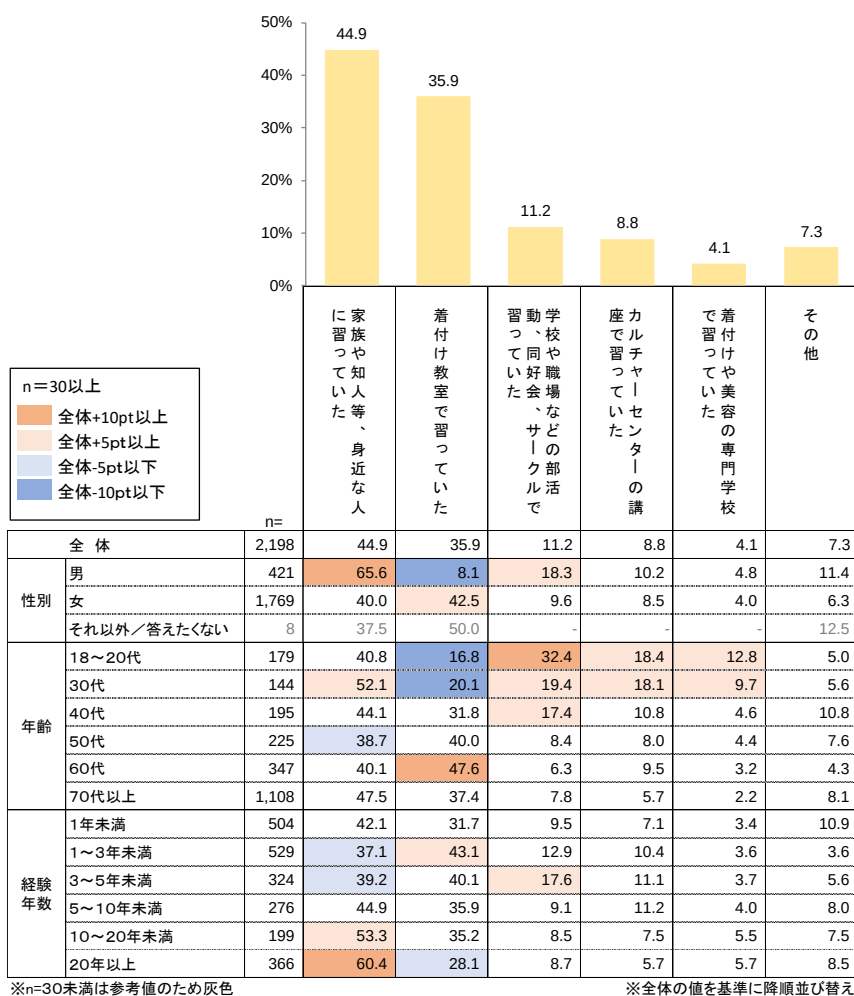
和装を始めた当初の習い方

全体平均で最も回答比率が高いのは「家族や知人等、身近な人に習っていた」の44.9%で、次いで「着付け教室で習っていた」35.9%、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた」11.2%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では男性で「家族や知人等、身近な人に習っていた」(65.6%)、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた」(18.3%)の回答比率が高く、「着付け教室で習っていた」(8.1%)が低い。一方、女性では「着付け教室で習っていた」(42.5%)の回答比率が高く、「着付けや美容の専門学校で習っていた」(4.0%)が低い。

次に年齢別では、10～30代で「学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた」、「カルチャーセンターの講座で習っていた」、「着付けや美容の専門学校で習っていた」の回答比率が高い傾向が見られる。

経験年数別では、年数が長いほど「家族や知人等、身近な人に習っていた」の回答比率が高くなっている。



集計表 C Q 2 : 和装を始めた当初の習い方

(その他の内容) 職場で習った、自力で覚えた、見よう見まね

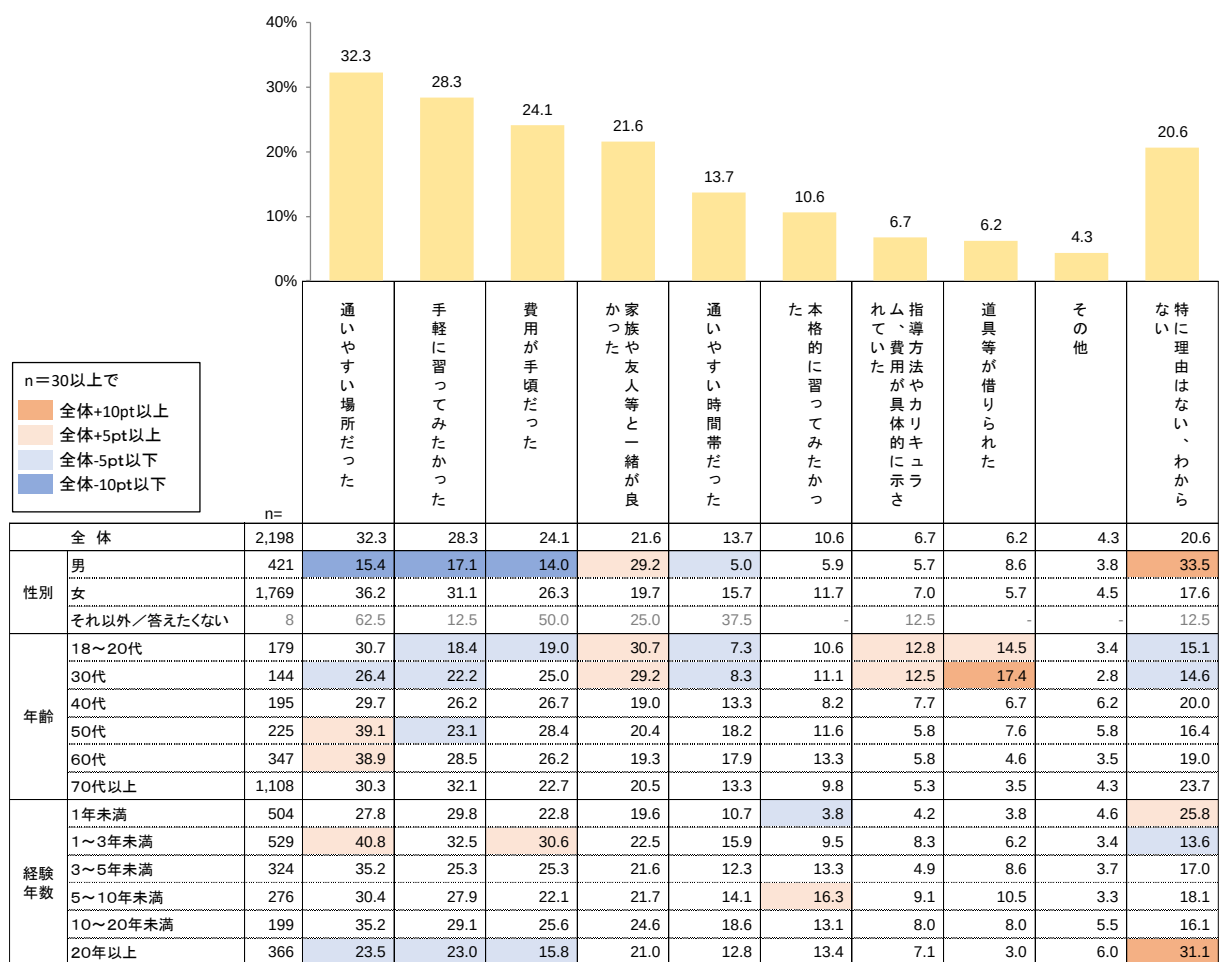
当初の習い方を選んだ理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「通いやすい場所だった」の32.3%で、次いで「手軽に習ってみたかった」28.3%、「費用が手頃だった」24.1%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では男性で「家族や友人等と一緒に良かった」(29.2%)が高く、「通いやすい場所だった」(15.4%)、「費用が手頃だった」(14.0%)、「手軽に習ってみたかった」(17.1%)、「通いやすい時間帯だった」(5.0%)が低い。

また、年齢別では「家族や友人等と一緒に良かった」、「道具等が借りられた」、「指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていた」で18～30代で回答比率が高い傾向が見られる。

経験年数別では、1～3年未満の者では「通いやすい場所だった」(40.8%)、「費用が手頃だった」(30.6%)の回答比率が高い一方、20年以上の者の回答比率は低い。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 CQ2補問：当初の習い方を選んだ理由

(その他の内容) アルバイト、仕事上で必要だった、習っていないけどいつの間にかできた、授業で習った

現在の継続状況

「現在も着付けを行っている」は 23.1% (507 人)、「現在は着付けを行っていない」は 76.9% (1,691 人) と、続けていないとの回答比率が高いことが分かる。

男女別で見た場合、男性で「現在も着付けを行っている」が 30.6%と高く、女性で 21.3%と低い。年齢別では年代が上がっていくに従って、継続率が下がっていく傾向が見られる。

経験年数別では、年数が長いほど「現在も着付けを行っている」の回答比率が高くなっている。

			(%)	
			現在も着付けを行っている	現在は着付けを行っていない
n=				
全 体		2,198	23.1	76.9
性別	男	421	30.6	69.4
	女	1,769	21.3	78.7
	それ以外／答えたくない	8	12.5	87.5
年齢	18～20代	179	45.8	54.2
	30代	144	43.1	56.9
	40代	195	28.2	71.8
	50代	225	26.2	73.8
	60代	347	21.6	78.4
	70代以上	1,108	15.7	84.3
経験年数	1年未満	504	7.5	92.5
	1～3年未満	529	13.0	87.0
	3～5年未満	324	18.2	81.8
	5～10年未満	276	26.4	73.6
	10～20年未満	199	36.7	63.3
	20年以上	366	53.3	46.7

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 C Q 3 : 現在の継続状況

和装を続けている理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「日本の文化だから」の36.1%で、次いで「四季や行事によって着物を着分けて装うことが楽しい」33.1%、「着物の着付け方や取り合わせ方など、奥深い文化をもっと知りたい」19.9%と続く。

全体平均の回答比率と、男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、男女別では、男性で「指導者や教授者として活動したい(している)」(36.4%)、「一緒に楽しむ仲間がいる」(28.7%)の回答比率が高く、「四季や行事によって着物を着分けて装うことが楽しい」(17.1%)が低い。また、女性では、「指導者や教授者として活動したい(している)」(11.4%)が少なく、「四季や行事によって着物を着分けて装うことが楽しい」(38.7%)が高い。

年齢別では10～30代で「指導者や教授者として活動したい(している)」、「一緒に楽しむ仲間がいる」、「着物の着付け方や取り合わせ方など、奥深い文化をもっと知りたい」という回答が多く、年齢が高いほど「四季や行事によって着物を着分けて装うことが楽しい」の回答比率が高くなる。

経験年数別では、年数が長いほど「指導者や教授者として活動したい(している)」という回答比率が低くなっている一方、「四季や行事によって着物を着分けて装うことが楽しい」の回答比率が高くなっている。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 CQ3補問1：和装を続けている理由

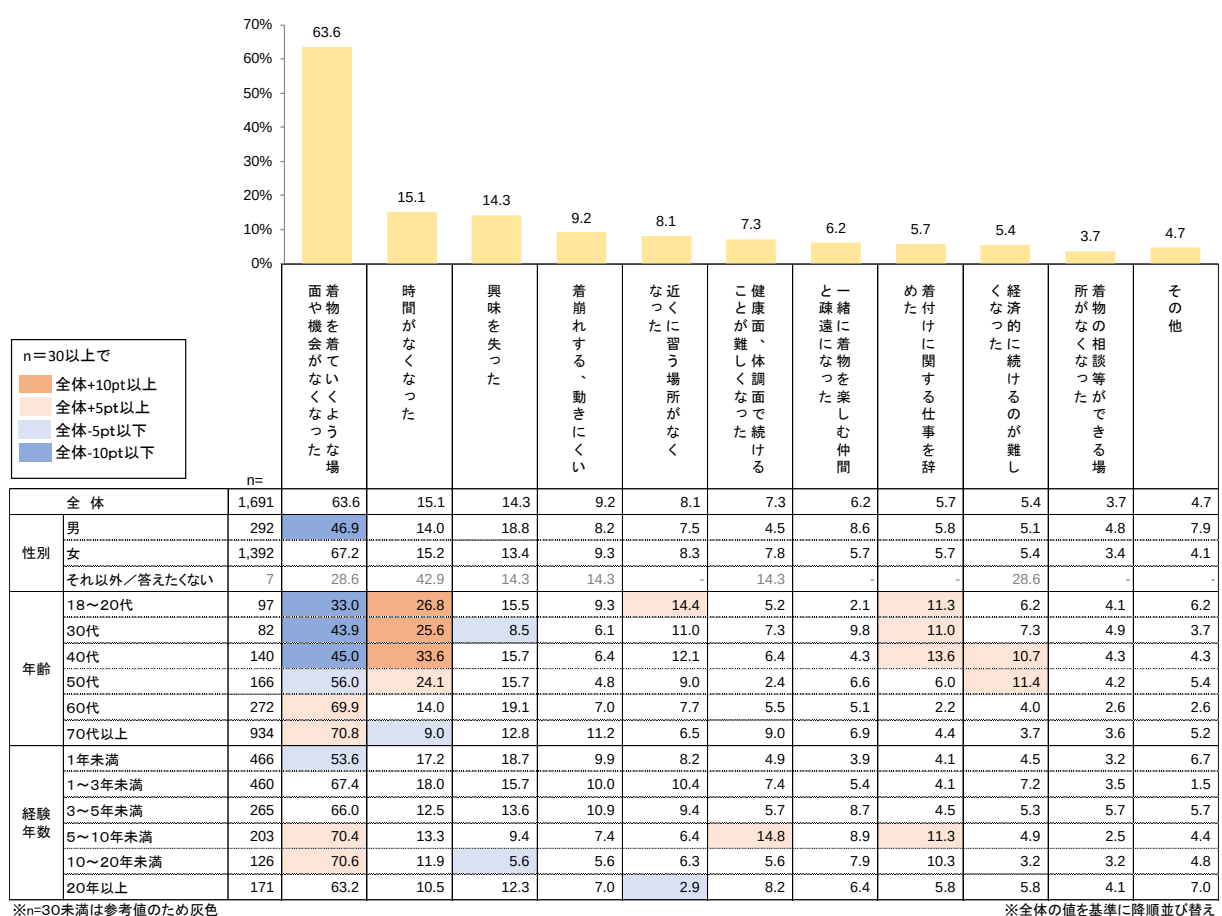
(その他の内容) 着物が好き、習い事の為 (別の趣味で着ている)、着物を着るだけでオシャレに見られる

和装から離れたきっかけや理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「着物を着ていくような場面や機会がなくなった」の 63.6%で、次いで「時間がなくなった」15.1%で、「興味を失った」14.3%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「着物を着ていくような場面や機会がなくなった」(46.9%) という回答比率が低い。

年齢別では、10～50代で「時間がなくなった」の回答比率が高く、「着物を着ていくような場面や機会がなくなった」の回答比率が低い。一方、60代以上では「着物を着ていくような場面や機会がなくなった」の回答比率が高くなっている。



集計表 C Q 3 補問 2 : 和装から離れたきっかけや理由

(その他の内容) 一通り習った・教室を卒業した、老齢なので、後始末が大変なので

和装を続けている（続けていた）年数

全体平均で最も回答比率が高いのは「1～3年未満」の24.1%で、次いで「1年未満」の22.9%、「3～5年未満」の14.7%と続く。全体平均で3年以上続けている（いた）人の比率は53.0%となっている。

男女別では、3年以上の継続している者が、男性で49.4%（421人中208人）、女性で53.9%（1,769人中954人）となっており、女性の方が長く続けている（いた）人の割合が高いことが分かる。

年齢別では10～30代で「1年未満」の回答比率が高い。

									(%)
			1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上	3年以上
n=									
全 体		2,198	22.9	24.1	14.7	12.6	9.1	16.7	53.0
性別	男	421	31.6	19.0	16.6	7.8	7.4	17.6	49.4
	女	1,769	20.8	25.3	14.2	13.7	9.4	16.5	53.9
	それ以外／答えたくない	8	37.5	25.0	25.0	12.5			37.5
年齢	18～20代	179	30.7	29.1	21.2	12.3	5.0	1.7	40.2
	30代	144	30.6	18.8	19.4	15.3	8.3	7.6	50.7
	40代	195	22.1	28.2	15.4	9.2	11.8	13.3	49.7
	50代	225	22.7	27.1	12.4	12.0	10.7	15.1	50.2
	60代	347	22.2	26.5	14.7	11.8	9.2	15.6	51.3
	70代以上	1,108	21.1	21.8	13.4	13.2	8.9	21.5	57.0

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 C Q 4 : 和装を続けている（続けていた）年数

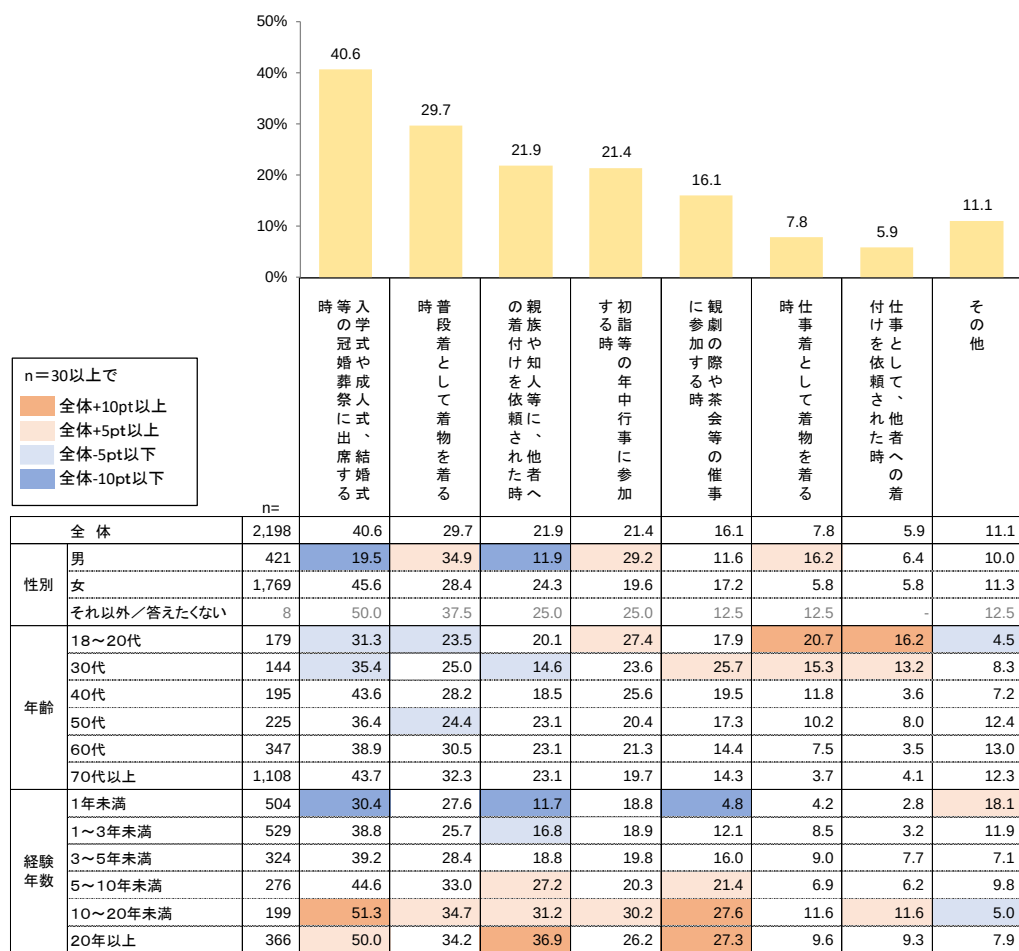
自分又は他者へ着付けをする機会

全体平均で最も回答比率が高いのは「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時」の40.6%で、次いで「普段着として着物を着る時」29.7%、「親族や知人等に、他者への着付けを依頼された時」21.9%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「普段着として着物を着る時」(34.9%)、「初詣等の年中行事に参加する時」(29.2%)、「仕事着として着物を着る時」(16.2%)の回答比率が高く、「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時」(19.5%)が低い。

年齢別では18～20代で「仕事着として着物を着る時」「仕事として、他者への着付けを依頼された時」の回答比率が高い。

経験年数別では、経験年数が長いほど「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時」、「観劇の際や茶会等の催事に参加する時」、「親族や知人等に、他者への着付けを依頼された時」の回答比率が高くなる傾向が見られる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 C Q 5 : 自分又は他者へ着付けをする機会

(その他の内容) 趣味・習い事の際、お祭り、旅行や観光の際に着物を着る時・旅館などの浴衣着

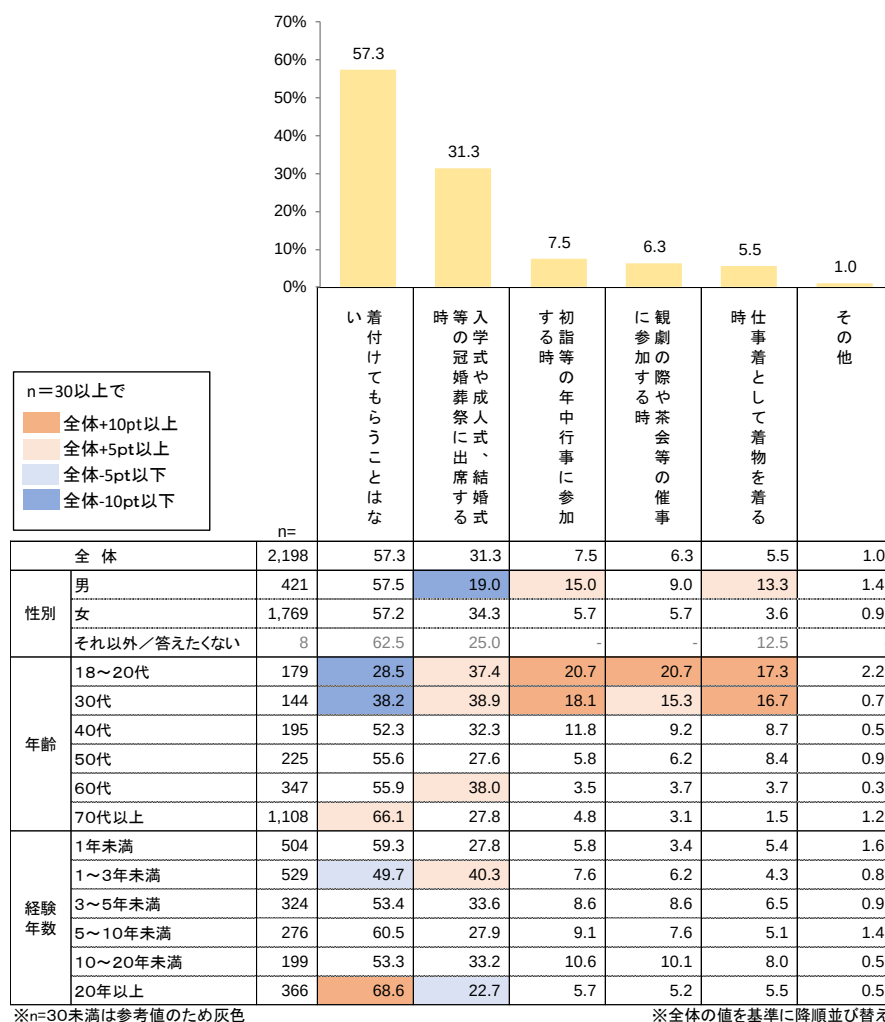
他者に着付けをしてもらう機会

全体平均で最も回答比率が高いのは「着付けてもらうことはない」の 57.3%で、次いで「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時」31.3%、「初詣等の年中之行事に参加する時」7.5%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「初詣等の年中之行事に参加する時」(15.0%)、「仕事着として着物を着る時」(13.3%) の回答比率が高く、「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時」(19.0%) の回答比率が低い。

年齢別では、10～30代で「着付けてもらうことはない」という回答比率が全体平均より低く、ほかの選択肢の回答比率が平均より高い。

経験年数別では、20年以上の者は「着付けてもらうことはない」(68.6%) の回答比率が高く、普段から着付けに慣れ親しんでいるものと推察される。



集計表 C Q 5 補問：他者に着付けをしてもらう機会

(その他の内容) 習い事するとき(発表会)、あらたまった時、子供のイベントに合わせた写真撮影で

和装をする頻度

全体平均で最も回答比率が高いのは「年1回程度」の56.4%で、次いで「年数回程度」17.3%、「月数回程度」6.7%と続く。週1回以上活動している（いた）比率は13.9%（2,198人中305人）である。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で週1回以上和装をしている（いた）比率が18.8%（421人中79人）、女性で12.7%（1,769人中224人）となっており、男性の方が和装をする頻度が全体平均と比べると高い傾向にある。

年齢別では、年齢が若いほど週1回以上和装をしている（いた）比率が高い傾向が見られる。

また、経験年数別では、経験年数が1年未満の者で「年1回程度」（60.9%）の回答比率が高いほか、20年以上の経験年数の者では、「年数回程度」（29.5%）の回答比率が高い。

										(%)
			ほぼ毎日	週に2~3回	週1回程度	月数回程度	月1回程度	年数回程度	年1回程度	週1回以上
n=										
全 体		2,198	3.2	4.3	6.3	6.7	5.6	17.3	56.4	13.9
性別	男	421	7.6	6.7	4.5	7.8	7.8	15.7	49.9	18.8
	女	1,769	3.7	6.7	6.4	5.1	17.8	57.9	12.7	12.7
	それ以外／答えたくない	8	12.5	12.5	12.5	62.5				25.0
年齢	18~20代	179	7.8	17.9	11.2	12.3	9.5	13.4	27.9	36.9
	30代	144	10.4	8.3	9.0	10.4	8.3	14.6	38.9	27.8
	40代	195	6.7	2.6	6.2	8.7	8.2	15.9	51.8	15.4
	50代	225	4.4	6.2	8.4	6.7	18.2	54.2	12.4	12.4
	60代	347	1.2	5.2	4.9	3.7	21.3	61.7	8.4	8.4
	70代以上	1,108	1.9	2.6	5.6	5.2	4.6	17.1	62.9	10.1
経験年数	1年未満	504	4.0	1.4	4.0	2.8	4.4	7.5	76.0	9.3
	1~3年未満	529	2.5	4.5	9.1	4.9	4.5	13.6	60.9	16.1
	3~5年未満	324	2.2	7.7	6.8	12.3	4.0	17.0	50.0	16.7
	5~10年未満	276	3.3	6.5	7.6	8.7	7.2	21.7	44.9	17.4
	10~20年未満	199	4.0	4.5	6.5	8.5	8.0	24.1	44.2	15.1
	20年以上	366	3.8	3.3	4.1	7.4	7.9	29.5	44.0	11.2

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 C Q 6 : 和装をする頻度

和装に関する月額費用

全体平均で最も多いのは月額「5,000 円未満」の 69.9%で、次いで「5,000 円以上～10,000 円未満」15.4%、「10,000 円以上～15,000 円未満」5.5%と続く。月額1万円以上支出している（いた）比率は14.7%（2,198 人中 323 人）である。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較した場合、まず男女別では、男性で月額1万円以上支出している（いた）割合が23.8%（421 人中 100 人）と、女性の12.5%（1,769 人中 222 人）より高い。

年齢別では、年齢が低いほど、月額1万円以上支出している（いた）割合が高いことが分かる。

経験年数別では、経験年数が1年未満の者は月額「5,000 円未満」（84.3%）の回答比率が高い一方、経験年数が1～10年未満の者は月額5,000 円以上支出している（いた）割合が高い。

														(%)	
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下			n=	5 0 0 0 円 未 満	1 5 0 , 0 0 0 0 0 0 円 未 満	1 1 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 満	2 1 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 満	2 2 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 満	3 2 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 満	3 3 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 満	4 3 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 満	4 4 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 満	5 4 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 満	5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 満	合 1 計 0 0 0 0 0 円 未 満
全 体			2,198	69.9	15.4	5.5	2.9	1.3	1.1	0.7	0.4	0.5	0.3	2.1	14.7
性別	男	421	65.1	11.2	7.1	5.2	1.9	1.7	1.4	1.0	1.4	0.5	3.6	23.8	
	女	1,769	71.0	16.4	5.1	2.3	1.1	1.0	0.5	0.2	0.2	0.3	1.8	12.5	
それ以外／答えたくない			8	87.5	-	-	-	12.5	-	-	-	-	-	12.5	
年齢	18～20代	179	45.3	17.9	16.2	3.9	5.6	1.1	1.1	1.1	2.2	1.1	4.5	36.9	
	30代	144	48.6	20.1	10.4	8.3	1.4	1.4	3.5	0.7	1.4	-	4.2	31.3	
	40代	195	64.1	13.3	6.2	3.1	2.1	3.6	1.0	0.5	1.0	0.5	4.6	22.6	
	50代	225	66.2	16.9	4.9	4.0	1.8	1.3	0.9	0.9	-	0.4	2.7	16.9	
	60代	347	75.5	15.0	2.6	3.2	-	1.4	-	0.3	-	-	2.0	9.5	
	70代以上	1,108	76.7	14.5	4.1	1.6	0.7	0.5	0.4	0.1	0.2	0.3	0.9	8.8	
経験年数	1年未満	504	84.3	9.1	3.2	1.2	0.8	0.2	0.4	-	-	-	0.8	6.5	
	1～3年未満	529	67.1	20.8	6.2	2.5	0.8	0.8	0.6	0.2	0.4	-	0.8	12.1	
	3～5年未満	324	60.2	18.5	7.7	3.1	3.4	2.2	0.9	1.2	0.9	-	1.9	21.3	
	5～10年未満	276	60.9	18.1	6.9	6.5	1.4	1.1	1.1	-	0.7	0.7	2.5	21.0	
	10～20年未満	199	63.8	16.1	5.5	3.5	-	2.0	0.5	1.0	1.5	1.0	5.0	20.1	
	20年以上	366	73.0	10.9	4.6	2.5	1.4	1.6	0.8	0.3	-	0.8	4.1	16.1	

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 C Q 7 : 和装に関する月額費用

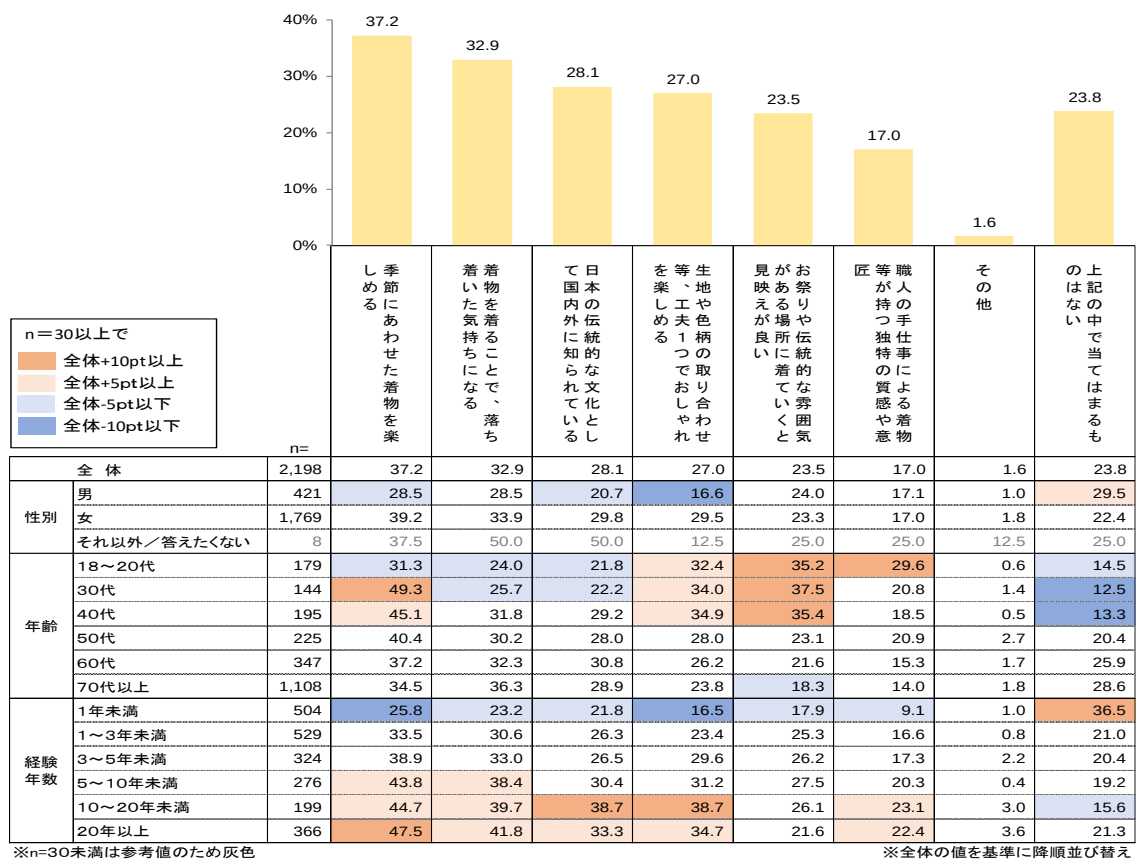
和装に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「季節にあわせた着物を楽しめる」の37.2%で、次いで「着物を着ることで、落ち着いた気持ちになる」32.9%、「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」28.1%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「生地や色柄の取り合わせ等、工夫1つでおしゃれを楽しめる」(16.6%)の回答比率が全体平均と比べても特に低く、続いて「季節にあわせた着物を楽しめる」(28.5%)、「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」(20.7%)、の回答比率が低い。

年齢別では10～40代で「生地や色柄の取り合わせ等、工夫1つでおしゃれを楽しめる」、「お祭りや伝統的な雰囲気がある場所に着ていくと見映えが良い」の回答比率が高く、10～30代で「着物を着ることで、落ち着いた気持ちになる」、「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」の回答比率が低い傾向にある。

経験年数別では、経験年数が長い者ほど「季節にあわせた着物を楽しめる」、「職人の手仕事による着物等が持つ独特の質感や意匠」、「生地や色柄の取り合わせ等、工夫1つでおしゃれを楽しめる」、「着物を着ることで、落ち着いた気持ちになる」、「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」の回答比率が高まる傾向が見られる。



集計表 CQ8：和装に関する興味関心や魅力

(その他の内容) 体型を気にしないで着用が可能なところ、工作上便利、冬は暖かい

■「自分で着物の着付けはできないが、人に着付けてもらって着ている（着たことがある）」と回答した者への設問（CQ9～CQ15）

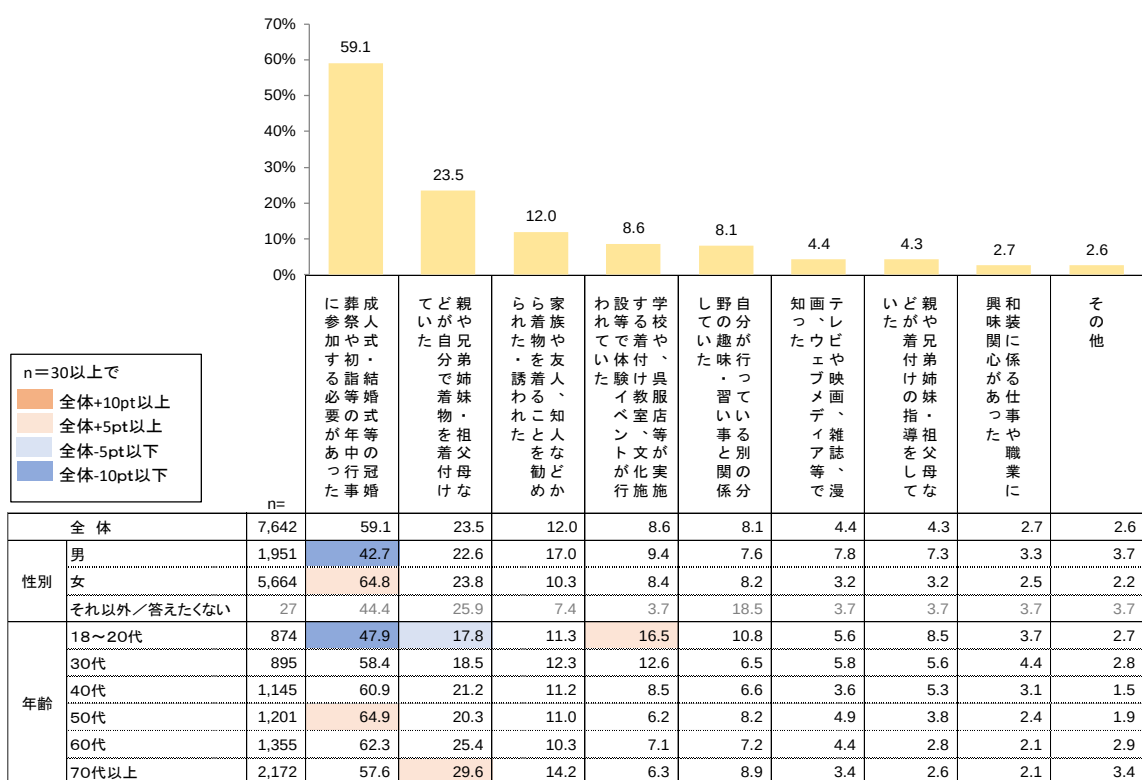
本設問では、人に着付けてもらって着物を着たことがあると回答した者が、どのようなきっかけや機会を着付けを体験したのか、また、どの程度和装に興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

和装を体験したきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは「成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があった」の59.1%で、次いで「親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた」23.5%、「家族や友人、知人などから着物を着ることを勧められた・誘われた」12.0%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、男女別では、男性で「成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があった」が42.7%と低い一方、女性が64.8%で高い。

年齢別では年齢が若い方が「学校や、呉服店等が実施する着付け教室、文化施設等で体験イベントが行われていた」の回答比率が高い傾向が見られる一方、高年齢になるほど「親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた」の回答比率が上がる傾向がある。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 CQ9：和装を体験したきっかけ

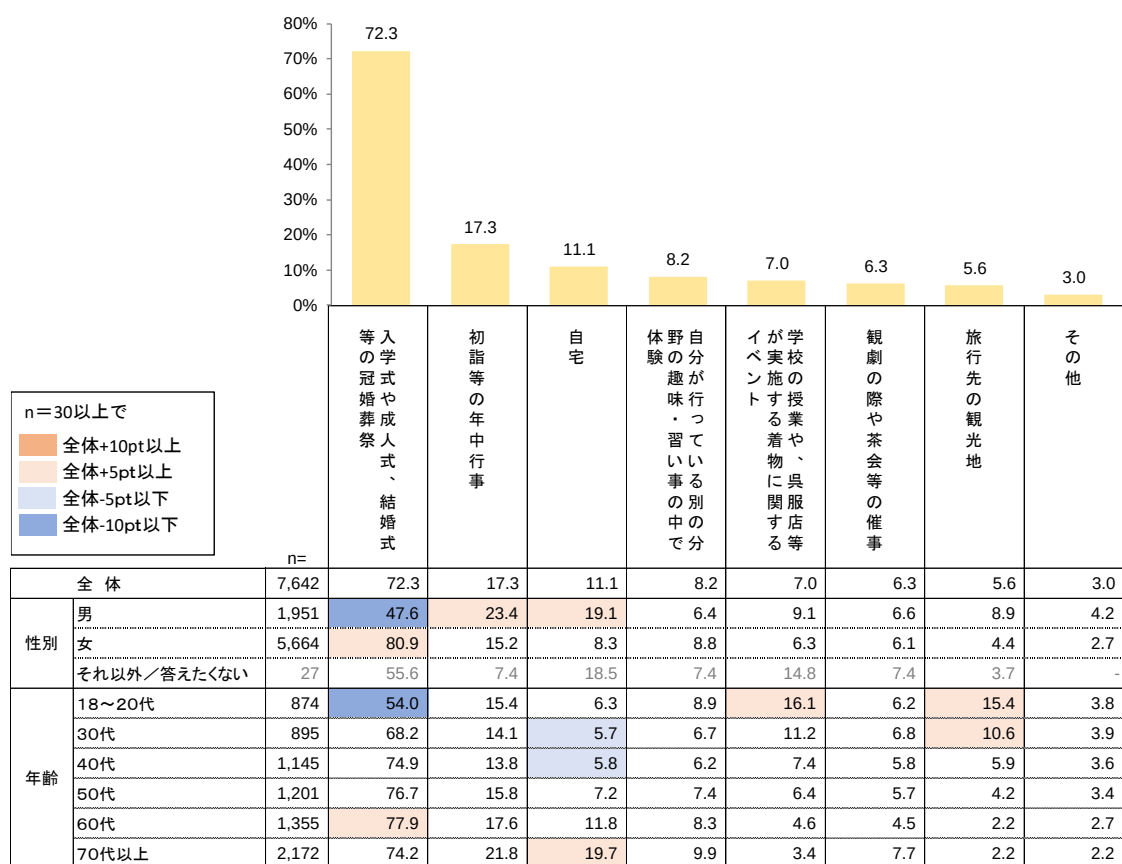
（その他の内容）祭り・盆踊り、アルバイト・仕事で、着物が好きだった

和装を体験した場

全体平均で最も回答比率が高いのは「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭」の72.3%で、次いで「初詣等の年中行事」17.3%、「自宅」11.1%となる。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、男女別では、男性で「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭」(47.6%)の回答比率が低く、「初詣等の年中行事」(23.4%)、「自宅」(19.1%)の回答比率が高い。

年齢別では、若いほど「旅行先の観光地」、「学校の授業や、呉服店等が実施する着物に関するイベント」という回答比率が高い一方、18～20代で「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭」の回答比率が大きく下回っている。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 C Q10：和装を体験した場

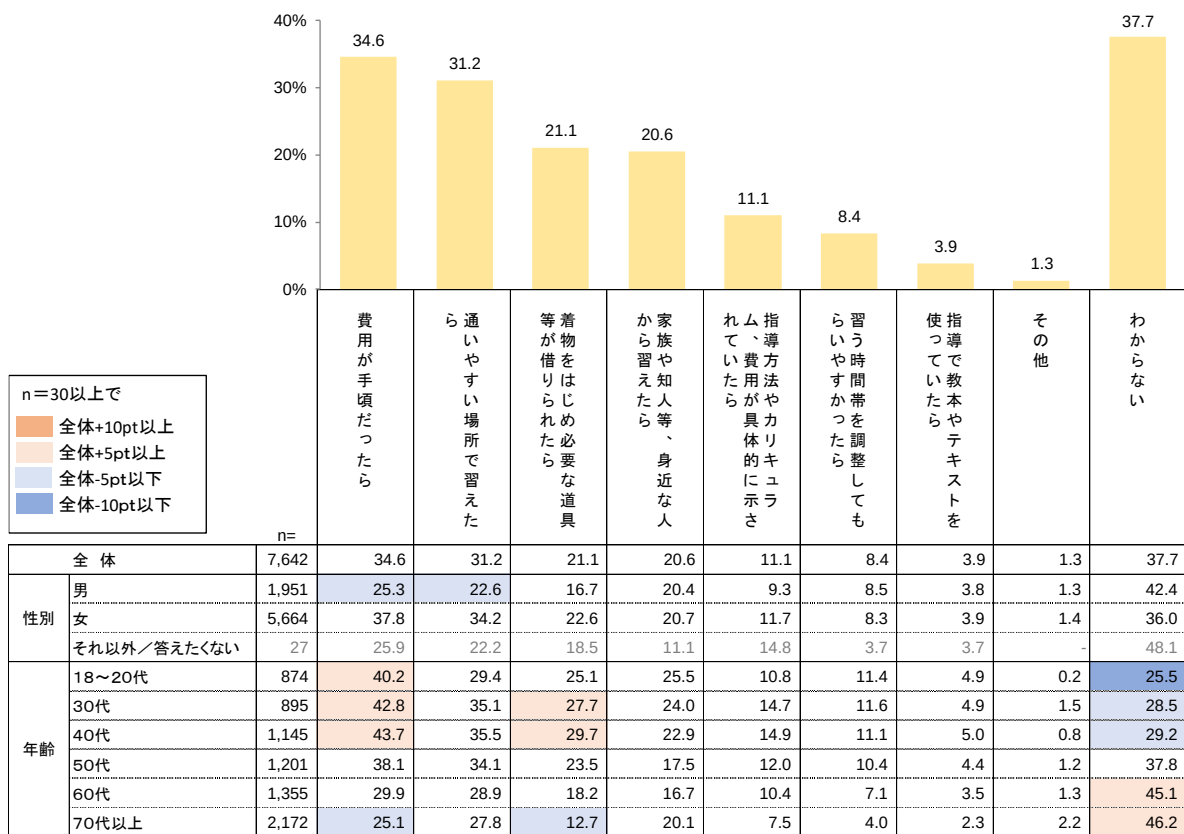
(その他の内容) お祭り (盆踊り、夏祭り)、仕事・アルバイト、卒業式

和装を習いやすい状況

全体平均で最も回答比率が高いのは「費用が手頃だったら」34.6%、次いで「通いやすい場所で習えたら」の31.2%、「着物をはじめ必要な道具等が借りられたら」21.1%、「家族や知人等、身近な人から習えたら」20.6%と並ぶ。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「費用が手頃だったら」(25.3%)、「通いやすい場所で習えたら」(22.6%)、の回答比率が低い。

また、年齢別では、10～40代で「費用が手頃だったら」、30～40代で「着物をはじめ必要な道具等が借りられたら」という回答比率が高い傾向が見られる。また、年齢が高くなるにつれて、「わからない」の回答比率が全体平均よりも高くなっている傾向も見取れる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 CQ11：和装を習いやすい状況

(その他の内容) 着物の購入など勧誘系がなければ、日常に着る機会があったら習おうと思える、興味が湧いたら、障害者でも可能ならば

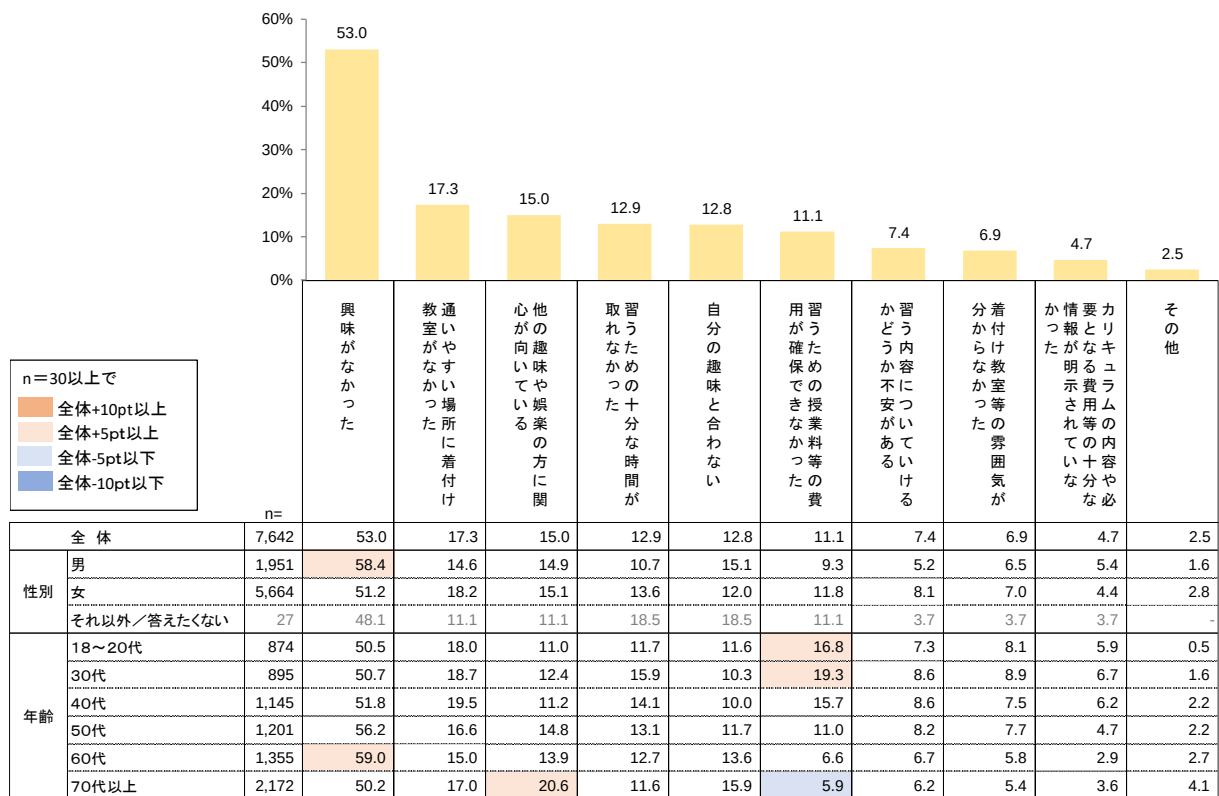
※n=30未満は参考値のため灰色

和装を習っていない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「興味がなかった」の53.0%で、次いで「通いやすい場所に着付け教室がなかった」17.3%、「他の趣味や娯楽の方に興味が向いている」15.0%となった。

男女別では、男性で「興味がなかった」(58.4%)の回答比率が高い。

また、年齢別では、10～30代で「習うための授業料等の費用が確保できなかった」という回答比率が高い。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 CQ13：和装を習っていない理由

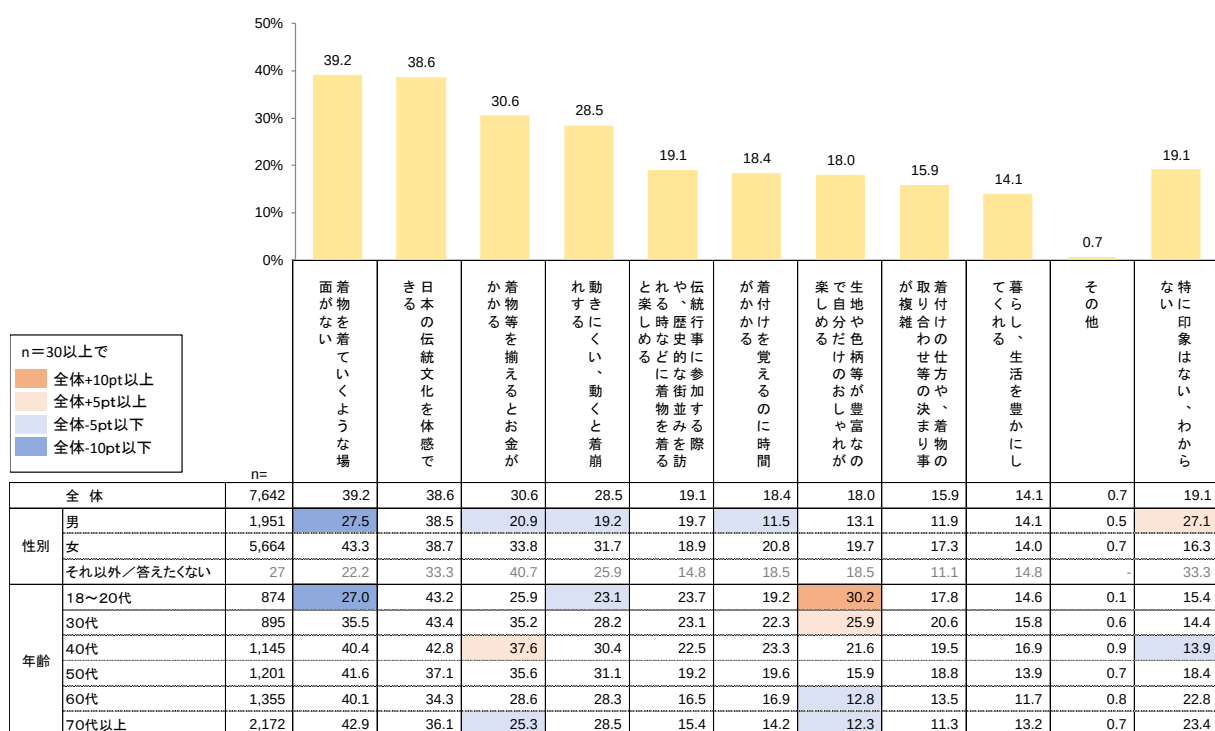
(その他の内容) 着る機会が少ない、着付けてくれる人がいたから、必要性がないから

和装に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは「着物を着ていくような場面がない」の39.2%で、ほぼ同率で「日本の伝統文化を体感できる」の38.6%となり、次いで「着物等を揃えるとお金がかかる」30.6%、「動きにくい、動くと着崩れする」28.5%となった。

全体平均の回答比率と男女別の回答比率を比べた場合、男性で「着物を着ていくような場面がない」(27.5%)、「動きにくい、動くと着崩れする」(19.2%)、「着物等を揃えるとお金がかかる」(20.9%)、「着付けを覚えるのに時間がかかる」(11.5%)の回答比率が低い。

また、年齢別では、若いほど「生地や色柄等が豊富なので自分だけのおしゃれが楽しめる」の回答比率が高くなっている。



集計表 C Q14：和装に対する印象やイメージ

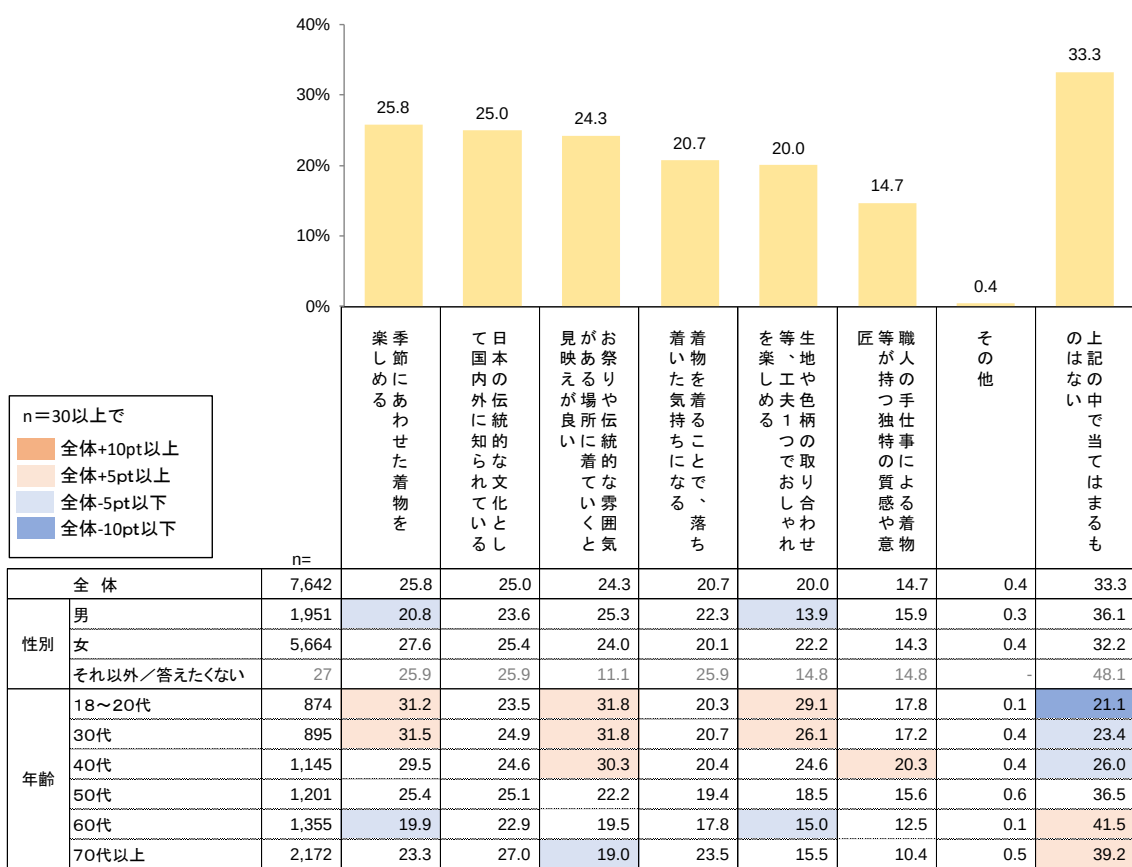
(その他の内容) 後片付けが大変、夏暑く冬は寒く感じる、和服を着られる・着ていると格好いい

和装に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「上記の中で当てはまるものはない」の33.3%で、次いで「季節にあわせた着物を楽しめる」の25.8%、「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」25.0%、「お祭りや伝統的な雰囲気がある場所に着ていくと見映えが良い」24.3%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「季節にあわせた着物を楽しめる」(20.8%)、「生地や色柄の取り合わせ等、工夫1つでおしゃれを楽しめる」(13.9%)の回答比率が低い。

年齢別では、「生地や色柄の取り合わせ等、工夫1つでおしゃれを楽しめる」と「お祭りや伝統的な雰囲気がある場所に着ていくと見映えが良い」で若いほど回答比率が高い傾向が見られる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 C Q15：和装に関する興味関心や魅力

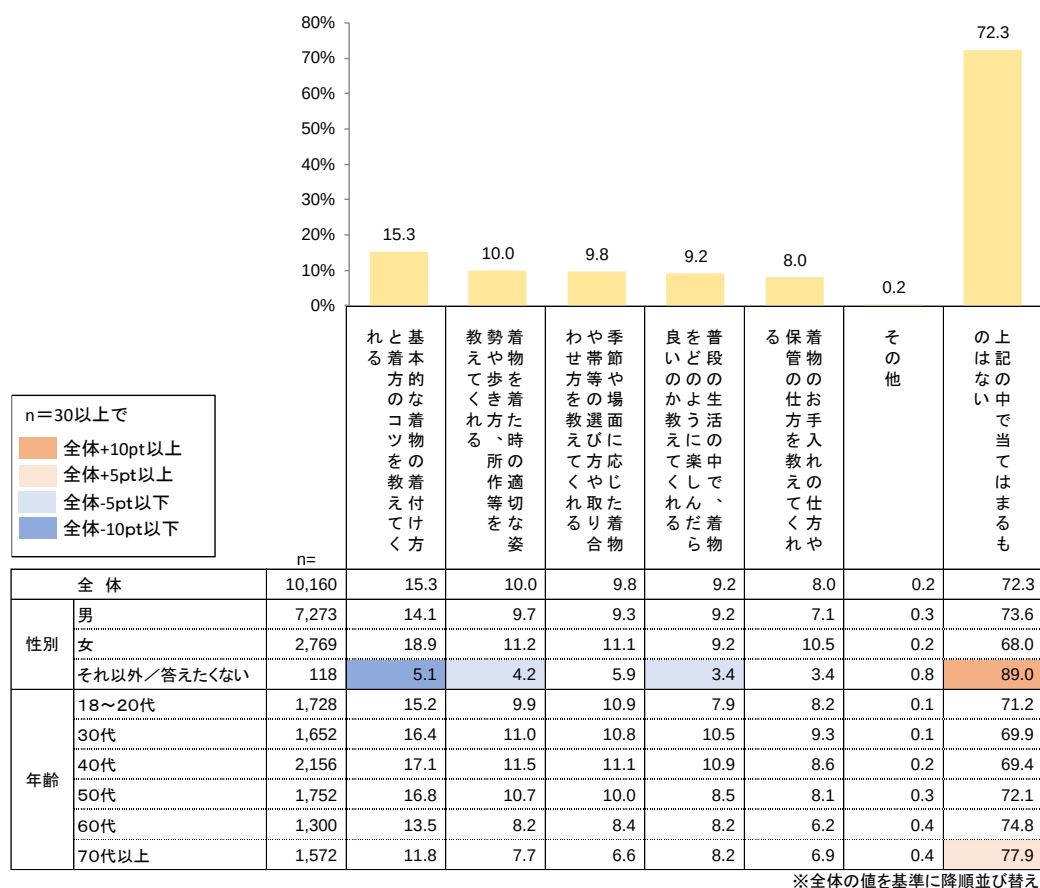
(その他の内容) 所作に気を使うようになる、上手に着ることができれば、身体が楽、最高礼装としての魅力

■「今まで着物を着たことはない」と回答した者への設問（C Q16～C Q20）

本設問では、今まで着物を全く着たことがないと回答した者が、着物の着付けを体験するなら、どのような内容や機会なら参加したいか、また、和装に対してどの程度、興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

参加してみたい和装の体験内容

全体平均で最も回答比率が高いのは「上記の中で当てはまるものはない」の72.3%で、次いで「基本的な着物の着付け方と着方のコツを教えてくれる」15.3%、「着物を着た時の適切な姿勢や歩き方、所作等を教えてくれる」10.0%、「季節や場面に応じた着物や帯等の選び方や取り合わせ方を教えてくれる」9.8%となった。

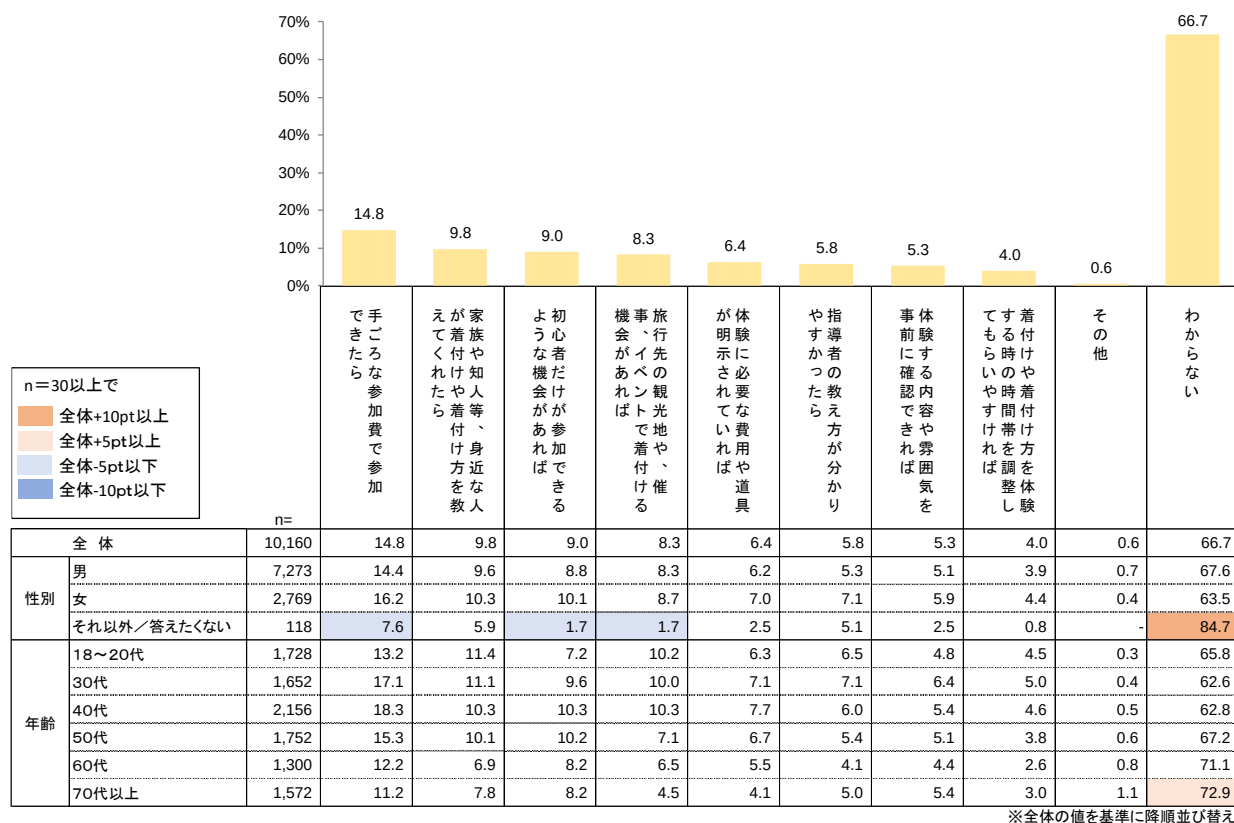


集計表 C Q16：参加してみたい和装の体験内容

（その他の内容）無料（値段が手ごろ）なら、喪服の着付けを教わりたい、着物を持っていなくてもよい、何らかのイベントや城下町とか歩ける

参加しやすい和装の体験条件

全体平均で最も回答比率が高いのは「わからない」の66.7%で、次いで「手ごろな参加費で参加できたら」14.8%、「家族や知人等、身近な人が着付けや着付け方を教えてくれたら」9.8%、「初心者だけが参加できるような機会があれば」9.0%、「旅行先の観光地や、催事、イベントで着付ける機会があれば」8.3%となった。



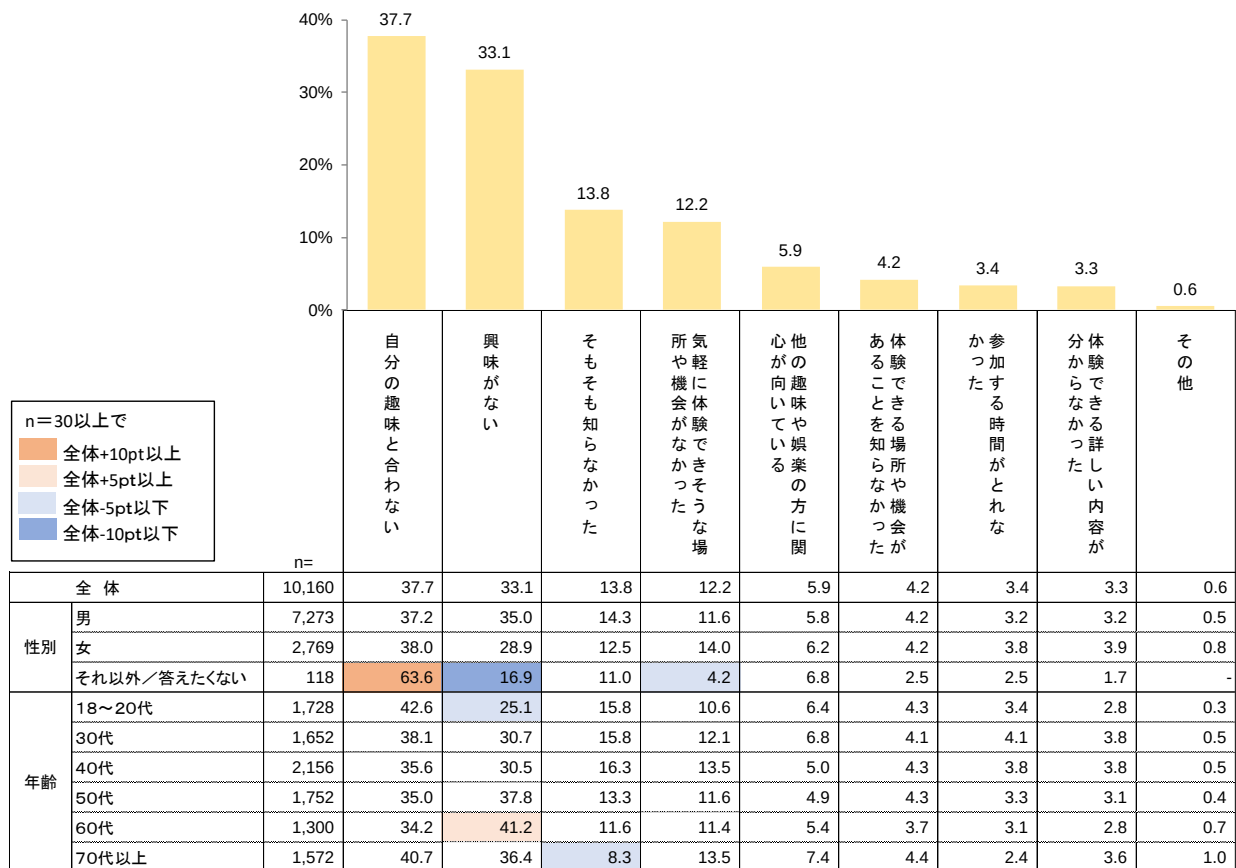
集計表 C Q17：参加しやすい和装の体験条件

(その他の内容) 無料体験、敷居が低ければ (厳しそうな人は嫌)、着物や帯・付属品を自分で用意する必要がなければ、障害持ちの人でも着やすい着物を開発してくれたら

和装を体験したことがない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「自分の趣味と合わない」の37.7%で、次いで「興味がない」33.1%、「そもそも知らなかった」13.8%となった。

年齢別で見ると、「興味がない」の回答比率が18～20代（25.1%）で低い一方、60代ではやや高い。



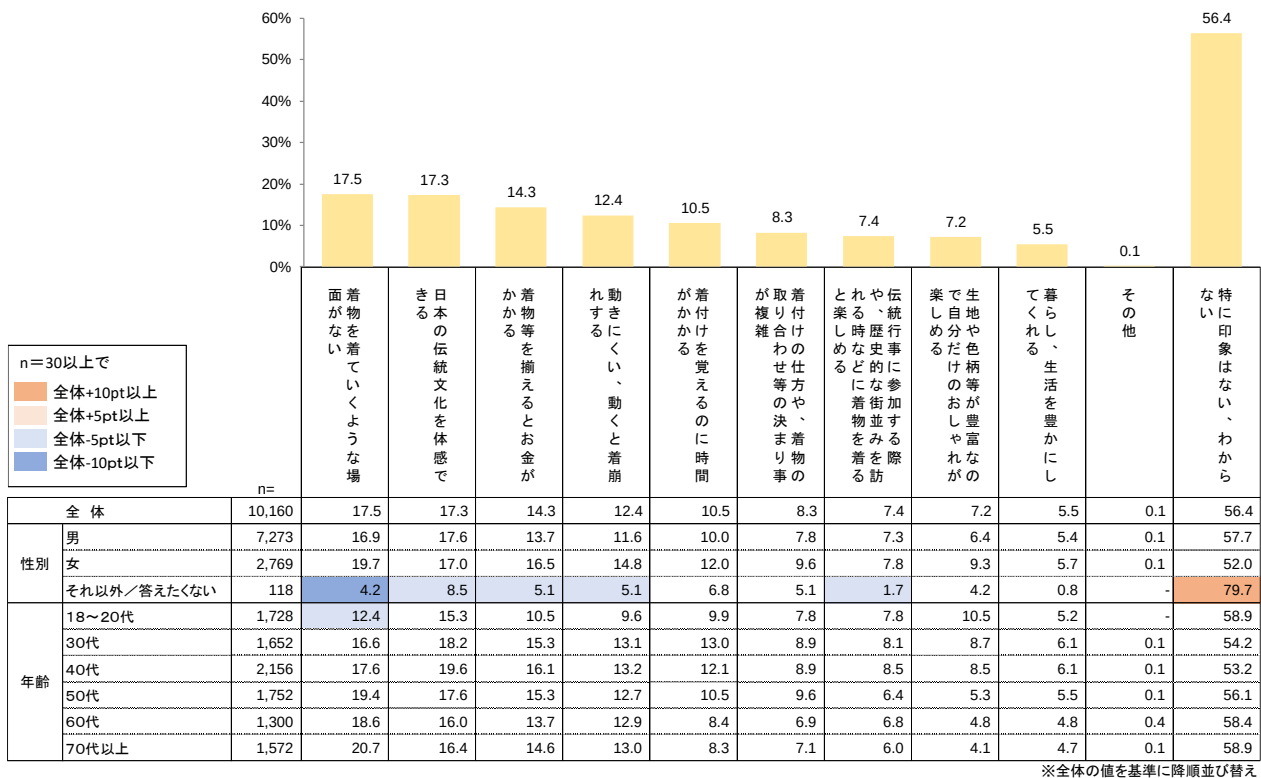
※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 C Q18：和装を体験したことがない理由

(その他の内容) お金がかかりそう、行動に制限がある(日常生活には向かない、窮屈な感じ)

和装に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは「特に印象はない、わからない」の56.4%で、次いで「着物を着ていくような場面がない」17.5%、ほぼ同率で「日本の伝統文化を体感できる」17.3%となり、「着物等を揃えるとお金がかかる」14.3%と続いている。

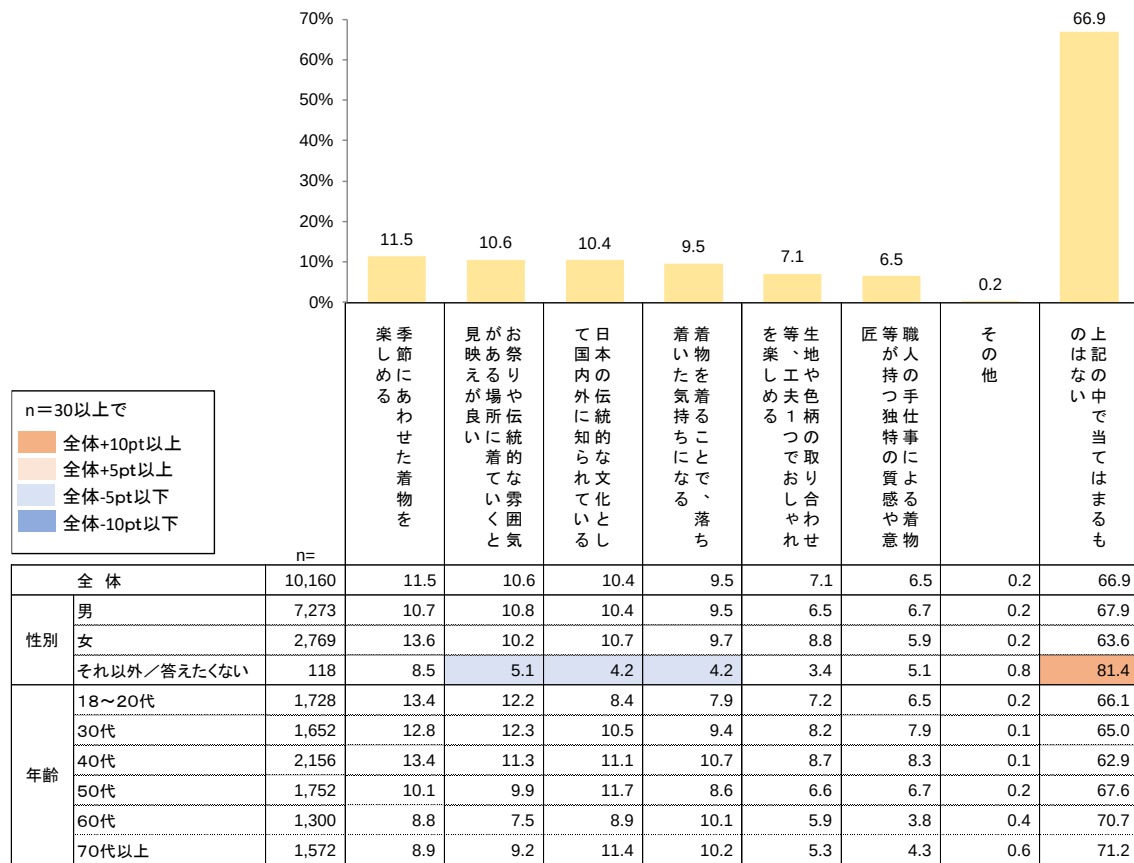


集計表 CQ19：和装に対する印象やイメージ

(その他の内容) 面倒 (髪や化粧と疲れそう)、男なので着る機会がない、講師がこわい、保管が大変

和装に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「上記の中で当てはまるものはない」の66.9%で、次いで「季節にあわせた着物を楽しめる」の11.5%、「お祭りや伝統的な雰囲気がある場所に着ていくと見映えが良い」10.6%、「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」10.4%と続く。



※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 C Q20：和装に関する興味関心や魅力

(その他の内容) 機会に合った着物を知りたい (訪問やパーティー・お茶など)、簡単に楽しめる方法、着物を安く入手でき着付けが分かる動画がある

②調査結果に基づく分析と考察

本節では、和装の振興施策の検討を主眼として、前掲の集計結果に加えてクロス集計等も行い、これらの結果について分析を行う。

和装に関して「経験あり」、「参加体験あり」、「未経験」、それぞれの回答者にどのような特徴が見られるのかを分析するため、「居住地」、「職業」、「同居家族」、「世帯年収」、「子供の頃の習い事」等の設問や設問間とのクロス集計を行った。結果は以下のとおりである。

回答者の特性や傾向について

■居住地、職業、同居家族、世帯年収とのクロス集計結果

属性については、性年齢以外に、居住地域、職業、同居家族、世帯年収についての設問をもうけている。

居住地域では、北陸で「参加体験あり」と回答した者がやや多く、沖縄で「経験あり」と回答した者が若干少ない傾向が見られる。

職業では、非正規、家族従業者、主婦・主夫など女性比率の高い職業で「参加体験あり」と回答した者が、また、主婦・主夫で「経験あり」と回答した者が多く、男女差を反映したものとなっている。

世帯年収については明確な傾向は見られない。

居住地・職業・同居家族×和装の経験の有無

			FQ フィルタリング・パート			(%)
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下			「経験あり」層	「参加体験あり」層	「未経験」層	
n=						
全 体			20,000	11.0	38.2	50.8
居住地	北海道	852	9.3	37.1	53.6	
	東北	1,385	10.1	36.8	53.1	
	関東	7,422	10.7	36.9	52.5	
	北陸	816	9.9	43.3	46.8	
	東海(中部)	2,349	11.6	39.0	49.4	
	近畿	3,247	12.5	38.7	48.8	
	中国	1,140	11.7	40.3	48.1	
	四国	584	10.3	38.2	51.5	
	九州	1,987	11.3	39.9	48.8	
	沖縄	218	5.5	36.7	57.8	
職業	正規の職員・従業員	6,411	5.9	28.2	65.9	
	非正規の職員・従業員	2,803	9.3	44.4	46.3	
	自営業主・自由業	1,239	11.5	35.4	53.0	
	家族従業者	135	11.1	45.9	43.0	
	主婦・主夫	3,987	21.0	56.7	22.3	
	学生	512	5.7	37.3	57.0	
	リタイア、無職	4,141	11.3	33.6	55.1	
	その他	772	8.2	32.0	59.8	
同居家族	ひとり暮らし	4,145	11.2	31.3	57.5	
	核家族	13,277	11.2	41.0	47.8	
	三世代家族	1,179	11.3	39.2	49.5	
	上記以外で同居している人がいる	1,399	8.4	31.7	60.0	

■スポーツや趣味、娯楽等の活動とのクロス集計結果

次に、スポーツや趣味、娯楽等（以下、趣味・娯楽等）の活動の内容や、これらの活動に費やす時間やお金に関する回答結果とのクロス集計結果と、そこから見る特徴や傾向を示す。

趣味・娯楽等として行っている活動内容のクロス集計結果からは、これらの活動を「特に何もしていない」人が、「未経験」と回答した者では25.3%いるのに対し、「経験あり」と回答した者では8.7%にとどまっており、「経験あり」と回答した者が積極的に趣味・娯楽に関する活動を行っていることが分かる。

趣味・娯楽等の活動内容の傾向としては、「経験あり」と回答した者の回答比率の中で、全体平均を下回っている項目は、スポーツの一部（「ジョギング・マラソン」「バスケットボール」のみ）、ギャンブル類（「ボートレース（競艇）」「中央競馬」「サッカーくじ」「パチンコ」）、メディア鑑賞（「SNS」「ゲームセンター」「テレビゲーム」「メディアでの音楽鑑賞」「動画鑑賞」）、「スポーツ観戦（テレビは除く）」となっており、ギャンブル類やメディア鑑賞に関しては消極的な傾向が見られる。

一方、日本の伝統的な文化に関しては、「お茶」（7.5%）、「お花」（7.0%）、「書道」（5.8%）、「邦楽・民謡」（2.4%）、「おどり（日舞など）」（2.2%）と平均を上回る回答比率となっている。

「参加体験あり」と回答した者では、「特に何もしていない」という回答比率が9.3%となっており、「未経験」と回答した者よりも趣味・娯楽等に関する活動への回答比率が高いが、「経験あり」と回答した者の余暇参加率と比較すると、やや下回っている。また、「経験あり」と回答した者に比べると、日本の伝統的な文化に関わる趣味・娯楽等の活動に対する回答比率は低い傾向にある。

次に、1ヶ月に使える趣味・娯楽等にかかる費用や活動する時間帯、活動に費やす時間とのクロス集計結果を示す。

まず、趣味・娯楽等にかかる費用については、「経験あり」と回答した者で平均月2万円以上支出している割合が13.7%と、「参加体験あり」と回答した者の10.0%、「未経験」と回答した者の12.2%を上回る。

次に、趣味・娯楽等の活動を行う時間帯を見ると、「経験あり」と回答した者は、「平日午前」（42.6%）、「平日午後」（43.9%）の活動率が高い。逆に休日の活動率は全体平均を下回る。

趣味・娯楽等に費やす月平均の時間を見ると、月2時間以上という回答が「経験あり」と回答した者で58.1%あるのに対し、「参加体験あり」と回答した者で53.5%、「未経験」と回答した者で52.4%となっており、「経験あり」と回答した者では趣味・娯楽等の活動に対して時間を使っている割合が高いことがうかがえる。

和装の経験の有無×趣味・娯楽等の活動状況

		共通設問1 趣味・余暇活動の参加状況																		(%)
		ジョギング・マラソン	バスケットボール	信託（信託を含む）	動物鑑賞（レンタル、配信含む）	邦楽、民謡	除く（スポーツ観戦（テレビは除く））	音楽鑑賞（レコード、テレビ、CD、FM、など）	書道	お茶	お花	おどり（日舞など）	テレビゲーム（家庭用）	ゲームセンター、ゲームコーナー	パチンコ	サツカーくじ（toto）	中央競馬	ボートレース（競艇）	S・N・S、Twitterなど	特に何もしていない
n=30以上で																				
全体		20,000	7.8	1.0	13.6	1.5	7.4	17.3	1.7	1.6	1.8	0.4	7.9	2.5	3.7	1.8	4.7	1.2	6.2	17.4
「経験あり」層		2,198	7.5	0.9	11.8	2.4	6.8	15.9	5.8	7.5	7.0	2.2	6.0	2.3	2.8	1.3	3.6	1.0	6.0	8.7
「参加体験あり」層		7,642	6.6	0.9	15.7	1.9	7.2	20.9	2.2	1.6	2.2	0.2	7.3	2.7	3.1	1.6	3.6	0.9	8.3	9.3
「未経験」層		10,160	8.8	1.1	12.4	1.0	7.6	14.8	0.5	0.3	0.3	0.1	8.8	2.3	4.3	2.0	5.7	1.4	4.7	25.3

※共通設問1は、分析で取り上げた選択肢のみ抜粋して掲載している。（以下同様）

和装の経験の有無×趣味・娯楽等に1ヶ月に使える費用

(%)

		共通設問2 1ヶ月に使える趣味・余暇費用											
		5 0 0 0 円 未 満	15 0 0 0 円 未 満	11 5 0 0 円 未 満	21 0 5 0 円 未 満	22 5 0 0 円 未 満	32 0 5 0 円 未 満	33 5 0 0 円 未 満	43 0 5 0 円 未 満	44 5 0 0 円 未 満	54 0 5 0 円 未 満	5 0 0 円 未 満	合 計 2 0 0 円 未 満
n=30以上で													
全体+10pt以上													
全体+5pt以上													
全体-5pt以下													
全体-10pt以下													
n=													
全 体	16,527	49.5	22.9	10.2	5.9	3.1	3.0	1.4	0.6	0.4	0.6	2.3	11.4
「経験あり」層	2,007	43.4	23.6	11.6	7.7	3.3	3.4	1.6	1.0	0.4	0.9	3.0	13.7
「参加体験あり」層	6,932	51.5	23.5	9.5	5.5	2.7	2.7	1.3	0.5	0.3	0.6	1.7	10.0
「未経験」層	7,588	49.3	22.2	10.5	5.9	3.4	3.1	1.3	0.6	0.5	0.6	2.7	12.2

和装の経験の有無×趣味・娯楽等を行う時間帯

(%)

		共通設問3 1ヶ月に使える趣味・余暇時間帯							
		平日 午前	平日 午後	平日 夕方	平日 夜間	休日 午前	休日 午後	休日 夕方	休日 夜間
n=30以上で									
全体+10pt以上									
全体+5pt以上									
全体-5pt以下									
全体-10pt以下									
n=									
全 体	16,527	30.6	30.1	15.8	18.8	34.9	43.7	21.2	15.5
「経験あり」層	2,007	42.6	43.9	17.6	15.6	27.8	32.7	14.3	9.9
「参加体験あり」層	6,932	35.0	33.7	15.2	18.2	32.7	41.3	19.0	14.1
「未経験」層	7,588	23.4	23.1	15.9	20.2	38.9	48.9	25.1	18.3

和装の経験の有無×趣味・娯楽等に費やす時間

(%)

		共通設問4 趣味・余暇活動を行う時間										
		1 時間 未 満	21 時間 未 満	32 時間 未 満	43 時間 未 満	54 時間 未 満	65 時間 未 満	76 時間 未 満	87 時間 未 満	98 時間 未 満	19 0時間 未 満	1 0時間 以上
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全 体	16,527	22.9	23.5	13.7	7.0	4.5	4.1	1.7	1.9	0.9	1.3	18.5
「経験あり」層	2,007	20.2	21.7	15.1	7.7	3.7	3.9	2.5	2.2	1.3	1.4	20.3
「参加体験あり」層	6,932	22.8	23.6	13.2	7.0	4.5	4.3	1.6	1.9	1.0	1.5	18.5
「未経験」層	7,588	23.7	23.8	13.7	6.7	4.8	4.0	1.6	1.7	0.7	1.2	18.0

消費行動に関する意識や価値観に関するクロス集計結果

消費行動に関する意識や価値観の項目と和装の経験・体験の有無とのクロス集計結果を示す。

消費行動についての様々な価値観への回答比率を見てみると、「経験あり」と回答した者では、「上記で当てはまるものはない」を除く、全ての意見で回答比率が全体平均を上回っている。また、特に「家族や友人・知人の役に立ちたい」(35.6%)では全体平均を上回る回答比率となったほか、「困っている人・助けが必要な人の役に立ちたい」と考える面や、「周りに合わせるより、自分の考えに基づいて物事を判断したい」、「流行っていなくても、自分が面白いと思ったものは試してみたい」等の項目で、平均を上回る回答比率となっている。

これに対し「参加体験あり」と回答した者では、「上記であてはまるものはない」を除いた全項目で平均を上回ることが同じだが、「リスクはできるだけ避けたい」(50.7%)の回答比率が高いことが特徴となっている。

一方、「未経験」と回答した者では、「上記であてはまるものはない」(32.5%)以外の全項目で回答比率が平均を下回る。

和装の経験の有無×消費行動に対する価値観

共通設問5 消費行動に対する価値観																		(%)
		たい 自分 の考 えを 和を 尊重 する よ し	周 りに 合わ ない 感じ をも とに 判断 した よ し	た く さ ん と 感 じ た ら 遠 し	た い リ ス ク は で き る だ け 避 け	立 ち た い 家 族 や 友 人 ・ 知 人 の 役 に	決 の 役 に 立 ち た い 環 境 問 題 ・ 社 会 課 題 の 解	要 な 人 の 役 に 立 ち 助 け が 必 ず あ る に 思 え る	い 周 り の 人 か ら 注 目 さ れ た	者 同 士 の 一 体 感 が 大 事 だ	そ の 時 ・ そ の 場 で し か 得 な い 体 験 を し た い	た 流 行 り の も の は 試 し て み	は 分 が 面 白 い と 思 っ て も 、 自 分 が 試 し て み た い	流 行 っ た も の や 、 気 持 ち を 発 信 し た い	自 分 が 発 信 し た も の に 反	な い 上 記 で あ る も の は		
n=		20,000	25.6	22.6	20.2	41.9	24.9	10.6	19.6	2.4	5.4	13.6	3.9	26.8	3.1	3.1	22.0	
全体		2,198	30.1	29.9	23.0	46.7	35.6	17.1	29.0	2.8	9.3	19.9	4.6	35.4	4.2	3.4	11.1	
「経験あり」層		7,642	30.2	26.0	23.1	50.7	32.7	13.5	25.3	2.5	6.9	18.3	4.8	34.4	3.7	3.7	11.1	
「未経験」層		10,160	21.2	18.5	17.4	34.3	16.7	7.0	13.2	2.2	3.3	8.7	3.1	19.2	2.5	2.6	32.5	

■普段接するメディアとのクロス集計結果

回答者が普段接するメディアと和装の経験・体験の有無とのクロス集計結果を示す。

「経験あり」と回答した者では、「動画投稿サイト」、「SNS」、「紙のマンガ／マンガ雑誌」、「電子版のマンガ」、「有料動画サイト」以外で回答比率が全体平均を上回っており、地上波・BS放送、ラジオ、新聞や紙の書籍への接触が高いことが分かる。

一方、「参加体験あり」と回答した者では、全体平均を大幅に上回る回答比率は見られないが、インターネットや動画投稿サイト、SNSなど、インターネットに関連するメディア接触も含めて、幅広くメディアに接していることがうかがえる。

逆に「未経験」と回答した者は、全てのメディアにおいて回答比率が低く、「上記のメディアはあまり見ていない」(18.1%)のみ全体の回答比率を上回るという結果になった。

和装の経験の有無×接触メディア

		共通設問6 接触メディア																
		BS テレビ (民放の 地上波・ BS)	波・BS テレビ (NHKの 地上)	CATV や衛星 放送の チャンネル	ラジオ (除くイ ンター ネット)	新聞 (電子版 含む)	雑誌・ タウン 誌(イン ターネ ットを 除く)	むな なド ット・ アブ リュ ット のサ イト を 含	サイ ンタ ーネ ット のサ イト を 含	動 画 投 稿 サ イト (ユー ー ズ の サ イト を 含)	動 画 投 稿 サ イト (ユー ー ズ の サ イト を 含)	紙の 書籍	電子 書籍	紙の マンガ ／マ ンガ 雑誌	電子 版の マンガ	x 、i z o n 、 H e n r i t 、 U e l l i v a な ど	有 料 動 画 サ イト (Am a z o n 、 N i t e l i v e な ど)	上 記 の メ デ ィ ア は あ ま り 見 て い な い
n=																		
全体		20,000	69.5	41.7	10.2	14.3	28.5	7.5	46.1	33.7	28.5	20.4	6.0	6.8	6.4	11.9	10.8	
「経験あり」層		2,198	74.6	55.8	14.5	19.8	41.3	10.6	49.1	28.0	26.4	32.3	7.1	6.3	5.2	11.8	3.7	
「参加体験あり」層		7,642	77.5	49.2	11.5	15.5	33.6	9.9	52.3	36.0	33.1	25.0	6.6	7.6	7.6	14.1	3.1	
「未経験」層		10,160	62.5	33.0	8.2	12.1	21.8	5.1	40.8	33.1	25.4	14.3	5.3	6.3	5.7	10.2	18.1	

以上のクロス集計結果と、「①単純集計の結果について」で示した回答者の年齢・性別・経験年数とのクロス集計の結果も踏まえ、和装の「経験あり」「参加体験者あり」「未経験」、それぞれの回答者の特徴や傾向は以下のとおりになる。

1) 着物を自ら着付けることができると回答した者の傾向

男女別で見た場合、女性の方が男性よりも経験者の総数が多く、年齢別で見た場合、70代以上が最も多く、次いで60代、50代、40代以上と続いている。

次に経験者は、子供の頃の習い事として伝統的な文化に係る分野を習っていたと回答している者が多く、また、趣味・娯楽等の活動に積極性があり尚かつ伝統的な文化に係る趣味への嗜好性の高さがうかがえる。消費行動への意識については、家族や知人、困っている人がいれば助けたい・役に立ちたいと考え、自らの考えで判断すると言った価値観を持っている者が全体平均と比べると多い傾向が見える。普段のメディア接触については地上波・BS放送、ラジオ、新聞や紙の書籍への接触率が高い傾向にあるといえる。

2) 着物を着付けてもらった経験があると回答した者の傾向

男女別で見た場合、女性の方が男性よりも圧倒的に着物を着たことがある総数が多く、年齢別で見た場合は、70代以上が最も多く、次いで60代以上、50代と続いている。

次に体験者は、子供の頃の習い事の経験が多い傾向にあり、美術やダンス、囲碁・将棋については、経験者よりも回答比率が高い一方、茶道や華道などの伝統的な芸事についての回答比率はやや低い傾向にある。趣味・娯楽等の活動については、着付けをできる者と比べると活動的とは言い難く、また、伝統的な文化に係る趣味との関わりは薄いことが分かる。

消費行動への意識については、家族や知人、困っている人がいれば助けたい・役に立ちたいと考える点は着付けができる者と近似しているが、リスクをできるだけ避けたいという価値観を持っている傾向が見られる。普段のメディア接触については地上波・BS放送、ラジオ、新聞、インターネットサイトやSNS等、幅広いメディア接触を行っている傾向が見られる。

3) 着物を着たことがないと回答した者の傾向

未経験者の場合、圧倒的に男性の方が未経験者の回答比率が高い。年齢別で見ると、18～20代が最も多く、次いで40代、30代と続き、若年者ほどに着物を着た経験がないことが分かる。

子供の頃の習いごとの経験を見ると、していないとの回答比率が高い傾向にある。また、趣味・娯楽等の活動も必ずしも積極的ではなく、消費行動の価値観やメディア接触への回答も、当てはまるものがないとの回答比率が高い傾向が見られる。

未経験者の傾向と特徴

次に、上記の属性分析を踏まえ、「経験あり」、「参加体験あり」、「未経験」、それぞれの回答者ごとに設けた設問の回答結果についてクロス集計を行い、回答者の特徴について更なる分析を行う。

はじめに、「未経験」と回答している者について分析を行う。上述の回答者属性に関する分析結果からは、「未経験」と回答した者については際立った特徴や傾向は見いだせなかった。加えて、今後の振興施策を考える上で、「未経験」と回答した者が、なぜこれまで着物の着付けを経験してこなかったのか、また、着物を着付けることに対してどのような意識を持っているのか、どのような体験方法や周知の実施をすれば参加体験等に繋げていく可能性を見いだすことができるのか、その検討のために分析を行う必要がある。

■未経験層の体験機会への参加意向

未経験と回答した者のうち、着物を着てみたいという意向を持つ回答者、体験意向がない回答者にはどのような特徴があるのか。趣味・娯楽等の活動内容、消費意識、メディア接触の設問とCQ16「参加してみたい和装の体験内容」とのクロス集計を行い、回答者の特徴について分析を行う。

CQ16では、体験内容として設定した選択肢には当てはまるものはないと72.3%が回答しており残りの27.7%については、体験内容によっては着物の着付けをしてもらいたいという意向を持っていると推察される。

まず、着物の着付けを体験してみたいとの意向を示した回答者について、クロス集計結果からその特徴を確認する。趣味・娯楽等の活動とのクロス集計結果からは、「上記の中で当てはまるものはない」と比べると、ほとんどの項目で全体平均と同じ程度の回答比率を示しており、「邦楽・民謡」、「お茶」や「お花」や「書道」の項目でも全体平均を少し上回っていることから、これらの活動に対して決して消極的ではないと推察される。

消費行動に対する価値観とのクロス集計結果を見ると、ほとんどの項目で、全体平均を上回る回答比率を示しており、明確な意見や嗜好性があることがうかがえる。この傾向は着付けができる者や着付けてもらって着物を着たことがあると回答した者の消費行動に対する価値観と近似している部分があり、「家族や友人・知人の役に立ちたい」、「困っている人・助けが必要な人の役に立ちたい」、「流行っていなくても、自分が面白いと思ったものは試してみたい」、と言った項目が合致している。

普段からのメディア接触とのクロス集計結果を見ると、消費行動に対する価値観と同じく、着付けてもらって着物を着たことがあると回答した者と近似した傾向、つまり、普段から幅広くメディアに接触している傾向が見て取れる。

次に、着物の着付けへの参加体験の意向がない者について、その特徴を確認する。CQ16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者は、趣味・娯楽等の活動について「特に何もしていない」(32.1%)と回答しており、消費行動に関する設問でも、メディア接触についても、当てはまらない、特にしていないという選択肢を選ぶ割合が高い。このように、着物の着付けへの参加体験の意向がない者の特徴として、趣味・娯楽活動やメディアへの接触到に必ずしも積極的とはいえず、消費についての意識・意見をあまり明確に持っていない傾向が確認できる。

CQ16「参加してみたい和装の体験内容」の各種の参加体験と、CQ17の「参加しやすい和装体験の条件」の関係を見ると、CQ16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者では「わからない」が89.0%とほとんどを占める一方、実際に希望する体験機会がある者では、「わからない」という回答は極めて少ない。

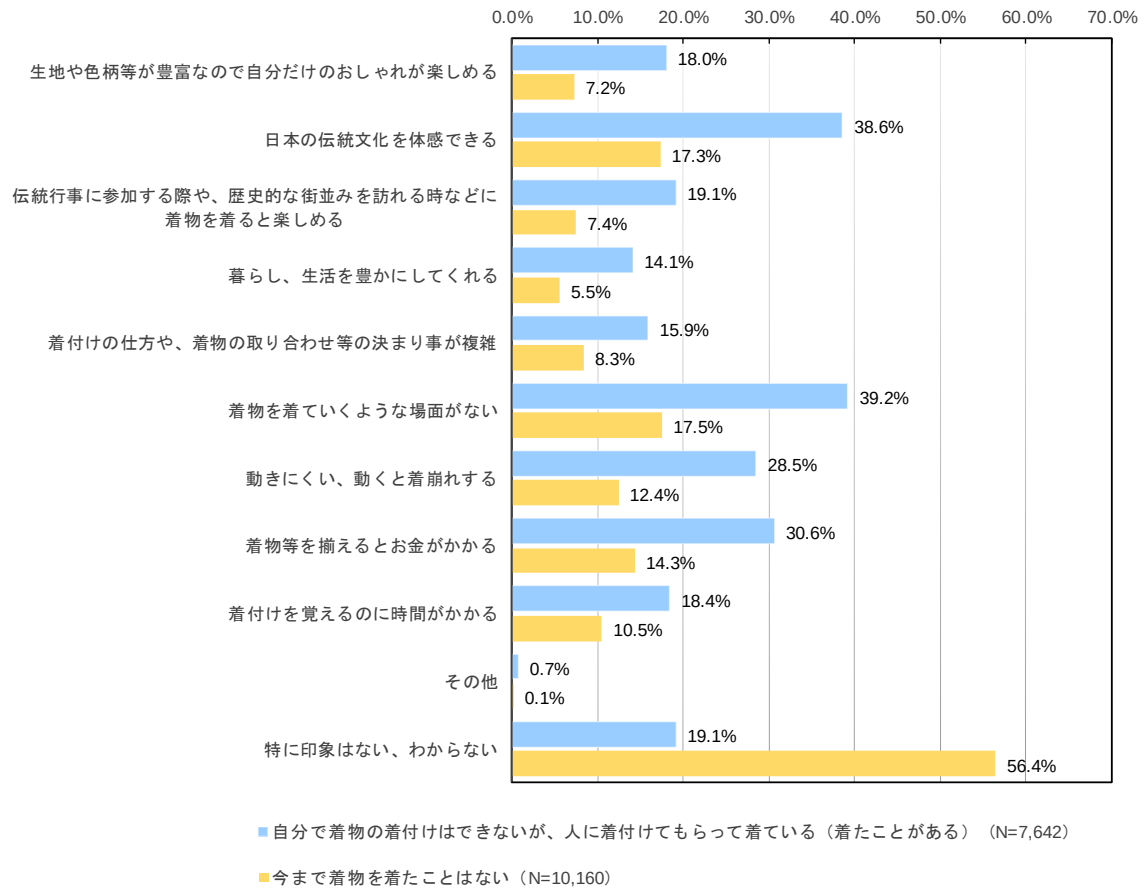
参加してみたい和装の体験内容×参加しやすい和装の体験条件

※n=30未満は参考値のため灰色

ＣＱ18「和装を体験したことがない理由」を見ると、「自分の趣味と合わない」(37.7%)、「興味が
ない」(33.1%)という回答比率が高く、着付け・着物自体に関心を持っていないことが体験に繋が
っていない最大の理由となっている。次いで「そもそも知らなかった」13.8%、「気軽に体験できそ
うな場所や機会がなかった」12.2%と続く。

248

未経験者と参加体験者の和装に対する印象やイメージの違い



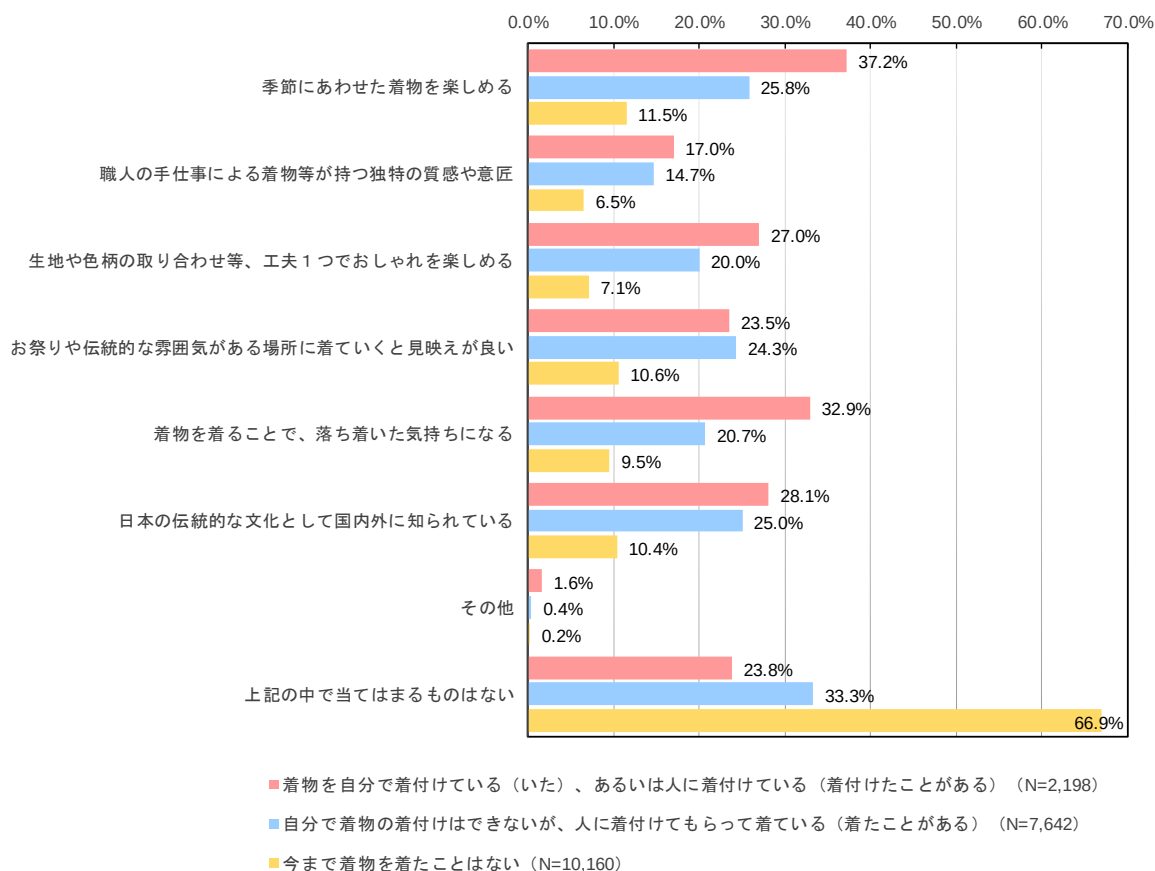
■「未経験」層と「参加体験あり」層、「経験あり」層の和装の魅力についての評価の違い

未経験者が和装に対する印象やイメージを具体的に描けないように、和装の魅力に対する設問（C Q 8、C Q 15、C Q 20）にも同様の傾向が見られる。

下のグラフを見ても分かるように、着付け未経験者の回答者の約6割が、「上記の中で当てはまるものはない」（66.9%）と回答し、経験者と参加体験者の回答比率と比較しても大きな差がある。

このことはほかの魅力についてもいえ、参加体験者と未経験者を比較すると「季節にあわせた着物を楽しめる」、「生地や色柄の取り合わせ等、工夫一つでおしゃれを楽しめる」等、ほとんどの項目で回答比率に大きな差が見られることから、イメージや印象と同じく実際に体験をすることの重要性がうかがえる。

各回答者における和装に対する興味関心や魅力の違い



上記のクロス集計の結果から、着物を着たことがないと回答した者の傾向や特徴をまとめると、以下のとおりである。

1）未経験者の体験機会ときっかけの傾向と特徴

着物を着たことがないと回答した者のうち、参加体験の意向を示さない者が72.3%いる一方、27.7%が体験内容に関する選択肢をいずれか選択しており、未経験者の中でも機会があれば参加したいという意向を持つ者がいる。

これら参加意向を示す者は、着物を着たことがないと回答した者と比べた場合、趣味・娯楽等の活動に対して決して消極的ではない者であり、消費行動への明確な意見を有し、普段から幅広いメディアに触れている傾向にあり、この点は着付けしてもらって着物を着たことがある者と近似する傾向にある。ただし、着付けができる者と比べると、茶道や華道、邦楽などの日本の伝統的な文化への参加率はあまり高くないことから、趣味・娯楽の活動として伝統的な文化への接触はやや低い傾向にある。

2）未経験者が考える参加しやすい体験の条件と内容についての傾向と特徴

CQ16、CQ17のクロス集計の結果から、未経験者のうち、参加体験をしたいとの意向を示した者の40～60%が、身近な人に教えてもらいたい、手頃な参加費用の2点を参加体験の条件

としてとりわけ重視している傾向が見えてくる。

また、C Q 16 と C Q 18 とのクロス集計の結果からは、体験できなかった事情・理由として「気軽に体験できる場所がなかった」、「体験できる場所や機会があることを知らなかった」と回答し、参加体験の意向を持つ者の多くが、体験する機会を得ることができなかったことが分かる。

3) 和装の印象や魅力に関する傾向と特徴

着物を着たことがない者の場合、和装に対する印象や魅力について、未経験であるが故に、具体的なイメージや魅力は分からないという当然の結果が導かれた。その点を踏まえて、経験者や参加体験者との印象や魅力への回答の差を見ると、参加体験や経験を重ねることで、具体的な印象やイメージ、魅力を描くことができるようになること、また、経験を重ねた者ほど、着物を日本の伝統的な文化として捉えるようになったり、季節に応じた着物の取り合わせを楽しんだり、着物を着ておしゃれを楽しむことができるような点と魅力を結びつけられるようになっている。

参加体験ありと回答した者の傾向と特徴

次に、参加体験ありと回答した者の回答傾向を分析する。参加体験をした者は、何らかのきっかけがあつて着付けを体験する機会を得ており、しかし、習うまでには至っていない者と捉えることができる。ではどのような状況で体験機会を得たのか、また、習うまでには至らない事情や理由等があるのかをクロス集計を用いてその傾向と特徴を分析する。

■参加体験者の体験のきっかけと機会

体験のきっかけ（C Q 9）を問う設問の結果からは、着物を着たきっかけとして「成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があつた」（59.1%）と圧倒的に回答比率が高く、次いで「親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた」（23.5%）、「家族や友人、知人などから着物を着ることを勧められた・誘われた」（12.0%）、「学校や、呉服店等が実施する着付け教室、文化施設等で体験イベントが行われていた」（8.6%）となっており、行事への参加をきっかけとして着物を着付けてもらった者が多い傾向にある。また、体験の場（C Q 10）としては「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭」（72.3%）が最も多く、次いで「初詣等の年中行事」（17.3%）と続き、約9割が式典や年中行事への参加に際して、着物を着付けてもらったと回答している。

体験したきっかけと体験機会の関係性の特徴や傾向を明らかにするため、C Q 9とC Q 10のクロス集計の結果を以下に示す。

体験したきっかけとして最も多かった「成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があつた」（59.1%）と回答した者の中でも、「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭」（73.8%）が特に高い回答比率を示しており、式典への参加に際して着物を着装する機会が多い傾向にあることが分かる。

一方、「親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた」（23.5%）と回答した者では、「初詣等の年中行事」（43.2%）、「観劇の際や茶会等の催事」（35.1%）、「自宅」（39.6%）の回答比率が高く、家族での行事の折に和装をする機会を得たことも見受けられる。また、「家族や友人、知人などから着物を着ることを勧められた・誘われた」（12.0%）では、冠婚葬祭等を除く項目で全体平均を上回る回答比率であり、家族や知人からの勧めで催事に参加する際や観光の折にも着物を着付ける機会を得ていたことが分かる。

このほか、「学校や、呉服店等が実施する着付け教室、文化施設等で体験イベントが行われていた」（8.6%）では、学校の授業や呉服店でのイベントで体験機会を得ているほか、観光地等でも着付け体験が行われていることが確認できる。

和装を体験した場×和装を体験したきっかけ

(%)

		CQ9和装を体験したきっかけ									
		てど親 いがや た自兄 分弟 で姉 着物・ 祖母 着父 付母 けな	いど親 たがや 着兄 付け弟 の姉 指・祖 導父 をし母 てな	られ着 た物や ・誘着 わ人、 れこと たをな を勧ど めか	家族 や友 人、知 人など めか	わ設す れ等校 でで着 い体付 た験け呉 イ教服 べ室店 ン、等 ト文が が化実 行施施	知画テ っ、レ たウビ エや ブ映 メ画 デ、 イ雑 ア誌 等、 で漫	に葬成 参加や す初・結 必等婚 要の式 が年等 あ中の冠 つ行婚	興味装 関に係 るあ仕 つ事 たや職 業に	野の分 ての趣 いた・行 味・っ 習て いる 事と別 関の係 分	そ の 他
n=30以上で											
全体+10pt以上											
全体+5pt以上											
全体-5pt以下											
全体-10pt以下											
n=											
全 体		7,642	23.5	4.3	12.0	8.6	4.4	59.1	2.7	8.1	2.6
入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭		5,528	24.2	3.1	9.1	7.1	3.1	73.8	1.7	4.8	1.4
初詣等の年中行事		1,321	43.2	8.3	21.6	10.1	5.2	51.2	4.2	6.3	1.9
観劇の際や茶会等の催事		478	35.1	15.9	27.4	19.9	9.2	39.7	6.5	20.9	2.5
旅行先の観光地		427	23.9	13.6	27.6	29.3	16.2	42.2	9.8	5.2	2.1
学校の授業や、呉服店等が実施する着物に関するイベント		538	21.6	10.6	22.1	42.8	12.3	38.5	8.2	9.1	1.3
自宅		847	39.6	7.8	22.3	6.8	6.4	40.0	6.4	10.7	4.6
自分が行っている別の分野の趣味・習い事の中で体験		625	24.3	4.0	13.0	9.9	5.3	31.0	8.2	54.4	1.8
その他		233	17.6	4.7	11.2	5.2	3.4	43.8	3.0	3.4	36.5

■和装を習いやすい状況

和装を習いやすい状況（C Q11）に関する設問の結果では、「費用が手頃だったら」（34.6%）、「通いやすい場所で習えたら」（31.2%）の2つが重視されている条件となっている。一方、和装に支払える月額費用として、「5,000 円未満」（79.7%）、「5,000 円以上～10,000 円未満」（14.5%）となっており、回答者の約 94.2%が 1 万円未満の費用であれば習いやすいと回答している。

C Q11 と C Q12 のクロス集計の結果を見ると、「5,000 円未満」（79.7%）を選択した者の中では、習いやすい状況として「わからない」（89.9%）の回答比率が高く、そもそも習う金額の相場等が分からないため「5,000 円未満」を選択した可能性が高い。一方、5,000 円以上の項目を見ると、「5,000 円以上～10,000 円未満」（14.5%）では「通いやすい場所で習えたら」（20.4%）が平均を上回っているほか、そのほかの項目でも全体平均を少し上回る回答比率となっている。

また、「10,000 円以上～15,000 円未満」（2.6%）でも「その他」、「わからない」を除く全ての項目で全体平均の回答比率を上回っており、和装を習いたいと考えている者は 5,000 円以上 15,000 円未満の金額であれば支払いやすいと考える傾向にあると推察される。

和装を習いやすい状況×和装に支払える月額費用

		CQ12和装に支払える月額費用 (%)										
		5 0 0 0 0 円 未 満	1 5 0 0 0 円 以 上	1 1 5 0 0 円 未 満	2 1 0 5 0 円 未 満	2 2 5 0 0 円 未 満	3 2 0 5 0 円 未 満	3 3 5 0 0 円 未 満	4 3 0 5 0 円 未 満	4 4 5 0 0 円 未 満	5 4 0 5 0 円 未 満	5 0 0 0 0 円 以 上
n=												
全 体	7,642	79.7	14.5	2.6	1.0	0.8	0.4	0.3	0.2	0.1	0.1	0.3
家族や知人等、身近な人から習えたら	1,573	76.4	18.0	2.8	1.4	0.6	0.2	0.1	0.1	-	0.2	0.1
通いやすい場所で習えたら	2,382	74.4	20.4	2.9	1.0	0.6	0.3	0.2	0.2	-	0.0	0.1
費用が手頃だったら	2,643	77.8	17.4	2.7	0.8	0.4	0.3	0.3	0.1	0.1	0.1	0.0
着物をはじめ必要な道具等が借りられたら	1,612	73.9	18.5	3.7	1.1	1.1	0.7	0.4	0.3	0.1	0.1	-
習う時間帯を調整してもらいやすかったら	639	67.0	19.4	4.7	1.7	4.1	1.9	0.5	0.3	0.3	0.2	-
指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていたら	845	72.3	19.4	3.1	2.1	1.3	0.2	0.6	0.5	0.1	0.4	-
指導で教本やテキストを使っていたら	295	68.1	19.3	3.4	1.7	2.0	1.7	0.3	1.0	0.7	0.7	1.0
その他	102	89.2	8.8	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-
わからない	2,880	89.9	7.8	1.0	0.4	0.2	0.2	0.1	0.0	-	0.0	0.5

次に、着物の着付けをこれまで習っていない理由（C Q13）に関する設問の結果では、「興味がなかった」(53.0%)の回答比率が最も高く、次いで「通いやすい場所に着付け教室がなかった」(17.3%)、「他の趣味や娯楽の方に興味が向いている」(15.0%)と続く。では、和装を習いたいと考えている者は、どのような状況であれば習いやすいと考えている傾向が見られるのか。C Q11 の習いやすい状況とのクロス集計を行い、参加体験者が習いやすい状況について分析を行う。

習いやすい状況について「わからない」(37.7%)と回答した者のうち、習わなかった理由として「自分の趣味と合わない」(60.3%)、「興味がなかった」(53.1%)の回答比率が高く、着物を着たことはあっても興味関心を持てなかったことが分かる。

一方、参加しやすい状況として、「費用が手頃だったら」(34.6%)と回答した者が習っていない理由として、「習うための授業料等の費用が確保できなかった」(67.2%)が最も多く、次いで、「着付け教室等の雰囲気に分からなかった」(64.8%)と続き、授業料等の費用の問題と共に、教室の雰囲気に分からないと言った事情や、時間の確保の問題も習えなかった事情として回答比率が高い。また、「通いやすい場所で習えたら」(31.2%)と回答した者の場合を見ると、「通いやすい場所に着付け教室がなかった」(62.9%)の回答比率が全体平均より高く、そのほか「着付け教室等の雰囲気が分からなかった」(60.2%)「習うための十分な時間が取れなかった」(60.2%)も全体平均を上回っており、通いやすい場所にあることも条件として重要であるほかに、通いやすい時間に習いたい、教室の雰囲気を知っておきたいと言った面が、習いたいと考える者のハードルになりやすい傾向にあることがうかがえる。

和装を習っていない理由×和装を習いやすい状況

		CQ11和装を習いやすい状況									(%)
		家族や知人等、身近な人から習えた	通いやすい場所です	費用が手頃だった	着物が借りられ必要な道具	習う時間帯を調整しても	指導方法が力に育た	指導で教本やテキストを	その他	わからない	
n=30以上で											
全体+10pt以上											
全体+5pt以上											
全体-5pt以下											
全体-10pt以下											
全体	n=	7,642	20.6	31.2	34.6	21.1	8.4	11.1	3.9	1.3	37.7
興味がなかった	4,053	17.5	20.6	25.4	14.7	4.5	6.7	2.2	1.3	53.1	
通いやすい場所に着付け教室がなかった	1,319	29.1	62.9	59.5	35.2	18.1	21.1	7.5	0.6	8.3	
習うための授業料等の費用が確保できなかった	851	26.4	53.8	67.2	45.2	20.2	25.6	8.8	0.9	10.7	
習うための十分な時間が取れなかった	987	28.9	60.2	61.6	37.6	23.9	23.0	7.6	1.2	9.5	
カリキュラムの内容や必要となる費用等の十分な情報が明示されていなかった	357	27.7	57.1	58.5	54.3	32.5	41.5	14.3	0.8	7.6	
着付け教室等の雰囲気が分からなかった	525	31.0	60.2	64.8	51.0	26.3	36.6	11.6	1.1	8.8	
習う内容についていけるかどうか不安がある	563	33.4	55.4	60.4	45.8	21.1	31.8	12.1	0.5	11.9	
他の趣味や娯楽の方に関心が向いている	1,148	26.0	40.9	43.7	30.3	12.5	19.0	6.7	1.4	27.0	
自分の趣味と合わない	978	14.8	16.5	20.6	13.0	4.9	7.6	3.8	2.4	60.3	
その他	193	20.2	39.4	38.9	29.0	9.8	19.7	7.3	17.6	26.4	

上記のクロス集計の結果から、着付けてもらって着物を着たことがあると回答した者の傾向や特徴をまとめると、以下のとおりである。

1) 参加体験者の体験機会ときっかけの傾向と特徴

CQ9とCQ10のクロス集計結果の分析から、冠婚葬祭への出席をきっかけとして着物を着付けてもらった者がとりわけ多い傾向にある。他方、初詣等の年中行事へ参加したり、観劇の際に着物を着付けてもらった者については、親族が着物を着付けることができたり、友人・知人の誘いで着物を着付けてもらう機会を得ている傾向もみえる。

2) 参加体験者が考える習いやすい状況や月額費用についての傾向と特徴

着物の着付けを習いやすい状況や内容について、まず、月に支払える費用と習いやすい状況とのクロス集計結果から、月額の費用としては5,000円以上15,000円未満の金額が支払いやすい額であると考えられていることが推察される。

また、習っていない理由と習いやすい状況とのクロス集計結果からは、着物を着付けてもらった経験があっても着物を着ることに対して興味を持てなかった者が一定数いる一方で、興味関心があっても、通える場所が近くでない等の事情があって習う機会を持てなかった者がいることが分かる。また、習うための授業料が確保できなかった、教室の雰囲気が分からなかった等の回答も多く見られることから、参加体験者にとっては、通いやすい環境に教室があることに加えて、習う場所の雰囲気を知ることができたりするなど、教室に関する詳しい情報があつた方が、習い始めやすいと考えている傾向が回答結果の分析からうかがえる。

経験ありと回答した者の傾向と特徴

着物の着付けができると回答した者の回答傾向について分析を行う。着物の着付けができる者はどのような経緯や場所で着付けを習い始め、どの程度の者が継続してきたのかを分析することで、着付けてもらって着物を着たことがある者と着物を着たことがない者との違いを明らかにする。

■始めたきっかけと継続性及び継続理由

着付けを習い始めたきっかけ（CQ1）の結果では、「親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた」（42.3%）が最も高く、次いで「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」（20.9%）、「和装に係る仕事や職業に興味関心があった」（12.9%）、「成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があるがあった」（12.6%）、「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」（12.5%）がほぼ同率で並ぶ。着付けができると回答した者の身の回りには、着物を身に付けることができる親族がいたり、または着物が自分の趣味と関係していたりするなど、着物を着ることが身近にあったことで着付けを習い始めるきっかけが生み出される背景があったことが推察される。

次に、習い始めたきっかけ（CQ1）と現在の継続状況（CQ3）についてクロス集計を行い、始めたきっかけと継続率の関係を分析する。「現在も着付けを行っている」の回答比率が23.1%であるのに対し、「親や兄弟姉妹・祖父母などが着付けの指導をしていた」（46.8%）、「和装に係る仕事や職業に興味関心があった」（33.1%）の2項目で全体平均を大きく上回っていることが見て取れる。また、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」（29.6%）「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」（28.3%）の2項目も全体平均を上回っており、回答者自身の身近に着物を着る環境があつて着付けを習い始めた場合や、仕事や興味関心として着付けを習った場合の継続率が高いことが分かる。

和装を習い始めたきっかけ×現在の継続状況

		(%)	
		CQ3 現在の継続状況	
		行現 つ在 ても い着 る付 けを	行現 つ在 ては い着 ない 付け を
n=30以上で			
全体+10pt以上			
全体+5pt以上			
全体-5pt以下			
全体-10pt以下			
全 体	n=		
親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた	2,198	23.1	76.9
親や兄弟姉妹・祖父母などが着付けの指導をしていた	930	26.8	73.2
友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた	158	46.8	53.2
学校の授業や、呉服店等が実施する着付け教室、文化施設等で行われたイベントで体験した	275	25.1	74.9
成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があるがあった	261	26.4	73.6
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	261	26.4	73.6
和装に係る仕事や職業に興味関心があった	98	29.6	70.4
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	277	24.9	75.1
その他	284	33.1	66.9
	460	28.3	71.7
	195	14.9	85.1

次に、継続理由に関する設問（CQ3補問1）では、「日本の文化だから」の回答比率が36.1%で最も高く、次いで「四季や行事によって着物を着分けて装うことが楽しい」の33.1%、「着物の着付け方や取り合わせ方など、奥深い文化をもっと知りたい」19.9%、「一緒に楽しむ仲間がいる」17.9%、「指導者や教授者として活動したい（している）」17.8%と続く。

始めたきっかけ（CQ1）とのクロス集計を行い、継続する理由ときっかけの関係性について分析を行うと、まず継続理由として最も回答比率が高かった「日本の文化だから」（36.1%）と回答した者の中でも「親や兄弟姉妹・祖父母などが着付けの指導をしていた」（59.5%）が大きく上回っており、続いて「成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があった」（47.8%）とこちらも全体平均を上回る回答比率となっている。

また、「四季や行事によって着物を着分けて装うことが楽しい」（33.1%）と回答した者の場合、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」（50.8%）、「成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があった」（50.7%）、「学校の授業や、呉服店等が実施する着付け教室、文化施設等で行われたイベントで体験した」（49.3%）、「和装に係る仕事や職業に興味関心があった」（45.7%）の項目で全体平均の回答比率を大きく上回る一方、「親や兄弟姉妹・祖父母などが着付けの指導をしていた」（27.0%）は全体平均を下回っている。

和装を習おうと思ったきっかけ×和装を続けている理由

		CQ3補問1 和装を続けている理由 (%)								
		動 指 導 し た 者 （ ～ し て 活	日 本 の 文 化 だ か ら	一 緒 に 楽 し む 仲 間 が い る	を わ せ 物 の 方 な 着 と な 知 り 、 け た 奥 方 い 深 や 取 文 り 化 合	し を 四 季 分 け て 事 装 う よ こ と が 着 楽 物	し 習 、 生 活 の く う ち と な 、 暮 ら	そ の 他	特 に 理 由 は な い	の 上 は 記 の 中 で 当 て は ま る も
n=30以上で		全体+10pt以上	全体+5pt以上	全体-5pt以下	全体-10pt以下					
全 体	n=	17.8	36.1	17.9	19.9	33.1	13.4	5.9	12.8	3.6
親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた	249	24.9	42.6	18.9	20.1	40.6	14.9	3.6	9.2	2.4
親や兄弟姉妹・祖父母などが着付けの指導をしていた	74	35.1	59.5	44.6	32.4	27.0	21.6	1.4	6.8	1.4
友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた	69	27.5	42.0	36.2	30.4	36.2	20.3	1.4	8.7	1.4
学校の授業や、呉服店等が実施する着付け教室、文化施設等で行われたイベントで体験した	69	20.3	43.5	44.9	40.6	49.3	26.1	2.9	7.2	1.4
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	29	34.5	58.6	44.8	48.3	41.4	37.9	6.9	6.9	-
成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があった	69	20.3	47.8	23.2	31.9	50.7	27.5	7.2	8.7	5.8
和装に係る仕事や職業に興味関心があった	94	21.3	44.7	19.1	31.9	45.7	27.7	6.4	16.0	2.1
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	130	9.2	38.5	18.5	21.5	50.8	22.3	9.2	13.8	4.6
その他	29	3.4	20.7	10.3	17.2	37.9	10.3	31.0	6.9	6.9

※n=30未満は参考値のため灰色

着物の着付けから離れたきっかけや理由（CQ3補問2）を見ると、「着物を着ていくような場面や機会がなくなった」（63.6%）が圧倒的に多く、「時間がなくなった」（15.1%）と「興味を失った」（14.3%）が続いている。

始めたきっかけ（CQ1）と離れたきっかけをクロス集計しその関係を分析すると、回答比率が最も高い「着物を着ていくような場面や機会がなくなった」と回答した者の場合、「成人式・結婚式

等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があった」(83.2%)、次に「親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた」(69.0%)が全体平均を大きく上回っている。

このほかの項目では、「時間がなくなった」と回答した者の場合、「親や兄弟姉妹・祖父母などが着付けの指導をしていた」(25.0%)、「友人、知人から習うことを勧められた・誘われた」(24.8%)、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」(21.7%)と、全体平均より回答比率がやや高い。

和装を習おうと思ったきっかけ×和装から離れたきっかけや理由

		CQ3補問2 和装から離れたきっかけ											(%)
		時間がなくなった	近くに習う場所がなく	着物の相談等ができる場	興味を失った	経済的に続けるのが難し	健康面、体調面で続ける	と一疎遠に着物なつたを楽しむ仲間	面や物を着がなくなつた場	着崩れする、動きにくい	め着付けに関する仕事を辞	その他	
n=30以上で													
全体+10pt以上													
全体+5pt以上													
全体-5pt以下													
全体-10pt以下													
全 体	n=	1,691	15.1	8.1	3.7	14.3	5.4	7.3	6.2	63.6	9.2	5.7	4.7
親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた	681	15.7	7.6	3.7	15.0	5.4	8.5	6.3	69.0	11.3	2.6	3.5	
親や兄弟姉妹・祖父母などが着付けの指導をしていた	84	25.0	15.5	10.7	7.1	6.0	13.1	8.3	52.4	11.9	3.6	3.6	
友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた	206	24.8	16.0	6.3	17.0	8.3	6.3	13.1	62.1	10.2	1.0	3.4	
学校の授業や、呉服店等が実施する着付け教室、文化施設等で行われたイベントで体験した	192	19.3	14.6	5.7	13.5	6.3	8.3	6.3	66.1	10.9	3.6	4.2	
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	69	21.7	11.6	4.3	13.0	8.7	5.8	10.1	56.5	18.8	7.2	2.9	
成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があった	208	10.6	9.1	3.8	12.5	6.7	7.7	10.6	83.2	11.5	4.8	1.9	
和装に係る仕事や職業に興味関心があった	190	16.3	9.5	6.8	12.6	8.9	12.1	10.5	57.9	7.4	21.1	1.1	
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	330	14.8	6.7	3.9	13.9	5.8	9.7	7.0	63.0	10.0	8.8	3.3	
その他	166	7.8	3.6	1.2	10.2	2.4	6.6	3.6	58.4	9.0	7.8	22.9	

■活動内容

自分又は他者へ着付けをする機会（CQ5）の結果では、「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時」(40.6%)の回答比率が最も高く、次いで「普段着として着物を着る時」(29.7%)、「親族や知人等に、他者への着付けを依頼された時」(21.9%)、「初詣等の年中行事に参加する時」(21.4%)、「観劇の際や茶会等の催事に参加する時」(16.1%)、「仕事着として着物を着る時」(7.8%)、「仕事として、他者への着付けを依頼された時」(5.9%)と続いている。

現在の継続状況（CQ3）と着付けをする機会をクロス集計しその関係を分析すると、「現在も着付けを行っている」と回答した者の中でも、「仕事着として着物を着る時」(48.8%)と「観劇の際や茶会等の催事に参加する時」(47.2%)、「仕事として他者への着付けを依頼された時」(43.1%)の3項目で回答比率が高く、仕事着が着物である場合、また、着付けを仕事として行っている者が継続して着付けを行っているほか、催事に参加する際に着物を着付ける嗜好性がある者も継続している傾向が見られる。

次に、継続している年数（CQ4）と着付けをする機会をクロス集計しその関係を分析すると、「20年以上」(16.7%)とした回答した者の場合、「観劇の際や茶会等の催事に参加する時」(28.2%)、

「親族や知人等に、他者への着付けを依頼された時」(28.1%)の回答比率が特に高く、そのほかの項目でも全体平均を上回っていることから、経験年数が長い者は特別な機会に着ることも含め普段から着付けを行っていることがうかがえる。

和装をする頻度(CQ6)と着付けをする機会をクロス集計してその関係を分析すると、「年数回程度」(17.3%)と回答した者の場合、「観劇の際や茶会等の催事に参加する時」(31.6%)の回答比率が高く、そのほか「初詣等の年中行事に参加する時」(26.1%)や、他者の着付けを行う回答比率も高い。

和装に関する月額費用(CQ7)と着付けをする機会をクロス集計してその関係を分析すると、月1万円以上支払っている比率が、「仕事着として着物を着る時」で35.5%と高く、「入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時」(15.5%)、「普段着として着物を着る時」(15.0%)で低い。

自分または他者へ着付けをする機会×現在の継続状況

		(%)	
		CQ3 現在の継続状況	
		て現 い 在 る も 着 付 け を 行 っ つ	て現 い 在 な い 着 付 け を 行 っ つ
n=30以上で			
全体+10pt以上			
全体+5pt以上			
全体-5pt以下			
全体-10pt以下			
n=			
全 体	2,198	23.1	76.9
普段着として着物を着る時	652	31.0	69.0
仕事着として着物を着る時	172	48.8	51.2
入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時	893	27.9	72.1
初詣等の年中行事に参加する時	471	31.0	69.0
観劇の際や茶会等の催事に参加する時	354	47.2	52.8
仕事として、他者への着付けを依頼された時	130	43.1	56.9
親族や知人等に、他者への着付けを依頼された時	481	31.0	69.0
その他	243	9.9	90.1

自分または他者へ着付けをする機会×和装を続けている年数

		(%)						
		CQ4 和装を続けている年数						
		1 年 未 満	1 〜 3 年 未 満	3 〜 5 年 未 満	5 〜 1 0 年 未 満	1 0 〜 2 0 年 未 満	2 0 年 以 上	3 年 以 上 合 計
n=30以上で								
全体+10pt以上								
全体+5pt以上								
全体-5pt以下								
全体-10pt以下								
n=								
全 体	2,198	22.9	24.1	14.7	12.6	9.1	16.7	53.0
普段着として着物を着る時	652	21.3	20.9	14.1	14.0	10.6	19.2	57.8
仕事着として着物を着る時	172	12.2	26.2	16.9	11.0	13.4	20.3	61.6
入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時	893	17.1	23.0	14.2	13.8	11.4	20.5	59.9
初詣等の年中行事に参加する時	471	20.2	21.2	13.6	11.9	12.7	20.4	58.6
観劇の際や茶会等の催事に参加する時	354	6.8	18.1	14.7	16.7	15.5	28.2	75.1
仕事として、他者への着付けを依頼された時	130	10.8	13.1	19.2	13.1	17.7	26.2	76.2
親族や知人等に、他者への着付けを依頼された時	481	12.3	18.5	12.7	15.6	12.9	28.1	69.2
その他	243	37.4	25.9	9.5	11.1	4.1	11.9	36.6

自分または他者へ着付けをする機会×和装をする頻度

		CQ6 和装に関する活動頻度 (%)						
		ほぼ毎日	週に2〜3回	週1回程度	月数回程度	月1回程度	年数回程度	年1回程度
n=30以上で								
全体+10pt以上								
全体+5pt以上								
全体-5pt以下								
全体-10pt以下								
n=								
全 体	2,198	3.2	4.3	6.3	6.7	5.6	17.3	56.4
普段着として着物を着る時	652	6.1	4.9	7.1	6.3	7.5	20.1	48.0
仕事着として着物を着る時	172	14.0	23.3	5.2	14.5	8.1	15.1	19.8
入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時	893	2.5	3.7	8.0	7.1	6.2	18.7	54.0
初詣等の年中行事に参加する時	471	2.8	3.4	6.6	8.5	7.4	26.1	45.2
観劇の際や茶会等の催事に参加する時	354	2.5	6.5	7.9	11.9	10.7	31.6	28.8
仕事として、他者への着付けを依頼された時	130	10.8	12.3	7.7	10.8	7.7	25.4	25.4
親族や知人等に、他者への着付けを依頼された時	481	2.7	4.0	7.1	6.2	6.0	23.1	50.9
その他	243	2.1	2.5	5.3	5.3	3.3	9.5	72.0

自分または他者へ着付けをする機会×和装に関する月額費用

		CQ7 和装に関する月額費用 (%)											
		5,000円未満	5,000円未満	5,000円未満	5,000円未満	5,000円未満	5,000円未満	5,000円未満	5,000円未満	5,000円未満	5,000円未満	5,000円以上	合計
n=30以上で													
全体+10pt以上													
全体+5pt以上													
全体-5pt以下													
全体-10pt以下													
n=													
全 体	2,198	69.9	15.4	5.5	2.9	1.3	1.1	0.7	0.4	0.5	0.3	2.1	14.7
普段着として着物を着る時	652	69.6	15.3	5.5	3.1	1.4	1.1	0.9	0.3	0.3	0.5	2.0	15.0
仕事着として着物を着る時	172	42.4	22.1	11.6	6.4	2.3	1.2	2.3	0.6	1.2	0.6	9.3	35.5
入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時	893	67.0	17.6	6.3	3.2	1.3	0.9	0.6	0.2	0.3	0.1	2.5	15.5
初詣等の年中行事に参加する時	471	62.2	16.8	7.4	4.5	2.1	1.5	1.1	0.6	0.6	0.2	3.0	21.0
観劇の際や茶会等の催事に参加する時	354	50.8	22.6	8.5	7.3	2.5	2.0	1.4	0.8	0.3	0.3	3.4	26.6
仕事として、他者への着付けを依頼された時	130	50.0	18.5	11.5	3.8	3.1	2.3	2.3	0.8	2.3	-	5.4	31.5
親族や知人等に、他者への着付けを依頼された時	481	64.4	15.8	6.4	3.3	1.2	2.1	0.8	0.2	0.8	0.8	4.0	19.8
その他	243	87.7	7.4	1.6	1.2	0.8	0.8	-	-	-	-	0.4	4.9

■経験年数

和装の経験年数（CQ4）を見ると、「1～3年未満」（24.1%）が最も回答比率が高く、次いで「1年未満」（22.9%）、「3～5年未満」（14.7%）となっている。また、経験年数が長いほど「現在も着付けを行っている」という回答が多い。

経験年数（CQ4）と始めたきっかけ（CQ1）との関係をクロス集計から分析すると、「親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた」と回答した者の場合や、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」と回答した者で10年以上の経験年数を回答している割合が高い。

次に、経験年数（CQ4）と習い始めた当初の習い方を選んだ理由（CQ2補問）との関係をクロス集計から分析すると、「特に理由はない、わからない」（20.6%）と回答している者の中でも、「20

和装を続けている年数×和装に関する興味関心や魅力

n=30以上で

全体+10pt以上

全体+5pt以上

全体-5pt以下

全体-10pt以下

n=

CQ8 和装に関する興味関心や魅力

し
季
節
に
あ
わ
せ
た
着
物
を
楽

匠
等
職
人
が
持
つ
独
特
の
質
感
や
意
物

を
楽
し
め
る

生
地
や
色
柄
の
取
り
合
わ
れ
せ

見
映
え
が
良
い
に
統
着
的
な
い
霧
く
囲
と
気

お
祭
り
の
場
に
統
着
的
な
い
霧
く
囲
と
気

着
物
を
着
る
こ
と
に
な
る
、
落
ち

て
日
本
の
外
に
統
知
的
な
れ
文
化
て
い
と
る
し

そ
の
他

の
上
は
記
な
い
中
で
当
て
は
ま
る
も

全 体	2,198	37.2	17.0	27.0	23.5	32.9	28.1	1.6	23.8
1年未満	504	25.8	9.1	16.5	17.9	23.2	21.8	1.0	36.5
1～3年未満	529	33.5	16.6	23.4	25.3	30.6	26.3	0.8	21.0
3～5年未満	324	38.9	17.3	29.6	26.2	33.0	26.5	2.2	20.4
5～10年未満	276	43.8	20.3	31.2	27.5	38.4	30.4	0.4	19.2
10～20年未満	199	44.7	23.1	38.7	26.1	39.7	38.7	3.0	15.6
20年以上	366	47.5	22.4	34.7	21.6	41.8	33.3	3.6	21.3

上記のクロス集計の結果から、和装の経験ありと回答した者の傾向や特徴をまとめると、以下のとおりである。

1) 習い始めたきっかけと継続率に見える傾向と特徴

親族が着物の着付けの指導をしていたことや、仕事として興味関心を持っていたことをきっかけとして着物の着付けを習った者の継続率が特に高い傾向にあり、自分が関わっている趣味やメディアを通じて興味関心を持って着付けを習い始めたと回答した者の継続率も高いことがうかがえる。このうち、親族が着物の着付けを指導していたと回答した者は、自身が着付けの指導者として活動している率が全体平均より高い傾向にある。

一方、習い始めたきっかけと辞めてしまった理由との関係を見ると、冠婚葬祭等への出席をきっかけとして着物の着付けを習った者については、着付けを身に付けていく場面や機会がなくなってしまったことで、着物を着付けなくなったと回答している傾向にある。

2) 活動内容と継続している年数から見える傾向と特徴

着物を仕事着として身に付けている場合や、仕事で他者に着付けを行う者といった、自身の仕事と着物が密接に関係している者のほか、催事に参加する折に着物を身に付けて出かける嗜好性がある者も継続して着付けを行っている傾向が見られる。

また、経験年数 20 年以上の者の場合、観劇や年中行事などで身に付けるという回答比率が高いほか、ほかの機会にも着物を身に付けるという傾向が見え、普段から着付けを行っていることがうかがえる。

3) 経験年数と習い始めたきっかけや魅力から見える傾向と特徴

経験年数と習い始めたきっかけとの関係を見た場合、親族等が着物を着付けていた場合や、自分の趣味等との関わりで着物の着付けを習った者ほど、経験年数が長い傾向が見られる。

また、習い始めた当初の方法と経験年数の関係からは、経験年数が長いもしくは1年未満の経験年数と回答した者で、特に理由がないとの回答比率が高く、身近に教えてもらえる人がいたり、普段から自然に着物を着たりしていて、教室などに通って習うような学び方をしていなかったことも推察される。

経験年数と興味関心や魅力との関係を見ると、経験年数が長くなればなるほどに、季節に応じた着物の楽しみ方、着物などの取り合わせ方など、自分でどのように着物を組み合わせて楽しむかを和装の魅力・興味関心として捉える傾向にある。1年未満の経験年数では、当てはまるものがないとの回答比率が高くなっていることから、経験を重ねることで和装の魅力を感じるようになっていくものと推察される。

③分析結果のまとめ

和装の経験・体験の有無や、経験者や参加体験者、未経験者の和装の活動状況や興味関心の度合いを把握することを目的としてウェブアンケートを利用した調査を実施した。

調査結果からは、着物を身に付けたことがない者が半数ほどいること、また、身に付けたことのある者の中で、多くの者は着物を着付けてもらっている実情が明らかになった。未経験者が多いことについては、設問群の回答結果からも分かるように、興味関心が持てない、自分の趣味に合わない者が数多くいる一方で、そもそも着物を知らなかった者がいること、また、体験できる場所や機会がなかった、あるいはそのような場や機会そのものを知らなかった結果、参加体験に至らなかった者もいることも明らかになった。

経験者の場合、親族が着物を身に付けていた、あるいは、自分の趣味と着物に関わりがあったりしたことが、着付けを習い始めるきっかけとなったことが分かる。一方、参加体験者の多くは、成人式などの冠婚葬祭へ参加の折に着物を着る機会を得ている傾向が強く、経験者・参加体験者・未経験者のそれぞれに、和装を知る機会、接することができる機会や環境に大きな開きがあることが、調査結果の分析から見えてくる。

経験者の活動状況等については、約7割は継続していない状況で、継続している者については仕事着として着物を着装している者や着付けを指導している者、催事などに出かける際に着物を身に付けている者が多い傾向にある。一方で、継続していない者が続けられなかった事情からは、着物を着ていく場や機会が無くなったとの回答比率が高く、着物が普段着ではなく、催事や行事の折に身に付けていく特別な衣装としての側面が強く認識されているものと推察される。また、時間がなくなった、習う場所がなくなった等の事情もあることが傾向として見え、着物を着ていきやすい、着物を着ていきたいと思える催事や機会が増えたり、回答者の環境が整ったりすれば、着物を着ることを再び始める可能性があることも推察される。

着付けをしてもらって着物を身に付けたことがある者については、着付けをしたきっかけと体験した機会のクロス集計から、冠婚葬祭への出席が着物を着る、とりわけ大きな体験機会となることが分かる。このほかにも、親族が着物を着ていた場合には、年中行事の折や自宅、観劇や茶会への参加の折に着物を着る機会を得ているほか、友人・知人から勧められた場合では、観劇等への参加、観光地を訪れた際や、着物イベント等、きっかけによって冠婚葬祭以外にも着付けの体験機会があることが確認できる。

また、着物を着付けてもらったことがある者が、これまで着付けを習うに至らなかった理由や事情からは、着物を着ても興味関心を持てなかった者もいる一方で、通いやすい場所や時間帯、教室の雰囲気分かるようになると習ってもよいと考えている者が一定数いることも確認できた。このことから、着付けの指導を行っている者が日時や調整が可能かどうかを告知したり、教室等の見学

ができる機会を設けたりするなど、無理のない範囲で工夫を行うことで、習いに行きたい人に広く機会を提供できる可能性があることが分かる。その一方で、通いやすい場所や費用が手頃な方が良く、という観点から考えれば、着付け教室に通う方法以外にも、身近に着物の着付けを知っている者がいれば、そういった者に着付けを教えてもらうことも、無理なく着物に親しみ、着付けを習ったり体験したりすることができる一つの方法であると考えられる。

上記の結果から、着物を着てもらい興味関心を持つ者を増やしていくことを想定した場合、すでに行われている、着物の着付けを体験できるイベント等の機会を広く周知することはもちろんのこと、どのような体験ができるか等も詳しく伝えることで、体験参加者を増やす可能性が広がるものと推察される。

現在では、着物を着装する機会は、冠婚葬祭など特別な機会に限られていることが多くなっている。しかしながら着物は着装を楽しめる文化であり、着付け方や着物の種類を覚えることで、普段の生活でも場面や四季に応じた取り合わせなどを楽しむことができる。このように様々な魅力を持っていることを、イベント等の折に丁寧に発信することも、和装に興味関心を持ってもらうために必要な取り組みであると考えられる。

(4) 礼法

本調査では、礼法への興味関心や経験の有無等の把握を目的として2万人にウェブアンケート調査を実施した。

アンケートでは、礼法を稽古場等で習ったような経験者、イベント等で体験した体験者、全く経験がない未経験者がいることが想定されることから、礼法の経験・体験の有無について回答する設問を設けた。その上で、下記の表のように経験の深度に応じた専用の設問群を設けることで、各回答者の礼法への興味関心の有無などの把握を行った。

■分野設問の項目

「1. 習っている (いた)、あるいは教える立場にいる (いた)」と回答した者への設問	DQ 1 : 礼法を習い始めたきっかけ DQ 2 : 礼法を始めた当初の習い方 DQ 2 補問 : 当初の習い方を選んだ理由 DQ 3 : 現在の継続状況 DQ 3 補問 1 : 礼法を続けている理由 DQ 3 補問 2 : 礼法から離れたきっかけや理由 DQ 4 : 礼法を続けている (続けていた) 年数 DQ 5 : 礼法に関する活動内容 DQ 6 : 礼法に関する活動頻度 DQ 7 : 礼法に関する月額費用 DQ 8 : 礼法に関する興味関心や魅力
「2. 学校の授業や職場の研修、イベント等で礼法に関する体験をしたことはある」と回答した者への設問	DQ 9 : 礼法を体験したきっかけ DQ 10 : 礼法を体験した場 DQ 11 : 礼法を習いやすい状況 DQ 12 : 礼法に支払える月額費用 DQ 13 : 礼法を習っていない理由 DQ 14 : 礼法に対する印象やイメージ DQ 15 : 礼法に関する興味関心や魅力
「3. 今まで経験したことはない」と回答した者への設問	DQ 16 : 参加してみたい礼法の体験内容 DQ 17 : 参加しやすい礼法の体験条件 DQ 18 : 礼法を体験したことがない理由 DQ 19 : 礼法に対する印象やイメージ DQ 20 : 礼法に関する興味関心や魅力

①単純集計の結果について

■全調査対象者への設問

礼法を経験した者、あるいは全く触れたことがない者がどの程度いるのかは、統計調査等では明らかとなっていない。加えて、礼法の「経験」にも深度があり、いわゆる稽古場や教室等で習った経験がある者や、稽古場や教室等で教える立場にいる者、あるいは、イベント等で礼法の体験をしたことがある者等がいると想定される。経験の有無を大別するならば、教室等で習ったあるいは教える立場にいる者、イベント等で体験をした者、そして経験をしたことがない者に分けることができると考えられる。

本設問では、上記の想定に基づき、礼法の経験の有無とあわせて、経験の深度を図る選択肢を設けて、実態の把握を行った。

礼法の経験の有無

礼法を「習っている(いた)、あるいは教える立場にいる(いた)」(以下、「経験あり」)比率は2.6%(512人)、「学校の授業や職場の研修、イベント等で礼法に関する体験をしたことはある」(以下、「参加体験あり」)17.1%(3,413人)、「今まで経験したことはない」(以下「未経験」)80.4%(16,075人)となった。

男女別では、女性の「経験あり」が3.3%、「参加体験あり」が20.8%と、男性より高い。

年齢別では、「経験あり」「参加体験あり」と回答した者は18～20代と70代以上で全体平均より高く、30～60代は全体平均より低い回答比率である。

			(%)		
n=			習っている(いた)、あるいは教える立場にいる(いた)	学校の授業や職場の研修、イベント等で礼法に関する体験をしたことはある	今まで経験したことはない
全 体			20,000	2.6 17.1	80.4
性別	男	9,645	1.8 13.2	85.0	
	女	10,202	3.3 20.8	75.9	
	それ以外／答えたくない	153	2.6 11.1	86.3	
年齢	18～20代	2,781	3.8 18.6	77.6	
	30代	2,691	3.0 14.6	82.4	
	40代	3,496	1.9 13.6	84.5	
	50代	3,178	1.5 13.8	84.7	
	60代	3,002	2.1 16.8	81.2	
	70代以上	4,852	3.1 22.4	74.6	

集計表 F Q 4 : 礼法の経験の有無

■礼法を「習っている（いた）、あるいは教える立場にいる（いた）」と回答した者への設問（DQ1～DQ8）

本設問群では、礼法を経験したと回答した者が、どのようなきっかけや機会で礼法を習うようになったのか、興味関心を持っているのか等、経験の実態を把握するためのアンケートを実施した。

礼法を習い始めたきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」の25.2%で、次いで「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」23.0%、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」20.5%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（33.1%）、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（28.0%）、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」（15.4%）の回答比率が全体平均より高い。

次に年齢別で見ると、若年層ほど「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」という回答比率が高く、高齢層では「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」という選択肢の回答比率が高い傾向が見られる。

経験年数別では、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」については、経験年数が長いほど回答比率が高くなっている。



集計表 DQ1：礼法を習い始めたきっかけ

（その他の内容）仕事の関係で、親に強制的に習わされた、秘書検定の勉強で関連があったから

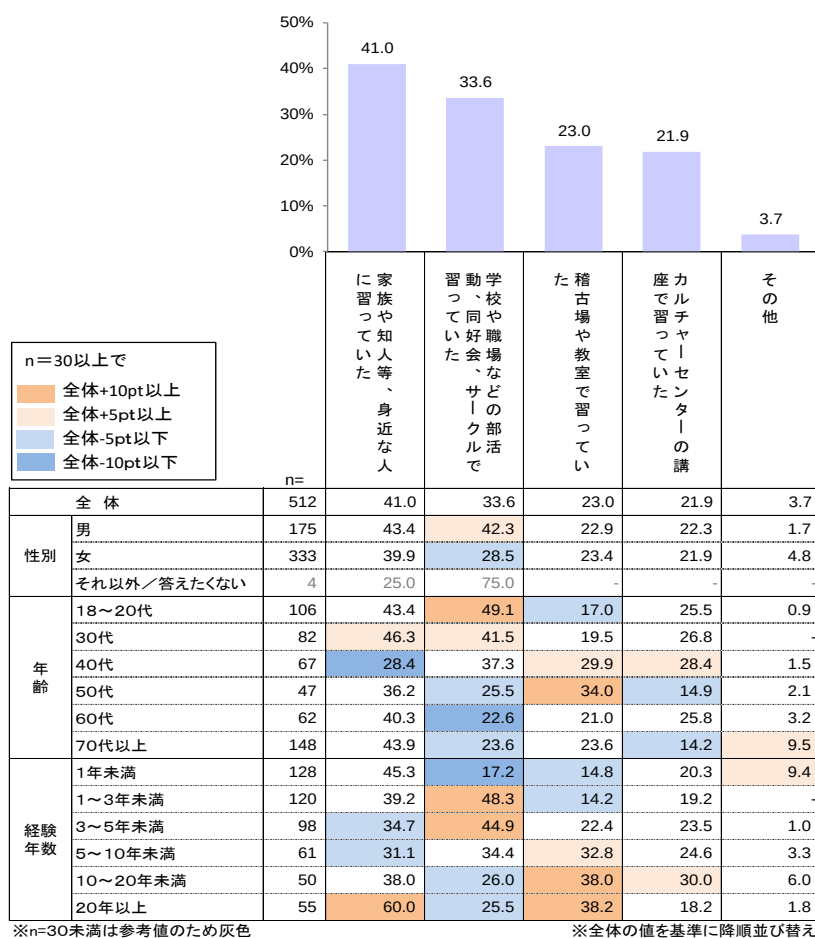
礼法を始めた当初の習い方

全体平均で最も回答比率が高いのは「家族や知人等、身近な人に習っていた」の41.0%で、次いで「学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた」33.6%、「稽古場や教室で習っていた」23.0%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では男性で「学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた」(42.3%)の回答比率が高い。

年齢別では、10～30代で「学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた」の回答比率が全体平均より高く、50代以上は全体平均より低い。その一方で40～50代では「稽古場や教室で習っていた」の回答比率が高い傾向にある。

経験年数別で見ると、20年以上と回答した者では、「家族や知人等、身近な人に習っていた」(60.0%)、「稽古場や教室で習っていた」(38.2%)の回答比率が高い傾向にある。一方、1～5年未満と回答した者は、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた」の回答比率が全体平均より高い傾向にあり、年齢や経験年数によって、習い始めた方法に違いが見られる。



集計表 DQ2：礼法を始めた当初の習い方

(その他の内容) テレビの講習会、生活の中で知った、学校の授業

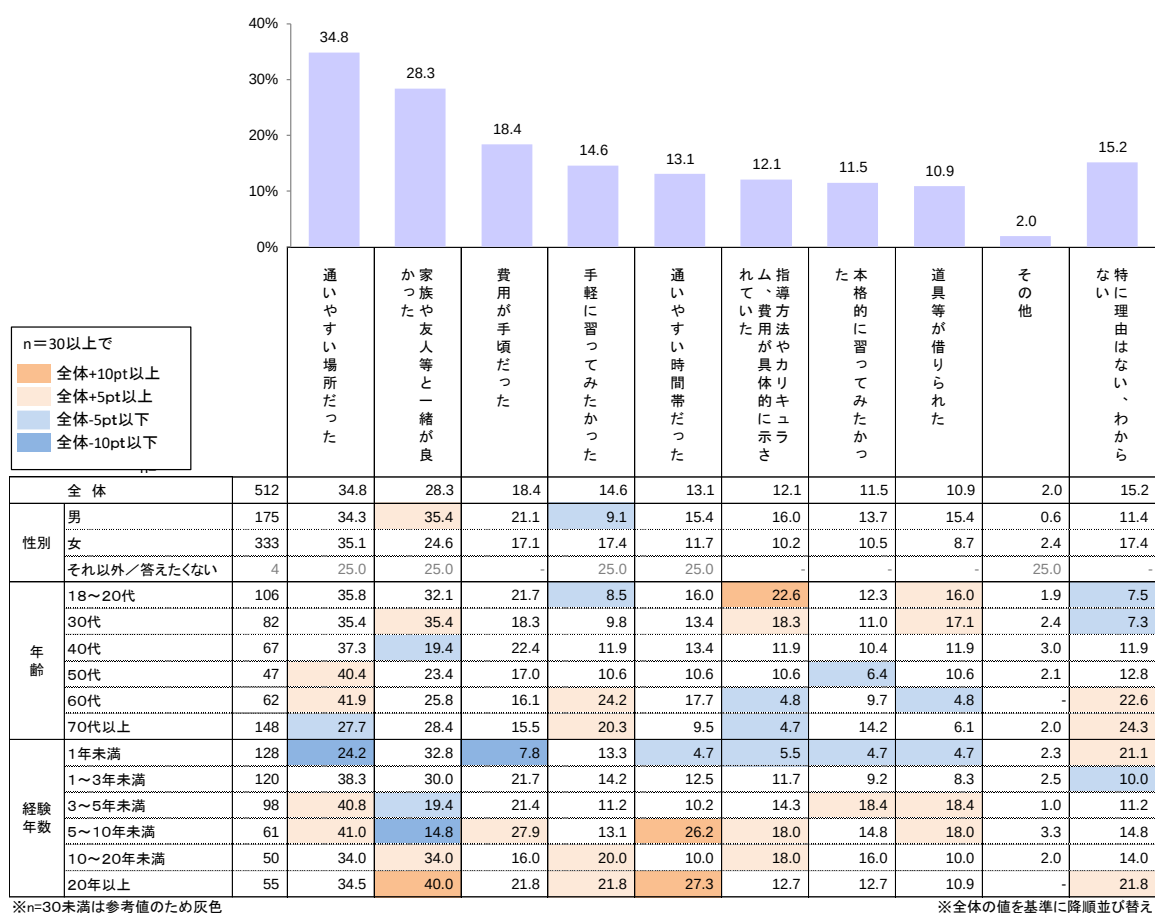
当初の習い方を選んだ理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「通いやすい場所だった」の34.8%で、次いで「家族や友人等と一緒に良かった」28.3%、「費用が手頃だった」18.4%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では男性で「家族や友人等と一緒に良かった」(35.4%)の回答比率が高く、「手軽に習ってみたかった」(男性9.1%)の回答比率が低い傾向にある。

また、年齢別では、10～30代で「指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていた」の回答比率が高い傾向にあるほか、50～60代で「通いやすい場所だった」、60代以上で「手軽に習ってみたかった」の回答比率が高くなっている。

経験年数別で見ると、20年以上と回答した者は、「家族や友人等と一緒に良かった」(40.0%)「通いやすい時間帯だった」(27.3%)の回答比率が高い。また、5～10年未満でも「通いやすい時間帯だった」(26.2%)の回答比率が高いほか、その他の選択肢でも全体平均を上回る項目が多い傾向が見られた。



集計表 DQ2補問：当初の習い方を選んだ理由

(その他の内容) 授業の一環・授業の必須科目だった、指導者に魅力を感じたから、空手を習っていて空手で礼法はとても関係しているから、教室のカリキュラムに含まれていた

現在の継続状況

継続状況については、「続けている」38.5%（197人）、「続けていない」61.5%（315人）と、続けていないとの回答比率が高いことが分かる。

男女別で見た場合、男性で「続けている」が62.3%と高く、女性で25.8%と低い。

次に年齢別で見ると、年代が上っていくに従って、継続率が下がっていく傾向が見られる。

経験年数別では、1年未満（78.9%）、1～3年未満（69.2%）の者で「続けていない」の比率が全体平均の回答比率を上回っている。

			(%)	
			続けている	続けていない
n=				
全 体		512	38.5	61.5
性別	男	175	62.3	37.7
	女	333	25.8	74.2
	それ以外／答えたくない	4	50.0	50.0
年齢	18～20代	106	65.1	34.9
	30代	82	58.5	41.5
	40代	67	46.3	53.7
	50代	47	34.0	66.0
	60代	62	12.9	87.1
	70代以上	148	16.9	83.1
経験年数	1年未満	128	21.1	78.9
	1～3年未満	120	30.8	69.2
	3～5年未満	98	50.0	50.0
	5～10年未満	61	45.9	54.1
	10～20年未満	50	48.0	52.0
	20年以上	55	58.2	41.8

※n=30未満は参考値のため灰色

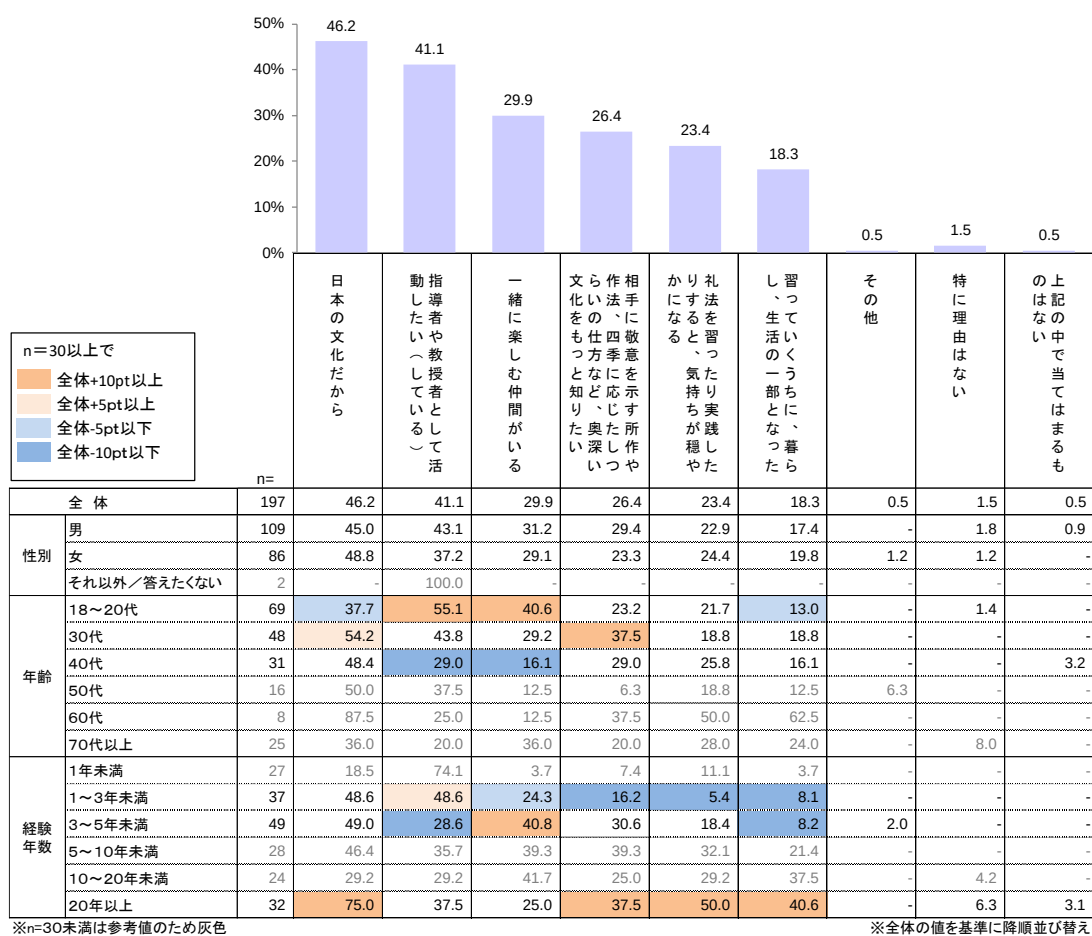
集計表 DQ3：現在の継続状況

礼法を続けている理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「日本の文化だから」の46.2%で、次いで「指導者や教授者として活動したい（している）」41.1%、「一緒に楽しむ仲間がいる」29.9%と続く。

全体平均の回答比率と、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、年齢別では18～20代で「指導者や教授者として活動したい（している）」(55.1%)、「一緒に楽しむ仲間がいる」(40.6%)の回答比率が高い傾向にあるほか、30代で「相手に敬意を示す所作や作法、四季に応じたしつらいの仕方など、奥深い文化をもっと知りたい」(37.5%)の回答比率が高い。一方、40代は18～20代で回答比率が高かった項目の回答比率が低いことが分かる。

また、経験年数別で見た場合、20年以上と回答した者は、「日本の文化だから」(75.0%)、「相手に敬意を示す所作や作法、四季に応じたしつらいの仕方など、奥深い文化をもっと知りたい」(37.5%)、「礼法を習ったり実践したりすると、気持ちが穏やかになる」(50.0%)、「習っていくうちに、暮らし、生活の一部となった」(40.6%)の回答比率が高く、経験してきた年数に比例して選ぶ選択肢が増えているものと考えられる。



集計表 DQ3補問1：礼法を続けている理由

（その他の内容）人としてより良く生きる為

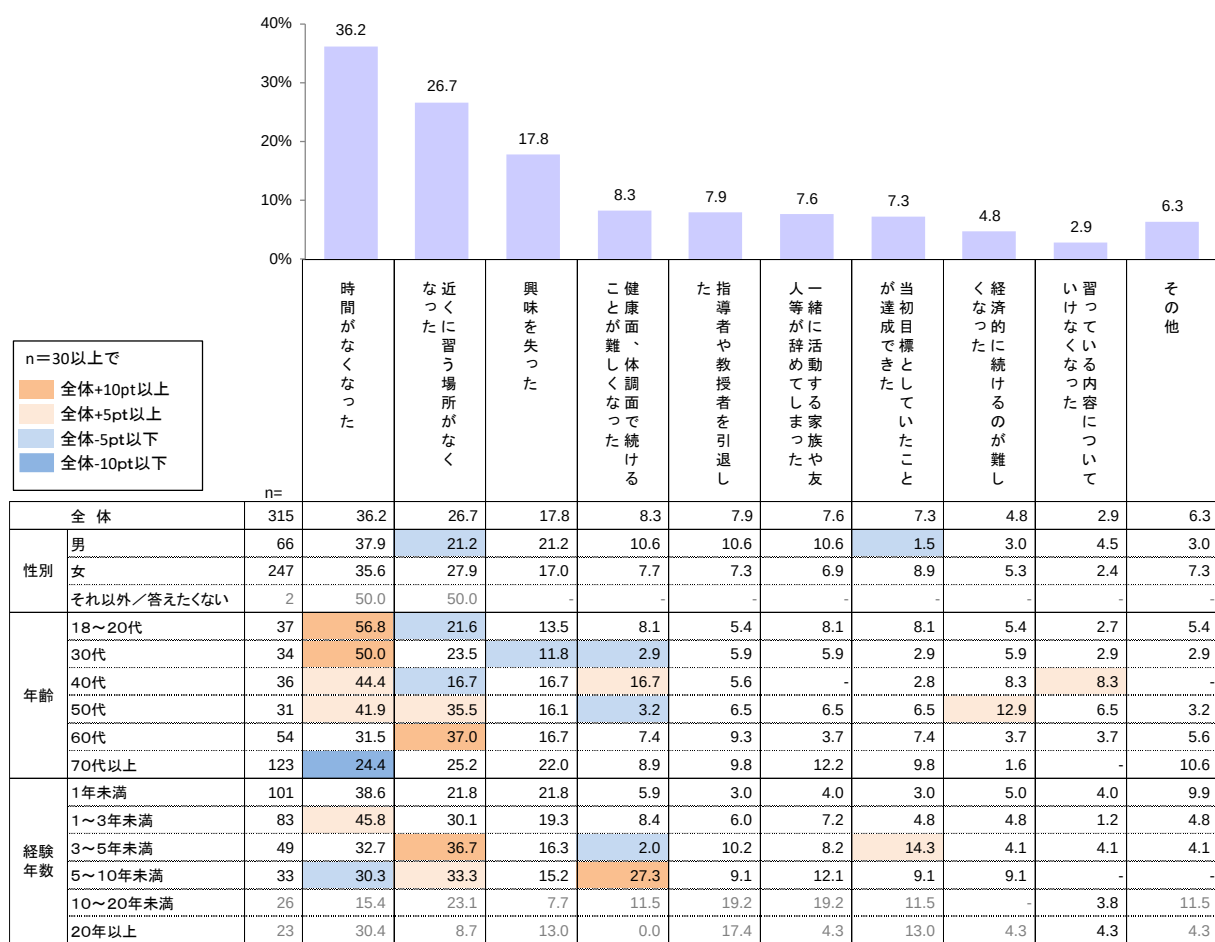
礼法から離れたきっかけや理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「時間がなくなった」の36.2%で、次いで「近くに習う場所がなくなった」26.7%、「興味を失った」17.8%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「近くに習う場所がなくなった」(21.2%)、「当初目標としていたことが達成できた」(1.5%)の回答比率が低い。

次に年齢別に見た場合、10～50代で「時間がなくなった」の回答比率が全体平均より高く、50～60代では「近くに習う場所がなくなった」の回答比率が高い。

経験年数別では、3～10年未満と回答した者で、「近くに習う場所がなくなった」の回答比率が高い。また、5～10年未満と回答した者の場合、「健康面、体調面で続けることが難しくなった」(27.3%)、「近くに習う場所がなくなった」(33.3%)の回答比率が高く、「時間がなくなった」(30.3%)の回答比率は低い。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 DQ3補問2：礼法から離れたきっかけや理由

(その他の内容) 学校を卒業した、必要性が無くなった、幼い頃の習い事だったので

礼法を続けている（続けていた）年数

全体平均で最も回答比率が高いのは「1年未満」の25.0%で、次いで「1～3年未満」23.4%、「3～5年未満」19.1%と続く。全体平均で3年以上続けている（いた）人の比率は51.6%となっている。

男女別では、3年以上の継続者が、男性で62.3%（175人中109人）、女性で46.5%（333人中155人）となっており、男性の方が長く続けている（いた）人の割合が高いことが分かる。

									(%)
			1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上	3年以上
全 体			25.0	23.4	19.1	11.9	9.8	10.7	51.6
性別	男	175	20.6	17.1	25.1	14.3	13.7	9.1	62.3
	女	333	27.3	26.1	16.2	10.8	7.8	11.7	46.5
	それ以外／答えたくない	4	25.0	75.0					-
年齢	18～20代	106	23.6	27.4	22.6	15.1	9.4	1.9	49.1
	30代	82	20.7	25.6	25.6	12.2	6.1	9.8	53.7
	40代	67	13.4	26.9	20.9	13.4	11.9	13.4	59.7
	50代	47	19.1	25.5	10.6	21.3	19.1	4.3	55.3
	60代	62	41.9	19.4	11.3	4.8	3.2	19.4	38.7
	70代以上	148	28.4	18.9	18.2	8.8	10.8	14.9	52.7

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 DQ4：礼法を続けている（続けていた）年数

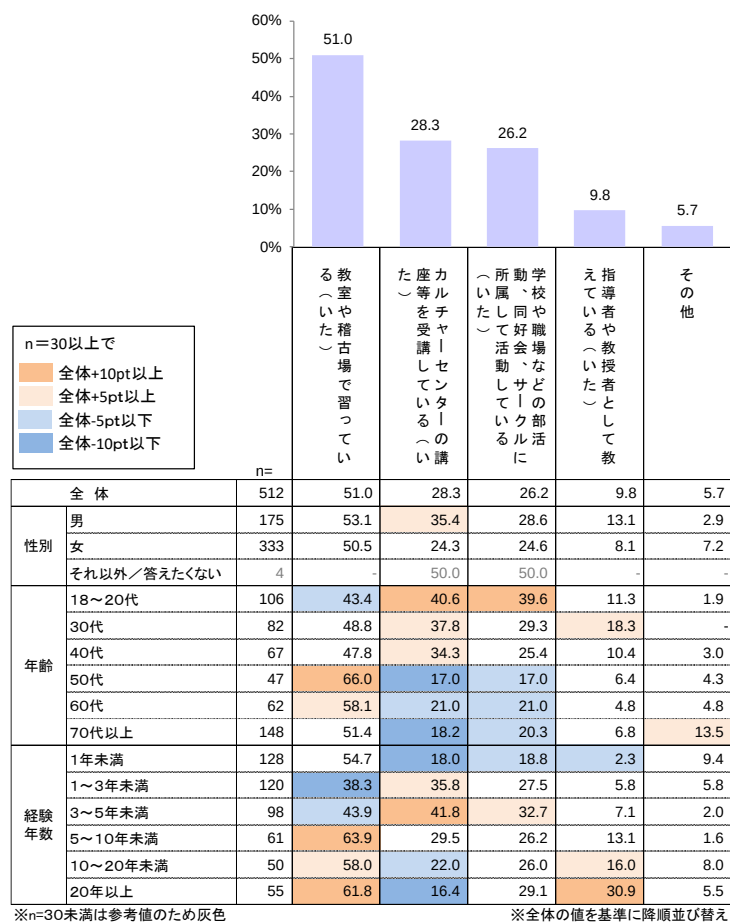
礼法に関する活動内容

全体平均で最も回答比率が高いのは「教室や稽古場で習っている（いた）」の51.0%で、次いで「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」28.3%、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」26.2%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」(35.4%)の回答比率が高い。

次に、年齢別では10～40代では「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」の回答比率が高く、また、18～20代では、「学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）」の回答比率も高い。一方、50～60代では「教室や稽古場で習っている（いた）」の回答比率が高い傾向が見られる。

経験年数別では、経験年数が5年以上と回答した者で「教室や稽古場で習っている（いた）」の回答比率が、1～5年未満では「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」の回答比率が高い傾向が見える。また、10年以上と回答した者では、「指導者や教授者として教えている（いた）」の回答比率も高いことが分かる。



集計表 DQ5：礼法に関する活動内容

(その他の内容) 親から教わっていた、日常生活の一部(普段の生活の中で実践している)

礼法に関する活動頻度

全体平均で最も回答比率が高いのは「週1回程度」の21.3%で、次いで「月数回程度」17.0%、「年1回程度」16.8%と続く。週1回以上活動している（いた）比率は48.2%（512人中247人）である。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で週1回以上活動している（いた）比率が60.0%（175人中105人）、女性で42.0%（333人中140人）となっている。

年齢別では、年齢が高くなるほど週1回以上活動している（いた）比率が低くなっている。

また、経験年数別では、経験年数が1～5年未満の者で「週1回程度」の回答比率が高い。

											(%)
			ほぼ毎日	週に2～3回	週1回程度	月数回程度	月1回程度	年数回程度	年1回程度	週1回以上	
n =											
全 体			512	12.9	14.1	21.3	17.0	10.9	7.0	16.8	48.2
性別	男	175	20.0	22.9	17.1	22.3	4.0	9.1	4.6	60.0	
	女	333	9.0	9.3	23.7	14.4	14.4	6.0	23.1	42.0	
	それ以外／答えたくない	4	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	25.0	50.0	
年 齢	18～20代	106	23.6	26.4	17.9	16.0	4.7	5.7	5.7	67.9	
	30代	82	17.1	25.6	14.6	20.7	9.8	4.9	7.3	57.3	
	40代	67	14.9	13.4	20.9	17.9	10.4	7.5	14.9	49.3	
	50代	47	2.1	12.8	34.0	17.0	14.9	4.3	14.9	48.9	
	60代	62	8.1	3.2	25.8	17.7	21.0	4.8	19.4	37.1	
	70代以上	148	7.4	4.1	21.6	14.9	10.8	10.8	30.4	33.1	
経 験 年 数	1 年未満	128	19.5	3.9	12.5	12.5	13.3	3.9	34.4	35.9	
	1～3 年未満	120	8.3	24.2	30.0	12.5	10.8	3.3	10.8	62.5	
	3～5 年未満	98	7.1	21.4	24.5	22.4	7.1	8.2	9.2	53.1	
	5～1 0 年未満	61	9.8	13.1	26.2	27.9	11.5	6.6	4.9	49.2	
	1 0～2 0 年未満	50	14.0	14.0	12.0	16.0	10.0	18.0	16.0	40.0	
	2 0 年以上	55	20.0	3.6	20.0	16.4	12.7	10.9	16.4	43.6	

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 DQ6：礼法に関する活動頻度

礼法に関する月額費用

全体平均で最も回答比率が高いのは月額「5,000 円未満」の 51.2%で、次いで「5,000 円以上～10,000 円未満」18.2%、「10,000 円以上～15,000 円未満」10.0%と続く。なお、月額1万円以上支出している（いた）と回答した比率は30.7%（512 人中 157 人）である。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較した場合、まず男女別では、男性で月額1万円以上支出している（いた）割合が45.7%（175 人中 80 人）と、女性の22.8%（333 人中 76 人）より高い。

また、年齢別では、18～20 代の年齢層で、月額1万円以上支出している（いた）割合（53.8%）が高いことが分かる。

経験年数別では、経験年数が1年未満の者は月額「5,000 円未満」（77.3%）の回答比率が高い。

			(%)												
			5 0 0 0 円 未 満	1 5 0 , 0 0 0 0 0 0 円 未 満	1 1 5 0 , 0 0 0 0 0 0 円 未 満	2 1 0 5 , 0 0 0 0 0 0 円 未 満	2 2 5 0 , 0 0 0 0 0 0 円 未 満	3 2 0 5 , 0 0 0 0 0 0 円 未 満	3 3 5 0 , 0 0 0 0 0 0 円 未 満	4 3 0 5 , 0 0 0 0 0 0 円 未 満	4 4 5 0 , 0 0 0 0 0 0 円 未 満	5 4 0 5 , 0 0 0 0 0 0 円 未 満	5 0 , 0 0 0 0 円 以 上	合 1 計 0 , 0 0 0 0 円 以 上	
n=															
全 体			512	51.2	18.2	10.0	6.4	3.5	3.7	1.2	1.2	1.0	1.8	2.0	30.7
性 別	男	175	38.9	15.4	13.7	12.0	5.1	5.1	2.3	2.3	1.1	1.7	2.3	45.7	
	女	333	58.3	18.9	7.8	3.6	2.7	3.0	0.6	0.6	0.9	1.8	1.8	22.8	
それ以外／答えたくない		4	-	75.0	25.0	-	-	-	-	-	-	-	-	25.0	
年 齢	18～20代	106	29.2	17.0	19.8	8.5	9.4	1.9	2.8	0.9	2.8	4.7	2.8	53.8	
	30代	82	41.5	18.3	6.1	12.2	4.9	8.5	2.4	2.4	1.2	-	2.4	40.2	
	40代	67	41.8	17.9	11.9	10.4	3.0	7.5	1.5	-	1.5	3.0	1.5	40.3	
	50代	47	44.7	27.7	8.5	4.3	4.3	2.1	-	2.1	-	4.3	2.1	27.7	
	60代	62	69.4	17.7	3.2	3.2	-	-	-	1.6	-	-	4.8	12.9	
	70代以上	148	70.9	16.2	7.4	2.0	-	2.7	-	0.7	-	-	-	12.8	
経 験 年 数	1年未満	128	77.3	10.9	2.3	5.5	0.8	0.8	-	1.6	-	-	0.8	11.7	
	1～3年未満	120	45.8	28.3	11.7	3.3	3.3	3.3	1.7	0.8	0.8	0.8	-	25.8	
	3～5年未満	98	30.6	15.3	17.3	12.2	7.1	9.2	3.1	1.0	3.1	1.0	-	54.1	
	5～10年未満	61	42.6	21.3	9.8	13.1	6.6	1.6	-	-	1.6	1.6	1.6	36.1	
	10～20年未満	50	38.0	20.0	16.0	4.0	2.0	2.0	2.0	2.0	-	8.0	6.0	42.0	
	20年以上	55	60.0	12.7	5.5	-	1.8	5.5	-	1.8	-	3.6	9.1	27.3	

※n=30未満は参考値のため灰色

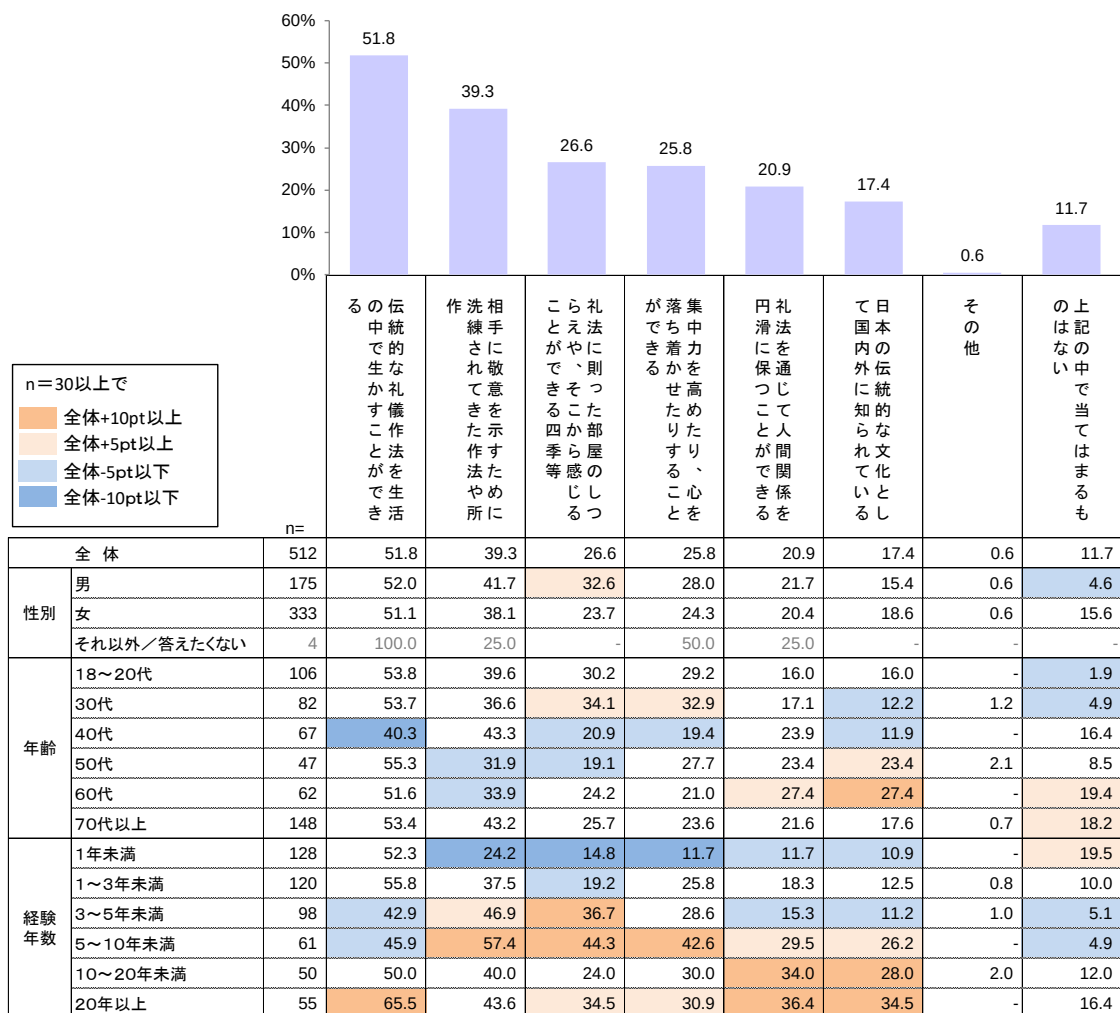
集計表 DQ7：礼法に関する月額費用

礼法に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「伝統的な礼儀作法を生活の中で生かすことができる」の51.8%で、次いで「相手に敬意を示すために洗練されてきた作法や所作」39.3%、「礼法に則った部屋のしつらえや、そこから感じることができる四季等」26.6%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「礼法に則った部屋のしつらえや、そこから感じることができる四季等」(32.6%)の回答比率が高い傾向にある。

経験年数別では、経験年数5年以上の者で「礼法を通じて人間関係を円滑に保つことができる」、「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」の回答比率が高い。また、20年以上と回答した者では、「伝統的な礼儀作法を生活の中で生かすことができる」(65.5%)も含めて、いずれの選択肢の回答比率も高いことから、経験してきた長さにより関心が異なる傾向がうかがえる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 DQ8：礼法に関する興味関心や魅力

(その他の内容) 自分を高められる

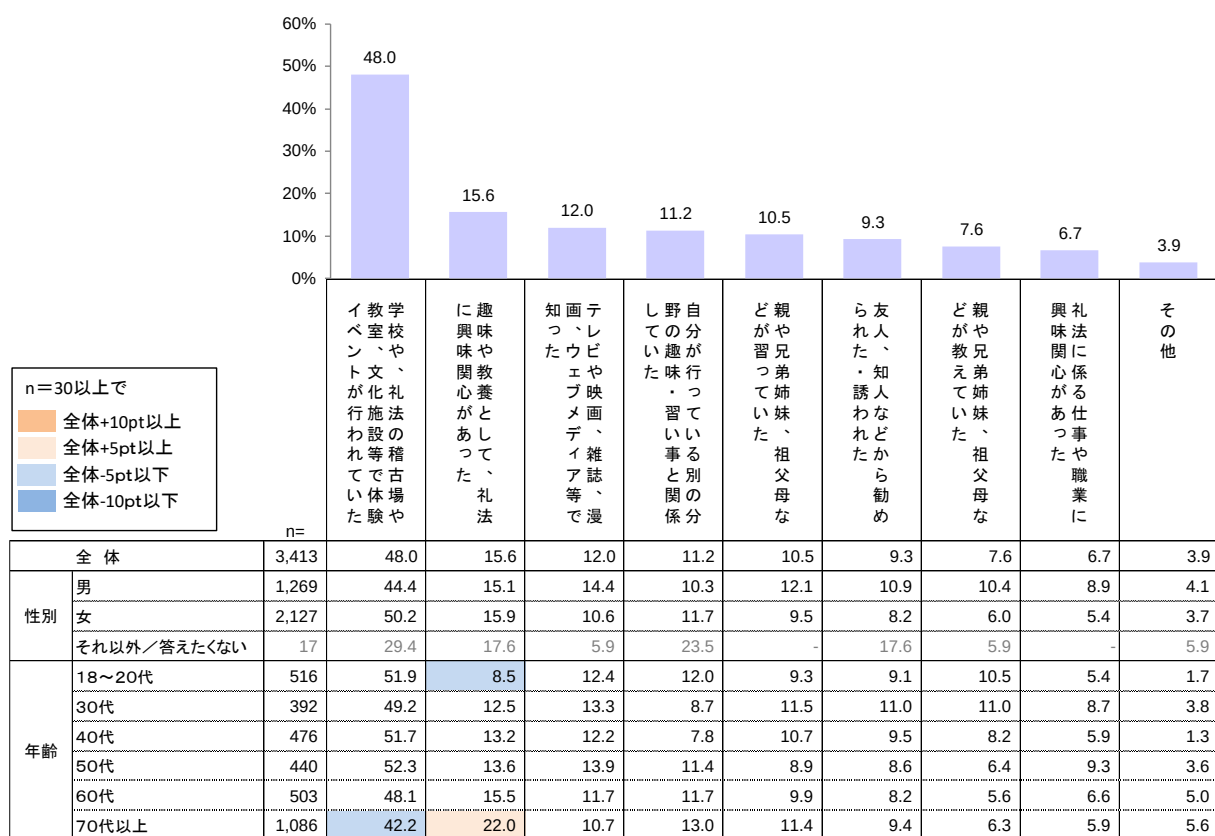
■礼法を「学校の授業や職場の研修、イベント等で礼法に関する体験をしたことはある」と回答した者への設問（DQ9～DQ15）

本設問では、礼法をイベント等で体験したと回答した者が、どのようなきっかけや機会に礼法を体験したのか、また、どの程度礼法に興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

礼法を体験したきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは「学校や、礼法の稽古場や教室、文化施設等で体験イベントが行われていた」の48.0%で、次いで「趣味や教養として、礼法に興味関心があった」15.6%、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」12.0%と続く。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較すると、70代以上では「趣味や教養として、礼法に興味関心があった」の回答比率が高く、対照的に18～20代では回答比率が低い傾向にある。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

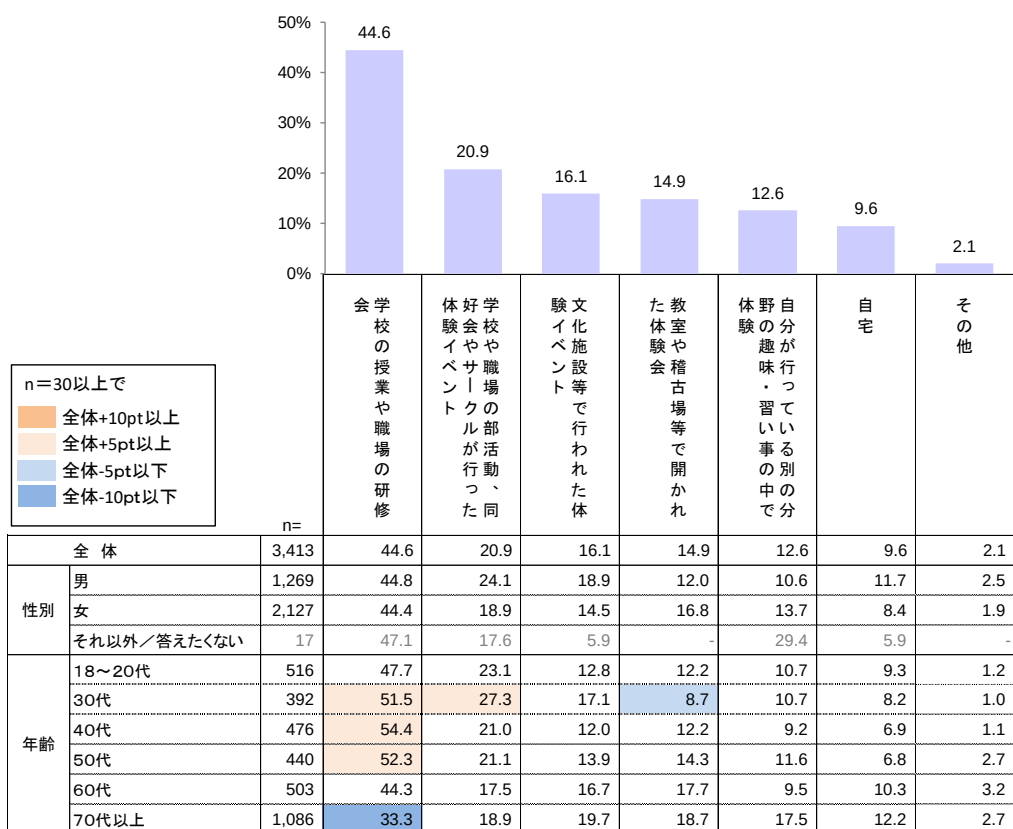
集計表 DQ9：礼法を体験したきっかけ

（その他の内容）会社での研修の一環、学校の授業で習った、仕事で、ビジネスマナーとして

礼法を体験した場

全体平均で最も回答比率が高いのは「学校の授業や職場の研修会」の44.6%で、次いで「学校や職場の部活動、同好会やサークルが行った体験イベント」20.9%、「文化施設等で行われた体験イベント」16.1%となる。

全体平均と年齢別の回答比率とを比較すると、30～50代では「学校の授業や職場の研修会」の回答比率が全体平均より高い一方、70代以上では大きく下回っている。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

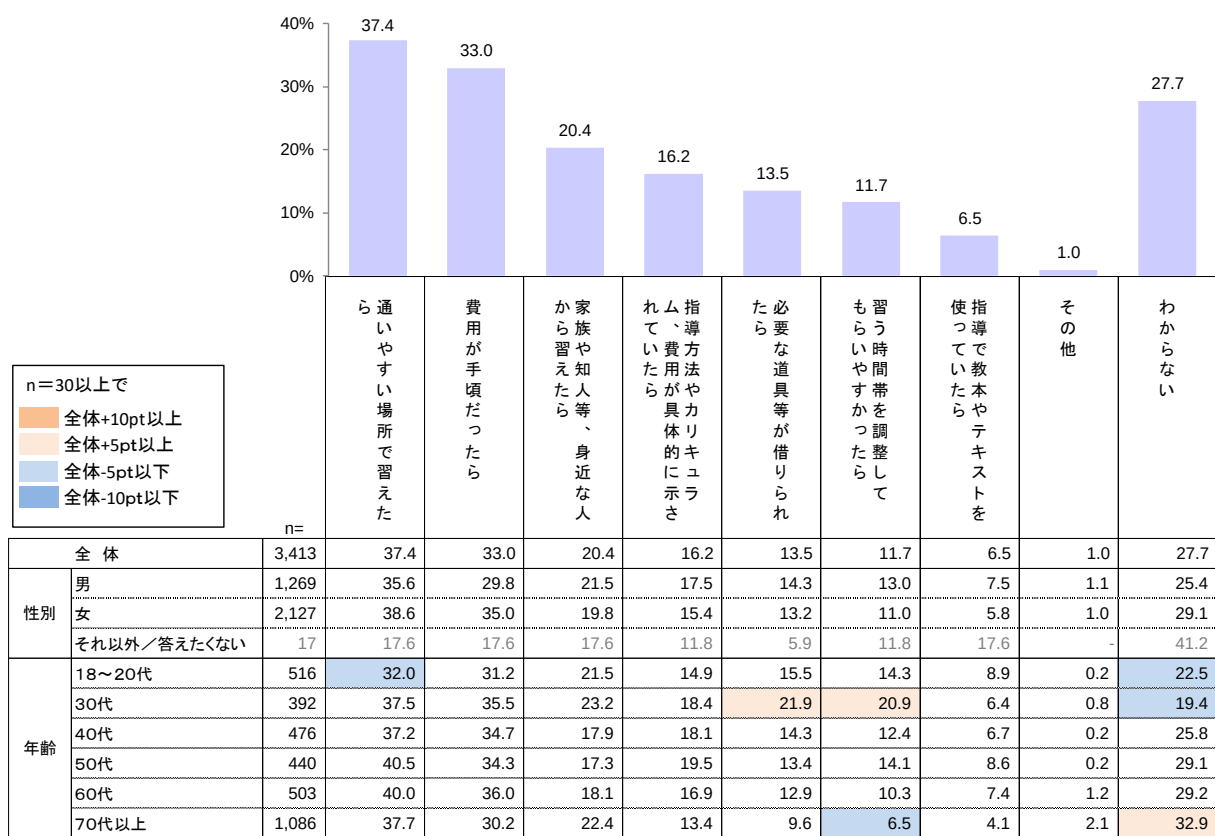
集計表 D Q10：礼法を体験した場

(その他の内容) 冠婚葬祭施設 (ホテル・結婚式場)、禅寺に1泊しての修養会、神社、YouTube、テレビ番組

礼法を習いやすい状況

全体平均で最も回答比率が高いのは「通いやすい場所で習えたら」の37.4%で、次いで「費用が手頃だったら」33.0%、少し離れて「家族や知人等、身近な人から習えたら」20.4%と続く。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較すると、30代で「必要な道具等が借りられたら」(21.9%)、「習う時間帯を調整してもらいやすかったら」(20.9%)の回答比率が高くなっている。また、年齢が高くなるにつれて、「わからない」の回答比率が全体平均よりも高くなっている傾向も見取れる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 DQ11：礼法を習いやすい状況

(その他の内容) オンラインでなら、指導者との相性、同じ趣味の人がいたら

礼法に支払える月額費用

全体平均で最も回答比率が高いのは「5,000 円未満」の 74.9%で、次いで「5,000 円以上～10,000 円未満」15.4%、「10,000 円以上～15,000 円未満」3.8%となった。月額 1 万円以上支払ってもよいと回答した比率は 9.6%（3,413 人中 329 人）である。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で月額 1 万円以上支払ってもよいという回答が 14.8%（1,269 人中 188 人）あったのに対し、女性は 6.4%（2,127 人中 137 人）にとどまり、男女で差が見られる。

また、年齢別では、年齢が若いほど月額 1 万円以上支払ってもよいという回答が増える傾向がある。

			(%)											
			5 0 0 0 円 未 満	1 5 0 , 0 0 0 0 0 0 円 以 上 未 満	1 1 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 満	2 1 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 満	2 2 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 満	3 2 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 満	3 3 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 満	4 3 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 満	4 4 5 0 0 0 0 0 0 0 円 未 満	5 4 0 5 0 0 0 0 0 0 円 未 満	5 0 円 以 上	合 1 計 0 0 0 0 円 以 上
n=														
全 体			3,413	74.9	15.4	3.8	2.3	1.2	1.0	0.4	0.2	0.2	0.3	9.6
性 別	男	1,269	67.7	17.5	5.6	3.7	2.1	1.6	0.8	0.1	0.2	0.3	0.4	14.8
	女	2,127	79.3	14.2	2.7	1.5	0.7	0.6	0.2	0.2	0.2	0.1	0.2	6.4
	それ以外／答えたくない	17	64.7	11.8	-	5.9	-	-	-	-	-	5.9	11.8	23.5
年 齢	18～20代	516	62.4	17.6	6.8	5.0	2.5	2.1	0.6	0.6	0.8	1.2	0.4	20.0
	30代	392	66.8	15.3	7.7	3.8	2.6	1.3	1.5	0.3	-	-	0.8	17.9
	40代	476	68.3	18.7	3.8	3.4	1.9	1.9	0.8	0.4	0.4	-	0.4	13.0
	50代	440	78.4	14.8	2.3	1.8	1.1	0.9	0.2	-	0.2	-	0.2	6.8
	60代	503	81.5	13.9	2.2	1.4	-	0.4	0.2	-	-	0.2	0.2	4.6
	70代以上	1,086	82.2	14.0	2.3	0.6	0.5	0.2	-	-	-	-	0.2	3.8

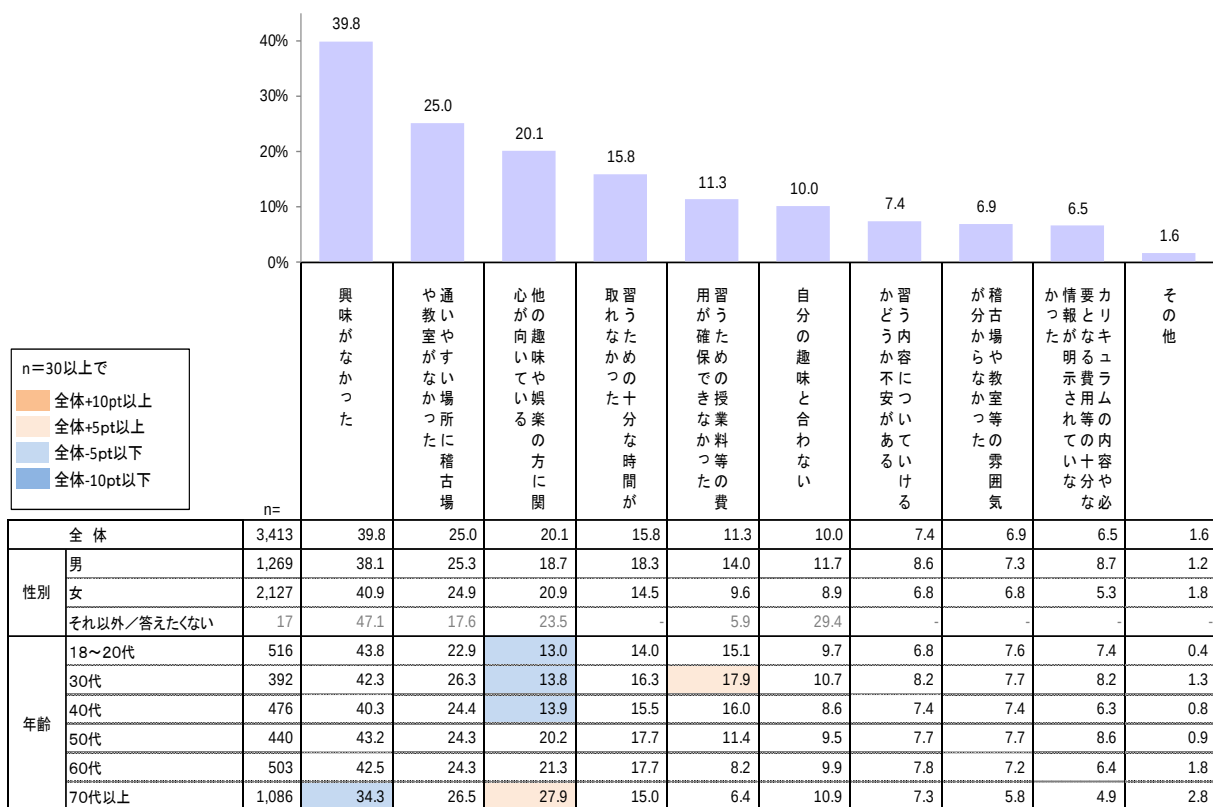
※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 DQ12：礼法に支払える月額費用

礼法を習っていない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「興味がなかった」の39.8%で、次いで「通いやすい場所に稽古場や教室がなかった」25.0%、「他の趣味や娯楽の方に興味が向いている」20.1%となった。

年齢別では、10～40代で「習うための授業料等の費用が確保できなかった」の回答比率が高い一方、年齢が高いほど「他の趣味や娯楽の方に興味が向いている」の回答比率が高まっている。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

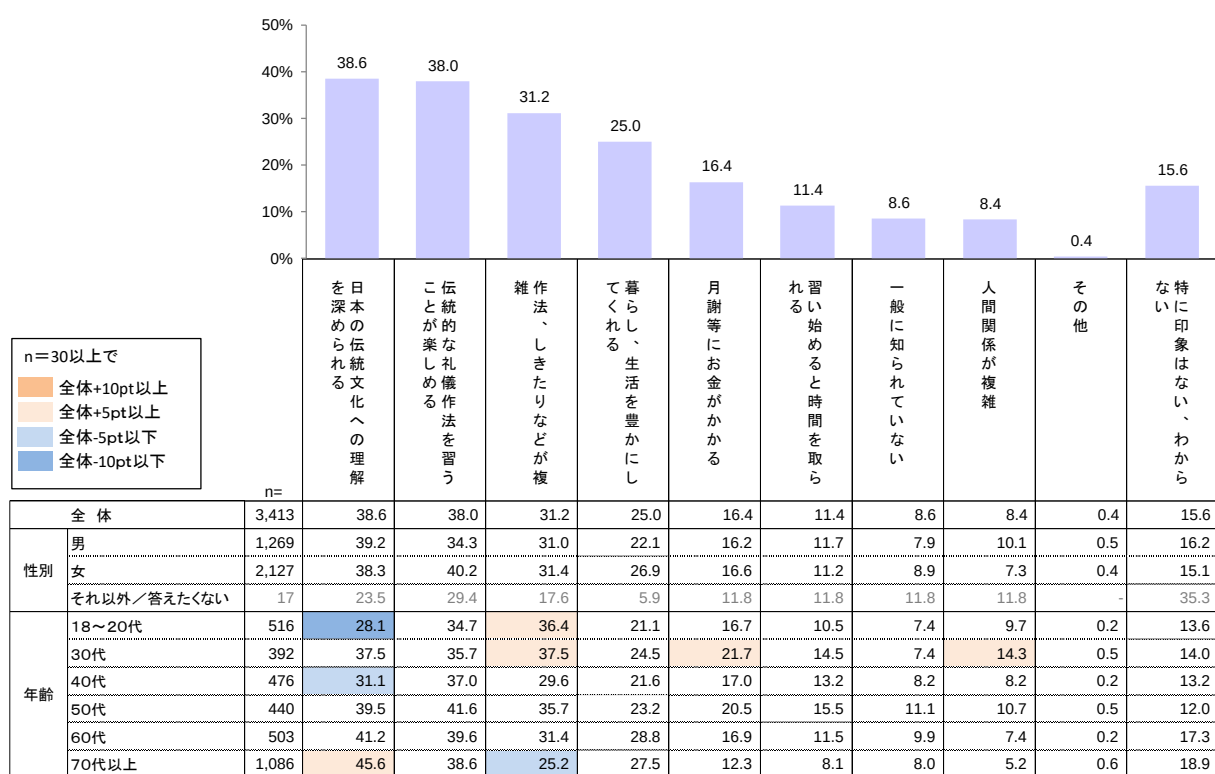
集計表 DQ13：礼法を習っていない理由

（その他の内容）必要性を感じなかった、家族からの教示で十分、学校で十分やった、語りや能書きが多く方向が違う（堅苦しさ）

礼法に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは「日本の伝統文化への理解を深められる」の38.6%で、次いで「伝統的な礼儀作法を習うことが楽しめる」38.0%、「作法、しきたりなどが複雑」31.2%となった。

年齢別では、10～30代で「作法、しきたりなどが複雑」という回答比率が高く、70代以上で低い傾向が見られる。また、30代では「月謝等にお金がかかる」(21.7%)、「人間関係が複雑」(14.3%)というマイナスイメージの回答比率が高い一方、70代以上では「日本の伝統文化への理解を深められる」(45.6%)というプラスイメージの回答比率が高くなっている。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 DQ14：礼法に対する印象やイメージ

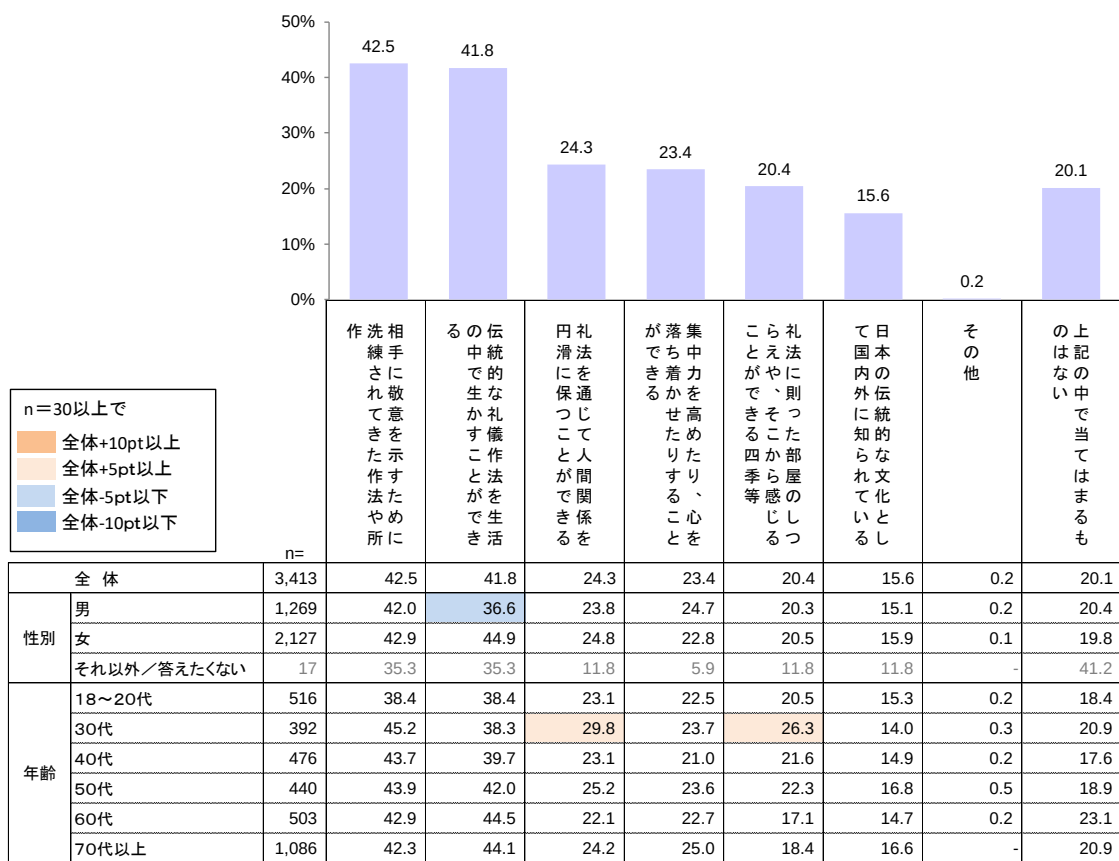
(その他の内容) 堅苦しく煩雑で無駄が多い、独自ルールや作法の乱立で何が正しいのか分からない、知っていれば無難に過ごせる、一般常識として必要最低限の知識を学びたい

礼法に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「相手に敬意を示すために洗練されてきた作法や所作」の42.5%で、次いで「伝統的な礼儀作法を生活の中で生かすことができる」41.8%、「礼法を通じて人間関係を円滑に保つことができる」24.3%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別で見た場合、男性で「伝統的な礼儀作法を生活の中で生かすことができる」(36.6%)の回答比率が低いことが分かる。

年齢別で見ると、30代の「礼法を通じて人間関係を円滑に保つことができる」(29.8%)、「礼法に則った部屋のしつらえや、そこから感じることができる四季等」(26.3%)の回答比率が高い傾向にある。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 D Q 15 : 礼法に関する興味関心や魅力

(その他の内容) 日本の礼儀作法なので何でも知っておいて損な事はない、普段の姿勢所作がきれいになり、若く見られる

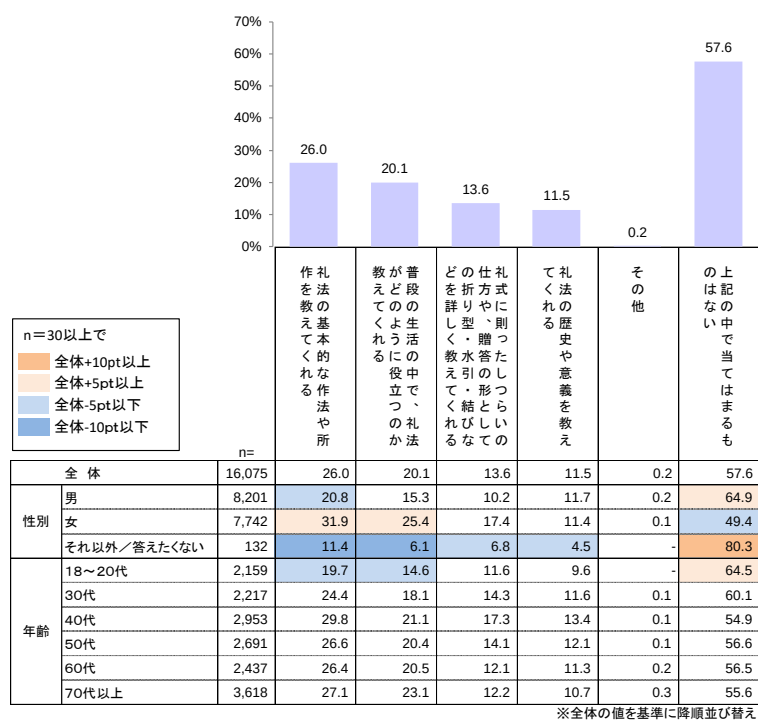
■ 礼法を「今まで経験したことはない」と回答した者への設問（DQ16～DQ20）

本設問では、礼法を経験したことがないと回答した者が、もし礼法を体験するなら、どのような内容や機会なら参加したいか、また、礼法に対してどの程度、興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

参加してみたい礼法の体験内容

全体平均で最も回答比率が高いのは「上記の中で当てはまるものはない」の57.6%で、次いで「礼法の基本的な作法や所作を教えてくれる」26.0%、「普段の生活の中で、礼法がどのように役立つのか教えてくれる」20.1%、「礼式に則ったしつらいの仕方や、贈答の形としての折り型・水引・結びなどを詳しく教えてくれる」13.6%となった。

男女別では、男性で、「上記の中で当てはまるものはない」（64.9%）と全体平均を上回るほか、「礼法の基本的な作法や所作を教えてくれる」（20.8%）は全体平均を下回っている。対照的に、女性は「礼法の基本的な作法や所作を教えてくれる」（31.9%）、「普段の生活の中で、礼法がどのように役立つのか教えてくれる」（25.4%）となっており、男女差が大きい傾向が見られる。



集計表 DQ16：参加してみたい礼法の体験内容

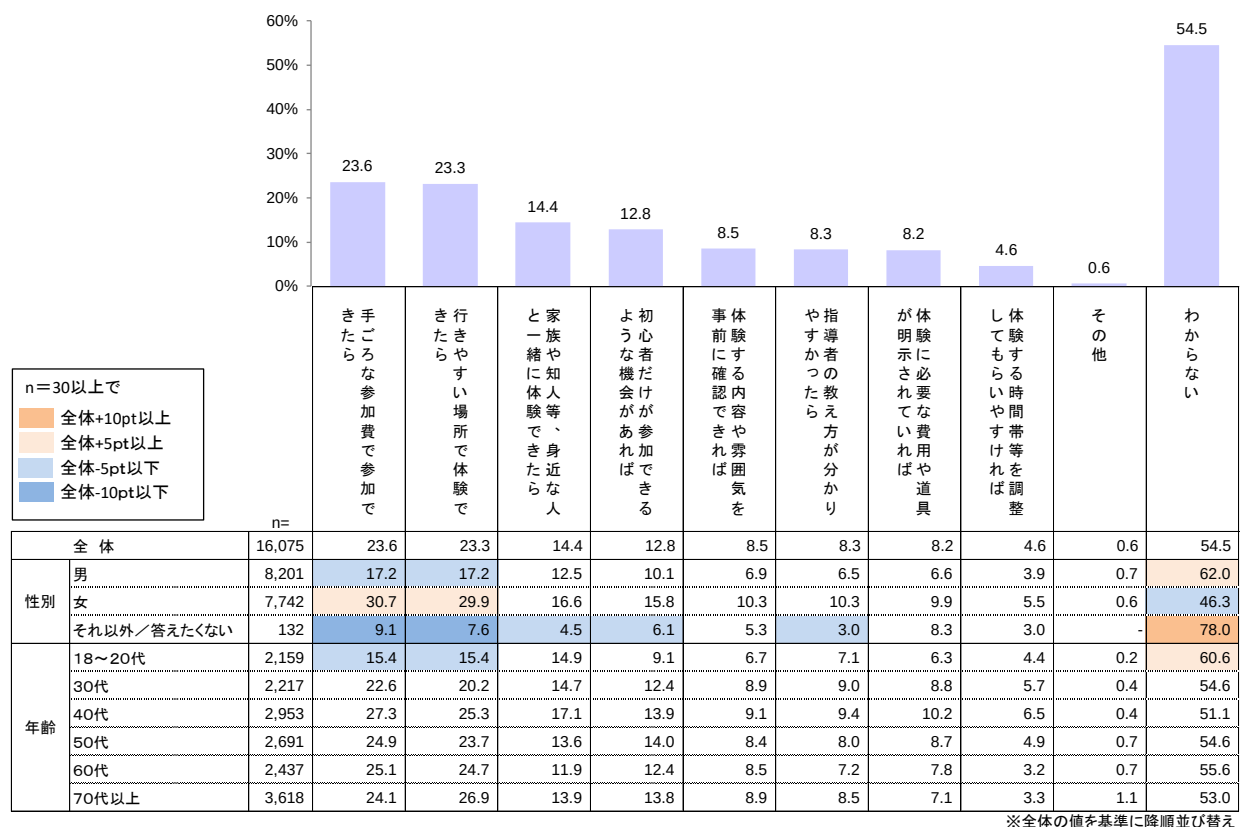
（その他の内容）車椅子利用者の礼法があるのなら知りたい、優しい指導者

参加しやすい礼法の体験条件

全体平均で最も回答比率が高いのは「わからない」の54.5%で、次いで「手ごろな参加費で参加できたら」23.6%、「行きやすい場所で体験できたら」23.3%となる。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「わからない」(62.0%)の回答比率が高い一方で、「手ごろな参加費で参加できたら」(17.2%)、「行きやすい場所で体験できたら」(17.2%)の回答比率が低い傾向にある。一方、女性は、「わからない」(46.3%)の回答比率は低く、「手ごろな参加費で参加できたら」(30.7%)、「行きやすい場所で体験できたら」(29.9%)の回答比率が高いことから、男女で礼法に対する関心の差があると推察される。

また、年齢別で見ると、18～20代で「わからない」(60.6%)の回答比率が高く、「手ごろな参加費で参加できたら」(15.4%)、「行きやすい場所で体験できたら」(15.4%)の回答比率が共に低いことから、若い世代が礼法の体験そのものに関心を持っていないことが推察される。



DQ17：参加しやすい礼法の体験条件

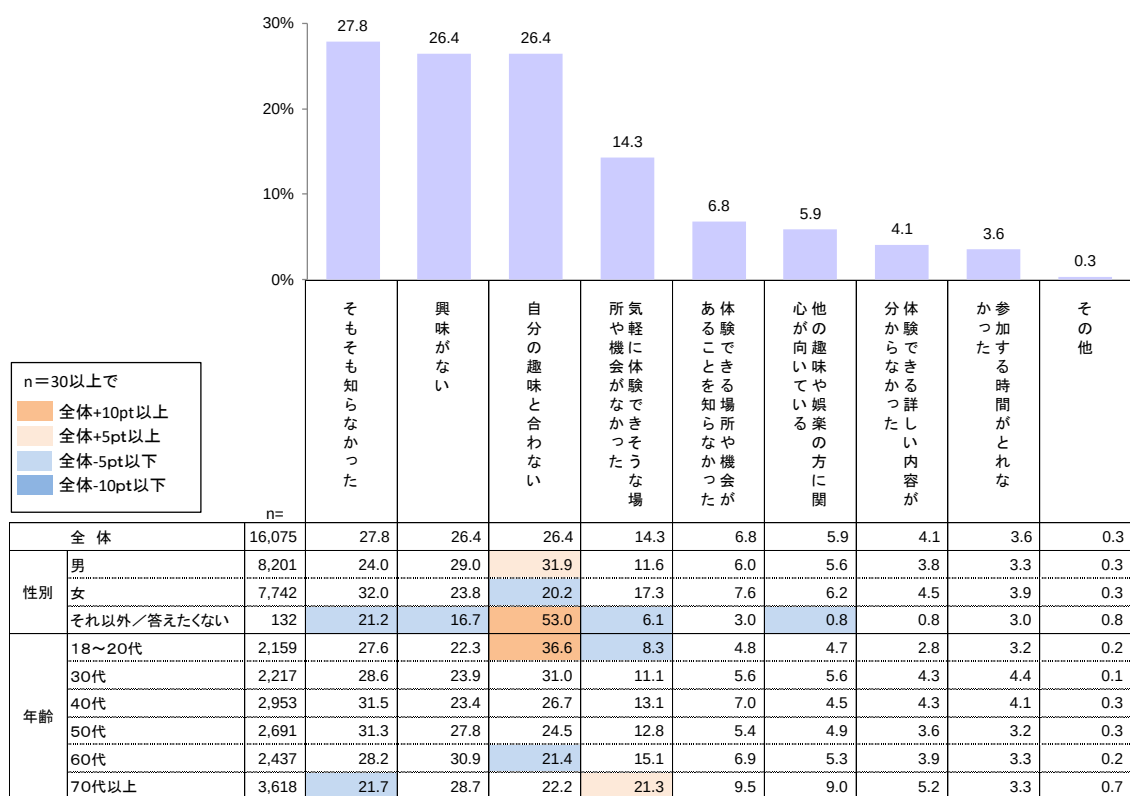
(その他の内容) 無料体験、障害者でも参加可、指導者の人となりが分かったら(怖い人は嫌)、堅苦しくなければ、一人参加しやすい

礼法を体験したことがない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「そもそも知らなかった」の27.8%で、次いで「興味がない」、「自分の趣味と合わない」（ともに26.4%）となった。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で「自分の趣味と合わない」（31.9%）の回答比率が高い。

また、年齢別で見ると、18～20代で「自分の趣味と合わない」（36.6%）の回答比率が高く、70代以上で「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」（21.3%）の回答比率が高い。



※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 D Q18：礼法を体験したことがない理由

（その他の内容）必要な時に調べればいいから必要性を感じなかった、ある程度身についている、実生活で使い物にならない、茶道を習いながら礼法も学べた

礼法に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは「特に印象はない、わからない」の48.1%で、次いで「伝統的な礼儀作法を習うことが楽しめる」20.7%、ほぼ同率で「作法、しきたりなどが複雑」20.0%、次いで「日本の伝統文化への理解を深められる」18.2%と続いている。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別で見た場合、男性で「特に印象はない、わからない」(56.3%)の回答比率が高い。

また、年齢別で見ると、年齢が高い方が「日本の伝統文化への理解を深められる」という回答比率が高い。



※全体の値を基準に降順並び替え

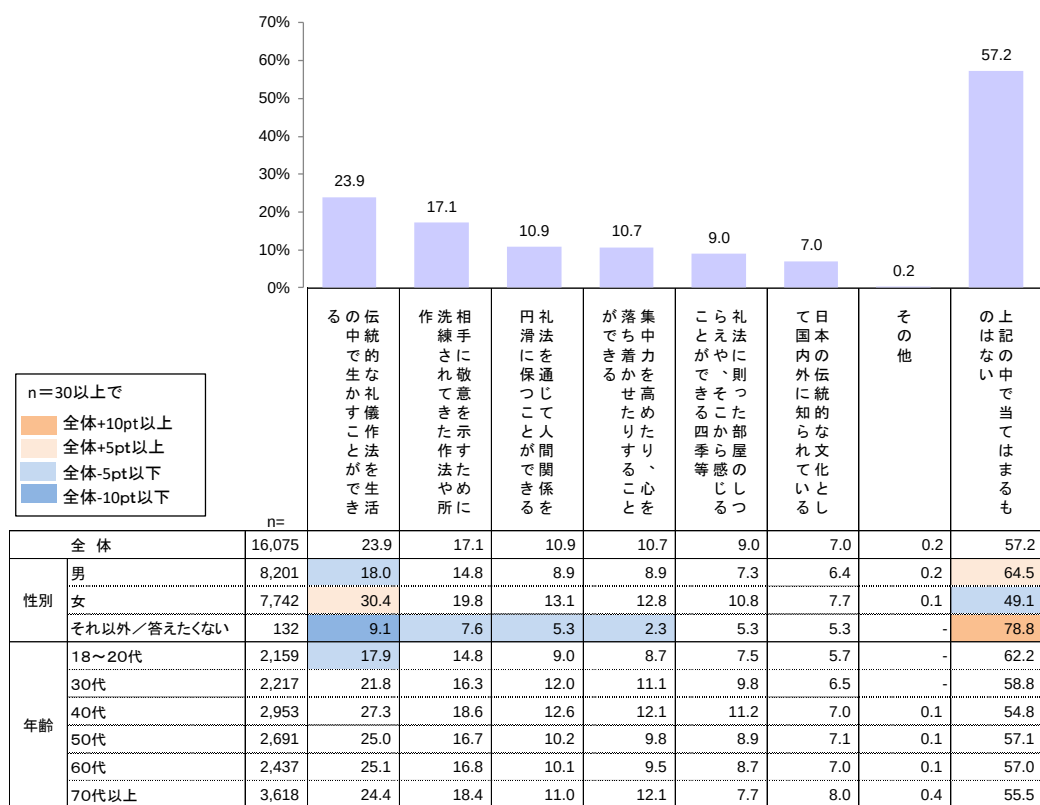
集計表 DQ19：礼法に対する印象やイメージ

(その他の内容) 堅苦しそう、面倒くさそう、役に立つ場面が日常にない、指導が厳しそう

礼法に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「上記の中で当てはまるものはない」の57.2%で、次いで「伝統的な礼儀作法を生活の中で生かすことができる」23.9%、「相手に敬意を示すために洗練されてきた作法や所作」17.1%、「礼法を通じて人間関係を円滑に保つことができる」10.9%と続く。

男女別で見ると、男性で、「伝統的な礼儀作法を生活の中で生かすことができる」(18.0%)の回答比率が低く、「上記の中で当てはまるものはない」(64.5%)の回答比率も高いことから、男性よりも女性の方が礼法に対して興味関心や魅力を感じている傾向がうかがえる。



※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 D Q20：礼法に関する興味関心や魅力

(その他の内容) 実生活で失礼にならないことなら学びたい、葬儀での振舞方

②調査結果に基づく分析と考察

本節では、礼法の振興施策の検討を主眼として前掲の集計結果に加えてクロス集計等も行い、これらの結果について分析を行う。

礼法に関して「経験あり」、「参加体験あり」、「未経験」、それぞれの回答者にどのような特徴が見られるのかを分析するため、「居住地」、「職業」、「同居家族」、「世帯年収」、「子供の頃の習い事」等の設問や設問間とのクロス集計を行った。結果は以下のとおりである。

回答者の特性や傾向について

■居住地、職業、同居家族、世帯年収とのクロス集計結果

礼法の経験・体験の有無と同居家族とのクロス集計の結果からは、「家族従業者」、「主婦・主夫」、「学生」に「参加体験あり」層がやや多い傾向にあることが分かる。居住地域、世帯年収とのクロス集計の結果からは際立った傾向は見られない。

居住地・職業・同居家族×礼法の経験の有無

		FQ フィルタリング・パート			(%)
		n=	経験あり層	参加体験あり層	未経験層
全体		20,000	2.6	17.1	80.4
居住地	北海道	852	2.5	13.4	84.2
	東北	1,385	2.8	16.4	80.8
	関東	7,422	2.8	16.7	80.5
	北陸	816	1.8	18.4	79.8
	東海(中部)	2,349	2.3	16.9	80.8
	近畿	3,247	3.0	17.3	79.7
	中国	1,140	2.1	17.4	80.5
	四国	584	0.7	19.0	80.3
	九州	1,987	2.5	19.2	78.3
	沖縄	218	1.8	13.3	84.9
職業	正規の職員・従業員	6,411	3.2	15.1	81.8
	非正規の職員・従業員	2,803	2.1	16.8	81.1
	自営業主・自由業	1,239	2.3	17.2	80.5
	家族従業者	135	3.7	24.4	71.9
	主婦・主夫	3,987	3.1	22.3	74.6
	学生	512	2.9	23.8	73.2
	リタイア、無職	4,141	1.6	14.9	83.5
同居家族	その他	772	1.4	13.5	85.1
	ひとり暮らし	4,145	3.5	15.8	80.7
	核家族	13,277	2.3	17.7	80.0
	三世代家族	1,179	2.9	19.8	77.4
同居家族	上記以外で同居している人がいる	1,399	1.6	12.9	85.6

■スポーツや趣味、娯楽等の活動とのクロス集計結果

次に、スポーツや趣味、娯楽等（以下、趣味・娯楽等）の活動の内容や、これらの活動に費やす時間やお金に関する回答結果とのクロス集計結果と、そこから見る特徴や傾向を示す。

趣味・娯楽等として行っている活動内容のクロス集計結果を見ると、「特に何もしていない」との回答比率は全体平均で 17.4% であるが、「経験あり」（7.4%）、「参加体験あり」（4.9%）と回答比率が低いことから、経験あり・参加体験ありの回答者共に、趣味・娯楽等と積極的な関わりを持っていることがうかがえる。

趣味・娯楽等の活動内容の傾向として、「経験あり」と回答した者の場合、日本の伝統的な文化に関しては、「お茶」（11.7%）、「書道」（9.6%）、「お花」（9.4%）、「邦楽、民謡」（4.5%）、「おどり（日舞など）」（4.1%）、と全体平均を上回る回答比率となっている。

一方、「参加体験あり」と回答した者では、「特に何もしていない」が 4.9% と全体平均を下回っているのを除き、全ての種目で、平均以上か平均並の回答比率となっており、分野に関わらず趣味・娯楽等活動を幅広く行っていることが推察できる。

次に、1 ヶ月に使える趣味・娯楽等にかかる費用や活動する時間帯、活動に費やす時間とのクロス集計結果を示す。

まず、趣味・娯楽等にかかる費用については、「5,000 円未満」の回答比率が、全体平均の 49.5% と比較すると、「経験あり」「参加体験あり」と回答した者いずれも平均を下回っている。また、平均月 2 万円以上支出している割合を計算した場合、全体平均は 11.4% となるが、「経験あり」「参加体験あり」と回答した者ともに、全体平均を上回る回答比率であることから、礼法の経験や体験をした者の趣味・娯楽等の活動への積極的な関わりがこの集計においてもうかがうことができる。

次に、趣味・娯楽等の活動を行う時間帯を見ると、「経験あり」と回答した者の趣味・娯楽等を行う時間帯として「平日夕方」（23.2%）の回答比率が高く、対照的に休日の活動率は全体平均を下回っている。

趣味・娯楽等に費やす月平均の時間を見ると、「1 時間未満」の回答比率が全体平均で 22.9% に対し、「経験あり」と回答した者は 19.0%、「参加体験あり」と回答した者は 18.8% と低い。一方、「2 時間以上～3 時間未満」の回答比率は全体平均を上回る回答比率となっており、「未経験」と回答した者と比べても、趣味・娯楽等の活動を積極的に行っている傾向が見られる。

礼法の経験の有無×趣味・娯楽等の活動状況

		共通設問1 趣味・余暇活動の参加状況										(%)
		邦楽、民謡	なレコ（ド）音楽鑑賞（配信、CD、FM、	書道	お茶	お花	おどり（日舞など）	除読（書）（仕事、勉強など）	寒国内、温泉、観光旅行（避暑、避	ルタ複（合）シ（ア）ウツ（レ）ン（グ）ト（モ）ン	特に何もしていない	
n=30以上で												
全体		20,000	1.5	17.3	1.7	1.6	1.8	0.4	16.1	30.7	15.7	17.4
「経験あり」層		512	4.5	15.6	9.6	11.7	9.4	4.1	13.7	28.1	13.7	7.4
「参加体験あり」層		3,413	3.0	22.1	3.7	4.1	4.1	0.7	20.9	42.6	24.6	4.9
「未経験」層		16,075	1.1	16.3	1.0	0.7	1.0	0.2	15.1	28.3	13.9	20.3

※共通設問1は、分析で取り上げた選択肢のみ抜粋して掲載している。（以下同様）

礼法の経験の有無×趣味・娯楽等に1ヶ月に使える費用

(%)

		共通設問3 1ヶ月に使える趣味・余暇費用											
		5 0 0 0 円 未 満	15 0 0 0 円 未 満	11 5 0 0 円 未 満	21 0 0 0 円 未 満	22 5 0 0 円 未 満	32 0 0 0 円 未 満	33 5 0 0 円 未 満	43 0 0 0 円 未 満	44 5 0 0 円 未 満	54 0 0 0 円 未 満	5 0 0 円 未 満	合 計 2 0 0 0 円 未 満
n=30以上で													
全体+10pt以上													
全体+5pt以上													
全体-5pt以下													
全体-10pt以下													
n=													
全 体	16,527	49.5	22.9	10.2	5.9	3.1	3.0	1.4	0.6	0.4	0.6	2.3	11.4
「経験あり」層	474	32.1	19.0	13.5	11.8	6.3	5.3	2.5	2.1	1.1	0.6	5.7	23.6
「参加体験あり」層	3,246	40.8	25.8	12.4	6.8	4.3	3.5	1.8	0.7	0.7	0.8	2.2	14.1
「未経験」層	12,807	52.4	22.3	9.6	5.5	2.7	2.8	1.2	0.5	0.3	0.6	2.2	10.3

礼法の経験の有無×趣味・娯楽等を行う時間帯

(%)

		共通設問3 1ヶ月に使える趣味・余暇時間帯							
		平日 午前	平日 午後	平日 夕方	平日 夜間	休日 午前	休日 午後	休日 夕方	休日 夜間
n=30以上で									
全体+10pt以上									
全体+5pt以上									
全体-5pt以下									
全体-10pt以下									
n=									
全 体	16,527	30.6	30.1	15.8	18.8	34.9	43.7	21.2	15.5
「経験あり」層	474	33.3	33.1	23.2	19.2	27.2	28.3	17.3	9.7
「参加体験あり」層	3,246	34.3	33.0	16.5	17.7	35.0	40.5	20.3	13.2
「未経験」層	12,807	29.6	29.2	15.4	19.1	35.2	45.1	21.6	16.4

礼法の経験の有無×趣味・娯楽等に費やす時間

(%)

		共通設問4 趣味・余暇活動を行う時間										
		1 時間 未 満	21 時間 未 満	32 時間 未 満	43 時間 未 満	54 時間 未 満	65 時間 未 満	76 時間 未 満	87 時間 未 満	98 時間 未 満	19 0時間 未 満	1 0時間 以上
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全 体	16,527	22.9	23.5	13.7	7.0	4.5	4.1	1.7	1.9	0.9	1.3	18.5
「経験あり」層	474	19.0	22.4	18.8	10.3	5.3	4.9	1.9	2.7	1.7	1.5	11.6
「参加体験あり」層	3,246	18.8	25.1	14.8	8.2	4.5	4.7	1.9	1.8	0.9	1.5	17.8
「未経験」層	12,807	24.1	23.1	13.2	6.5	4.5	3.9	1.7	1.9	0.9	1.3	18.9

消費行動に関する意識や価値観に関するクロス集計結果

消費行動に関する意識や価値観の項目と礼法の経験・体験の有無とのクロス集計結果を示す。

「経験あり」と回答した者は、「リスクはできるだけ避けたい」、「流行っていないけれども、自分が面白いと思ったものは試してみたい」と「上記であてはまるものはない」を除いた全ての意見で回答比率が全体平均を上回っている。また、「チャンスと感じたら逃したくない」(31.4%)の回答比率は、全体平均を上回ると共に「参加体験あり」との回答者の回答比率も上回っている。

一方、「参加体験あり」と回答した者では、「上記であてはまるものはない」を除いた全項目で全体

「未経験」と回答した者の場合は、「上記であてはまるものはない」(25.5%)以外の全項目で回答比率が全体平均を下回る。

		たい	自分の考えを主張するより、周りの考えに合わせるより、自分の考えに基づいてものごとを判断したい	チャンスと感じたら逃し	リスクはできるだけ避け	家族や友人・知人の役に立ちたい	環境問題・社会課題の解決の役に立ちたい	困っている人・助けが必要なおの役に立ちたい	周りの人から注目された	要らぬ人から注目された	その時・その場でしか得られない体験をしたい	流行りのものは試してみたい	流行っている人・助けが必要なおの役に立ちたい	分が面白いと思ったもの、自分は試してみたい	買ったものや、気持ちを買いたい	自分が発信したものに反応が欲しい	上記であてはまるものはない
全体	20,000	25.6	22.6	20.2	41.9	24.9	10.6	19.6	2.4	5.4	13.6	3.9	26.8	3.1	3.1	22.0	
「経験あり」層	512	34.0	29.3	31.4	31.4	26.8	16.6	24.6	6.8	10.9	15.4	7.2	20.9	7.4	5.1	9.0	
「参加体験あり」層	3,413	32.8	29.5	27.1	48.3	36.4	17.3	30.9	3.3	9.6	22.1	6.1	36.9	5.3	4.5	7.2	
「未経験」層	16,075	23.8	21.0	18.3	40.9	22.4	9.0	17.0	2.1	4.3	11.8	3.4	24.8	2.5	2.7	25.0	

回答者が普段接するメディアと礼法の経験・体験の有無とのクロス集計結果を示す。

一方、「参加体験あり」と回答した者の場合、全てのメディアの回答比率が全体平均を上回っており、幅広くメディアに接触しているものと推察される。

礼法の経験の有無×接触メディア

共通設問6 接触メディア (%)																	
	テレビ（民放の地上波・BS）	テレビ（NHKの地上波・BS）	CATVや衛星放送のチャンネル	ラジオ（インターネット経由を除く）	新聞（電子版含む）	雑誌・タウン誌（インターネット経由を除く）	むすび（インターネットのウェブサイトなど）（アプリ経由を含む）	動画投稿、YouTubeなど）	SNS（Twitter、Facebook、Instagram、LINE、TikTokなど）	紙の書籍	電子書籍	紙のマンガ／マンガ雑誌	電子版のマンガ	有料動画サイト（Amazon Prime Video、Netflixなど）	上記のメディアはあまり見ていない		
n=30以上で																	
全体+10pt以上																	
全体+5pt以上																	
全体-5pt以下																	
全体-10pt以下																	
n=																	
全体	20,000	69.5	41.7	10.2	14.3	28.5	7.5	46.1	33.7	28.5	20.4	6.0	6.8	6.4	11.9	10.8	
「経験あり」層	512	58.6	45.3	18.8	19.3	35.2	13.3	35.5	24.0	25.6	22.1	9.4	9.0	8.2	15.2	4.9	
「参加体験あり」層	3,413	74.9	51.7	14.1	19.0	36.4	13.3	53.9	38.8	35.4	28.0	7.9	8.8	7.8	14.6	2.5	
「未経験」層	16,075	68.7	39.5	9.0	13.1	26.6	6.1	44.8	32.9	27.1	18.7	5.4	6.4	6.0	11.2	12.8	

以上のクロス集計結果と、「①単純集計の結果について」で示した回答者の年齢・性別とのクロス集計の結果も踏まえ、礼法の「経験あり」「参加体験あり」「未経験」、それぞれの回答者の特徴や傾向は以下のとおりになる。

1) 礼法を経験したと回答した者の傾向

男女別で見た場合、女性の方が男性よりも経験者の総数が多いのが特徴の一つといえる。年齢別で見た場合、70代以上が最も多く、次いで18～20代、30代と続く。

次に経験者は、子供の頃の習い事として伝統的な文化に係る分野を習っていたと回答している者が多く、また、趣味・娯楽等の活動に積極性があり尚かつ伝統的な文化に係る趣味への嗜好性の高さがうかがえる。消費行動への意識については、チャンスと感じたら逃したくないという意識が強くあり、周りとの協調や一体感を大事にしつつも自身の考え方で物事を判断し、身近な人や社会の役に立ちたいという価値観を持っている者が全体平均と比べると多い傾向が見える。普段のメディア接触についてはCATVやラジオ、新聞等のメディア媒体への接触率が高い傾向にあるといえる。

2) 礼法に参加体験したと回答した者の傾向

男女別で見た場合、女性の方が男性よりも参加体験者の総数が多いのが特徴の一つといえる。また、年齢別で見た場合、70代以上が最も多く、次いで18～20代、60代と続く。

次に、子供の頃の習い事の経験があるとの回答比率が高い傾向にあり、趣味・娯楽等の活動に対して積極的な傾向にあり、また、伝統的な文化への関わりが高い傾向がうかがえる。消費行動への意識については、面白いものを試したいという嗜好性が特徴として表れているほか、家族や知人、困っている人の役に立ちたいという傾向もうかがえる。また、普段のメディア接触については、地上波放送やBS放送、新聞や雑誌、電子書籍や有料動画、紙の書籍等、普段から幅広くメディア接触に接触している傾向にある。

3) 礼法を未経験と回答した者の傾向

男女別、年齢別等では顕著な特徴は見られなかった。

子供の頃の習い事の経験については、経験がないとの回答比率が高い傾向にあり、趣味・娯楽等の活動に対して、特に何もしていないという回答比率が全体平均を上回っており、積極的に趣味・娯楽等を行うことがない回答者が多い傾向にある。消費行動への意識については、当てはまるものはないという回答が全体平均を上回っており、特徴的な傾向は見られない。また、メディア接触については、いずれのメディアとも接触率があまり高い傾向にあるとは言えない。

未経験者の傾向と特徴

次に、上記の属性分析を踏まえ、「経験あり」「参加体験あり」「未経験」、それぞれの回答者ごとに設けた設問の回答結果についてクロス集計を行い、回答者の特徴について更なる分析を行う。

はじめに、「未経験」と回答している者について分析を行う。上述の回答者属性に関する分析結果からは、「未経験」と回答した者については際立った特徴や傾向は見いだせなかった。加えて、今後の振興施策を考える上で、「未経験」と回答した者が、なぜ礼法を経験してこなかったのか、また、礼法を経験することに対してどのような意識を持っているのか、どのような体験方法や周知の実施をすれば参加体験等に繋げていく可能性を見いだすことができるのか、その検討のために分析を行う必要がある。

■未経験層の体験機会への参加意向

未経験と回答した者のうち、礼法を体験してみたいという意向を持つ回答者、体験意向がない回答者にはどのような特徴があるのか。趣味・娯楽等の活動内容、消費意識、メディア接触の設問とDQ16「参加してみたい礼法の体験内容」とのクロス集計を行い、回答者の特徴について分析を行う。

DQ16では、体験内容として設定した選択肢には当てはまるものはないと57.6%が回答しており、残りの42.4%は、体験内容によっては礼法の体験に参加してみたいという意向を持っていると推察される。

まず、礼法の体験に参加してみたいとの意向を示した回答者について、クロス集計結果からその特徴を確認する。趣味・娯楽等の活動とのクロス集計結果からは、ほとんどの項目で全体平均を上回る回答比率を示していることから、趣味・娯楽等の活動に対して積極的であると分かる。

消費行動に対する価値観とのクロス集計結果からは、ほとんどの項目で、全体平均を上回る回答比率を示しており、明確な意見や嗜好性があることがうかがえる。この傾向は「参加体験あり」と回答した者の消費行動に対する価値観と近似している部分があり、家族や知人、困っている人の役に立ちたい、面白いものと思ったものは試してみたい、と言った項目が合致している。また、「参加体験あり」と回答した者の場合、リスクを避けたいとの回答が全体平均より高い（全体41.9%に対して48.3%）が、「未経験者」の場合、より強くこの傾向が見られる。

普段からのメディア接触とのクロス集計結果を見ると、消費行動に対する価値観と同じく、「参加体験あり」と回答した者と近似した傾向、つまり、普段から幅広くメディアに接触している傾向が見て取れる。

次に、礼法の参加体験の意向がない者について、その特徴を確認する。DQ16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者は、趣味・娯楽等の活動について「特に何もしていない」と回答しており、消費行動に関する設問でも、メディア接触についても、当てはまらない、特にしていないという選択肢を選んでいる割合が高い。このように、礼法の参加体験の意向がない者の特徴として、趣味・娯楽活動やメディアへの接触に必ずしも積極的とは言えず、消費についての意識・意見をあまり明確に持っていない傾向が確認できる。

参加してみたい礼法の体験内容×趣味・娯楽等の活動状況

		共通設問1 趣味・余暇活動の参加状況 (％)										
		邦楽・民謡	レコード、テープ、CD、FM、など)	音楽鑑賞(配信、CD、FM、など)	美術鑑賞(テレビは除く)	書道	お茶	お花	おどり(日舞など)	読書(仕事、勉強などを除く娯楽としての)	ルーター、複合ショッピングセンター、アウトレットモール	特に何もしていない
n=												
全 体	16,075	1.1	16.3	5.6	1.0	0.7	1.0	0.2	15.1	13.9	20.3	
礼法の基本的な作法や所作を教えてくれる	4,187	1.7	23.5	10.3	1.8	1.5	1.8	0.3	23.9	23.3	6.3	
礼法の歴史や意義を教えてくれる	1,851	2.5	22.6	12.3	1.5	1.7	1.8	0.5	24.0	22.3	5.3	
礼式に則ったしつらいの仕方や、贈答の形としての折り型・水引・結びなどを詳しく教えてくれる	2,193	2.2	26.4	12.3	1.8	1.9	2.4	0.4	26.2	26.4	5.8	
普段の生活の中で、礼法がどのように役立つのか教えてくれる	3,225	1.9	25.2	11.4	1.7	1.6	2.1	0.4	25.4	24.4	5.8	
その他	26	-	19.2	3.8	3.8	-	-	-	11.5	11.5	11.5	
上記の中で当てはまるものはない	9,258	0.7	12.7	3.2	0.6	0.3	0.6	0.1	10.5	8.5	30.2	

※n=30未満は参考値のため灰色

n=30以上で

全体+10pt以上

全体+5pt以上

全体-5pt以下

全体-10pt以下

※n=30未満は参考値のため灰色

参加してみたい礼法の体験内容×消費行動に対する価値観

		共通設問5 消費行動に対する価値観																				(%)				
		たい	り 自 分 の 考 え と の 和 を 専 重 し よ	ご と を 考 え に 基 づ け て も の を 判 断 し た い	周 り に 合 わ せ る よ り 、 自 分 の 考 え を 主 張 す る よ	た か ん な い	チ ャ ン ス と 感 じ た ら 迷 し	た い	リ ス ク は で き る だ け 避 け	家 族 や 友 人 ・ 知 人 の 役 に	決 断 に 立 ち た い	環 境 問 題 ・ 社 会 課 題 の 解	困 っ て い る 人 ・ 助 け が 必 要 な 人 の 役 に 立 ち た い	周 り の 人 か ら 注 目 さ れた	集 まり や イ ベ ン ト の 参 加	者 同 士 の 一 体 感 が 大 事 だ	そ の 時 ・ 体 験 を し た い	た い	流 行 り の も の は 試 し て み たい	分 が 面 白 い と 思 っ た も の	流 行 っ て い な く な っ た も の	買 っ た い の や 、 気 持 ち を 発 信 し た い	応 が 欲 し い	自 分 が 発 信 し た も の に 反	な い	上 記 で あ る は ま る も の は
n=30以上で																										
全体+10pt以上																										
全体+5pt以上																										
全体-5pt以下																										
全体-10pt以下																										
n=																										
全 体		16,075	23.8	21.0	18.3	40.9	22.4	9.0	17.0	2.1	4.3	11.8	3.4	24.8	2.5	4.7	2.7	25.5								
礼法の基本的な作法や所作を教えてくれる		1,187	37.5	29.1	28.1	57.8	36.2	16.6	30.5	3.1	7.6	22.4	5.6	41.2	4.0	4.2	4.8									
礼法の歴史や意義を教えてくれる		4,851	34.7	34.8	34.9	52.4	37.4	22.7	32.4	4.6	9.3	24.7	6.7	40.2	5.7	5.6	3.9									
礼式に則ったしつらいの仕方や、贈答の形としての折り型・水引・結びなどを詳しく教えてくれる		2,193	35.0	32.4	34.6	58.7	40.8	19.4	33.7	4.0	8.9	27.2	6.9	46.7	5.8	5.4	3.6									
普段の生活の中で、礼法がどのように役立つのか教えてくれる		3,225	34.5	29.5	28.7	59.2	39.8	18.3	32.1	3.1	8.9	24.5	5.7	44.7	4.7	4.6	4.3									
その他		26	26.9	50.0	15.4	50.0	11.5	7.7	15.4	-	-	-	-	50.0	-	7.7	15.4									
上記の中で当てはまるものはない		9,258	16.2	16.2	12.5	32.4	14.7	4.9	9.9	1.4	2.4	6.1	2.1	16.7	1.6	2.0	40.5									
※n=30未満は参考値のため灰色																										

※n=30未満は参考値のため灰色

参加してみたい礼法の体験内容×接触メディア

		共通設問6 接触メディア																	(%)
		テレビ (B・S)	波・B・S	テレビ・NHKの地上	CATVや衛星放送のチャンネル	ラジオ（インターネット経由を除く）	新聞（電子版含む）	雑誌（タウン誌（イ・ク）を除く）	ウェブサイト・ニュースサイトなど・アプリ経由を含む）	動画投稿サイト（YouTubeなど）	ソーシャルメディア（Facebookなど）	SNS（Twitter、Instagram、LINEなど）	紙の書籍	電子書籍	紙のマンガ／マンガ雑誌	電子版のマンガ	有料動画サイト（Amazon Prime Videoなど）	上記以外のメディアはあまり見ない	
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下	n=	16,075	68.7	39.5	9.0	13.1	26.6	6.1	44.8	32.9	27.1	18.7	5.4	6.4	6.0	11.2	12.8		
	礼法的基本的な作法や所作を教えてくれる	4,187	81.5	52.6	11.9	17.6	35.5	10.0	58.7	42.6	36.9	29.5	8.3	9.9	9.2	15.0	1.4		
	礼法の歴史や意義を教えてくれる	1,851	78.4	54.7	12.9	20.3	35.1	12.5	57.3	43.5	36.7	31.4	10.7	11.0	9.1	16.5	1.1		
	礼式に則ったしつらいの仕方や、贈答の形としての折り型・水引・結びなどを詳しく教えてくれる	2,193	78.7	53.1	13.2	18.3	34.3	12.8	61.1	46.0	40.2	31.8	10.6	11.9	10.6	16.7	1.7		
	普段の生活の中で、礼法がどのように役立つのか教えてくれる	3,225	79.5	53.6	13.0	18.6	37.0	10.7	59.5	43.8	36.2	30.1	8.5	10.0	9.5	15.6	1.7		
	その他	26	65.4	42.3	23.1	3.8	42.3	-	65.4	42.3	30.8	23.1	3.8	3.8	-	7.7	3.8		
上記の中で当てはまるものはない		9,258	61.7	32.2	7.4	10.4	21.5	3.9	37.7	27.9	22.1	13.1	3.9	4.7	4.5	9.2	20.7		

※n=30未満は参考値のため灰色

■参加したい体験機会別に見た参加条件

次に、礼法は未経験と回答した者が体験したい内容、また、体験条件にはどのような特徴があるのかについて、DQ16「参加してみたい礼法の体験内容」の各種の参加体験とDQ17「参加しやすい礼法の体験条件」の回答結果をクロス集計し、未経験者の考える体験しやすい内容と条件の傾向について分析を行う。

まず、DQ16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者の87.7%が、DQ17で「わからない」と回答している。一方、実際に希望する体験機会がある層では、「わからない」という回答は極めて少ない。

具体的な体験内容を選択した者の参加条件への回答比率は、全体平均より非常に高い。体験条件の選択肢の回答比率を見ると、「行きやすい場所で体験できたら」、「手ごろな参加費で参加できたら」の2項目は回答比率が50%から60%台と高く、特に重視されている傾向が分かる。

そのほか、「礼式に則ったしつらいの仕方や、贈答の形としての折り型・水引・結びなどを詳しく教えてくれる」という体験内容を希望する者は、必要な費用や道具、体験する時間帯等の調整、初心者だけの参加機会、体験する内容や雰囲気の事前確認、指導者の教え方の分かりやすさと言った選択肢の回答比率が他の回答比率に比べて高い傾向にあり、体験する際の内容や条件について気にかけている傾向が見られる。

以上のように、礼法を未経験であると回答した者のうち、DQ16で具体的な体験内容を答えた者の多くは、DQ17の体験を行う際の条件についても具体的な条件を選択していることから、体験内容及び条件が明確な方が未経験者への参加体験を促しやすいものと推察できる。

参加してみたい礼法の体験内容×参加しやすい礼法の体験条件

		DQ17 参加しやすい礼法体験の条件										(%)
		と家族や知人体験でき、身近な人	行きやすい場所での体験	手ごろな参加費での参加	が体験に必要でない費用や道具	し体験する時間や間やすれをば調整	よ初心者だけが参加できる	事前確認内容できれ雰囲気	や指導者の教え方が分かり	その他	わからない	
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全体	16,075	14.4	23.3	23.6	8.2	4.6	12.8	8.5	8.3	0.6	54.5	
礼法の基本的な作法や所作を教えてくれる	4,187	36.7	57.2	57.4	20.3	11.3	31.3	21.0	19.6	0.5	8.0	
礼法の歴史や意義を教えてくれる	1,851	34.4	62.2	60.6	28.0	17.1	32.6	24.7	23.2	0.5	6.4	
礼式に則ったしつらいの仕方や、贈答の形としての折り型・水引・結びなどを詳しく教えてくれる	2,193	33.9	63.0	68.2	33.3	19.2	39.5	30.0	26.5	0.6	4.6	
普段の生活の中で、礼法がどのように役立つのか教えてくれる	3,225	28.8	56.5	57.9	24.1	14.8	38.9	27.1	26.8	0.5	8.4	
その他	26	-	11.5	11.5	3.8	3.8	7.7	-	7.7	69.2	26.9	
上記の中で当てはまるものはない	9,258	3.3	3.8	4.3	1.0	0.6	2.3	1.5	2.2	0.6	87.7	

※n=30未満は参考値のため灰色

■これまで礼法を経験してこなかった理由と参加したい体験機会

礼法を未経験と回答した者には、これまでに礼法を体験してこなかった理由（DQ18）に関する問いを設けている。この設問を設けた理由として、未経験者のうちには、体験機会が身近になかった、特定の事情で体験することができなかった者や、そもそも全く興味がなかった等、回答者によって個々の事情や理由があることを想定したためである。

既に、回答者の中には興味関心がなかったわけではなく、体験できなかった事情や理由があると回答した者がいることがDQ18の回答結果から判明しているが、体験できなかった事情や理由があると回答した者はどのような体験機会があれば参加しやすいと考えているのか。DQ18の回答と参加してみたい体験内容を問う設問（DQ16）のクロス集計を行い、その傾向を分析する。

まず、礼法をこれまで体験してこなかった理由として「そもそも知らなかった」が回答比率として最も高く（27.8%）、次点で「興味がない」（26.4%）、「自分の趣味と合わない」（26.4%）と続いている。

DQ16とのクロス集計の結果を見ると、DQ16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者では、DQ18で「自分の趣味と合わない」（41.3%）、「興味がない」（32.2%）の回答比率が全体平均よりも高いことが分かる。

一方、DQ16で具体的な体験内容についての選択肢を回答した者の場合、「そもそも知らなかった」が全体平均を上回る一方、「興味がない」が10%台、「自分の趣味と合わない」が一桁台と、全体平均を下回っていることから、礼法自体を知らなかった者の中には、機会があれば参加体験を希望する層が一定数いると推察できる。また、DQ18の「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」、「体験できる場所や機会があることを知らなかった」の回答比率が全体平均を大きく上回っており、体験機会そのものが身近になかった場合や、体験機会があっても体験機会を希望する者に情報として届いていなかったことが回答結果から推察される。

参加してみたい礼法の体験内容×礼法を体験したことがない理由

		DQ18 礼法を体験したことがない理由									(%)
		そもそも知らなかった	興味がない	所や機会に体験できなかったような場	か参加する時間がとれない	あ体験できるときを知らなかった場所や機会があった	分体験できるか詳しい内容が	心他の趣味や娯楽の方に	自分の趣味と合わない	その他	
n=30以上で											
全体		16,075	27.8	26.4	14.3	3.6	6.8	4.1	5.9	26.4	0.3
礼法の基本的な作法や所作を教えてください	4,187	39.6	17.3	32.2	6.8	15.1	8.7	8.8	4.8	0.4	
礼法の歴史や意義を教えてください	1,851	32.5	18.1	35.5	12.2	19.5	12.3	10.0	5.7	0.4	
礼式に則ったしつらいの仕方や、贈答の形としての折り型・水引・結びなどを詳しく教えてください	2,193	33.4	12.7	38.3	11.8	22.8	14.0	11.2	5.4	0.5	
普段の生活の中で、礼法がどのように役立つのか教えてください	3,225	34.3	16.1	31.2	7.6	18.8	12.2	11.9	7.5	0.4	
その他	26	-	65.4	11.5	3.8	7.7	3.8	19.2	34.6	19.2	
上記の中で当てはまるものはない	9,258	22.4	32.2	3.2	0.8	1.4	1.0	3.5	41.3	0.3	

※n=30未満は参考値のため灰色

■「未経験」層と「参加体験あり」層の礼法へのイメージの違い

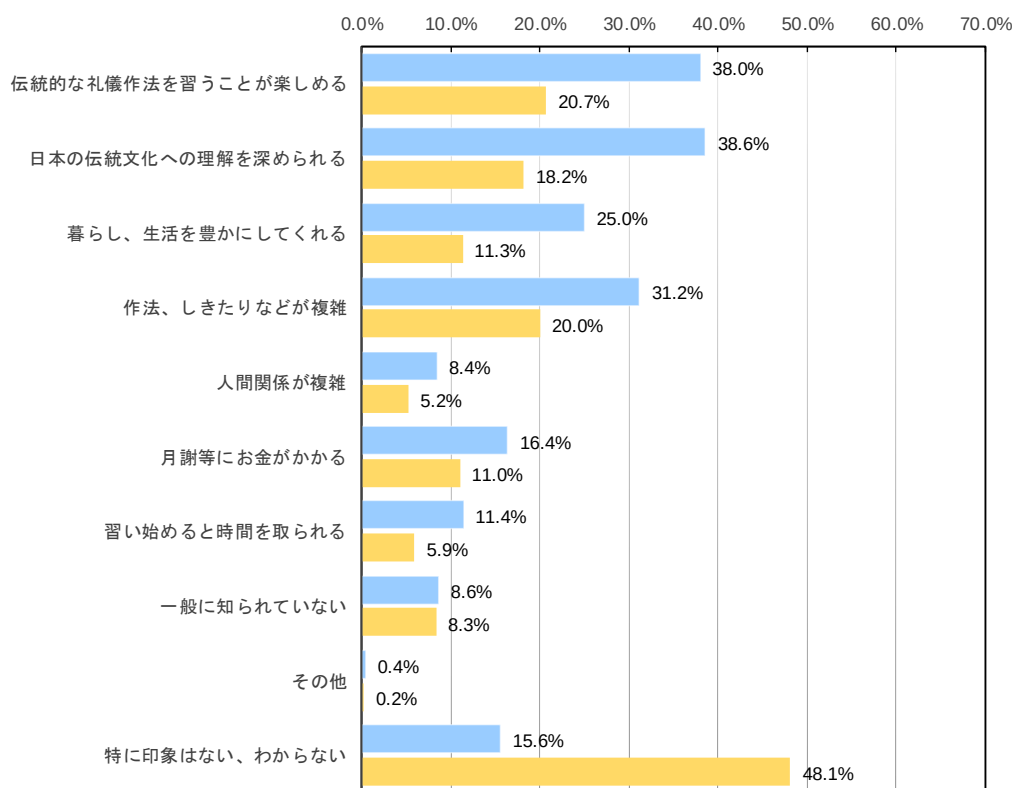
礼法を未経験と回答した者が持つ礼法へのイメージについて、DQ19の結果では、「特に印象はない、わからない」(48.1%)、「伝統的な礼儀作法を習うことが楽しめる」(20.7%)、「作法、しきたりなどが複雑」(20.0%)、「日本の伝統文化への理解を深められる」(18.2%)、「暮らし、生活を豊かにしてくれる」(11.3%)、「月謝等にお金がかかる」(11.0%) となっており、そもそも具体的なイメージを持っていない者が多い。この要因は、回答者が礼法の未経験者であることから具体的な内容や体験を経た上での印象を持っていないためと考えられる。また、難解なものと捉えられる一方、プラスのイメージが先行している傾向が見られるが、これは、礼法が現在の社会生活において必要とされやすい、しきたりやマナーに通じているものと推察される。

下のグラフは、礼法の参加体験をしたことがある者のイメージ(DQ14)と未経験者のイメージ(DQ19)の回答結果を比較したものである。

未経験者で最も回答比率が高かった「特に印象はない、わからない」の回答比率は参加体験を行うことで大幅に減っている一方、「日本の伝統文化への理解を深められる」、「作法、しきたりなどが複雑」の回答比率が未経験と比べて、参加体験した者の方が回答比率は高くなっており、他の選択肢についてもほぼ同様のことが指摘できる。

礼法の参加体験をすることで、礼法が持つ魅力はもちろんのこと、作法等の複雑さや時間や費用がどの程度かかるかも明確なイメージを描けるようになっていることが分かる。

未経験者と参加体験者の礼法に対する印象やイメージの違い



■ 学校の授業や職場の研修、イベント等で礼法に関する体験をしたことはある (N=3,413)

■ 今まで経験したことはない (N=16,075)

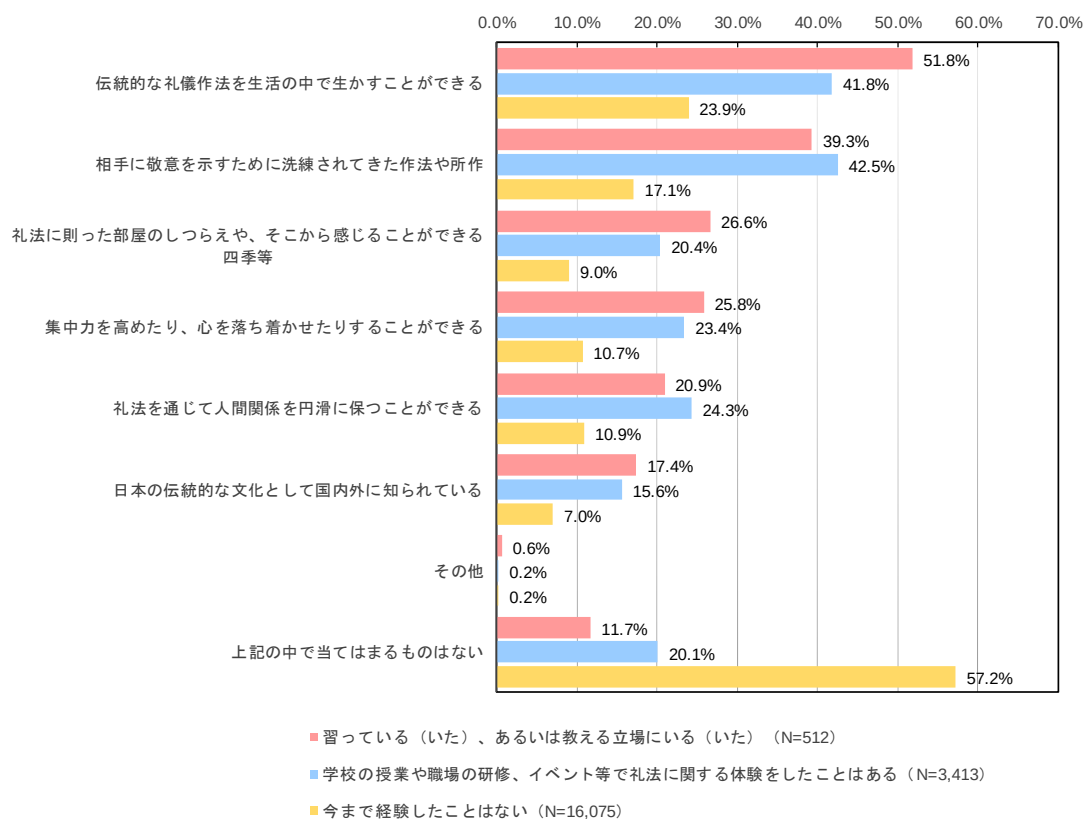
■「未経験」層と「参加体験あり」層、「経験あり」層の礼法の魅力についての評価の違い

未経験者が礼法に対する印象やイメージを具体的に描けないように、礼法の魅力に対する設問（DQ8、DQ15、DQ20）にも同様の傾向が見られる。

下のグラフを見ても分かるように、礼法未経験者の回答者の半数が、「上記の中で当てはまるものはない」（57.2%）と回答し、経験者と参加体験者の場合の回答比率と比較しても大きな差がある。

このことは、他の魅力についても言え、参加体験者と未経験者を比較すると「相手に敬意を示すために洗練されてきた作法や所作」や「伝統的な礼儀作法を生活の中で生かすことができる」の回答比率に大きな差が見られることから、イメージや印象と同じく実際に体験することの重要性がうかがえる。

各回答者における礼法に対する興味関心や魅力の違い



上記のクロス集計の結果から、礼法を未体験と回答した者の特徴や傾向をまとめると、以下のとおりである。

1) 礼法に興味関心がある者の属性に関する傾向と特徴

礼法を未経験であると回答した者のうち、参加体験の意向を示さない者が 57.6%いる一方、42.4%が体験内容に関する選択肢をいずれか選択しており、未経験者の中でも機会があれば参加したいという意向を持つ者がいる。

これら参加意向を示す者は、他の礼法を未経験と回答した者と比べた場合、趣味・娯楽等の活動に対して積極的であり、消費行動への明確な意見を有し、普段から幅広いメディアに触れ

ている傾向にある。また、茶道や華道、邦楽などの日本の伝統的な文化への参加率も全体平均を上回る回答比率となっており、伝統的な文化への接触は決して低くない傾向にある。

2) 未経験者が考える参加しやすい体験の条件と内容についての傾向と特徴

DQ16、DQ17 のクロス集計の結果から、未経験者のうち、参加体験をしたいとの意向を示した者の 50～60%が、行きやすい場所と手頃な参加費用の 2 点を参加体験の条件としてとりわけ重視している傾向が見えてくる。

また、DQ16 と DQ18 とのクロス集計の結果からは、体験できなかった事情・理由として「気軽に体験できる場所がなかった」「そもそも知らなかった」の回答比率が高いことから、参加体験の意向を持つ者の多くが、礼法を知る機会や、体験する機会を得ることができなかったことが分かる。

3) 礼法の印象や魅力に関する傾向と特徴

未経験者の場合、礼法に対する印象や魅力について、未経験であるが故に、具体的なイメージや魅力は分からないという当然の結果が導かれた。その点を踏まえて、経験者や参加体験者との印象や魅力への回答の差を見ると、参加体験や経験を重ねることで、具体的な印象やイメージ、魅力を描くことができるようになること、また、経験を重ねた者ほど、礼法の作法や所作、礼法の持つ意義などの具体的な行為や意味等と魅力が結びつけられるようになっている。

参加体験ありと回答した者の傾向と特徴

次に、参加体験ありと回答した者の回答傾向を分析する。参加体験をした者は、何らかのきっかけがあって礼法を体験する機会を得ており、しかし、習うまでには至っていない者と捉えることができる。ではどのような状況で体験機会を得たのか、また、習うまでには至らない事情や理由等があるのかをクロス集計を用いてその傾向と特徴を分析する。

■参加体験者の体験のきっかけと機会

体験のきっかけ（DQ9）を問う設問の結果から、学校や稽古場、文化施設等で行われた体験イベントがきっかけであるという回答比率が48.0%と最も高く、次いで趣味や教養として礼法に興味関心があったとの回答が15.6%と、参加体験者の半数以上は体験イベントをきっかけに礼法の参加体験をしている傾向が見られる。また、体験の場（DQ10）については学校の授業や職場での研修、部活動やサークル活動のイベントの回答比率が高く、学校や職場における体験が中心となっている。

体験したきっかけと体験機会の関係性の特徴や傾向を明らかにするため、DQ9とDQ10のクロス集計の結果が下の表である。前述のとおり、体験したきっかけについて、学校や稽古場、文化施設等での体験イベント（48.0%）と回答した者のうち、「学校の授業や職場の研修会」（66.1%）、「学校や職場の部活動、同好会やサークルが行った体験イベント」（57.7%）で体験を行ったとの回答比率が高い。

他方、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（10.5%）、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（7.6%）を選択した者では、「自宅」で、「趣味や教養として、礼法に興味関心があった」（15.6%）と回答した者は、「文化施設等で行われた体験イベント」（29.0%）、で体験を行っていた回答比率が高いことが分かる。

このような結果から、学校や職場、文化施設で開かれていたイベントをきっかけに、その場で行われた体験イベントで体験をした回答者が比率として高い傾向にあり、現状においては、イベント等での体験機会による参加体験の提供が、礼法を見知る場として大きい位置を占めているものと推察される。

礼法を体験した場×礼法を体験したきっかけ

		DQ9礼法を体験したきっかけ										(%)
		ど親がや兄弟姉妹、祖父母など	ど親がや兄弟姉妹、祖父母など	友人、知人、誘われた人などから勧め	イ教室、学校、文芸、礼法、行事、各種体験や	知画、テレビ、ウェブ、映画、雑誌、漫画等	に趣味や教養があつた、礼法	興味関心がある仕事や職業に	礼法に関係する別関係の	野の趣味、習っている事	自分の趣味、習っている事	その他
n=30以上で		全体+10pt以上	全体+5pt以上	全体-5pt以下	全体-10pt以下							
	n=											
全 体	3,413	10.5	7.6	9.3	48.0	12.0	15.6	6.7	11.2	3.9		
教室や稽古場等で開かれた体験会	510	24.3	11.6	14.3	45.7	10.0	22.0	9.6	13.1	1.4		
学校の授業や職場の研修会	1,522	7.9	7.3	7.1	66.1	12.5	11.7	6.0	5.5	3.3		
学校や職場の部活動、同好会やサークルが行った体験イベント	712	9.7	10.3	16.0	57.7	14.2	19.2	7.9	6.6	1.8		
文化施設等で行われた体験イベント	549	12.0	8.9	18.0	45.5	22.4	29.0	11.1	8.6	1.8		
自宅	327	27.8	27.2	12.8	17.4	16.2	23.9	10.1	11.3	3.4		
自分が行っている別の分野の趣味・習い事の中で体験	430	9.1	5.6	8.8	19.5	8.4	23.0	12.8	52.1	1.4		
その他	72	2.8	0.0	1.4	13.9	11.1	5.6	2.8	4.2	68.1		

■礼法を習いやすい状況

礼法を習いやすい状況（DQ11）に関する設問の結果では、通いやすい場所（37.4%）、費用の手頃さ（33.0%）の2つが主な条件となっている。一方、支払い可能な金額（DQ12）を見ると、「5,000円未満」（74.9%）、「5,000円以上～10,000円未満」（15.4%）と続き、回答者の約90%が1万円未満の費用であれば習いやすいと回答している。

DQ11とDQ12のクロス集計の結果を見ると、「5,000円未満」を選択した者の中では、習いやすい状況として「その他」「わからない」を選択している者が全体平均74.9%を上回っているほか、その他の習いやすい状況についての項目は全て全体平均を下回る結果となっている。一方、「5,000円以上～10,000円未満」（15.4%）と回答した者の場合、通いやすい場所や道具の貸与、具体的なカリキュラムの提示等が全体平均を上回っていることから、具体的に習うことを想定して回答を行っているものと推察される。

礼法を習いやすい状況×礼法に支払える月額費用

		DQ12礼法に支払える月額費用											(%)
		5 . 0 0 0 円 未 満	1 5 . 0 0 0 円 未 満	1 1 5 0 . 0 0 円 未 満	2 1 0 5 . 0 0 円 未 満	2 2 5 0 . 0 0 円 未 満	3 2 0 5 . 0 0 円 未 満	3 3 5 0 . 0 0 円 未 満	4 3 0 5 . 0 0 円 未 満	4 4 5 0 . 0 0 円 未 満	5 4 0 5 . 0 0 円 未 満	5 0 . 0 0 円 以 上	
n=													
全体	3,413	74.9	15.4	3.8	2.3	1.2	1.0	0.4	0.2	0.2	0.2	0.3	
家族や知人等、身近な人から習えたら	697	75.2	15.9	5.3	1.0	1.6	0.3	-	0.1	0.1	0.3	0.1	
通いやすい場所で習えたら	1,277	69.6	20.5	4.5	2.7	1.0	0.6	0.2	0.1	0.2	0.1	0.3	
費用が手頃だったら	1,125	74.0	17.1	4.4	2.0	1.0	0.7	0.4	0.2	-	0.2	0.1	
必要な道具等が借りられたら	462	57.6	23.2	6.9	6.1	2.2	2.4	1.3	-	0.2	-	0.2	
習う時間帯を調整してもらいやすかったら	400	62.5	20.8	8.0	3.3	3.3	1.0	1.0	-	-	0.3	-	
指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていたら	552	67.4	22.1	4.0	3.1	0.5	1.1	0.9	0.2	0.4	0.4	-	
指導で教本やテキストを使っていたら	222	64.4	20.3	3.2	2.3	1.4	4.5	0.5	0.9	0.9	0.9	0.9	
その他	35	88.6	11.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
わからない	947	91.1	6.5	0.7	0.3	0.3	0.4	0.1	-	-	-	0.4	

次に、礼法をこれまで習っていない理由（DQ13）に関する設問の結果では、「興味がなかった」（39.8%）が最も多く、次いで「通いやすい場所に稽古場や教室がなかった」（25.0%）、「他の趣味や娯楽の方に興味が向いている」（20.1%）と続く。DQ11の習う状況とのクロス集計を行い、参加体験者が習いやすい状況について分析を行う。

参加しやすい状況について「わからない」（27.7%）と回答した者のうち、習わなかった理由について「自分の趣味と合わない」（51.3%）、「興味がなかった」（44.3%）の回答比率が高く、体験をしても興味関心が湧かなかったことが分かる。

一方、参加しやすい状況として、「通いやすい場所で習えたら」（37.4%）と回答した者が習っていない理由として「通いやすい場所に稽古場や教室がなかった」（64.2%）が最も多く、次いで「習う内容についていけるかどうか不安がある」（57.5%）、「習うための十分な時間がとれなかった」（57.4%）と続き、身近な場所で習いたいと思う一方で、時間の確保が難しかったり、習う内容への不安があったりしたことが見える。「費用が手頃だったら」（33.0%）と回答した者の場合は、費用の

確保ができなかったとの回答比率が高く、続いて習う内容についていけるかどうかの不安と、教室等の雰囲気に分からなかったとの回答比率が高い。

礼法を習っていない理由×礼法を習いやすい状況

		DQ11礼法を習いやすい状況									(%)
		家族や知人等、身近な人から習えたら	通いやすい場所です	費用が手頃だった	必要な道具等が借りられ	習う時間帯を調整しても	指導方法やカリキュラムが具体的に示さ	指導で教本やテキストを	その他	わからない	
n=30以上で											
全体+10pt以上											
全体+5pt以上											
全体-5pt以下											
全体-10pt以下											
n=											
全 体	3,413	20.4	37.4	33.0	13.5	11.7	16.2	6.5	1.0	27.7	
興味がなかった	1,360	19.2	26.8	27.2	7.8	6.7	10.6	3.8	1.0	44.3	
通いやすい場所に稽古場や教室がなかった	854	24.7	64.2	49.4	21.3	18.1	21.5	8.2	0.1	7.1	
習うための授業料等の費用が確保できなかった	384	23.4	55.7	57.6	36.5	25.5	22.9	9.4	0.3	5.2	
習うための十分な時間が取れなかった	540	26.5	57.4	51.3	28.5	26.3	26.5	12.2	0.4	7.6	
カリキュラムの内容や必要となる費用等の十分な情報が明示されていなかった	223	25.6	49.8	47.1	34.1	29.6	43.0	14.8	0.4	7.6	
稽古場や教室等の雰囲気が分からなかった	237	22.8	57.0	51.9	36.7	27.4	44.3	20.7	-	7.2	
習う内容についていけるかどうか不安がある	254	26.8	57.5	55.1	32.3	24.8	36.2	16.5	0.4	10.6	
他の趣味や娯楽の方に興味が向いている	686	23.6	44.8	37.9	13.1	13.4	22.6	10.5	0.4	24.9	
自分の趣味と合わない	343	15.7	19.8	19.2	7.3	9.6	13.4	8.7	2.6	51.3	
その他	54	24.1	16.7	22.2	5.6	9.3	13.0	3.7	24.1	24.1	

クロス集計の結果を見る限り、回答者にとって礼法を習いやすい状況とは、礼法を習わなかった事情や理由と密接な関係があり、通える場所や時間、習う内容や教室等の雰囲気と言った部分が、習い始める時に参加体験者にとってのハードルになりやすくなっている傾向が見える。

上記のクロス集計の結果から、礼法の参加体験ありと回答した者の傾向や特徴をまとめると、以下のとおりである。

1) 参加体験者の体験機会ときっかけの傾向と特徴

DQ9とDQ10のクロス集計結果の分析から、学校や職場、文化施設で開かれていたイベントをきっかけとして礼法を体験した者が多い傾向にある。他方、親族が礼法を習ったり、教えていたりした場合は自宅が体験機会の場に、礼法についてメディアを通じて知ったり、興味関心があった者は、文化施設等の体験イベントに参加して体験する等、きっかけの違いが、体験の機会に関係していることが分かる。また、学校や職場等での体験イベントは、礼法を知り・体験する場として大きな役割を果たしているとともに、礼法に関する担い手の活動の場ともなっていると推察される。

2) 参加体験者が考える習いやすい状況や内容についての傾向と特徴

参加体験者が礼法を習いやすい状況や内容について、月に支払える費用と習いやすい状況と

のクロス集計結果からは、月額費用として 5,000 円以上を支払うと回答した者ほど、習いやすい具体的な状況について回答している傾向にあり、礼法を習っても良いと考える者と捉えることができる。

習っていない理由と習いやすい状況とのクロス集計結果からは、参加体験をしても礼法に興味を持てなかった者が一定数いる一方で、興味関心があっても通える場所がない等の事情があることが分かる。加えて、習うための時間の確保や、習う場所の雰囲気が分からない等も回答として多く、参加体験者にとって、習う内容や機会に関する詳しい情報があつた方が、習い始めやすいと考えていることが、回答結果の分析からうかがえる。

経験ありと回答した者の傾向と特徴

経験ありと回答した者の回答傾向について分析を行う。経験者がどのような経緯や場所で礼法を習い始め、どの程度の者が継続してきたのかを分析することで、参加体験者と未経験との違いを明らかにする。

■始めたきっかけと継続性及び継続理由

礼法を習い始めたきっかけ（DQ1）の回答結果では、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（25.2%）が最も高く、次いで「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」（23.0%）、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」（20.5%）、「学校の授業や、礼法の稽古場・教室での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した」（19.3%）と続いている。以上の点から、経験ありと回答した者の身近には、礼法に関わる者がいたり、礼法に関する情報やイベントがあったりしたことで、礼法を習い始めるきっかけが生み出される背景があったことが推察される。

次に、習い始めたきっかけ（DQ1）と現在の継続状況（DQ3）についてクロス集計を行い、始めたきっかけと継続率の関係を分析する。継続率の全体平均（38.5%）に対し、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」（69.2%）、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（66.0%）、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（58.1%）の回答者の継続率は、全体平均を上回っている。反対に、非継続率の全体平均（61.5%）を比べると、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」（69.5%）、「趣味や教養として、礼法に興味関心があった」（67.4%）が全体平均を上回っており、親族等が礼法に関わっていることをきっかけとして習い始めた回答者の方が、継続率が高い傾向にあり、反対に、自分の趣味との関わりや教養として関心を持った者については、何らかの理由で継続できていない傾向にあることが分かる。

礼法を習い始めたきっかけ×現在の継続状況

		(%)	
		DQ3 現在の継続状況	
		続けている	続けない
n=30以上で			
全体+10pt以上			
全体+5pt以上			
全体-5pt以下			
全体-10pt以下			
	n=		
全 体	512	38.5	61.5
親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた	129	58.1	41.9
親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた	94	66.0	34.0
友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた	118	53.4	46.6
学校の授業や、礼法の稽古場・教室での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した	99	44.4	55.6
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	52	69.2	30.8
趣味や教養として、礼法に興味関心があった	95	32.6	67.4
礼法に係る仕事や職業に興味関心があった	56	44.6	55.4
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	105	30.5	69.5
その他	15	-	100.0

※n=30未満は参考値のため灰色

次に、継続理由に関する設問（DQ3補問1）では、「日本の文化だから」（46.2%）の回答比率が最も高く、次いで「指導者や教授者として活動したい（している）」（41.1%）、「一緒に楽しむ仲間がいる」（29.9%）と続いている。始めたきっかけ（DQ1）とのクロス集計を行い、継続する理由ときっかけの関係性について分析を行うと、まず継続理由として最も回答比率が高かった「日本の文化だから」と回答した者の中でも「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（66.1%）、「趣味や教養として、礼法に興味関心があった」（64.5%）を、礼法を習い始めたきっかけであると回答している者の比率が高い。また、「指導者や教授者として活動したい（している）」と回答した者の場合は、「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（62.7%）と回答している比率が高い一方、「趣味や教養として、礼法に興味関心があった」（35.5%）の回答比率が全体平均を大きく下回っている。

また、継続率において最も回答比率が高かった習い始めるきっかけ「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」を選んだ者は、「相手に敬意を示す所作や作法、四季に応じたしつらいの仕方など、奥深い文化をもっと知りたい」（66.7%）の回答比率が高い傾向にある。

礼法を習い始めたきっかけ×礼法を続けている理由

n=30以上で

全体+10pt以上

全体+5pt以上

全体-5pt以下

全体-10pt以下

		DQ3補問1 礼法を続けている理由										(%)
		指導者 したい(〜 して いる)	日本 の文化 だから	一緒 に楽し む仲間 がいる	文化 の仕 方など と知り たい	作法 の四季 に 敬意を 示す	相手に 敬意を 示す 所作	礼法を 習った り実践 した	習った 生活の 一部に なっ たら	その他	特に理 由はな い	上記の 中で 当ては まるも のではない
n=		197	41.1	46.2	29.9	26.4	23.4	18.3	0.5	1.5	0.5	
全 体		75	62.7	48.0	36.0	25.3	21.3	22.7	-	2.7	1.3	
親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた		62	46.8	66.1	43.5	35.5	29.0	24.2	-	1.6	1.6	
親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた		63	47.6	54.0	49.2	39.7	30.2	25.4	-	-	-	
友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた		44	38.6	56.8	50.0	59.1	52.3	34.1	-	-	-	
学校の授業や、礼法の稽古場・教室での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した		36	41.7	50.0	55.6	66.7	52.8	33.3	-	-	-	
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った		31	35.5	64.5	41.9	58.1	61.3	48.4	3.2	3.2	-	
趣味や教養として、礼法に興味関心があった		25	56.0	68.0	48.0	72.0	64.0	52.0	-	-	-	
礼法に係る仕事や職業に興味関心があった		32	50.0	59.4	40.6	53.1	53.1	56.3	3.1	6.3	-	
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた		0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
その他												

※n=30未満は参考値のため灰色

※n=30未満は参考値のため灰色

一方、礼法から離れたきっかけ（DQ3補問2）を見ると、「時間がなくなった」（36.2%）と「近くに習う場所がなくなった」（26.7%）が大きな理由となっている。

始めたきっかけ（DQ1）と離れたきっかけをクロス集計しその関係を分析すると、回答比率が最も高い「時間がなくなった」と回答した者の場合、始めたきっかけとして「礼法に係る仕事や職業に興味関心があった」（48.4%）、「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」（47.3%）の2項目が全体平均を特に上回っている。また、「近くに習う場所がなくなった」と回答した者の場合は、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（40.6%）、「友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた」（40.0%）の2項目が全体平均を上回っており、友人や知人からの勧めで始めた者が習う場所や時間の事情で、継続が難しくなり止めてしまう傾向にあると推察される。

礼法に関する活動内容×現在の継続状況

(%)

n=30以上で
 全体+10pt以上
 全体+5pt以上
 全体-5pt以下
 全体-10pt以下

	n=	DQ3 現在の継続状況	
		続けている	続けない
全 体	512	38.5	61.5
教室や稽古場で習っている(いた)	261	41.0	59.0
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	145	60.0	40.0
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	134	44.8	55.2
指導者や教授者として教えている(いた)	50	56.0	44.0
その他	29	10.3	89.7

※n=30未満は参考値のため灰色

次に、活動内容（DQ5）と経験年数（DQ4）についてクロス集計を行い、関係性を分析する。経験年数が「20年以上」（10.7％）と回答した者のうち、「指導者や教授者として教えている（いた）」（34.0％）と全体平均を大きく上回っており、逆に「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」（6.2％）のみが平均回答比率を下回っている。また、「10～20年未満」（9.8％）と回答した者の中でも、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」（7.6％）は回答比率が低く、1年以上～5年未満程度の経験年数の者がカルチャーセンター等で礼法を習っていることが分かる。

礼法に関する活動内容×礼法を続けている年数

(%)

n=30以上で
 全体+10pt以上
 全体+5pt以上
 全体-5pt以下
 全体-10pt以下

	n=	DQ4 礼法を続けている年数						
		1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上	3年以上合計
全 体	512	25.0	23.4	19.1	11.9	9.8	10.7	51.6
教室や稽古場で習っている(いた)	261	26.8	17.6	16.5	14.9	11.1	13.0	55.6
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	145	15.9	29.7	28.3	12.4	7.6	6.2	54.5
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	134	17.9	24.6	23.9	11.9	9.7	11.9	57.5
指導者や教授者として教えている(いた)	50	6.0	14.0	14.0	16.0	16.0	34.0	80.0
その他	29	41.4	24.1	6.9	3.4	13.8	10.3	34.5

※n=30未満は参考値のため灰色

活動内容（DQ5）と活動頻度（DQ6）についてクロス集計を行い、関係性を分析する。「週に2～3回」（14.1%）と回答した者のうち、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」（25.5%）の項目への回答比率が高いことから、カルチャーセンターでの受講頻度の傾向が見える。また、「ほぼ毎日」（12.9%）と回答した者のうち「指導者や教授者として教えている（いた）」（18.0%）の回答比率が高く、これは職業としての指導者や教授者が回答者の中に含まれていることが予測される。また、「月数回程度」（17.0%）と回答した者でも指導者や教授者として活動しているとの回答比率は高く、こちらは教室等を月数回程度開いていることを意味しているものと考えられる。

礼法に関する活動内容×礼法に関する活動頻度

		DQ6 礼法に関する活動頻度 (%)						
		ほぼ毎日	週に2～3回	週1回程度	月数回程度	月1回程度	年数回程度	年1回程度
n=30以上で								
全体+10pt以上								
全体+5pt以上								
全体-5pt以下								
全体-10pt以下								
n=								
全 体	512	12.9	14.1	21.3	17.0	10.9	7.0	16.8
教室や稽古場で習っている(いた)	261	16.9	11.5	20.7	17.2	12.6	6.9	14.2
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	145	13.1	25.5	22.8	16.6	8.3	4.8	9.0
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	134	14.9	12.7	25.4	17.9	9.7	6.7	12.7
指導者や教授者として教えている(いた)	50	18.0	14.0	4.0	26.0	12.0	12.0	14.0
その他	29	17.2	3.4	-	3.4	-	10.3	65.5

※n=30未満は参考値のため灰色

活動内容（DQ5）と月額費用（DQ7）についてクロス集計を行い、関係性を分析する。

「5,000 円未満」（51.2%）と回答した者のうち、教室や稽古場で習っていると回答した者以外の項目は、全体平均を下回っている。また、5,000 円以上の費用を見ると、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」は、「5,000 円未満」以外の費用で全て全体平均を上回っていることが分かる。一方、「教室や稽古場で習っている（いた）」と回答している者の費用は「5,000 円未満」のほか 35,000 円以上の項目で平均を少し上回っていることが見える。

礼法に関する活動内容×礼法に関する月額費用

		DQ7 礼法に関する月額費用 (%)											
		5,000円未満	5,000円以上	10,000円未満	10,000円以上	15,000円未満	15,000円以上	20,000円未満	20,000円以上	25,000円未満	25,000円以上	30,000円未満	30,000円以上
n=30以上で													
全体+10pt以上													
全体+5pt以上													
全体-5pt以下													
全体-10pt以下													
n=		5,000円未満	5,000円以上	10,000円未満	10,000円以上	15,000円未満	15,000円以上	20,000円未満	20,000円以上	25,000円未満	25,000円以上	30,000円未満	30,000円以上
全 体	512	51.2	18.2	10.0	6.4	3.5	3.7	1.2	1.2	1.0	1.8	2.0	30.7
教室や稽古場で習っている(いた)	261	54.0	18.8	9.2	3.8	3.1	2.3	1.1	1.9	1.1	1.9	2.7	27.2
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	145	29.0	21.4	14.5	12.4	5.5	6.2	2.1	1.4	1.4	3.4	2.8	49.7
学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)	134	44.8	12.7	9.0	9.0	6.0	6.7	2.2	0.7	1.5	3.7	3.7	42.5
指導者や教授者として教えている(いた)	50	30.0	14.0	18.0	10.0	6.0	4.0	-	2.0	-	6.0	10.0	56.0
その他	29	89.7	3.4	3.4	-	-	3.4	-	-	-	-	-	6.9

※n=30未満は参考値のため灰色

■経験年数

礼法を続けている年数（DQ4）の結果では、「1年未満」（25.0％）の回答比率が最も高く、次いで「1～3年未満」（23.4％）、「3～5年未満」（19.1％）と続いている。

経験年数（DQ4）と習い始めたきっかけ（DQ1）のクロス集計を行い関係性について分析する。まず、習い始めたきっかけとして回答比率が最も高かった「親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた」（25.2%）を回答した者のうち、「20年以上」（43.6%）が平均を大きく上回っているほか、「親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた」（18.4%）でも、「20年以上」（29.1%）が平均を大きく上回っている。また、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」（20.5%）と回答した者については、10年以上の回答比率が平均を上回っている。

一方、3～10 年未満と回答した者の場合を見ると、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」の回答比率は全体平均よりやや低い傾向にあり、他の項目（親族等が教えていた、友人・知人からの勧め、イベントでの体験、メディアを通じて知った）では全体平均よりやや高い回答比率となっている。

これらの傾向を見る限り、親族が礼法を習ったり教えていたりした場合、また、自分の趣味と関連して礼法を習い始めた場合には経験年数が長い者が多い傾向があるが、きっかけ自体が直接、経験年数に関係しているとは考えにくい。

礼法を続けている年数×礼法を習い始めたきっかけ

		DQ1 礼法を習い始めたきっかけ									(%)	
		ど 親 が 習 っ て い た	ど 親 が 兄 弟 姉 妹 に 教 え て い た	友 人 、 知 人 な ど か ら 誘 わ れ た	学 校 の 授 業 や 、 礼 法 の 稽 古 場 ・ 教 室 で の 体 験 し た	文 化 施 設 等 で 行 わ れ た イ	知 っ た エ ン ド ウ エ キ ブ メ デ ィ ア 等 で	テ レ ビ や 映 画 、 雑 誌 、 漫 画	に 興 味 や 教 養 が あ っ た 、 礼 法	興 味 関 心 が あ っ た 、 職 業 に	し て い た 、 習 っ て い る 事 と 別 の 係 分	そ の 他
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全 体	512	25.2	18.4	23.0	19.3	10.2	18.6	10.9	20.5	2.9		
1年未満	128	24.2	6.3	14.8	13.3	4.7	14.8	10.9	17.2	6.3		
1～3年未満	120	19.2	18.3	30.8	20.0	6.7	14.2	10.8	12.5	2.5		
3～5年未満	98	22.4	24.5	28.6	24.5	16.3	22.4	9.2	15.3	1.0		
5～10年未満	61	26.2	24.6	26.2	23.0	16.4	31.1	11.5	19.7	1.6		
10～20年未満	50	26.0	18.0	16.0	22.0	12.0	14.0	8.0	36.0	4.0		
20年以上	55	43.6	29.1	18.2	16.4	10.9	20.0	16.4	41.8			

次に経験年数（DQ4）と習い始めた当初の習い方を選んだ理由（DQ2 補問）のクロス集計を行い関係性について分析する。習い方を選んだ理由として最も回答比率が高かった「通いやすい場所だった」（34.8%）を回答した者のうち、「5～10 年未満」（41.0%）、「3～5 年未満」（40.8%）の回答比率が全体平均よりも高い傾向にある。また、「家族や友人等と一緒に良かった」（28.3%）を回答した者のうち、「20 年以上」（40.0%）、「10～20 年未満」（34.0%）の回答比率が全体平均よりも高い。このほか、「通いやすい時間帯だった」（13.1%）の項目では、「20 年以上」（27.3%）、「5～10 年未満」（26.2%）が大きく全体平均を上回っている。

上記のクロス集計の結果から、礼法の参加体験ありと回答した者の特徴や傾向をまとめると、以下のとおりである。

1) 習い始めたきっかけと継続率に見える傾向と特徴

メディアを通じて礼法に興味関心を持った者や、親族が礼法を教えていたり習っていたりしたことをきっかけとして礼法を習い始めた者の継続率が高い傾向にあり、このうち、親族が礼法と関わりを持っていたと回答した者は、自身が礼法の指導者や教授者として活動している率が全体平均より高い傾向にある。

一方で、趣味や教養として興味関心を持った者の継続率は低い傾向が見えるが、興味を失って辞めたという回答比率は低く、習う場所がなくなったり、あるいは目標を達成したりして辞めたりといった、継続していない理由や事情があることが見えてくる。

2) 活動内容と継続している状況や年数から見える傾向と特徴

カルチャーセンターで礼法を受講している者や、指導者・教授者として活動している者の経験年数が高い傾向にあり、カルチャーセンターで受講している者は1年～5年未満、指導者・教授者は10年以上の回答比率が高い傾向にある。一方で、教室や稽古場で習っている者の継続率は全体平均を上回っているものの、1年～5年未満の回答比率が全体平均より低く、5年以上の回答比率が全体平均より高くなっている。

カルチャーセンターで受講する者は週2～3回程度、指導者・教授者の場合は月数回もしくは毎日活動するという回答比率が高く、各活動内容による頻度の違いが見られる。また、月額費用については、カルチャーセンターで受講している者や指導者・教授者として活動している者は月額5,000円以上を払っている傾向にあり、礼法を習う際にどの程度の費用が掛かるかの傾向が見える。

3) 経験年数と習い始めたきっかけや魅力から見える傾向と特徴

経験年数と習い始めたきっかけとの関係を見た場合、親族等が礼法を習っていたあるいは教えていたと回答した者では20年以上、自分の趣味と関係して礼法を習い始めた者で10年以上、と回答する比率が高い傾向にあるが、習い始めたきっかけが経験年数の長さに関係するとは言い難い。当初の習い方を選んだ理由については、経験年数20年以上の者で、家族や友人と一緒に習う、通いやすい時間帯の2項目について回答比率が高い傾向にあるほか、3年以上10年未満継続している者の場合、通いやすい時間帯をはじめ、場所や費用等についての回答比率もやや高い傾向にあり、習いやすい環境にあることで経験年数は上がりやすくなると考えられる。

経験年数と興味関心や魅力との関係を見た場合、経験年数が5年以上と回答している者は、礼法の意義や目的の面を興味関心や魅力として捉えている一方、経験年数が1年未満、1年～3年未満と回答した者は、生活の中で礼儀作法を生かすことに魅力や興味関心を持っている傾向が高い。

③分析結果のまとめ

礼法の経験・体験の有無や、経験者や参加体験者、未経験者の礼法への活動状況や興味関心の度合いを把握することを目的としてウェブアンケートを利用した調査を実施した。

調査結果からは、礼法の未経験者が圧倒的に多いことが分かった。未経験者が多いことについては、設問群の回答結果からも見えるように、礼法に興味関心が持てなかった者がいる一方で、そもそも礼法を知らなかった者が多くいること、また、礼法を知っていたとしても、体験できる場がなかった、あるいは場を知らなかった事情があり、参加体験には至らなかったことが明らかになった。

経験者の場合は親族等が礼法を習ったりしていた、あるいは、知人・友人から勧められた、自分の趣味との関わりがきっかけとなっている。参加体験者の場合は、学校や稽古場、文化施設等での体験イベントをきっかけとして体験をしており、経験者・参加体験者・未経験者のそれぞれに、礼法を知る機会、接することができる機会や環境に大きな開きがあることが、調査結果の分析から見えてくる。

経験者の活動状況等については、約6割は継続していない状況で、継続している者については若い世代ほど現在の継続率が高い傾向にある。一方で、継続していない者が続けられなかった事情からは、興味を失ったから辞めたという理由よりも、習う場所がなくなった、時間がなくなった等の事情があることが傾向として見え、回答者の環境が整えば再開する可能性があることも推察される。

参加体験者の活動状況等については、参加体験をしたきっかけと体験した機会のクロス集計から、学校や職場等で体験機会を得たという回答比率が高い傾向にあり、礼法の指導者や教授者がこれらの場において、体験機会の醸成などを図っている事例もあることから、礼法を参加体験する大きなきっかけとして作用していることが分かる。また、参加体験者がこれまで礼法を習うに至らなかった理由や事情からは、参加体験をしても興味関心を持てなかった者もいる一方で、通いやすい場所や時間帯、習う内容の明示等がされていれば習いたいと考えている者がいることから、習う内容等の情報を明示するなどの工夫をすることで、習いに通いたい人に機会を提供できる可能性があることが分かる。

上記の結果から、礼法の経験者や参加体験者を増やしていく場合、学校や職場等での体験機会のみならず、礼法を体験できるイベントなどを広く行くと共に、これらの体験機会自体を広く周知していくことで、経験者や体験者を増やす可能性が広がるものと考えられる。また、習うことができる場所の周知をはじめ、習う内容や時間帯など、習いたいと考えている者に適切に情報を伝えていくことも有効な取組として考えられる。

(5) 盆栽

本調査では、盆栽への興味関心や経験の有無等の把握を目的として2万人にウェブアンケート調査を実施した。

アンケートでは、盆栽を育てたことがある、あるいは盆栽園を営んでいたような経験者、イベント等で盆栽体験をした体験者、盆栽を育てる等の経験が全くない未経験者がいることが想定されることから、盆栽の経験・体験の有無について回答する設問を設けた。その上で、下記の表のように経験の深度に応じた専用の設問群を設けることで、各回答者の盆栽への興味関心の有無などの把握を行った。

■分野設問の項目

「1. 盆栽を育てている (いた)、あるいは盆栽園を営んでいる (いた)」と回答した者への設問	E Q 1 : 盆栽を育て始めたきっかけ E Q 2 : 盆栽を始めた当初に育て方や剪定の仕方を学んだ方法 E Q 2 補問 : 育て方や剪定の仕方を学んだ方法を選んだ理由 E Q 3 : 現在の継続状況 E Q 3 補問 1 : 盆栽を続けている理由 E Q 3 補問 2 : 盆栽から離れたきっかけや理由 E Q 4 : 盆栽を続けている (続けていた) 年数 E Q 5 : 盆栽に関する活動内容 E Q 6 : 盆栽に関する活動頻度 E Q 7 : 盆栽に関する月額費用 E Q 8 : 盆栽に関する興味関心や魅力
「2. イベント等で盆栽体験をしたことはある」と回答した者への設問	E Q 9 : 盆栽を体験したきっかけ E Q 10 : 盆栽を体験した場 E Q 11 : 盆栽を育てやすい状況 E Q 12 : 盆栽に支払える月額費用 E Q 13 : 盆栽を育てていない理由 E Q 14 : 盆栽に対する印象やイメージ E Q 15 : 盆栽に関する興味関心や魅力
「3. 盆栽を育てたり盆栽体験をしたりしたことはない」と回答した者への設問	E Q 16 : 参加してみたい盆栽の体験内容 E Q 17 : 参加しやすい盆栽の体験条件 E Q 18 : 盆栽を体験したことがない理由 E Q 19 : 盆栽に対する印象やイメージ E Q 20 : 盆栽に関する興味関心や魅力

①単純集計の結果について

■全調査対象者への設問

盆栽を育てたことがある者、あるいは全く育てたことがない者がどの程度いるのかは、統計調査等では明らかとなっていない。加えて、盆栽の「経験」にも深度があり、盆栽を育てたり盆栽園を営んでいたなどの経験がある者や、イベント等で盆栽の体験をしたことがある者等がいたと想定される。経験の有無を大別するならば、盆栽を趣味あるいは職業として育てたことがある者、イベント等で体験をした者、そして盆栽等の経験がない者に分けることができると考えられる。

本設問では、上記の想定に基づき、盆栽の経験の有無とあわせて、経験の深度を図る選択肢を設けて、実態の把握を行った。

盆栽の経験の有無

経験率を見ると、「盆栽を育てている（いた）、あるいは盆栽園を営んでいる（いた）」（以下、「経験あり」）比率は 3.0%（598 人）、「イベント等で盆栽体験をしたことはある」（以下、「参加体験あり」）4.4%（887 人）、「盆栽を育てたり盆栽体験をしたりしたことはない」（以下「未経験」）92.6%（18,515 人）となった。

男女別では、男性で「経験あり」、「参加体験あり」と回答した者の回答比率がそれぞれ全体平均を上回っており、若干男性が多い。

年齢別では、18～20 代と 70 代以上の回答比率が高く、中間の現役世代が、50 代を底に、低くなっている。

			(%)		
			盆栽を育てている(いた)、 あるいは盆栽園を 営んでいる(いた)	イベント等で盆栽体験を したことはある	盆栽を育てたり盆栽体験を したりしたことはない
n=					
全 体		20,000	3.0 4.4		92.6
性別	男	9,645	4.0 5.0		91.0
	女	10,202	2.1 3.9		94.0
	それ以外／答えたくない	153	0.7 2.0		97.4
年齢	18～20代	2,781	3.3 5.5		91.2
	30代	2,691	2.5 3.9		93.6
	40代	3,496	1.7 4.0		94.3
	50代	3,178	1.5 3.1		95.4
	60代	3,002	2.6 4.1		93.4
	70代以上	4,852	5.2 5.5		89.2

集計表 F Q 5 : 盆栽の経験の有無

■「盆栽を育てている（いた）、あるいは盆栽園を営んでいる（いた）」と回答した者への設問（EQ1～EQ8）

本設問群では、盆栽を育てたことがあると回答した者が、どのようなきっかけや機会に盆栽を育てるようになったのか、また、興味関心を持っているのか等、経験の実態を把握するためのアンケートを実施した。

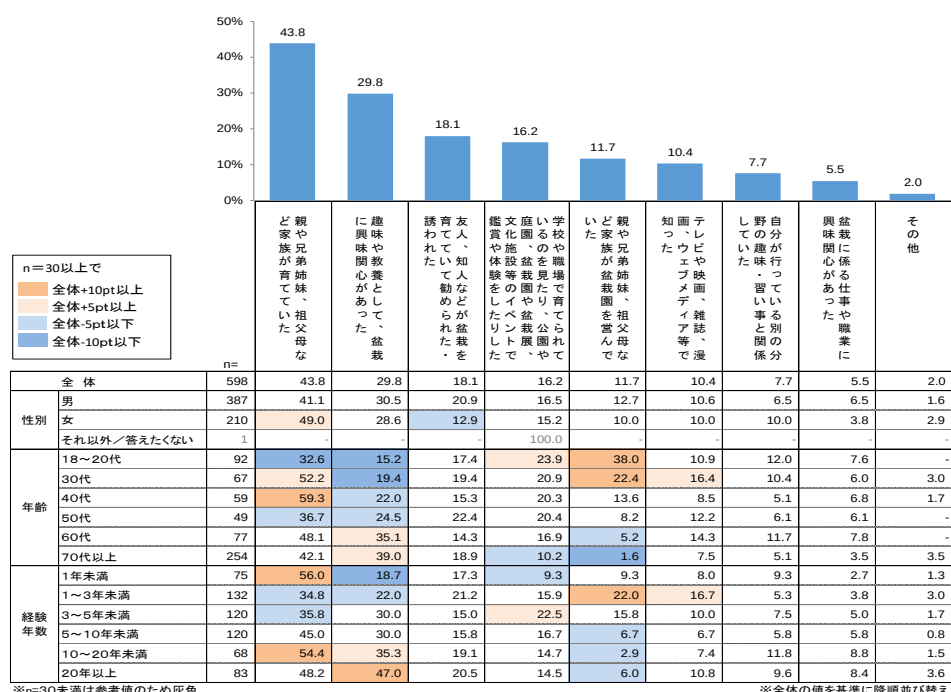
盆栽を育て始めたきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた」の43.8%で、次いで「趣味や教養として、盆栽に興味関心があった」29.8%、「友人、知人などが盆栽を育てていて勧められた・誘われた」18.1%、「学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした」16.2%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、女性で「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた」（49.0%）の回答比率が高く、「友人、知人などが盆栽を育てていて勧められた・誘われた」（12.9%）が低い。

次に年齢別で見ると、年齢が高いほど「趣味や教養として、盆栽に興味関心があった」の回答比率が高く、「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた」、「学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした」の回答比率が低くなる傾向が見られる。

経験年数別で見ると、「趣味や教養として、盆栽に興味関心があった」については、経験年数が長いほど回答比率が高まる傾向が見られる。



集計表 EQ1：盆栽を育て始めたきっかけ

（その他の内容）盆栽が好きだった、園芸店で見て一目惚れ、プレゼントされた

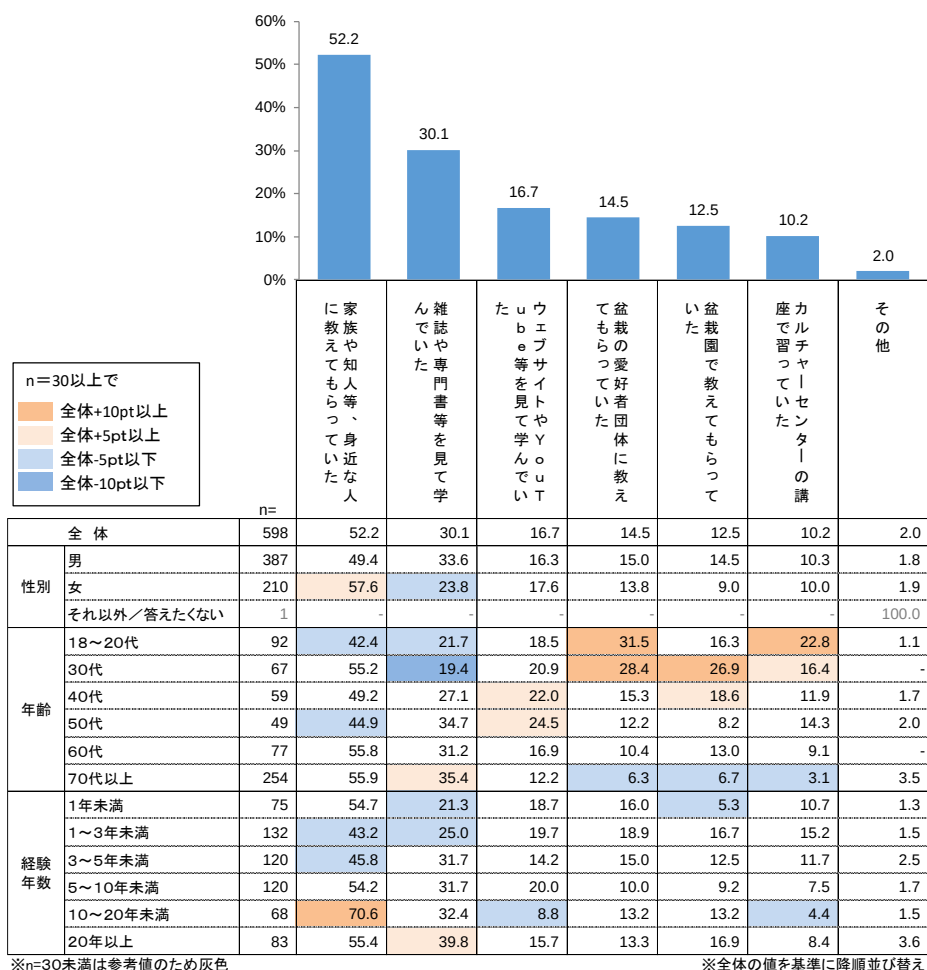
盆栽を始めた当初に育て方や剪定の仕方を学んだ方法

全体平均で最も回答比率が高いのは「家族や知人等、身近な人に教えてもらっていた」の 52.2%で、次いで「雑誌や専門書等を見て学んでいた」30.1%、「ウェブサイトやYouTube 等を見て学んでいた」16.7%、「盆栽の愛好者団体に教えてもらっていた」14.5%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では女性で「家族や知人等、身近な人に教えてもらっていた」(57.6%)が高く、「雑誌や専門書等を見て学んでいた」(23.8%)が低い。

年齢別では、10～30代で「盆栽の愛好者団体に教えてもらっていた」、「カルチャーセンターの講座で習っていた」の回答比率が高い。

また、経験年数別では、経験が長いほど「雑誌や専門書等を見て学んでいた」の回答比率が高い。



集計表 EQ2：盆栽を始めた当初に育て方や剪定の仕方を学んだ方法

(その他の内容) 自己流、授業の一環で、TV 等から

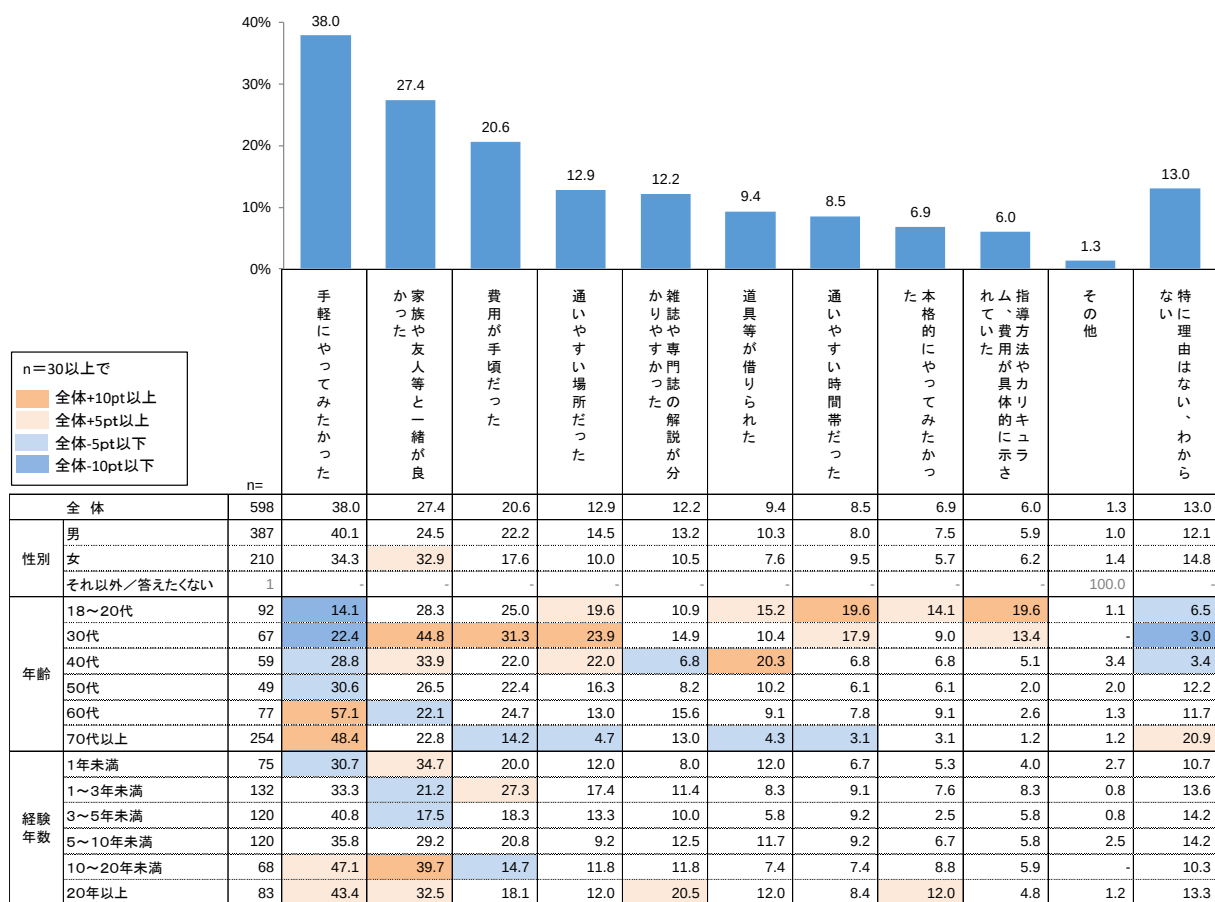
育て方や剪定の仕方を学んだ方法を選んだ理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「手軽にやってみたかった」の38.0%で、次いで「家族や友人等と一緒に良かった」27.4%、「費用が手頃だった」20.6%、「通いやすい場所だった」12.9%、「雑誌や専門誌の解説が分かりやすかった」12.2%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、女性で「家族や友人等と一緒に良かった」(32.9%)の回答比率が高い。

年齢別では、若いほど「通いやすい場所だった」、「通いやすい時間帯だった」、「指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていた」の回答比率が高く、高齢の方が「手軽にやってみたかった」という回答比率が高い。

経験年数別では、10年以上の者で「家族や友人等と一緒に良かった」、「手軽にやってみたかった」の2つの回答比率が高い傾向が見られる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 EQ 2 補問：育て方や剪定の仕方を学んだ方法を選んだ理由

(その他の内容) 授業の一環として、いきなり本格的に続けられる自信がない、植物・盆・土・時間など全て自由

現在の継続状況

継続状況については、「続けている」51.8%（310人）、「続けていない」48.2%（288人）と、続けているとの回答比率がやや高い。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では女性で「続けている」が46.2%と低い。

年齢別では若い人ほど継続率が高く、特に30代（80.6%）が高い。

経験年数別では、5年以上で「続けている」という回答が半数を上回り、20年以上では7割以上が継続していることが分かる。

			(%)	
			続けている	続けていない
n=				
全 体		598	51.8	48.2
性別	男	387	55.0	45.0
	女	210	46.2	53.8
	それ以外／答えたくない	1	100.0	
年齢	18～20代	92	69.6	30.4
	30代	67	80.6	19.4
	40代	59	55.9	44.1
	50代	49	46.9	53.1
	60代	77	42.9	57.1
	70代以上	254	40.6	59.4
経験年数	1年未満	92	44.0	56.0
	1～3年未満	67	47.7	52.3
	3～5年未満	59	39.2	60.8
	5～10年未満	49	52.5	47.5
	10～20年未満	77	58.8	41.2
	20年以上	254	77.1	22.9

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 E Q 3 : 現在の継続状況

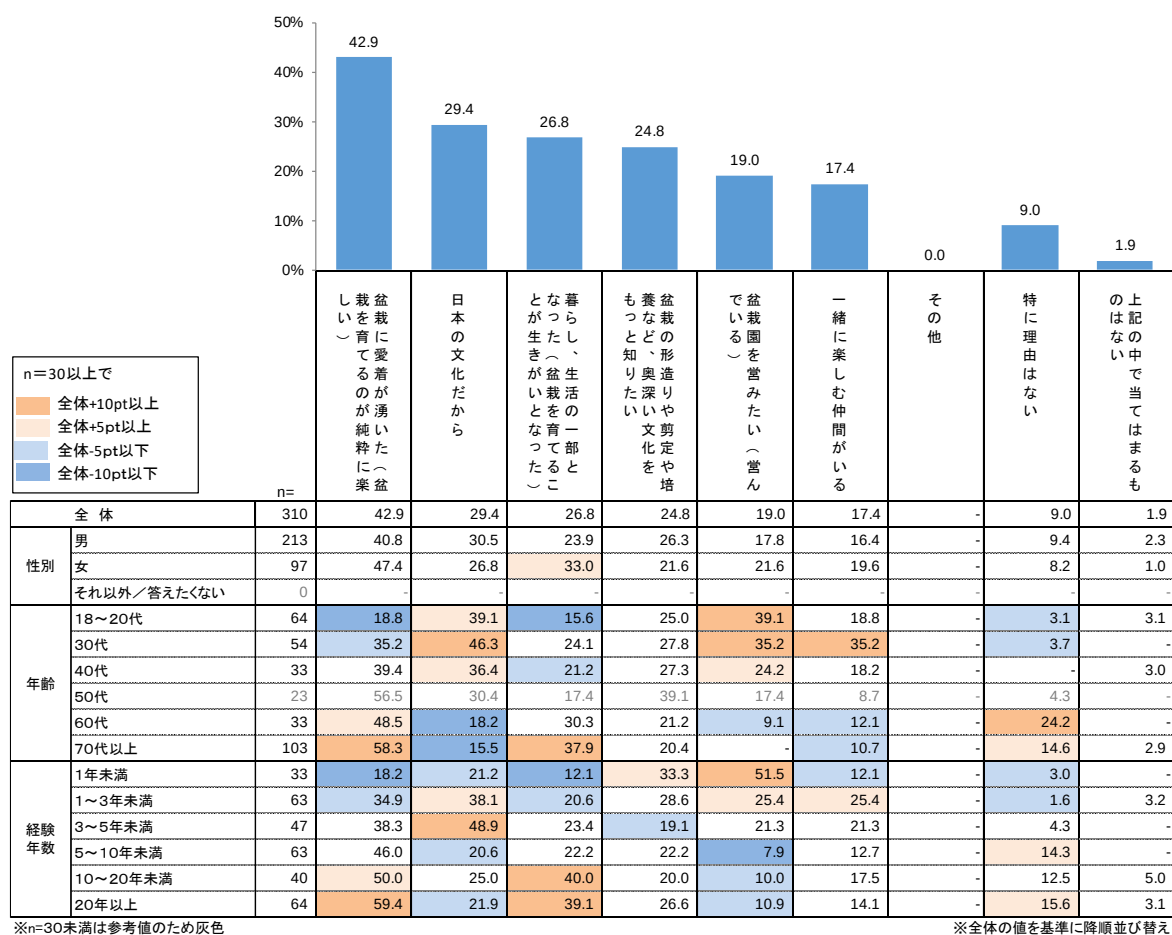
盆栽を続けている理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「盆栽に愛着が湧いた（盆栽を育てるのが純粋に楽しい）」の42.9%で、次いで「日本の文化だから」29.4%、「暮らし、生活の一部となった（盆栽を育てることが生きがいとなった）」26.8%、「盆栽の形造りや剪定や培養など、奥深い文化をもっと知りたい」24.8%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、女性で、「暮らし、生活の一部となった（盆栽を育てることが生きがいとなった）」（33.0%）の回答比率が高い。

年齢別では、10～40代で「盆栽園を営みたい（営んでいる）」、「日本の文化だから」の回答比率が高く、60代以上で「盆栽に愛着が湧いた（盆栽を育てるのが純粋に楽しい）」、「暮らし、生活の一部となった（盆栽を育てることが生きがいとなった）」の回答比率が高い傾向が見られる。

経験年数別では、経験年数が高い方が「盆栽に愛着が湧いた（盆栽を育てるのが純粋に楽しい）」、「暮らし、生活の一部となった（盆栽を育てることが生きがいとなった）」の回答比率が高くなる傾向が見られる。また、経験年数が3年未満の者は「盆栽園を営みたい（営んでいる）」の回答比率が高く、経験年数によって、継続理由が異なる傾向がうかがえる。



※n=30未満は参考値のため灰色

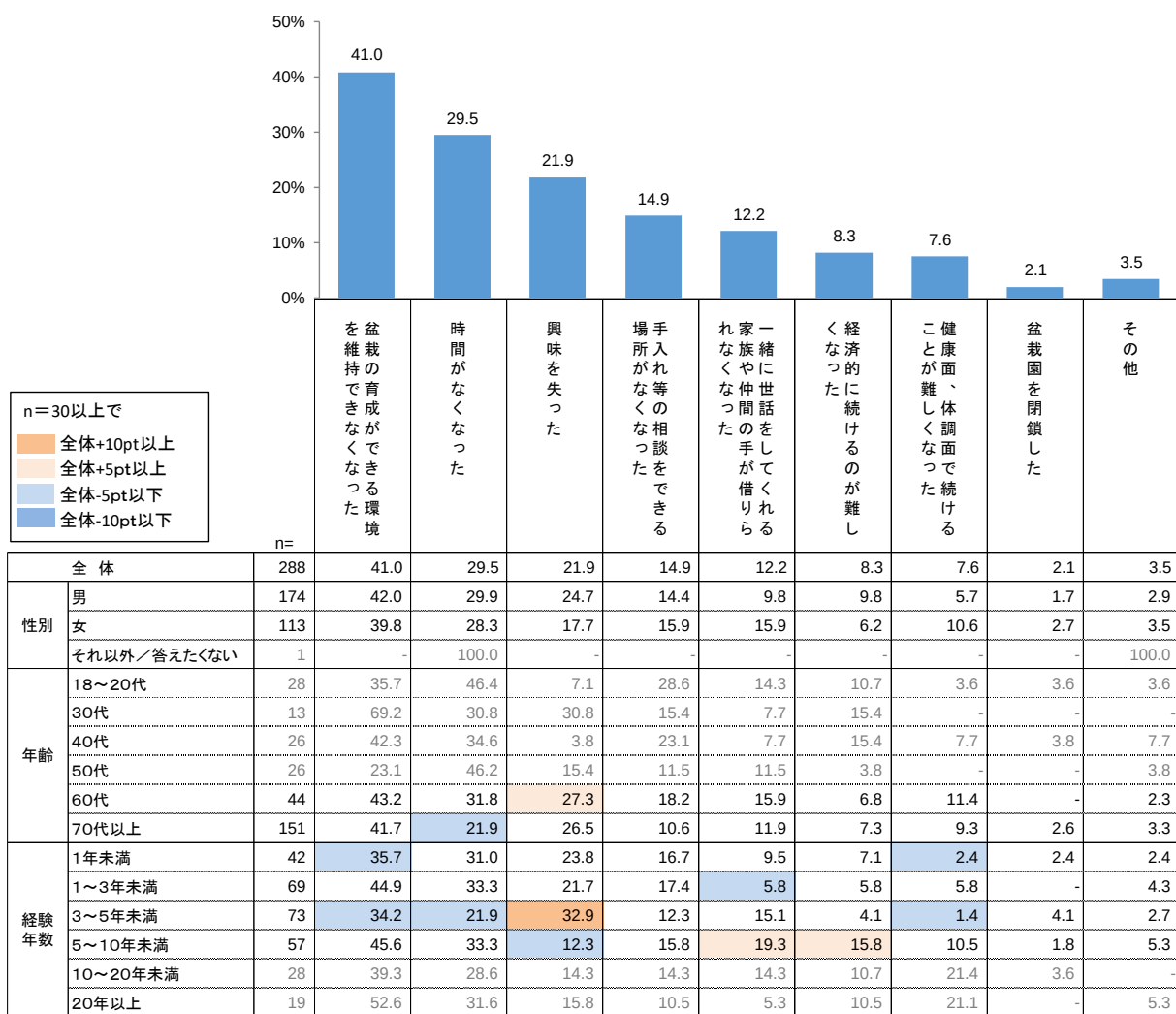
※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 EQ3補問1：盆栽を続けている理由

盆栽から離れたきっかけや理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「盆栽の育成ができる環境を維持できなくなった」の41.0%で、次いで「時間がなくなった」29.5%、「興味を失った」21.9%と続く。

経験年数別では、3～5年未満の者で「興味を失った」(32.9%)の回答比率が高く、5～10年未満の者で「一緒に世話をしてくれる家族や仲間の手が借りられなくなった」(19.3%)、「経済的に続けるのが難しくなった」(15.8%)の回答比率がやや高い。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 E Q 3 補問 2 : 盆栽から離れたきっかけや理由

(その他の内容) 枯らしてしまった、転勤で移動が難しかった、ランの栽培に変更

盆栽を続けている（続けていた）年数

全体平均で最も回答比率が高いのは「1～3年未満」の22.1%で、次いで「3～5年未満」及び「5～10年未満」（共に20.1%）が続く。全体平均で3年以上続けている（いた）人の比率は65.4%となっている。

男女別では、3年以上継続している者は、男性で68.7%（387人中266人）、女性で59.5%（210人中125人）となっており、男性の方が長く続けている（いた）人の割合が高いことが分かる。

									(%)
			1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上	3年以上
n=									
全 体		598	12.5	22.1	20.1	20.1	11.4	13.9	65.4
性別	男	387	11.6	19.6	21.4	19.9	10.6	16.8	68.7
	女	210	14.3	26.2	17.6	20.5	12.9	8.6	59.5
	それ以外／答えたくない	1	100.0						-
年齢	18～20代	92	19.6	33.7	23.9	17.4	2.2	3.3	46.7
	30代	67	17.9	28.4	23.9	13.4	11.9	4.5	53.7
	40代	59	22.0	23.7	16.9	22.0	13.6	1.7	54.2
	50代	49	16.3	30.6	20.4	22.4	6.1	4.1	53.1
	60代	77	14.3	20.8	14.3	16.9	15.6	18.2	64.9
	70代以上	254	5.1	14.6	20.1	22.8	13.8	23.6	80.3

※n=30未満は参考値のため灰色

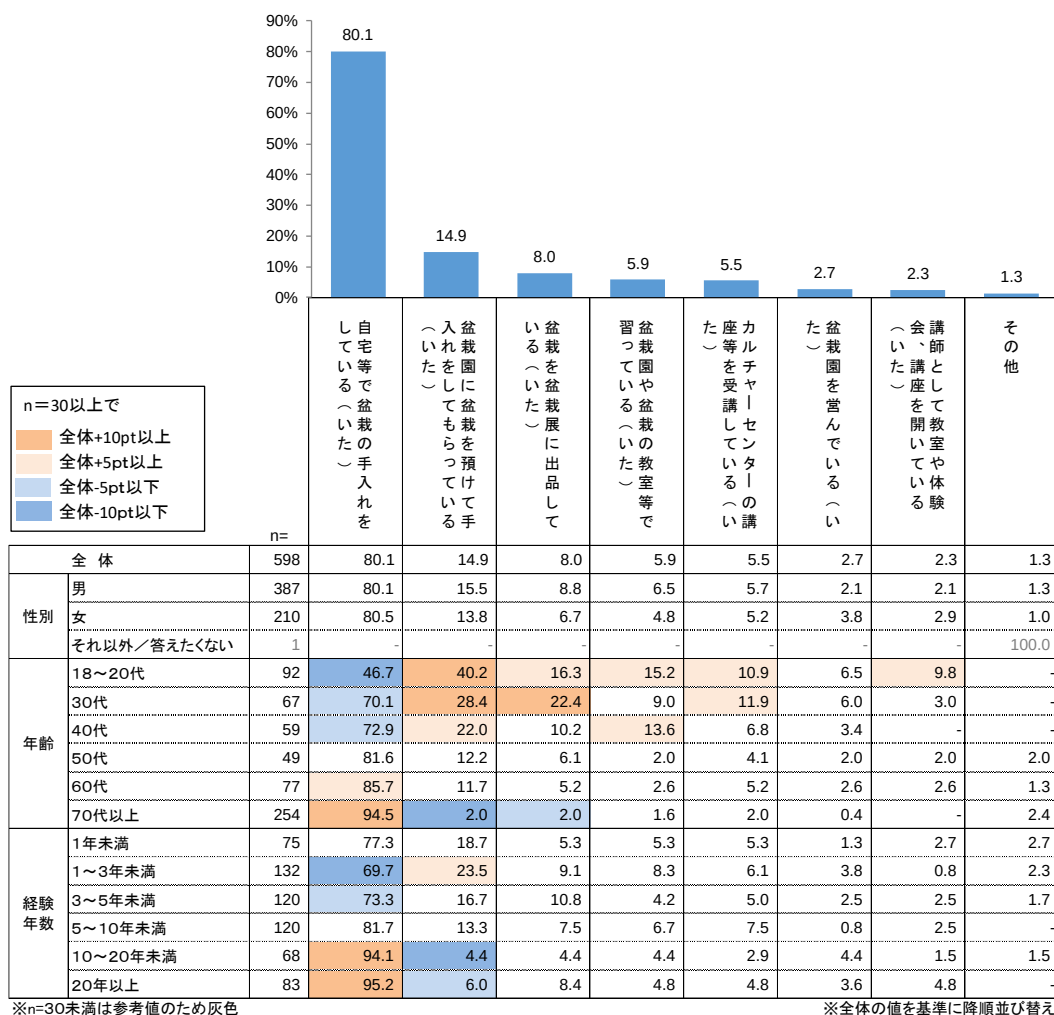
集計表 E Q 4 : 盆栽を続けている（続けていた）年数

盆栽に関する活動内容

全体平均で最も回答比率が高いのは「自宅等で盆栽の手入れをしている（いた）」の80.1%で、次いで「盆栽園に盆栽を預けて手入れをしてもらっている（いた）」14.9%、「盆栽を盆栽展に出品している（いた）」8.0%、「盆栽園や盆栽の教室等で習っている（いた）」5.9%、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」5.5%と続く。

全体平均の回答比率と年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず年齢別では、年齢が低いほど「自宅等で盆栽の手入れをしている（いた）」の回答比率が低く、「盆栽園に盆栽を預けて手入れをもらっている（いた）」、「盆栽を盆栽展に出品している（いた）」、「カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）」という回答比率が高くなっている。

また、経験年数10年以上では「自宅等で盆栽の手入れをしている（いた）」の回答比率が高く、「盆栽園に盆栽を預けて手入れをもらっている（いた）」が低い。



集計表 EQ5：盆栽に関する活動内容

（その他の内容）授業で知識を得た、何もしていない

盆栽に関する活動頻度

全体平均で最も回答比率が高いのは「週に2～3回」の28.9%で、次いで「ほぼ毎日」の20.9%、「週1回程度」20.4%と続く。週1回以上活動している（いた）比率は70.2%（598人中420人）である。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、男性で週1回以上活動している（いた）比率が72.6%（387人中281人）、女性で66.2%（210人中139人）となっている。

年齢別で見ると、30～40代で、週1回以上活動している（いた）回答比率が全体平均を上回っている。

また、経験年数別では、経験年数5年以上の者で週1回以上活動している（いた）回答比率が全体平均を上回っている。

										(%)
			ほぼ毎日	週に2～3回	週1回程度	月数回程度	月1回程度	年数回程度	年1回程度	週1回以上
n=										
全 体		598	20.9	28.9	20.4	11.2	5.9	5.7	7.0	70.2
性別	男	387	22.0	29.7	20.9	11.1	5.9	5.2	5.2	72.6
	女	210	19.0	27.6	19.5	11.4	5.7	6.7	10.0	66.2
	それ以外／答えたくない	1	100.0							-
年齢	18～20代	92	23.9	28.3	17.4	14.1	6.5	3.3	6.5	69.6
	30代	67	34.3	32.8	17.9	6.0	3.0	3.0	3.0	85.1
	40代	59	32.2	22.0	27.1	8.5	3.4	1.7	5.1	81.4
	50代	49	10.2	30.6	12.2	10.2	10.2	16.3	10.2	53.1
	60代	77	19.5	27.3	22.1	13.0	6.5	5.2	6.5	68.8
	70代以上	254	16.1	29.9	21.7	11.8	5.9	6.3	8.3	67.7
経験年数	1年未満	75	32.0	17.3	14.7	6.7	6.7	6.7	16.0	64.0
	1～3年未満	132	11.4	37.1	21.2	12.1	6.8	3.0	8.3	69.7
	3～5年未満	120	15.0	33.3	21.7	14.2	5.0	5.0	5.8	70.0
	5～10年未満	120	15.8	32.5	23.3	10.8	4.2	10.0	3.3	71.7
	10～20年未満	68	27.9	22.1	25.0	11.8	4.4	4.4	4.4	75.0
	20年以上	83	36.1	20.5	14.5	9.6	8.4	4.8	6.0	71.1

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 EQ6：盆栽に関する活動頻度

盆栽に関する月額費用

全体平均で最も回答比率が高いのは月額「5,000 円未満」の 66.6%で、次いで「5,000 円以上～10,000 円未満」14.4%、「10,000 円以上～15,000 円未満」5.2%と続く。月額 1 万円以上支出している（いた）と回答した比率は 19.1%（598 人中 114 人）である。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、月額 1 万円以上支出の割合が、男性 21.7%（387 人中 84 人）、女性 14.3%（210 人中 30 人）と男性の方が高い。

次に年齢別で見ると、年齢が低いほど、月額 1 万円以上支出している（いた）割合が高いことが分かる。

また、経験年数別では、経験年数 1 年未満の者、20 年以上の者は月額「5,000 円未満」の回答比率が高い。

			(%)										
			5,000 円未満	5,000 円以上～10,000 円未満	10,000 円以上～15,000 円未満	15,000 円以上～20,000 円未満	20,000 円以上～25,000 円未満	25,000 円以上～30,000 円未満	30,000 円以上～35,000 円未満	35,000 円以上～40,000 円未満	40,000 円以上～45,000 円未満	45,000 円以上～50,000 円未満	50,000 円以上
		n=	598	66.6	14.4	5.2	3.5	3.7	1.2	1.3	1.2	0.7	0.8
性別	全体	598	66.6	14.4	5.2	3.5	3.7	1.2	1.3	1.2	0.7	0.8	1.5
	男	387	64.6	13.7	6.5	4.4	4.1	1.3	1.3	1.8	0.8	0.8	0.8
	女	210	70.0	15.7	2.9	1.9	2.9	1.0	1.4	-	0.5	1.0	2.9
	それ以外／答えたくない	1	100.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
年齢	18～20代	92	33.7	23.9	13.0	5.4	8.7	1.1	1.1	4.3	2.2	3.3	3.3
	30代	67	49.3	9.0	7.5	7.5	10.4	1.5	6.0	3.0	3.0	-	3.0
	40代	59	54.2	15.3	10.2	5.1	6.8	3.4	3.4	-	-	1.7	-
	50代	49	71.4	10.2	4.1	4.1	4.1	2.0	-	-	-	2.0	2.0
	60代	77	76.6	14.3	2.6	1.3	1.3	-	1.3	-	-	-	2.6
	70代以上	254	81.9	13.0	1.6	2.0	-	0.8	-	0.4	-	-	0.4
経験年数	1年未満	75	82.7	6.7	5.3	-	2.7	-	1.3	-	-	-	1.3
	1～3年未満	132	65.2	17.4	8.3	2.3	3.0	0.8	1.5	1.5	-	-	-
	3～5年未満	120	60.0	18.3	4.2	4.2	7.5	0.8	0.8	1.7	0.8	0.8	0.8
	5～10年未満	120	62.5	12.5	5.0	5.8	5.0	1.7	2.5	1.7	0.8	2.5	-
	10～20年未満	68	63.2	14.7	5.9	5.9	-	2.9	-	-	2.9	1.5	2.9
	20年以上	83	72.3	13.3	1.2	2.4	1.2	1.2	1.2	1.2	-	-	6.0

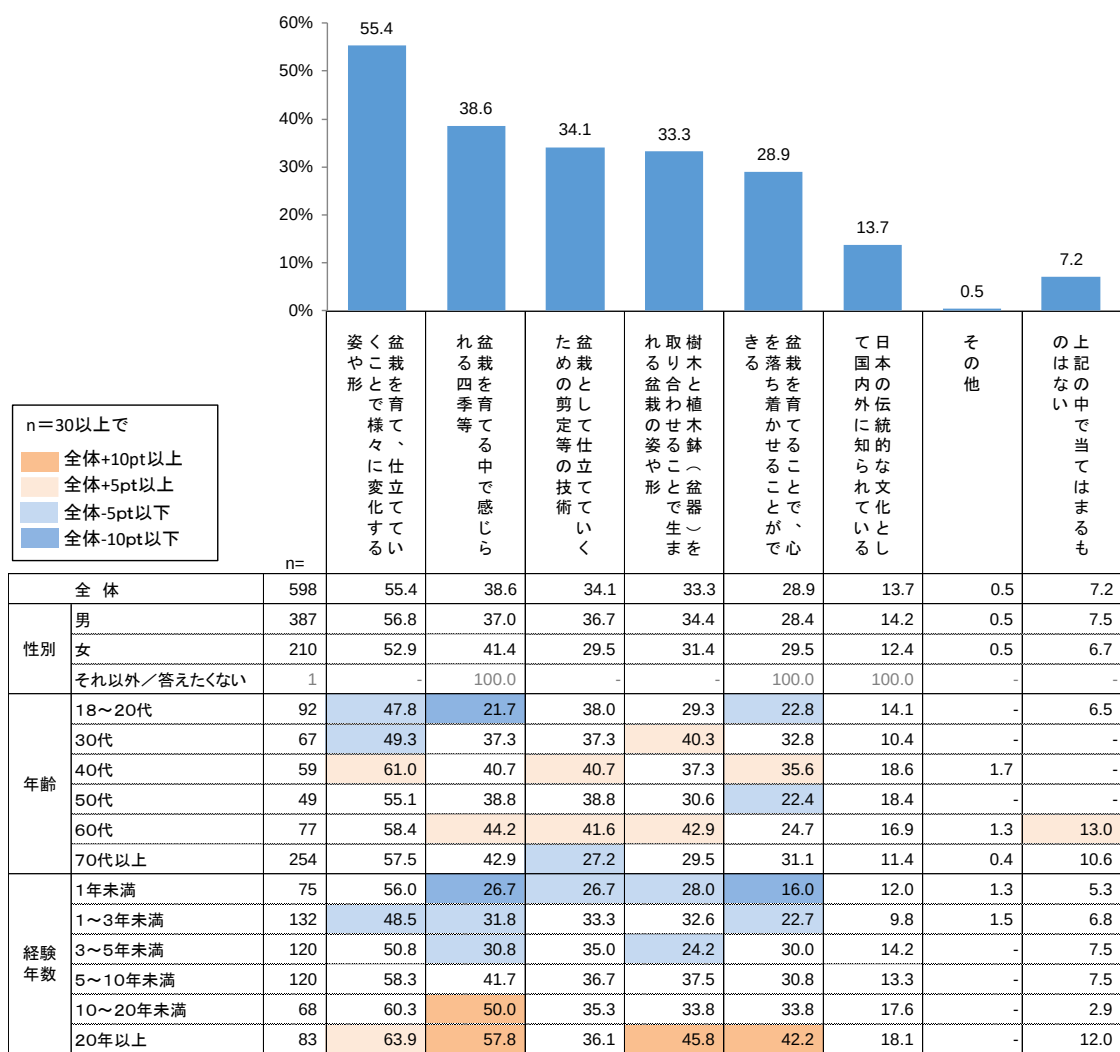
※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 EQ7：盆栽に関する月額費用

盆栽に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「盆栽を育て、仕立てていくことで様々な姿や形」の55.4%で、次いで「盆栽を育てる中で感じられる四季等」38.6%、「盆栽として仕立てていくための剪定等の技術」34.1%、「樹木と植木鉢（盆器）を取り合わせることで生まれる盆栽の姿や形」33.3%と続く。

経験年数別では、年数が長いほど「盆栽を育てる中で感じられる四季等」、「盆栽を育てることで、心を落ち着かせることができる」の回答比率が高い。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 EQ8：盆栽に関する興味関心や魅力

（その他の内容）静かなペットのような存在感、インテリアとして、緑に親しむ

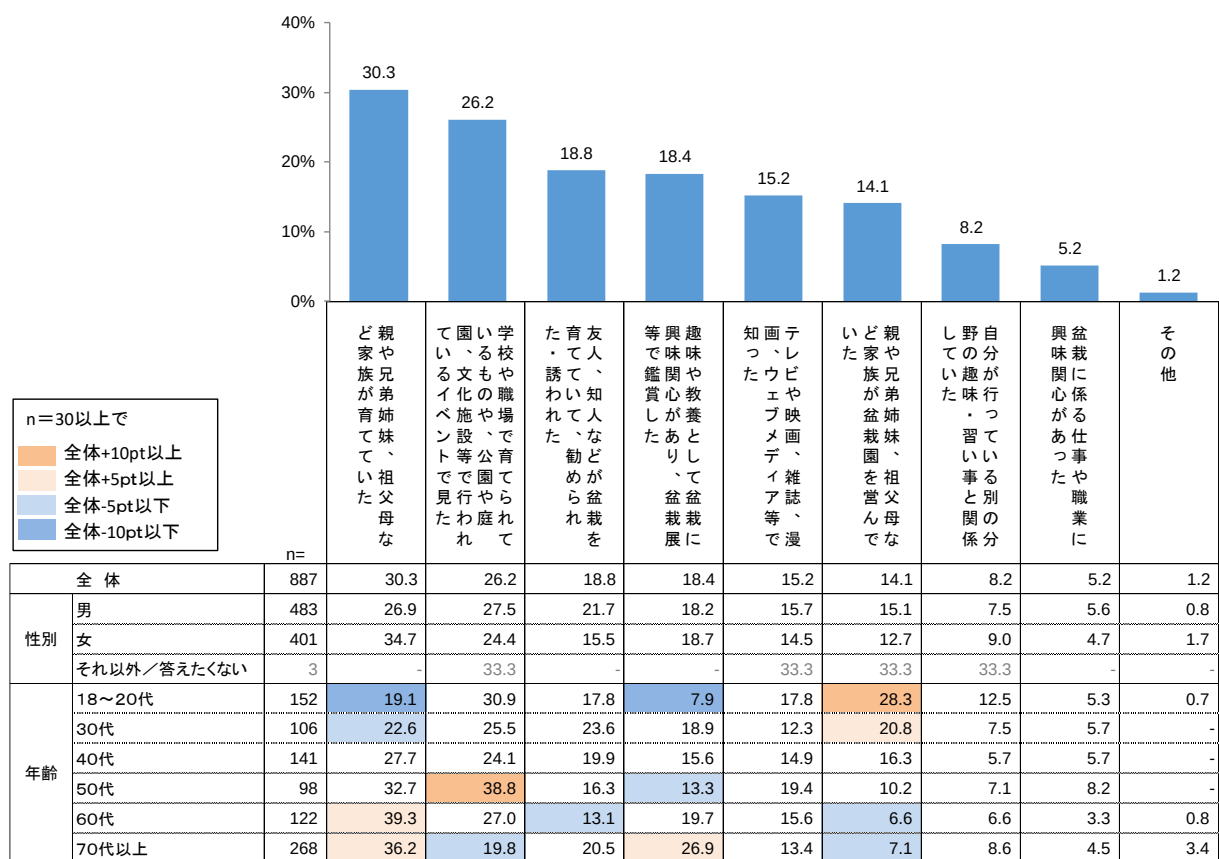
■「イベント等で盆栽体験をしたことはある」と回答した者への設問（EQ9～EQ15）

本設問では、盆栽をイベント等で体験したと回答した者が、どのようなきっかけや機会に盆栽に関わる体験をしたのか、また、どの程度盆栽に興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

盆栽を体験したきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた」の30.3%で、次いで「学校や職場で育てられているものや、公園や庭園、文化施設等で行われているイベントで見た」26.2%、「友人、知人などが盆栽を育てていて、勧められた・誘われた」18.8%、「趣味や教養として盆栽に興味関心があり、盆栽展等で鑑賞した」18.4%と続く。

年齢別では10～30代で「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた」の回答比率が高く、60代以上は「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた」の回答比率が高い。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 EQ9：盆栽を体験したきっかけ

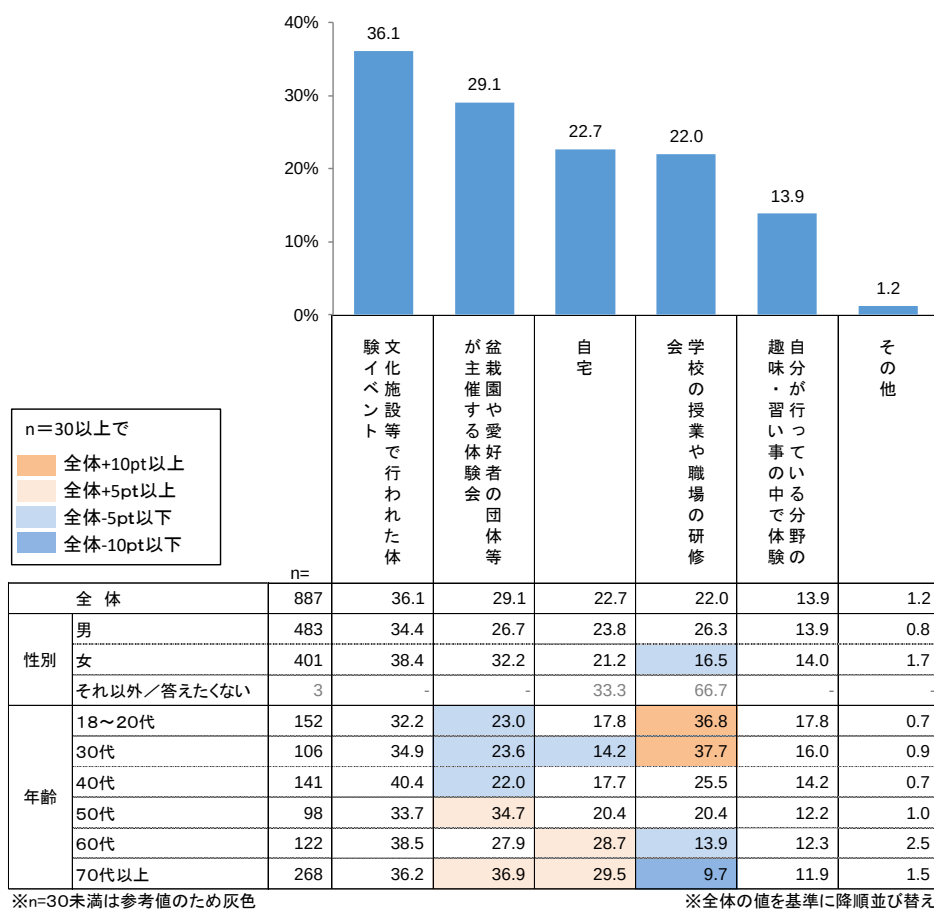
（その他の内容）趣味が多いため、隣に盆栽をたくさん作っている人が越してきた

盆栽を体験した場

全体平均で最も回答比率が高いのは「文化施設等で行われた体験イベント」の36.1%で、次いで「盆栽園や愛好者の団体等が主催する体験会」29.1%、「自宅」22.7%、「学校の授業や職場の研修会」22.0%となる。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、まず男女別では、女性で「学校の授業や職場の研修会」(16.5%)の回答比率が低い。

また、年齢別では、10～30代で「学校の授業や職場の研修会」の回答比率が高い。また、10～40代では「盆栽園や愛好者の団体等が主催する体験会」の回答比率が低い。



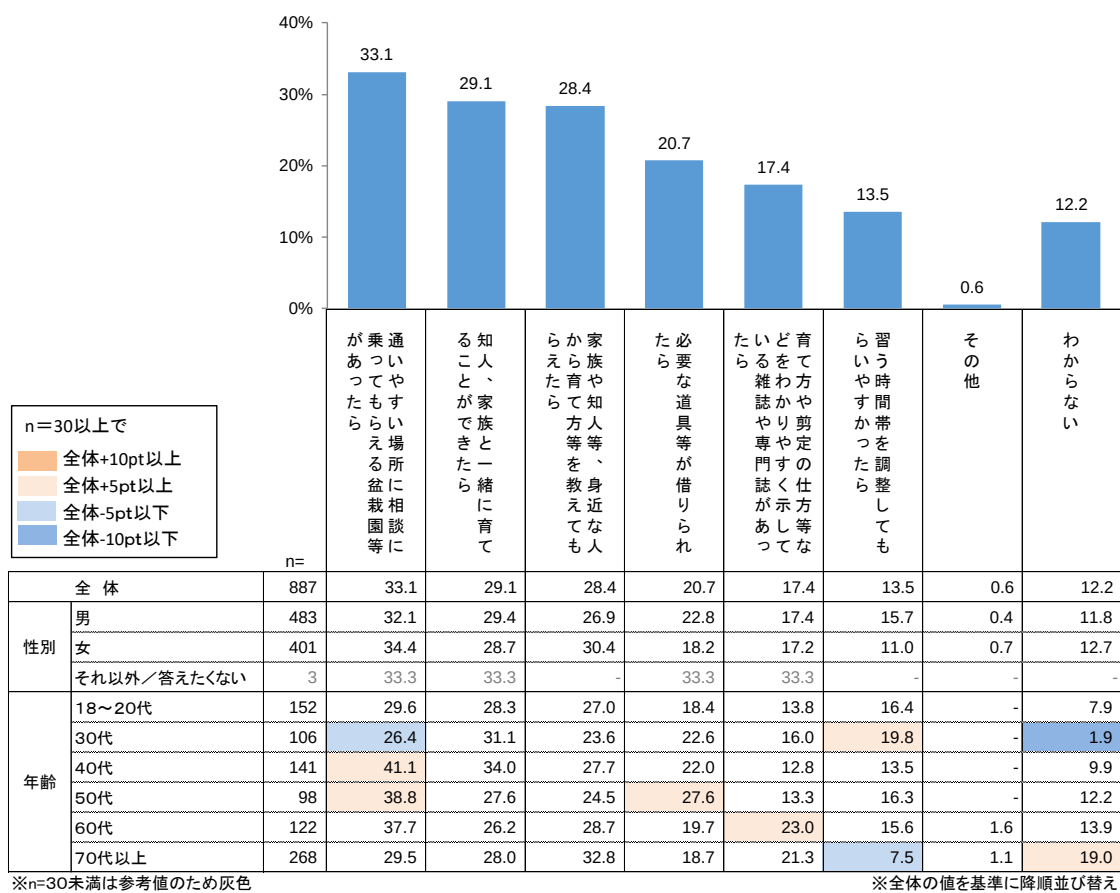
集計表 E Q10 : 盆栽を体験した場

(その他の内容) 愛好者の家で手入れを体験、企業のイベント、盆栽の美術館に行った、結婚式場の花屋で仕事をしていた

盆栽を育てやすい状況

全体平均で最も回答比率が高いのは「通いやすい場所に相談に乗ってもらえる盆栽園等があったら」の33.1%で、次いで「知人、家族と一緒に育てることができたら」29.1%、「家族や知人等、身近な人から育て方等を教えてもらえたら」28.4%、少し離れて「必要な道具等が借りられたら」20.7%と並ぶ。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較した場合、30代で「通いやすい場所に相談に乗ってもらえる盆栽園等があったら」の回答比率がやや低い一方、40～50代ではやや高い。



集計表 EQ11：盆栽を育てやすい状況

(その他の内容) 置く場所次第、人様の作品で楽しませていただく

盆栽に支払える月額費用

全体平均で最も回答比率が高いのは「5,000 円未満」の 43.9%で、次いで「5,000 円以上～10,000 円未満」27.8%、「10,000 円以上～15,000 円未満」9.8%となった。月額 1 万円以上支払ってもいいと回答した比率は 28.3%（887 人中 251 人）である。

男女別を見ると、男性で月額 1 万円以上支払ってもよいという回答比率が 31.5%（483 人中 152 人）あったのに対し、女性は 24.4%（401 人中 98 人）にとどまる。

また、年齢別では、年齢が若いほど月額 1 万円以上支払ってもよいという回答が増える傾向がある。

		(%)												
		5 0 0 0 円 未 満	1 5 0 , 0 0 0 0 円 以 上 未 満	1 1 5 0 0 0 0 円 未 以 上	2 1 0 5 0 0 0 円 未 以 上	2 2 5 0 0 0 0 円 未 以 上	3 2 0 5 0 0 0 円 未 以 上	3 3 5 0 0 0 0 円 未 以 上	4 3 0 5 0 0 0 円 未 以 上	4 4 5 0 0 0 0 円 未 以 上	5 4 0 5 0 0 0 円 未 以 上	5 0 0 0 円 以 上	合 1 計 0 0 0 0 円 以 上	
n=30以上で														
全体+10pt以上														
全体+5pt以上														
全体-5pt以下														
全体-10pt以下														
n=														
全 体		887	43.9	27.8	9.8	5.6	5.1	2.9	1.6	0.7	0.6	0.5	1.6	28.3
性 別	男	483	37.9	30.6	11.4	6.4	5.6	3.7	2.1	0.4	0.2	0.2	1.4	31.5
	女	401	51.1	24.4	8.0	4.7	4.5	2.0	1.0	1.0	1.0	0.7	1.5	24.4
	それ以外／答えたくない	3	33.3	33.3	-	-	-	-	-	-	-	-	33.3	33.3
年 齢	18～20代	152	21.7	28.3	15.8	10.5	9.2	3.9	2.6	3.3	-	2.0	2.6	50.0
	30代	106	28.3	19.8	14.2	9.4	15.1	3.8	3.8	-	3.8	-	1.9	51.9
	40代	141	34.8	29.8	12.8	5.7	6.4	5.7	2.8	-	0.7	-	1.4	35.5
	50代	98	49.0	28.6	11.2	6.1	2.0	1.0	-	1.0	-	-	1.0	22.4
	60代	122	58.2	27.9	6.6	4.1	0.8	0.8	0.8	-	-	-	0.8	13.9
	70代以上	268	59.0	29.5	4.1	1.9	1.1	2.2	0.4	-	-	0.4	1.5	11.6

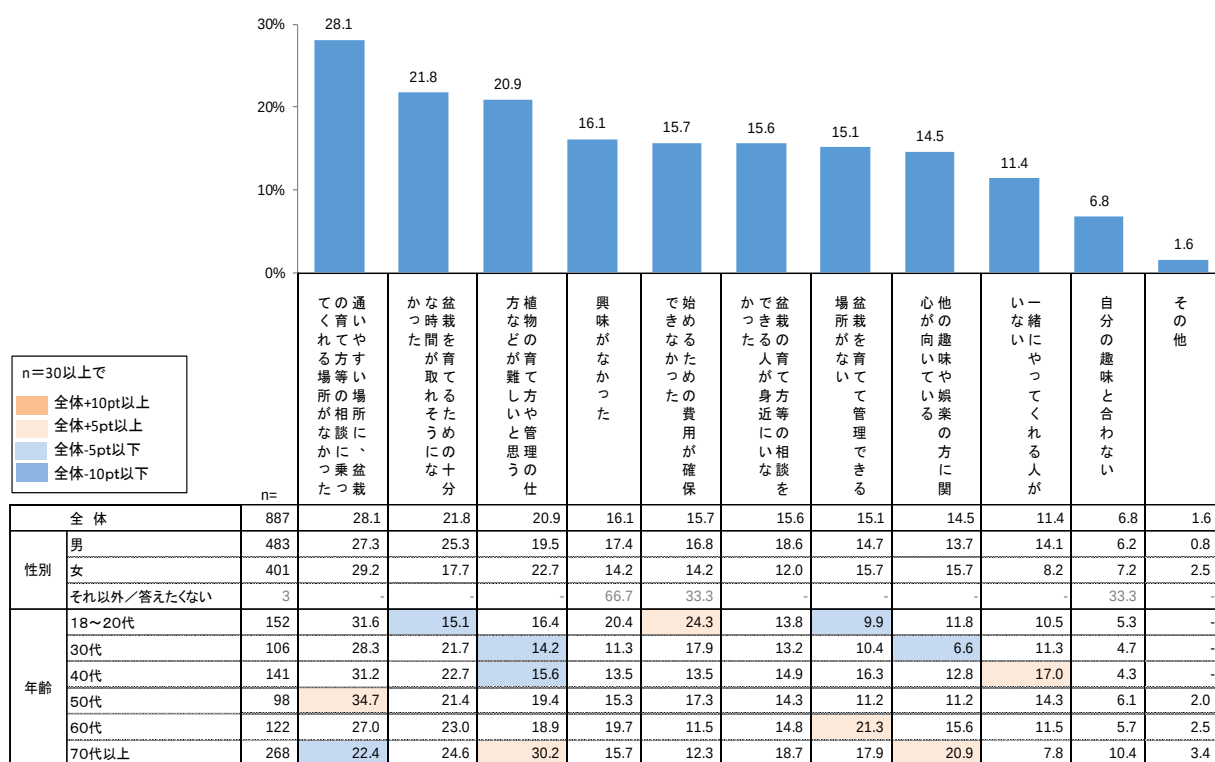
※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 EQ12：盆栽に支払える月額費用

盆栽を育てていない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「通いやすい場所に、盆栽の育て方等の相談に乗ってくれる場所がなかった」の28.1%で、次いで「盆栽を育てるための十分な時間が取れそうになかった」21.8%、「植物の育て方や管理の仕方などが難しいと思う」20.9%、「興味がなかった」16.1%となった。

年齢別では、18～20代で「始めるための費用が確保できなかった」の回答比率が高い一方、60代では「盆栽を育てて管理できる場所がない」、70代以上では「植物の育て方や管理の仕方などが難しいと思う」、「他の趣味や娯楽の方に興味が向いている」の回答比率が高く、年代によって育てていない理由に異なる傾向が見られる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

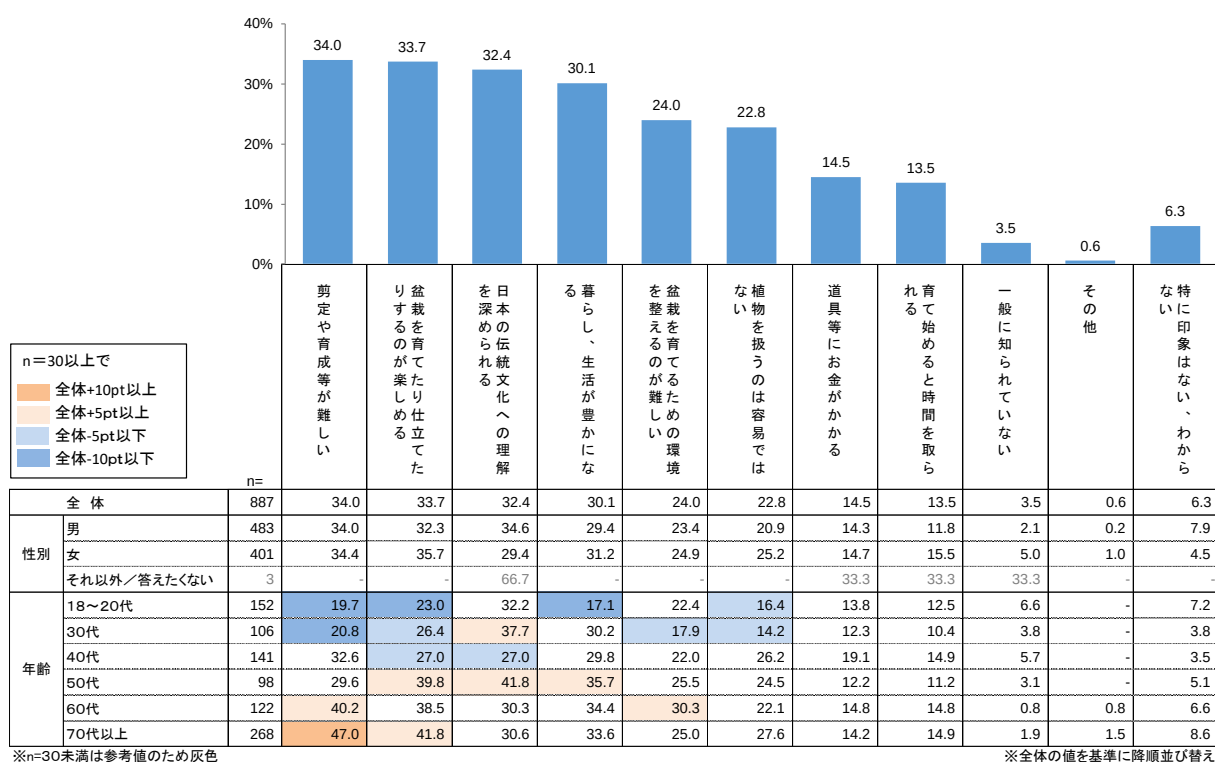
集計表 EQ13：盆栽を育てていない理由

(その他の内容) 毎日の水やりが大変、鑑賞だけで十分、素敵に思うが洋風な家で合わない

盆栽に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは「剪定や育成等が難しい」の34.0%で、ほぼ同率で「盆栽を育てたり仕立てたりするのが楽しめる」33.7%、「日本の伝統文化への理解を深められる」32.4%と続き、次いで「暮らし、生活が豊かになる」30.1%、「植物を育てるための環境を整えるのが難しい」24.0%となっており、剪定や育成の難しさがわずかに先行してはいるが、肯定的なイメージへの回答比率が高くなっている。

年齢別では、10～40代で「盆栽を育てたり仕立てたりするのが楽しめる」の回答比率が低く、10～30代で「剪定や育成等が難しい」、「植物を扱うのは容易ではない」という回答比率が低い。一方、60代以上で「剪定や育成等が難しい」の回答比率が高くなる。



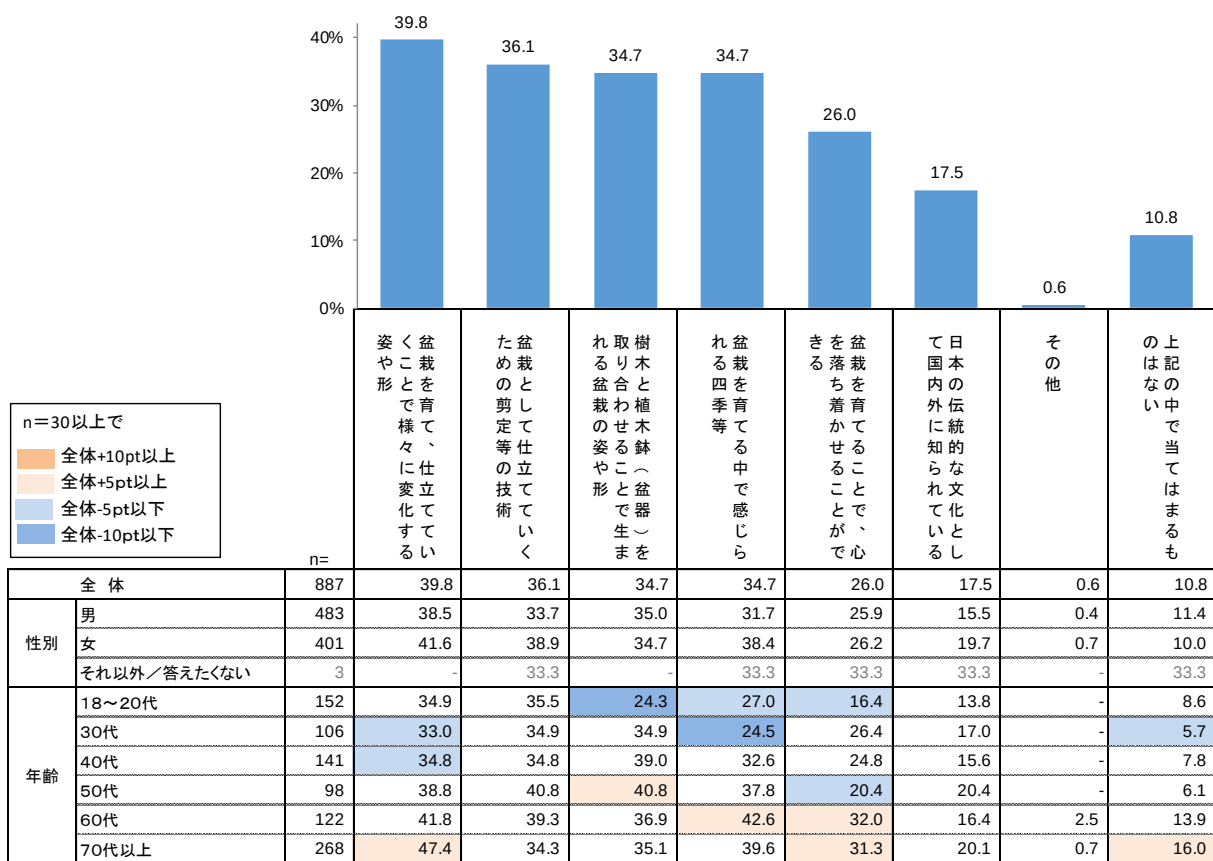
集計表 EQ14：盆栽に対する印象やイメージ

(その他の内容) 我流で楽しんでいる、毎日の手入れが必要、旅行に行けない

盆栽に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「盆栽を育て、仕立てていくことで様々に変化する姿や形」の39.8%で、次いで「盆栽として仕立てていくための剪定等の技術」36.1%、「樹木と植木鉢（盆器）を取り合わせることで生まれる盆栽の姿や形」、「盆栽を育てる中で感じられる四季等」（共に34.7%）、「盆栽を育てることで、心を落ち着かせることができる」26.0%が続いている。

年齢別で見ると、60代以上で「盆栽を育て、仕立てていくことで様々に変化する姿や形」や「盆栽を育てることで、心を落ち着かせることができる」の回答比率が高くなる傾向がある一方、40～50代では、「樹木と植木鉢（盆器）を取り合わせることで生まれる盆栽の姿や形」の回答比率が高く、年代によって魅力や興味関心の傾向は若干異なっている。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 EQ15：盆栽に関する興味関心や魅力

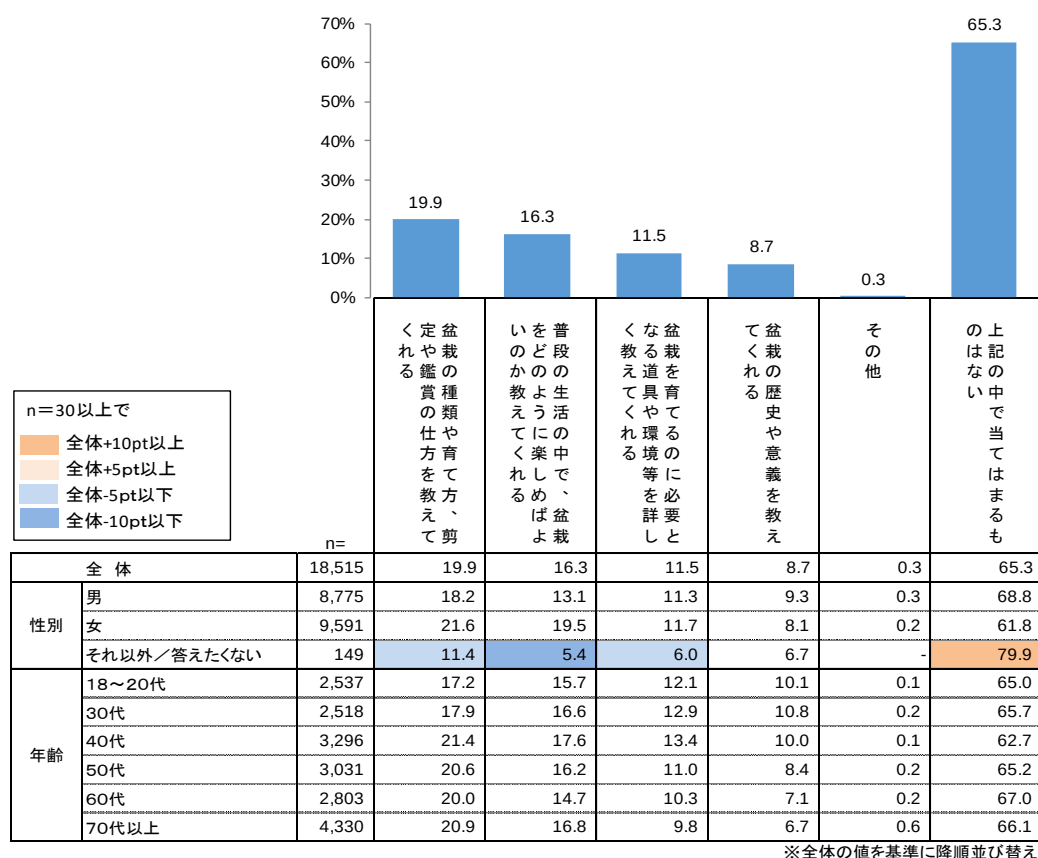
（その他の内容）自然に親しむ心がけ、苔が好き、完成作品の美しさ

■「盆栽を育てたり盆栽体験をしたりしたことはない」と回答した者への設問（E Q16～E Q20）

本設問では、盆栽を経験したことがないと回答した者が、盆栽を育てる体験をするなら、どのような内容や機会なら参加したいか、また、盆栽に対してどの程度、興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

参加してみたい盆栽の体験内容

全体で最も回答比率が高いのは「上記の中で当てはまるものはない」の65.3%で、次いで「盆栽の種類や育て方、剪定や鑑賞の仕方を教えてくれる」19.9%、「普段の生活の中で、盆栽をどのように楽しめばよいのか教えてくれる」16.3%、「盆栽を育てるのに必要となる道具や環境等を詳しく教えてくれる」11.5%となった。

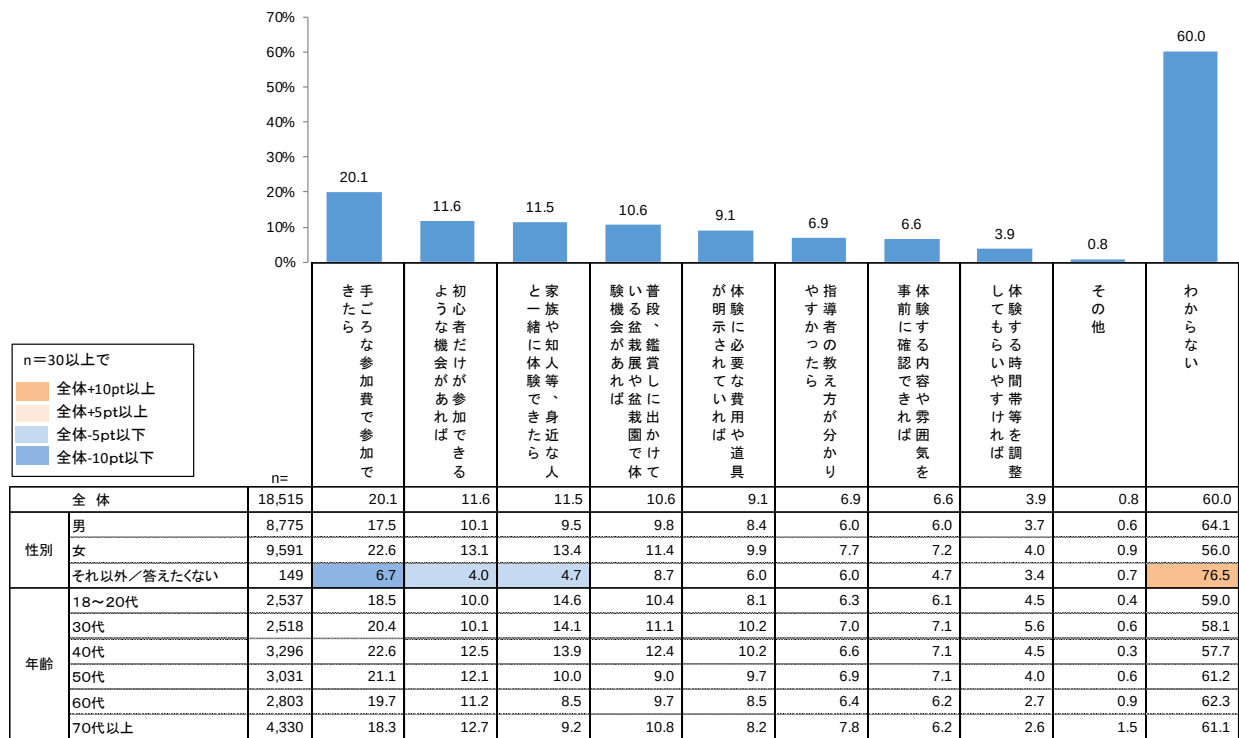


集計表 E Q16：参加してみたい盆栽の体験内容

（その他の内容）無料・値段が安い、一日体験、格付けの盆栽を見分けることができる、通販で買える

参加しやすい盆栽の体験条件

全体平均で最も回答比率が高いのは「わからない」の 60.0%で、次いで「手ごろな参加費で参加できたら」20.1%、「初心者だけが参加できるような機会があれば」11.6%、「家族や知人等、身近な人と一緒に体験できたら」11.5%、「普段、鑑賞しに出かけている盆栽展や盆栽園で体験機会があれば」10.6%となる。



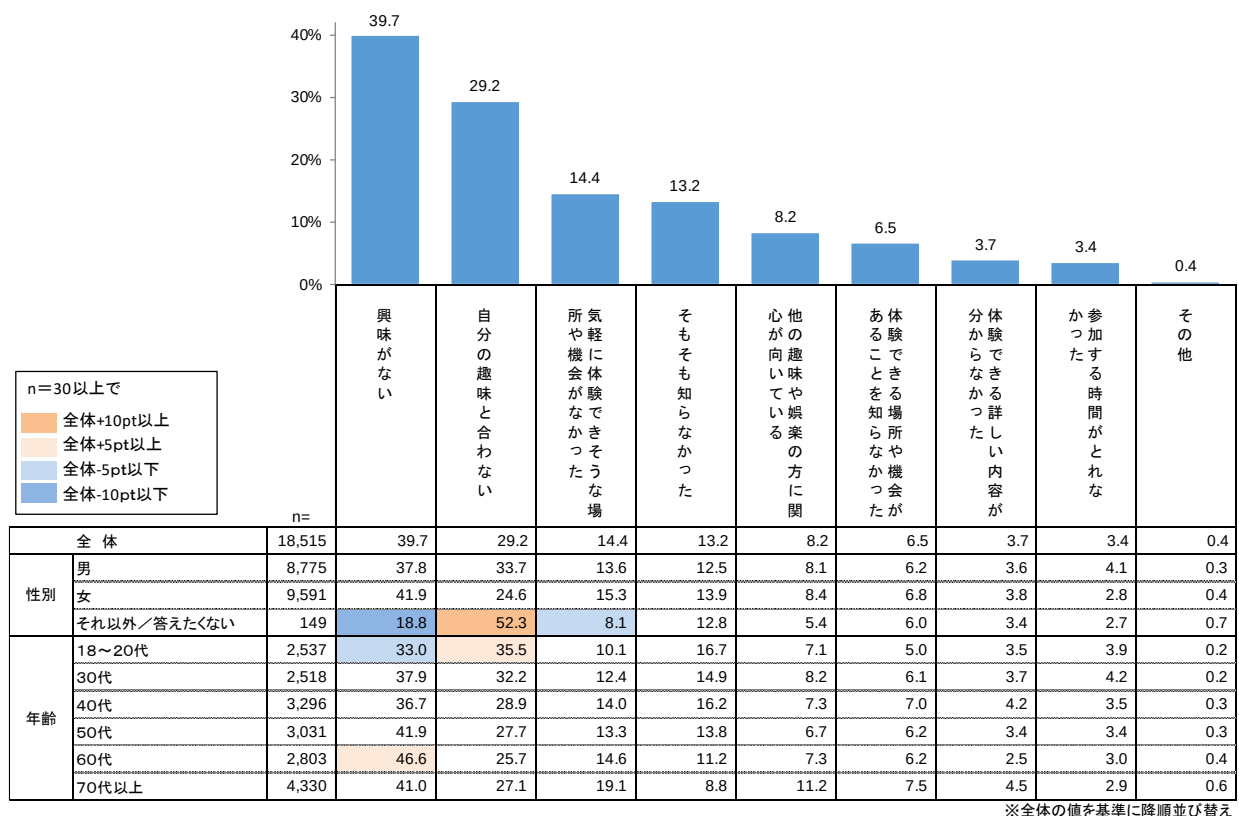
集計表 EQ17：参加しやすい盆栽の体験条件

(その他の内容) 無料体験があれば、かしこまった感じではなくフランク、場所が近ければ、持ち帰れる

盆栽を体験したことがない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「興味がない」の39.7%で、次いで「自分の趣味と合わない」29.2%、「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」14.4%、「そもそも知らなかった」13.2%と続く。

年齢別では、18～20代で「自分の趣味と合わない」(35.5%)の回答比率が高いほか、60代で「興味がない」(46.6%)の回答比率が高い。



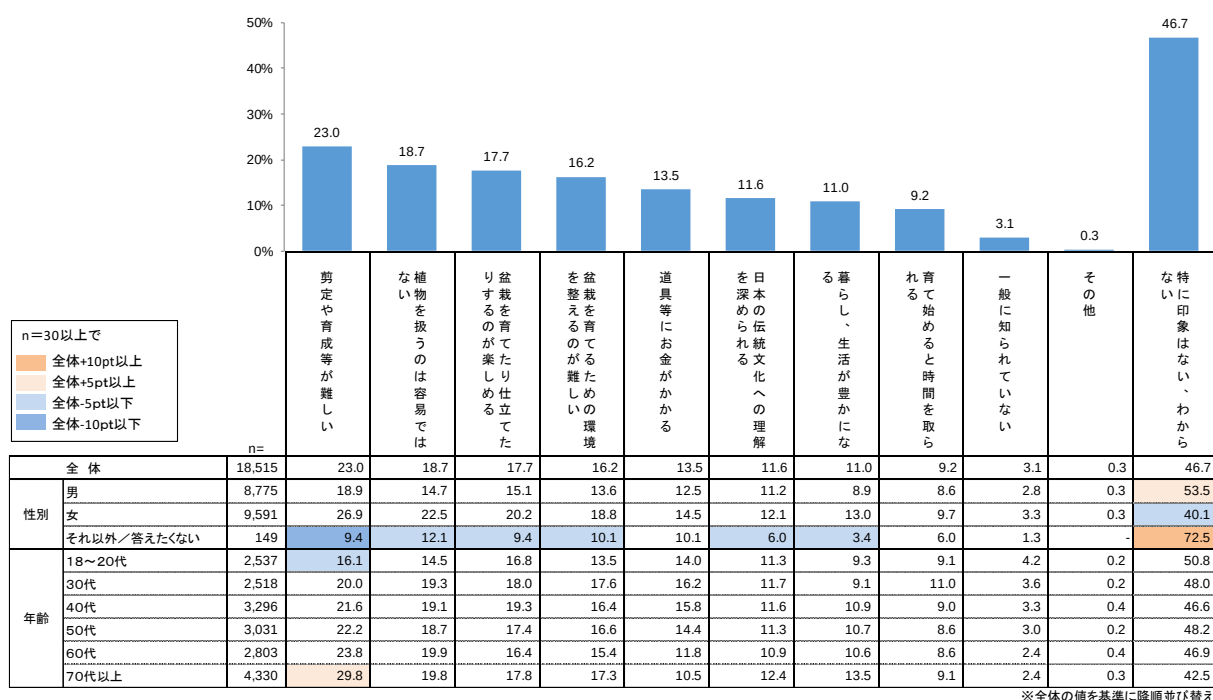
集計表 EQ18：盆栽を体験したことがない理由

(その他の内容) 費用が高そう、育てるのが難しい、長い年月がかかるから、専門的で敷居が高い

盆栽に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは「特に印象はない、わからない」の46.7%で、次いで「剪定や育成等が難しい」23.0%、「植物を扱うのは容易ではない」18.7%、「盆栽を育てたり仕立てたりするのが楽しめる」17.7%、「盆栽を育てるための環境を整えるのが難しい」16.2%、「道具等にお金がかかる」13.5%と続いている。「特に印象はない、わからない」以外の上位5つの回答のうち、プラスのイメージはあるものの、盆栽が生き物であるが故に剪定や育成、環境を整えることが難しいという印象が強いことが傾向に表れている。

次に年齢別に見ると、「剪定や育成等が難しい」との回答した者の中で、70代以上（29.8%）の回答比率が高い一方で、18～20代（16.1%）の回答比率が低い。

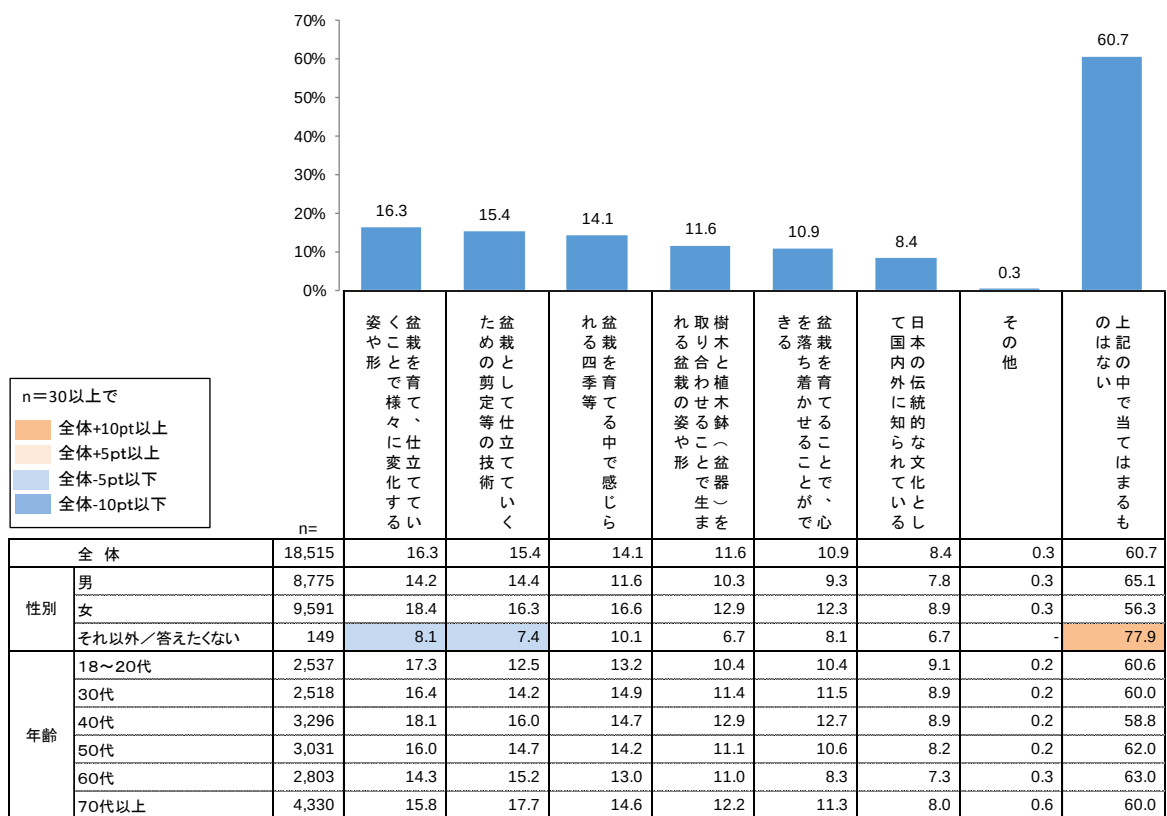


集計表 EQ19：盆栽に対する印象やイメージ

（その他の内容）植物を無理な方向に曲げたり成長を止めたり不自然なことをしている、どちらかという而定年後の男性の趣味、場所をとる

盆栽に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは「上記の中で当てはまるものはない」の60.7%で、次いで「盆栽を育て、仕立てていくことで様々に変化する姿や形」16.3%、「盆栽として仕立てていくための剪定等の技術」15.4%、「盆栽を育てる中で感じられる四季等」14.1%と続く。



集計表 E Q20：盆栽に関する興味関心や魅力

(その他の内容) 安価に体験できるなら、入門セットみたいな物があれば始めるかも

②調査結果に基づく分析と考察

本節では、盆栽の振興施策の検討を主眼として、前掲の集計結果に加えてクロス集計等も行い、これらの結果について分析を行う。

盆栽に関して「経験あり」、「参加体験あり」、「未経験」、それぞれの回答者にどのような特徴が見られるのかを分析するため、「居住地」、「職業」、「同居家族」、「世帯年収」、「子供の頃の習い事」等の設問や設問間とのクロス集計を行った。結果は以下のとおりである。

回答者の特性や傾向について

■居住地、職業、同居家族、世帯年収とのクロス集計結果

盆栽の経験・体験の有無と各属性別とのクロス集計の結果、特に際立った傾向は見られない。

居住地・職業・同居家族・昨年度の世帯年収×盆栽の経験の有無

		FQ フィルタリング・パート			(%)
		n=	「経験あり」層	「参加体験あり」層	「未経験」層
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下					
全 体		20,000	3.0	4.4	92.6
居住地	北海道	852	3.2	2.9	93.9
	東北	1,385	3.1	4.8	92.1
	関東	7,422	3.2	5.1	91.8
	北陸	816	3.6	2.9	93.5
	東海(中部)	2,349	2.3	4.7	93.0
	近畿	3,247	3.0	3.7	93.3
	中国	1,140	3.2	4.0	92.7
	四国	584	3.6	4.6	91.8
	九州	1,987	2.7	4.0	93.3
	沖縄	218	0.5	5.0	94.5
職業	正規の職員・従業員	6,411	2.9	5.3	91.7
	非正規の職員・従業員	2,803	1.9	4.0	94.1
	自営業主・自由業	1,239	3.6	6.1	90.4
	家族従業者	135	3.7	8.1	88.1
	主婦・主夫	3,987	2.4	3.8	93.8
	学生	512	3.7	3.9	92.4
	リタイア、無職	4,141	4.4	3.7	91.9
同居家族	その他	772	1.3	3.0	95.7
	ひとり暮らし	4,145	3.3	4.6	92.2
	核家族	13,277	2.9	4.3	92.8
	三世代家族	1,179	3.6	5.9	90.6
昨年度の世帯年収	上記以外で同居している人がいる	1,399	2.1	4.1	93.8
	100万円未満	991	3.0	3.0	93.9
	100万円以上～200万円未満	1,325	3.8	4.5	91.7
	200万円以上～300万円未満	2,030	3.8	4.8	91.4
	300万円以上～400万円未満	2,367	3.9	4.9	91.3
	400万円以上～500万円未満	1,937	2.5	5.5	92.0
	500万円以上～600万円未満	1,457	2.8	5.1	92.0
	600万円以上～700万円未満	1,096	2.9	6.0	91.1
	700万円以上～800万円未満	1,024	2.5	3.9	93.6
	800万円以上～900万円未満	702	3.6	8.0	88.5
	900万円以上～1,000万円未満	653	3.4	5.5	91.1
	1,000万円以上	1,525	4.1	5.9	90.0
	分からない	4,893	1.8	2.4	95.8

■子供の頃の習い事とのクロス集計結果

次に、盆栽の経験・体験の有無についての回答と、「子供の頃の習い事」に関する設問への回答とのクロス集計の結果を示す。

クロス集計を行った結果、「経験あり」と回答した者の全体平均（3.0％）と比較すると、「囲碁や将棋」（18.6％）の回答比率が大きく上回っているほか、「バレエやダンス」（10.1％）、「伝統芸能や茶道・華道等の芸事」（8.7％）も全体平均を上回る回答比率を示している。「参加体験あり」と回答した者でも近似した傾向が表れており、「囲碁や将棋」、「バレエやダンス」、「伝統芸能や茶道・華道等の芸事」に加えて、「美術」についても回答比率が高いことが分かる。

子供の頃の習い事×盆栽の経験の有無

		FQ フィルタリング・パート		
		「経験あり」層	「参加体験あり」層	「未経験」層
		n=		
全 体	20,000	3.0	4.4	92.6
楽器演奏(ピアノやバイオリンなど)や歌唱(コーラスや声楽など)	4,615	3.7	5.8	90.5
バレエやダンス(バレエ、モダンダンスやコンテンポラリーダンスなど)	755	10.1	14.6	75.4
美術(絵画や版画、彫刻、工芸など)	939	7.9	12.2	79.9
伝統芸能や茶道・華道等の芸事	743	8.7	13.7	77.5
囲碁や将棋	221	18.6	23.1	58.4
書道・習字・ペン字、そろばん	8,121	3.3	5.3	91.4
スポーツ・武道	3,661	3.6	6.6	89.9
その他	449	3.6	3.6	92.9
していない	7,852	2.1	2.2	95.7

■スポーツや趣味、娯楽等の活動とのクロス集計結果

次に、スポーツや趣味、娯楽等（以下、趣味・娯楽等）の活動の内容や、これらの活動に費やす時間やお金に関する回答結果とのクロス集計結果と、そこから見る特徴や傾向を示す。

趣味・娯楽等として行っている活動内容のクロス集計結果を見ると、「特に何もしていない」の全体平均の回答比率は17.4％であるが、「経験あり」（3.0％）、「参加体験あり」（3.7％）と、経験あり・参加体験ありの回答者共に、趣味・娯楽等と積極的な関わりを持っていることがうかがえる。

次に盆栽を育てた経験があると回答した者の、趣味・娯楽等の活動内容の傾向を見ると、日本の伝統的な文化に関して全体平均を上回る回答比率となっている。

一方、盆栽体験をしたことがあると回答した者の趣味・娯楽等の活動内容の傾向を見ると、盆栽の経験者と比べて「書道」と「お花」の回答比率が高い。また、「特に何もしていない」の回答比率も経験者の回答比率と比べると少し高いことが分かる。

また、前述のとおり、盆栽を未経験であると回答した者については「特に何もしていない」の回答比率が全体平均をやや上回っている上、日本の伝統的な文化との関わりも全体平均をやや下回っており、伝統的な文化との関わりについてはあまり積極的な傾向は見られない。

次に、1ヶ月に使える趣味・娯楽等にかかる費用や活動する時間帯、活動に費やす時間とのクロス集計結果を示す。

まず、趣味・娯楽等にかかる費用については、「5,000円未満」（49.5％）で、「経験あり」、「参加体験あり」と回答した者の回答比率が全体平均を下回っている。また、月額2万円以上を支出している者の全体平均は11.4％であるが、「経験あり」、「参加体験あり」と回答した者共に回答比率が上回っている。このことから、「経験あり」、「参加体験あり」と回答した者については、「未経験」と回答した者よりも、趣味・娯楽等に費用を用いている。

趣味・娯楽等の活動を行う時間帯を見ると、「平日午前」（30.6％）の場合、「経験あり」と回答した者の回答比率が44.1％と高く、「平日午後」、「平日夕方」も全体平均より少し回答比率が高い。また、「参加体験あり」と回答した者の場合、「平日夕方」と「休日午前」が全体平均より少しだけ回答比率が高いが、顕著な特徴とはいえない。

趣味・娯楽等に費やす月平均の時間を見ると、「1時間未満」（22.9％）の場合、「経験あり」、「参加体験あり」と回答した者の両方で、全体平均を下回っていることが確認できる。また、「2時間以上～3時間未満」（13.7％）では、「経験あり」、「参加体験あり」と回答した者の両方が全体平均を上回る回答比率となっている。

盆栽の経験の有無×趣味・娯楽等の活動状況

		共通設問1 趣味・余暇活動の参加状況						(%)
		邦楽、民謡	書道	お茶	お花	おどり（日舞など）	特に何もしていない	
n=30以上で								
全体+10pt以上								
全体+5pt以上								
全体-5pt以下								
全体-10pt以下								
n=								
全体	20,000	1.5	1.7	1.6	1.8	0.4	17.4	
「経験あり」層	598	5.0	6.0	7.2	6.0	2.3	3.0	
「参加体験あり」層	887	2.6	6.3	5.3	6.4	1.0	3.7	
「未経験」層	18,515	1.3	1.4	1.2	1.4	0.3	18.5	

※共通設問1は、分析で取り上げた選択肢のみ抜粋して掲載している。（以下同様）

盆栽の経験の有無×趣味・娯楽等に1ヶ月に使える費用

		共通設問2 1ヶ月に使える趣味・余暇費用											(%)
		5,000円未満	15,000円未満	11,000円未満	21,000円未満	22,000円未満	32,000円未満	33,000円未満	43,000円未満	44,000円未満	54,000円未満	50円以上	合計
n=30以上で													
全体+10pt以上													
全体+5pt以上													
全体-5pt以下													
n=													
全体	16,527	49.5	22.9	10.2	5.9	3.1	3.0	1.4	0.6	0.4	0.6	2.3	11.4
「経験あり」層	580	38.6	21.6	11.7	8.1	5.3	4.7	1.7	2.1	0.7	0.9	4.7	20.0
「参加体験あり」層	854	27.0	26.6	14.8	9.1	7.8	5.2	3.2	1.2	1.3	0.6	3.3	22.5
「未経験」層	15,093	51.2	22.7	9.9	5.7	2.7	2.8	1.2	0.5	0.3	0.6	2.2	10.5

盆栽の経験の有無×趣味・娯楽等を行う時間帯

		共通設問3 1ヶ月に使える趣味・余暇時間帯 (%)							
n=30以上で		平日午前	平日午後	平日夕方	平日夜間	休日午前	休日午後	休日夕方	休日夜間
全体+10pt以上									
全体+5pt以上									
全体-5pt以下									
全体-10pt以下									
n=									
全 体	16,527	30.6	30.1	15.8	18.8	34.9	43.7	21.2	15.5
「経験あり」層	580	44.1	34.5	19.0	15.9	37.4	31.9	17.9	11.0
「参加体験あり」層	854	29.4	28.9	19.0	15.3	35.9	34.0	17.3	7.5
「未経験」層	15,093	30.1	30.0	15.5	19.1	34.8	44.7	21.6	16.2

盆栽の経験の有無×趣味・娯楽等に費やす時間

		共通設問4 趣味・余暇活動を行う時間 (%)										
n=30以上で		1時間未満	2時間未満	3時間未満	4時間未満	5時間未満	6時間未満	7時間未満	8時間未満	9時間未満	10時間未満	10時間以上
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全 体	16,527	22.9	23.5	13.7	7.0	4.5	4.1	1.7	1.9	0.9	1.3	18.5
「経験あり」層	580	14.8	20.2	15.7	11.0	5.2	4.3	2.1	2.9	0.7	2.2	20.9
「参加体験あり」層	854	15.7	24.1	19.0	10.8	5.2	6.0	2.5	2.0	0.8	1.3	12.8
「未経験」層	15,093	23.6	23.6	13.3	6.6	4.5	4.0	1.7	1.8	0.9	1.3	18.7

消費行動に関する意識や価値観に関するクロス集計結果

消費行動に関する意識や価値観の項目と盆栽の経験・体験の有無とのクロス集計結果を示す。

「経験あり」と回答した者の場合、「リスクはできるだけ避けたい」と「上記であてはまるものはない」を除いた全ての意見で回答比率が平均を上回っている。これらの回答比率の中でも、「周りに合わせるより、自分の考えに基づいてものごとを判断したい」(34.1%)と「環境問題・社会課題の解決の役に立ちたい」(20.7%)の回答比率は、全体平均を大きく上回っている。

「参加体験あり」と回答した者の場合、「経験あり」との回答者と同じく、「リスクはできるだけ避けたい」、「上記であてはまるものはない」を除いた全ての意見で回答比率が全体平均を上回っており、「経験あり」と回答した者と異なり「チャンスと感じたら逃したくない」(30.9%)の回答比率が大きく上回っているほか、「自分の考えを主張するより、周りとの和を尊重したい」(32.0%)の回答比率は、全体平均及び「経験あり」と回答した者の回答比率も上回っている。一方、「周りに合わせるより、自分の考えに基づいてものごとを判断したい」(30.9%)は、「経験あり」と回答した者よりも回答比率がやや低い傾向が見られ、「経験あり」と回答した者とは異なる価値観を持っている傾向にあると推察される。

なお、「未経験」と回答した者では、「上記であてはまるものはない」(23.2%)と「リスクはできるだけ避けたい」(42.2%)の2項目のみ、全体平均を少し上回っている。

次に経験者の場合、子供の頃の習い事として伝統的な文化に係る分野を習っていたと回答している者は全体平均と比べた場合、回答比率が高い傾向にある。同様に、趣味・娯楽等の活動についても全体平均と比べると、伝統的な文化に係る趣味への嗜好性が高い傾向にあるといえる。消費行動への意識については、自分の考えに基づき物事を判断し、環境・社会課題の解決に対して役に立ちたいという価値観は全体平均と比べると回答比率が高いほか、周囲への一体感を大事にする、家族や困っている人の役に立ちたいなどの特徴も見られる。普段のメディア接触についてはNHKの地上波及びBS、新聞を始め、CATVや衛星放送、ラジオ、雑誌、紙の書籍などを中心に幅広く触れている傾向にある。

2) 盆栽を参加体験したと回答した者の傾向

男女別で見た場合、男性の方が女性よりも参加体験者の総数が多いのが特徴の一つといえる。また、年齢別で見た場合、70代以上が最も多く、次いで18～20代、40代と続く。

次に、子供の頃の習い事の経験があるとの回答比率が高く、盆栽を育てた経験があると回答した者よりも習い事の回答比率は高い傾向にある。一方、趣味・娯楽等の活動については、「書道」や「お花」については経験ありと回答した者よりも回答比率が高いが、何もしていないという回答比率も高い。

消費行動への意識については、全体平均と比べて、チャンスと感じたら逃したくないとの回答比率が高く、リスクはできるだけ避けたいとの回答比率が低い。加えて、自分の考え方にに基づき判断するという点は、全体平均を上回る回答比率ではあるが、盆栽を育てた経験があると回答した者よりも回答比率が低いことから、盆栽を育てたことがある者とは異なる価値観を有しているものと推察される。普段のメディア接触については、CATVやBS放送、雑誌等との接触が高い傾向にある。

3) 盆栽を未経験と回答した者の傾向

男女別、年齢別等では顕著な特徴は見られなかった。

子供の頃の習い事の経験については、全体平均と比べると、経験がないとの回答比率がやや高い傾向にあると共に個別の習い事への回答比率も全体平均を下回っている。また、趣味・娯楽等の活動に対して、「特に何もしていない」という回答比率が全体平均を上回っており、必ずしも積極的に趣味・娯楽等を行っていない回答者が多い傾向がうかがえる。

消費行動への意識については、当てはまるものはない、リスクは避けたい、の2項目で回答比率が全体平均を上回っている以外、特徴的な傾向は見られない。また、メディア接触については、民放のテレビ放送を除き、いずれのメディアの回答比率も全体平均を下回っている上、「上記のメディアはあまり見ていない」の回答比率も全体平均を少し上回っており、盆栽を経験したことがある者や、体験したことがある者と比べると普段からのメディア接触率はあまり高い傾向にあるとはいえない。

未経験者の傾向と特徴

次に、上記の属性分析を踏まえ、「経験あり」「参加体験あり」「未経験」、それぞれの回答者ごとに設けた設問の回答結果についてクロス集計を行い、回答者の特徴について分析を行う。

はじめに、「未経験」と回答している者について分析を行う。上述の回答者属性に関する分析では、「未経験」と回答した者については際立った特徴や傾向は見いだせなかった。加えて、今後の振興施策を考える上で、「未経験」と回答した者が、盆栽をなぜ経験してこなかったのか、また、盆栽を経験することに対してどのような意識を持っているのか、どのような体験方法や周知の実施をすれば参加体験等に繋げていく可能性を見いだすことができるのか、その検討のために分析を行う必要がある。

■未経験層の体験機会への参加意向

未経験と回答した者のうち、盆栽を体験してみたいという意向を持つ回答者、体験意向がない回答者にはどのような特徴があるのか。趣味・娯楽等の活動内容、消費意識、メディア接触の設問とEQ16「参加してみたい盆栽の体験内容」とのクロス集計を行い、回答者の特徴について分析を行う。

EQ16では、体験内容として設定した選択肢にはあてはまるものはないと65.3%が回答しており、残りの34.7%については、体験内容によっては盆栽の体験に参加してみたいという意向を持っていると推察される。

まず、盆栽の体験に参加してみたいとの意向を示した回答者について、クロス集計結果からその特徴を確認する。趣味・娯楽等の活動とのクロス集計結果では、提示した体験内容を選択している者の場合、趣味・娯楽等の項目全てで全体平均やや上回る結果が出ていることから、趣味・娯楽等の活動に対して決して消極的ではないことが推察される。

盆栽の体験内容と消費行動に対する価値観とのクロス集計の結果からは、提示した体験内容を選択している者は、消費行動に関する価値観のほとんどの項目で、全体平均を上回る回答比率を示しており、明確な意見や嗜好性があることがうかがえる。

普段からのメディア接触については、提示した体験内容を選択している者は、様々なメディアへの回答比率が全体平均を上回っており、特にウェブサイトや動画投稿サイト、SNSを普段から使っている点で、盆栽を経験した者、体験した者と異なるメディア接触の傾向が見られる。

以上のように、盆栽の体験に参加してみたいとの意向を示した回答者の特徴として、趣味・娯楽等の活動に関して決して消極的ではない傾向にあるほか、消費行動に関する価値観については、経験者や参加体験者と近似した傾向が見られる。メディア接触については、経験者や参加体験者と異なる傾向があり、ウェブサイトをはじめとしたウェブメディアとの接触が高い特徴が見られる。

次に、盆栽の参加体験の意向がない者についてはどのような特徴があるか。EQ16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者のうち、25.3%は趣味・娯楽等の活動について「特に何もしていない」と回答しており、全体平均を上回る回答比率を示している。また、消費行動に関する価値観に対する設問では「上記で当てはまるものはない」(33.1%)、メディア接触についても、「上記のメディアはあまり見ていない」(11.4%)と、全体平均を上回る回答比率を示している。

参加してみたい盆栽の体験内容×趣味・娯楽等の活動状況

共通設問1 趣味・余暇活動の参加状況

n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下		邦楽、民謡	書道	お茶	お花	おどり（日舞など）	何もししていない	
	n=							
	全 体	18,515	1.3	1.4	1.2	1.4	0.3	18.5
	盆栽の種類や育て方、剪定や鑑賞の仕方を教えてくれる	3,683	2.5	2.2	2.1	2.4	0.4	4.6
	盆栽の歴史や意義を教えてください	1,603	3.3	2.9	2.9	2.9	0.5	3.8
	盆栽を育てるのに必要となる道具や環境等を詳しく教えてください	2,120	3.4	2.5	2.4	2.7	0.5	4.9
	普段の生活の中で、盆栽をどのように楽しめばよいのか教えてください	3,027	2.8	2.4	2.4	2.8	0.5	5.5
	その他	47	2.1	4.3	2.1	2.1	-	4.3
上記の中で当てはまるものはない	12,085	0.8	0.9	0.8	1.0	0.2	25.3	

共通設問5 消費行動に対する価値観 (%)

		n=30以上で 全体・+10pt以上 全体・+5pt以上 全体・-5pt以下 全体・-10pt以下														
	n=	い 分の考えを主張するよ 、周りとの和を尊重し	い の考えに基づいてもの を判断したい	い ヤンスと感じたら通し くない	い スクはできるだけ避け たい	族や友人・知人の役に ちたい	境問題・社会課題の解 役に立ちたい	りの人から注目された っている人・助けが必 ずなる人の役に立ちた い	同士の一体感が大事だ まりやイベントの参加 感がある	の時・その場でしか得 られない体験をしたい	い 行りのものは試してみ たい	信じたものや、気持ち を伝えたい	分が発信したものに反 びたい	記 てあてはまるものは		
全 体	18,515	25.1	21.9	19.4	42.2	24.4	9.8	19.0	2.3	5.0	13.2	3.7	26.5	2.8	2.9	23.2
就の種類や育て方、剪定や鑑賞の仕方を教えてく る	3,683	37.3	32.0	30.7	55.6	38.4	19.4	33.4	3.7	9.0	25.0	6.5	44.9	5.1	4.6	3.5
就の歴史や意義を教えてください	1,603	36.7	33.7	37.5	49.0	38.3	23.7	33.7	5.4	9.8	26.7	8.5	38.7	7.9	5.6	3.4
就を育てるのに必要となる道具や環境等を詳しく 教えてください	2,120	35.9	33.3	35.2	56.6	40.9	22.0	35.8	4.7	10.1	28.6	8.1	46.3	7.4	6.2	3.2
段の生活の中で、盆栽をどのように楽しめばよい か教えてくれる	3,027	35.8	29.5	31.2	55.3	39.9	20.4	34.0	3.5	10.1	27.8	6.8	45.6	6.1	5.4	4.4
その他	47	29.8	48.9	19.1	68.1	27.7	17.0	25.5	2.1	8.5	12.8	4.3	51.1	6.4	14.9	8.5
記事の中で当てはまるものはない	12,085	20.1	18.3	14.7	38.2	19.5	6.4	14.0	1.6	3.3	8.9	2.5	20.8	1.9	2.2	33.1

	(%)
共通設問6 接触メディア	

		読者のメディア利用状況																
		テレビ（BS）	テレビ（BS）	ケーブルテレビ（NHKの地上波）	CATVや衛星放送のチャンネル	ラジオ（インターネット経由を除く）	新聞（電子版含む）	雑誌・タウン誌（インターネット経由を除く）	ウェブサイト・ニュースサイトなど（アプリ経由を含む）	動画投稿サイト（YouTubeなど）	ソーシャルメディア（LINE、Twitter、Facebook、Instagramなど）	紙の書籍	電子書籍	紙のマンガ／マンガ雑誌	電子版のマンガ	有料動画サイト（Amazon、Netflix、Huluなど）	有線テレビ（Amava、Netなど）	上記のメディアはあまり見えていない
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下	全 体	18,515	69.9	40.8	9.4	13.6	27.5	6.9	46.0	33.9	28.6	19.8	5.7	6.6	6.3	11.8	11.4	
	読者の種類や育て方、予定や鑑賞の仕方を教えてくれる	3,683	81.3	55.4	12.6	19.2	37.3	11.8	60.5	44.3	38.9	31.9	8.9	10.6	10.5	17.4	1.0	
	読者の歴史や意義を教えてくれる	1,603	75.9	52.0	13.4	20.5	31.9	14.8	57.1	46.9	42.0	31.6	12.7	13.1	11.1	17.9	2.0	
	読者を育てるのに必要となる道具や環境等を詳しく教えてくれる	2,120	77.9	52.1	13.7	20.0	33.9	14.2	60.6	47.9	40.9	32.5	11.4	13.5	12.6	19.5	1.2	
	読者の生活の中で、盆栽をどのように楽しむか教えてくれる	3,027	78.2	51.6	12.8	18.2	34.0	12.6	58.9	44.2	41.0	31.3	8.8	10.9	9.7	17.6	2.2	
	その他	47	72.3	55.3	14.9	6.4	38.3	4.3	66.0	40.4	31.9	10.6	6.4	4.3	2.1	19.1	-	
	記事の中で当てはまるものはない	12,085	66.2	36.2	8.2	11.8	25.0	4.8	11.6	30.4	24.7	16.0	4.5	5.3	5.1	10.0	16.5	

■参加したい体験機会別に見た参加条件

次に、盆栽を育てたり、盆栽体験をしたりしたことがないと回答した者が体験したい内容、また、体験条件にはどのような特徴があるのかについて、E Q16「参加してみたい盆栽の体験内容」の各種の参加体験とE Q17「参加しやすい盆栽の体験条件」の回答結果をクロス集計し、未経験者の考える体験しやすい内容と条件の傾向について分析を行う。

まず、E Q17で「わからない」(60.0%)と回答した者のうち、E Q16で「上記の中で当てはまるものはない」(87.8%)の回答比率が高く、盆栽の体験内容についての回答比率は極めて低いことから、盆栽の体験に関して参加意向が極めて低い者であると推察される。

次に、具体的な体験内容を選択した者の参加条件への回答比率は、全体平均より非常に高いことが分かる。体験条件の選択肢の回答比率を見ると、「手ごろな参加費で参加できたら」、「普段、鑑賞しに出かけている盆栽展や盆栽園で体験機会があれば」の2項目は回答比率が高く、特に重視されている傾向が見える。また、「盆栽を育てるのに必要となる道具や環境等を詳しく教えてくれる」を選択した回答者については、「手ごろな参加費で参加できたら」、「体験に必要な費用や道具が明示されていれば」、「初心者だけが参加できるような機会があれば」、「体験する内容や雰囲気を事前に確認できれば」、「指導者の教え方が分かりやすかったら」と、多くの体験条件を選択しており、具体的な体験条件を想定して回答している傾向がうかがえる。

以上のように、盆栽に関して未経験であると回答した者のうち、E Q16で具体的な体験内容を答えた者の多くは、E Q17の体験を行う際の条件についても具体的な条件を選択していることから、体験内容及び条件が明確な方が未経験者への参加体験を促しやすいものと推察できる。

参加してみたい盆栽の体験内容×参加しやすい盆栽の体験条件

		EQ17 参加しやすい盆栽体験の条件 (%)									
		と家族一緒に体験できたら	体験機会がある盆栽展や盆栽園で体験できる	普段、鑑賞しに出かけている盆栽展や盆栽園で体験できる	手ごろな参加費で参加できる	が体験に必要ない費用や道具	し体験する時間やスケジュールをば調整	よ初心者だけが参加できる	事前確認内容や雰囲気	や指導者の教え方が分かり	わからない
		n=									
全 体		18,515	11.5	10.6	20.1	9.1	3.9	11.6	6.6	6.9	60.0
盆栽の種類や育て方、剪定や鑑賞の仕方を教えてくれる	3,683		35.7	33.0	58.2	28.9	11.7	32.4	19.7	20.6	6.0
盆栽の歴史や意義を教えてくれる	1,603		32.5	43.9	57.8	34.1	20.5	31.6	23.6	20.6	5.4
盆栽を育てるのに必要となる道具や環境等を詳しく教えてくれる	2,120		31.4	39.6	66.3	42.4	19.0	40.8	26.6	26.6	3.8
普段の生活の中で、盆栽をどのように楽しめばよいのか教えてくれる	3,027		28.1	30.0	55.0	30.0	14.3	38.0	24.3	24.9	7.9
その他	47		4.3	6.4	8.5	2.1	2.1	6.4	4.3	6.4	27.7
上記の中で当てはまるものはない	12,085		2.9	1.3	4.5	1.3	0.5	2.8	1.4	1.9	87.8

n=30以上で
全体+10pt以上
全体+5pt以上
全体-5pt以下
全体-10pt以下

■これまで盆栽を経験してこなかった理由と参加したい体験機会

E Q18「盆栽を体験したことがない理由」を見ると、「興味がない」39.7%と「自分の趣味と合わない」29.2%が多く、次いで「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」14.4%、「そもそも知らなかった」13.2%となっている。

盆栽を育てたり盆栽体験をしたりしたことがないと回答した者に対して、これまでに盆栽体験してこなかった理由や事情（E Q18）に関する問いを設けている。この設問を設けた理由として、未経験者のうちには、体験内容が身近になかった、特定の事情で体験することができなかった者や、そもそも全く興味がなかった等、回答者によって個々の事情や理由があることを想定したためである。

既に、回答者の中には興味関心がなかったわけではなく、体験できなかった事情や理由があると回答した者がいることがE Q18の回答結果から判明しているが、体験できなかった事情や理由があると回答した者はどのような体験機会があれば参加しやすいと考えているのか。E Q18と参加してみたい体験内容を問う設問（E Q16）のクロス集計を行い、その傾向を分析する。

E Q16とのクロス集計の結果を見ると、E Q18で「興味がない」（39.7%）や「自分の趣味と合わない」（29.2%）を選んだ者の場合、E Q16で「その他」を除き、「上記の中で当てはまるものはない」との回答比率が高く、参加体験の意向がないことが分かる。

一方、E Q18で「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」（14.4%）と回答している者をはじめ、具体的な理由や事情を回答している者については、E Q16の体験内容に関する回答比率が全体平均を上回っており、未経験者の中でも参加体験をできない理由や事情があって体験機会を逸していたことが分かる。特に、体験できる場所や機会がなかった、知らなかったと回答した者が、具体的な体験内容を回答している傾向にあることから、体験機会の周知を行っていくことで、未経験者に参加体験をしてもらう機会を醸成できる可能性があるかと推察される。

また、「そもそも知らなかった」（13.2%）を選んだ者の中でも、具体的な体験内容を選ぶ者がいることから、盆栽自体がどのような文化なのかも周知を行っていくことで、参加体験を促すことができるものと推察される。

参加してみたい盆栽の体験内容×盆栽を体験したことがない理由

		EQ18 盆栽を体験したことがない理由									(%)
		そもそも知らなかった	興味がない	所気や機に会体験できなかつたような場所	か参加した時間とれな	あ体験できるときを知らなかつた機会が	分体験できなかつた詳しい内容が	心他の向いてや興味や楽しの方に	自分の趣味と合わない	その他	
n=30以上で											
全体+10pt以上											
全体+5pt以上											
全体-5pt以下											
全体-10pt以下											
n=											
全 体		18,515	13.2	39.7	14.4	3.4	6.5	3.7	8.2	29.2	0.4
盆栽の種類や育て方、剪定や鑑賞の仕方を教えてくれる	3,683	17.2	27.7	41.1	8.1	18.9	10.3	15.0	7.3	0.7	
盆栽の歴史や意義を教えてくれる	1,603	15.8	25.9	41.2	14.5	20.4	12.9	14.7	7.4	0.5	
盆栽を育てるのに必要となる道具や環境等を詳しく教えてくれる	2,120	11.6	22.4	47.0	13.3	26.0	16.2	18.1	7.8	0.8	
普段の生活の中で、盆栽をどのように楽しめばよいのか教えてくれる	3,027	12.6	27.4	38.1	8.3	20.0	12.4	18.9	10.7	0.5	
その他	47	2.1	70.2	4.3	10.6	2.1	4.3	21.3	34.0	10.6	
上記の中で当てはまるものはない	12,085	12.0	46.1	3.1	0.8	1.2	0.8	4.8	40.1	0.3	

■「未経験」層と「参加体験あり」層の盆栽へのイメージの違い

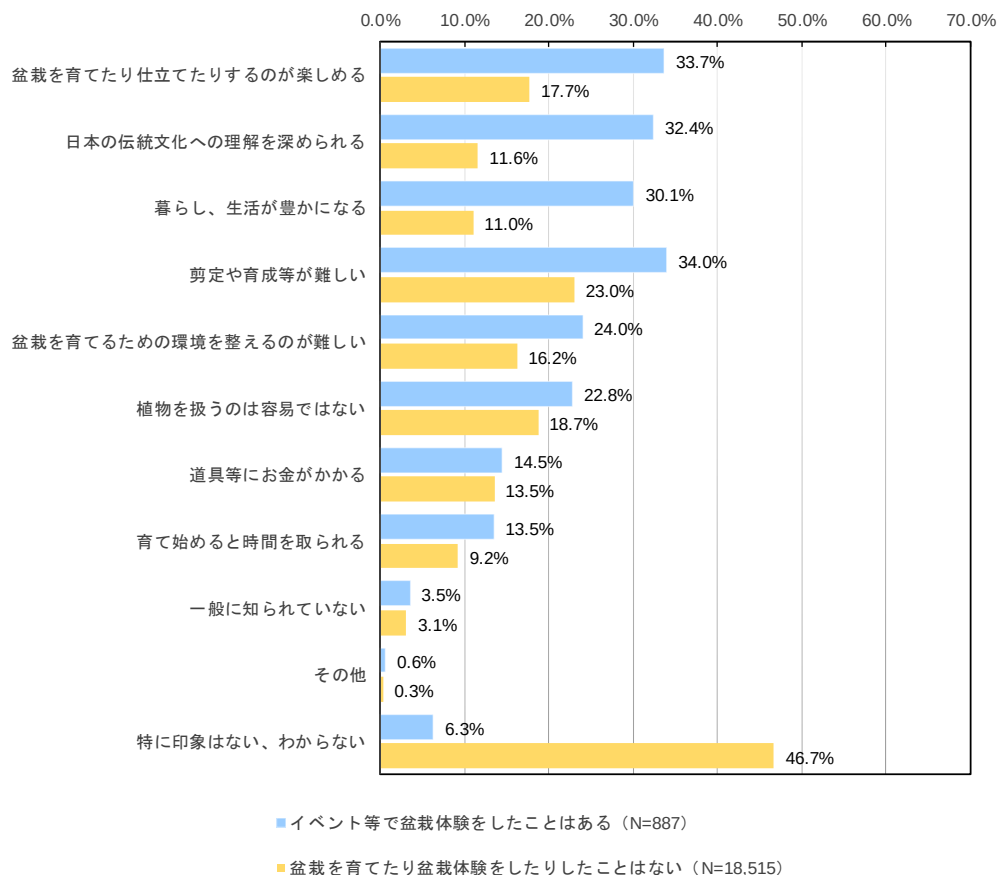
盆栽を育てたことがない、盆栽体験をしたことがないと回答した者が持つ盆栽に対するイメージについて、E Q 19 の結果では、「特に印象はない、わからない」(46.7%)、次いで「剪定や育成等が難しい」(23.0%)、「植物を扱うのは容易ではない」(18.7%)、「盆栽を育てたり仕立てたりするのが楽しめる」(17.7%)、「盆栽を育てるための環境を整えるのが難しい」(16.2%)、「道具等にお金がかかる」(13.5%) となっており、回答者は盆栽を育てたり盆栽体験をしたことがない者であるため、印象やイメージを持っていないという回答が多くなったものと考えられる。また、未経験者にとって、盆栽の剪定や育成は難しいものであると捉えられていることが分かる。

下のグラフは、盆栽体験に参加したことがある者のイメージ（E Q 14）と E Q 19 の回答結果を比較したものである。

未経験者で最も回答比率が高かった「特に印象はない、わからない」の回答比率は参加体験を行うことで大幅に減っている一方、「盆栽を育てたり仕立てたりするのが楽しめる」、「日本の伝統文化への理解を深められる」、「暮らし、生活が豊かになる」といったプラスイメージに対する回答比率が未経験者と比べて、参加体験した者の方が回答比率は高くなっている。なお、「剪定や育成等が難しい」という回答については、未経験者・参加体験者共に回答比率が高いことが分かる。

以上のように、参加体験をすることで、盆栽が持つ魅力はもちろんのこと、剪定や育成の難しさなどについても明確なイメージを描けるようになっており、参加体験を行うことで盆栽の魅力を理解してもらえる可能性が大きいことが推察される。

未経験者と参加体験者の盆栽に対する印象やイメージの違い



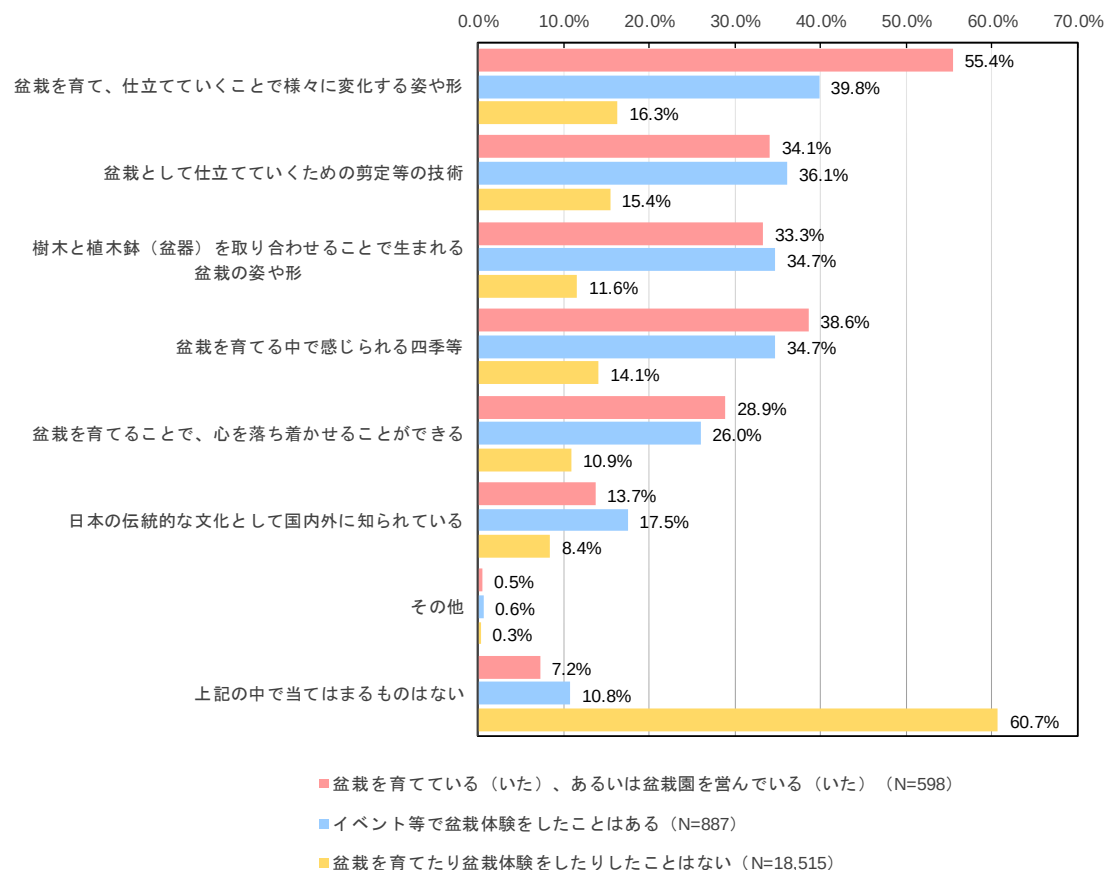
■「未経験」層と「参加体験あり」層、「経験あり」層の盆栽の魅力についての評価の違い

未経験者が盆栽に対する印象やイメージを具体的に描けないように、盆栽の魅力に対する設問（E Q 8、E Q 15、E Q 20）にも同様の傾向が見られる。

下のグラフを見ても分かるように、盆栽に関して未経験であると回答した者の6割は「上記の中で当てはまるものはない」（60.7%）と回答し、経験者と参加体験者の場合の回答比率と比較しても大きな差がある。

このことは、盆栽の魅力や興味関心に関する回答比率についてもいえ、参加体験者と未経験者を比較すると「盆栽を育て、仕立てていくことで様々に変化する姿や形」や「盆栽として仕立てていくための剪定等の技術」等の回答比率に大きな差が見られることから、イメージや印象と同じく実際に体験することの重要性がうかがえる。また、それぞれの回答者が考える盆栽の魅力や興味関心については、体験や経験を重ねることで、仕立てていく中で盆栽の姿や形が変化することや、盆栽を育てる中でその姿に感じる四季などに魅力や興味関心を感じるようになる傾向があると考えられる。

各回答者における盆栽に対する興味関心や魅力の違い



上記のクロス集計の結果から、盆栽を育てたり盆栽体験をしたりしたことがないと回答した者の特徴や傾向をまとめると、以下のとおりである。

1) 盆栽に興味関心がある者の属性に関する傾向と特徴

盆栽に関して未経験であると回答した者のうち、参加体験の意向を示さない者が65.3%いる

一方、34.7%が体験内容に関する選択肢をいずれか選択しており、未経験者の中でも機会があれば参加したいという意向を持つ者がいる。

これら参加意向を示す者は、盆栽について未経験と回答したほかの者と比べた場合、趣味・娯楽等の活動に対して決して消極的ではなく、また、消費行動に対しての明確な意見を有し、普段から幅広いメディア、特にウェブメディア等に触れている傾向が見られる。

2) 未経験者が考える参加しやすい体験の条件と内容についての傾向と特徴

E Q16、E Q17 のクロス集計の結果から、未経験者のうち、参加体験をしたいとの意向を示した者は、手頃な参加費用と盆栽展や盆栽園等で体験したい、の2点を参加体験の条件としてとりわけ重視している傾向が見えてくる。また、盆栽を育てようと考えている者については、具体的な参加条件を回答している傾向にあり、このような者に対して参加体験を促すのであれば、具体的な体験機会の内容や条件などを示しておいた方が良いと考えられる。

また、E Q16 と E Q18 とのクロス集計の結果からは、具体的な体験内容を回答した者ほど、体験できなかった事情・理由として「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」、「体験できる場所や機会があることを知らなかった」と回答しており、参加体験の意向を持つ者の多くが、盆栽を体験する機会を得ることができなかったことが分かる。また、「そもそも知らなかった」と回答する者の中でも体験に参加する意向がある者がいることから、盆栽そのものの周知を行うことで、参加体験を希望する者に機会を提供できる可能性があると考えられる。

3) 盆栽の印象や魅力に関する傾向と特徴

未経験者の場合、盆栽に対する印象や魅力について、未経験であるが故に、具体的なイメージや魅力は分からないという当然の結果が導かれた。その点を踏まえて、経験者や参加体験者との印象や魅力への回答の差を見ると、参加体験や経験を重ねることで、具体的な印象やイメージ、魅力を描くことができるようになることが分かる。また、経験を重ねた者ほど、仕立てていくことで変化する盆栽の姿や形、盆栽に感じる四季など、実際に育て続けることで初めて実感することができる魅力等に対する回答比率が高い傾向にあるといえる。

参加体験ありと回答した者の傾向と特徴

次に、参加体験ありと回答した者の回答傾向を分析する。参加体験をした者は、何らかのきっかけがあって盆栽体験する機会を得ており、しかし、自ら盆栽を育てるまでには至ってはいない者と捉えることができる。ではどのような状況で体験機会を得たのか、また、盆栽を育てるまでに至らない事情や理由等があるのかをクロス集計を用いてその傾向と特徴を分析する。

■参加体験者の体験のきっかけと機会

体験のきっかけ（E Q 9）を問う設問の結果から、「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた」（30.3％）の回答比率が最も高く、次いで「学校や職場で育てられているものや、公園や庭園、文化施設等で行われているイベントで見た」（26.2％）、「友人、知人などが盆栽を育てていて、勧められた・誘われた」（18.8％）、「趣味や教養として盆栽に興味関心があり、盆栽展等で鑑賞した」（18.4％）、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」（15.2％）となっており、親族等が盆栽を育てていたことが体験するきっかけとして大きいことが分かる。また、盆栽を体験した場（E Q 10）については「文化施設等で行われた体験イベント」（36.1％）の回答比率が高く、次いで「盆栽園や愛好者の団体等が主催する体験会」（29.1％）、「自宅」（22.7％）と続いている。

体験したきっかけと体験機会の関係性の特徴や傾向を明らかにするため、E Q 9 と E Q 10 のクロス集計の結果が下の表である。

体験したきっかけとして最も回答比率が高かった、「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた」（30.3％）を回答した者の場合、「自宅」（48.8％）が最も回答比率が高く、次に「盆栽園や愛好者の団体等が主催する体験会」（41.9％）の回答比率が高い傾向にある。他方、「学校や職場で育てられているものや、公園や庭園、文化施設等で行われているイベントで見た」（26.2％）を回答した者の場合は、「学校の授業や職場の研修会」（39.5％）、「文化施設等で行われた体験イベント」（38.8％）における回答比率が高い。また、「趣味や教養として盆栽に興味関心があり、盆栽展等で鑑賞した」（18.4％）と回答した者では、「盆栽園や愛好者の団体等が主催する体験会」（31.4％）の回答比率が特に高く、次に「文化施設等で行われた体験イベント」（25.0％）と続く。

以上のように、親族等が盆栽を育てていた場合、自宅で盆栽体験している傾向が強く、学校や職場、庭園等で盆栽を見たことがきっかけで体験した者は、学校や職場、文化施設等で体験機会を得ていることが分かる。また、盆栽展等で盆栽の鑑賞をしていた者は盆栽園等が開く体験会に参加している。身近に盆栽を育てている人がいる場合は、自宅はもちろんのこと、盆栽園等が主催する体験会等が体験機会となっているほか、一般の人向けには学校や職場、文化施設等の体験イベントが体験機会として大きな位置を占めているものと推察される。

盆栽を体験した場×盆栽を体験したきっかけ

(%)

	n=	EQ9盆栽を体験したきっかけ									
		ど親 家や 族兄 が弟 育姉 妹で、 祖 た父 母な	いど親 た家 や族 兄が 弟盆 姉裁 妹園、 を祖 當父 ん母 でな	た育 ・て 人誘 わい 知れ た、 勤ど めが 盆 れ裁 を	て園い い、る 文も イ化 の職 ベ施 や場 ン設、 ト等 公育 でで 園て 見行 やら たわ 庭れ	知画 つた エ や メ 画 デ、 イ 雑 誌 等、 で漫	テ レ ビ エ ブ 映 画 デ、 イ 雑 誌 等、 で漫	等興 で味 鑑関 や心 賞が あ と り 、 盆 盆 裁 裁 展に	興味 関に 係が あ 仕 つ た や 職 業に	し野 ての い趣 がた 味行 っ 習 て い 事 と 別 関 の 係 分	そ の 他
全 体	887	30.3	14.1	18.8	26.2	15.2	18.4	5.2	8.2	1.2	
盆栽園や愛好者の団体等が主催する体験会	258	41.9	13.6	21.3	26.0	14.7	31.4	5.8	5.8	0.8	
学校の授業や職場の研修会	195	21.5	33.3	28.2	39.5	16.9	12.8	5.6	6.7	-	
文化施設等で行われた体験イベント	320	28.1	13.1	23.8	38.8	21.9	25.0	5.0	4.4	1.6	
自宅	201	48.8	10.9	17.9	16.9	17.9	19.9	6.5	10.9	1.0	
自分が行っている分野の趣味・習い事の中で体験	123	22.8	13.0	13.0	17.1	16.3	18.7	12.2	30.1	-	
その他	11	18.2	-	36.4	27.3	27.3	9.1	-	-	27.3	

※n=30未満は参考値のため灰色

■盆栽を育てやすい状況

盆栽を育てやすい状況（EQ11）に関する設問の結果では、「通いやすい場所に相談に乗ってもらえる盆栽園等があったら」（33.1％）の回答比率が最も高く、次いで「知人、家族と一緒に育てることができたら」（29.1％）、「家族や知人等、身近な人から育て方等を教えてもらえたら」（28.4％）と続いている。一方、盆栽に支払える月額費用（EQ12）を見ると、「5,000 円未満」（43.9％）、「5,000 円以上～10,000 円未満」（27.8％）と続き、回答者の約 70％が 1 万円未満の費用であれば盆栽を育て始めやすいと回答している。

EQ11 と EQ12 のクロス集計の結果を見ると、「5,000 円未満」（43.9％）を選択した者の中では、「わからない」（74.1％）の回答比率が最も高く、次いで「育て方や剪定の仕方等をわかりやすく示している雑誌や専門誌があったら」（50.6％）、「家族や知人等、身近な人から育て方等を教えてもらえたら」（49.2％）と続いており、「わからない」を除いて、専門誌や身近な人から手ほどきを受けながら手軽な値段で始めたい者がいることが分かる。

一方、「5,000 円以上～10,000 円未満」（27.8％）と回答した者の場合、「知人、家族と一緒に育てることができたら」（31.0％）、「通いやすい場所に相談に乗ってもらえる盆栽園等があったら」（29.6％）との回答が全体平均を上回っており、こちらもある程度気軽ではあるが、専門家に相談に乗ってもらいたいと考えている。支払う費用が上がると、「通いやすい場所に相談に乗ってもらえる盆栽園があったら」との回答比率が少し高くなると共に、「習う時間帯を調整してもらいやすかったら」の回答比率も高くなっている傾向から、支払える金額の回答が高いほどに盆栽を本格的に育てようとする意向が見えてくる。

盆栽を育てやすい状況×盆栽に支払える月額費用

		EQ12盆栽に支払える月額費用											(%)
		5 . 0 0 0 円 未 満	1 5 0 . 0 0 0 0 0 円 未 満	1 1 5 0 . 0 0 0 0 円 未 満	2 1 0 5 . 0 0 0 0 円 未 満	2 2 5 0 . 0 0 0 0 円 未 満	3 2 0 5 . 0 0 0 0 円 未 満	3 3 5 0 . 0 0 0 0 円 未 満	4 3 0 5 . 0 0 0 0 円 未 満	4 4 5 0 . 0 0 0 0 円 未 満	5 4 0 5 . 0 0 0 0 円 未 満	5 0 . 0 0 円 以 上	
n=													
全 体	887	43.9	27.8	9.8	5.6	5.1	2.9	1.6	0.7	0.6	0.5	1.6	
家族や知人等、身近な人から育て方等を教えてもらえたら	252	49.2	29.4	7.9	2.4	4.8	3.2	0.4	-	0.8	0.8	1.2	
知人、家族と一緒に育てることができたら	258	33.7	31.0	15.5	6.6	6.6	2.7	0.8	0.8	-	0.4	1.9	
通いやすい場所に相談に乗ってもらえる盆栽園等があったら	294	35.0	29.6	10.2	8.8	6.1	4.8	2.7	0.3	0.7	0.7	1.0	
必要な道具等が借りられたら	184	44.6	27.7	4.9	8.7	6.5	3.3	1.6	-	0.5	0.5	1.6	
習う時間帯を調整してもらいやすかったら	120	37.5	25.0	9.2	9.2	10.0	3.3	2.5	-	1.7	-	1.7	
育て方や剪定の仕方などをわかりやすく示している雑誌や専門誌があったら	154	50.6	26.0	5.2	3.9	4.5	1.3	3.2	1.9	1.3	0.6	1.3	
その他	5	80.0	20.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
わからない	108	74.1	14.8	2.8	0.9	0.9	1.9	-	-	-	-	4.6	

※n=30未満は参考値のため灰色

次に、盆栽を育てていない理由（E Q 13）に関する設問の結果では、「通いやすい場所に、盆栽の育て方等の相談に乗ってくれる場所がなかった」（28.1%）が最も多く、次いで「盆栽を育てるための十分な時間が取れそうになかった」（21.8%）、「植物の育て方や管理の仕方などが難しいと思う」（20.9%）と続く。E Q 11 の習う状況とのクロス集計を行い、参加体験者が習いやすい状況について分析を行う。

E Q 11 で育てやすい状況について「わからない」（12.2%）と回答した者のうち、E Q 13 で育てていない理由について「自分の趣味と合わない」（41.7%）、「興味がなかった」（31.5%）の回答比率が高く、盆栽体験をしても興味関心が湧かなかった者が一定数いることが確認できる。

一方、参加しやすい状況として「通いやすい場所に相談に乗ってもらえる盆栽園等があったら」（33.1%）と回答した者が習っていない理由として、「盆栽の育て方等の相談をできる人が身近にいなかった」（50.7%）、「一緒にやってくれる人がいない」（50.5%）、「盆栽を育てるための十分な時間が取れそうになかった」（48.7%）と続いており、その他の選択肢についても、全体平均を大きく上回っていることから、盆栽のことを相談できる場所が、参加体験者にとって、盆栽を育て始める際に条件として重視されている傾向が見て取れる。また、「必要な道具等が借りられたら」、「育て方や剪定の仕方などをわかりやすく示している雑誌や専門誌があったら」と回答した者の場合も、育てていない理由や事情についての回答比率が高い傾向が見える。

本格的に盆栽を育てても良いと考えている者と捉えることができる。

盆栽を育てていない理由と育てやすい状況とのクロス集計結果からは、盆栽体験に参加しても盆栽を育てることに興味を持てなかった者が一定数いる一方で、興味関心があっても盆栽の育て方等に相談できる場所や人がいない等の事情があることが分かる。

経験ありと回答した者の傾向と特徴

経験ありと回答した者の回答傾向について分析を行う。経験者がどのような経緯や場所で盆栽を育て始め、どの程度の者が継続してきたのかを分析することで、参加体験者と未経験者との違いを明らかにする。

■始めたきっかけと継続性及び継続理由

盆栽を育て始めたきっかけ（EQ1）の結果では、「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた」（43.8%）が最も回答比率が高く、次いで「趣味や教養として、盆栽に興味関心があった」（29.8%）、「友人、知人などが盆栽を育てていて勧められた・誘われた」（18.1%）、「学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした」（16.2%）と続いており、回答者の親族等が盆栽を育てていたり、回答者自身が盆栽に興味関心があった、友人・知人等が育てていたなど、盆栽に関する情報やイベントが身近にあったものと推察される。

まず、盆栽を育て始めたきっかけ（EQ1）と現在の継続状況（EQ3）についてクロス集計を行い、始めたきっかけと継続率の関係を分析する。継続率の全体平均（51.8%）に対し、「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた」（80.0%）、「学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした」（61.9%）、が特に回答比率が高く、親族等が盆栽園を営んでいた者、イベント等で鑑賞をしたことをきっかけとして、盆栽を育て始めた者の継続率が高い傾向にある。

盆栽を育て始めたきっかけ×現在の継続状況

		(%)	
		EQ3 活動の継続	
		続けている	続けない
n=30以上で			
全体+10pt以上			
全体+5pt以上			
全体-5pt以下			
全体-10pt以下			
n=			
全 体	598	51.8	48.2
親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた	262	54.2	45.8
親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた	70	80.0	20.0
友人、知人などが盆栽を育てていて勧められた・誘われた	108	57.4	42.6
学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした	97	61.9	38.1
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	62	48.4	51.6
趣味や教養として、盆栽に興味関心があった	178	52.2	47.8
盆栽に係る仕事や職業に興味関心があった	33	57.6	42.4
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	46	52.2	47.8
その他	12	58.3	41.7

※n=30未満は参考値のため灰色

次に、継続理由に関する設問（EQ3補問1）では、「盆栽に愛着が湧いた（盆栽を育てるのが純粋に楽しい）」（42.9％）の回答比率が最も高く、次いで「日本の文化だから」（29.4％）、「暮らし、生活の一部となった（盆栽を育てることが生きがいとなった）」（26.8％）、「盆栽の形造りや剪定や培養など、奥深い文化をもっと知りたい」（24.8％）と続いている。

始めたきっかけ（EQ1）とのクロス集計を行い、継続する理由ときっかけの関係性について分析を行うと、まず継続理由として最も回答比率が高かった「盆栽に愛着が湧いた（盆栽を育てるのが純粋に楽しい）」（42.9％）と回答した者の中でも「趣味や教養として、盆栽に興味関心があった」（73.1％）、「学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした」（63.3％）、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」（53.3％）の回答比率が全体平均と比べると特に高く、「盆栽の形造りや剪定や培養など、奥深い文化をもっと知りたい」（24.8％）でも近い傾向が見られる。盆栽への愛着が継続理由となっていることから、盆栽への興味関心などがきっかけとして盆栽を愛好しているものと推察される。

一方、「盆栽園を営みたい（営んでいる）」（19.0％）を回答した者の場合、始めたきっかけとして「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた」（42.9％）と全体平均と比べると回答比率が特に高く、また、「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた」（29.6％）も回答比率が高い傾向にあり、身近に盆栽があった者の場合、盆栽園を営みたい（営んでいる）ことが続いている理由となっていることが分かる。

このほか、「日本の文化だから」（29.4％）と回答した者の中では、「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた」（73.2％）が極めて回答比率が高いほか、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」（43.3％）、「学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした」（41.7％）の回答比率も高い。また、「一緒に楽しむ仲間がいる」（17.4％）においても、近似した傾向があることから、職業として盆栽園を営みたい、愛好者として盆栽を楽しんでいると考えられる者、いずれも盆栽が日本の文化であること、また、仲間と楽しむことができるものと捉えている傾向が見られる。

盆栽を育て始めたきっかけ×盆栽を続けている理由

EQ3補問1 盆栽を続けている理由 (%)										
		で盆栽園を営みたい（営んでいる）	日本の文化だから	一緒に楽しむ仲間がいる	も養盆栽の形造りや剪定や培養など、奥深い文化を知りたい	盆栽に愛着が湧いた（盆栽を育てるのが純粋に楽しい）	とな暮らし、生活の一部となった（盆栽を育てることが生きがいとなった）	その他	特に理由はない	の上記の中で当てはまるもの
n=30以上で										
全体+10pt以上										
全体+5pt以上										
全体-5pt以下										
全体-10pt以下										
n=										
全 体	310	19.0	29.4	17.4	24.8	42.9	26.8	-	9.0	1.9
親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた	142	29.6	29.6	21.8	24.6	45.1	31.7	-	8.5	0.7
親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた	56	42.9	73.2	33.9	32.1	21.4	23.2	-	-	-
友人、知人などが盆栽を育てていて勧められた・誘われた	62	21.0	38.7	38.7	35.5	48.4	29.0	-	9.7	-
学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした	60	20.0	41.7	28.3	45.0	63.3	33.3	-	0.0	-
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	30	26.7	43.3	33.3	53.3	53.3	33.3	-	3.3	6.7
趣味や教養として、盆栽に興味関心があった	93	8.6	26.9	22.6	37.6	73.1	43.0	-	9.7	-
盆栽に係る仕事や職業に興味関心があった	19	36.8	47.4	31.6	52.6	78.9	63.2	-	5.3	-
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	24	25.0	33.3	29.2	29.2	62.5	58.3	-	12.5	8.3
その他	7	-	-	14.3	28.6	85.7	42.9	-	-	14.3

※n=30未満は参考値のため灰色

一方、盆栽から離れたきっかけや理由（EQ3補問2）を見ると、「盆栽の育成ができる環境を維持できなくなった」（41.0％）と「時間がなくなった」（29.5％）が大きな理由となっている。

始めたきっかけ（EQ1）と離れたきっかけをクロス集計しその関係を分析すると、回答比率が最も高い「盆栽の育成ができる環境を維持できなくなった」（41.0％）と回答した者の場合、始めたきっかけとして「学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした」（29.7％）の回答比率が全体平均を大きく下回っているほか、「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」（34.4％）も回答比率が下回っている。また、「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた」（45.8％）、「友人、知人などが盆栽を育てていて勧められた・誘われた」（45.7％）、「趣味や教養として、盆栽に興味関心があった」（42.4％）の3項目は全体平均を少し上回っている。

一方、「時間がなくなった」（29.5％）と回答した者の場合、「学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした」（37.8％）、「友人、知人などが盆栽を育てていて勧められた・誘われた」（37.0％）、「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた」（35.0％）と、それぞれ全体平均を上回る回答比率となっている。

以上の傾向を見ると、盆栽を育てる場所、盆栽を育てるための時間いずれかが維持できなくなると継続しにくい傾向にあるものと推察される。

盆栽を育て始めたきっかけ×盆栽から離れたきっかけや理由

n=30以上で

全体+10pt以上

全体+5pt以上

全体-5pt以下

全体-10pt以下

n=

288

29.5

41.0

14.9

21.9

8.3

7.6

12.2

2.1

3.5

時間

が

な

く

な

っ

た

を

維

持

で

き

な

く

な

っ

た

環

境

盆

裁

の

育

成

が

で

き

る

環

境

場

所

が

な

く

な

っ

た

で

き

る

興

味

を

失

っ

た

く

経

済

的

に

続

け

る

の

が

難

し

こ

と

が

難

し

く

な

っ

た

で

続

け

る

健

康

面

、

体

調

面

で

続

け

る

一

家

族

や

仲

間

の

手

が

借

り

ら

る

一

緒

に

世

話

を

し

て

く

れ

ら

盆

裁

園

を

閉

鎖

し

た

そ

の

他

全

体

288

29.5

41.0

14.9

21.9

8.3

7.6

12.2

2.1

3.5

親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた

120

35.0

45.8

15.8

16.7

7.5

7.5

17.5

1.7

0.8

親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた

14

14.3

64.3

42.9

14.3

7.1

21.4

7.1

-

-

友人、知人などが盆栽を育てていて勧められた・誘われた

46

37.0

45.7

17.4

15.2

8.7

10.9

8.7

2.2

2.2

学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした

37

37.8

29.7

16.2

16.2

8.1

5.4

8.1

2.7

13.5

テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った

32

25.0

34.4

18.8

25.0

3.1

18.8

15.6

-

3.1

趣味や教養として、盆栽に興味関心があった

85

27.1

42.4

16.5

27.1

8.2

10.6

11.8

1.2

4.7

盆栽に係る仕事や職業に興味関心があった

14

21.4

50.0

28.6

14.3

14.3

21.4

14.3

7.1

-

自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた

22

27.3

31.8

13.6

31.8

13.6

13.6

18.2

4.5

-

その他

5

40.0

60.0

20.0

40.0

20.0

-

-

-

20.0

※n=30未満は参考値のため灰色

EQ3補問2 盆栽から離れたきっかけ

時間

が

な

く

な

っ

た

を

維

持

で

き

な

く

な

っ

た

環

境

盆

裁

の

育

成

が

で

き

る

環

境

場

所

が

な

く

な

っ

た

で

き

る

興

味

を

失

っ

た

く

経

済

的

に

続

け

る

の

が

難

し

こ

と

が

難

し

く

な

っ

た

で

続

け

る

健

康

面

、

体

調

面

で

続

け

る

一

家

族

や

仲

間

の

手

が

借

り

ら

る

一

緒

に

世

話

を

し

て

く

れ

ら

盆

裁

園

を

閉

鎖

し

た

そ

の

他

全

体

288

29.5

41.0

14.9

21.9

8.3

7.6

12.2

2.1

3.5

親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた

120

35.0

45.8

15.8

16.7

7.5

7.5

17.5

1.7

0.8

親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた

14

14.3

64.3

42.9

14.3

7.1

21.4

7.1

-

-

友人、知人などが盆栽を育てていて勧められた・誘われた

46

37.0

45.7

17.4

15.2

8.7

10.9

8.7

2.2

2.2

学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした

37

37.8

29.7

16.2

16.2

8.1

5.4

8.1

2.7

13.5

テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った

32

25.0

34.4

18.8

25.0

3.1

18.8

15.6

-

3.1

趣味や教養として、盆栽に興味関心があった

85

27.1

42.4

16.5

27.1

8.2

10.6

11.8

1.2

4.7

盆栽に係る仕事や職業に興味関心があった

14

21.4

50.0

28.6

14.3

14.3

21.4

14.3

7.1

-

自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた

22

27.3

31.8

13.6

31.8

13.6

13.6

18.2

4.5

-

その他

5

40.0

60.0

20.0

40.0

20.0

-

-

-

20.0

※n=30未満は参考値のため灰色

※n=30未満は参考値のため灰色

以上のようなクロス集計の結果からは、親族等が盆栽園を営んでいた者や、イベント等で盆栽の鑑賞をしたことをきっかけとして盆栽を育て始めた者の継続率は高い傾向にある。また、親族等が盆栽園を営んでいたたりした場合は、回答者自身も盆栽園を営んでいる場合が多く、親族等が盆栽を育てている場合でも盆栽を営もうと考えている者もいることが継続理由の回答傾向から推察される。

その一方で、イベント等で鑑賞したり、メディア等で知ったり、友人・知人に誘われたりした者は、盆栽への愛着があり愛好者として継続している。

一方、盆栽を継続できていない理由についてのクロス集計からは、始めたきっかけとの関係性の中で特定の傾向は見えなかったが、盆栽を育成するための場所や育成するための時間、いずれかが維持できなくなると、継続しにくくなる傾向が見られる。

■活動内容

盆栽に関する活動内容（EQ5）の結果では、「自宅等で盆栽の手入れをしている（いた）」（80.1％）が最も回答比率が高く、次いで「盆栽園に盆栽を預けて手入れをしてもらっている（いた）」（14.9％）、「盆栽を盆栽展に出品している（いた）」（8.0％）と続く。

まず、活動内容（EQ5）と現在の継続状況（EQ3）についてクロス集計を行い、活動内容と継続率の関係を分析する。このうち継続していると回答した者（51.8％）の中で、「盆栽を盆栽展に出品している（いた）」（79.2％）、「盆栽園や盆栽の教室等で習っている（いた）」（77.1％）、「盆栽園に盆栽を預けて手入れをしてもらっている（いた）」（74.2％）と続く。

盆栽に関する活動内容×現在の継続状況

		(%)	
		EQ3 現在の継続状況	
		続 け て い る	続 け て い な い
n=30以上で			
全体+10pt以上			
全体+5pt以上			
全体-5pt以下			
全体-10pt以下			
	n=		
全 体	598	51.8	48.2
自宅等で盆栽の手入れをしている(いた)	479	49.1	50.9
盆栽園に盆栽を預けて手入れをしてもらっている(いた)	89	74.2	25.8
盆栽を盆栽展に出品している(いた)	48	79.2	20.8
盆栽園や盆栽の教室等で習っている(いた)	35	77.1	22.9
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	33	63.6	36.4
盆栽園を営んでいる(いた)	16	75.0	25.0
講師として教室や体験会、講座を開いている(いた)	14	71.4	28.6
その他	8	12.5	87.5

※n=30未満は参考値のため灰色

次に活動内容（EQ5）と毎月使う費用（EQ7）についてクロス集計を行い、関係性を分析する。

「5,000 円未満」(66.6％)と回答した者のうち、「自宅等で盆栽の手入れをしている（いた）」(75.6％)と回答した者以外の項目は、全体平均を下回っている。また、5,000 円以上の費用を見ると、「盆栽園に盆栽を預けて手入れをしてもらっている（いた）」と回答した者の場合、5,000 円以上 25,000 円未満の金額帯で全体平均の回答比率を上回っており、特に「5,000 円以上～10,000 円未満」(28.1％)の回答比率が高い。また、「盆栽を盆栽展に出品している（いた）」と回答した者の場合、10,000 円以上を月額費用として払っている傾向にあり、自宅で盆栽の手入れをしている者、盆栽園に預けて手入れをしている者、盆栽展の出品まで視野に入れている者で、月額費用の傾向が大きく異なるといえる。

盆栽に関する活動内容×盆栽に関する月額費用

		EQ7 盆栽に関する月額費用 (%)											
		5 0 0 0 円 未 満	15 0 0 0 円 以 上	11 5 0 0 円 未 満	21 0 0 0 円 未 満	22 5 0 0 円 未 満	32 0 0 0 円 未 満	33 5 0 0 円 未 満	43 0 0 0 円 未 満	44 5 0 0 円 未 満	54 0 0 0 円 未 満	5 0 0 円 以 上	合 計 0 0 0 円 以 上
n=30以上で													
全体+10pt以上													
全体+5pt以上													
全体-5pt以下													
全体-10pt以下													
n=													
全 体	598	66.6	14.4	5.2	3.5	3.7	1.2	1.3	1.2	0.7	0.8	1.5	19.1
自宅等で盆栽の手入れをしている(いた)	479	75.6	11.7	3.8	2.3	2.1	0.6	0.6	0.8	0.4	0.4	1.7	12.7
盆栽園に盆栽を預けて手入れをしてもらっている(いた)	89	23.6	28.1	12.4	9.0	10.1	1.1	3.4	4.5	-	2.2	5.6	48.3
盆栽を盆栽展に出品している(いた)	48	22.9	12.5	10.4	6.3	20.8	4.2	4.2	8.3	4.2	-	6.3	64.6
盆栽園や盆栽の教室等で習っている(いた)	35	22.9	17.1	14.3	11.4	17.1	-	2.9	5.7	-	-	8.6	60.0
カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)	33	42.4	12.1	6.1	3.0	18.2	-	3.0	3.0	-	3.0	9.1	45.5
盆栽園を営んでいる(いた)	16	6.3	18.8	6.3	18.8	6.3	-	6.3	12.5	6.3	-	18.8	75.0
講師として教室や体験会、講座を開いている(いた)	14	14.3	7.1	-	7.1	-	7.1	7.1	14.3	-	14.3	28.6	78.6
その他	8	100.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

※n=30未満は参考値のため灰色

■経験年数

盆栽を続けている年数（EQ4）の結果では、「1～3年未満」（22.1%）の回答比率が最も高く、次いで「3～5年未満」（20.1%）、「1年未満」（12.5%）と続いている。

経験年数（EQ4）と習い始めたきっかけ（EQ1）のクロス集計を行い関係性について分析する。まず、習い始めたきっかけとして回答比率が最も高かった「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた」（43.8%）を回答した者のうち、「1年未満」（56.0%）、「10～20年未満」（54.4%）が平均を大きく上回っている一方、「1～3年未満」（34.8%）、「3～5年未満」（35.8%）の経験年数については、全体平均を下回る結果となっている。一方、「親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた」（11.7%）と回答した者の場合、5年以上の経験年数の回答比率が全体平均より低く、「1年～3年未満」（22.0%）の回答比率が全体平均を大きく上回っているほか、「3～5年未満」（15.8%）の回答比率も全体平均を上回っている。

また、「趣味や教養として、盆栽に興味関心があつた」（29.8%）と回答した者の中では、「1年未満」（18.7%）の回答比率が全体平均を大きく下回っているほか、「1～3年未満」（22.0%）も全体平均を下回っている。その一方、「10～20年未満」（35.3%）、「20年以上」（47.0%）と、10年以上の盆栽を育てている者が多いことが分かる。

これらの傾向を見る限り、親族等が盆栽を育てていた場合や、盆栽に興味関心を持ったことをきっかけとして盆栽を育て始めた場合については経験年数が長い傾向にある一方、親族等が盆栽園を営んでいたことをきっかけとして盆栽を育て始めた者については、経験年数が短い者が多いことがうかがえる。

盆栽を続けている年数×盆栽を育て始めたきっかけ

n=30以上で

全体+10pt以上

全体+5pt以上

全体-5pt以下

全体-10pt以下

n=

EQ1 盆栽を始めたきっかけ												
その他	自分の趣味・習っている事と別関係	野にいた	盆栽に係る仕事や職業に興味関心があった	趣味や教養として、盆栽に興味関心があった	テレビや映画、雑誌等で漫画やアニメを見た	学校や職場で育てられた	庭園や盆栽園、園芸展、文化施設等を見学した	鑑賞や体験をのしただ	友人や知人などが盆栽を誘われた	育てた	親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた	ど家族が育てていた
2.0	7.7	5.5	29.8	10.4	16.2	18.1	11.7	43.8	598	全体		
1.3	9.3	2.7	18.7	8.0	9.3	17.3	9.3	56.0	75	1年未満		
3.0	5.3	3.8	22.0	16.7	15.9	21.2	22.0	34.8	132	1～3年未満		
1.7	7.5	5.0	30.0	10.0	22.5	15.0	35.8	120	3～5年未満			
0.8	5.8	5.8	30.0	6.7	16.7	15.8	6.7	45.0	120	5～10年未満		
1.5	11.8	8.8	35.3	7.4	14.7	19.1	2.9	54.4	68	10～20年未満		
3.6	9.6	8.4	47.0	10.8	14.5	20.5	6.0	48.2	83	20年以上		

次に経験年数（EQ4）と育て方や剪定の仕方を学んだ方法を選んだ理由（EQ2補問）のクロス集計を行い関係性について分析する。学んだ方法を選んだ理由として最も回答比率が高かった「手軽にやってみたかった」（38.0%）を回答した者のうち、「10～20年未満」（47.1%）、「20年以上」（43.4%）の回答比率が全体平均よりも高い傾向にある。また、「家族や友人等と一緒に良かった」（27.4%）を回答した者のうち、「10～20年未満」（39.7%）が全体平均を大きく上回っているほか、「1年未満」（34.7%）、「20年以上」（32.5%）の回答比率も全体平均より高い。

これらの傾向を見る限り、手軽にやってみたかったと考えた者や、家族や友人等と一緒に盆栽を育てる始めた者についても経験年数が長いことが分かる。

盆栽を続けている年数×育て方や剪定の仕方を学んだ方法を選んだ理由

(%)

EQ2補問 その方法を選んだ理由											
	か家 族や 友人 等と 一緒 が良 い	通 い や す い 場 所 だ っ た	費 用 が 手 頃 だ っ た	道 具 等 が 借 り ら れ た	通 い や す い 時 間 帯 だ っ た	れ ム 指 導 方 法 が や り 易 い と 思 っ た	雑 誌 や 専 門 誌 の 解 説 が 分 か る	た 本 格 的 に や っ て み た か っ た	手 軽 に や っ て み た か っ た	そ の 他	特 に 理 由 は な い 、 わ か ら な い
全 体	598	27.4	12.9	20.6	9.4	8.5	6.0	12.2	6.9	38.0	1.3
1年未満	75	34.7	12.0	20.0	12.0	6.7	4.0	8.0	5.3	30.7	10.7
1～3年未満	132	21.2	17.4	27.3	8.3	9.1	8.3	11.4	7.6	33.3	13.6
3～5年未満	120	17.5	13.3	18.3	5.8	9.2	5.8	10.0	2.5	40.8	14.2
5～10年未満	120	29.2	9.2	20.8	11.7	9.2	5.8	12.5	6.7	35.8	14.2
10～20年未満	68	39.7	11.8	14.7	7.4	7.4	5.9	11.8	8.8	47.1	10.3
20年以上	83	32.5	12.0	18.1	12.0	8.4	4.8	20.5	12.0	43.4	13.3

経験年数（EQ4）と盆栽に関する興味関心や魅力（EQ8）のクロス集計を行い関係性について分析する。興味関心や魅力として最も回答比率が高かった「盆栽を育て、仕立てていくことで様々に変化する姿や形」（55.4%）を回答した者の中では、1～5年未満の経験年数の者を除き、回答比率が全体平均をやや上回っており、広く盆栽の魅力として捉えられているものと推察される。

や教養として盆栽に興味関心があつて盆栽を育て始めたりした者の中で、経験年数が長い者が多い傾向が見られ、また、家族や友人と一緒に盆栽を育てたり、手軽に始めたりした者の中にも、経験年数が長い者が多い傾向が見られる。

盆栽の魅力や興味関心については、盆栽を育て、仕立てていくことで変化していく姿や形は、経験年数を問わず魅力や興味関心として捉えられている一方、鉢合わせや盆栽に感じる四季など、長年盆栽を育てることによって初めてとらえることができる魅力や関心がある。

③分析結果のまとめ

盆栽の経験・体験の有無や、経験者や参加体験者、未経験者の盆栽への活動状況や興味関心の度合いを把握することを目的としてウェブアンケートを利用した調査を実施した。

調査結果からは、盆栽を育てたことがない者が圧倒的に多いことが分かった。未経験者が多いことについては、設問群の回答結果からも見えるように、盆栽に対して興味関心が持てなかった者がいる一方で、盆栽のことを知っていても、体験できる場がなかった、あるいは場や機会を知らなかった事情があったこと、そもそも盆栽を知らなかった者も一定数おり、その結果として参加体験に至らなかったことが明らかになった。

経験者の場合は親族等が盆栽を育てていた、あるいは趣味や教養として関心があったことをきっかけとして盆栽を育て始めた者が多い傾向にある。一方、参加体験者の場合は、親族等が育てていた他、学校や職場、公園や庭園等で盆栽を鑑賞する機会を得ており、経験者・参加体験者・未経験者のそれぞれに、盆栽を知る機会、接することができる機会や環境に大きな開きがあることが、調査結果の分析から見えてくる。

経験者の活動状況等については、約5割が継続しており、若い世代ほどに継続率が高く、経験年数が長いほどに継続している傾向にある。一方で、継続していない者が続けられなかった事情については、興味を失ったから辞めたという理由よりも、盆栽を育てる場所が維持できなくなった、あるいは育てるための時間がなくなった等の事情が大きく、回答者の環境を整えば再開する可能性があることも推察される。

参加体験者の活動状況等については、参加体験をしたきっかけと体験した機会のクロス集計から、文化施設等のイベントや盆栽園等が主催する体験会で体験機会を得たと回答比率が高い傾向にあるほか、親族等が盆栽を育てていた場合は自宅で体験機会を得ている場合もある。盆栽園を営む者等が文化施設のイベントや盆栽園で盆栽教室を開く等、盆栽体験の機会の醸成などを図っている事例もある。なお、参加体験者がこれまで盆栽を育て始めるに至らなかった理由や事情については、参加体験をしても興味関心を持てなかった者もいる一方で、興味関心があっても盆栽の育て方等に相談できる場所や人がいない等の事情があって始められなかった傾向にあり、盆栽の育て方などを相談できる機会などの提供や周知を行うことで、興味関心がある者が盆栽を育て始めるきっかけを醸成できる可能性があるかと推察される。

上記の結果から、学校や職場、公園や庭園、文化施設等でイベントや、盆栽園が開く盆栽教室等の体験機会を丁寧に周知していくことで、経験者や体験者を増やす可能性が広がるものと考えられる。また、盆栽の育て方などを相談することができる場所や機会などを、盆栽に興味関心がある者に対して適切に情報を伝えていくことも有効な取組として考えられる。

(6) 錦鯉

本調査では、錦鯉への興味関心や経験の有無等の把握を目的として2万人にウェブアンケート調査を実施した。

アンケートでは、錦鯉を飼育したことがある、あるいは養鯉場を営んでいたような経験者、イベント等で錦鯉の飼育や観賞体験した体験者、錦鯉の飼育等の経験が全くない未経験者がいることが想定されることから、錦鯉の経験・体験の有無について回答する設問を設けた。その上で、下記の表のように経験の深度に応じた専用の設問群を設けることで、各回答者の錦鯉への興味関心の有無などの把握を行った。

■分野設問の項目

「1. 錦鯉を飼育している（いた）、あるいは錦鯉の養鯉業を営んでいる（いた）」と回答した者への設問	G Q 1：錦鯉を飼育し始めたきっかけ G Q 2：錦鯉を飼育し始めた当初に飼育の仕方を学んだ方法 G Q 2 補問：飼育の仕方を学んだ方法を選んだ理由 G Q 3：現在の継続状況 G Q 3 補問 1：錦鯉の飼育を続けている理由 G Q 3 補問 2：錦鯉の飼育から離れたきっかけや理由 G Q 4：錦鯉の飼育を続けている（続けていた）年数 G Q 5：錦鯉の飼育に関する活動内容 G Q 6：錦鯉の飼育に関する活動頻度 G Q 7：錦鯉の飼育に関する月額費用 G Q 8：錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力
「2. イベント等で錦鯉の飼育体験や観賞をしたことはある」と回答した者への設問	G Q 9：錦鯉に触れ合ったり観賞したりしたきっかけ G Q 10：錦鯉に触れ合ったり観賞したりした場 G Q 11：錦鯉を飼育しやすい状況 G Q 12：錦鯉の飼育に支払える月額費用 G Q 13：錦鯉を飼育していない理由 G Q 14：錦鯉の飼育や観賞に対する印象やイメージ G Q 15：錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力
「3. 今まで錦鯉の飼育をしたことはない」と回答した者への設問	G Q 16：参加してみたい錦鯉の観賞の体験内容 G Q 17：参加しやすい錦鯉の観賞の体験条件 G Q 18：錦鯉の観賞体験をしたことがない理由 G Q 19：錦鯉の飼育や観賞に対する印象やイメージ G Q 20：錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力

①単純集計の結果について

■全調査対象者への設問

錦鯉の飼育をしたことがある者、あるいは全く飼育をしたことがない者がどの程度いるのかは、統計調査等では明らかとなっていない。加えて、錦鯉の「経験」にも深度があり、飼育をしたり養鯉場を営んでいたなどの経験がある者や、イベント等で錦鯉の飼育や観賞等の体験をしたりしたことがある者等がいると想定される。経験の有無を大別するならば、錦鯉を趣味あるいは職業として飼育したことがある者、イベント等で飼育あるいは観賞等の体験をした者、そして飼育等の経験がない者に分けることができると考えられる。

本設問では、上記の想定に基づき、錦鯉の経験の有無とあわせて、経験の深度を図る選択肢を設けて、実態の把握を行った。

錦鯉の経験の有無

経験率を見ると、「錦鯉を飼育している（いた）、あるいは錦鯉の養鯉業を営んでいる（いた）」（以下、「経験あり」）比率は 2.4%（487 人）、「イベント等で錦鯉の飼育体験や観賞をしたことはある」（以下、「参加体験あり」）7.3%（1,451 人）、「今まで錦鯉の飼育をしたことはない」（以下「未経験」）90.3%（18,062 人）となった。

男女別では、男性で「経験あり」、「参加体験あり」と回答した者の回答比率がそれぞれ全体平均を上回っており、若干男性が高い。

年齢別では、「参加体験あり」という回答比率が年齢が若い方が高くなっており、特に 18～20 代で 11.5%と高い。

			(%)		
n=			錦鯉を飼育している(いた)、 あるいは錦鯉の養鯉業を 営んでいる(いた)	イベント等で錦鯉の飼育体験や 観賞をしたことはある	今まで錦鯉の飼育を したことはない
全 体			2,4	7.3	90.3
性別	男	9,645	3.0	7.4	89.5
	女	10,202	1.9	7.1	91.0
	それ以外／答えたくない	153	0.7	3.9	95.4
年齢	18～20代	2,781	3.3	11.5	85.2
	30代	2,691	2.5	9.4	88.1
	40代	3,496	1.9	7.6	90.4
	50代	3,178	2.0	5.6	92.4
	60代	3,002	2.7	6.2	91.1
	70代以上	4,852	2.3	5.1	92.6

集計表 F Q 6 : 錦鯉の経験の有無

■「錦鯉を飼育している（いた）、あるいは錦鯉の養鯉業を営んでいる（いた）」と回答した者への設問（GQ1～GQ8）

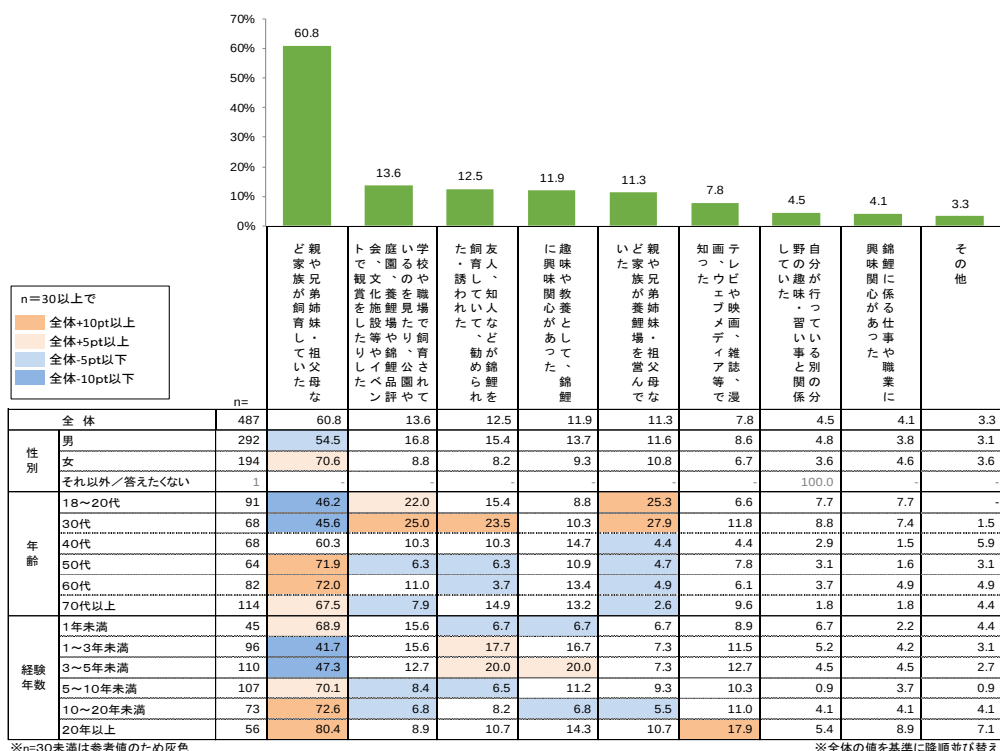
本設問群では、錦鯉の飼育を経験したことがあると回答した者が、どのようなきっかけや機会に錦鯉の飼育等を行うようになったのか、また、興味関心を持っているのか等を経験の実態を把握するためのアンケートを実施した。

錦鯉を飼育し始めたきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた」の60.8%で、次いで「学校や職場で飼育されているのを見たり、公園や庭園、養鯉場や錦鯉品評会、文化施設等やイベントで観賞をしたりした」13.6%、「友人、知人などが錦鯉を飼育していて、勧められた・誘われた」12.5%、「趣味や教養として、錦鯉に興味関心があった」11.9%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、男女別では男性で「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた」（54.5%）の回答比率が全体平均より低く、女性で70.6%と高い。

次に年齢別で見ると、年齢が高いほど「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた」という回答比率が高く、「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が養鯉場を営んでいた」という回答比率が低くなる傾向が見られる。また、経験年数別で見ると、「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた」については、経験年数が長いほど回答比率が高くなっている傾向が見られる。



集計表 GQ1：錦鯉を飼育し始めたきっかけ

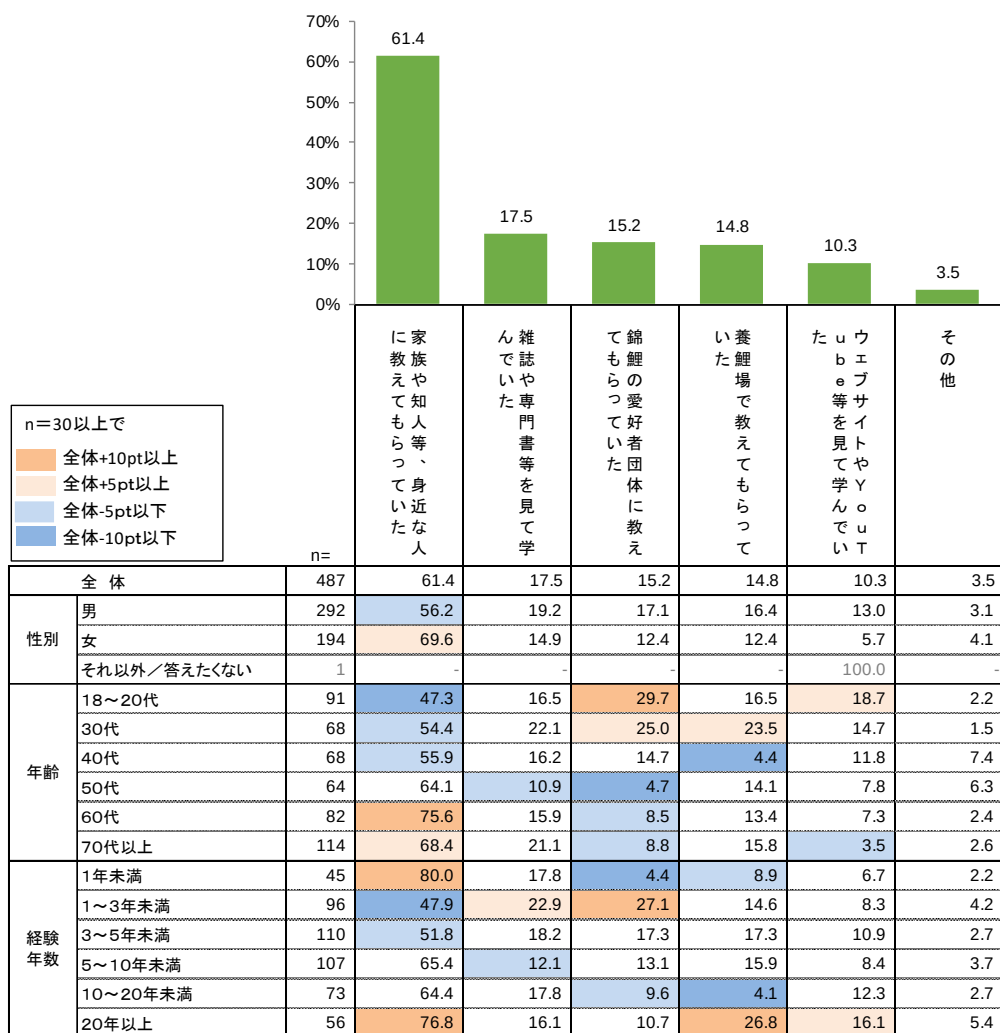
（その他の内容）貰った、お店で見て飼いたくなった

錦鯉を飼育し始めた当初に飼育の仕方を学んだ方法

全体平均で最も回答比率が高いのは「家族や知人等、身近な人に教えてもらっていた」の 61.4%で、次いで「雑誌や専門書等を見て学んでいた」17.5%、「錦鯉の愛好者団体に教えてもらっていた」15.2%、「養鯉場で教えてもらっていた」14.8%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、男女別では男性で「家族や知人等、身近な人に教えてもらっていた」(56.2%)と低く、女性で 69.6%と高く、飼育し始めたきっかけと同様の傾向にある。

次に年齢別では、10～30代で「錦鯉の愛好者団体に教えてもらっていた」という回答比率が高い一方、50代以上で低い。逆に、50代以上では、「家族や知人等、身近な人に教えてもらっていた」の回答比率が高い傾向が見られる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

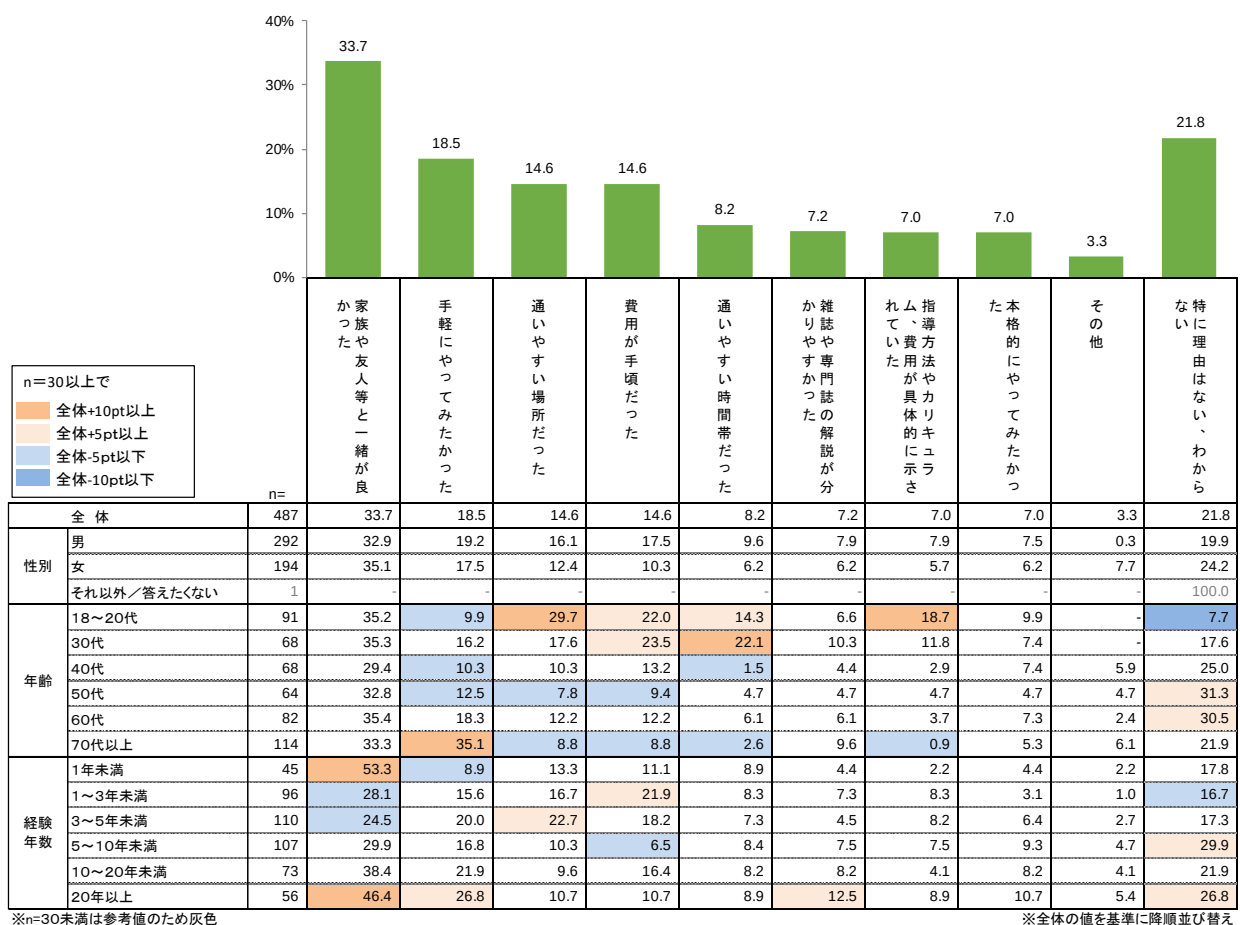
集計表 G Q 2 : 錦鯉を飼育し始めた当初に飼育の仕方を学んだ方法

(その他の内容) 学んでいない、自分流、学校で飼育していた

飼育の仕方を学んだ方法を選んだ理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「家族や友人等と一緒に良かった」の33.7%で、次いで「手軽にやってみたかった」18.5%、「通いやすい場所だった」、「費用が手頃だった」（共に14.6%）と続く。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較すると、年齢別では、10～30代で「通いやすい場所だった」、「費用が手頃だった」の回答比率が高く、70代以上で「手軽にやってみたかった」(35.1%)という回答比率が高い。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 GQ2補問：飼育の仕方を学んだ方法を選んだ理由

(その他の内容) 家に池があった、金魚と同じだと思ったから、手伝わねばならない状況だった

現在の継続状況

「続けている」は 34.1%（166 人）、「続けていない」は 65.9%（321 人）で続けていないとの回答比率が高い。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、男女別では男性で「続けている」が 41.4%と高い。

次に、年齢別では若い人ほど「続けている」という回答比率が高くなっている。

経験年数別では、20 年以上の回答比率が最も高く、次に 1～3 年未満と続く。

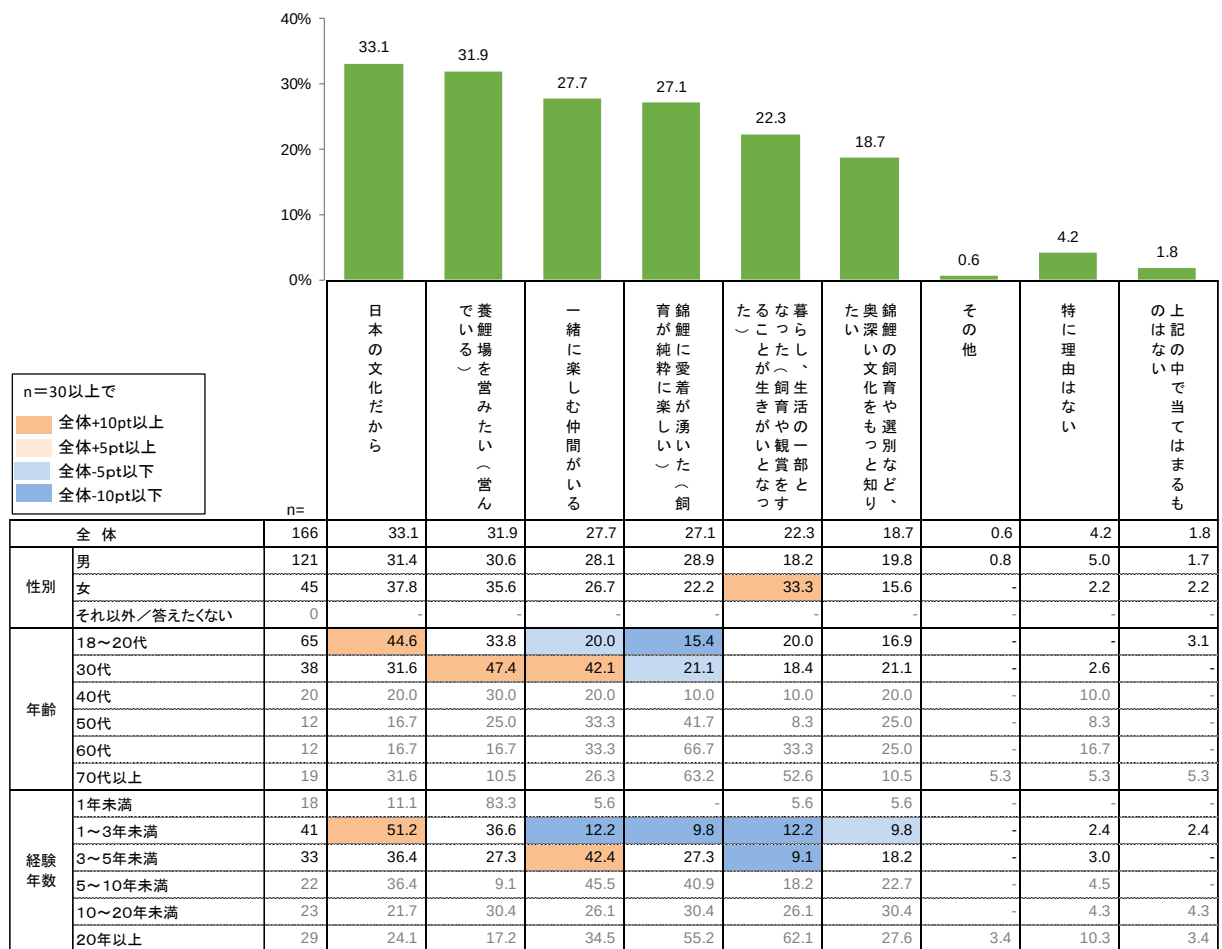
			(%)	
			続けている	続けていない
n=				
全 体		487	34.1	65.9
性別	男	292	41.4	58.6
	女	194	23.2	76.8
	それ以外／答えたくない	1	100.0	
年齢	18～20代	91	71.4	28.6
	30代	68	55.9	44.1
	40代	68	29.4	70.6
	50代	64	18.8	81.3
	60代	82	14.6	85.4
	70代以上	114	16.7	83.3
経験年数	1 年未満	45	40.0	60.0
	1～3 年未満	96	42.7	57.3
	3～5 年未満	110	30.0	70.0
	5～10 年未満	107	20.6	79.4
	10～20 年未満	73	31.5	68.5
	20 年以上	56	51.8	48.2

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 G Q 3 : 現在の継続状況

錦鯉の飼育を続けている理由

全体平均で最も回答比率が高いのは「日本の文化だから」の33.1%で、次いで「養鯉場を営みたい（営んでいる）」31.9%、「一緒に楽しむ仲間がいる」27.7%、「錦鯉に愛着が湧いた（飼育が純粋に楽しい）」27.1%と続く。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 G Q 3 補問 1 : 錦鯉の飼育を続けている理由

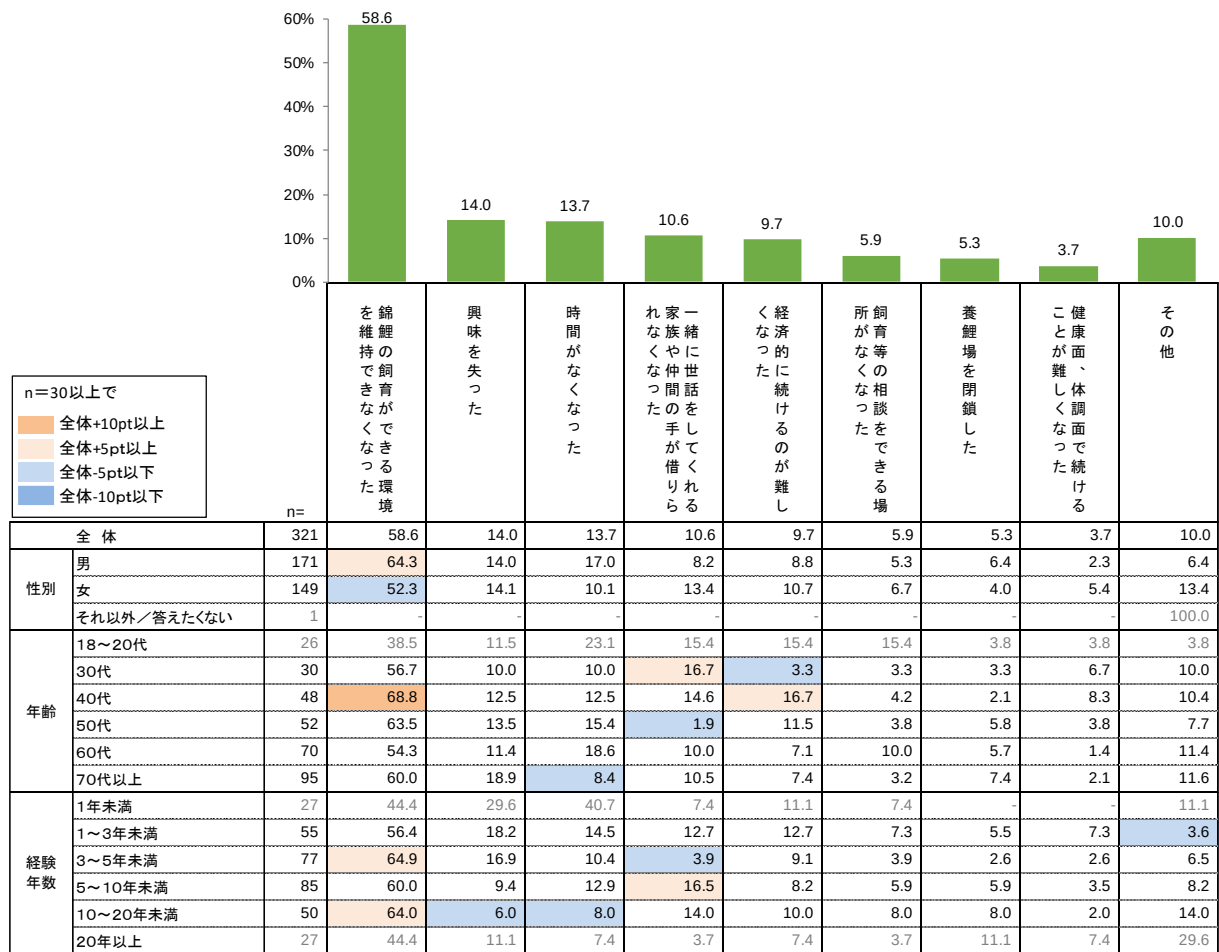
(その他の内容) 自宅に池があるから

錦鯉の飼育から離れたきっかけや理由

全体平均で最も回答比率が高いのは、「錦鯉の飼育ができる環境を維持できなくなった」の58.6%で、次いで「興味を失った」14.0%、「時間がなくなった」13.7%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、経験年数別の回答比率とを比較すると、男女別では、男性で「錦鯉の飼育ができる環境を維持できなくなった」(64.3%)の回答比率が高く、女性で52.3%と低い。

経験年数別では、年数が少ないほど「興味を失った」という回答比率が高い傾向が見られる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 G Q 3 補問2：錦鯉の飼育から離れたきっかけや理由

(その他の内容) 鯉が死んでしまった、引越しをした、池を埋め立てた、水槽に入らなくなった

錦鯉の飼育を続けている（続けていた）年数

全体平均で最も回答比率が高いのは、「3～5年未満」の22.6%で、次いで「5～10年未満」22.0%、「1～3年未満」19.7%と続く。全体平均で3年以上続けている（いた）人の比率は71.0%となっている。

全体平均の回答比率と男女別の回答比率とを比較すると、男女別では、3年以上の継続者が、男性で73.6%（292人中215人）、女性で67.5%（194人中131人）となっており、男性の方が長期に続けている（いた）人が多い。

									(%)	
			1年未満	1～3年未満	3～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上	3年 以上	
n=										
全 体			487	9.2	19.7	22.6	22.0	15.0	11.5	71.0
性別	男	292	9.6	16.8	23.6	22.6	14.7	12.7	73.6	
	女	194	8.8	23.7	21.1	21.1	15.5	9.8	67.5	
	それ以外／答えたくない	1	100.0						-	
年 齢	18～20代	91	9.9	30.8	23.1	16.5	14.3	5.5	59.3	
	30代	68	14.7	25.0	25.0	19.1	5.9	10.3	60.3	
	40代	68	8.8	23.5	27.9	16.2	11.8	11.8	67.6	
	50代	64	9.4	6.3	26.6	23.4	21.9	12.5	84.4	
	60代	82	9.8	8.5	17.1	28.0	17.1	19.5	81.7	
	70代以上	114	5.3	21.1	19.3	26.3	17.5	10.5	73.7	

※n=30未満は参考値のため灰色

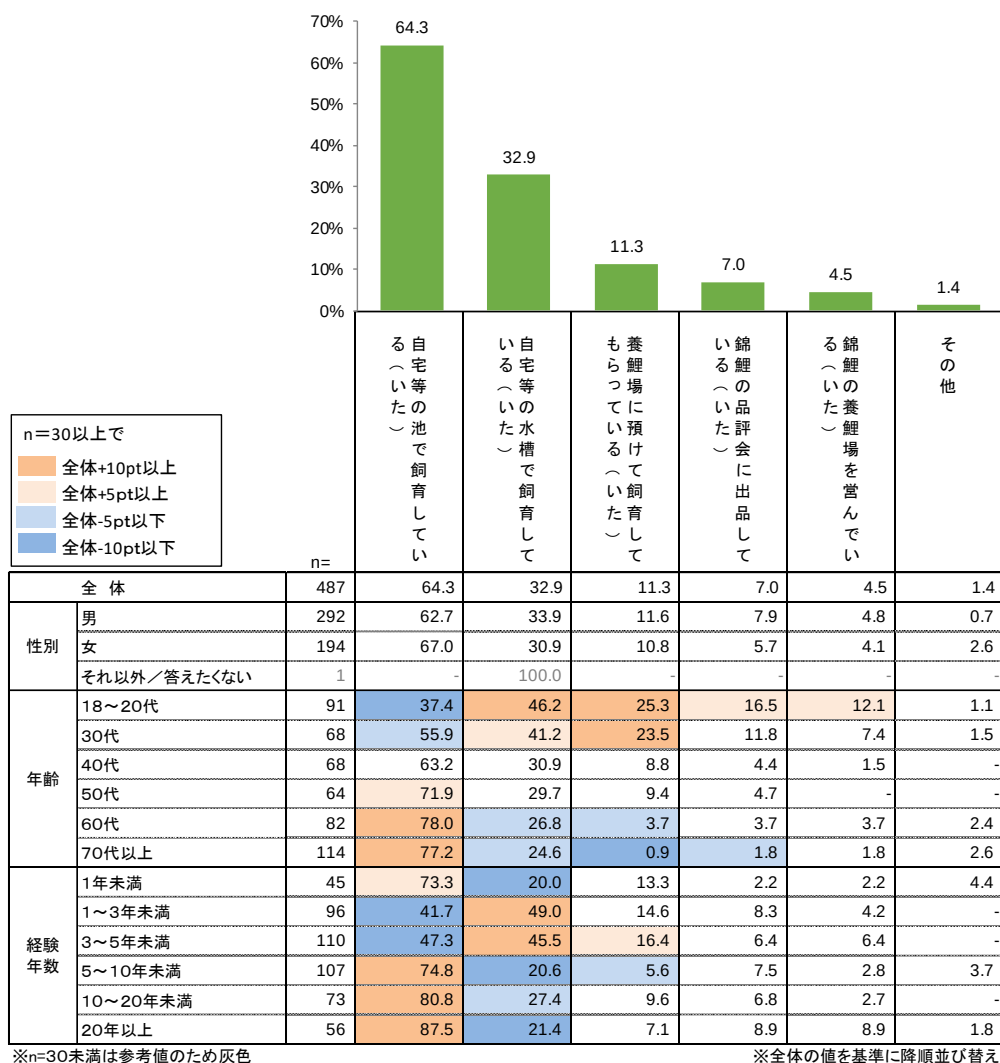
集計表 G Q 4 : 錦鯉の飼育を続けている（続けていた）年数

錦鯉の飼育に関する活動内容

全体平均で最も回答比率が高いのは、「自宅等の池で飼育している（いた）」の64.3%で、次いで「自宅等の水槽で飼育している（いた）」32.9%、「養鯉場に預けて飼育してもらっている（いた）」11.3%、「錦鯉の品評会に出品している（いた）」7.0%と続く。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較すると、年齢別では50代以上の者で「自宅等の池で飼育している（いた）」が多く、若いほど「自宅等の水槽で飼育している（いた）」、「養鯉場に預けて飼育してもらっている（いた）」という回答比率が高くなっている。

また、経験年数別では、経験年数が5年以上で「自宅等の池で飼育している（いた）」の回答比率が高い傾向が見られる一方、1年以上5年未満では「自宅等の水槽で飼育している（いた）」の回答比率が高い傾向にあり、年代によって、また、経験年数によって飼育の仕方に傾向が見られる。



集計表 GQ5：錦鯉の飼育に関する活動内容

(その他の内容) 学校で飼育している、実家で飼育していた

錦鯉の飼育に関する活動頻度

全体平均で最も回答比率が高いのは、「ほぼ毎日」の41.3%で、次いで「週に2～3回」23.6%、「週1回程度」13.1%と続く。週1回以上活動している（いた）比率は78.0%（487人中380人）である。男女別では、男性で週1回以上活動している（いた）比率が79.5%（292人中232人）、女性で75.8%（194人中147人）となっている。

全体平均の回答比率と経験年数別の回答比率とを比較すると、「ほぼ毎日」（41.3%）と回答した者のうち、20年以上の経験年数の者（62.5%）が全体平均を大きく上回っているほか、「週に2～3回」（23.6%）と回答した者では、1～3年未満の経験年数の者（36.5%）が全体平均を大きく上回る回答比率となっている。

		n=	ほぼ毎日	週に2～3回	週1回程度	月数回程度	月1回程度	年数回程度	年1回程度	(%)
										週1回以上
全 体		487	41.3	23.6	13.1	6.6	3.3	2.7	9.4	78.0
性別	男	292	42.5	23.6	13.4	7.2	4.5	1.7	7.2	79.5
	女	194	39.7	23.2	12.9	5.7	1.5	4.1	12.9	75.8
	それ以外／答えたくない	1	100.0							100.0
年齢	18～20代	91	31.9	29.7	15.4	6.6	5.5	4.4	6.6	76.9
	30代	68	39.7	22.1	19.1	4.4	2.9	5	10.3	80.9
	40代	68	39.7	14.7	16.2	7.4	4.4	1.5	16.2	70.6
	50代	64	45.3	21.9	6.3	10.9	6.3		9.4	73.4
	60代	82	42.7	22.0	17.1	4.9	2.4	2.4	8.5	81.7
	70代以上	114	47.4	27.2	7.0	6.1	4.4		7.9	81.6
経験年数	1年未満	45	55.6	17.8	6.7	4.4	4.4	2.2	8.9	80.0
	1～3年未満	96	29.2	36.5	13.5	6.3	2.1	3.1	9.4	79.2
	3～5年未満	110	33.6	23.6	18.2	10.9	5.5	0.9	7.3	75.5
	5～10年未満	107	39.3	22.4	17.8	3.7	2.8	4.7	9.3	79.4
	10～20年未満	73	46.6	20.5	8.2	5.5	2.7	4.1	12.3	75.3
	20年以上	56	62.5	12.5	5.4	7.1	1.8		10.7	80.4

※n=30未満は参考値のため灰色

集計表 G Q 6 : 錦鯉の飼育に関する活動頻度

全体平均で最も回答比率が高いのは、「1万円未満」の60.4%で、次いで「1万円以上～5万円未満」22.0%、「5万円以上～10万円未満」9.7%と続く。月額5万円以上支出している（いた）比率は17.7%（487人中86人）である。

				1 万 円 未 満	5 万 円 未 満 ～ 1 0 万 円 未 満	1 0 万 円 未 満 ～ 5 0 万 円 未 満	5 0 万 円 未 満 ～ 1 0 0 万 円 未 満	1 0 0 万 円 未 満 ～ 5 0 0 万 円 未 満	1 0 0 万 円 未 満 ～ 5 0 0 万 円 未 満	5 0 0 万 円 未 満 ～ 1 0 0 万 円 未 満	(%)
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下			n=								
全 体			487	60.4	22.0	9.7	4.1	2.1	1.8	17.7	
性 別	男	292	58.2	24.3	9.2	4.1	2.4	1.7	17.5		
	女	194	63.4	18.6	10.3	4.1	1.5	2.1	18.0		
それ以外／答えたくない			1	100.0	-	-	-	-	-		
年 齢	18～20代	91	24.2	39.6	20.9	4.4	6.6	4.4	36.3		
	30代	68	39.7	23.5	22.1	8.8	2.9	2.9	36.8		
	40代	68	72.1	16.2	8.8	2.9	-	-	11.8		
	50代	64	62.5	23.4	4.7	4.7	3.1	1.6	14.1		
	60代	82	82.9	13.4	-	1.2	-	2.4	3.7		
	70代以上	114	77.2	15.8	3.5	3.5	-	-	7.0		
経 験 年 数	1年未満	45	80.0	13.3	4.4	2.2	-	-	6.7		
	1～3年未満	96	57.3	28.1	11.5	3.1	-	-	14.6		
	3～5年未満	110	54.5	20.0	19.1	5.5	0.9	-	25.5		
	5～10年未満	107	63.6	16.8	9.3	4.7	3.7	1.9	19.6		
	10～20年未満	73	57.5	24.7	4.1	4.1	6.8	2.7	17.8		
	20年以上	56	58.9	28.6	-	3.6	-	8.9	12.5		

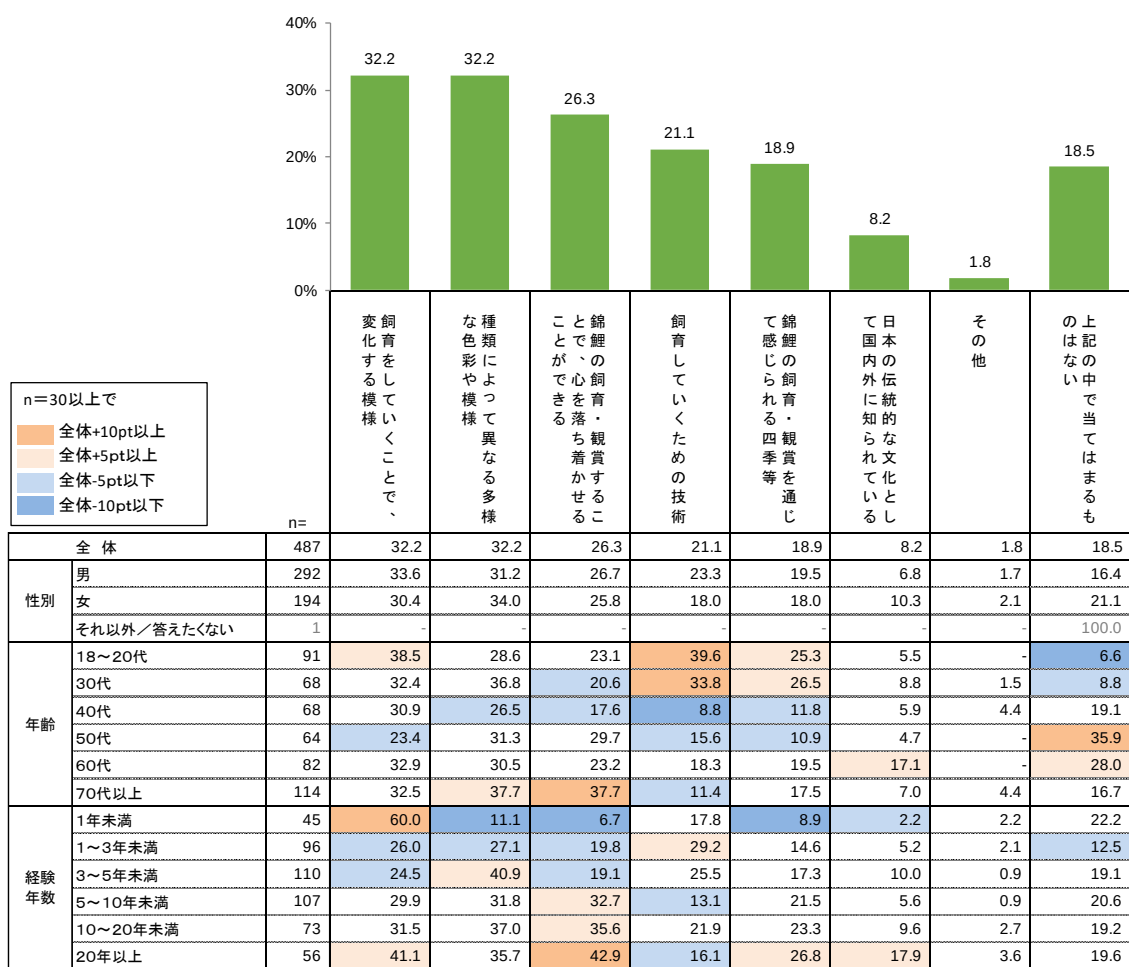
集計表 GQ7：錦鯉の飼育に関する月額費用

錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは、「飼育をしていくことで、変化する模様」と「種類によって異なる多様な色彩や模様」（ともに 32.2%）で、次いで「錦鯉の飼育・観賞することで、心を落ち着かせることができる」26.3%、「飼育していくための技術」21.1%と続く。

全体平均の回答比率と年齢別、経験年数別の回答比率とを比較すると、年齢別では、10～30代で「飼育していくための技術」、「錦鯉の飼育・観賞を通じて感じられる四季等」の回答比率が高い傾向が見られる。

次に経験年数別では、経験年数が5年以上と回答した者ほど「錦鯉の飼育・観賞することで、心を落ち着かせることができる」の回答比率が高く、経験年数1年未満では「飼育をしていくことで、変化する模様」の回答比率が高い傾向があり、経験年数によって錦鯉に感じる興味関心や魅力に違いが見られる。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 G Q 8 : 錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力

(その他の内容) ペットとしてかわいい、飼育が楽しい、とにかく美しい

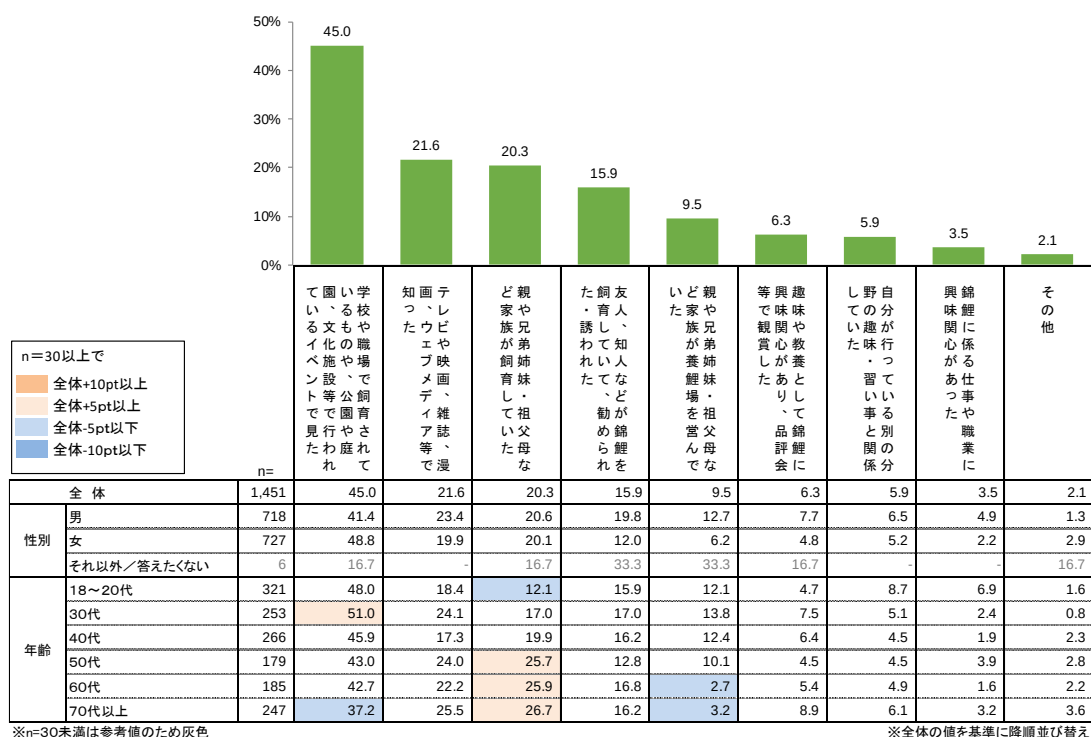
■「イベント等で錦鯉の飼育体験や観賞をしたことはある」と回答した者への設問（GQ9～GQ15）

本設問では、錦鯉の飼育や観賞体験をイベント等で体験したと回答した者が、どのようなきっかけや機会に錦鯉に関わる体験をしたのか、また、どの程度錦鯉に興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

錦鯉に触れ合ったり観賞したりしたきっかけ

全体平均で最も回答比率が高いのは、「学校や職場で飼育されているものや、公園や庭園、文化施設等で行われているイベントで見た」の45.0%で、次いで「テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った」21.6%、「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた」20.3%と続く。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較すると、年齢別では50代以上で「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた」という回答比率が高く、30代では、「学校や職場で飼育されているものや、公園や庭園、文化施設等で行われているイベントで見た」との回答比率が高い傾向にある。また、60代以上では「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が養鯉場を営んでいた」という回答比率は低く、10～50代の回答比率が全体平均を少し上回っている。



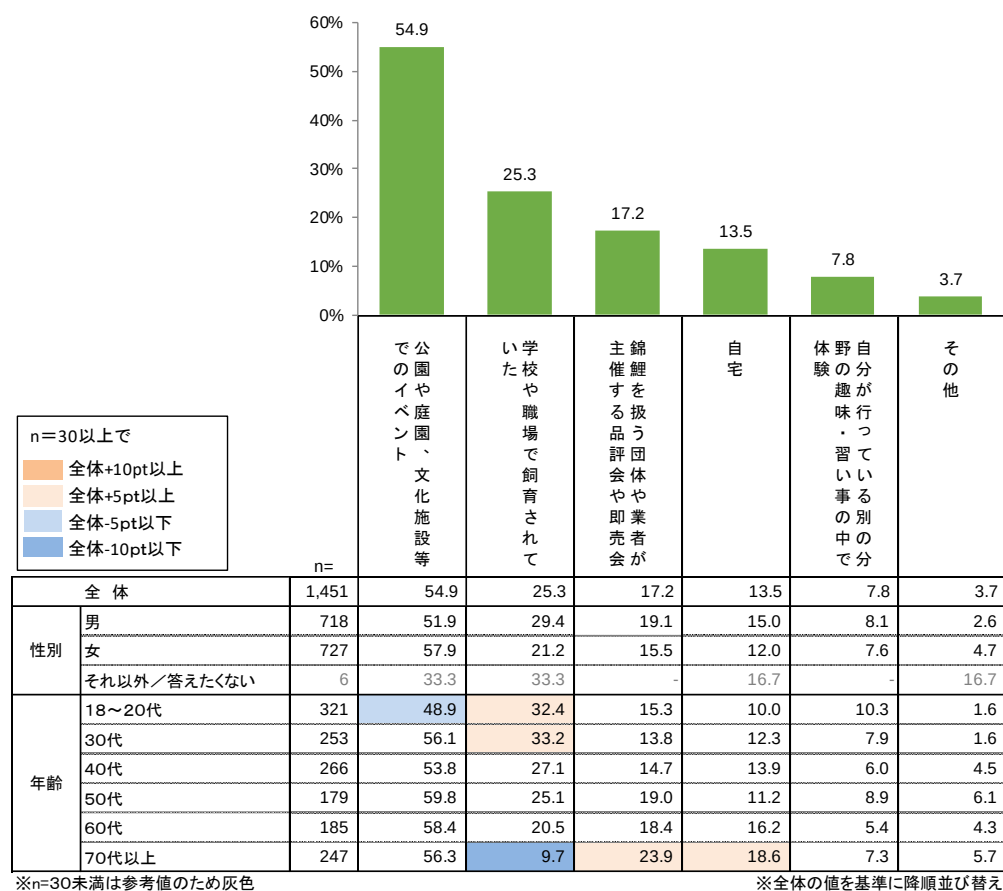
集計表 GQ9：錦鯉に触れ合ったり観賞したりしたきっかけ

（その他の内容）旅行に行った際錦鯉と触れ合う機会があった、神社に行った際にいた、住んでいる地域が錦鯉の名産地であるから

錦鯉に触れ合ったり観賞したりした場

全体平均で最も回答比率が高いのは、「公園や庭園、文化施設等でのイベント」の 54.9%で、次いで「学校や職場で飼育されていた」25.3%、「錦鯉を扱う団体や業者が主催する品評会や即売会」17.2%、「自宅」13.5%となる。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較すると、10～30代で「学校や職場で飼育されていた」の回答比率が全体平均より高く、70代以上では著しく低い傾向にある。また、70代以上では「錦鯉を扱う団体や業者が主催する品評会や即売会」（23.9%）、「自宅」（18.6%）の回答比率が高く、年齢によって錦鯉の飼育や観賞を体験した場に違いが見られる。



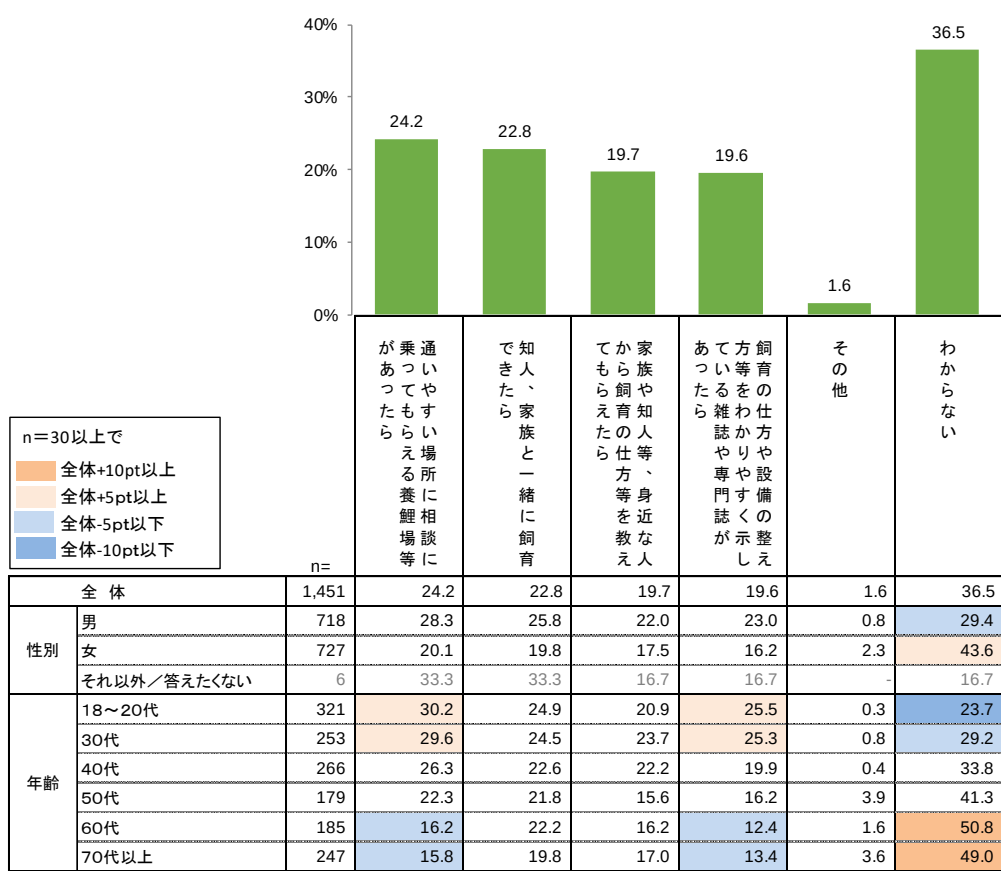
集計表 GQ10：錦鯉に触れ合ったり観賞したりした場

（その他の内容）親戚の家、知人宅、旅行先で

錦鯉を飼育しやすい状況

全体平均で最も回答比率が高いのは、「通いやすい場所に相談に乗ってもらえる養鯉場等があったら」の24.2%で、次いで「知人、家族と一緒に飼育できたら」22.8%、「家族や知人等、身近な人から飼育の仕方等を教えてもらえたら」19.7%、「飼育の仕方や設備の整え方等をわかりやすく示している雑誌や専門誌があったら」の19.6%と続く。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較すると、10～30代で「通いやすい場所に相談に乗ってもらえる養鯉場等があったら」、「飼育の仕方や設備の整え方等をわかりやすく示している雑誌や専門誌があったら」の回答比率が全体平均を上回っている。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 G Q11：錦鯉を飼育しやすい状況

(その他の内容) 自宅に大きな池があったら、飼育にかかる費用・年数があれば

錦鯉の飼育に支払える月額費用

全体平均で最も回答比率が高いのは、「1万円未満」の67.7%で、次いで「1万円以上～5万円未満」18.0%、「5万円以上～10万円未満」8.5%となった。月額5万円以上支払ってもいいと回答した比率は14.3%（1,451人中208人）である。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、男女別の場合、「1万円未満」（67.7%）と回答した者のうち、男性が60.3%と全体平均を下回っている。また、男性で月額5万円以上支払ってもいいという回答比率が16.9%（718人中121人）あったのに対し、女性は12.0%（727人中87人）にとどまり、男女で差がある。

次に、年齢別で見た場合、「1万円未満」（67.7%）と回答した者のうち、10～30代で全体を下回っている一方、50代以上は全体平均を大きく上回っている。その一方で、10～30代は1万円以上の回答比率が全体平均を上回っており、年齢によって傾向が異なる。

			(%)							
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下			1 万 円 未 満	5 1 万 円 未 満 上	1 5 0 万 円 未 満 上	5 1 0 0 万 円 未 満 上	1 5 0 0 万 円 未 満 上	1 0 0 万 円 未 満 上	5 万 円 未 満 上 合 計	
n=										
全 体			1,451	67.7	18.0	8.5	4.0	1.2	0.7	14.3
性 別	男	718	60.3	22.8	9.9	5.7	0.7	0.6	16.9	
	女	727	75.0	13.1	7.2	2.3	1.7	0.8	12.0	
	それ以外／答えたくない	6	66.7	33.3	-	-	-	-	-	
年 齢	18～20代	321	53.6	26.2	12.5	4.4	2.5	0.9	20.2	
	30代	253	57.7	19.8	13.0	6.7	1.6	1.2	22.5	
	40代	266	64.3	16.9	10.5	6.4	1.1	0.8	18.8	
	50代	179	78.8	14.5	2.2	3.4	0.6	0.6	6.7	
	60代	185	80.0	13.0	5.9	-	0.5	0.5	7.0	
	70代以上	247	82.6	13.0	2.8	1.6	-	-	4.5	

※n=30未満は参考値のため灰色

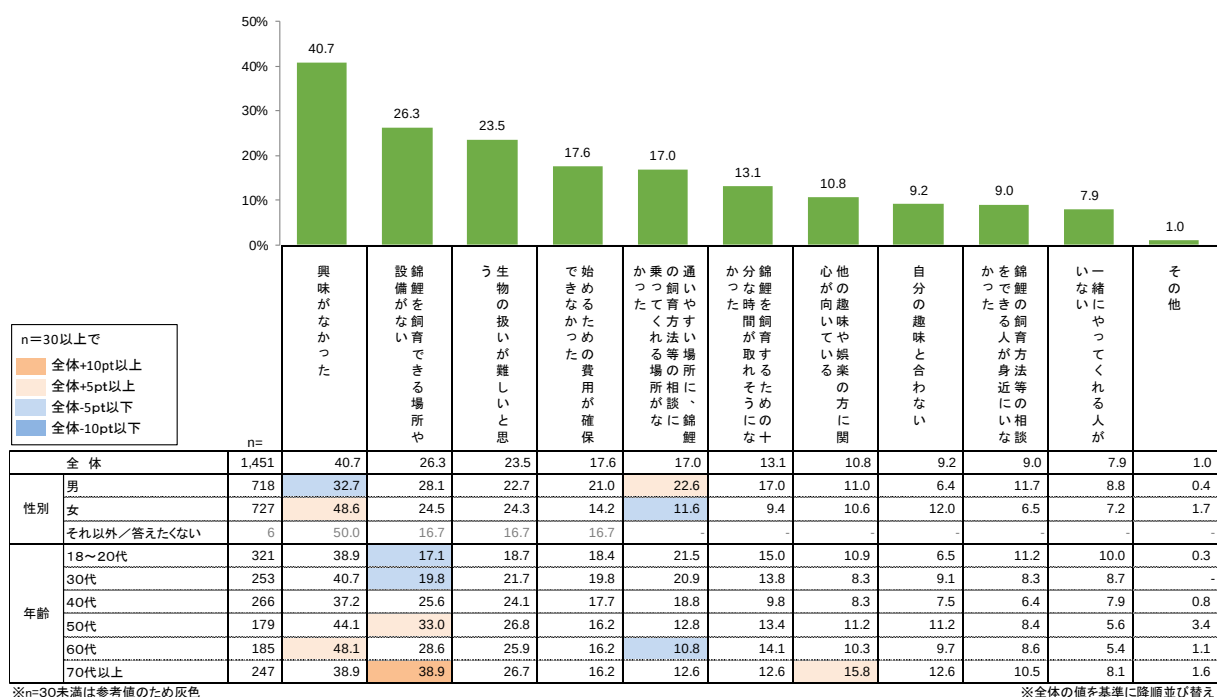
集計表 GQ12：錦鯉の飼育に支払える月額費用

錦鯉を飼育していない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは、「興味がなかった」の40.7%で、次いで「錦鯉を飼育できる場所や設備がない」26.3%、「生物の扱いが難しいと思う」23.5%、「始めるための費用が確保できなかった」17.6%と続く。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、男女別で見た場合、男性で「興味がなかった」の回答比率が32.7%と全体平均より低く、女性は48.6%と高い。

次に年齢別では、「錦鯉を飼育できる場所や設備がない」(26.3%)と回答した者のうち、10～30代で全体平均より回答比率が低く、50代以上で回答比率が全体平均を上回っている傾向が見られる。



集計表 G Q13：錦鯉を飼育していない理由

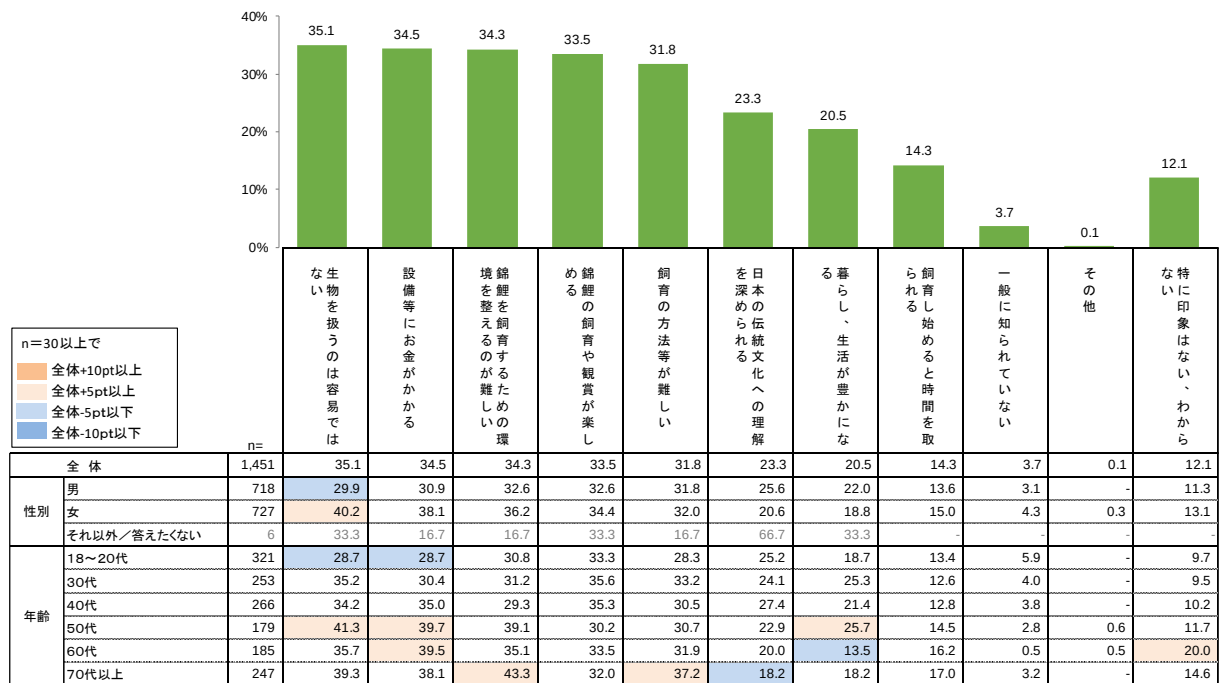
(その他の内容) 飼うという発想がなかった、家族の理解を得にくい、親が飼育していてポンプ音がうるさいと思った

錦鯉の飼育や観賞に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは、「生物を扱うのは容易ではない」の35.1%で、次いで「設備等にお金がかかる」34.5%、「錦鯉を飼育するための環境を整えるのが難しい」34.3%、「錦鯉の飼育や観賞が楽しめる」33.5%、「飼育の方法等が難しい」31.8%となっており、上位5つのイメージのうち4つが錦鯉飼育の難しさに関わるものとなっている。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、男女別では男性で「生物を扱うのは容易ではない」という回答比率が29.9%と低く、逆に女性で40.2%と高い傾向が見られる。

次に年齢別では、「生物を扱うのは容易ではない」(35.1%)で18～20代の回答比率が、「設備等にお金がかかる」(34.5%)でも18～20代の回答比率が低い傾向にあり、両項目では、50代以上の回答比率が高くなっていることが分かる。



集計表 G Q14：錦鯉の飼育や観賞に対する印象やイメージ

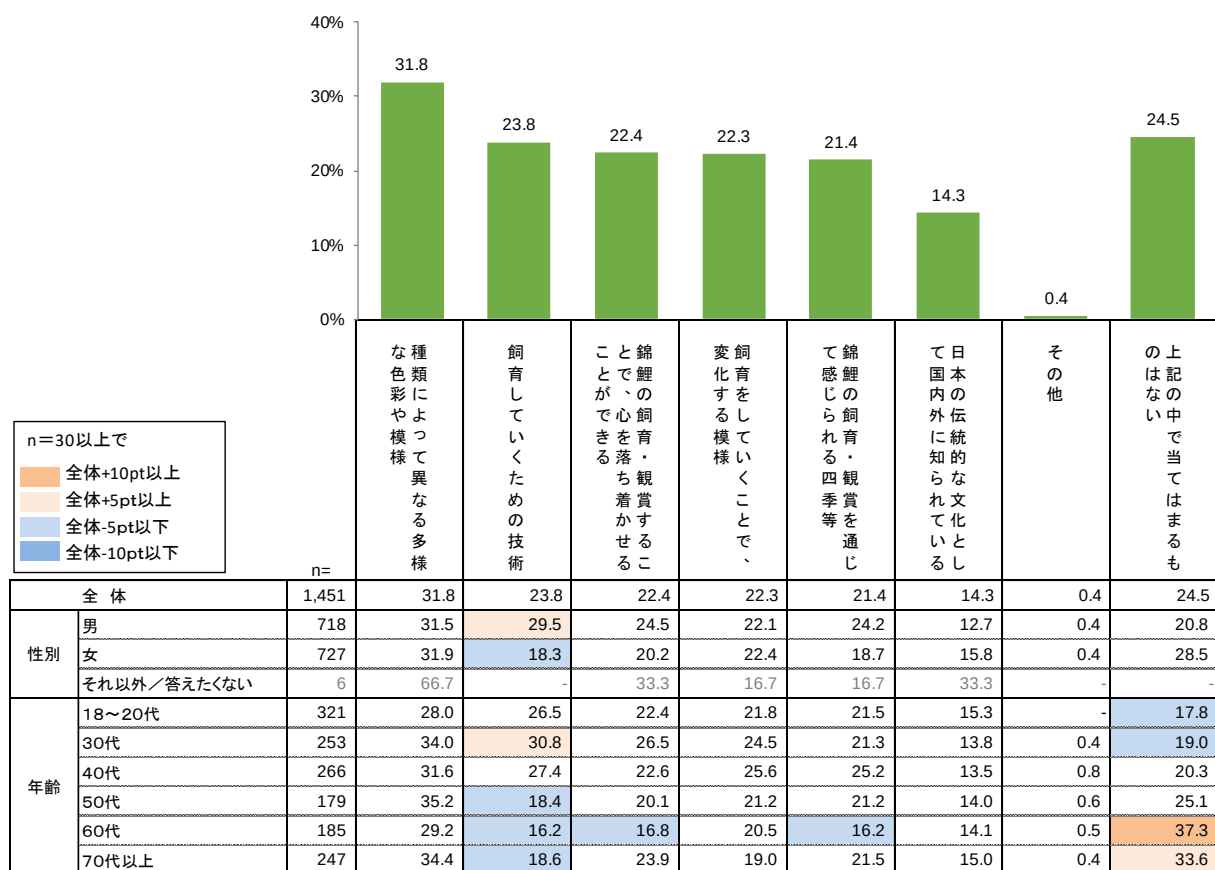
(その他の内容) ポンプにかなり電気代がかかる、元気だった鯉を数百匹全滅させてしまった経験あり

錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは、「種類によって異なる多様な色彩や模様」の31.8%で、次いで「飼育していくための技術」23.8%、「錦鯉の飼育・観賞することで、心を落ち着かせることができる」22.4%と「飼育をしていくことで、変化する模様」22.3%とがほぼ同率で続いている。

全体平均の回答比率と男女別、年齢別の回答比率とを比較すると、男女別で見た場合、男性で「飼育していくための技術」という回答比率が29.5%と高く、逆に女性で18.3%と低く、この項目のみ男女で興味関心や魅力に著しい差が見える。

次に年齢別で見ると、「飼育していくための技術」(23.8%)と回答した者のうち、50代以上の回答比率が低い一方、30代ではこの項目の回答比率が高い傾向が見られ、18～20代、40代でも全体平均をやや上回っている。



※n=30未満は参考値のため灰色

※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 G Q15 : 錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力

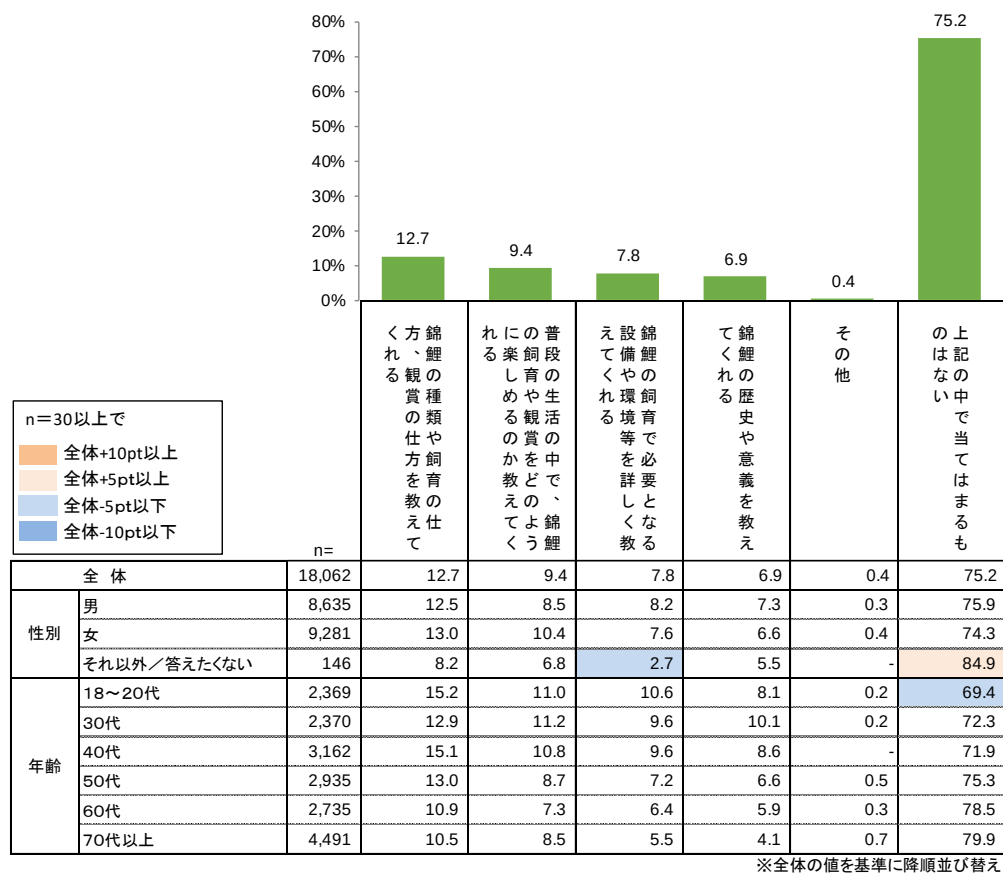
(その他の内容) 情操教育、美しい、生物学

■「今まで錦鯉の飼育をしたことはない」と回答した者への設問（GQ16～GQ20）

本設問では、錦鯉の飼育等を経験したことがないと回答した者が、錦鯉の飼育や観賞の体験をするなら、どのような内容や機会なら参加したいか、また、錦鯉に対してどの程度、興味関心を持っているのか等を把握するためのアンケートを実施した。

参加してみたい錦鯉の観賞の体験内容

全体平均で最も回答比率が高いのは、「上記の中で当てはまるものはない」の75.2%で、次いで「錦鯉の種類や飼育の仕方、観賞の仕方を教えてくれる」12.7%、「普段の生活の中で、錦鯉の飼育や観賞をどのように楽しめるのか教えてくれる」9.4%、「錦鯉の飼育で必要となる設備や環境等を詳しく教えてくれる」7.8%となった。

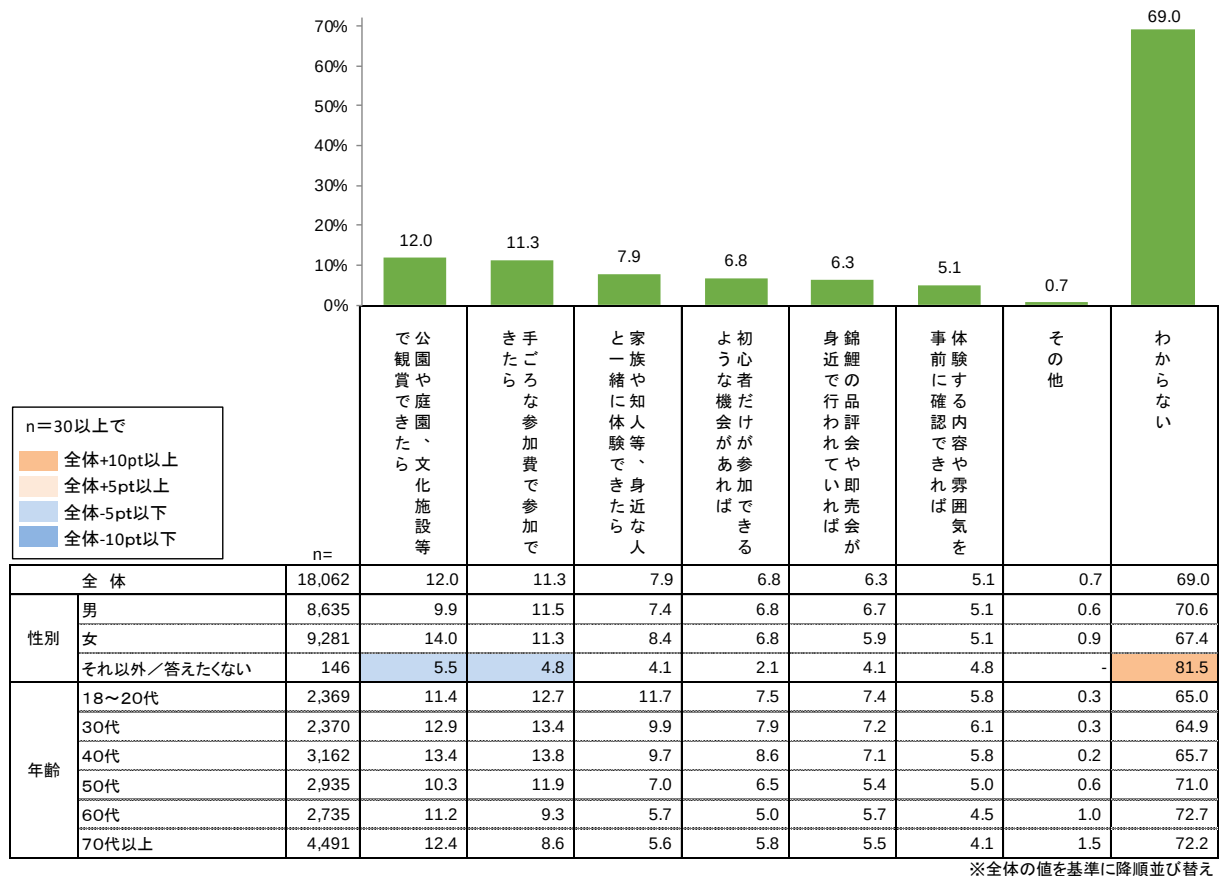


集計表 GQ16：参加してみたい錦鯉の観賞の体験内容

（その他の内容）錦鯉を飼育できる環境がない、無料、その日からすぐに始められるセットがあれば良いかも

参加しやすい錦鯉の観賞の体験条件

全体平均で最も回答比率が高いのは、「わからない」の69.0%で、次いで「公園や庭園、文化施設等で観賞できたら」12.0%、「手ごろな参加費で参加できたら」11.3%となる。



集計表 G Q17: 参加しやすい錦鯉の観賞の体験条件

(その他の内容) 参加費が無料、バリアフリー、旅行のオプション

錦鯉の観賞体験をしたことがない理由

全体平均で最も回答比率が高いのは、「興味がない」の 40.2%で、次いで「自分の趣味と合わない」32.4%、「そもそも知らなかった」17.5%となった。

全体平均の回答比率と年齢別の回答比率とを比較すると、年齢別では、「興味がない」(40.2%)と回答した者のうち、50代以上で「興味がない」という回答比率が高くなっている傾向が見られるほか、「自分の趣味と合わない」(32.4%)と回答した者の中では、18～20代の回答比率が高いことが分かる。



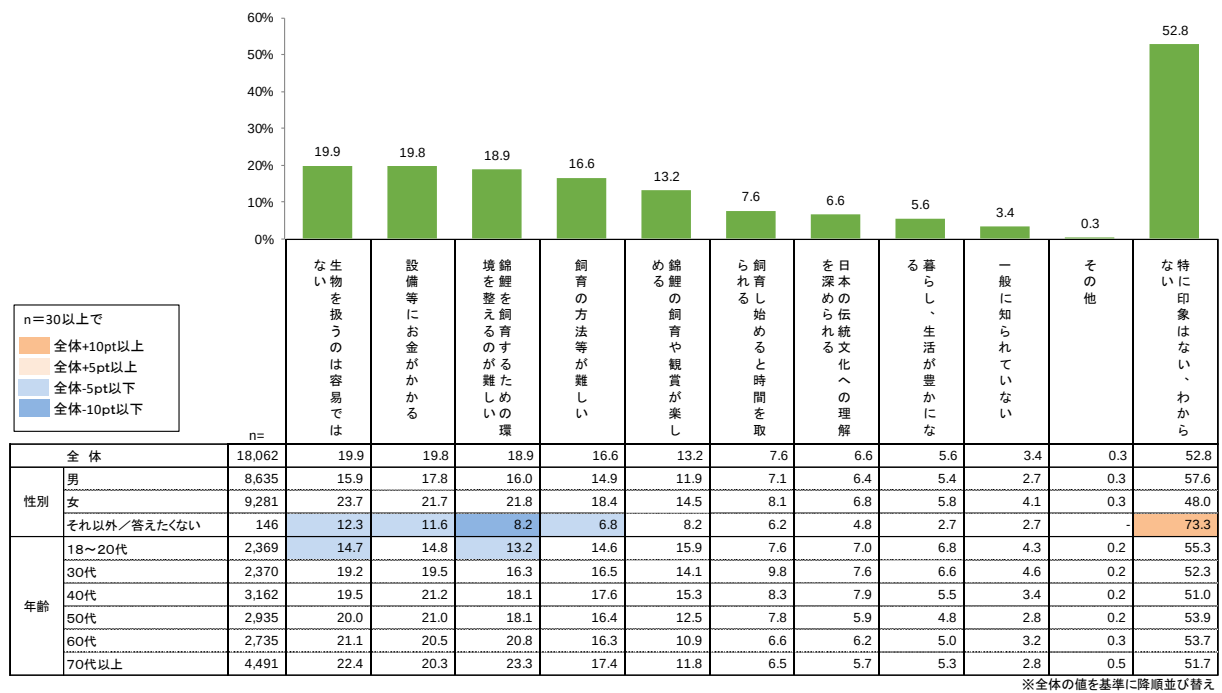
※全体の値を基準に降順並び替え

集計表 G Q18：錦鯉の観賞体験をしたことがない理由

(その他の内容) 飼育できる環境がない、費用が高額、鯉が苦手、子供のときから身近に飼育されていた

錦鯉の飼育や観賞に対する印象やイメージ

全体平均で最も回答比率が高いのは、「特に印象はない、わからない」の52.8%で、次いで「生物を扱うのは容易ではない」19.9%、「設備等にお金がかかる」19.8%、「錦鯉を飼育するための環境を整えるのが難しい」18.9%、「飼育の方法等が難しい」16.6%と続き、回答者の5割がそもそも印象やイメージを持っていないほか、飼育の難しさ等のイメージが先行している傾向が見られる。

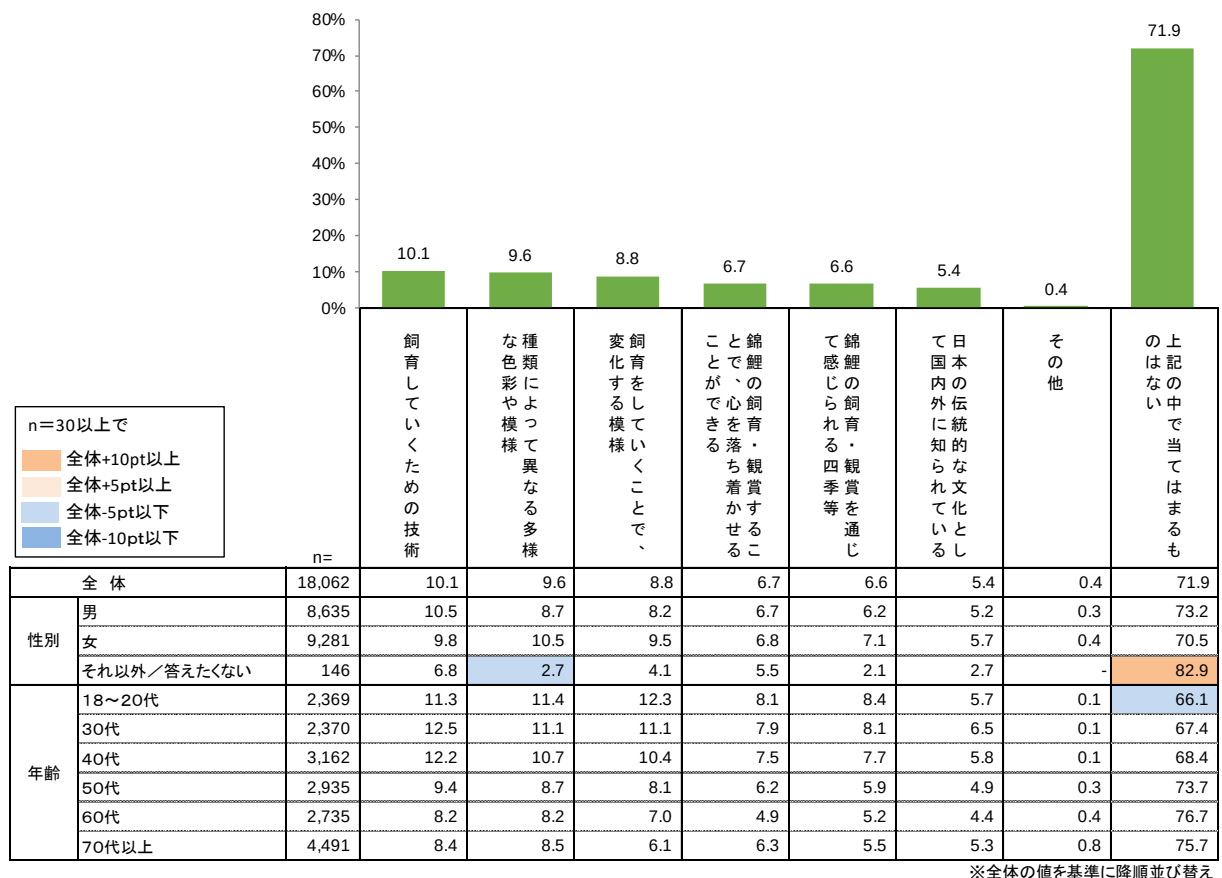


集計表 G Q 19 : 錦鯉の飼育や観賞に対する印象やイメージ

(その他の内容) お金持ちの趣味、旅行に行けない、錦鯉そのものの価格が高すぎて手が出ない、見てると癒される・結構かわいい

錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力

全体平均で最も回答比率が高いのは、「上記の中で当てはまるものはない」の 71.9%で、次いで「飼育していくための技術」10.1%、「種類によって異なる多様な色彩や模様」9.6%、「飼育をしていくことで、変化する模様」8.8%と続いている。



集計表 G Q20：錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力

（その他の内容）鑑賞はいいが飼育は無理、広い庭の家を持てたら、金魚ぐらいの大きさを気軽に飼えるのであれば、飼育する場所がない中での楽しみ方をレクチャーしてもらえれば

②調査結果に基づく分析と考察

本節では、錦鯉の振興施策の検討を主眼として、前掲の集計結果に加えてクロス集計等も行い、これらの結果について分析を行う。

錦鯉に関して「経験あり」、「参加体験あり」、「未経験」、それぞれの回答者にどのような特徴が見られるのかを分析するため、「居住地」、「職業」、「同居家族」、「世帯年収」、「子供の頃の習い事」等の設問や設問間とのクロス集計を行った。結果は以下のとおりである。

回答者の特性や傾向について

■居住地、職業、同居家族、世帯年収とのクロス集計結果

居住地、職業、同居家族、世帯年収のクロス集計からは、顕著な傾向や特徴等は見られなかった。

居住地・職業・同居家族×錦鯉の経験の有無

		FQ フィルタリング・パート			(%)
			「経験あり」層	「参加体験あり」層	「未経験」層
		n=			
全 体		20,000	2.4	7.3	90.3
居住地	北海道	852	1.6	6.6	91.8
	東北	1,385	2.8	7.7	89.5
	関東	7,422	2.3	7.1	90.6
	北陸	816	2.8	7.4	89.8
	東海(中部)	2,349	2.0	7.2	90.8
	近畿	3,247	1.9	7.4	90.7
	中国	1,140	4.0	7.8	88.2
	四国	584	3.1	8.6	88.4
	九州	1,987	3.1	7.5	89.4
	沖縄	218	1.4	2.8	95.9
職業	正規の職員・従業員	6,411	3.1	8.9	88.0
	非正規の職員・従業員	2,803	1.7	8.0	90.2
	自営業主・自由業	1,239	4.3	9.2	86.5
	家族従業者	135	3.7	11.9	84.4
	主婦・主夫	3,987	1.6	5.5	92.8
	学生	512	2.7	14.5	82.8
	リタイア、無職	4,141	2.3	4.7	93.0
同居家族	その他	772	1.2	4.8	94.0
	ひとり暮らし	4,145	2.8	7.0	90.3
	核家族	13,277	2.3	7.3	90.4
	三世代家族	1,179	3.9	8.9	87.2
上記以外で同居している人がいる		1,399	1.4	6.4	92.2

■スポーツや趣味、娯楽等の活動とのクロス集計結果

次に、スポーツや趣味、娯楽等（以下、趣味・娯楽等）の活動の内容や、これらの活動に費やす時間やお金に関する回答結果とのクロス集計結果と、そこから見ることで特徴や傾向を示す。

趣味・娯楽等として行っている活動内容とのクロス集計結果からは、これらの活動を「特に何もしていない」と回答した者の全体平均（17.4%）と比較すると、錦鯉の飼育等を経験したことがないと回答した者の回答比率が 18.8%に対し、錦鯉の飼育等の経験がある者では 4.7%、錦鯉の飼育又は観賞体験をしたことがある者では 3.3%と回答比率が低いことから、未経験者と比べて、経験者や体験者は趣味・娯楽等に積極的な関わりを持っている傾向にある。

趣味・娯楽等の活動内容の傾向として、「お花」、「お茶」、「書道」、「邦楽、民謡」、「おどり」といった日本の伝統的な文化に関して、経験者や参加体験者の回答比率が高い一方、未経験者の回答比率は全体平均よりやや低い傾向が見られる。

次に、1ヶ月に使える趣味・娯楽等にかかる費用や活動する時間帯、活動に費やす時間とのクロス集計結果を示す。まず、趣味・娯楽等にかかる費用については、「5,000円未満」（49.5%）と回答した者のうち、経験者（30.2%）、参加体験者（35.7%）と全体平均を下回っている。また、平均月2万円以上支出していると回答した全体平均（11.4%）と比較した場合、経験者（23.7%）と参加体験者（17.8%）で全体平均を上回る一方、未経験者（10.4%）は下回る結果となっており、経験者や参加体験者の方が、趣味・娯楽等に関する月額の費用をかけている傾向が見られる。

趣味・娯楽等の活動を行う時間帯を見ると、「平日夕方」（15.8%）を回答した者のうち、経験者（23.5%）、参加体験者（20.2%）の回答比率が全体平均を上回っている。

趣味・娯楽等に費やす月平均の時間を見ると、「1時間未満」（22.9%）と回答した者のうち、経験者（15.3%）と参加体験者（17.2%）の回答比率が低い傾向にあるほか、経験者・参加体験者共に月2時間以上の項目への回答比率が高いことがうかがえる。

錦鯉の経験の有無×趣味・娯楽等の活動状況

		共通設問1 趣味・余暇活動の参加状況							(%)
		信動 を画鑑 含む (レ ン タ ル、 配	邦 楽、 民謡	書 道	お 茶	お 花	お ど り (日 舞 な ど)	特 に 何 も し て い な い	
n=30以上で									
全体+10pt以上									
全体+5pt以上									
全体-5pt以下									
全体-10pt以下									
全 体	20,000	13.6	1.5	1.7	1.6	1.8	0.4	17.4	
「経験あり」層	487	12.5	4.1	4.9	5.1	5.5	2.3	4.7	
「参加体験あり」層	1,451	21.4	3.9	5.4	5.4	4.5	1.4	3.3	
「未経験」層	18,062	13.0	1.2	1.3	1.2	1.5	0.2	18.8	

※共通設問1は、分析で取り上げた選択肢のみ抜粋して掲載している。（以下同様）

錦鯉の経験の有無×趣味・娯楽等に1ヶ月に使える費用

(%)

		共通設問2 1ヶ月に使える趣味・余暇費用											
		5 0 0 0 円 未 満	15 0 0 0 円 未 満	11 5 0 0 円 未 満	21 0 0 0 円 未 満	22 5 0 0 円 未 満	32 0 0 0 円 未 満	33 5 0 0 円 未 満	43 0 0 0 円 未 満	44 5 0 0 円 未 満	54 0 0 0 円 未 満	5 0 0 円 未 満	合 計 2 0 0 円 未 満
n=30以上で													
全体+10pt以上													
全体+5pt以上													
全体-5pt以下													
全体-10pt以下													
n=													
全 体	16,527	49.5	22.9	10.2	5.9	3.1	3.0	1.4	0.6	0.4	0.6	2.3	11.4
「経験あり」層	464	30.2	21.6	15.7	8.8	6.5	5.0	2.6	1.9	0.6	0.4	6.7	23.7
「参加体験あり」層	1,403	35.7	25.9	12.4	8.2	5.6	4.3	2.2	0.9	0.9	1.1	2.7	17.8
「未経験」層	14,660	51.4	22.7	9.8	5.6	2.7	2.8	1.2	0.6	0.3	0.6	2.1	10.4

錦鯉の経験の有無×趣味・娯楽等を行う時間帯

(%)

		共通設問3 1ヶ月に使える趣味・余暇時間帯							
		平日 午前	平日 午後	平日 夕方	平日 夜間	休日 午前	休日 午後	休日 夕方	休日 夜間
n=30以上で									
全体+10pt以上									
全体+5pt以上									
全体-5pt以下									
全体-10pt以下									
n=									
全 体	16,527	30.6	30.1	15.8	18.8	34.9	43.7	21.2	15.5
「経験あり」層	464	33.6	33.0	23.5	19.8	34.9	38.4	21.1	11.4
「参加体験あり」層	1,403	26.4	26.4	20.2	21.5	37.6	41.6	23.4	15.6
「未経験」層	14,660	30.9	30.3	15.1	18.5	34.7	44.1	21.0	15.7

錦鯉の経験の有無×趣味・娯楽等に費やす時間

(%)

		共通設問4 趣味・余暇活動を行う時間										
		1 時 間 未 満	21 時 間 未 満	32 時 間 未 満	43 時 間 未 満	54 時 間 未 満	65 時 間 未 満	76 時 間 未 満	87 時 間 未 満	98 時 間 未 満	19 時 間 未 満	10 時 間 未 満
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全 体	16,527	22.9	23.5	13.7	7.0	4.5	4.1	1.7	1.9	0.9	1.3	18.5
「経験あり」層	464	15.3	22.2	14.9	9.5	5.6	4.7	2.8	3.0	1.1	1.3	19.6
「参加体験あり」層	1,403	17.2	23.7	16.6	8.4	5.7	5.6	2.1	2.1	1.2	1.4	16.0
「未経験」層	14,660	23.7	23.5	13.3	6.7	4.4	4.0	1.7	1.8	0.9	1.3	18.7

消費行動に関する意識や価値観に関するクロス集計結果

消費行動に関する意識や価値観の項目と錦鯉の経験・体験の有無とのクロス集計結果を示す。

「経験あり」と回答した者の場合、「リスクはできるだけ避けたい」と「上記であてはまるものはない」を除いた全ての意見で回答比率が全体平均を上回っており、「周りに合わせるより、自分の考えに基づいてものごとを判断したい」(22.6%)の回答比率が35.3%と、全体平均を大きく上回る回答比率となっている。これに対し「参加体験あり」と回答した者は、「上記であてはまるものはない」を除いた全項目で全体平均を上回り、「チャンスと感じたら逃したくない」(20.2%)の項目では、32.5%と回答比率を大きく上回ると共に、「経験あり」の数値(26.5%)も上回る回答比率となって

いる。

一方、「未経験」と回答した者の場合、「上記であてはまるものはない」以外の項目で回答比率が全体平均を下回っており、経験者、参加体験者、未経験者それぞれの消費行動に対する価値観に差異があることが分かる。

錦鯉の経験の有無×消費行動に対する価値観

		共通設問5 消費行動に対する価値観																(%)
		たい、自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する	自分の考えの和を尊重する
n=30以上で		全体+10pt以上	全体+5pt以上	全体-5pt以下	全体-10pt以下													
全体	20,000	25.6	22.6	20.2	41.9	24.9	10.6	19.6	2.4	5.4	13.6	3.9	26.8	3.1	3.1	22.0		
「経験あり」層	487	32.9	35.3	26.5	40.2	30.4	17.2	28.1	4.9	7.2	18.5	6.2	30.2	6.8	5.1	6.8		
「参加体験あり」層	1,451	32.9	30.9	32.5	43.3	32.5	18.4	28.3	5.5	9.7	23.0	9.2	34.3	7.2	5.9	5.1		
「未経験」層	18,062	24.8	21.6	19.0	41.9	24.1	9.8	18.7	2.1	5.0	12.8	3.5	26.1	2.7	2.8	23.7		

■普段接するメディアとのクロス集計結果

回答者が普段接するメディアと錦鯉の経験・体験の有無とのクロス集計結果を示す。

「経験あり」と回答した者の場合、「テレビ（NHK）」、「CATVや衛星放送」、「ラジオ」、「新聞」、「雑誌・タウン誌」で回答比率が全体平均を5%以上上回っており、テレビ（NHK）やCATV、ラジオや新聞雑誌等の紙媒体を中心としたメディアに普段から接触している傾向が見られる。

次に「参加体験あり」と回答した者の場合、「テレビ（民放）」を除く全てのメディアにおいて全体平均よりも回答比率が高い傾向が見られ、動画投稿サイトやSNS等にも普段から接触しており、幅広い媒体に接触していると推察される。

一方、「未経験」と回答した者の場合、ほとんどのメディアにおいて回答比率が低く、「上記のメディアはあまり見ていない」（11.7%）と「テレビ（民放）」（69.9%）のみ全体平均の回答比率を上回るという結果になった。

錦鯉の経験の有無×接触メディア

		共通設問6 接触メディア																(%)
		Bテレビ（民放の地上波）	波テレビ（NHKの地上波）	チャンネルCATVや衛星放送の地上波	ラジオ（インターネットを除く）	新聞（電子版含む）	雑誌・タウン誌（インターネットを除く）	雑誌・インターネット（インターネットを除く）	動画投稿サイト（YouTube）	動画投稿サイト（YouTube）	動画投稿サイト（YouTube）	動画投稿サイト（YouTube）	動画投稿サイト（YouTube）	動画投稿サイト（YouTube）	動画投稿サイト（YouTube）	動画投稿サイト（YouTube）	動画投稿サイト（YouTube）	動画投稿サイト（YouTube）
n=30以上で		全体+10pt以上	全体+5pt以上	全体-5pt以下	全体-10pt以下													
全体	20,000	69.5	41.7	10.2	14.3	28.5	7.5	46.1	33.7	28.5	20.4	6.0	6.8	6.4	11.9	10.8		
「経験あり」層	487	66.5	52.6	18.5	23.2	37.6	14.4	48.0	32.4	28.5	23.8	8.0	9.9	7.2	14.2	1.8		
「参加体験あり」層	1,451	66.0	46.2	14.5	19.8	31.4	14.9	49.1	43.2	38.0	26.1	9.6	12.2	11.0	18.6	2.7		
「未経験」層	18,062	69.9	41.1	9.6	13.6	28.0	6.8	45.8	32.9	27.7	19.8	5.6	6.3	6.0	11.3	11.7		

以上のクロス集計結果と、「①単純集計の結果について」で示した回答者の年齢・性別とのクロス集計の結果も踏まえ、錦鯉の「経験あり」「参加体験あり」「未経験」、それぞれの回答者の特徴や傾向は以下のとおりになる。

1) 錦鯉の飼育等の経験があると回答した者の傾向

男女別で見た場合、女性よりも男性の方が飼育等の経験をした者の総数がやや多いのが特徴の一つといえる。年齢別で見た場合、70代以上が最も多く、次いで18～20代、60代と続く。

次に経験者は、子供の頃の習い事として伝統的な文化に係る分野のうち、とりわけ囲碁や将棋を習っていたと回答している者が多い傾向にある。また、趣味・娯楽等の活動に積極性がありなおかつ伝統的な文化に係る趣味への嗜好性の高さがうかがえる。続いて、消費行動への意識については、周りとの協調や一体感を大事にしつつも自身の考え方で物事を判断し、身近な人や社会の役に立ちたいという価値観を持っている者が全体平均と比べると多い傾向が見える。また、普段のメディア接触についてはNHKやCATVやラジオ、新聞等のメディア媒体への接触率が高い傾向にある。

2) 錦鯉の飼育及び観賞体験に参加したことがあると回答した者の傾向

男女別で見た場合、女性の方が男性よりも参加体験者の総数が少し多いのが特徴の一つといえる。年齢別で見た場合、18～20代が最も多く、次いで40代、30代と続く。

また、子供の頃の習い事の経験があるとの回答比率が高い傾向にあり、錦鯉の飼育等の経験者と比べると日本の伝統的な文化のみならず、バレエやダンスについても高い回答比率となっている。また、趣味・娯楽等の活動に対して積極的な傾向にあり、伝統的な文化への関わりも高い傾向がうかがえる。

消費行動への意識については、錦鯉の飼育等を経験した者と近似した傾向があるが、「チャンスと感じたら逃したくない」という項目では、経験者よりも高い回答比率を示している。また、普段のメディア接触については、全体平均と比べて回答比率が大きく上回るものはないが、普段から幅広くメディアに接触している傾向にある。

3) 錦鯉の飼育等は未経験であると回答した者の傾向

男女別、年齢別等では顕著な特徴は見られなかった。

子供の頃の習い事の経験については、経験がないとの回答比率が高い傾向にあり、趣味・娯楽等の活動に対して、「特に何もしていない」という回答比率が全体平均を上回っており、積極的に趣味・娯楽等を行うことがない回答者が多い傾向にある。また、消費行動への意識については、「上記であてはまるものはない」という回答が全体平均を上回っており、特徴的な傾向は見られない。メディア接触については、民放のテレビが全体平均をわずかに上回る程度で、その他のメディア接触率については全体平均をやや下回っていることから、接触率が高い傾向にあるとは言い難い。

未経験者の傾向と特徴

次に、上記の属性分析を踏まえ、「経験あり」「参加体験あり」「未経験」、それぞれの回答者ごとに設けた設問の回答結果についてクロス集計を行い、回答者の特徴について分析を行う。

はじめに、錦鯉の飼育や観賞をしたことがないと回答している者の設問の分析を行う。上述の回答者属性に関する分析では、「未経験」と回答した者については際立った特徴や傾向は見いだせなかった。加えて、今後の振興施策を考える上で、「未経験」と回答した者が、なぜ錦鯉の観賞を経験しなかったのか、また、錦鯉の飼育や観賞をすることに対してどのような意識を持っているのか、どのような体験方法や周知の実施をすれば参加体験等に繋げていく可能性を見いだすことができるのか、その検討のために分析を行う必要がある。

■未経験層の体験機会への参加意向

未経験と回答した者のうち、錦鯉の観賞体験をしてみたいという意向を持つ回答者、体験意向がない回答者にはどのような特徴があるのか。趣味・娯楽等の活動内容、消費意識、メディア接触の設問とGQ16「参加してみたい錦鯉の観賞の体験内容」とのクロス集計を行い、回答者の特徴について分析を行う。

GQ16では、体験内容として設定した選択肢にはあてはまるものはないと回答率の75.2%が回答しており、残りの24.8%は、体験内容によっては錦鯉の観賞体験に参加してみたいという意向を持っていると推察される。

まず、錦鯉の観賞体験に参加してみたいとの意向を示した回答者について、クロス集計結果からその特徴を確認する。趣味・娯楽等の活動とのクロス集計結果を見ると、提示した体験内容を選択している者の場合、趣味・娯楽等の項目のほとんどで全体平均を少し上回る回答比率を示しており、趣味・娯楽等の活動に対して決して消極的ではないことが推察される。

消費行動に対する価値観とのクロス集計結果からは、提示した体験内容を選択している者は、消費行動に関する価値観のほとんどの項目で、全体平均を上回る回答比率を示しており、明確な意見や嗜好性があることがうかがえる。

普段からのメディア接触とのクロス集計結果を見ると、提示した体験内容を選択している者は、様々なメディアへの回答比率が全体平均を上回っており、「参加体験あり」と回答した者と近似した傾向、つまり、普段から幅広くメディアに接触している傾向が見て取れる。

次に、錦鯉の観賞体験について参加の意向がない者について、その特徴を確認する。GQ16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者のうち23.1%は、趣味・娯楽等の活動について「特に何もしていない」と回答しており、消費行動に関する設問でも、メディア接触についても、当てはまらない、特にしていないという選択肢を選んでおり、全体平均を上回る回答比率を示している。このように、錦鯉の観賞体験に参加する意向がない者の特徴として、趣味・娯楽活動やメディアへの接触到に必ずしも積極的とはいえず、消費についての意識・意見をあまり明確に持っていない傾向が確認できる。

参加してみたい錦鯉の観賞の体験内容×趣味・娯楽等の活動状況

	n=	共通設問1 趣味・余暇活動の参加状況 (%)						
		信 動 画 鑑 賞 (レ ン タ ル 、 配 信 を 含 む)	邦 楽 、 民 謡	書 道	お 茶	お 花	お どり (日 舞 な ど)	特 に 何 も し て い な い
全 体	18,062	13.0	1.2	1.3	1.2	1.5	0.2	18.8
錦鯉の種類や飼育の仕方、観賞の仕方を教えてくれる	2,294	21.4	2.8	2.3	2.0	2.2	0.1	4.9
錦鯉の歴史や意義を教えてくれる	1,244	21.3	3.0	2.7	2.5	2.7	0.2	4.1
錦鯉の飼育で必要となる設備や環境等を詳しく教えてくれる	1,416	22.2	3.2	2.7	2.8	2.3	0.4	5.2
普段の生活の中で、錦鯉の飼育や観賞をどのように楽しめるのか教えてくれる	1,706	19.2	2.4	2.8	2.3	3.2	0.3	5.7
その他	65	15.4	-	-	-	1.5	-	4.6
上記の中で当てはまるものはない	13,579	11.3	0.9	1.1	1.0	1.2	0.2	23.1

参加してみたい錦鯉の観賞の体験内容×消費行動に対する価値観

共通設問5 消費行動に対する価値観																		(%)			
たい	自分	自分の	周りの	たくさん	た	リスク	家族や	決	環	要	い	集	それ	た	流行	は	流	発	買	応	ない
い	分	の考	に合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い	分	考	合	な	ス	は	友	境	境	な	周	同	な	時	行	試	行	信	っ	自	上
い																					

参加してみたい錦鯉の観賞の体験内容×接触メディア

		共通設問6 接触メディア																			(%)
		テレビ (BS)	波・ BS)	テレビ (NHKの地上 波・BS)	CATVや衛星放送の チャンネル	ラジオ(イン ターネット 経由を除く)	新聞(電子版 含む)	雑誌・タウン誌(イン ターネット経由を除く)	ウェブサイト・ネットのウエ ブサイト・ニュースサイ トなど(アプリ・紐 結を含む)	動画投稿、サイ ト投稿、YouTube (動画投稿											

■参加したい体験機会別に見た参加条件

次に、錦鯉の飼育や観賞を経験したことがないと回答した者が体験したい内容、また、体験条件にはどのような特徴があるのかについて、G Q16「参加してみたい錦鯉の観賞の体験内容」の各種の参加体験とG Q17「参加しやすい錦鯉の観賞の体験条件」の回答結果をクロス集計し、未経験者の考える体験しやすい内容と条件の傾向について分析を行う。

まず、G Q16で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者の88.9%が、G Q17で「わからない」と回答している。一方、実際に希望する体験機会がある層では、「わからない」という回答は極めて少ない。

具体的な体験内容を選択した者の参加条件への回答比率は、全体平均より非常に高いことが分かる。その中でも、「手ごろな参加費で参加できたら」「公園や庭園、文化施設等で観賞できたら」の2項目はいずれの観賞体験の条件でも回答比率が高く、重視される傾向にあることが確認できる。

以上のように、錦鯉の飼育や観賞体験について未経験であると回答した者のうち、G Q16で具体的な体験内容を答えた者の多くは、G Q17の体験を行う際の条件についても具体的な条件を選択していることから、体験内容及び条件が明確な方が未経験者への参加体験を促しやすいものと推察できる。

参加してみたい錦鯉の観賞の体験内容×参加しやすい錦鯉の観賞の体験条件

		GQ17 参加しやすい錦鯉の観賞体験の条件 (%)							
		と家族や知人体験でき、身近な人	身近での行われたい即売会が	手ごろな参加費で参加できたら	公園や庭園、文化施設等で観賞できたら	事前確認内容や雰囲気	初心者だけが参加できる	その他	わからない
n=30以上で									
全体		全体+10pt以上	全体+5pt以上	全体-5pt以下	全体-10pt以下				
	n=								
錦鯉の種類や飼育の仕方、観賞の仕方を教えてくれる	18,062	7.9	6.3	11.3	12.0	5.1	6.8	0.7	69.0
錦鯉の歴史や意義を教えてくれる	2,294	36.5	26.6	45.5	38.1	18.2	21.8	0.1	8.4
錦鯉の飼育で必要となる設備や環境等を詳しく教えてくれる	1,244	31.8	34.8	48.5	42.4	24.9	23.7	0.3	6.5
普段の生活の中で、錦鯉の飼育や観賞をどのように楽しめるのか教えてくれる	1,416	28.2	32.6	53.2	48.0	27.5	26.9	0.2	5.8
その他	1,706	24.6	25.5	44.4	44.4	27.4	29.9	0.2	6.8
上記の中で当てはまるものはない	65	7.7	3.1	7.7	15.4	6.2	7.7	47.7	32.3
上記の中で当てはまるものはない	13,579	1.8	0.9	2.4	4.4	1.0	2.6	0.7	88.9

■これまで錦鯉を経験してこなかった理由と参加したい体験機会

錦鯉の飼育や観賞を経験したことがないと回答した者には、これまでに観賞体験をしてこなかった理由（G Q18）に関する問いを設けている。この設問を設けた理由として、未経験者のうちには、体験機会が身近になかった者、特定の事情で体験することができなかった者、そもそも全く興味なかった者等、回答者によって個々の事情や理由があることを想定したためである。

既に、回答者の中には興味関心がなかったわけではなく、体験できなかった事情や理由があると回答した者がいることがG Q18の回答結果から判明しているが、体験できなかった事情や理由があると回答した者はどのような体験機会があれば参加しやすいと考えているのか。G Q18の回答と参加してみたい体験内容を問う設問（G Q16）のクロス集計を行い、その傾向を分析する。

まず、錦鯉の観賞体験をこれまでしてこなかった理由として「興味がない」が回答比率として最も高く（40.2%）、次点で「自分の趣味と合わない」（32.4%）、「そもそも知らなかった」（17.5%）と続いている。

G Q 16 とのクロス集計の結果を見ると、G Q 16 で「上記の中で当てはまるものはない」と回答した者では、G Q 18 の「興味がない」（44.8%）、「自分の趣味と合わない」（40.3%）の回答比率が全体平均よりも高いことが分かる。

一方、G Q 16 で具体的な体験内容についての選択肢を回答した者の場合、「興味がない」、「自分の趣味と合わない」の回答比率が全体平均よりも著しく低く、体験できなかった事情の回答比率が高い。また、「そもそも知らなかった」と回答した者の中でも、体験内容に関する回答比率は全体平均よりも高いことから、機会があれば参加体験を希望する層が一定数いると推察できる。

また、G Q 18 の「気軽に体験できそうな場所や機会がなかった」、「体験できる場所や機会があることを知らなかった」の回答比率が全体平均を大きく上回っており、体験機会そのものが身近になかった場合や、体験機会があっても体験機会を希望する者に情報として届いていなかったことが回答結果から推察される。

参加してみたい錦鯉の観賞の体験内容×錦鯉の観賞体験をしたことがない理由

		GQ18 錦鯉を観賞体験したことがない理由										(%)
		そもそも知らなかった	興味がない	所気や機に体験できなかったような場	か参加した時間をとれな	あ体験できるところや機会が	分体験できない詳しい内容が	心他の趣味や娯楽の方に	自の趣味と合わない	その他		
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全 体		18,062	17.5	40.2	8.8	2.3	4.8	2.7	5.8	32.4	0.4	
錦鯉の種類や飼育の仕方、観賞の仕方を教えてくれる	2,294	31.3	27.4	29.4	5.1	15.3	8.5	10.5	7.1	0.2		
錦鯉の歴史や意義を教えてくれる	1,244	27.1	25.4	31.5	11.4	17.4	10.9	9.7	7.0	0.4		
錦鯉の飼育で必要となる設備や環境等を詳しく教えてくれる	1,416	22.5	23.9	34.3	12.2	23.5	14.5	13.0	9.6	0.4		
普段の生活の中で、錦鯉の飼育や観賞をどのように楽しめるのか教えてくれる	1,706	23.0	22.1	30.5	8.2	20.4	12.9	15.4	10.7	0.3		
その他	65	7.7	63.1	9.2	4.6	7.7	1.5	10.8	33.8	15.4		
上記の中で当てはまるものはない	13,579	14.8	44.8	2.8	0.6	1.3	0.8	4.2	40.3	0.4		

■「未経験」層と「参加体験あり」層の錦鯉へのイメージの違い

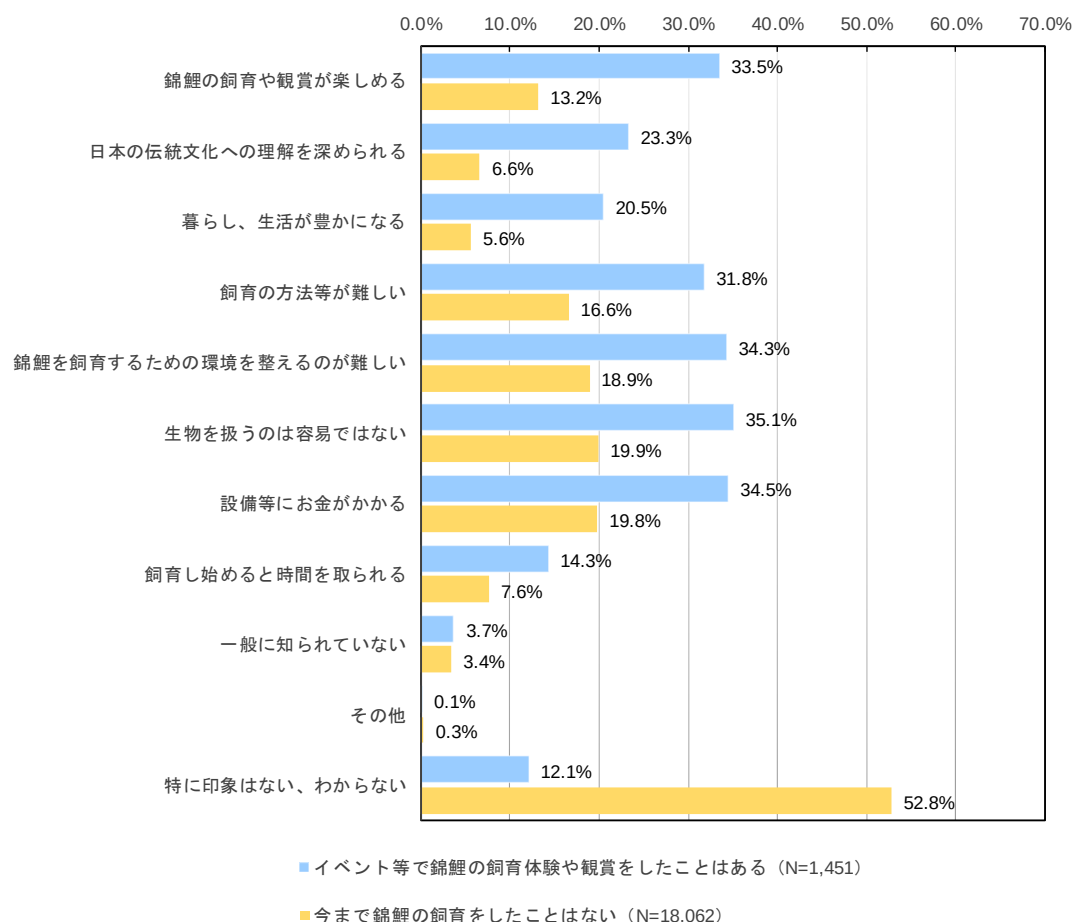
錦鯉の飼育をしたことがないと回答した者が持つ錦鯉の飼育や観賞に対して持っているイメージや印象について、G Q 19 の結果では、「特に印象はない、わからない」（52.8%）、「生物を扱うのは容易ではない」（19.9%）、「設備等にお金がかかる」（19.8%）、「錦鯉を飼育するための環境を整えるのが難しい」（18.9%）、「飼育の方法等が難しい」（16.6%）、「錦鯉の飼育や観賞が楽しめる」（13.2%）となっており、そもそも具体的なイメージを持っていない者が多く、飼育自体が難しいという印象が先行している。この要因は、回答者が錦鯉の飼育を経験したことがなく、具体的な内容や体験を経た上での印象を持っていないためと考えられる。

下のグラフは、錦鯉の飼育や観賞体験に参加したことがあると回答した者のイメージ（G Q 14）

と未経験者のイメージ（G Q19）の回答結果を比較したものである。

未経験者で最も回答比率が高かった「特に印象はない、わからない」の回答比率は参加体験を経ることで大幅に減少していると共に、プラスイメージもマイナスイメージも大きく増加している。このような比較から、飼育や観賞体験を行うことで、錦鯉の飼育に関する難しさについても、錦鯉の飼育の楽しさや日本の伝統的な文化であることも明確にイメージできるようになっていることが分かる。

未経験者と参加体験者の錦鯉に対する印象やイメージの違い



■「未経験」層と「参加体験あり」層、「経験あり」層の錦鯉の魅力についての評価の違い

未経験者が錦鯉に対する印象やイメージを具体的に描けないように、錦鯉の魅力に対する設問（G Q 8、G Q15、G Q20）にも同様の傾向が見られる。

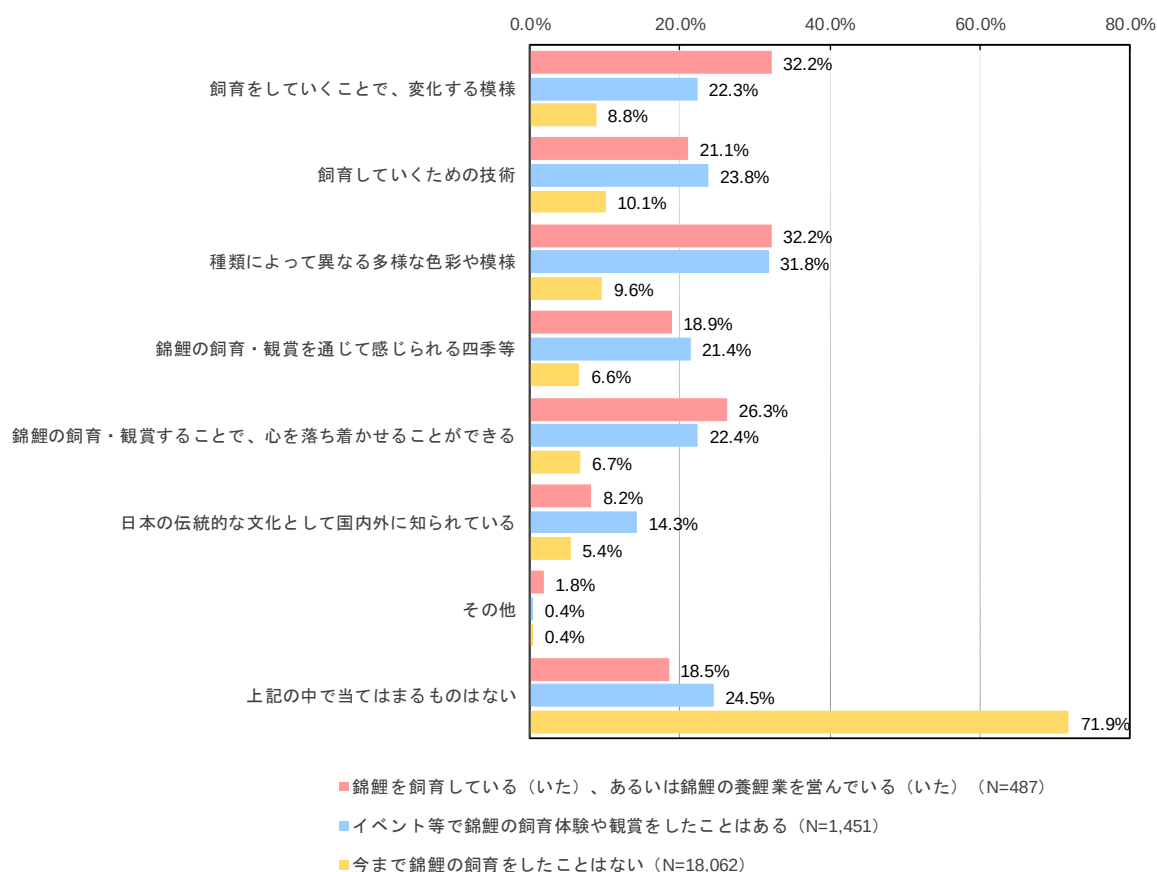
下のグラフを見ても分かるように、錦鯉の飼育を経験したことがないと回答した者の7割が、「上記の中で当てはまるものはない」（71.9％）と回答し、経験者と参加体験者の場合の回答比率と比較しても大きな差があることが分かる。

このことは、ほかの魅力についてもいえ、参加体験者と未経験者を比較すると全ての魅力に対して回答比率が大きく伸びていることが分かる。また、参加体験者と経験者との魅力等についての回答比率を比較すると、「飼育をしていくことで、変化する模様」や「錦鯉の飼育・観賞することで、心を落ち着かせることができる」といった、実際に飼育し観賞を続けていくことで理解できると思

われる魅力に対する回答比率が高くなっていることが分かる。

以上のように回答比率に大きな差が見られることから、イメージや印象と同じく実際に体験することの重要性がうかがえる。

各回答者における錦鯉に対する興味関心や魅力の違い



上記のクロス集計の結果から、錦鯉の飼育をしたことがないと回答した者の特徴や傾向をまとめると、以下のとおりである。

1）錦鯉に興味関心がある者の属性に関する傾向と特徴

錦鯉の飼育をしたことがないと回答した者のうち、参加体験の意向を示さない者が 75.2%いる一方、24.8%が体験内容に関する選択肢をいずれか選択しており、未経験者の中でも機会があれば参加したいという意向を持つ者がいる。

これら参加意向を示す者は、参加意向を示していない回答者と比べた場合、趣味・娯楽等の活動に対して消極的ではない者であり、消費行動への明確な意見を有し、普段から幅広いメディアに触れている傾向にある。

2）未経験者が考える参加しやすい体験の条件と内容についての傾向と特徴

G Q 16、G Q 17 のクロス集計の結果から、未経験者のうち、参加体験をしたいとの意向を示した者の約 40～50%が、行きやすい場所と手頃な参加費用の 2 点を参加体験の条件としてとり

わけ重視している傾向が見えてくる。

また、G Q 16 と G Q 18 とのクロス集計の結果からは、体験できなかった事情・理由として「そもそも知らなかった」、「気軽に体験できる場所がなかった」「体験できる場所や機会があることを知らなかった」と回答している割合が多く、これらの事情や理由を回答した者は、観賞体験へ具体的な内容を回答していることから、参加意向を持つ者の多くが、錦鯉自体を知らなかったり、錦鯉の観賞体験等ができる機会を得ることができなかつたりしていたことが分かる。

3) 錦鯉の飼育に対する印象や魅力に関する傾向と特徴

未経験者の場合、錦鯉に対する印象や魅力について、未経験であるが故に、具体的なイメージや魅力は分からないという当然の結果が導かれた。その点を踏まえて、経験者や参加体験者との印象や魅力への回答の差を見ると、参加体験や経験を重ねることで、具体的な印象やイメージ、魅力を描くことができるようになること、また、実際に飼育を行った者は、変化していく錦鯉の模様や飼育や観賞を行うことで心を落ち着かせることができるといった魅力の回答比率が高くなっていることが分かる。

参加体験ありと回答した者の傾向と特徴

次に、参加体験ありと回答した者の回答傾向を分析する。錦鯉に触れ合ったり、観賞したりしたことがあると回答した者は、何らかのきっかけがあって観賞等の体験を行う機会を得ており、しかし、自ら飼育を行うまでには至ってはいない者と捉えることができる。ではどのような状況で体験機会を得たのか、また、飼育を行うまでに至らない事情や理由等があるのかをクロス集計を用いてその傾向と特徴を分析する。

■参加体験者の体験のきっかけと機会

体験のきっかけ（GQ9）を問う設問の結果では、「学校や職場で飼育されているものや、公園や庭園、文化施設等で行われているイベントで見た」（45.0%）と最も高く、次いでテレビや映画などのメディアで知ったとの回答が21.6%、親族等が飼育していたとの回答が20.3%と続き、参加体験者の多くは自身の身近な場所であったり公園等で飼育されている錦鯉を観賞していたりすることが分かる。また、体験の場（GQ10）については公園や庭園等での観賞（54.9%）、次いで学校や職場での観賞（25.3%）と続いている。

体験したきっかけと体験機会の関係性の特徴や傾向を明らかにするため、GQ9とGQ10のクロス集計の結果が下の表である。体験したきっかけについて、最も回答比率が高かった、学校や職場、公園や庭園等で観賞するきっかけを得た（45.0%）と回答した者のうち、「公園や庭園、文化施設等でのイベント」（60.4%）、「学校や職場で飼育されていた」（50.4%）の2項目で回答比率が高い。そのほか、「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた」（20.3%）と回答した者では、「自宅」（57.7%）のほかに「錦鯉を扱う団体や業者が主催する品評会や即売会」（32.0%）の回答比率も高いことが分かる。また、趣味や教養として関心を持った者や、テレビ等のメディアで知った者、友人・知人に誘われた者の場合、品評会や即売会で観賞する機会を得ており、錦鯉を観賞する機会の一つとして品評会等が役割を果たしていることが分かる。

このような結果から、学校や職場、公園等で飼育されていた錦鯉を観賞等の機会を得た回答者が比率として高い傾向にある。また、趣味や教養としてあるいはテレビ等で知ったり、友人・知人に誘われたりして興味を持った者については、品評会や即売会が錦鯉を観賞する機会や場としての役割を果たしているものと推察される。

錦鯉に触れ合ったり観賞したりした場×錦鯉に触れ合ったり観賞したりしたきっかけ

		GQ9錦鯉に触れ合ったり観賞したりしたきっかけ										(%)
		ど親や 家族兄 が飼育 した 妹・ 祖母 など	いと親 家族兄 が養 鯉場・ 祖父 父母 でな	た飼友 ・友人 誘われ た 人など が錦 鯉を	て園い 、る文 化の場 所等 で見た	学、校 や職 場、 公園 等 で飼 育さ れて	知画テ レ、ビ エ、映 画、 雑誌 等、 で漫	等で興 味関 心あ りし て錦 鯉に	興味関 心ある 仕事 や職 業に	錦鯉に 関する 趣味・ 習い事 の別 関係分	野自 分の 趣味・ 習い事 の別 関係分	そ 他
n=30以上で												
全体+10pt以上												
全体+5pt以上												
全体-5pt以下												
全体-10pt以下												
n=												
全 体	1,451	20.3	9.5	15.9	45.0	21.6	6.3	3.5	5.9	2.1		
錦鯉を扱う団体や業者が主催する品評会や即売会	250	32.0	14.4	25.2	37.6	23.6	14.4	8.4	3.6	2.0		
学校や職場で飼育されていた	367	18.5	21.5	22.1	50.4	22.6	8.2	4.6	3.5	1.4		
公園や庭園、文化施設等でのイベント	796	13.6	6.4	16.5	60.4	27.0	5.4	2.4	3.6	1.6		
自宅	196	57.7	14.3	20.4	18.9	14.8	8.7	7.1	7.1	0.5		
自分が行っている別の分野の趣味・習い事の中で体験	113	20.4	12.4	17.7	22.1	14.2	15.9	8.8	33.6	1.8		
その他	54	37.0	-	20.4	29.6	18.5	-	1.9	-	27.8		

■錦鯉を飼育しやすい状況

錦鯉を飼育しやすい状況（G Q11）に関する設問の結果では、「わからない」（36.5％）が最も多く、次いで「通いやすい場所に相談に乗ってもらえる養鯉場等があったら」（24.2％）、「知人、家族と一緒に飼育できたら」（22.8％）、「家族や知人等、身近な人から飼育の仕方等を教えてもらえたら」（19.7％）、「飼育の仕方や設備の整え方等をわかりやすく示している雑誌や専門誌があったら」（19.6％）となっており、身近な養鯉場や親族等に相談に乗ってもらったり、飼育の仕方を教えてもらったりしたいという傾向が見える。一方、支払い可能な月額費用（G Q12）を見ると、「1万円未満」（67.7％）、「1万円以上～5万円未満」（18.0％）と続き、回答者の約86％は5万円未満の費用であれば錦鯉の飼育を始めやすいと回答している。

G Q11 と G Q12 のクロス集計の結果を見ると、「1万円未満」（67.7％）を選択した者の中では、「わからない」（91.5％）の回答比率が全体平均を大きく上回る一方、その他の選択肢は全体平均を下回っている。一方、「1万円以上～5万円未満」（18.0％）と回答した者の中では、「わからない」を除く全ての項目で全体平均を上回り、「知人、家族と一緒に飼育できたら」（26.6％）、「飼育の仕方や設備の整え方等をわかりやすく示している雑誌や専門誌があったら」（26.4％）、「通いやすい場所に相談に乗ってもらえる養鯉場等があったら」（23.4％）の3項目が全体平均を上回っている。

錦鯉を飼育しやすい状況×錦鯉の飼育に支払える月額費用

		(%)						
		GQ12錦鯉の飼育に支払える月額費用						
		1万円未満	5万円未満	15万円未満	51万円未満	150万円未満	510万円以上	100万円以上
n=30以上で								
全体		全体+10pt以上	全体+5pt以上	全体-5pt以下	全体-10pt以下			
全体		67.7	18.0	8.5	4.0	1.2	0.7	
家族や知人等、身近な人から飼育の仕方等を教えてもらえたら	286	63.3	21.3	10.1	2.8	1.0	1.4	
知人、家族と一緒に飼育できたら	331	50.2	26.6	14.5	6.3	1.8	0.6	
通いやすい場所に相談に乗ってもらえる養鯉場等があったら	351	51.6	23.4	12.5	10.5	2.0	-	
飼育の仕方や設備の整え方等をわかりやすく示している雑誌や専門誌があったら	284	51.1	26.4	13.4	6.0	2.8	0.4	
その他	23	91.3	4.3	-	4.3	-	-	
わからない	529	91.5	5.7	1.9	0.2	0.2	0.6	

※n=30未満は参考値のため灰色

次に、錦鯉をこれまで飼育していない理由（G Q13）に関する設問の結果では、「興味がなかった」（40.7％）が最も多く、次いで「錦鯉を飼育できる場所や設備がない」（26.3％）、「生物の扱いが難しいと思う」（23.5％）と続く。G Q11 の飼育しやすい状況とのクロス集計を行い、参加体験者が飼育しやすい状況について更なる分析を行う。

飼育しやすい状況について「わからない」（36.5％）と回答した者のうち、飼育しなかった理由について「自分の趣味と合わない」（66.9％）、「興味がなかった」（57.7％）の回答比率が高く、体験をしても興味関心が湧かなかったことが分かる。一方、飼育をしやすい状況として、「通いやすい場所に相談に乗ってもらえる養鯉場等があったら」（24.2％）と回答した者が錦鯉の飼育を行っていない理由として「一緒にやってくれる人がいない」（49.6％）が最も多く、次いで「錦鯉の飼育方法等の相談をできる人が身近にいなかった」（48.9％）、「通いやすい場所に、錦鯉の飼育方法等の相談に乗

ってくれる場所がなかった」(45.5%)と続く。他の項目では、生物の扱いが難しい、設備がないという回答も全体平均を上回っており、錦鯉の飼育を行う際のハードルの1つとなっているが、一緒にやる人がいない、相談できる人や場所がない、と言った理由や事情の方が回答比率が高い傾向が見られる。

錦鯉を飼育していない理由×錦鯉を飼育しやすい状況

n=30以上で

全体+10pt以上

全体+5pt以上

全体-5pt以下

全体-10pt以下

n=

		GQ11錦鯉を飼育しやすい状況							(%)
		てから飼育の仕方等を教える人	家族や知人等、身近な人	で知人、家族と一緒に飼育	が乗あってもよい場所、鯉相談等	通いや雑わりや専門誌の指示	あて方飼育の仕方や設備の整え	その他	わからない
全 体	1,451	19.7	22.8	24.2	19.6	1.6	36.5		
興味がなかった	591	16.2	14.6	13.0	11.3	1.7	57.7		
通いやすい場所に、錦鯉の飼育方法等の相談に乗ってくれる場所がなかった	246	33.3	41.9	45.5	30.9	-	3.7		
始めるための費用が確保できなかった	255	25.1	31.8	40.0	29.4	2.0	16.9		
錦鯉を飼育するための十分な時間が取れそうになかった	190	29.5	34.2	41.6	32.1	1.1	18.4		
一緒にやってくれる人がいない	115	33.0	47.0	49.6	33.9	-	10.4		
錦鯉の飼育方法等の相談をできる人が身近にいなかった	131	36.6	38.2	48.9	45.0	-	9.2		
生物の扱いが難しいと思う	341	22.6	24.6	29.0	26.7	3.2	36.4		
錦鯉を飼育できる場所や設備がない	381	21.8	21.0	28.6	28.1	3.4	36.7		
他の趣味や娯楽の方に関心が向いている	156	24.4	25.0	29.5	25.6	3.8	38.5		
自分の趣味と合わない	133	11.3	12.8	8.3	9.0	4.5	66.9		
その他	15	13.3	13.3	-	-	20.0	53.3		

※n=30未満は参考値のため灰色

※n=30未満は参考値のため灰色

クロス集計の結果を見る限り、回答者にとって錦鯉を飼育しやすい状況とは、錦鯉を飼育できなかった事情や理由と密接な関係があり、一緒に飼育をしてくれる人の存在や、飼育について相談できる相手（親族あるいは養鯉場などの専門家）がいない等の事情があり、参加体験者にとって飼育を始める際のハードルになりやすくなっている傾向が見える。

上記のクロス集計の結果から、錦鯉の飼育や観賞体験をしたことがあると回答した者の特徴や傾向をまとめると、以下のとおりである。

1) 参加体験者の体験機会ときっかけの傾向と特徴

GQ9とGQ10のクロス集計結果の分析からは、公園や庭園、文化施設等でのイベントや、学校や職場において、錦鯉を観賞する機会を得た者が多い傾向にある。また、親族等が錦鯉を飼育している場合は自宅において錦鯉に接する機会があるほか、品評会や即売会において観賞等の体験機会を得ている。加えて、テレビ等のメディアで知った者や友人・知人から誘われたと回答している者も、品評会・即売会を錦鯉の観賞を行った場として回答しており、公園や庭園、学校や職場のみならず、錦鯉の品評会や即売会も、錦鯉を鑑賞する機会として、重要な役割を果たしているものと推察される。

2) 参加体験者が考える習いやすい状況や内容についての傾向と特徴

参加体験者が錦鯉を飼育しやすい状況や内容については、月に支払える費用と習いやすい状況とのクロス集計結果からは、月額費用として10,000円以上を支払うと回答した者ほど、飼育の具体的な状況について回答している傾向にあり、錦鯉を飼育してみたいと考えている者と捉えることができる。

一方、飼育していない理由と飼育しやすい状況とのクロス集計結果からは、錦鯉の鑑賞等の体験をしても錦鯉の飼育等に興味を持てなかった者が数多くいる一方で、興味関心はあっても一緒に飼育できる人がいない、錦鯉の飼育について相談できる人や場が身近にない、といった理由や事情があって飼育には至っていないことが分かる。生物を飼育することの難しさや、飼育を行うための設備についても飼育に至らない事情や理由として回答されているが、クロス集計の回答比率を見る限り、一緒に飼育できる人がいることや、身近に飼育の相談がしやすい人や場があることが錦鯉の飼育を始めやすい状況であると考えている者が多い傾向が見られる。

経験ありと回答した者の傾向と特徴

経験ありと回答した者の回答傾向について分析を行う。錦鯉の飼育を経験したことがある者がどのような経緯や場所で錦鯉の飼育を行い始め、どの程度の者が継続してきたのかを分析することで、参加体験者と未経験者との違いを明らかにする。

■始めたきっかけと継続性及び継続理由

錦鯉を飼育し始めたきっかけ（GQ1）の結果からは、「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた」（60.8%）が最も回答比率が高く、次いで、「学校や職場で飼育されているのを見たり、公園や庭園、養鯉場や錦鯉品評会、文化施設等やイベントで観賞をしたりした」（13.6%）、「友人、知人などが錦鯉を飼育していて、勧められた・誘われた」（12.5%）、「趣味や教養として、錦鯉に興味関心があった」（11.9%）などとなっており、親族等からの影響が大きいことが分かる。

次に、飼育をし始めたきっかけ（GQ1）と現在の継続状況（GQ3）についてクロス集計を行い、始めたきっかけと継続率の関係を分析する。継続率の全体平均（34.1%）に対し、「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が養鯉場を営んでいた」（74.5%）が全体平均の数値を大きく上回り、「友人、知人などが錦鯉を飼育していて、勧められた・誘われた」（68.9%）と続く一方、始めたきっかけとして最も回答比率が高かった「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた」（27.7%）が全体平均を下回る結果となり、養鯉場を営んでいた者が親族等にいた者や、友人・知人から勧められた者、イベントやメディアを通じて関心を持ったことをきっかけとして飼育をし始めた者の継続率が高い反面、親族等が飼育していたことをきっかけとして始めた者の継続率が低い傾向にあり、後者は何らかの事情や理由で継続できなかったと推察される。

錦鯉を飼育し始めたきっかけ×現在の継続状況

		(%)	
		GQ3 現在の継続状況	
		続 け て い る	続 け て い な い
n=30以上で			
全体+10pt以上			
全体+5pt以上			
全体-5pt以下			
全体-10pt以下			
	n=		
全 体	487	34.1	65.9
親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた	296	27.7	72.3
親や兄弟姉妹・祖父母など家族が養鯉場を営んでいた	55	74.5	25.5
友人、知人などが錦鯉を飼育していて、勧められた・誘われた	61	68.9	31.1
学校や職場で飼育されているのを見たり、公園や庭園、養鯉場や錦鯉品評会、文化施設等やイベントで観賞をしたりした	66	53.0	47.0
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	38	52.6	47.4
趣味や教養として、錦鯉に興味関心があった	58	37.9	62.1
錦鯉に係る仕事や職業に興味関心があった	20	70.0	30.0
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	22	36.4	63.6
その他	16	12.5	87.5

※n=30未満は参考値のため灰色

次に、継続理由に関する設問（GQ3補問1）では、「日本の文化だから」（33.1％）の回答比率が最も高く、次いで「養鯉場を営みたい（営んでいる）」（31.9％）、「一緒に楽しむ仲間がいる」（27.7％）、「錦鯉に愛着が湧いた（飼育が純粋に楽しい）」（27.1％）などと続いている。

始めたきっかけ（GQ1）とのクロス集計を行い、継続する理由ときっかけの関係性について分析を行うと、まず継続理由として最も回答比率が高かった「日本の文化だから」（33.1％）と回答した者の中では、「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が養鯉場を営んでいた」（58.5％）が最も回答比率が高く、次いで「友人、知人などが錦鯉を飼育していて、勧められた・誘われた」（54.8％）、「学校や職場で飼育されているのを見たり、公園や庭園、養鯉場や錦鯉品評会、文化施設等やイベントで観賞をしたりした」（45.7％）の回答比率が高い。「一緒に楽しむ仲間がいる」（27.7％）でも同じ項目で回答比率が高いことが分かる。

また、「養鯉場を営みたい（営んでいる）」（31.9％）と回答した者の中では、「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた」（50.0％）、次いで「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が養鯉場を営んでいた」（46.3％）の回答比率が高く、親族が錦鯉を飼育していたと回答した者は継続率こそ高くはなかったものの、継続している者の中では、養鯉場を営んでいたり、もしくは今後開業を考えていたりする者が少なからずいることが分かる。

一方、友人や知人から誘われたり、文化施設やイベント等で観賞したりしたことをきっかけとして錦鯉の飼育を始めた者は、養鯉場を営みたいもしくは営んでいると考えている者は少ない傾向にあるが、その他の飼育を続けている理由については、全体平均を上回る回答比率となっており、錦鯉に愛着が湧いた、暮らしや生活の一部である、という認識を持っている傾向にある。

錦鯉を飼育し始めたきっかけ×錦鯉の飼育を続けている理由

n=30以上で

全体+10pt以上

全体+5pt以上

全体-5pt以下

全体-10pt以下

n=

		GQ3補問1 錦鯉の飼育を続けている理由										(%)
		で養 鯉場を 営みたい (営ん でい る)	日 本 の 文 化 だ か ら	一 緒 に 楽 し む 仲 間 が い る	た 奥 深 い の 文 化 を も つ と 知 り、	錦 鯉 の 飼 育 に 選 別 な ど、	育錦 鯉に 純粋 に愛 が着 が湧 いた (飼 育が 楽し い)	たる な暮 らし が(生 活の 一部 と な る)	そ の 他	特 に 理 由 は な い	の 上 は 記 事 中 で あ る も の	
全 体	166	31.9	33.1	27.7	18.7	27.1	22.3	0.6	4.2	1.8		
親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた	82	50.0	29.3	25.6	24.4	30.5	28.0	-	4.9	2.4		
親や兄弟姉妹・祖父母など家族が養鯉場を営んでいた	41	46.3	58.5	41.5	24.4	31.7	22.0	-	2.4	-		
友人、知人などが錦鯉を飼育していて、勧められた・誘われた	42	31.0	54.8	50.0	33.3	35.7	28.6	-	-	-		
学校や職場で飼育されているのを見たり、公園や庭園、養鯉場や錦鯉品評会、文化施設等やイベントで観賞をしたりした	35	28.6	45.7	40.0	37.1	45.7	31.4	2.9	2.9	2.9		
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	20	45.0	55.0	55.0	40.0	50.0	40.0	-	-	-		
趣味や教養として、錦鯉に興味関心があった	22	31.8	40.9	45.5	36.4	72.7	59.1	-	4.5	-		
錦鯉に係る仕事や職業に興味関心があった	14	64.3	71.4	42.9	50.0	50.0	64.3	-	-	-		
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	8	62.5	62.5	62.5	50.0	50.0	75.0	-	-	-		
その他	2	-	-	-	-	100.0	100.0	-	-	-		

※n=30未満は参考値のため灰色

錦鯉の飼育から離れたきっかけや理由（GQ3補問2）を見ると、「錦鯉の飼育ができる環境を維持できなくなった」（58.6%）と最も回答比率が高く、次いで「興味を失った」（14.0%）、「時間がなくなった」（13.7%）と続いている。

始めたきっかけ（GQ1）と離れたきっかけをクロス集計しその関係について分析を行う。全体平均との差が大きい回答比率に着目すると、「錦鯉の飼育ができる環境を維持できなくなった」（58.6%）と回答した者の中で、「学校や職場で飼育されているものを見たり、公園や庭園、養鯉場や錦鯉品評会、文化施設等やイベントで観賞をしたりした」（45.2%）の回答比率が低く、参考値ではあるが、「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が養鯉場を営んでいた」、「自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた」と回答した者の場合も、この回答比率は低くなっていることが分かる。

また、「興味を失った」（14.0%）と回答した者の中では、「学校や職場で飼育されているものを見たり、公園や庭園、養鯉場や錦鯉品評会、文化施設等やイベントで観賞をしたりした」と回答した者の回答比率が25.8%と高いほか、「健康面、体調面で続けることが難しくなった」（3.7%）と回答した者の中でも、「学校や職場で飼育されているものを見たり、公園や庭園、養鯉場や錦鯉品評会、文化施設等やイベントで観賞をしたりした」（9.7%）の回答比率が高い。「学校や職場で飼育されているものを見たり、公園や庭園、養鯉場や錦鯉品評会、文化施設等やイベントで観賞をしたりした」と回答した者が錦鯉の飼育を続けなくなった理由としては、興味を失ったことが大きいことが分かる。その他の回答者では、親族等が養鯉場を営んでいたと回答した者を除き、飼育環境の維持が困難となり、飼育が継続できなくなっている傾向が表れている。

錦鯉を飼育し始めたきっかけ×錦鯉の飼育から離れたきっかけや理由

		GQ3補問2 錦鯉の飼育から離れたきっかけ								
		(%)								
		時間 が な く な っ た	を 錦 鯉 の 飼 育 が で き な く な っ た 環 境	所 飼 育 が な く な っ た 相 談 を で き る 場	興 味 を 失 っ た	く 経 済 的 に 続 け る の が 難 し	こ 健 と 康 面 が 難 し 体 調 面 で 続 け る	れ 家 族 の 仲 間 と 話 す の 手 が 借 り れ ら る	養 鯉 場 を 閉 鎖 し た	そ の 他
n=30以上で										
全体+10pt以上										
全体+5pt以上										
全体-5pt以下										
全体-10pt以下										
全 体	n=	13.7	58.6	5.9	14.0	9.7	3.7	10.6	5.3	10.0
親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた	214	11.7	63.6	6.1	12.6	9.3	2.8	13.6	6.1	10.3
親や兄弟姉妹・祖父母など家族が養鯉場を営んでいた	14	21.4	35.7	7.1	21.4	7.1	7.1	-	-	14.3
友人、知人などが錦鯉を飼育していて、勧められた・誘われた	19	21.1	68.4	-	21.1	10.5	-	15.8	5.3	5.3
学校や職場で飼育されているのを見たり、公園や庭園、養鯉場や錦鯉品評会、文化施設等やイベントで観賞をしたりした	31	16.1	45.2	9.7	25.8	9.7	9.7	12.9	6.5	6.5
テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った	18	27.8	66.7	11.1	27.8	11.1	5.6	5.6	-	-
趣味や教養として、錦鯉に興味関心があった	36	13.9	61.1	5.6	13.9	11.1	2.8	5.6	8.3	8.3
錦鯉に係る仕事や職業に興味関心があった	6	16.7	50.0	16.7	66.7	16.7	16.7	33.3	-	-
自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた	14	35.7	42.9	7.1	-	14.3	-	7.1	7.1	7.1
その他	14	7.1	64.3	-	-	14.3	7.1	7.1	-	35.7

※n=30未満は参考値のため灰色

以上のようなクロス集計の結果からは、親族等が錦鯉の飼育を行っていたことをきっかけとして錦鯉の飼育を始めた者は、その総数は多いものの、継続率は高くない傾向にある。継続率だけに着目するなら、親族等が養鯉場を営んでいた、友人・知人から誘われた、メディアで知って興味を持った者の継続率が高い傾向にある。

錦鯉の飼育を続けている理由については、友人・知人から勧められたり、イベント等がきっかけとなったりした者の場合、錦鯉を日本の文化として大事に考えており、錦鯉に愛着を持ち、暮らしや生活の一部として捉えていることが分かる。また、親族等が錦鯉を飼育していた者の場合、継続率が低い傾向にこそあるが、養鯉場を開きたいもしくは開いているとする回答比率が高く、本格的に飼育を行っている者と捉えることができる。

一方、錦鯉の飼育を継続できなかった理由や事情と始めたきっかけとのクロス集計からは、親族等が養鯉場を営んでいたと回答した者を除き、ほとんどの者が飼育環境の維持が困難となったことで、飼育を継続できなくなっていることが分かる。その他、イベント等での観賞をきっかけにした者等の場合、興味を失ったとの回答比率が高い傾向もみえる。

■活動内容

錦鯉に関する活動内容（GQ5）の結果では、「自宅等の池で飼育している（いた）」（64.3％）の回答比率が最も高く、次いで、「自宅等の水槽で飼育している（いた）」（32.9％）、「養鯉場に預けて飼育してもらっている（いた）」（11.3％）と続く。

まず、活動内容（GQ5）と現在の継続状況（GQ3）についてクロス集計を行い、活動内容と継続率の関係を分析する。継続していると回答した者（34.1％）の中では「自宅等の池で飼育している（いた）」（26.8％）の回答比率が低く、「養鯉場に預けて飼育してもらっている（いた）」（83.6％）、「錦鯉の品評会に出品している（いた）」（73.5％）の回答比率が高いことが分かる。

錦鯉の飼育に関する活動内容×現在の継続状況

		(%)	
		GQ3 現在の継続状況	
		続 け て い る	続 け て い な い
n=30以上で			
全体+10pt以上			
全体+5pt以上			
全体-5pt以下			
全体-10pt以下			
n=			
全 体	487	34.1	65.9
自宅等の池で飼育している(いた)	313	26.8	73.2
自宅等の水槽で飼育している(いた)	160	41.3	58.8
養鯉場に預けて飼育してもらっている(いた)	55	83.6	16.4
錦鯉の品評会に出品している(いた)	34	73.5	26.5
錦鯉の養鯉場を営んでいる(いた)	22	68.2	31.8
その他	7	14.3	85.7

※n=30未満は参考値のため灰色

次に、活動内容（GQ5）と月額費用（GQ7）についてクロス集計を行い、関係性を分析する。まず最も回答比率が高かった「1万円未満」（60.4％）では、「自宅等の池で飼育している（いた）」が全体平均よりやや高い。その一方で、養鯉場に預けている者や品評会に錦鯉を出品している者の回答比率が全体平均と大きく差があり、この2者は、5万円以上の月額費用への回答比率が高いこ

とからも、飼育方法によって、月額費用が異なることが確認できる。

錦鯉の飼育に関する活動内容×錦鯉の飼育に関する月額費用

		GQ7 錦鯉の飼育に関する月額費用							(%)
		1 万 円 未 満	1 万 円 以 上 5 万 円 未 満	5 万 円 以 上 1 0 万 円 未 満	1 0 万 円 以 上 5 0 万 円 未 満	5 0 万 円 以 上 1 0 0 万 円 未 満	1 0 0 万 円 以 上	5 万 円 以 上 合 計	
n=30以上で									
	全体+10pt以上								
	全体+5pt以上								
	全体-5pt以下								
	全体-10pt以下								
n=									
全 体	487	60.4	22.0	9.7	4.1	2.1	1.8	17.7	
自宅等の池で飼育している(いた)	313	70.3	18.2	5.4	2.6	1.6	1.9	11.5	
自宅等の水槽で飼育している(いた)	160	50.0	28.1	13.1	1.9	2.5	4.4	21.9	
養鯉場に預けて飼育してもらっている(いた)	55	20.0	21.8	29.1	12.7	5.5	10.9	58.2	
錦鯉の品評会に出品している(いた)	34	14.7	17.6	26.5	17.6	8.8	14.7	67.6	
錦鯉の養鯉場を営んでいる(いた)	22	13.6	27.3	18.2	9.1	9.1	22.7	59.1	
その他	7	85.7	14.3	-	-	-	-	-	

※n=30未満は参考値のため灰色

■経験年数

錦鯉の飼育を続けている年数（G Q 4）の結果では、「3～5年未満」が22.6%と最も多く、次いで「5～10年未満」の22.0%、「1～3年未満」の19.7%と続いている。

経験年数（GQ4）と習い始めたきっかけ（GQ1）のクロス集計を行い関係性について分析する。まず、飼育を始めたきっかけとして回答比率が最も高かった「親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた」（60.8%）と回答した者のうち、「20年以上」（80.4%）、「10～20年未満」（72.6%）が全体平均を大きく上回っているほか、「5～10年未満」（70.1%）、「1年未満」（68.9%）の項目も回答比率が高いことが分かる。

その一方、経験年数が1～5年未満と回答した者においては、「友人、知人などが錦鯉を飼育していて、勧められた・誘われた」の回答比率が全体平均を上回っているが、経験年数が1年未満と回答した者において、友人・知人から誘われた、あるいはイベント等をきっかけとして飼育を始めたという回答比率が低い傾向が見られる。

錦鯉の飼育を続けている年数×錦鯉を飼育し始めたきっかけ

GQ1 錦鯉を飼育し始めたきっかけ											(%)					
n=30以上で 全体+10pt以上 全体+5pt以上 全体-5pt以下 全体-10pt以下		ど親や家族が飼育した	いと家族が養子として迎えた	親や兄弟姉妹・祖父祖母でな	飼育し、知人などが勧められ	友人など、勧められ	トで親を飼った	庭園や観賞魚店、公園やペン	学校や職場で飼育されて	知ったウェブメディア等で漫	テレビや映画、雑誌、等で漫	に興味や教養があった、錦鯉	興味関心があった仕事や職業に	野の趣味・習い事との関係	自分が行っている別の関係	その他
		n=														
全 体		487	60.8	11.3	12.5		13.6	7.8	11.9	4.1	4.5	3.3				
1年未満		45	68.9	15.6	6.7		6.7	6.7	8.9	6.7	2.2	4.4				
1～3年未満		96	41.7	15.6	17.7		16.7	7.3	11.5	5.2	4.2	3.1				
3～5年未満		110	47.3	12.7	20.0		20.0	7.3	12.7	4.5	4.5	2.7				
5～10年未満		107	70.1	8.4	6.5		11.2	9.3	10.3	0.9	3.7	0.9				
10～20年未満		73	72.6	6.8	8.2		6.8	5.5	11.0	4.1	4.1	4.1				
20年以上		56	80.4	8.9	10.7		14.3	10.7	17.9	5.4	8.9	7.1				

次に経験年数（GQ4）と飼育の仕方を学んだ方法を選んだ理由（GQ2補問）のクロス集計を行い関係性について分析する。飼育の仕方を学んだ方法を選んだ理由として最も回答比率が高かった「家族や友人等と一緒に良かった」（33.7%）を回答した者のうち、「1年未満」（53.3%）、「20年以上」（46.4%）の回答比率が全体平均よりも高い傾向にある。

錦鯉の飼育を続けている年数×飼育の仕方を学んだ方法を選んだ理由

		GQ2補問 飼育の仕方を学んだ方法を選んだ理由 (%)									
		か家族や友人等と一緒に良かった	通いややすい場所だった	費用が手頃だった	通いややすい時間帯だった	れム指でいて、費用が具体的に示さ	か雑誌や専門誌の解説が分	た本格的にやってみたかつ	手軽にやってみたかつ	その他	な特に理由はない、わから
n=30以上で											
全体+10pt以上											
全体+5pt以上											
全体-5pt以下											
全体-10pt以下											
n=											
全体	487	33.7	14.6	14.6	8.2	7.0	7.2	7.0	18.5	3.3	21.8
1年未満	45	53.3	13.3	11.1	8.9	2.2	4.4	4.4	8.9	2.2	17.8
1～3年未満	96	28.1	16.7	21.9	8.3	8.3	7.3	3.1	15.6	1.0	16.7
3～5年未満	110	24.5	22.7	18.2	7.3	8.2	4.5	6.4	20.0	2.7	17.3
5～10年未満	107	29.9	10.3	6.5	8.4	7.5	7.5	9.3	16.8	4.7	29.9
10～20年未満	73	38.4	9.6	16.4	8.2	4.1	8.2	8.2	21.9	4.1	21.9
20年以上	56	46.4	10.7	10.7	8.9	8.9	12.5	10.7	26.8	5.4	26.8

経験年数（GQ4）と錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力（GQ8）のクロス集計を行い関係性について分析する。経験年数で見ると、20年以上と回答した者の場合、「錦鯉の飼育・観賞することで、心を落ち着かせることができる」（42.9%）との回答比率が特に高く、その他「飼育をしていくことで、変化する模様」（41.1%）、「錦鯉の飼育・観賞を通じて感じられる四季等」（26.8%）、「日本の伝統的な文化として国内外に知られている」（17.9%）も全体平均を上回る回答比率である。その一方で「飼育していくための技術」（16.1%）の回答比率は低い。

経験年数が長い点に着目すると、5年以上の経験年数の者において、「錦鯉の飼育・観賞することで、心を落ち着かせることができる」との回答比率が高くなり、1～5年未満では回答比率が低く、経験年数の長さによって魅力や興味関心の持ち方が異なることが分かる。特に経験年数が1年未満と回答した者の場合、「飼育をしていくことで、変化する模様」（60.0%）がとりわけ回答比率が高く、その他の項目では回答比率が低くなっており、経験年数が長い者が広く錦鯉の魅力を回答している傾向とは対照的といえる。

錦鯉の飼育を続けている年数×錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力

(%)

		GQ8 錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力							
		変飼育 化する 模して いくこ とで、	飼育し ていく ための 技術	な種 色類 によ って 異な る多 様	て錦 鯉の 飼育 ・観 賞を 通じ	こと で、 錦鯉 の飼 育・ 観賞 する こ	て日 本内 外に 伝統 的な 文化 とい し	そ 他	の 上 記 の 中 で 当 て は ま る も
n=30以上で									
全体+10pt以上									
全体+5pt以上									
全体-5pt以下									
全体-10pt以下									
n=									
全 体	487	32.2	21.1	32.2	18.9	26.3	8.2	1.8	18.5
1年未満	45	60.0	17.8	11.1	8.9	6.7	2.2	2.2	22.2
1～3年未満	96	26.0	29.2	27.1	14.6	19.8	5.2	2.1	12.5
3～5年未満	110	24.5	25.5	40.9	17.3	19.1	10.0	0.9	19.1
5～10年未満	107	29.9	13.1	31.8	21.5	32.7	5.6	0.9	20.6
10～20年未満	73	31.5	21.9	37.0	23.3	35.6	9.6	2.7	19.2
20年以上	56	41.1	16.1	35.7	26.8	42.9	17.9	3.6	19.6

上記のクロス集計の結果から、錦鯉の飼育をしたことがあると回答した者の特徴や傾向をまとめると、以下のとおりである。

1) 飼育し始めたきっかけと継続率に見える傾向と特徴

親族等が錦鯉を飼育していたことをきっかけとして錦鯉の飼育を始めた者の総数は多いが、継続率は決して高くはなく、親族等が養鯉場を営んでいた、友人・知人から誘われたりした者の方の継続率が高い傾向が見られる。

きっかけと継続理由及び辞めてしまった理由とのクロス集計の結果からは、友人や知人から誘われた、あるいはイベント等での体験をきっかけとして始めた者は、錦鯉の飼育を楽しみ、暮らしや生活の一部として捉えていることが継続理由の傾向として見える。一方、親族等が錦鯉を飼育していたあるいは養鯉場を営んでいたことで飼育を始めた者では、養鯉場を営みたいもしくは営んでいるとの回答比率が高い傾向にある。一方、始めたきっかけと飼育を辞めてしまった理由とのクロス集計では、親族等が養鯉場を営んでいた、あるいはイベント等をきっかけに飼育を始めた者を除き、ほとんどの者が飼育環境を維持できなくなったことが、継続できなくなった理由であることが分かる。

2) 活動内容と継続している状況や年数から見える傾向と特徴

養鯉場に預けて飼育している者や錦鯉の品評会に出品している者の継続率が高く、自宅等の池で飼育している者の継続率はあまり高くない傾向が見られる。このような活動を行っている者の月額費用の傾向としては、継続率が高かった養鯉場に預けて飼育している者や、品評会に出品している者ほど、月額費用を多く出している傾向が見られる。

3) 経験年数と飼育をし始めたきっかけや魅力から見える傾向と特徴

経験年数と飼育し始めたきっかけとの関係を見た場合、いずれの経験年数においても、親族等が錦鯉の飼育をしていたことをきっかけとして飼育を始めた者は多いが、とりわけ10年以上

の経験年数と回答した者の回答比率が高い。一方、1～5年未満の経験年数の場合では、友人や知人からの勧めや、イベント等での体験をきっかけとしている者も少なくない傾向が見られる。経験年数と飼育の仕方を学んだ方法を選んだ理由とのクロス集計では、いずれの経験年数においても家族や友人等と一緒に良かったとの回答は多いが、経験年数が1年未満、20年以上と回答した者の回答比率が高い傾向にある。また、1～5年未満の経験年数の場合、通いやすさや費用の手頃さの回答比率もやや高い傾向が見える。

経験年数と錦鯉の飼育に関する興味関心や魅力については、経験年数が長くなるほど、多様な魅力を回答する傾向にあり、特に錦鯉の飼育や観賞で心を落ち着かせることができるとの回答は20年以上の経験年数の回答者で顕著である。

③分析結果のまとめ

錦鯉の飼育や観賞等についての経験・体験の有無、経験者や参加体験者、未経験者の錦鯉に関する活動状況や興味関心の度合いを把握することを目的としてウェブアンケートを利用した調査を実施した。

調査結果からは、錦鯉を飼育したことがない者が多いことが分かった。未経験者が多いことについては、設問群の回答結果からも見えるように、興味関心が持てなかった、自分の趣味と合わない者がいる一方で、そもそも知らなかった者が多くいることに注目する必要がある。また、錦鯉を知ってはいるが、気軽に体験できる場がなかった、あるいは体験できる場自体を知らなかったことで、参加体験には至らなかった者もいることが明らかになった。

一方で、経験者や参加体験者の場合は、錦鯉について知る機会や体験をする場に接する機会があったことから、錦鯉の飼育を行ったり、観賞したりすることができたことが分かる。経験者の場合、親族等が錦鯉を飼育していたことをきっかけとして飼育し始めたと回答している者が多く、その他、イベント等で体験したり、友人・知人から勧められたりしたことが、飼育を始めるきっかけとなっている。一方、参加体験者の場合は、公園や庭園、文化施設等での観賞等を体験しており、これ以外にも錦鯉の品評会や即売会で観賞等の体験をしている傾向があり、経験者・参加体験者・未経験者のそれぞれに、錦鯉を知る機会、接することができる機会や環境に大きな開きがあることが、調査結果の分析から見えてくる。

経験者の活動状況等については、約6割は継続していない状況で、継続している者については、70代以上を除き、若い世代ほどに継続率が高い傾向が見られる。

また、調査結果では、錦鯉の飼育の仕方に関して自宅等の池を使って飼う方法をとっている人が最も多かったが、継続できていないとの回答率も高かった。

その一方、養鯉場等に預けている人や水槽で育てている人の継続率は比較的高い傾向にあり、興味関心を持つ者の環境に応じた錦鯉の飼育の方法が、継続性に繋がるものと考えられる。

このことは、継続していない者が続けられなかった事情として、錦鯉を飼育できる環境が維持できなくなったとの理由が最も大きいため、生物を飼育し観賞を楽しむ文化特有の環境づくりが継続の難しさに結び付いている状況にあることが見えてきた。

参加体験者の活動状況等については、参加体験をしたきっかけと体験した機会のクロス集計から、公園や庭園等で錦鯉を観賞する体験をしたとの回答比率が高い傾向にあるほか、品評会や即売会が錦鯉を観賞する機会になっていることも明らかになった。また、観賞等を経験している者がこれまで錦鯉を飼育し始めるに至らなかった理由や事情と飼育を始めやすい状況のクロス集計からは、一緒に飼育をしてくれる人や、身近に飼育方法等の相談に乗ってくれる人や場があれば、錦鯉の飼育を始めやすい傾向にあることが見えてくる。

上記の結果から、錦鯉の飼育などに興味関心を持つ者を増やしていくことを想定した場合、例えば、全国で行われている様々な規模の錦鯉の品評会などのイベントが、錦鯉の飼育や観賞に関する

情報を発信し、興味関心を喚起していく上で重要になるものと考えられる。このようなイベントそのものを、新聞や雑誌あるいはインターネット等のメディアを活用し、広く周知していくことで、錦鯉やそこに関わる様々なイベントに対する一般への認知を高めると共に、錦鯉は池で飼うだけでなく、水槽や預けて飼育する等の様々な飼育の仕方もあり、楽しみ方もあることを伝えることで、興味関心を持つ者を増やす可能性を広げることができるものと考えられる。

3章 まとめに代えて

本調査研究事業では、令和3年度に実施した煎茶道、香道、和装、礼法、盆栽、錦鯉の各分野について、各分野における経験・未経験者の有無、活動の度合いや興味関心の有無についての把握を目的とした、2万人を対象としたウェブアンケート調査を実施した。

また、令和3年度に実施した文献調査に関して、歴史的変遷及び各分野における無形の文化的所産について追加の文献調査を実施し調査内容の補強を行った。

令和3・4年にかけて、6分野それぞれの、歴史的変遷及び無形の文化的所産等の概要の把握及び、ウェブアンケート調査による経験・体験の有無や活動状況、興味関心や魅力等の把握を行ったが、各分野の施策の検討を進めていくためには、それぞれの分野を担っている団体や流派の活動内容や現状、無形の文化的所産の継承状況や継承していく上での課題点等の把握を行った上で、令和3・4年の調査結果を踏まえた分野の現状と課題の分析と施策の方向性について検討を行う必要がある。

参考資料 各分野の用具・原材料等について

煎茶道の用具・用品、消耗品について

煎茶道の茶席で用いられる主な用具・用品、消耗品は以下のとおりである。

分類	名称	別称	概要
道具	棚		道具類の飾り付けに用いられるものとして、急須、茶心壺、茶合、水注などが並べられる。
	器局		書斎で日々用いる煎茶器一揃いを収めておく箱。
	提籃		野外で煎茶席を設ける場合などに煎茶器を入れて携える。
	茶具 じよく 褥	茶具敷、ほか	煎茶席の道具飾りの下に敷く、絹・木綿・麻・毛織物などの布でできた敷物。
	炉屏	結界、座屏	屏風のような席飾り。
	涼炉	提炉、ほか	コンロのこと。炭を入れて火をおこす道具。煎茶独特のもので、多くは素焼き製（本体は磁器製のものもあり）。涼炉を置くものとして炉台がある。
	ポーフラ	湯沸かし、湯瓶、湯罐、ほか	涼炉にかけて湯を沸かすためのもの。本来は素焼き製。横手のものと上手のものがあるが、横手の急須に似た形のものが多い。
	水注	水灌、水指、水差、水つぎ、ほか	煎茶のお点前の際、茶碗を洗ったりポーフラに湯を補ったりする水を入れておくもの。陶磁器が多い。
	炭籠	たんどう 炭斗、 うぶ 烏府、ほか	涼炉で使われる炭を入れておくもので、籐や竹で編まれているものがほとんどで、手の付いたもの、付かないものがある。炭籠の上には火箸（火筋）や炉扇・羽箒など炭を扱う際の道具が置かれる。
	火箸	かきよう 火莢、 かちよ 火筋	涼炉に火たねを入れたり、炭籠の炭を補うのに用いる。長さは 20 cm 前後が一般的。
	炉扇		涼炉の火をおこすための団扇。竹や籐で編んだものが多い。薄い板や紙でつくられたものもある。
	羽箒		炭手前のとき、涼炉の塵や灰を掃き清めるのに使用する。野雁の羽が一般的であるが、鶴の羽なども使われることがある。

	急須	茶銚、 きびしょう 急尾焼、ほか	茶葉を入れ、お湯を注いでお茶の味を出す、煎茶に欠かせない重要な煎茶独自の道具。
	茶碗及び茶托	茶盞及び托子、ほか	抹茶茶碗と違い小さく、盃かぐい飲み程度の大きさのことが多い。磁器製のものが好まれる。茶托は茶碗をのせるもので、錫製、銀製などが主となり、様々な形のもの、図や透かし彫りの施してあるものなどがある。
	茶心壺	茶壺及び茶入	茶葉を入れておく容器のこと。
	茶合（さごう、ちやごう）	せんぱい 仙媒及び茶量、茶則、ほか	茶心壺から急須に茶葉を入れる際に分量を計るもの。木製、錫、象牙製などあるが、節の付いた竹を半裁にしたものが好まれている。
	盆		点前に使われる点前盆、茶心壺・茶合・袱紗 ふくさ をのせる三器盆、その他様々な大きさ、形のものがある。木や竹、金属、塗り物などの材質でできている。
	袱紗	帛紗	茶心壺・茶合を清める（ぬぐう）ために使うほか、飾りとしても使われる。材質は、インド更紗やジャワ更紗などの更紗が最高とされるが、絹や木綿などもあり、無地や柄物など様々である。
	箸瓶	箸立	茶箸を立てるもの。
	茶箸	茶筴及び茶筴 ちやそう 、ほか	急須に残った茶かすを取り除き、滓盃に入れるもの。
	茶巾入れ	茶巾筒、巾盒	茶碗を拭く茶巾及び盆巾を入れるもの。
	建水	のうお 納汚、こぼし、ほか	急須や茶碗を洗った水や、不要の湯を流し捨てる器。金属製、木竹製（曲物）、陶磁製があり、主として丸形である。
消耗品	滓盃	ちやかすいれ 茶滓入	使い終わった葉茶を取り出して入れる蓋つきの容器。
	茶葉		煎茶道で用いられるお茶の葉は不発酵茶である緑茶、中でも煎茶が主として用いられるほか、玉露や雁がね茶なども用いられる。
	花		文人生、文人華とも呼ばれる。投げ入れを基本とする。花材の取り合わせに意味合いを持たせ、題名をつけて展観される。
	盛物		煎茶席に特異な「床飾り」。珍しい果物や野菜を飾る「盛物」は、花と同じく、謎語雅題の取り合わせをする。

	炭		炭手前では、炭を火が着きやすいように組む。 また、玉露・煎茶など、茶葉に合わせた湯加減になるように炭を組む。
	菓子		煎茶席の菓子は当日の趣向を最もよく表すことのできるものの一つとされる。
その他	文房具		筆硯紙墨のほか、印材、筆架、水滴など。
	盆栽		中国の文雅の趣を伝える盆栽は、同じく中国文人趣味の影響のもとに煎茶を楽しむ風雅な席において珍重され、煎茶道においても、茶席を清雅な風韻でしつらえるための一つとして、書画や文房四宝などと共に飾られるようになった。

※道具の呼称は流派によって異なるため、振り仮名は一部にとどめた。

〈主要参考文献〉

- ・小川後楽『煎茶器の基礎知識』光村推古書院、昭和 61 年
- ・全日本煎茶道連盟監修『煎茶 道具としつらいの知識』婦人画報社、平成 4 年
- ・主婦の友社編『煎茶便利帳』主婦の友社、平成 12 年
- ・日本煎茶工芸協会編『煎茶の工芸 その人と技』日本煎茶工芸協会、平成 29 年

香道の用具・原材料について

香道で用いられる主な用具・原材料は以下のとおりである。流派によって呼び名や用途が異なるものがあり、ここでは主なものを挙げた。

名称	概要
聞香炉	香を聞くための基本となる道具。飾りのないすっきりとした筒型で、脚は三つ、手の中にすっぽりと収まることが基本的な条件とされるが、流派によって様々な大きさがある。青磁や染付が多い。
香炭団	直径2 cm弱の小さな筒形の炭団で、香木を加熱し、発薫させるために香炉の灰に埋めて用いる。
香炉灰	主に菱の草の実を原料とする菱灰、藤の木を原料とする藤灰などが使われる。
銀葉	雲母を素材とする。板状で、直に香木を炷くことのないよう、香木を載せる敷物として使用する。
打敷、地敷・地敷紙	道具を並べるときに下に敷くもの。御家流では、地敷を打敷の上に敷いて用いたり、そのものを打敷と呼んだりする。志野流では地敷紙と称する。
火道具	流派によって形状や材質、呼び名が違うものもある。聞香炉の灰を扱うのに使う「火箸」（主に志野流）「火筋」（主に御家流）、香炉で灰を押さえたりなしたりする「灰押」、銀葉を挟む「銀葉挟」、灰を落として香炉を清める「羽箒」、香木を挟む「香筋」（主に御家流）「木香箸」（主に志野流）、香木をすくって銀葉に載せる「香匙」、本香包を刺しておく「鶯」（香串ともいう）、の7つの道具がある。「香筋建・香匙建」は火道具を立てておくための筒で、流派によって納め方に決まりがある。*香匙の室町時代の呼び名は「きょうじ」
みだれはこ 乱箱	香道具を運ぶために香道具一式を入れる箱のこと。流派により入れてある香道具の位置が異なる。漆黒塗、蒔絵などでつくられている。
じゅうこうこう 重香合	御家流で香木、銀葉を入れるのに使用する四角又は筒型の三段及び四段の箱。掌サイズで、蒔絵のものも多い。最下段内側に金属を張ってあるものが多く、使用後の熱い銀葉や、香を炷いたあとの炷空・末枯を入れる。志野流では、炷空は銀製の炷空入れに入れる。
手記録紙、 手記録盆、 記紙差	手記録紙は組香の際に答えを記す回答用紙を指す。手記録紙を載せるのが手記録盆である。答えの示し方としては他に、香札を用いる場合などもある。志野流では回答用紙「記紙」を、料紙で金地彩色の記紙差で廻す。

香木について

香木は良い香りのする木のことであり、ある種の樹の一部分をさす。沈水香と総称される伽羅・沈香は、樹内の繊維に樹脂が溜まった部分、白檀は樹の芯に精油が溜まった部分、桂皮は皮の部分、というように称する。主にベトナム、タイ、インドネシアなどの東南アジアで産出される。沈香樹は将来絶滅する可能性の高い植物であることから、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約（ワシントン条約）」によって原産国からの輸入等に関して規制が行われている（商業目的の国際取引は可能）。

現在の香木の輸入について、特に沈香については平成 11 年（1999）に HS コードの変更に伴い、沈香単独の輸入量については把握が困難となった。下記表は平成 10 年までの沈香の輸入量をまとめたものである。

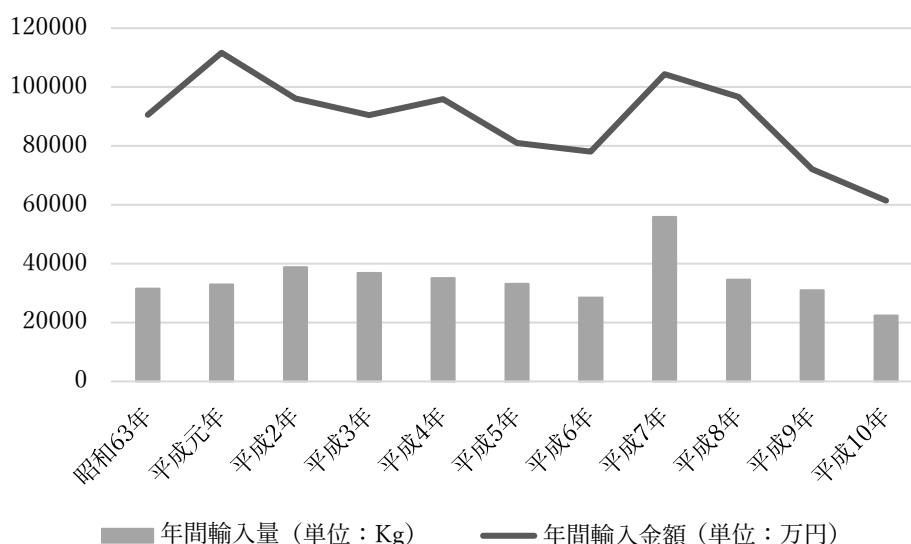


図 1 沈香の輸入量（昭和 63 年～平成 10 年）

出典：昭和 63 年から平成 10 年までの貿易統計を「政府の統計窓口 e-Stat」
(URL: <https://www.e-stat.go.jp/>) を参照し受託事業者が作成した

今後、香木の採取量の減少が懸念されている。香舗や流派の中には、ベトナムで植林を行い、人工栽培に取り組んでいるところもある。

〈主要参考文献〉

- ・『淡交ムック 香道入門』淡交社、平成 5 年
- ・神保博行『香道の歴史事典』柏書房、平成 15 年
- ・野村朋弘編『伝統を読みなおす 3 風月、庭園、香りとはなにか』京都造形芸術大学東北芸術工科大学出版局芸術学舎、平成 26 年
- ・荻須昭大『香の本 増補版』雄山閣、平成 29 年

- ・ 山田眞裕『香木三昧 大自然の叡智にあそぶ』淡交社、令和元年
- ・ 香道文化研究会編『図解 香道の作法と組香』第五版 雄山閣、令和2年（初版は蜂谷宗由監修・長ゆき編で、昭和53年に雄山閣より刊行）
- ・ 山田英夫『香木のきはん図鑑 種類と特徴がひと目でわかる』世界文化社、令和3年
- ・ 三條西堯水監修『よくわかる香道 歴史から作法まで 香りの世界を深める』メイツユニバーサルコンテンツ、令和4年

和装の用具について

和装の主な用具は、以下のとおりである。

名称	概要
長着、帯	長着（着物）や帯の概要は1節のとおりである。なお、上下が分かれている「二部式」の長着や、帯に帯結びの形状があらかじめ作られ、簡便に装着できる「作り帯」と呼ばれるものもある。
下着	汚れ防止や保温のために着る上半身用の肌着である肌襦袢、長襦袢の汚れ防止や裾捌きをよくするために腰に巻き付けて着用する裾除け、肌着と着物の間に着る長襦袢がある。また、「スリップ」と呼ばれ、肌襦袢と裾除けが一体となったものがあるほか、胸のふくらみを目立たなくさせる和装ブラジャーもある。
小物	女性の場合、長襦袢や着物の上に締めて襟元を整える伊達締め、おはしよりを作ったり着崩れを防止したりするために結ぶ腰紐、お太鼓の形を整える帯枕、胴回りの皺を抑えて帯の前姿を整える帯板、帯枕を隠し帯結びの形を整える帯揚げ、帯結びが崩れないように帯の上から締める帯締め、汚れ防止のために長襦袢に付けファッション性も高める半衿、半衿と着物の衿の間に挟む伊達衿等がある。 外出時には和装バッグ、袋物を持つ。装飾品として、髪には ^{かんざし} 簪、髪飾り等がある。帯締には帯留を用いることもある。
上着	羽織やコート（道行）を着用する。雨天時のための雨コートもある。
足袋	和装の際に足に直接履くもので、素材は正絹や綿、化繊等がある。
履物	草履、下駄を着用する。雨天時用として、歯が高めで爪先をカバーできる雨下駄もある。
着付け補助具	着付けを簡便にするための補助具として、コーリンベルト、ソフトパッド、仮止めには着物クリップ等も用いられる。

〈主要参考文献〉

- ・橋本澄子編『図説 着物の歴史』河出書房新社、平成 17 年
- ・全日本きもの振興会監修『着物の教科書』新星出版社、平成 30 年

盆栽の用具・原材料について

盆栽で用いられる主な用具・原材料は以下のとおりである。

名称	概要
盆栽苗	盆栽の主体となる植物は、苗木の生産業者、苗木を盆栽として仕立てる盆栽園によって生産される。かつては“山採り”の専門業者もいたが、現在は地権者の問題、希少植物の天然記念物指定等により非常に難しくなっており、数は減っている。 出荷数量、出荷額については、農林水産省「盆栽の出荷（輸出）数量・出荷（輸出）額の推計について（平成 27 年）」では、盆栽苗生産者から盆栽生産者への出荷量は約 2 万 5,000 本で約 3,000 万円、盆栽生産者からの国内出荷量は約 11 万 1,000 鉢で約 8 億円、輸出量は約 4 万 4,000 鉢で約 4 億円となっている¹。
盆器	植物を植える盆器は盆栽に欠かせない道具であり、植物と器のバランスは鑑賞上の重要なポイントともなる。歴史的に「鉢」と呼ばれてきたが、昭和 50 年代から「盆器」という呼び方が広がり、定着した。 古くは中国から輸入された青磁や、瓦器と呼ばれる素焼きの鉢等が用いられた。江戸時代には輸入品と並行し、伊万里、尾張（瀬戸）等で作られた国産の染付鉢もよく用いられた。明治時代に入ると、「朱泥」「紫泥」など褐色の「泥物」が人気を集め、国内では常滑が泥物の鉢の主要な供給地となった。また、名工として知られるようになる作家も登場する²。現代も盆器専門の作家がおり、また、盆栽を趣味とはせずに盆器のみ収集するコレクターもいる。盆器の専門業者は減少している。
卓	盆栽を飾る飾り台で、高さや用途により「平卓」「中卓」「高卓」「小品卓」「地板」に分類される。懸崖の形状の盆栽を陳列するのに適した、脚の長いタイプもある。需要の減少とともに卓を作る指物師も減り、現在、国内には卓を作る指物師は残っていない。
鋏	盆栽の剪定に用いられる鋏には、剪定用の剪定鋏、幹や太い枝等を切り落とす又枝切りや、コブをえぐり切るコブ切り、針金用の針金切り等、目的や用途に応じて多種多様な種類がある。昭和前期に盆栽専用の鋏を作る業者が登場し、一つの市場を作っている³。
じょうろ	一般の園芸用じょうろと比べてハスロの目が細かく、水が霧状に出る盆栽専用のじょうろを用いる。材質にはプラスチック製やステンレス製、真鍮製、銅製等がある。銅製じょうろは手作りで生産され、高価であるが、殺菌力があって水が腐りにくいため好まれている。なお、現在、盆栽用の銅製じょうろを生産しているのは国内で 1 社のみである。
土	主として赤玉土といわれる関東ローム層の土が用いられる。褐色で粒状の火山灰土で、保水性、排水性、保肥性に優れる。サツキ盆栽には栃木県鹿沼市付近で産出する鹿沼土がよく用いられる。これも火山灰土で、赤玉土より酸度が高い pH4.0～5.0 程度の酸性の土である。なお、近年は、質のよい土は海外へも輸出され国内では品薄の傾向にある。

¹ 農林水産省「盆栽の出荷（輸出）数量・出荷（輸出）額の推計について（平成 27 年）」
(URL:<https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/f-kaboku-2.pdf>) 最終確認日：令和 5 年 1 月 31 日

² 京都の陶工「平安東福寺」こと水野喜三郎（1890～1970）の盆器は、作家の死後に評価が高まり、現代では大きいものだと 100 万円の価格がつくこともあるという。（依田徹『盆栽の誕生』大修館書店、平成 26 年）

³ 日本盆栽協会編『盆栽大事典 第 3 巻』同朋舎出版、昭和 58 年

錦鯉生産・飼育のための用具について

錦鯉は技術の進歩とともに発展してきた側面があり、育種等における生産・飼育技術のほか、水質保全や越冬・飼育用ハウスなど飼育環境整備のための機器、輸送用具、飼料、薬品等の改良が行われてきた。

野池は棚田等に人工的に設けられた養鯉池であり、ここに放たれた錦鯉の稚魚は野池でミジンコを食べて育成される。また、室内のハウス池で飼育されている錦鯉を、野池に放って育てることで、色艶や体形が良くなるともいわれる。愛好者たちが飼育する錦鯉も「たたき池」（コンクリート製の池）で長く飼育すると色艶が衰えてくるので、そのときは生産者に1年程度、野池での飼育を委託することもある。このように日本の錦鯉の生産・飼育において、野池は重要な役割を担っていると考えられる。

なお、農地を養殖池として利用する場合、転用許可や転用期間制限など農地法による規制があるが、国は令和3年（2021）3月に優良農地の確保とともに地域の農業振興と農業に係る養殖事業の展開を目的として、「農地を養殖池に一時転用する場合における農地転用許可の取扱いについて」（2農振第2935号 令和3年3月4日付け農林水産省農村振興局長通知）を発出している。これは、内水面における水産動植物の養殖を目的とした農地の一時転用（養殖池に附帯する給排水施設を含む）について、農地への復元が可能な状態であること等の要件を付した上で、一時転用期間の上限が3年を超える場合であっても、10年以内であれば一時転用を許可すると通知されている。

参考資料 文化創造アナリスト及び有識者会議検討経過等

1 煎茶道

(1) 文化創造アナリスト

本調査研究事業は、煎茶道に関する豊富な識見を有する者を「文化庁文化創造アナリスト(煎茶道)」として委嘱し、調査研究及び報告書に対して助言等をいただいた。

【名簿】 ※50 音順、敬称略、令和5年1月31日現在

漆原 拓也 法政大学 国際日本学研究所 客員所員

船阪 富美子 神戸大学 研究推進部

(2) 有識者会議(文化創造アナリスト会議)経過

令和3年度

①第1回有識者会議

●開催日・開催方法

令和3年12月8日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(煎茶道)」の概要について
- ・現時点における各項目の調査内容について
- ・今後の予定について

②第2回有識者会議

●開催日・開催方法

令和4年2月14日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(煎茶道)」報告書(素案)の検討について
- ・今後の予定について

令和4年度

①第1回有識者会議

●開催日・開催方法

令和4年8月10日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(煎茶道)」の概要について
- ・ウェブ調査の設問案について
- ・今後の予定について

②第2回有識者会議

●開催日・開催方法

令和4年11月16日 リモート会議

●主な内容

- ・ウェブ調査結果について
- ・報告書修正案について
- ・今後の予定について

③第3回有識者会議

●開催日・開催方法

令和5年1月26日 リモート会議

●主な内容

- ・令和4年度「生活文化調査研究事業」報告書案について

(3) 受託事業者

本調査研究事業は株式会社文化科学研究所が受託事業者として以下の業務を行った。

- ・煎茶道の歴史、主要な無形の文化的所産、国内における社会的位置付けや評価、国際的な評価や発信、用具・原材料の市場での流通量・生産量等に関する文献等の調査
- ・国民意識調査
- ・有識者会議等の調整、運営などの業務
- ・報告書（案）の作成

2 香道

(1) 文化創造アナリスト

本調査研究事業は、香道に関する豊富な識見を有する者を「文化庁文化創造アナリスト(香道)」として委嘱し、調査研究及び報告書に対して助言等をいただいた。

【名簿】 ※50音順、敬称略、令和5年1月31日現在

宮崎 涼子 京都芸術大学 非常勤講師

矢野 環 同志社大学 名誉教授、埼玉大学 名誉教授

(2) 有識者会議(文化創造アナリスト会議)経過

令和3年度

①第1回有識者会議

●開催日・開催方法

令和3年12月27日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(香道)」の概要について
- ・現時点における各項目の調査内容について
- ・今後の予定について

②第2回有識者会議

●開催日・開催方法

令和4年2月22日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(香道)」報告書(素案)の検討について
- ・今後の予定について

令和4年度

①第1回有識者会議

●開催日・開催方法

令和4年8月1日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(香道)」の概要について
- ・ウェブ調査の設問案について
- ・今後の予定について

②第2回有識者会議

●開催日・開催方法

令和4年11月30日 リモート会議

●主な内容

- ・ウェブ調査結果について
- ・報告書修正案について
- ・今後の予定について

③第3回有識者会議

●開催日・開催方法

令和5年1月25日 リモート会議

●主な内容

- ・令和4年度「生活文化調査研究事業」報告書案について

(3) 受託事業者

本調査研究事業は株式会社文化科学研究所が受託事業者として以下の業務を行った。

- ・香道の歴史、主要な無形の文化的所産、国内における社会的位置付けや評価、国際的な評価や発信、用具・原材料の市場での流通量・生産量等に関する文献等の調査
- ・国民意識調査

- ・有識者会議等の調整、運営などの業務
- ・報告書（案）の作成

3 和装

（１）文化創造アナリスト

本調査研究事業は、和装に関する豊富な識見を有する者を「文化庁文化創造アナリスト(和装)」として委嘱し、調査研究及び報告書に対して助言等をいただいた。

【名簿】 ※50 音順、敬称略、令和 5 年 1 月 31 日現在

村田 裕子 大阪大谷大学 文学部歴史文化学科 准教授

吉田 満梨 神戸大学大学院 経営学研究科 准教授

（２）有識者会議(文化創造アナリスト会議)経過

令和 3 年度

①第 1 回有識者会議

●開催日・開催方法

令和 3 年 12 月 13 日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(和装)」の概要について
- ・現時点における各項目の調査内容について
- ・今後の予定について

②第 2 回有識者会議

●開催日・開催方法

令和 4 年 2 月 4 日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(和装)」報告書(素案)の検討について
- ・今後の予定について

令和 4 年度

①第 1 回有識者会議

●開催日・開催方法

令和 4 年 8 月 17 日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(和装)」の概要について
- ・ウェブ調査の設問案について
- ・今後の予定について

②第2回有識者会議

●開催日・開催方法

令和4年11月21日 リモート会議

●主な内容

- ・ウェブ調査結果について
- ・報告書修正案について
- ・今後の予定について

③第3回有識者会議

●開催日・開催方法

令和5年1月27日 リモート会議

●主な内容

- ・令和4年度「生活文化調査研究事業」報告書案について

(3) 受託事業者

本調査研究事業は株式会社文化科学研究所が受託事業者として以下の業務を行った。

- ・和装の歴史、主要な無形の文化的所産、国内における社会的位置付けや評価、国際的な評価や発信、用具・原材料の市場での流通量・生産量等に関する文献等の調査
- ・国民意識調査
- ・有識者会議等の調整、運営などの業務
- ・報告書（案）の作成

4 礼法

(1) 文化創造アナリスト

本調査研究事業は、礼法に関する豊富な識見を有する者を「文化庁文化創造アナリスト(礼法)」として委嘱し、調査研究及び報告書に対して助言等をいただいた。

【名簿】 ※50音順、敬称略、令和5年1月31日現在

堀田 明美 せとうち観光専門職短期大学 観光振興学科 准教授

綿拔 豊昭 筑波大学 図書館情報メディア系 教授

(2) 有識者会議(文化創造アナリスト会議)経過

令和3年度

①第1回有識者会議

●開催日・開催方法

令和3年12月3日 リモート会議

- 主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(礼法)」の概要について
- ・現時点における各項目の調査内容について
- ・今後の予定について

②第2回有識者会議

- 開催日・開催方法

令和4年2月8日 リモート会議

- 主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(礼法)」報告書(素案)の検討について
- ・今後の予定について

令和4年度

①第1回有識者会議

- 開催日・開催方法

令和4年7月29日 リモート会議

- 主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(礼法)」の概要について
- ・ウェブ調査の設問案について
- ・今後の予定について

②第2回有識者会議

- 開催日・開催方法

令和4年11月18日 リモート会議

- 主な内容

- ・ウェブ調査結果について
- ・報告書修正案について
- ・今後の予定について

③第3回有識者会議

- 開催日・開催方法

令和5年1月23日 リモート会議

- 主な内容

- ・令和4年度「生活文化調査研究事業」報告書案について

(3) 受託事業者

本調査研究事業は株式会社文化科学研究所が受託事業者として以下の業務を行った。

- ・礼法の歴史、主要な無形の文化的所産、国内における社会的位置付けや評価、国際的な評価や発信等に関する文献等の調査
- ・国民意識調査

- ・有識者会議等の調整、運営などの業務
- ・報告書（案）の作成

5 盆栽

（１）文化創造アナリスト

本調査研究事業は、盆栽に関する豊富な識見を有する者を「文化庁文化創造アナリスト(盆栽)」として委嘱し、調査研究及び報告書に対して助言等をいただいた。

【名簿】 ※50 音順、敬称略、令和 5 年 1 月 31 日現在

川崎 仁美 盆栽研究家 「現代盆栽」主宰
依田 徹 公益財団法人遠山記念館 学芸課長

（２）有識者会議(文化創造アナリスト会議)経過

令和 3 年度

①第 1 回有識者会議

●開催日・開催方法

令和 3 年 12 月 6 日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(盆栽)」の概要について
- ・現時点における各項目の調査内容について
- ・今後の予定について

②第 2 回有識者会議

●開催日・開催方法

令和 4 年 1 月 26 日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(盆栽)」報告書(素案)の検討について
- ・今後の予定について

③第 3 回有識者会議

●開催日・開催方法

令和 4 年 3 月 2 日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(盆栽)」報告書（案）の検討について

令和4年度

①第1回有識者会議

●開催日・開催方法

令和4年8月9日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業(盆栽)」の概要について
- ・ウェブ調査の設問案について
- ・今後の予定について

②第2回有識者会議

●開催日・開催方法

令和4年11月29日 リモート会議

●主な内容

- ・ウェブ調査結果について
- ・報告書修正案について
- ・今後の予定について

③第3回有識者会議

●開催日・開催方法

令和5年1月25日 リモート会議

●主な内容

- ・令和4年度「生活文化調査研究事業」報告書案について

(3) 受託事業者

本調査研究事業は株式会社文化科学研究所が受託事業者として以下の業務を行った。

- ・盆栽の歴史、主要な無形の文化的所産、国内における社会的位置付けや評価、国際的な評価や発信、用具・原材料の市場での流通量・生産量等に関する文献等の調査
- ・国民意識調査
- ・有識者会議等の調整、運営などの業務
- ・報告書(案)の作成

6 錦鯉

(1) 文化創造アナリスト

本調査研究事業は、錦鯉に関する豊富な識見を有する者を「文化庁文化創造アナリスト(錦鯉)」として委嘱し、調査研究及び報告書に対して助言等をいただいた。

【名簿】 ※50 音順、敬称略、令和 5 年 1 月 31 日現在

菅 豊 東京大学 東洋文化研究所 汎アジア研究部門 教授
馬場 俊三 株式会社錦彩出版 代表取締役（月刊『錦鯉』発行人）

（２）有識者会議（文化創造アナリスト会議）経過

令和 3 年度

①第 1 回有識者会議

●開催日・開催方法

令和 3 年 12 月 2 日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業（錦鯉）」の概要について
- ・現時点における各項目の調査内容について
- ・今後の予定について

②第 2 回有識者会議

●開催日・開催方法

令和 3 年 12 月 23 日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業（錦鯉）」報告書（素案）の検討について
- ・今後の予定について

③第 3 回有識者会議

●開催日・開催方法

令和 4 年 3 月 1 日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業（錦鯉）」報告書（案）の検討について

令和 4 年度

①第 1 回有識者会議

●開催日・開催方法

令和 4 年 8 月 5 日 リモート会議

●主な内容

- ・「生活文化調査研究事業（錦鯉）」の概要について
- ・ウェブ調査の設問案について
- ・今後の予定について

②第 2 回有識者会議

●開催日・開催方法

令和 4 年 11 月 24 日 リモート会議

●主な内容

- ・ ウェブ調査結果について
- ・ 報告書修正案について
- ・ 今後の予定について

③第3回有識者会議

●開催日・開催方法

令和5年1月24日 リモート会議

●主な内容

- ・ 令和4年度「生活文化調査研究事業」報告書案について

(3) 受託事業者

本調査研究事業は株式会社文化科学研究所が受託事業者として以下の業務を行った。

- ・ 錦鯉の歴史、主要な無形の文化的所産、国内における社会的位置付けや評価、国際的な評価や発信、市場での流通量・生産量等に関する文献等の調査
- ・ 国民意識調査
- ・ 有識者会議等の調整、運営などの業務
- ・ 報告書（案）の作成

参考資料 国民意識調査調査票

(1) 属性

F 1 あなたの性別をお答えください。(1つ)

1. 男 2. 女 3. それ以外／答えたくない

F 2 あなたの年齢をお答えください。(1つ)

1. 18歳未満 2. 18～19歳 3. 20代 4. 30代 5. 40代 6. 50代 7. 60代
8. 70代以上

F 3 あなたのお住まいの都道府県をお答えください。(1つ)

1. 北海道 2. 青森県 3. 岩手県 4. 宮城県 5. 秋田県 6. 山形県
7. 福島県 8. 茨城県 9. 栃木県 10. 群馬県 11. 埼玉県 12. 千葉県
13. 東京都 14. 神奈川県 15. 新潟県 16. 富山県 17. 石川県 18. 福井県
19. 山梨県 20. 長野県 21. 岐阜県 22. 静岡県 23. 愛知県 24. 三重県
25. 滋賀県 26. 京都府 27. 大阪府 28. 兵庫県 29. 奈良県 30. 和歌山県
31. 鳥取県 32. 島根県 33. 岡山県 34. 広島県 35. 山口県 36. 徳島県
37. 香川県 38. 愛媛県 39. 高知県 40. 福岡県 41. 佐賀県 42. 長崎県
43. 熊本県 44. 大分県 45. 宮崎県 46. 鹿児島県 47. 沖縄県

F 4 あなたの仕事をお答えください。(1つ)

1. 正規の職員・従業員(役員を含む)
2. 非正規の職員・従業員(期間従業員、契約社員、派遣社員を含む)
3. 自営業主・自由業(自分で、または共同で事業を営んでいる)
4. 家族従業者(家族が営んでいる事業を手伝っている)
5. 主婦・主夫
6. 学生
7. リタイア、無職
8. その他

F 5 あなたと同居している人の状況をお答えください。(1つ)

1. ひとり暮らし(同居している家族はいない)
2. 核家族(夫婦のみもしくは親と未婚の子どもの世帯)
3. 三世帯家族(親・子・孫の3世帯以上が同居)
4. 上記以外で同居している人がいる

F 6 昨年度の世帯全体の年収(税込み)は、おおよそどのくらいですか。(1つ)

1. 100 万円未満
2. 100 万円以上～200 万円未満
3. 200 万円以上～300 万円未満
4. 300 万円以上～400 万円未満
5. 400 万円以上～500 万円未満
6. 500 万円以上～600 万円未満
7. 600 万円以上～700 万円未満
8. 700 万円以上～800 万円未満
9. 800 万円以上～900 万円未満
10. 900 万円以上～1,000 万円未満
11. 1,000 万円以上
12. 分からない

F 7 あなたが最後に卒業された学校はどちらですか。(1つ)

1. 小学校 2. 中学校 3. 高校・旧制中学校 4. 短大・高専 5. 大学 6. 大学院
7. その他

F 8 あなたは、子供の頃に習い事をされていましたか。(いくつでも)

1. 楽器演奏(ピアノやバイオリンなど)や歌唱(コーラスや声楽など)
2. バレエやダンス(バレエ、モダンダンスやコンテンポラリーダンスなど)
3. 美術(絵画や版画、彫刻、工芸など)
4. 伝統芸能や茶道・華道等の芸事
5. 囲碁や将棋
6. 書道・習字・ペン字、そろばん
7. スポーツ・武道
8. その他(具体的に:)
9. していない

(2) フィルタリング・パート

F Q 1 煎茶道について

この調査の「煎茶道」とは、主人が客人を招き、一定の作法で淹れた煎茶や玉露等を振る舞い、書や絵画等の鑑賞を行いながら交流を図る、日本の伝統的な生活文化のことをいいます。

あなたは、これまでに、「煎茶道」を経験したことはありますか。次の選択肢の中から、あてはまる一番近いものをお選びください。(1つ)

1. 習っている (いた)、あるいは教える立場にいる (いた)
2. 学校の授業や職場の研修、イベント等で煎茶会や煎茶席に参加した経験はある
3. 今まで経験したことはない

F Q 2 香道について

この調査の「香道」とは、沈香、白檀などの香木や、古典的な薫(たきもの)を、一定の作法に従って焚(炷)(た)き、その香りを鑑賞する(=「聞く」)、日本の伝統的な生活文化のことをいいます。

あなたは、これまでに「香道」を経験したことはありますか。次の選択肢の中から、あてはまる一番近いものをお選びください。(1つ)

1. 習っている (いた)、あるいは教える立場にいる (いた)
2. 学校の授業や職場の研修、イベント等で香会や香席に参加した経験はある
3. 今まで経験したことはない

F Q 3 和装について

この調査の「和装」とは、着物(和服、浴衣も含む)の着付けのことをいいます。なお、作務衣・甚平のような着脱が簡易なものや、柔道着・剣道着等の特定競技用のものは含まないこととします。

あなたは、日常生活や行事等(例えば結婚式、入学式、卒業式、成人式等)の折に、着物を着付けることはありますか。次の選択肢の中から、あてはまる一番近いものをお選びください。(1つ)

1. 着物を自分で着付けている (いた)、あるいは人に着付けている (着付けたことがある)
2. 自分で着物の着付けはできないが、人に着付けてもらって着ている (着たことがある)
3. 今まで着物を着たことはない

F Q 4 礼法について

この調査の「礼法」とは、作法や所作、しつらい等の一定の礼式に則ることによって相手への敬意を表す、日本の伝統的な礼儀作法のことをいいます。

あなたは、これまでに「礼法」を経験したことはありますか。次の選択肢の中から、あてはまる一番近いものをお選びください。(1つ)

1. 習っている (いた)、あるいは教える立場にいる (いた)
2. 学校の授業や職場の研修、イベント等で礼法に関する体験をしたことはある
3. 今まで経験したことはない

F Q 5 盆栽について

この調査の「盆栽」とは、植木鉢等の盆器（ぼんき）等に樹木を植え付け、姿形に手を加えながら年数をかけて育てていくものをいいます。なお、小品盆栽やツツジ盆栽も含まれます。

あなたは、これまでに盆栽を育てたことはありますか。次の選択肢の中から、あてはまる一番近いものをお選びください。（1つ）

1. 盆栽を育てている（いた）、あるいは盆栽園を営んでいる（いた）
2. イベント等で盆栽体験をしたことはある
3. 盆栽を育てたり盆栽体験をしたりしたことはない

F Q 6 錦鯉について

この調査の「錦鯉」とは、色や模様のある観賞用のコイのことをいいます。

あなたは、これまでに錦鯉を飼育したことはありますか。次の選択肢の中から、あてはまる一番近いものをお選びください。（1つ）なお、飼育には、預かり飼育を含みます。

1. 錦鯉を飼育している（いた）、あるいは錦鯉の養鯉業を営んでいる（いた）
2. イベント等で錦鯉の飼育体験や観賞をしたことはある
3. 今まで錦鯉の飼育をしたことはない

（3）分野設問

①煎茶道

●煎茶道を習っている（習っていた）者に対する質問（F Q 1 で1に回答）

煎茶道1 あなたが煎茶道を習い始めたきっかけとして、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた
2. 親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた
3. 友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた
4. 学校の授業や、煎茶道の稽古場・教室での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った
6. 趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった
7. 煎茶道に係る仕事や職業に興味関心があった
8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他（具体的に： ）

煎茶道2 あなたが煎茶道を習い始めた当初、次のうちどのような方法で習っていましたか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 家族や知人等、身近な人に習っていた
2. 学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた
3. カルチャーセンターの講座で習っていた
4. 稽古場や教室で習っていた
5. その他(具体的に:)

煎茶道2 補問 その方法を選んだ理由をお選びください。(いくつでも)

1. 家族や友人等と一緒に良かった
2. 通いやすい場所だった
3. 費用が手頃だった
4. 道具等が借りられた
5. 通いやすい時間帯だった
6. 指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていた
7. 本格的に習ってみたかった
8. 手軽に習ってみたかった
9. その他(具体的に:)
10. 特に理由はない、わからない

煎茶道3 現在、煎茶道に関する活動を続けていますか。選択肢の中からお選びください。(1つ)

1. 続けている
2. 続けていない

<上記で1と回答した方に>

煎茶道3 補問1 あなたが煎茶道に関する活動を続けるようになった理由として、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 指導者や教授者として活動したい(している)
2. 日本の文化だから
3. 一緒に楽しむ仲間がいる
4. 煎茶や玉露等の淹れ方や、煎茶席のしつらいの仕方など、奥深い文化をもっと知りたい
5. 煎茶席でいただく煎茶や玉露等がおいしい
6. 習っていくうちに、暮らし、生活の一部となった
7. その他(具体的に:)
8. 特に理由はない
9. 上記の中で当てはまるものはない

＜上記で2と回答した方に＞

煎茶道3補問2 あなたが煎茶道に関する活動から離れたきっかけや理由として、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 時間がなくなった
2. 近くに習う場所がなくなった
3. 当初目標としていたことが達成できた
4. 興味を失った
5. 経済的に続けるのが難しくなった
6. 健康面、体調面で続けることが難しくなった
7. 一緒に活動する家族や友人等が辞めてしまった
8. 習っている内容についていけなくなった
9. 指導者や教授者を引退した
10. その他(具体的に:)

煎茶道4 あなたが煎茶道を続けている(続けていた)年数を選択肢の中からお選びください。(1つ)

1. 1年未満
2. 1～3年未満
3. 3～5年未満
4. 5～10年未満
5. 10～20年未満
6. 20年以上

煎茶道5 あなたの現在の煎茶道の活動内容(かつて行っていた内容)について、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 教室や稽古場で習っている(いた)
2. カルチャーセンターの講座等を受講している(いた)
3. 学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している(いた)
4. 指導者や教授者として教えている(いた)
5. その他(具体的に:)

煎茶道6 あなたは煎茶道に関する活動をどのくらいの頻度で行っています(いました)か。選択肢の中からお選びください。(1つ)

1. ほぼ毎日
2. 週に2～3回
3. 週1回程度
4. 月数回程度

5. 月1回程度
6. 年数回程度
7. 年1回程度

煎茶道7 あなたは煎茶道に関する活動に、月幾らくらいの費用を使っています(いました)か。
選択肢の中からお選びください。(1つ)

1. 5,000 円未満
2. 5,000 円以上～10,000 円未満
3. 10,000 円以上～15,000 円未満
4. 15,000 円以上～20,000 円未満
5. 20,000 円以上～25,000 円未満
6. 25,000 円以上～30,000 円未満
7. 30,000 円以上～35,000 円未満
8. 35,000 円以上～40,000 円未満
9. 40,000 円以上～45,000 円未満
10. 45,000 円以上～50,000 円未満
11. 50,000 円以上

煎茶道8 あなたが煎茶道の中で関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける
2. 手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる
3. 煎茶席のしつらえや、そこから感じることができる四季等
4. 集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる
5. 主客の心の交流
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他(具体的に:)
8. 上記の中で当てはまるものはない

●イベント等で煎茶道を体験した人の質問(FQ1で2に回答)

煎茶道9 あなたが煎茶道を体験したきっかけとして、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた
2. 親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた
3. 友人、知人などから勧められた・誘われた
4. 学校や、煎茶道の稽古場や教室、文化施設等で体験イベントが行われていた
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った

6. 趣味や教養として、煎茶道に興味関心があった
7. 煎茶道に係る仕事や職業に興味関心があった
8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他（具体的に： ）

煎茶道 10 あなたはどのような場で煎茶道を体験しましたか。あてはまるものをお選びください。
（いくつでも）

1. 教室や稽古場等で開かれた体験会
2. 学校の授業や職場の研修会
3. 学校や職場の部活動、同好会やサークルが行った体験イベント
4. 文化施設等で行われた体験イベント
5. 自宅
6. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事の中で体験
7. その他（具体的に： ）

煎茶道 11 あなたが今後、煎茶道を習う機会があった場合、どのような状況だと参加をしやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人から習えたら
2. 通いやすい場所で習えたら
3. 費用が手頃だったら
4. 必要な道具等が借りられたら
5. 習う時間帯を調整してもらいやすかったら
6. 指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていたら
7. 指導で教本やテキストを使っていたら
8. その他（具体的に： ）
9. わからない

煎茶道 12 もし煎茶道を習い始めるとしたら、月にどの程度なら支払えますか。選択肢の中から
お選びください。（1つ）

1. 5,000 円未満
2. 5,000 円以上～10,000 円未満
3. 10,000 円以上～15,000 円未満
4. 15,000 円以上～20,000 円未満
5. 20,000 円以上～25,000 円未満
6. 25,000 円以上～30,000 円未満
7. 30,000 円以上～35,000 円未満
8. 35,000 円以上～40,000 円未満

9. 40,000 円以上～45,000 円未満
10. 45,000 円以上～50,000 円未満
11. 50,000 円以上

煎茶道 13 あなたがこれまでに、煎茶道を習っていない事情や理由として、あてはまるものを選びください。(いくつでも)

1. 興味がなかった
2. 通いやすい場所に稽古場や教室がなかった
3. 習うための授業料等の費用が確保できなかった
4. 習うための十分な時間が取れなかった
5. カリキュラムの内容や必要となる費用等の十分な情報が明示されていなかった
6. 稽古場や教室等の雰囲気が分からなかった
7. 習う内容についていけるかどうか不安がある
8. 他の趣味や娯楽の方に関心が向いている
9. 自分の趣味と合わない
10. その他（具体的に： ）

煎茶道 14 あなたが煎茶道について持っている印象やイメージについて、あてはまるものを選びください。(いくつでも)

1. 煎茶やお菓子を楽しめる
2. 日本の伝統文化への理解を深められる
3. 暮らし、生活を豊かにしてくれる
4. 作法、しきたりなどが複雑
5. 人間関係が複雑
6. 月謝や道具等にお金がかかる
7. 習い始めると時間を取られる
8. 一般に知られていない
9. その他（具体的に： ）
10. 特に印象はない、わからない

煎茶道 15 あなたが煎茶道の中で関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものを選びください。(いくつでも)

1. 煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける
2. 手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる
3. 煎茶席のしつらえや、そこから感じることができる四季等
4. 集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる
5. 主客の心の交流

6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

●煎茶道を体験や経験を全くしたことがない人に対する質問（F Q 1で3に回答）

煎茶道 16 もし、あなたが煎茶道を体験する機会があった場合、どのような内容であれば参加してみたいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 煎茶席でのお茶のいただき方や、基本的な作法等、客としての振る舞い方を教えてくれる
2. 煎茶道の歴史や意義を教えてくれる
3. 煎茶席で使う道具やしつらいを詳しく教えてくれる
4. 普段の生活に応用した、お茶の楽しみ方を教えてくれる
5. その他（具体的に： ）
6. 上記の中で当てはまるものはない

煎茶道 17 あなたが煎茶道を体験する機会があった場合、どのような条件や状況だと参加をしやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人と一緒に体験できたら
2. 行きやすい場所で体験できたら
3. 手ごろな参加費で参加できたら
4. 体験に必要な費用や道具が明示されていれば
5. 体験する時間帯等を調整してもらいやすければ
6. 初心者だけが参加できるような機会があれば
7. 体験する内容や雰囲気を事前に確認できれば
8. 指導者の教え方が分かりやすかったら
9. その他（具体的に： ）
10. わからない

煎茶道 18 あなたがこれまでに、煎茶道を体験したことがない事情や理由があれば、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. そもそも知らなかった
2. 興味がない
3. 気軽に体験できそうな場所や機会がなかった
4. 参加する時間がとれなかった
5. 体験できる場所や機会があることを知らなかった
6. 体験できる詳しい内容が分からなかった
7. 他の趣味や娯楽の方に関心が向いている
8. 自分の趣味と合わない

9. その他（具体的に： ）

煎茶道 19 あなたが煎茶道について持っている印象やイメージについて、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 煎茶やお菓子を楽しめる
2. 日本の伝統文化への理解を深められる
3. 暮らし、生活を豊かにしてくれる
4. 作法、しきたりなどが複雑
5. 人間関係が複雑
6. 月謝や道具等にお金がかかる
7. 習い始めると時間を取られる
8. 一般に知られていない
9. その他（具体的に： ）
10. 特に印象はない、わからない

煎茶道 20 煎茶道の魅力について、どのような説明や情報があるなら、煎茶道を実際に体験してみたいと思われますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 煎茶や玉露等を淹れ、おいしくいただける
2. 手前・作法や煎茶や玉露等の淹れ方が分かる
3. 煎茶席のしつらえや、そこから感じることができる四季等
4. 集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる
5. 主客の心の交流
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

②香道

●香道を習っている（習っていた）者に対する質問（F Q 2で1に回答）

香道 1 あなたが香道を習い始めたきっかけとして、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた
2. 親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた
3. 友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた
4. 学校の授業や、香や香木を扱う店（香舗）での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った

6. 趣味や教養として、香道に興味関心があった
7. 香道に係る仕事や職業に興味関心があった
8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他（具体的に： ）

香道2 あなたが香道を習い始めた当初、次のうちどのような方法で習っていましたか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人に習っていた
2. 学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた
3. カルチャーセンターの講座で習っていた
4. 稽古場や教室で習っていた
5. その他（具体的に： ）

香道2 補問 その方法を選んだ理由をお選びください。（いくつでも）

1. 家族や友人等と一緒に良かった
2. 通いやすい場所だった
3. 費用が手頃だった
4. 道具等が借りられた
5. 通いやすい時間帯だった
6. 指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていた
7. 本格的に習ってみたかった
8. 手軽に習ってみたかった
9. その他（具体的に： ）
10. 特に理由はない、わからない

香道3 現在、香道に関する活動を続けていますか。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 続けている
2. 続けない

<上記で1と回答した方に>

香道3 補問1 あなたが香道に関する活動を続けるようになった理由として、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 指導者や教授者として活動したい（している）
2. 日本の文化だから
3. 一緒に楽しむ仲間がいる
4. 香木等の焚き方や、香席のしつらいの仕方など、奥深い文化をもっと知りたい
5. 香席で聞く香木等の香りが心地よい

6. 習っていくうちに、暮らし、生活の一部となった
7. その他（具体的に： ）
8. 特に理由はない
9. 上記の中で当てはまるものはない

＜上記で2と回答した方に＞

香道3 補問2 あなたが香道に関する活動から離れたきっかけや理由として、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 時間がなくなった
2. 近くに習う場所がなくなった
3. 当初目標としていたことが達成できた
4. 興味を失った
5. 経済的に続けるのが難しくなった
6. 健康面、体調面で続けることが難しくなった
- 7.一緒に活動する家族や友人等が辞めてしまった
8. 習っている内容についていけなくなった
9. 指導者や教授者を引退した
10. その他（具体的に： ）

香道4 あなたが香道を続けている（続けていた）年数を選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 1年未満
2. 1～3年未満
3. 3～5年未満
4. 5～10年未満
5. 10～20年未満
6. 20年以上

香道5 あなたの現在の香道の活動内容（かつて行っていた内容）について、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 教室や稽古場で習っている（いた）
2. カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）
3. 学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）
4. 指導者や教授者として教えている（いた）
5. その他（具体的に： ）

香道6 あなたは香道に関する活動をどのくらいの頻度で行っています（いました）か。選択肢の中から選びください。（1つ）

1. ほぼ毎日
2. 週に2～3回
3. 週1回程度
4. 月数回程度
5. 月1回程度
6. 年数回程度
7. 年1回程度

香道7 あなたは香道に関する活動に、月幾らくらいの費用を使っています（いました）か。選択肢の中から選びください。（1つ）

1. 5,000 円未満
2. 5,000 円以上～10,000 円未満
3. 10,000 円以上～15,000 円未満
4. 15,000 円以上～20,000 円未満
5. 20,000 円以上～25,000 円未満
6. 25,000 円以上～30,000 円未満
7. 30,000 円以上～35,000 円未満
8. 35,000 円以上～40,000 円未満
9. 40,000 円以上～45,000 円未満
10. 45,000 円以上～50,000 円未満
11. 50,000 円以上

香道8 あなたが香道の中で関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものを選びください。（いくつでも）

1. 香木等を焚きその香りを楽しむ
2. 香木等に応じた焚き方が分かる
3. 香席のしつらえや、そこから感じることができる四季等
4. 集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる
5. 主客の心の交流
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

●イベント等で香道を体験した人の質問（F Q 2で2に回答）

香道 9 あなたが香道を体験したきっかけとして、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた
2. 親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた
3. 友人、知人などから勧められた・誘われた
4. 学校や、香や香木を扱う店（香舗）、文化施設等で体験イベントが行われていた
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った
6. 趣味や教養として、香道に興味関心があった
7. 香道に係る仕事や職業に興味関心があった
8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他（具体的に： ）

香道 10 あなたはどのような場で香道を体験しましたか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 教室や稽古場、香や香木を扱う店（香舗）等で開かれた体験会
2. 学校の授業や職場の研修会
3. 学校や職場の部活動、同好会やサークルが行った体験イベント
4. 文化施設等で行われた体験イベント
5. 自宅
6. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事の中で体験
7. その他（具体的に： ）

香道 11 あなたが今後、香道を習う機会があった場合、どのような状況だと参加をしやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人から習えたら
2. 通いやすい場所で習えたら
3. 費用が手頃だったら
4. 必要な道具等が借りられたら
5. 習う時間帯を調整してもらいやすかったら
6. 指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていたら
7. 指導で教本やテキストを使っていたら
8. その他（具体的に： ）
9. わからない

香道 12 もし香道を習い始めるとしたら、月にどの程度なら支払えますか。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 5,000 円未満
2. 5,000 円以上～10,000 円未満
3. 10,000 円以上～15,000 円未満
4. 15,000 円以上～20,000 円未満
5. 20,000 円以上～25,000 円未満
6. 25,000 円以上～30,000 円未満
7. 30,000 円以上～35,000 円未満
8. 35,000 円以上～40,000 円未満
9. 40,000 円以上～45,000 円未満
10. 45,000 円以上～50,000 円未満
11. 50,000 円以上

香道 13 あなたがこれまでに、香道を習っていない事情や理由として、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 興味がなかった
2. 通いやすい場所に稽古場や教室がなかった
3. 習うための授業料等の費用が確保できなかった
4. 習うための十分な時間が取れなかった
5. カリキュラムの内容や必要となる費用等の十分な情報が明示されていなかった
6. 稽古場や教室等の雰囲気が分からなかった
7. 習う内容についていけるかどうか不安がある
8. 他の趣味や娯楽の方に関心が向いている
9. 自分の趣味と合わない
10. その他（具体的に： ）

香道 14 あなたが香道について持っている印象やイメージについて、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 香木等の香りが楽しめる
2. 日本の伝統文化への理解を深められる
3. 暮らし、生活を豊かにしてくれる
4. 作法、しきたりなどが複雑
5. 人間関係が複雑
6. 月謝や道具等にお金がかかる
7. 習い始めると時間を取られる
8. 一般に知られていない

9. その他（具体的に： ）
10. 特に印象はない、わからない

香道 15 あなたが香道の中で関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 香木等を焚きその香を楽しめる
2. 香木等に応じた焚き方が分かる
3. 香席のしつらえや、そこから感じることができる四季等
4. 集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる
5. 主客の心の交流
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

●香道を体験や経験を全くしたことがない人に対する質問（F Q 2で3に回答）

香道 16 もし、あなたが香道を体験する機会があった場合、どのような内容であれば参加してみたいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 香席でのお香の聞き方や、基本的な作法等、客としての振る舞い方を教えてくれる
2. 香道の歴史や意義を教えてくれる
3. 香木や香席で使う道具やしつらいを詳しく教えてくれる
4. 普段の生活に応用した、香の楽しみ方を教えてくれる
5. その他（具体的に： ）
6. 上記の中で当てはまるものはない

香道 17 あなたが香道を体験する機会があった場合、どのような条件や状況だと参加をしやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人と一緒に体験できたら
2. 行きやすい場所で体験できたら
3. 手ごろな参加費で参加できたら
4. 体験に必要な費用や道具が明示されていれば
5. 体験する時間帯等を調整してもらいやすければ
6. 初心者だけが参加できるような機会があれば
7. 体験する内容や雰囲気を事前に確認できれば
8. 指導者の教え方が分かりやすかったら
9. その他（具体的に： ）
10. わからない

香道 18 あなたがこれまでに、香道を体験したことがない事情や理由があれば、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. そもそも知らなかった
2. 興味がない
3. 気軽に体験できそうな場所や機会がなかった
4. 参加する時間がとれなかった
5. 体験できる場所や機会があることを知らなかった
6. 体験できる詳しい内容が分からなかった
7. 他の趣味や娯楽の方に関心が向いている
8. 自分の趣味と合わない
9. その他(具体的に:)

香道 19 あなたが香道について持っている印象やイメージについて、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 香木等の香りが楽しめる
2. 日本の伝統文化への理解を深められる
3. 暮らし、生活を豊かにしてくれる
4. 作法、しきたりなどが複雑
5. 人間関係が複雑
6. 月謝や道具等にお金がかかる
7. 習い始めると時間を取られる
8. 一般に知られていない
9. その他(具体的に:)
10. 特に印象はない、わからない

香道 20 香道の魅力について、どのような説明や情報があるなら、香道を実際に体験してみたいと思われますか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 香木等を焚きその香りを楽しめる
2. 香木等に応じた焚き方が分かる
3. 香席のしつらえや、そこから感じることができる四季等
4. 集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる
5. 主客の心の交流
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他(具体的に:)
8. 上記の中で当てはまるものはない

③和装

●着物の着付けができる人に対する質問（F Q 3 で 1 に回答）

和装 1 あなたが着物の着付けを習おうと思ったきっかけとして、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた
2. 親や兄弟姉妹・祖父母などが着付けの指導をしていた
3. 友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた
4. 学校の授業や、呉服店等が実施する着付け教室、文化施設等で行われたイベントで体験した
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った
6. 成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があった
7. 和装に係る仕事や職業に興味関心があった
8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他（具体的に： ）

和装 2 あなたが着付けを習い始めた当初、次のうちどのような方法で習っていましたか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人に習っていた
2. 学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた
3. カルチャーセンターの講座で習っていた
4. 着付け教室で習っていた
5. 着付けや美容の専門学校で習っていた
6. その他（具体的に： ）

和装 2 補問 その方法を選んだ理由をお選びください。（いくつでも）

1. 家族や友人等と一緒に良かった
2. 通いやすい場所だった
3. 費用が手頃だった
4. 道具等が借りられた
5. 通いやすい時間帯だった
6. 指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていた
7. 本格的に習ってみたかった
8. 手軽に習ってみたかった
9. その他（具体的に： ）
10. 特に理由はない、わからない

和装3 現在、着物の着付けを行っていますか。選択肢の中からお選びください。(1つ)

1. 現在も着付けを行っている
2. 現在は着付けを行っていない

＜上記で1と回答した方に＞

和装3 補問1 あなたが着付けを続けるようになった理由として、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 指導者や教授者として活動したい(している)
2. 日本の文化だから
3. 一緒に楽しむ仲間がいる
4. 着物の着付け方や取り合わせ方など、奥深い文化をもっと知りたい
5. 四季や行事によって着物を着分けて装うことが楽しい
6. 習っていくうちに、暮らし、生活の一部となった
7. その他(具体的に:)
8. 特に理由はない
9. 上記の中で当てはまるものはない

＜上記で2と回答した方に＞

和装3 補問2 あなたが着付けをしなくなったきっかけや理由として、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 時間がなくなった
2. 近くに習う場所がなくなった
3. 着物の相談等ができる場所がなくなった
4. 興味を失った
5. 経済的に続けるのが難しくなった
6. 健康面、体調面で続けることが難しくなった
7. 一緒に着物を楽しむ仲間と疎遠になった
8. 着物を着ていくような場面や機会がなくなった
9. 着崩れする、動きにくい
10. 着付けに関する仕事を辞めた
11. その他(具体的に:)

和装4 あなたが着付けをしている(いた)年数を選択肢の中からお選びください。(1つ)

1. 1年未満
2. 1～3年未満
3. 3～5年未満
4. 5～10年未満

5. 10～20 年未満
6. 20 年以上

和装5 あなたは現在、どのような機会に自分もしくは他者への着物の着付けをしますか（していましたか）。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 普段着として着物を着る時
2. 仕事着として着物を着る時
3. 入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時
4. 初詣等の年中行事に参加する時
5. 観劇の際や茶会等の催事に参加する時
6. 仕事として、他者への着付けを依頼された時
7. 親族や知人等に、他者への着付けを依頼された時
8. その他（具体的に： ）

和装5 補問 他の方に着付けをしてもらう機会がありますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 仕事着として着物を着る時
2. 入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭に出席する時
3. 初詣等の年中行事に参加する時
4. 観劇の際や茶会等の催事に参加する時
5. 着付けてもらうことはない
6. その他（具体的に： ）

和装6 あなたは着物に関する活動をどのくらいの頻度で行っています（いました）か。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. ほぼ毎日
2. 週に2～3回
3. 週1回程度
4. 月数回程度
5. 月1回程度
6. 年数回程度
7. 年1回程度

和装7 あなたは着物に関する活動に、月幾らくらいの費用を使っています（いました）か。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 5,000 円未満
2. 5,000 円以上～10,000 円未満

3. 10,000 円以上～15,000 円未満
4. 15,000 円以上～20,000 円未満
5. 20,000 円以上～25,000 円未満
6. 25,000 円以上～30,000 円未満
7. 30,000 円以上～35,000 円未満
8. 35,000 円以上～40,000 円未満
9. 40,000 円以上～45,000 円未満
10. 45,000 円以上～50,000 円未満
11. 50,000 円以上

和装 8 あなたが着物の着付けの中で関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 季節にあわせた着物を楽しめる
2. 職人の手仕事による着物等が持つ独特の質感や意匠
3. 生地や色柄の取り合わせ等、工夫1つでおしゃれを楽しめる
4. お祭りや伝統的な雰囲気がある場所に着ていくと見映えが良い
5. 着物を着ることで、落ち着いた気持ちになる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他(具体的に:)
8. 上記の中で当てはまるものはない

●着付けはできないが着物を着たことがある人への質問 (F Q 3 で 2 に回答)

和装 9 あなたが着物を着た(着せてもらった)きっかけとして、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 親や兄弟姉妹・祖父母などが自分で着物を着付けていた
2. 親や兄弟姉妹・祖父母などが着付けの指導をしていた
3. 家族や友人、知人などから着物を着ることを勧められた・誘われた
4. 学校や、呉服店等が実施する着付け教室、文化施設等で体験イベントが行われていた
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った
6. 成人式・結婚式等の冠婚葬祭や初詣等の年中行事に参加する必要があった
7. 和装に係る仕事や職業に興味関心があった
8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他(具体的に:)

和装 10 あなたはどのような場で着物を着ましたか(着せてもらい)ましたか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 入学式や成人式、結婚式等の冠婚葬祭

2. 初詣等の年中行事
3. 観劇の際や茶会等の催事
4. 旅行先の観光地
5. 学校の授業や、呉服店等が実施する着物に関するイベント
6. 自宅
7. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事の中で体験
8. その他（具体的に： ）

和装 11 あなたが今後、着物の着付けを習う機会があった場合、どのような状況だと参加をしやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人から習えたら
2. 通いやすい場所で習えたら
3. 費用が手頃だったら
4. 着物をはじめ必要な道具等が借りられたら
5. 習う時間帯を調整してもらいやすかったら
6. 指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていたら
7. 指導で教本やテキストを使っていたら
8. その他（具体的に： ）
9. わからない

和装 12 もし着物の着付けを習い始めるとしたら、月にどの程度なら支払えますか。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 5,000 円未満
2. 5,000 円以上～10,000 円未満
3. 10,000 円以上～15,000 円未満
4. 15,000 円以上～20,000 円未満
5. 20,000 円以上～25,000 円未満
6. 25,000 円以上～30,000 円未満
7. 30,000 円以上～35,000 円未満
8. 35,000 円以上～40,000 円未満
9. 40,000 円以上～45,000 円未満
10. 45,000 円以上～50,000 円未満
11. 50,000 円以上

和装 13 あなたがこれまでに、着物の着付けを習っていない事情や理由として、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 興味がなかった
2. 通いやすい場所に着付け教室がなかった
3. 習うための授業料等の費用が確保できなかった
4. 習うための十分な時間が取れなかった
5. カリキュラムの内容や必要となる費用等の十分な情報が明示されていなかった
6. 着付け教室等の雰囲気が分からなかった
7. 習う内容についていけるかどうか不安がある
8. 他の趣味や娯楽の方に関心が向いている
9. 自分の趣味と合わない
10. その他（具体的に： ）

和装 14 あなたが着物の着付けについて持っている印象やイメージについて、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 生地や色柄等が豊富なので自分だけのおしゃれが楽しめる
2. 日本の伝統文化を体感できる
3. 伝統行事に参加する際や、歴史的な街並みを訪れる時などに着物を着ると楽しめる
4. 暮らし、生活を豊かにしてくれる
5. 着付けの仕方や、着物の取り合わせ等の決まり事が複雑
6. 着物を着ていくような場面がない
7. 動きにくい、動くと着崩れする
8. 着物等を揃えるとお金がかかる
9. 着付けを覚えるのに時間がかかる
10. その他（具体的に： ）
11. 特に印象はない、わからない

和装 15 あなたが着物の着付けの中で関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 季節にあわせた着物を楽しめる
2. 職人の手仕事による着物等が持つ独特の質感や意匠
3. 生地や色柄の取り合わせ等、工夫1つでおしゃれを楽しめる
4. お祭りや伝統的な雰囲気がある場所に着ていくと見映えが良い
5. 着物を着ることで、落ち着いた気持ちになる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

●着物を着ていない人への質問（F Q 3で3に回答）

和装 16 もし、あなたが着物を着たり、着付けを体験したりする機会があった場合、どのような内容であれば参加してみたいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 季節や場面に応じた着物や帯等の選び方や取り合わせ方を教えてくれる
2. 基本的な着物の着付け方と着方のコツを教えてくれる
3. 着物を着た時の適切な姿勢や歩き方、所作等を教えてくれる
4. 着物のお手入れの仕方や保管の仕方を教えてくれる
5. 普段の生活の中で、着物をどのように楽しんだら良いのか教えてくれる
6. その他（具体的に： ）
7. 上記の中で当てはまるものはない

和装 17 あなたが着物を着たり、着付け方を体験する機会があったりした場合、どのような条件や状況だと参加をしやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人が着付けや着付け方を教えてくれたら
2. 旅行先の観光地や、催事、イベントで着付ける機会があれば
3. 手ごろな参加費で参加できたら
4. 体験に必要な費用や道具が明示されていれば
5. 着付けや着付け方を体験する時の時間帯を調整してもらいやすければ
6. 初心者だけが参加できるような機会があれば
7. 体験する内容や雰囲気を事前に確認できれば
8. 指導者の教え方が分かりやすかったら
9. その他（具体的に： ）
10. わからない

和装 18 あなたがこれまでに、着物を着たことがなかったり、着付けを体験したことがなかったりした事情や理由があれば、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. そもそも知らなかった
2. 興味がない
3. 気軽に体験できそうな場所や機会がなかった
4. 参加する時間がとれなかった
5. 体験できる場所や機会があることを知らなかった
6. 体験できる詳しい内容が分からなかった
7. 他の趣味や娯楽の方に関心が向いている
8. 自分の趣味と合わない
9. その他（具体的に： ）

和装 19 あなたが着物の着付けについて持っている印象やイメージについて、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 生地や色柄等が豊富なので自分だけのおしゃれが楽しめる
2. 日本の伝統文化を体感できる
3. 伝統行事に参加する際や、歴史的な街並みを訪れる時などに着物を着ると楽しめる
4. 暮らし、生活を豊かにしてくれる
5. 着付けの仕方や、着物の取り合わせ等の決まり事が複雑
6. 着物を着ていくような場面がない
7. 動きにくい、動くと着崩れする
8. 着物等を揃えるとお金がかかる
9. 着付けを覚えるのに時間がかかる
10. その他（具体的に： ）
11. 特に印象はない、わからない

和装 20 和装の魅力について、どのような説明や情報があるなら、着物を着たり、着付けを体験してみたいと思われますか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 季節にあわせた着物を楽しめる
2. 職人の手仕事による着物等が持つ独特の質感や意匠
3. 生地や色柄の取り合わせ等、工夫1つでおしゃれを楽しめる
4. お祭りや伝統的な雰囲気がある場所に着ていくと見映えが良い
5. 着物を着ることで、落ち着いた気持ちになる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

④礼法

●礼法を習っている（習っていた）者に対する質問（FQ4で1に回答）

礼法 1 あなたが礼法を習い始めたきっかけとして、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた
2. 親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた
3. 友人、知人などから習うことを勧められた・誘われた
4. 学校の授業や、礼法の稽古場・教室での体験会、文化施設等で行われたイベントで体験した
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った
6. 趣味や教養として、礼法に興味関心があった
7. 礼法に係る仕事や職業に興味関心があった

8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他（具体的に： ）

礼法2 あなたが礼法を習い始めた当初、次のうちどのような方法で習っていましたか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人に習っていた
2. 学校や職場などの部活動、同好会、サークルで習っていた
3. カルチャーセンターの講座で習っていた
4. 稽古場や教室で習っていた
5. その他（具体的に： ）

礼法2 補問 その方法を選んだ理由をお選びください。（いくつでも）

1. 家族や友人等と一緒に良かった
2. 通いやすい場所だった
3. 費用が手頃だった
4. 道具等が借りられた
5. 通いやすい時間帯だった
6. 指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていた
7. 本格的に習ってみたかった
8. 手軽に習ってみたかった
9. その他（具体的に： ）
10. 特に理由はない、わからない

礼法3 現在、礼法に関する活動を続けていますか。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 続けている
2. 続けない

<上記で1と回答した方に>

礼法3 補問1 あなたが礼法に関する活動を続けるようになった理由として、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 指導者や教授者として活動したい（している）
2. 日本の文化だから
3. 一緒に楽しむ仲間がいる
4. 相手に敬意を示す所作や作法、四季に応じたしつらいの仕方など、奥深い文化をもっと知りたい
5. 礼法を習ったり実践したりすると、気持ちが穏やかになる
6. 習っていくうちに、暮らし、生活の一部となった

7. その他（具体的に： ）
8. 特に理由はない
9. 上記の中で当てはまるものはない

＜上記で2と回答した方に＞

礼法3 補問2 あなたが礼法に関する活動から離れたきっかけや理由として、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 時間がなくなった
2. 近くに習う場所がなくなった
3. 当初目標としていたことが達成できた
4. 興味を失った
5. 経済的に続けるのが難しくなった
6. 健康面、体調面で続けることが難しくなった
7. 一緒に活動する家族や友人等が辞めてしまった
8. 習っている内容についていけなくなった
9. 指導者や教授者を引退した
10. その他（具体的に： ）

礼法4 あなたが礼法を続けている（続けていた）年数を選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 1年未満
2. 1～3年未満
3. 3～5年未満
4. 5～10年未満
5. 10～20年未満
6. 20年以上

礼法5 あなたの現在の礼法の活動内容（かつて行っていた内容）について、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 教室や稽古場で習っている（いた）
2. カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）
3. 学校や職場などの部活動、同好会、サークルに所属して活動している（いた）
4. 指導者や教授者として教えている（いた）
5. その他（具体的に： ）

礼法6 あなたは礼法に関する活動をどのくらいの頻度で行っています（いました）か。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. ほぼ毎日

2. 週に2～3回
3. 週1回程度
4. 月数回程度
5. 月1回程度
6. 年数回程度
7. 年1回程度

礼法7 あなたは礼法に関する活動に、月幾らくらいの費用を使っています（いました）か。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 5,000 円未満
2. 5,000 円以上～10,000 円未満
3. 10,000 円以上～15,000 円未満
4. 15,000 円以上～20,000 円未満
5. 20,000 円以上～25,000 円未満
6. 25,000 円以上～30,000 円未満
7. 30,000 円以上～35,000 円未満
8. 35,000 円以上～40,000 円未満
9. 40,000 円以上～45,000 円未満
10. 45,000 円以上～50,000 円未満
11. 50,000 円以上

礼法8 あなたが礼法の中で関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 伝統的な礼儀作法を生活の中で生かすことができる
2. 相手に敬意を示すために洗練されてきた作法や所作
3. 礼法に則った部屋のしつらえや、そこから感じることができる四季等
4. 集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる
5. 礼法を通じて人間関係を円滑に保つことができる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

●イベント等で礼法を体験した人に対する質問（FQ4で2に回答）

礼法9 あなたが礼法を体験したきっかけとして、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 親や兄弟姉妹、祖父母などが習っていた
2. 親や兄弟姉妹、祖父母などが教えていた

3. 友人、知人などから勧められた・誘われた
4. 学校や、礼法の稽古場や教室、文化施設等で体験イベントが行われていた
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った
6. 趣味や教養として、礼法に興味関心があった
7. 礼法に係る仕事や職業に興味関心があった
8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他（具体的に： ）

礼法 10 あなたはどのような場で礼法を体験しましたか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 教室や稽古場等で開かれた体験会
2. 学校の授業や職場の研修会
3. 学校や職場の部活動、同好会やサークルが行った体験イベント
4. 文化施設等で行われた体験イベント
5. 自宅
6. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事の中で体験
7. その他（具体的に： ）

礼法 11 あなたが今後、礼法を習う機会があった場合、どのような状況だと参加をしやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人から習えたら
2. 通いやすい場所で習えたら
3. 費用が手頃だったら
4. 必要な道具等が借りられたら
5. 習う時間帯を調整してもらいやすかったら
6. 指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていたら
7. 指導で教本やテキストを使っていたら
8. その他（具体的に： ）
9. わからない

礼法 12 もし礼法を習い始めるとしたら、月にどの程度なら支払えますか。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 5,000 円未満
2. 5,000 円以上～10,000 円未満
3. 10,000 円以上～15,000 円未満
4. 15,000 円以上～20,000 円未満
5. 20,000 円以上～25,000 円未満

6. 25,000 円以上～30,000 円未満
7. 30,000 円以上～35,000 円未満
8. 35,000 円以上～40,000 円未満
9. 40,000 円以上～45,000 円未満
10. 45,000 円以上～50,000 円未満
11. 50,000 円以上

礼法 13 あなたがこれまでに、礼法を習っていない事情や理由として、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 興味がなかった
2. 通いやすい場所に稽古場や教室がなかった
3. 習うための授業料等の費用が確保できなかった
4. 習うための十分な時間が取れなかった
5. カリキュラムの内容や必要となる費用等の十分な情報が明示されていなかった
6. 稽古場や教室等の雰囲気が分からなかった
7. 習う内容についていけるかどうか不安がある
8. 他の趣味や娯楽の方に関心が向いている
9. 自分の趣味と合わない
10. その他(具体的に:)

礼法 14 あなたが礼法について持っている印象やイメージについて、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 伝統的な礼儀作法を習うことが楽しめる
2. 日本の伝統文化への理解を深められる
3. 暮らし、生活を豊かにしてくれる
4. 作法、しきたりなどが複雑
5. 人間関係が複雑
6. 月謝等にお金がかかる
7. 習い始めると時間を取られる
8. 一般に知られていない
9. その他(具体的に:)
10. 特に印象はない、わからない

礼法 15 あなたが礼法で関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 伝統的な礼儀作法を生活の中で生かすことができる
2. 相手に敬意を示すために洗練されてきた作法や所作

3. 礼法に則った部屋のしつらえや、そこから感じることができる四季等
4. 集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる
5. 礼法を通じて人間関係を円滑に保つことができる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

●礼法を経験したことがない者に対する質問（F Q 4で3に回答）

礼法 16 もし、あなたが礼法を体験する機会があった場合、どのような内容であれば参加をしてみたいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 礼法の基本的な作法や所作を教えてくれる
2. 礼法の歴史や意義を教えてくれる
3. 礼式に則ったしつらいの仕方や、贈答の形としての折り型・水引・結びなどを詳しく教えてくれる
4. 普段の生活の中で、礼法がどのように役立つのか教えてくれる
5. その他（具体的に： ）
6. 上記の中で当てはまるものはない

礼法 17 あなたが礼法を体験する機会があった場合、どのような条件や状況だと参加をしやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人と一緒に体験できたら
2. 行きやすい場所で体験できたら
3. 手ごろな参加費で参加できたら
4. 体験に必要な費用や道具が明示されていれば
5. 体験する時間帯等を調整してもらいやすければ
6. 初心者だけが参加できるような機会があれば
7. 体験する内容や雰囲気を事前に確認できれば
8. 指導者の教え方が分かりやすかったら
9. その他（具体的に： ）
10. わからない

礼法 18 あなたが礼法を体験したことがない事情や理由があれば、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. そもそも知らなかった
2. 興味がない
3. 気軽に体験できそうな場所や機会がなかった
4. 参加する時間がとれなかった

5. 体験できる場所や機会があることを知らなかった
6. 体験できる詳しい内容が分からなかった
7. 他の趣味や娯楽の方に興味が向いている
8. 自分の趣味と合わない
9. その他（具体的に： ）

礼法 19 あなたが礼法について持っている印象やイメージについて、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 伝統的な礼儀作法を習うことが楽しめる
2. 日本の伝統文化への理解を深められる
3. 暮らし、生活を豊かにしてくれる
4. 作法、しきたりなどが複雑
5. 人間関係が複雑
6. 月謝等にお金がかかる
7. 習い始めると時間を取られる
8. 一般に知られていない
9. その他（具体的に： ）
10. 特に印象はない、わからない

礼法 20 礼法の魅力について、どのような説明や情報があるなら、礼法を実際に体験してみたいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 伝統的な礼儀作法を生活の中で生かすことができる
2. 相手に敬意を示すために洗練されてきた作法や所作
3. 礼法に則った部屋のしつらえや、そこから感じることができる四季等
4. 集中力を高めたり、心を落ち着かせたりすることができる
5. 礼法を通じて人間関係を円滑に保つことができる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

⑤盆栽

●盆栽を経験した者に対する質問（F Q 5 で 1 に回答）

盆栽 1 あなたが盆栽を始めたきっかけとして、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた
2. 親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた
3. 友人、知人などが盆栽を育てていて勧められた・誘われた

4. 学校や職場で育てられているのを見たり、公園や庭園、盆栽園や盆栽展、文化施設等のイベントで鑑賞や体験をしたりした
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った
6. 趣味や教養として、盆栽に興味関心があった
7. 盆栽に係る仕事や職業に興味関心があった
8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他（具体的に： ）

盆栽2 あなたが盆栽を始めた時、次のうちどのような方法で育て方や剪定の方法を学んでいましたか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人に教えてもらっていた
2. 盆栽の愛好者団体に教えてもらっていた
3. カルチャーセンターの講座で習っていた
4. 盆栽園で教えてもらっていた
5. 雑誌や専門書等を見て学んでいた
6. ウェブサイトやYouTube 等を見て学んでいた
7. その他（具体的に： ）

盆栽2 補問 その方法を選んだ理由をお選びください。（いくつでも）

1. 家族や友人等と一緒に良かった
2. 通いやすい場所だった
3. 費用が手頃だった
4. 道具等が借りられた
5. 通いやすい時間帯だった
6. 指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていた
7. 雑誌や専門誌の解説が分かりやすかった
8. 本格的にやってみたかった
9. 手軽にやってみたかった
10. その他（具体的に： ）
11. 特に理由はない、わからない

盆栽3 現在、盆栽を続けていますか。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 続けている
2. 続けていない

<上記で1と回答した方に>

盆栽3 補問1 あなたが盆栽を続けるようになった理由として、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 盆栽園を営みたい(営んでいる)
2. 日本の文化だから
3. 一緒に楽しむ仲間がいる
4. 盆栽の形造りや剪定や培養など、奥深い文化をもっと知りたい
5. 盆栽に愛着が湧いた(盆栽を育てるのが純粋に楽しい)
6. 暮らし、生活の一部となった(盆栽を育てることが生きがいとなった)
7. その他(具体的に:)
8. 特に理由はない
9. 上記の中で当てはまるものはない

<上記で2と回答した方>

盆栽3 補問2 あなたが盆栽から離れたきっかけや理由として、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 時間がなくなった
2. 盆栽の育成ができる環境を維持できなくなった
3. 手入れ等の相談をできる場所がなくなった
4. 興味を失った
5. 経済的に続けるのが難しくなった
6. 健康面、体調面で続けることが難しくなった
7. 一緒に世話をしてくれる家族や仲間の手が借りられなくなった
8. 盆栽園を閉鎖した
9. その他(具体的に:)

盆栽4 あなたが盆栽を続けている(続けていた)年数を選択肢の中からお選びください。(1つ)

1. 1年未満
2. 1～3年未満
3. 3～5年未満
4. 5～10年未満
5. 10～20年未満
6. 20年以上

盆栽5 あなたの現在の盆栽に関する活動内容（かつて行っていた内容）について、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 自宅等で盆栽の手入れをしている（いた）
2. 盆栽園に盆栽を預けて手入れをしてもらっている（いた）
3. 盆栽を盆栽展に出品している（いた）
4. 盆栽園や盆栽の教室等で習っている（いた）
5. カルチャーセンターの講座等を受講している（いた）
6. 盆栽園を営んでいる（いた）
7. 講師として教室や体験会、講座を開いている（いた）
8. その他（具体的に： ）

盆栽6 あなたは盆栽に関する活動をどのくらいの頻度で行っています（いました）か。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. ほぼ毎日
2. 週に2～3回
3. 週1回程度
4. 月数回程度
5. 月1回程度
6. 年数回程度
7. 年1回程度

盆栽7 あなたは盆栽を育てるにあたって、月幾らくらいの費用を使っています（いました）か。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 5,000 円未満
2. 5,000 円以上～10,000 円未満
3. 10,000 円以上～15,000 円未満
4. 15,000 円以上～20,000 円未満
5. 20,000 円以上～25,000 円未満
6. 25,000 円以上～30,000 円未満
7. 30,000 円以上～35,000 円未満
8. 35,000 円以上～40,000 円未満
9. 40,000 円以上～45,000 円未満
10. 45,000 円以上～50,000 円未満
11. 50,000 円以上

盆栽8 あなたが盆栽で関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 盆栽を育て、仕立てていくことで様々に変化する姿や形
2. 盆栽として仕立てていくための剪定等の技術
3. 樹木と植木鉢（盆器）を取り合わせることで生まれる盆栽の姿や形
4. 盆栽を育てる中で感じられる四季等
5. 盆栽を育てることで、心を落ち着かせることができる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

●イベント等で盆栽体験をしたことがある方への質問（F Q 5で2に回答）

盆栽9 あなたが盆栽体験をしたきっかけとして、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 親や兄弟姉妹、祖父母など家族が育てていた
2. 親や兄弟姉妹、祖父母など家族が盆栽園を営んでいた
3. 友人、知人などが盆栽を育てていて、勧められた・誘われた
4. 学校や職場で育てられているものや、公園や庭園、文化施設等で行われているイベントで見た
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った
6. 趣味や教養として盆栽に興味関心があり、盆栽展等で鑑賞した
7. 盆栽に係る仕事や職業に興味関心があった
8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他（具体的に： ）

盆栽10 あなたはどのような場で盆栽体験をしましたか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 盆栽園や愛好者の団体等が主催する体験会
2. 学校の授業や職場の研修会
3. 文化施設等で行われた体験イベント
4. 自宅
5. 自分が行っている分野の趣味・習い事の中で体験
6. その他（具体的に： ）

盆栽11 あなたが今後、盆栽を育てる機会があった場合、どのような状況だと育てやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 家族や知人等、身近な人から育て方等を教えてもらえたら

2. 知人、家族と一緒に育てることができたら
3. 通いやすい場所に相談に乗ってもらえる盆栽園等があったら
4. 必要な道具等が借りられたら
5. 習う時間帯を調整してもらいやすかったら
6. 育て方や剪定の仕方等をわかりやすく示している雑誌や専門誌があったら
7. その他（具体的に： ）
8. わからない

盆栽 12 もし盆栽を始めるとしたら、どの程度なら払えますか。選択肢の中からお選びください。

（1つ）

1. 5,000 円未満
2. 5,000 円以上～10,000 円未満
3. 10,000 円以上～15,000 円未満
4. 15,000 円以上～20,000 円未満
5. 20,000 円以上～25,000 円未満
6. 25,000 円以上～30,000 円未満
7. 30,000 円以上～35,000 円未満
8. 35,000 円以上～40,000 円未満
9. 40,000 円以上～45,000 円未満
10. 45,000 円以上～50,000 円未満
11. 50,000 円以上

盆栽 13 あなたがこれまでに盆栽を育てていない事情や理由として、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 興味がなかった
2. 通いやすい場所に、盆栽の育て方等の相談に乗ってくれる場所がなかった
3. 始めるための費用が確保できなかった
4. 盆栽を育てるための十分な時間が取れそうになかった
5. 一緒にやってくれる人がいない
6. 盆栽の育て方等の相談をできる人が身近にいなかった
7. 植物の育て方や管理の仕方などが難しいと思う
8. 盆栽を育てて管理できる場所がない
9. 他の趣味や娯楽の方に興味が向いている
10. 自分の趣味と合わない
11. その他（具体的に： ）

盆栽 14 あなたが盆栽について持っている印象やイメージについて、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 盆栽を育てたり仕立てたりするのが楽しめる
2. 日本の伝統文化への理解を深められる
3. 暮らし、生活が豊かになる
4. 剪定や育成等が難しい
5. 盆栽を育てるための環境を整えるのが難しい
6. 植物を扱うのは容易ではない
7. 道具等にお金がかかる
8. 育て始めると時間を取られる
9. 一般に知られていない
10. その他(具体的に:)
11. 特に印象はない、わからない

盆栽 15 あなたが盆栽で関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 盆栽を育て、仕立てていくことで様々に変化する姿や形
2. 盆栽として仕立てていくための剪定等の技術
3. 樹木と植木鉢(盆器)を取り合わせることで生まれる盆栽の姿や形
4. 盆栽を育てる中で感じられる四季等
5. 盆栽を育てることで、心を落ち着かせることができる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他(具体的に:)
8. 上記の中で当てはまるものはない

●盆栽体験をしていない方への質問(FQ5で3に回答)

盆栽 16 もし、あなたが盆栽体験をする機会があった場合、どのような内容であれば参加してみたいと思いますか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 盆栽の種類や育て方、剪定や鑑賞の仕方を教えてくれる
2. 盆栽の歴史や意義を教えてくれる
3. 盆栽を育てるのに必要となる道具や環境等を詳しく教えてくれる
4. 普段の生活の中で、盆栽をどのように楽しめばよいのか教えてくれる
5. その他(具体的に:)
6. 上記の中で当てはまるものはない

盆栽 17 あなたが盆栽体験をする機会があった場合、どのような状況だと参加をしやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 家族や知人等、身近な人と一緒に体験できたら
2. 普段、鑑賞しに出かけている盆栽展や盆栽園で体験機会があれば
3. 手ごろな参加費で参加できたら
4. 体験に必要な費用や道具が明示されていれば
5. 体験する時間帯等を調整してもらいやすければ
6. 初心者だけが参加できるような機会があれば
7. 体験する内容や雰囲気を事前に確認できれば
8. 指導者の教え方が分かりやすかったら
9. その他(具体的に:)
10. わからない

盆栽 18 あなたがこれまでに盆栽体験をしたことがない事情や理由があれば、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. そもそも知らなかった
2. 興味がない
3. 気軽に体験できそうな場所や機会がなかった
4. 参加する時間がとれなかった
5. 体験できる場所や機会があることを知らなかった
6. 体験できる詳しい内容が分からなかった
7. 他の趣味や娯楽の方に関心が向いている
8. 自分の趣味と合わない
9. その他(具体的に:)

盆栽 19 あなたが盆栽について持っている印象やイメージについて、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 盆栽を育てたり仕立てたりするのが楽しめる
2. 日本の伝統文化への理解を深められる
3. 暮らし、生活が豊かになる
4. 剪定や育成等が難しい
5. 盆栽を育てるための環境を整えるのが難しい
6. 植物を扱うのは容易ではない
7. 道具等にお金がかかる
8. 育て始めると時間を取られる
9. 一般に知られていない
10. その他(具体的に:)

11. 特に印象はない、わからない

盆栽 20 盆栽の魅力について、どのような説明や情報があるなら、盆栽を実際に体験してみたいと思いますか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 盆栽を育て、仕立てていくことで様々に変化する姿や形
2. 盆栽として仕立てていくための剪定等の技術
3. 樹木と植木鉢（盆器）を取り合わせることで生まれる盆栽の姿や形
4. 盆栽を育てる中で感じられる四季等
5. 盆栽を育てることで、心を落ち着かせることができる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

⑥錦鯉

●錦鯉の飼育を経験した者に対する質問（F Q 6 で 1 に回答）

錦鯉 1 あなたが錦鯉の飼育を始めたきっかけとして、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた
2. 親や兄弟姉妹・祖父母など家族が養鯉場を営んでいた
3. 友人、知人などが錦鯉を飼育していて、勧められた・誘われた
4. 学校や職場で飼育されているのを見たり、公園や庭園、養鯉場や錦鯉品評会、文化施設等やイベントで観賞をしたりした
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った
6. 趣味や教養として、錦鯉に興味関心があった
7. 錦鯉に係る仕事や職業に興味関心があった
8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他（具体的に： ）

錦鯉 2 あなたが錦鯉の飼育を始めた時、次のうちどのような方法で設備や飼育の仕方について学んでいましたか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 家族や知人等、身近な人に教えてもらっていた
2. 錦鯉の愛好者団体に教えてもらっていた
3. 養鯉場で教えてもらっていた
4. 雑誌や専門書等を見て学んでいた
5. ウェブサイトやYouTube 等を見て学んでいた
6. その他（具体的に： ）

錦鯉 2 補問 その方法を選んだ理由をお選びください。(いくつでも)

1. 家族や友人等と一緒に良かった
2. 通いやすい場所だった
3. 費用が手頃だった
4. 通いやすい時間帯だった
5. 指導方法やカリキュラム、費用が具体的に示されていた
6. 雑誌や専門誌の解説が分かりやすかった
7. 本格的にやってみたかった
8. 手軽にやってみたかった
9. その他(具体的に:)
10. 特に理由はない、わからない

錦鯉 3 現在、錦鯉の飼育を続けていますか。選択肢の中からお選びください。(1つ)

1. 続けている
2. 続けない

<上記で1と回答した方に>

錦鯉 3 補問 1 あなたが錦鯉を飼育し続けるようになった理由として、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 養鯉場を営みたい(営んでいる)
2. 日本の文化だから
3. 一緒に楽しむ仲間がいる
4. 錦鯉の飼育や選別など、奥深い文化をもっと知りたい
5. 錦鯉に愛着が湧いた(飼育が純粋に楽しい)
6. 暮らし、生活の一部となった(飼育や観賞をすることが生きがいとなった)
7. その他(具体的に:)
8. 特に理由はない
9. 上記の中で当てはまるものはない

<上記で2と回答した方>

錦鯉 3 補問 2 あなたが錦鯉の飼育から離れたきっかけや理由として、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 時間がなくなった
2. 錦鯉の飼育ができる環境を維持できなくなった
3. 飼育等の相談をできる場所がなくなった
4. 興味を失った
5. 経済的に続けるのが難しくなった

6. 健康面、体調面で続けることが難しくなった
7. 一緒に世話をしてくれる家族や仲間の手が借りられなくなった
8. 養鯉場を閉鎖した
9. その他（具体的に： ）

錦鯉4 あなたが錦鯉の飼育を続けている（続けていた）年数を選択肢の中から選びください。

（1つ）

1. 1年未満
2. 1～3年未満
3. 3～5年未満
4. 5～10年未満
5. 10～20年未満
6. 20年以上

錦鯉5 あなたの現在の錦鯉に関する活動内容（かつて行っていた内容）について、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 自宅等の池で飼育している（いた）
2. 自宅等の水槽で飼育している（いた）
3. 養鯉場に預けて飼育してもらっている（いた）
4. 錦鯉の品評会に出品している（いた）
5. 錦鯉の養鯉場を営んでいる（いた）
6. その他（具体的に： ）

錦鯉6 あなたは錦鯉の飼育に関する活動をどのくらいの頻度で行っています（いました）か。選択肢の中から選びください。（1つ）

1. ほぼ毎日
2. 週に2～3回
3. 週1回程度
4. 月数回程度
5. 月1回程度
6. 年数回程度
7. 年1回程度

錦鯉7 あなたは錦鯉の飼育にあたって、月幾らくらいの費用を使っています（いました）か。選択肢の中から選びください。（1つ）

1. 1万円未満
2. 1万円以上～5万円未満

3. 5 万円以上～10 万円未満
4. 10 万円以上～50 万円未満
5. 50 万円以上～100 万円未満
6. 100 万円以上

錦鯉 8 あなたが錦鯉の飼育で関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 飼育をしていくことで、変化する模様
2. 飼育していくための技術
3. 種類によって異なる多様な色彩や模様
4. 錦鯉の飼育・観賞を通じて感じられる四季等
5. 錦鯉の飼育・観賞することで、心を落ち着かせることができる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他(具体的に:)
8. 上記の中で当てはまるものはない

●イベント等で錦鯉の体験や観賞を経験した方への質問 (F Q 6 で 2 に回答)

錦鯉 9 あなたが錦鯉と触れ合ったり、観賞したりしたきっかけとして、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 親や兄弟姉妹・祖父母など家族が飼育していた
2. 親や兄弟姉妹・祖父母など家族が養鯉場を営んでいた
3. 友人、知人などが錦鯉を飼育していて、勧められた・誘われた
4. 学校や職場で飼育されているものや、公園や庭園、文化施設等で行われているイベントで見た
5. テレビや映画、雑誌、漫画、ウェブメディア等で知った
6. 趣味や教養として錦鯉に興味関心があり、品評会等で観賞した
7. 錦鯉に係る仕事や職業に興味関心があった
8. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事と関係していた
9. その他(具体的に:)

錦鯉 10 あなたはどのような場で錦鯉と触れ合ったり、観賞したりしましたか。あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1. 錦鯉を扱う団体や業者が主催する品評会や即売会
2. 学校や職場で飼育されていた
3. 公園や庭園、文化施設等でのイベント
4. 自宅
5. 自分が行っている別の分野の趣味・習い事の中で体験

6. その他（具体的に： ）

錦鯉 11 あなたが今後、錦鯉を飼育する機会があった場合、どのような状況だと飼育をしやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人から飼育の仕方等を教えてもらえたら
2. 知人、家族と一緒に飼育できたら
3. 通いやすい場所に相談に乗ってもらえる養鯉場等があったら
4. 飼育の仕方や設備の整え方等をわかりやすく示している雑誌や専門誌があったら
5. その他（具体的に： ）
6. わからない

錦鯉 12 もし錦鯉を飼育し始めるとしたら、どの程度なら払えますか。選択肢の中からお選びください。（1つ）

1. 1万円未満
2. 1万円以上～5万円未満
3. 5万円以上～10万円未満
4. 10万円以上～50万円未満
5. 50万円以上～100万円未満
6. 100万円以上

錦鯉 13 あなたがこれまでに錦鯉の飼育をしていない事情や理由として、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 興味がなかった
2. 通いやすい場所に、錦鯉の飼育方法等の相談に乗ってくれる場所がなかった
3. 始めるための費用が確保できなかった
4. 錦鯉を飼育するための十分な時間が取れそうになかった
5. 一緒にやってくれる人がいない
6. 錦鯉の飼育方法等の相談をできる人が身近にいなかった
7. 生物の扱いが難しいと思う
8. 錦鯉を飼育できる場所や設備がない
9. 他の趣味や娯楽の方に興味が向いている
10. 自分の趣味と合わない
11. その他（具体的に： ）

錦鯉 14 あなたが錦鯉の飼育や観賞について持っている印象やイメージについて、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 錦鯉の飼育や観賞が楽しめる

2. 日本の伝統文化への理解を深められる
3. 暮らし、生活が豊かになる
4. 飼育の方法等が難しい
5. 錦鯉を飼育するための環境を整えるのが難しい
6. 生物を扱うのは容易ではない
7. 設備等にお金がかかる
8. 飼育し始めると時間を取られる
9. 一般に知られていない
10. その他（具体的に： ）
11. 特に印象はない、わからない

錦鯉 15 あなたが錦鯉の飼育に関心を持っている領域、魅力は何ですか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 飼育をしていくことで、変化する模様
2. 飼育していくための技術
3. 種類によって異なる多様な色彩や模様
4. 錦鯉の飼育・観賞を通じて感じられる四季等
5. 錦鯉の飼育・観賞することで、心を落ち着かせることができる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

●錦鯉の飼育を経験していない方への質問（F Q 6で3に回答）

錦鯉 16 もし、あなたが錦鯉の観賞体験をする機会があった場合、どのような内容であれば参加してみたいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 錦鯉の種類や飼育の仕方、観賞の仕方を教えてくれる
2. 錦鯉の歴史や意義を教えてくれる
3. 錦鯉の飼育で必要となる設備や環境等を詳しく教えてくれる
4. 普段の生活の中で、錦鯉の飼育や観賞をどのように楽しめるのか教えてくれる
5. その他（具体的に： ）
6. 上記の中で当てはまるものはない

錦鯉 17 あなたが錦鯉の観賞体験をする機会があった場合、どのような状況だと参加をしやすいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 家族や知人等、身近な人と一緒に体験できたら
2. 錦鯉の品評会や即売会が身近で行われていれば
3. 手ごろな参加費で参加できたら

4. 公園や庭園、文化施設等で観賞できたら
5. 体験する内容や雰囲気を事前に確認できれば
6. 初心者だけが参加できるような機会があれば
7. その他（具体的に： ）
8. わからない

錦鯉 18 あなたがこれまでに錦鯉の観賞体験等をしたことがない事情や理由があれば、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. そもそも知らなかった
2. 興味がない
3. 気軽に体験できそうな場所や機会がなかった
4. 参加する時間がとれなかった
5. 体験できる場所や機会があることを知らなかった
6. 体験できる詳しい内容が分からなかった
7. 他の趣味や娯楽の方に関心が向いている
8. 自分の趣味と合わない
9. その他（具体的に： ）

錦鯉 19 あなたが錦鯉の飼育や観賞について持っている印象やイメージについて、あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 錦鯉の飼育や観賞が楽しめる
2. 日本の伝統文化への理解を深められる
3. 暮らし、生活が豊かになる
4. 飼育の方法等が難しい
5. 錦鯉を飼育するための環境を整えるのが難しい
6. 生物を扱うのは容易ではない
7. 設備等にお金がかかる
8. 飼育し始めると時間を取られる
9. 一般に知られていない
10. その他（具体的に： ）
11. 特に印象はない、わからない

錦鯉 20 錦鯉の魅力について、どのような説明や情報があるなら、錦鯉の飼育や観賞を実際に体験してみたいと思いますか。あてはまるものをお選びください。（いくつでも）

1. 飼育をしていくことで、変化する模様
2. 飼育していくための技術
3. 種類によって異なる多様な色彩や模様

4. 錦鯉の飼育・観賞を通じて感じられる四季等
5. 錦鯉の飼育・観賞することで、心を落ち着かせることができる
6. 日本の伝統的な文化として国内外に知られている
7. その他（具体的に： ）
8. 上記の中で当てはまるものはない

（４）共通設問

共通１ あなたは下記のスポーツや趣味、娯楽等の活動をされていますか。あてはまるもの全てにチェックをお願いします。（いくつでも）

スポーツ（観戦除く）

1. ジョギング・マラソン	2. ウォーキング	3. 体操（器具を使わないもの）
4. トレーニング	5. エアロビクス、ジャズダンス	6. 卓球
7. バトミントン	8. キャッチボール・野球	9. ソフトボール
10. サイクリング・サイクルスポーツ	11. アイススケート	12. ボウリング
13. サッカー	14. フットサル	15. バレーボール
16. バスケットボール	17. 水泳（プールでの）	18. 柔道・剣道・空手などの武道
19. ゲートボール	20. ゴルフ（コース）	21. ゴルフ（練習場）
22. パークゴルフ・グラウンドゴルフなどの簡易ゴルフ	23. テニス	24. 乗馬
25. スキー	26. スノーボード	27. 釣り
28. スキンダイビング・スキューバダイビング	29. サーフィン・ウィンドサーフィン	30. ヨット・モーターボート
31. カヌー・ラフティング	32. ハンググライダー・パラグライダー	

趣味・創作

33. 文芸の創作（小説、詩、和歌、俳句など）	34. 写真の制作	35. 動画の制作・編集
36. 動画鑑賞（レンタル、配信を含む）	37. コーラス	38. 洋楽器の演奏
39. 邦楽、民謡	40. 絵を描く、彫刻をする	41. 陶芸
42. 趣味工芸（組ひも、ペーパークラフト、革細工など）	43. 模型づくり	44. 日曜大工
45. 園芸、庭いじり	46. 編物、織物、手芸	47. 洋裁、和裁
48. 料理（日常的なものは除く）	49. スポーツ観戦（テレビは除く）	50. 映画（テレビは除く）
51. 観劇（テレビは除く）	52. 演芸鑑賞（テレビは除く）	53. 音楽会、コンサートなど

54. 音楽鑑賞（配信、CD、レコード、テープ、FM など）	55. 美術鑑賞（テレビは除く）	56. 書道
57. お茶	58. お花	59. おどり（日舞など）
60. 洋舞、社交ダンス	61. 学習・調べもの	62. 読書（仕事、勉強などを除く 娯楽としての）
63. ファッション（楽しみとしての）		

娯楽

64. 囲碁	65. 将棋	66. トランプ、オセロ、カルタ、 花札など
67. カラオケ	68. テレビゲーム（家庭での）	69. ゲームセンター、ゲーム コーナー
70. ソーシャルゲームなどの オンラインゲーム	71. 麻雀	72. ビリヤード
73. パチンコ	74. 宝くじ	75. サッカーくじ（toto）
76. 中央競馬	77. 地方競馬	78. 競輪
79. ボートレース（競艇）	80. オートレース	81. 外食（日常的なものは除 く）
82. バーベキュー	83. バー、スナック、パブ、飲 み屋	84. クラブ、キャバレー
85. ディスコ	86. サウナ	87. 温浴施設（健康ランド、ク アハウス、スーパー銭湯等）

観光・行楽

88. 遊園地	89. ドライブ	90. ピクニック・ハイキング・ 野外散歩
91. 登山	92. オートキャンプ	93. フィールドアスレチック
94. 海水浴	95. 動物園、植物園、水族館、 博物館	96. 催し物、博覧会
97. 帰省旅行	98. 国内観光旅行（避暑、避寒、 温泉など）	99. 海外旅行

その他

100. 複合ショッピングセンタ ー、アウトレットモール	101. ウィンドウショッピング	102. クルージング（客船によ る）
103. エステティック、ホーム エステ	104. ペット（遊ぶ、世話をす る）	105. 農園（市民農園など）
106. ボランティア活動	107. SNS、ツイッターなどのデ ジタルコミュニケーション	108. ヨガ、ピラティス
109. 自由記述（具体的 に： ）	110. 特に何もしていない	

※上記の選択肢は『レジャー白書 2021』の調査種目を参照し作成したものである。なお、一部分野については『レジャー白書 2021』で「その他」に分類されていた部門から異なる部門への分類を行っている。

共通2 あなたは、スポーツや趣味、娯楽等の活動に、平均月どの程度の費用を払っていますか。

(1つ)

1. 5,000 円未満	2. 5,000 円以上～10,000 円未満
3. 10,000 円以上～15,000 円未満	4. 15,000 円以上～20,000 円未満
5. 20,000 円以上～25,000 円未満	6. 25,000 円以上～30,000 円未満
7. 30,000 円以上～35,000 円未満	8. 35,000 円以上～40,000 円未満
9. 40,000 円以上～45,000 円未満	10. 45,000 円以上～50,000 円未満
11. 50,000 円以上	

共通3 あなたが、スポーツや趣味、娯楽等の活動をよくする時間帯を教えてください。(いくつでも)

1. 平日午前	2. 平日午後	3. 平日夕方	4. 平日夜間
5. 休日午前	6. 休日午後	7. 休日夕方	8. 休日夜間

共通4 あなたは、スポーツや趣味、娯楽等の活動に、平均月どの程度の時間をかけていますか。

(1つ)

1. 1 時間未満	2. 1 時間以上～2 時間未満	3. 2 時間以上～3 時間未満
4. 3 時間以上～4 時間未満	5. 4 時間以上～5 時間未満	6. 5 時間以上～6 時間未満
7. 6 時間以上～7 時間未満	8. 7 時間以上～8 時間未満	9. 8 時間以上～9 時間未満
10. 9 時間以上～10 時間未満	11. 10 時間以上	

共通5 下記の中で、あなたのお考え、意識に近いものを教えてください。(いくつでも)

1. 自分の考えを主張するより、周りとの和を尊重したい
2. 周りに合わせるより、自分の考えに基づいてものごとを判断したい
3. チャンスと感じたら逃したくない
4. リスクはできるだけ避けたい
5. 家族や友人・知人の役に立ちたい
6. 環境問題・社会課題の解決の役に立ちたい
7. 困っている人・助けが必要な人の役に立ちたい
8. 周りの人から注目されたい
9. 集まりやイベントの参加者同士の一体感が大事だ
10. その時・その場でしか得られない体験をしたい
11. 流行りのものは試してみたい
12. 流行っていないくても、自分が面白いと思ったものは試してみたい
13. 買ったものや、気持ちを発信したい
14. 自分が発信したものに反応が欲しい
15. 上記であてはまるものはない

※上記の選択肢は令和3年度実施の消費者庁「消費者意識基本調査」の調査票問6の選択肢を引用したものである。

共通6 下記の中で、あなたが普段よくご覧になっているメディアを教えてください。(いくつでも)

1. テレビ (民放の地上波・BS)
2. テレビ (NHK の地上波・BS)
3. CATV や衛星放送のチャンネル
4. ラジオ (インターネット経由を除く)
5. 新聞 (電子版含む)
6. 雑誌・タウン誌 (インターネット経由を除く)
7. インターネットのウェブサイト・ニュースサイトなど (アプリ経由を含む)
8. 動画投稿サイト (YouTube、TikTok など)
9. SNS (Twitter、LINE、Instagram、Facebook、note など)
10. 紙の書籍
11. 電子書籍
12. 紙のマンガ／マンガ雑誌
13. 電子版のマンガ
14. 有料動画サイト (Amazon Prime Video、Netflix、Hulu など)
15. 上記のメディアはあまり見ていない

令和３・４年度 文化庁「生活文化調査研究事業」報告書

〈事業主体〉

文化庁 地域文化創生本部事務局

〒605-8505

京都府京都市東山区東大路通松原上る三丁目毘沙門町 43-3

〈調査実施〉

株式会社 文化科学研究所

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 1-43-7 光ビル 4F